

『ニーベルンゲンの歌』研究
—— 中世叙事詩としての構成と内容 ——

石川 榮作

凡例

1. 『ニーベルンゲンの歌』のテキストには写本Bを定本として、 Helmut de Boor (Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage (F.A. Brockhaus) Wiesbaden 1972. を使用する。テキスト引用の際に括弧内に示した数字は、その写本Bに基づいた詩節番号(コンマのあとと行数)を表す。なお、写本Cと区別する必要があるときにのみ、詩節番号の前に「B」の記号を付ける。
2. 改作と見なされる『ニーベルンゲンの歌』写本Cのテキストには、 Ursula Hennig (Hrsg.): Das Nibelungenlied nach der Handschrift C. (Max Niemeyer Verlag) Tübingen 1977. を使用し、詩節番号の前に常に「C」の記号を付ける。
3. 『ニーベルンゲンの歌』写本Bの邦訳については、相良守峯訳: ニーベルンゲンの歌(岩波文庫、全二冊)をだいたいにおいてそのまま使用するが、論述の都合から表現を若干変えるところもある。なお、写本Cの邦訳には服部正己訳: ニーベルンゲンの歌(東洋出版社)を参照する。両写本とも詩節番号の表示は上記1. 2. に準ずる。
4. 『ニーベルンゲンの歌』以外の使用テキストについては、その都度脚註において示す。
5. 固有名詞の表記に関しては、『ニーベルンゲンの歌』について述べる際には中高ドイツ語の発音に従い、『エッダ』や『サガ』の場合には古代北歐語の発音に、また一般的に述べる場合には現代ドイツ語の発音に依るものとする。例えば、中世叙事詩『ニーベルンゲンの歌』におけるジーフリト(Sîfrit)は、『エッダ』や『サガ』ではシグルズ(Sigurd)またはジグルト(Sigurd)と表記し、一般的に述べる際にはジークフリート(Siegfried)と表記する。ただし、一般的によく知られている固有名詞に関しては、『ニーベルンゲンの歌』においても現代風の発音に従って、例えばリーン(Rî n)→ライン(Rhein)、トゥオノウウェ(Tuonouwe)→ドーナウ(Donau)というふうに表記する。

目次

序 章 ニーベルンゲン研究史と問題点	7
--------------------	---

1. 『ニーベルンゲンの歌』再発見
2. ラッハマンの歌謡集積説
3. ホイスラーの発展段階説
4. 最近の研究状況
- 本研究の課題

第Ⅰ部 作品の成立

第一章 北欧におけるニーベルンゲン伝説	23
---------------------	----

- I. 『歌謡エツダ』
- II. 『ヴォルスンガ・サガ』
- III. 『ティードレクス・サガ』
- まとめ

第二章 『ニーベルンゲンの歌』の成立	
—— ホイスラーの発展段階説 ——	69

- I. ブリュンヒルト伝説
 1. 第一段階 —Fränkisches Brünhildenlied—
 2. 第二段階 —Jüngeres Brünhildenlied—
- II. ブルグント伝説
 1. 第一段階 —Fränkisches Burgundenlied—
 2. 第二段階 —Baiwarisches Burgundenlied—
 3. 第三段階 —Österreichisches Burgundenepos—
- III. 『ニーベルンゲンの歌』の成立
 1. ブリュンヒルト伝説第三段階 —前編—
 2. ブルグント伝説第四段階 —後編—
- まとめ

I. キューレンベルクの詩人と『ニーベルンゲンの歌』

1. 「私有財産」としてのニーベルンゲン詩節
2. フランツ・プファイファの論説の根拠
3. フランツ・プファイファの論説の問題点

II. 『ニーベルンゲンの歌』における抒情的特質

III. キューレンベルクの詩人の歌謡における特質
まとめ

第四章 『ニーベルンゲンの歌』写本Cの特質

—— 写本Bとの比較において —— -----118

I. 写本Cにおける宮廷的描写

II. 写本Cにおける人物描写の特質

III. クリエムヒルトの復讐 —— 写本Bと写本C ——
まとめ

第五章 『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』 -----139

I. 『哀歌』の内容

II. 『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』

III. 『ニーベルンゲンの歌』写本Cと『哀歌』の依存関係

IV. 『哀歌』の特徴
まとめ

第II部 悲劇の構図

第六章 『ニーベルンゲンの歌』におけるクリエムヒルト像の特質 -----162

I. 貴婦人(frouwe)クリエムヒルト

1. ジーフリトとの結婚 —— liebendes magedin ——
2. プリュンヒルトとの口論 —— leidende frouwe ——

II. 復讐魔(valandinne) クリエムヒルト

1. エッツェル王との再婚 —— triuwe な未亡人 ——
2. ハゲネとの対立 —— grimme な鬼女 ——

まとめ

第七章 ニーベルンゲン悲劇の構図 —— ハゲネの役割 —— -----187

- I. ジーフリト暗殺におけるハゲネの役割
 - 1. 二つの求婚 —— 進言者としてのハゲネ ——
 - 2. 招待の旅 —— 陰謀家としてのハゲネ ——
- II. ブルゴント族滅亡におけるハゲネの役割
 - 1. エッツェル王の求婚 —— 警告者としてのハゲネ ——
 - 2. 招待の旅 —— 英雄としてのハゲネ ——
- まとめ

第八章 『ニーベルンゲンの歌』における悲劇の二重構造
—— ジーフリトとリュエデゲールの役割 —— -----209

- I. 両国王の求婚 —— グンテル王とエッツェル王 ——
- II. ジーフリトの援助 —— 隠れ蓑の秘策 ——
- III. リュエデゲールの奉仕 —— 誠実な誓約 ——
- IV. 両王妃の招待 —— プリュンヒルトとクリエムヒルト ——
- V. ジーフリトの暗殺 —— triuwe な勇士 ——
- VI. リュエデゲールの最期 —— tugent の父 ——
- まとめ

第九章 『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』における leit の特質 -----239

- I. 『ニーベルンゲンの歌』における leit の特質
 - 1. ミンネ体験 —— lieb と leit ——
 - 2. グンテル王の求婚 —— ere の反対概念としての leit ——
 - 3. 両王妃の口論 —— schande としての leit ——
 - 4. ハゲネの謀略 —— sorge としての leit ——
 - 5. ジーフリトの暗殺 —— jamer としての leit ——
 - 6. 財宝強奪 —— 新たな leit ——
 - 7. エッツェル王の求婚 —— leit と ergetzen ——
 - 8. クリエムヒルトの復讐 —— leit と rechen の絡み合い ——
- II. 『哀歌』における leit の特質
- III. クリエムヒルトの leit と rechen の問題
- まとめ

第十章 『ニーベルンゲンの歌』とハルトマンのアルトゥース・ロマーン

—— 名誉 (ēre) と英雄たち ——

-----275

I. 『ニーベルンゲンの歌』における ēre と英雄たち

1. 英雄ジーフリトの ēre
2. 獐猛なる (grimme) 勇士ハゲネの ēre
3. 宮廷的騎士リュエデゲールの ēre

II. ハルトマン作『エーレク』における ēre の構造

1. エーレクの ēre —— 競技とミンネ ——
2. エーレクの冒険 —— arbeit と triuwe ——
3. 「榮譽」の寵臣エーレク

—— des hoves vreude ——

III. ハルトマン作『イーヴェイン』における ēre の構造

1. イーヴェインの ēre —— 冒険とミンネ ——
2. イーヴェインの六つの冒険 —— triuwe と erbarmen ——
3. イーヴェインとラウディーネの和解

—— 誓い (eit) のモチーフ ——

まとめ

終 章 中世叙事詩としての『ニーベルンゲンの歌』

—— 作品の構成と詩人のイデー ——

-----316

1. 生成と詩人
2. 二つの要素
3. 『ニーベルンゲンの歌』の構造
4. 詩人のイデー

結び

図式	-----339
資料	-----345
文献一覧表	-----353

序章 ニーベルンゲン研究史と問題点

十二世紀末期から十三世紀初期に至る約五十年間(1180-1230)¹⁾は、ドイツ文学史上最初の興隆期とも言われ、抒情詩(ミンネザング)と叙事詩の領域で見事な花を咲せた時期であった。抒情詩の分野ではヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ(Walter von der Vogelweide, 1170-1230)が、また叙事詩の分野では何よりもまずハルトマン・フォン・アウエ(Hartmann von Aue, 1160-1215)、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ(Wolfram von Eschenbach, 1170-1220)そしてゴットフリート・フォン・シュトラースブルク(Gottfried von Straßburg, 1170-1215)の三大詩人²⁾をはじめとして数多くの詩人が輩出して、ここに華麗で雅やかな宮廷的騎士文化が築き上げられたのであるが、本研究が取り扱う叙事詩『ニーベルンゲンの歌』(Das Nibelungenlied, 1200)が成立したのもこの時期である。ところが、『ニーベルンゲンの歌』は当時の他の叙事詩とは異なって、独自の立場にあると言わなければならない。すなわち、他の宮廷叙事詩のほとんどは、特にフランスの既存の作品を手本として、いわば「翻案」されたものであり、一般にそれらは「宮廷叙事詩」(das höfische Epos)、あるいはもっと厳密に「宮廷的口ローマン」(der höfische Roman)と呼ばれている。それは、それらの作品において当時の宮廷的騎士道の世界観が形成されている³⁾ことに由来するものである。これに対して『ニーベルンゲンの歌』は、いくつかの古代ゲルマンの伝説を素材として成立したものであり、「宮廷叙事詩」に対して特に「英雄叙事詩」(Heldenepos)と呼ばれていることは周知の通りである。しかし、厳密な意味においてこの区別は必ずしも正確ではない。このいわゆる英雄叙事詩もまた宮廷的特徴を有しているからである。『ニーベルンゲンの歌』において描写される社会は「宮廷叙事詩」の場合と同じ宮廷的騎士社会であり、詩人は騎士的な描写を加える

1)この時代区分はフリードリヒ・マウラーに拠る。Vgl. Friedrich Maurer: Die Welt des höfischen Epos. Der Deutschunterricht 6, 1954. S.5.

2)まずハルトマンには『エーレク』(Erec, 1180-85)、『グレゴリーウス』(Gregorius, 1190)、『哀れなハインリヒ』(Der arme Heinrich, 1195)そして『イーヴェイン』(Iwein, 1200)の四つの代表作のほか、『愁歌』(Die Klage, 1180)及びいくつかの抒情詩がある。次のヴォルフラムには1200年頃に着手されて1210年頃完成した代表作『パルチファル』(Parzival)のほか、未完の『ヴィレハルム』(Willehalm, 1210-17)、断片『ティトゥレル』(Titurel, 1217-20)及び八編の抒情詩がある。最後のゴットフリートには未完ながら大作の『トリスタンとイゾルデ』(Tristan und Isolde, 1205-15)がある。なお、年代は全て推定である。

3)Vgl. Friedrich Maurer: a.a.O., S.5.

ことによって、古い物語を騎士叙事詩として新たに創り上げたのである。素材からすれば確かに古代ゲルマンの「英雄文学」の枠内にあるが、しかし、その成立年代と詩人の内的態度からすれば、ホーエンシュタウフェン朝時代(1138-1254)の「宮廷文学」に属するのである。まさにここから『ニーベルングの歌』特有のさまざまな問題が生じ、研究方法もまた多種多様となってくるのである。そこで、この序章ではまずニーベルング研究史を素描する⁴⁾ことによって、『ニーベルングの歌』研究の問題点を整理し、本研究の方向づけを明らかにしておきたい。

1. 『ニーベルングの歌』再発見

中世において『ニーベルングの歌』が多く読まれていたであろうことは、その写本が三十数種類も書き残されていることから容易に推定される。それらの写本のうち、最古のクラゲンフルト断片Z (Klagenfurter Bruchstück) は十三世紀初めに書写された⁵⁾ものであり、最も新しい写本d——いわゆる「アンブラス英雄本」(das Ambraser Heldenbuch)⁶⁾——は十六世紀初めに書き写されたものだと言われている。当時のもう一つの英雄叙事詩『クードルーン』(Kudrun, 1230-40)がこの十六世紀のアンブラス本でしか伝承されていないことを考えれば、多くの写本で伝承されている『ニーベルングの歌』が当時いかに広く普及していたかは容易に理解できよう。ところが、『ニーベルングの歌』は、十七世紀及び十八世紀前半には全く忘れ去られていた。1618年に勃発した三十年戦争はドイツ文化に全面的な荒廃をもたらし、民族にとって貴重な古文献や諸種の伝説は長い間埋もれたままになっていたのである。『ニーベルングの歌』が再発見されるに至ったのは、十八世紀後半になってからのことで、それに貢献したのが、チューリヒのヨハン・ヤーコブ・ボードマー (Johann Jacob Bodmer, 1698-1783) である。彼はその友ヨハン・ヤーコブ・ブライティンガー (Johann Jacob Breitinger, 1701-76) とともに、啓蒙主

4)以下、ニーベルング研究史をまとめるにあたっては、主に次のものを参照する。

Gottfried Weber : Nibelungenlied (Heldendichtung II). Stuttgart 1961.

Werner Hoffmann : Das Nibelungenlied. 5. überarbeitete und erweiterte Auflage des Bandes Nibelungenlied von Gottfried Weber und Werner Hoffmann. Stuttgart 1982.

5)Vgl. Helmut de Boor (Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage Wiesbaden 1972.
Einleitung S. XLVI.

6)この「アンブラス英雄本」は皇帝マクシミリアン一世 (Maximilian I.) の委託により、その書記で税官吏であったボーツェン (Bozen) のハンス・リート (Hans Ried) が1504年から1515年の間に書写したものであり、この中には『ニーベルングの歌』と『クードルーン』のほかに中世の数多くの作品が収録されている。(Vgl. Friedrich Panzer: Das Nibelungenlied. Entstehung und Gestalt. Stuttgart 1955. S. 67.)

義者ヨハン・クリストフ・ゴットシェート (Johann Christoph Gottsched, 1700-66) に対して激しい論戦を展開した人物として有名であるが、1748年にコーデックス・マネッセ (Codex Manesse) ⁷⁾ に基づいて『十三世紀の古シュヴァーベン文学選』 (Proben der alten schwäbischen Poesie des dreyzehnten Jahrhunderts) を出版した。リンダウ (Lindau) の若い医師ヤーコプ・ヘルマン・オーベライト (Jacob Hermann Obereit, 1725-98) は、このボードマーの偉業に感化を受けて、1755年6月29日にフォーアアルルベルク (Vorarlberg) のホーエンエムス伯爵 (Hohenems) の図書館を訪れたところ、そこで『ニーベルンゲンの歌』の一つの写本を発見した⁸⁾。これが後に写本Cと呼ばれるものである。オーベライトから報告を受けたボードマーは、1757年に『ニーベルンゲンの歌』最後の三分の一⁹⁾と『哀歌』を『クリームヒルトの復讐と哀歌——シュヴァーベン時代の二つの英雄詩』 (Chriemhilden Rache, und die Klage : Zwey Heldengedichte aus dem schwäbischen Zeitpuncte) という表題で出版した。しかし、このボードマーによる出版は、古代ギリシアを崇拜する当時においては反響を見いださなかった。この写本Cのほか、1769年にはザンクト・ガレン (Sankt Gallen) で今日写本Bと呼ばれている写本が発見され、さらに1779年にはホーエンエムス伯爵家において今日写本Aと呼ばれる写本が発見された。このうち後者の写本Aの発見はもともと見間違いによるものである。すなわち、ボードマーと同様にチューリヒ出身であったクリストフ・ハインリヒ・ミュラー (Christoph Heinrich Myller, 1740-1807) は、『ニーベルンゲンの歌』の完本の刊行を計画した。そのためには写本の個々の箇所の吟味が必要であった。仲介を引き受けたボードマーには、しかし、間違っ^てホーエンエムス伯爵家から別の写本が送られてきた。ボードマーはそれが自分の出版のとき用いた写本とは別の写本であることには気がついてしたが、ミュラーはその指摘を見落としたのである。こうして1782年に『ニーベルンゲンの歌——十三世紀あるいは十四世紀の騎士の詩』 (Der Nibelungen Liet, ein Rittergedicht aus dem XIII. oder XIV. Jahrhundert) という表題でミュラーによって出版された『ニーベルンゲンの歌』の最初の完本には二つの写本がその根底にあることとなった。すなわち、『ニーベルンゲンの歌』前半は写本Aに基づき、後半と『哀歌』は写本Cに基づくという不完全なものであった。ミュラーはこれをプロイセンのフリードリヒ大王 (Friedrich der

7) 中世ドイツの恋愛歌 (ミンネザング) を集めた古写本であり、ハイデルベルク大歌謡写本 (Große Heidelberger Liederhandschrift) とも呼ばれる。現在はハイデルベルク大学図書館所蔵であるが、当時はパリの王立図書館にあった。(坂井建雄: コーデックス・マネッセ 岩波書店「図書」1990年2月号参照)

8) Vgl. Johannes Crueger : Der Entdecker der Nibelungen. Frankfurt am Main 1883. S. 44.

9) ブルゴント族がベッヒェラーレンに到着した場面から始まっている。(Vgl. Werner Hoffmann : a. a. O., S. 2.)

Große, 存位1740-86)に献呈したが、大王は、その刊行者にあてた1784年2月22日付の手紙の中で、この中世の作品を軽蔑して、「悲惨なそまつな物」(ellendes Zeug)と呼んだことはあまりにも有名である¹⁰⁾。

このように当時のドイツはまだ外国文化への追従時代であり、自国固有の民族精神や伝統を尊重し、その価値を認識すべき基礎ができていなかったのであるが、民族の伝統に眼をひらき、自然の声に耳を傾けることを教えたのは、ヨハン・ゴットフリート・フォン・ヘルダー(Johann Gottfried von Herder, 1744-1803)である¹¹⁾。このヘルダーの影響で、ロマン主義の人々が祖国の古い中世文学に傾倒し始めたのである。ロマン主義者が中世をいかに愛し、解明したかは、ノヴァーリス(Novalis)のペンネームで知られるフリードリヒ・フォン・ハルデンベルク(Friedrich von Hardenberg, 1772-1801)の論文『キリスト教世界あるいはヨーロッパ』(Die Christenheit oder Europa, 1799)¹²⁾などからも十分に知られよう。またヨハン・ルートヴィヒ・ティーク(Johann Ludwig Tieck, 1773-1853)は、彼の友ヴィルヘルム・ハインリヒ・ヴァッケンローダー(Wilhelm Heinrich Wackenroder, 1773-98)とともに中世の本来の再発見者であると言われるが、1803年には『シュヴァーベン時代のミンネ歌謡』(Minnelieder aus dem schwäbischen Zeitalter)を出版し、この中の序論で『ニーベルンゲンの歌』にも触れている¹³⁾。グリム兄弟はこの序論に特に大きな影響を受け、中世文学研究に没頭するのである¹⁴⁾。

このように『ニーベルンゲンの歌』が広く受け容れられるようになった第一の動機が、ロマン主義運動であるならば、第二の動機として政治的事実も挙げられよう¹⁵⁾。フランス軍の侵入によって帝国とプロイセンが崩壊した政治的衰退の時代に、ドイツ民族思想、ドイツ愛国心が生まれ、これが古ドイツ文学に従事するのを助長したのである。上で挙げたノヴァーリスの論文の中で特に明らかとなっているような西洋共同体というイデーに並んで出てくるのが、ドイツ祖国のイデーである。この関係において古ドイツ文学、殊に

10) Vgl. Gottfried Weber: a. a. O., S. 2. (= Werner Hoffmann: a. a. O., S. 3-4.) ただ「ドイツのタキトゥス」と呼ばれたヨハネス・フォン・ミュラー(Johannes von Müller)だけは、1783年の『ゲッティンゲン学報』においてこの叙事詩の価値を認め、これは「ドイツのイリアス」となるであろうという希望的予言を行なったが、当時としてはあまり歓迎されなかった。(相良守峯: ドイツ中世叙事詩研究 86-7頁参照)

11) 相良守峯: 同上書 86-7頁参照

12) ノヴァーリス(生野幸吉訳): キリスト教世界またはヨーロッパ(筑摩世界文学大系 26「ドイツ・ロマン派集」筑摩書房1974年所収)

13) Vgl. Gottfried Weber: a. a. O., S. 2-3. (= Werner Hoffmann: a. a. O., S. 4-5.)

14) 谷口幸男: ゲルマン文献学の生成——若きグリム兄弟の足跡——「現代に生きるグリム」所収 岩波書店1985年 11-4頁参照

15) Vgl. Gottfried Weber: a. a. O., S. 3. (= Werner Hoffmann: a. a. O., S. 5.)

『ニーベルンゲンの歌』は、ドイツ民族的叙事詩として以前よりもっと広い関心を見いだした。当時熱心に『ニーベルンゲンの歌』に携わった人々の中には、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)も属していた¹⁶⁾。わずか数十年のうちにこの作品の評価について生じた変遷を如実に物語っているのは、ヨハン・アウグスト・ツォイネ(Johann August Zeune, 1778-1853)がドイツ自由戦争の時代に、——すなわち1815年、連合軍がエルバ島から立ち帰ったナポレオンを迎え討とうとしている矢先に——『ニーベルンゲンの歌』の戦陣版(Feld- und Zeltausgabe)を出版した¹⁷⁾ということである。多くの若者たちは『ニーベルンゲンの歌』をナポレオンとの戦いに持ってゆくことを欲したのである。

こうしていくつかの動機から中世文学への関心が高まったが、この時期に最も大きな熱意と最も強力な学問的野望とを持って『ニーベルンゲンの歌』研究に尽力した人物は、フリードリヒ・ハインリヒ・フォン・デア・ハーゲン(Friedrich Heinrich von der Hagen, 1780-1856)である。1802-3年にヴィルヘルム・シュレーゲル(Wilhelm Schlegel, 1767-1845)がベルリンで行なった中世文学の講義を聴いたことのある彼は、『ニーベルンゲンの歌』研究に没頭し、テキストの刊行を何度か企てた。1807年の最初のテキスト刊行は、前述のクリストフ・ハインリヒ・ミュラーの刊行に基づいているが、ミュンヘン本(写本D)をも使用したもので、全く非学問的な編集であり、中高ドイツ語と新高ドイツ語の不愉快な混合のテキストであった。若きヴィルヘルム・グリム(Wilhelm Grimm, 1786-1859)はこれを批判して、「オリジナルよりも悪い現代化だが、現代的でもない」と言っている¹⁸⁾。1810年の「さまざまな写本の異文付きの原語での」刊行も同様にあまり成功しなかった。本質的によりよくなったのがその後の1816年の第三版であり、これでもって彼は初めてザンクト・ガレン本の完全なテキスト(写本B)を普及させることに成功したのである。しかし、それでもやはり、フォン・デア・ハーゲンはいわば常にその時代の学問的立場の背後にとどまったままであった。彼が初めて完本を出版した同年の1816年には、もう一人の学者によって『ニーベルンゲンの歌』研究の新たな時代が開かれたのである。すなわち、同年5月4日ベルリン大学において、『ニーベルンゲン災厄の原型について』(Über die ursprüngliche Gestalt des Gedichts von der Nibelunge Noth)という演題で教授就任講演を行なったカール・ラッハマン(Karl Lachmann, 1793-1851)によってである。この講演内容はただちに活字となったが、この論文こそ厳密に学問的な『ニーベルンゲンの歌』研究の礎石とも言うべきものである。

16) Vgl. ebd. なお、ゲーテは1827年版のカール・ジムロック訳でこの作品を読んだとき、示唆に富む重要な感想を述べているが、その言葉は下でも引用されることになる。

17) Vgl. Ebd. 及び相良守峯：前掲書89頁参照

18) Vgl. Werner Hoffmann : a. a. O., S. 6.

2. ラッハマンの歌謡集積説

ラッハマンはもともと古典文献学者であったが、ゲッティンゲンのゲオルク・フリードリヒ・ベネッケ(Georg Friedrich Benecke, 1762-1844)を通じて古ドイツ語文学への道を見だし、ヤーコプ・グリム(Jacob Grimm, 1785-1863)とともに、ドイツ文献学の本来の創設者ともなったのである。当時完本・断片を含めて全部で三十四種類も発見されていた『ニーベルンゲンの歌』の写本にアルファベットを用いて表示したのも、ラッハマンである。彼は十三世紀、十四世紀の古い羊皮紙の写本には大文字を用い、十五世紀、十六世紀の新しい羊皮紙及び紙の写本には小文字を用いており、この表示の仕方は今日でも保持されている。最も重要な写本は次の写本A、Bそして写本Cである¹⁹⁾。

写本A—— ホーエンエムス・ミュンヘン本 (Die Hohenems-Münchener Handschrift)。

基本的には二人の書写家によって十三世紀末頃書き写されたもの。十八世紀後半までフォーアアルベルクのホーエンエムス伯爵家にあったが、その後回り道をしてミュンヘンのバイエルン国立図書館に移る。詩節数2316。

写本B—— ザンクト・ガレン本 (Die St. Galler Handschrift)。三人の書写家によっ

て十三世紀半ばないし後半に書写されたもの。もともとはヴェルデンベルク伯爵(Werdenberg)の所蔵であったが、十六世紀にはスイスの歴史家エギディウス・チューディ(Aegidius Tschudi)の所有するところとなり、1768年にザンクト・ガレンの教会図書館に移される。詩節数2379。

写本C—— ホーエンエムス・ラスベルクあるいはドーナウエッシンゲン本 (Die Hohen-

ems-Laßbergische oder Donaueschinger Handschrift)。十三世紀前半に書写されたもの。写本Aと同じくホーエンエムス伯爵家に由来するが、それからヨゼフ・フォン・ラスベルク男爵(Joseph von Laßberg)の所有を経て、十九世紀半ばにはドーナウエッシンゲンのフルステンベルク公爵(Fürstenberg)の図書館に移る。詩節数2440。

この順番においてラッハマンの写本に関する重要度が表現されている。すなわち、ラッハマンによると、写本Aが最も原典のテキストに近いものであり、次に写本Bそして写本Cだということである。その根拠となったのが彼の歌謡理論であるが、これは上記のベルリン

19) 下記の記述は主に Gottfried Weber : a.a.O. S.34-5. (= Werner Hoffmann: a.a.O., S.69-70.) 及び Friedrich Panzer : a.a.O., S.66-7. に拠る。ちなみに、写本AとBでは最後の言葉が「ニーベルンク族の災厄」(der Nibelunge nôt)で終わっているのに対して、写本Cでは「ニーベルンク族の歌」(der Nibelunge liet)で終わっているので、写本AとBで代表されるグループを nôt (災厄) 本と呼び、写本Cで代表されるグループを liet (歌) 本と呼ぶのが慣わしとなっている。

大学教授就任講演において初めて公けにされた。この中でラッハマンは、ハレ(Halle)のフリードリヒ・アウグスト・ヴォルフ(Friedrich August Wolf, 1759-1824)の『ホメロス歌謡理論』(Prolegomena ad Homerum, 1795)を『ニーベルンゲンの歌』にも応用した。それによると、十三世紀初期のものとして我々に伝承されている『ニーベルンゲンの歌』は、現在でもなおそれと識別し得るところの若干の譚詩的歌謡から成立したものである。言い換えれば、『ニーベルンゲンの歌』はエピソードふうの内容を持ったもともと独立した個々の歌謡——それらはさまざまな作者によって作られた——の集積、編集によって生じたというのである。そしてラッハマンは1826年に、このホーエンエムスの写本Aを正本とし、『ニーベルンゲン災厄と哀歌』(Der Nibelunge Noth und die Klage)と表題をつけて刊行した。さらに1836年には『ニーベルンゲンと哀歌の注釈』(Anmerkungen zu den Nibelungen und zur Klage)をも公けにして、明確に二十の個々の歌謡に分けることができるという趣旨に添って、彼の歌謡理論を精確に示し、これによってニーベルンゲン研究の権威としての彼の地位を固めたのである。

こうしてラッハマンの文献学的に模範的な『ニーベルンゲンの歌』のテキストと研究書の刊行に基づいて、写本Aは当時長い間権威あるものとして通用していた。写本Aは、多くの欠点のある、軽はずみに書かれた写本であり、まさにそれゆえにラッハマンの歌謡理論には最もふさわしかったのであるが、これと全く逆の考え方をとったのが、アドルフ・ホルツマン(Adolf Holtzmann, 1810-70)である。1854年に『ニーベルンゲンの歌の研究』(Untersuchungen über das Nibelungenlied)を著した彼は、すなわち、テキストに矛盾がなく、出来映えがよいほど原テキストに忠実なものと考えて、写本Cを原典に最も近い写本だと主張する。これは同時にラッハマン的歌謡理論の拒絶でもあり、ホルツマンは、ラッハマンに反対して、「一人の」詩人を仮定することによってのみ説明されうる作品の統一性を強調した。同じ見解を述べたのが、同じ年に『ニーベルンゲン問題』(Zur Nibelungenfrage)を発表したフリードリヒ・ツァルンケ(Friedrich Zarncke, 1825-91)であり、二人はただちにドーナウエッシンゲン本に基づいてそれぞれに『ニーベルンゲンの歌』のテキストを刊行した²⁰⁾。このホルツマンとツァルンケの新説に対して、マックス・リーガー(Max Rieger)は1855年に『ニーベルンゲン批判』(Zur Kritik der Nibelunge)を、またカール・ミュレンホフ(Karl Müllenhoff, 1818-84)も同年に『ニーベルンゲン災厄の歴史』(Zur Geschichte der Nibelunge Not)を公けにして、ラッハマン説を擁護した。これに対してホルツマンは『ニーベルンゲン災厄論争』(Kampf um der Nibelunge Not, 1855)によって、ミュレンホッフの反論をさらに反駁して、写本の優位説をめぐる論争も頂点に達したが、ここで注目すべきは、ラッハマン派の一人ローフス・フ

20) Friedrich Zarncke(Hrsg.): Das Nibelungenlied. 1856. (Max Niemeyer) Halle 1920.
Adolf Holtzmann(Hrsg.): Schulausgabe des Nibelungenlieds in der ältesten
Gestalt. 1857. (J.B. Metzler'sche Buchhandlung) Stuttgart 1863.

オン・リーリエンクロン(Rochus von Liliencron)は、1856年に発表した『ニーベルンゲン写本Cについて』(Über die Nibelungenhandschrift C)の中で、写本Cは改作であることを証明したということである。このことはさらにカール・バルチュ(Karl Bartsch, 1832-88)によってその研究書『ニーベルンゲンの歌の研究』(Untersuchungen über das Nibelungenlied, 1865)において確証されたが、しかし、バルチュは写本Aではなく、写本Bを最も原典に近いものと考え、写本Bに基づいて1870年から1880年にわたって三巻から成る刊行²¹⁾を企てた。このような混沌とした原典をめぐる論争において、その後最終的な決定をもたらしたのが、ヴィルヘルム・ブラウネ(Wilhelm Braune, 1850-1926)の研究『ニーベルンゲンの歌の写本事情』(Die Handschriftenverhältnisse des Nibelungenliedes, 1900)であり、この研究によって現在では写本Bが最も原典に近いテキストであることが一般に認められているのである。

3. ホイスラーの発展段階説

こうして十九世紀の後半は長い間、ラッハマンの歌謡理論をめぐる論争とそれに関連して個々の写本の価値についての論争で満たされたが、ラッハマンの歌謡集積説が最終的に克服されたのは、アンドレアス・ホイスラー(Andreas Heusler, 1865-1940)によってである。ホイスラーはまず1905年の『ゲルマン伝承文学における歌謡と叙事詩』(Lied und Epos in germanischer Sagendichtung)の中で歌謡と叙事詩の相違を明らかにした。それによると、歌謡と叙事詩の相違はまず第一に語り方にある。歌謡は物語の内容を満遍なく細叙するものではなく、物語の山となっている点を生き生きと力強く歌うもので、その他の谷となっている部分については、必要な限度において細叙し、暗示するにとどめる。これに対して叙事詩は、落ち着いた、ゆっくりした、細叙する文体であり、叙事詩特有の広がりを持っている。歌謡から叙事詩への道は膨脹であり、文体の拡大であるが、しかし、個々の歌謡の付加ではない。喩えて言えば、歌謡と叙事詩との関係は、歌謡集積説のように、個々の人間と人間全体との関係、あるいは個々の木と木の格子垣との関係であるのではなく、胎児と成長した人間、あるいは幼樹と広く枝分かれした大木との関係のごときものであり、個々の歌謡を配列結合しても叙事詩とは成り得ないのである。このような理論に従ってさらに彼の見解を拡大させていったのが、1921年の『ニーベルンゲン伝説とニーベルンゲンの歌』(Nibelungensage und Nibelungenlied)である。この中でホイスラーは、北欧におけるエッダ伝承とティードレクス・サガ等を手がかりとして、『ニーベルンゲンの歌』の前史を個別的に明らかにし、図式Iとして巻末(340頁)に掲げた『ニーベルンゲンの歌』の系図を打ち立てた。それによると、『ニーベルンゲンの歌』の前史はブリュンヒルト伝説とブルグント伝説から成っている。まずブリュンヒルト伝説は、ラ

21) Karl Bartsch(Hrsg.): Der Nibelunge N o t I, II, III. 1870-80 (Nachdruck, Hildesheim 1966)

イン・フランケンを発祥地として五、六世紀に生じたもので、その後ノルウェー及びアイスランドへと伝承され、そのままの形が九世紀から十二世紀のエッダ歌謡に遺されている。この伝説はそれから十二世紀末に変化を見ることとなり、その変遷は1250年の『ティードレクス・サガ』の散文物語に沈澱しており、さらには1200年のエッダの夢の歌謡、フェロー諸島のブリュンヒルト譚詩及びロシアの求婚者メールヒェンにも影響が残っている。一方、ブルグント伝説も、同様にライン・フランケンを発祥地として五世紀に生じたが、それはその後北欧に伝承されて、九世紀から十一世紀のエッダ歌謡の『アトリの歌』にほとんどそのままの形で遺されている。この伝説は八世紀頃には、バイエルン・オーストリア地方にも伝承されたが、この第二段階の歌謡の決定的に新しいところは、アトリに対する復讐が兄弟たちに対する復讐に変わったことである。この第二段階のバイエルンのブルグント伝説は、さらに1160年になってドーナウ地方で新しい改変を見たが、ここで初めて読み物としての叙事詩が発生することとなった。いわゆる『古きニーベルンゲン災厄』(Die ältere Nibelungenot)がそれであるが、もちろんこの叙事詩は現在遺されてはいない。しかし、これは『ティードレクス・サガ』及びフェロー諸島の譚詩、デンマークの歌謡『クレモルトの復讐』などに影響が残っており、それらから推定されるのである。こうしてブリュンヒルト伝説は二段階を経、またブルグント伝説は三段階を経たのち、両者は1200年頃にニーベルンゲンの詩人によって一つに結び合わせられたのである。従って、ホイスラーによれば、五人の詩人がニーベルンゲン伝説を創り上げ、創造的に発展させたあと、六番目の詩人が二つの伝説を一つに結び合わせたのであるが、その最後の詩人の業績をホイスラーは次の六つにまとめている。

- ①詩人は二つの伝説を「一つの」作品として結びつけた。
- ②そのために大きい方の原型(後編)の詩形を用いて、全体にわたって統一的な詩形を施した。
- ③両部を内部的にもお互い均衡をもたせるようにした。
- ④風俗描写や精神生活の描写においても、全体を宮廷的な趣味に合わせて、洗練されたものとした。
- ⑤さらに言語や詩句においても時代の要求に合うようにした。
- ⑥最後に物語を拡大し、豊富にし、しかも両部を同じ分量にして釣り合いをもたせた。

上記の①から③まで、また④と⑤はともによく似ているので、結局のところ最後の詩人の業績は、1)二つの伝説を結びつけ一つにした、2)内容と形式をより宮廷的なものに洗練させた、3)多くのものを付け加えていった、という三点に簡単化されよう。

こうしてホイスラーによって打ち立てられた『ニーベルンゲンの歌』の系図は、その理解しやすい簡単な図式のゆえに広く普及して数多くの賛同者を見いだしていったが、もちろんホイスラーと異なって『ニーベルンゲンの歌』の前史を打ち立てた研究者がいないわ

けでもなかった。例えば、カール・ヴェスレ (Carl Wesle) は1926年に『ニーベルンゲンの歌』の前編の手本として歌謡ではなく、ジークフリート叙事詩を推定した²²⁾。ジークフリート叙事詩であるのは、作品のかなりの範囲においてジークフリートが前面に出ており、逆にブリュンヒルトは背後に隠れているからである。またカール・ドレーゲ (Karl Droege) とハインリヒ・ヘムペル (Heinrich Hempel) は、二つの伝説が結び合わされた時期について、すでに十二世紀の三十年代には生じていた、しかもラインのニーベルンゲン叙事詩で生じていたと主張している²³⁾。その後ディートリヒ・クラーク (Dietrich Kralik) は研究書『ニーベルンゲンの歌とティードレクス・サガにおけるジークフリート三部作』 (Die Sigfridtrilogie im Nibelungenlied und in der Thidrekssaga, 1941) の中で、『ニーベルンゲンの歌』の前編と後編にはいくつかの歌謡——しかもラッハマンの言うエピソードの種類の歌謡ではなく、それぞれにおいてまとまった物語を内容とする歌謡——が根底にあり、そのパラレルの歌謡の融合から叙事詩が生じたと考えている²⁴⁾。それによると、すなわち、叙事詩前編においては、ジークフリートの死を取り扱った『グリームヒルトの歌』 (Grimhildlied)、同じくジークフリートの死を取り扱った『ブリュンヒルトの歌』 (Brünhildlied)、そしてジークフリートの結婚を取り扱ったコメディーとしての歌謡という三つの歌謡が用いられた。前者二つは五世紀あるいは500年頃の頭韻の原型にまで溯り、コメディーとしての歌謡は十二世紀半ばに脚韻で創られていたという。一方、叙事詩後編においては主に、『グリームヒルトの復讐』 (Grimhildrache) と『ニーベルンゲン災厄』 (Nibelungennot) という二つの歌謡が用いられたが、さらにコメディーとしての歌謡『競技の歌』 (Wettkampflied) も用いられたとクラークは主張するのである。このようにドイツとスカンディナヴィアの文学を手がかりとしてホイスラーの発展段階説に対抗する研究に対して、クルト・ヴァイス (Kurt Wais) は『西ヨーロッパ初期叙事詩とニーベルンゲンの歌の前史』 (Frühe Epik Westeuropas und die Vorgeschichte des Nibelungenliedes, 1953) の中で、『ニーベルンゲンの歌』の前史としてハンガリー、古代スペイン、アングロサクソン、北ゲルマンそしてケルトの五つの伝説が確認されると主張した²⁵⁾。これによってニーベルンゲン文学は「民族的」であるばかりではなく、「ヨーロッパ的」ともなったが、しかし、このヴァイスの主張は軽率なものとしてただちに否定された。このようにホイスラーの研究以後の標語は何らかの方法で「ホイスラーを越える」ということであつたが、実際にホイスラーの系図を揺がす見解は今のところまだ出ていないのである。

22) Vgl. Werner Hoffmann : a.a.O., S. 16.

23) Vgl. ebd.

24) Vgl. Gottfried Weber : a.a.O., S. 12-3. (= Werner Hoffmann : a.a.O., S. 17-8.)

25) Vgl. Werner Hoffmann : a.a.O., S. 18.

4. 最近の研究状況

こうしてホイスラーの研究以後はそれをめぐって数々の修正論が展開されていったが、『ニーベルンゲンの歌』の研究を全く新しい基礎の上に打ち立てたのが、フリードリヒ・パンツァー (Friedrich Panzer, 1870-1956) である。1945年に発表された彼の研究書『ニーベルンゲンの歌研究』 (Studien zum Nibelungenliede) が明らかにしていることは、『ニーベルンゲンの歌』は特にフランスの文学作品に強く結びついており、例えば、ジークフリートの死と埋葬についての描写はプロヴァンスの叙事詩を手本にしたものだという²⁶⁾。このフランスの素材を指摘した点がパンツァーの第一の重要な成果であるとするれば、第二の成果は、『ニーベルンゲンの歌』においては同時代の歴史が、これまで信じられてきたよりも、かなり多く反映されているというテーゼである。例えば、ベッヒェラーレンでの牧歌 (第二十七歌章) は、フリードリヒ一世がその十字軍の旅の途中ハンガリーのベーラ王 (Bela) とその妃マルガレータ (Margaretha) のもとで体験した出迎えの場面の優美な叙事詩化以外の何ものでもないという²⁷⁾。さらにパンツァーの第三の成果は、『ティードレクス・サガ』の作者は『ニーベルンゲンの歌』を知っていて自らの作品のために利用したという見解である²⁸⁾。従って、ニーベルンゲン叙事詩の前史、特に『古きニーベルンゲン災厄』 (Die ältere Nibelungenot) の再構成のために主な資料として『ティードレクス・サガ』が用いられることは適切ではないとパンツァーは主張するのである²⁹⁾。

パンツァーがこの著書において主張していた見解は、その後1955年に発表された最後の研究書『ニーベルンゲンの歌——成立と形態』 (Das Nibelungenlied. Entstehung und Gestalt.) においてさらに受け継がれていったが、このパンツァーの見解はもちろん反論を見ずにはいなかった。確かに彼の第一の業績であるフランスとドイツの英雄叙事詩との間に見られるモチーフ上の一致は、疑われえない事実ではあるが、しかし、唯一可能な説明であるとは限らない。例えば、ヘルマン・シュナイダー (Hermann Schneider) は、「ある中世文学作品が疑いもなく他の作品に影響を及ぼしたからといって、それは直接的な文学的依存関係の証明とはならない。接触は他の方法で生じたこともありうる³⁰⁾」と述べている。パンツァーの第三の業績である『ニーベルンゲンの歌』と『ティードレクス・サガ』との関係についても、確かに『ティードレクス・サガ』の作者が十三世紀半ばにおいて一躍有名になった『ニーベルンゲンの歌』の存在を知らなかったということは、実

26) Vgl. Gottfried Weber : a.a.O., S.14. (= Werner Hoffmann : a.a.O., S.19.)

27) Vgl. Gottfried Weber : a.a.O., S.14. (= Werner Hoffmann : a.a.O., S.20.)

28) Vgl. ebd.

29) Vgl. ebd.

30) Hermann Schneider : Forschungsbericht. Die Quellen des Nibelungenliedes. Zu Friedrich Panzers Studien zum Nibelungenlied 1945. Euphorion 45, 1950. S.495.

際ありえないことであるが、しかし、『ティードレクス・サガ』の方が『ニーベルンゲンの歌』よりニーベルンゲン伝説の古い特徴を残していることは事実である。従って、ゲルハルト・ローゼ(Gerhart Lohse)が、1959年の論文において、『ティードレクス・サガ』の主な手本は恐らく『古きニーベルンゲン災厄』であったろう³¹⁾という結論に逆戻りしていることもまた頷けるのである。

パンツァーの業績は、こうして受け容れがたいところもあり、問題点も多いのではあるが、しかし、のちのニーベルンゲン研究に大きな影響を与えたことは疑われない。最近になって『その時代におけるニーベルンゲンの歌』という表題の研究書³²⁾が見いだされるのも、パンツァーの研究に支えられていることは明らかである。その意味においてパンツァーの研究は、二十世紀のニーベルンゲン研究において、ホイスラーの研究とともに、もう一つの大きな画期的な業績であると言っても過言ではあるまい。

こうしてパンツァーの功績によって『ニーベルンゲンの歌』研究に新しい課題、すなわち、『ニーベルンゲンの歌』とその成立時代との関係について論ずるという課題が与えられ、それによって研究もホイスラー的研究から解放されて多種多様となっていったのである。こうして多様化された最近の研究を一言でまとめるのは困難なことであるが、ただ一つだけ明確に言えることは、それらは作品の全体解釈をめざしているということである。すなわち、『ニーベルンゲンの歌』を一連の素材形式の一部として見ることはふさわしくない、むしろ本質的に中世の文学作品として分析され解釈されねばならないという主張が強まっているのである。もっともそのような全体解釈は、別段最近になってからのことではない。すでに1921年にはヨーゼフ・ケルナー(Josef Körner, 1888-1950)³³⁾によって試みられているし、さらに1927年にはハンス・ナウマン(Hans Naumann)³⁴⁾とフリードリヒ・ノイマン(Friedrich Neumann)³⁵⁾の二人が研究方法に関する考察において『ニーベルンゲンの歌』を中世盛期の芸術作品として解釈することの正当性と必要性とを根拠づけている。ノイマンは、すなわち、こう要求する。「『ニーベルンゲンの歌』は他の中世文学作品と同じように中高ドイツ語時代から理解されねばならない。……『ニー

31) Gerhart Lohse : Die Beziehungen zwischen Thidrekssaga und den Handschriften des Nibelungenliedes. Beiträge 81, 1959. S. 295-347.

32) 例えば、次の二つの研究書が挙げられる。

Friedrich Neumann : Das Nibelungenlied in seiner Zeit. Göttingen 1967.

Walter Falk : Das Nibelungenlied in seiner Epoche. Heidelberg 1974.

33) Josef Körner : Das Nibelungenlied. Leipzig - Berlin 1921.

34) Hans Naumann : Stand der Nibelungenforschung. Zeitschrift für Deutschkunde 41, 1927.

35) Friedrich Neumann: Das Nibelungenlied in der gegenwärtigen Forschung. DtVjs. 5, 1927.

ベルンゲンの歌』は、十三世紀初期の人々——彼らはそれをその前史の形としてではなく、中高ドイツ語の文学作品として見た——によって読まれたと同じように、読まれなければならない³⁶⁾。」このノイマンの言葉の中には新しい研究方法の目的が明確に述べられているが、しかし、そのような要求は、当時としてはホイスラーの研究の背後に隠されたままだったのであり、一般的賛同をもって人々に迎えられたのは、第二次世界大戦後において、上記のバンツァーの研究以後のことなのである。

そのような新しい研究の中でまず注目されねばならないのが、ヴァルター・ヨハネス・シュレーダー (Walter Johannes Schröder) の1954年の研究論文『ニーベルンゲンの歌——解釈の試み』 (Das Nibelungenlied. Versuch einer Deutung.) であろう。この論文の方向づけはすでに副題から明らかである。シュレーダーが強調していることは、要するに、もはや歴史的・発生的方法に従ってではなく、逆に作品そのものから成立を振り返りながらその作品の意味を追究することである³⁷⁾。すなわち、テキストにおける矛盾を素材伝説から解明することは問題の解決ではなく、単なる問題の回避に過ぎない。むしろテキストが間違いなく述べていること、つまりは文学作品そのものから出発すべきであり、作品の構造を分析することによってその文学作品の意味を探り出すことを主張しているのである。さらにこのシュレーダーの研究は、アルトゥース・ロマーンと比較することによって同時代における『ニーベルンゲンの歌』の価値を追究しており、作品解釈をめざして包括的な研究への第一歩を踏み出したところに大きな意義があると言えよう。

このような『ニーベルンゲンの歌』の包括的な全体解釈として次に是非とも挙げなければならないのは、1963年のゴットフリート・ヴェーバー (Gottfried Weber) の研究書『ニーベルンゲンの歌——問題とイデー』 (Das Nibelungenlied. Problem und Idee.) であろう。この序論において著者は素材史的方法に関してこう述べている。「確かに素材史的方法では多くのことがなされ、価値ある成果をあげてはいるが、しかし、それは伝説の歴史にとってであって、十三世紀初頭の文学作品『ニーベルンゲンの歌』の本質を認識すること、つまり、その作者の芸術的意図と精神的立場を解明することにとっては成果をあげているとは言えない³⁸⁾。」要するに、ヴェーバーにとって問題なのは、ニーベルンゲンの詩人が二つの伝説を結びつけたとき、いかなる意図 (イデー) が詩人を導いたか、ということである。ヴェーバーは、すなわち、中高ドイツ語のニーベルンゲン叙事詩における宮廷的・騎士的なものの意味を強調し、宮廷的・騎士的なものは外的装衣と時代的色彩以上のものであり、それは内在的な叙述意図と強く結びついているとして、個々の分析を全体解釈へと結び合わせており、その研究は『ニーベルンゲンの歌』の精神史的立場の問

36) Ebd., S. 163.

37) Vgl. Walter Johannes Schröder : Das Nibelungenlied. Versuch einer Deutung. Beiträge 76, 1954. S. 60.

38) Gottfried Weber : Das Nibelungenlied. Problem und Idee. Stuttgart 1963. S. 1.

題に答えることでもって頂点に達している³⁹⁾。

ヴェーバーと同じような見解から出発しているのが1969年のカール・ハインツ・イーレンブルク (Karl Heinz Ihlenburg) の研究書『ニーベルンゲンの歌——問題と内容』(Das nibelungenlied. Problem und Gehalt.)である。イーレンブルクも宮廷的世界の幻滅を強調して、ニーベルンゲン悲劇を作品成立当時の時代から考察しているが、しかし、その研究はさらにラディカルに論を進めて、『ニーベルンゲンの歌』で起こる悲劇をその時代の社会的・政治的事情に結びつけてさえいる⁴⁰⁾。

このようなニーベルンゲン詩人の文学的意図を主張する新しい研究方法に対して、もちろん反対意見もないわけではない。例えば、マックス・ヴェールリ (Max Wehrli) やハンス・フロム (Hans Fromm) の意見に代表されるように、そもそも『ニーベルンゲンの歌』を貫通する「イデー」なるものは存在するのか、そもそも世界観的な叙述意図をニーベルンゲンの詩人に求めるのは過大な要求ではないのかという疑問の声もあるのである⁴¹⁾。このような意見は、テキスト分析によって作品を解釈しようとする研究方法に対する警告として見なすことができよう。確かにまず作品成立当時の時代から出発し、作者の意図と同時代の聴衆及び読者の受容動機を問題にしてみることは文学研究の重要な課題ではあるが、しかし、殊に『ニーベルンゲンの歌』のような複雑な成立事情を含んでいる作品の研究はその成立当時の時代に限定されるままであってはならないこともまた明らかである。

『ニーベルンゲンの歌』の包括的全体解釈は、だから、今のところ多くの問題点を残していることもまた事実であり、ともかくも多角的な研究が必要であると言えよう。それほどに『ニーベルンゲンの歌』は奥行きの深い古典的作品なのである。

本研究の課題

以上のように見てくると、最近における『ニーベルンゲンの歌』の研究は、特にパンツァーの画期的な研究の影響下で、この叙事詩をニーベルンゲン伝説の一部としてではなく、ドイツ中世の文学作品として分析し解釈する傾向にあると言えよう。なかでもヴェーバーは、上でも引用した言葉に続けて、「素材に目を向けることは文学作品の純粋な認識を濁らせてしまう⁴²⁾」と述べている。要するに、ヴェーバーの研究立場は、この作品における素材は二次的なものであって、それよりも大切なのはいくつかの伝説を一つにまとめた十三世紀初頭の詩人のイデーだということのである。我々の研究も、このヴェーバーの見解に

39) Vgl. ebd. S. 171-194.

40) Vgl. Karl Heinz Ihlenburg : Das Nibelungenlied. Problem und Idee. Berlin 1969. S. 36. und S. 166-7.

41) Vgl. Werner Hoffmann : a. a. O., S. 28-9.

42) Gottfried Weber : Das Nibelungenlied. Problem und Idee. S. 2.

従い、『ニーベルングの歌』を中世叙事詩として取り扱い、その詩人の文学的意図の解明をめざすものである。しかし、『ニーベルングの歌』は、上で見てきたように、複雑な成立事情を含んでいる作品であり、詩人の意図を解明するためには、従来のホイスラーによる素材史的研究の成果を前提としなければならないことは言うまでもない。素材史的研究をできるだけ詳しく再検討し、『ニーベルングの歌』の生成過程を明らかにした上で、次には十三世紀初頭に成立した『ニーベルングの歌』のテキストそのものを分析することによって初めてニーベルングの詩人の文学的意図なるものが理解できるのではあるまいか。本研究の課題は、一言で言えば、素材と叙事詩人との内的関係である。何の目的で詩人は古代ゲルマンの素材に改作を施し、自らの作品を創り上げたのか、いわば詩人の文学的意図（イデー）を理解することである。そしてその作品は、中世盛期の宮廷文学の中にあって、いかなる特質を有する作品であるのか、その特異性を追究することである。すなわち、当時のほかの宮廷文学は作者の名前が挙げられているのに、なぜ『ニーベルングの歌』の作者は不明なのか。このような問題に答えるためには、我々はここで『ニーベルングの歌』をアルトゥース・ロマンと比較考察してみる必要も出てくるのである。とにかく複雑な成立事情を含み、しかも中世盛期の宮廷文学に属する『ニーベルングの歌』を研究するためには、今や総合的な視野に立って考察を進めてゆく必要があると言えるのである。

そこで本研究では、全体を大きく第Ⅰ部「作品の成立」（第一章～第五章）と第Ⅱ部「悲劇の構図」（第六章～第十章）の二つに分け、まず第Ⅰ部では北欧に伝承されたニーベルング伝説を概観し、ホイスラーの発展段階説に従って『ニーベルングの歌』の生成過程を明らかにするとともに、作者・写本等の問題を取り扱ったあと、第Ⅱ部では人物描写及び leit（悲しみ、恥辱）という語を手がかりとして作品そのものを分析し、さらには ere（名誉）という語を手がかりとしてハルトマンの二つのアルトゥース・ロマンと比較考察してみたい。そして終章においては、第Ⅰ部と第Ⅱ部でそれぞれ得た観察成果をさらに総合発展させて、素材と叙事詩人との内的関係にまで考察を進め、詩人の芸術的意図とその精神的立場を解明することによって、中世叙事詩としてのこの作品の価値を追究することにしたい。本研究の課題は、このように『ニーベルングの歌』を十三世紀初頭に生じた一つの中世叙事詩として取り扱い、その作品の構造と悲劇の意味内容、すなわち、構成と内容を考察することであるが、素材史的・文献学的研究と全体解釈の研究とを切り離すのではなく、両者を一つに融合して考察を進めてゆくところに大きな特色があると言ってよいであろう。

第 I 部 作品の成立

第一章 北欧におけるニーベルンゲン伝説

ニーベルンゲン伝説は、序章でも若干触れておいたように、五、六世紀の民族移動時代にライン河畔フランケン領土を発祥地として歌謡の形式で生じたものである。その伝説は、その後ドイツにおいてはいくつかの段階を経て、十二世紀半ばには叙事詩の形式でさらに発展していったものと推定されるが、それらの伝説相はもちろん遺されていない。ドイツの伝承として文字の形で現在の我々に伝えられているのは、十三世紀の『ニーベルンゲンの歌』とその後日譚『哀歌』以外¹⁾には、ずっとのちの十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』(Der hürnene Seyfrid)²⁾ただ一つを数えるに過ぎない。我々が取り扱う十三世紀初頭の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』以前にあつては、だから、ニーベルンゲン伝説はドイツにおいては直接的には何も遺されていないと言わなければならない。

ところが、『ニーベルンゲンの歌』成立以前にあつて伝説がいくつかの段階を経て発展したであろうことを推定させる資料が現在の我々に豊富に遺されている。北欧への伝承がそれである。これは、時代によって大きく第一次伝承と第二次伝承の二つに分けることができる³⁾。まず第一次伝承は、ヴァイキング等によって口頭で遅くとも九世紀初めには伝えられたと考えられるが、それらをのちに文字によって書き遺したものが、『歌謡エッダ』(Lieder-Edda)と『散文エッダ』(Prosa-Edda)並びに『ヴォルスunga・サガ』(Völsunga Saga)である。このほかに『ノルナゲスト物語』(Nornagests Thattr)、『ロートブロック物語』(Ragnar Lodbroks Saga)も挙げられる⁴⁾が、これらはいずれも古い伝説相を示しており、ニーベルンゲン伝説の原型を推定させる重要なものである。第二次伝承は、その後ドイツで新たな展開を見た歌謡や説話が、十二世紀頃からヴェストファーレンの町ゾースト(Soest)を経由し、ニーダーザクセンのハンザ商人たちを介してノルウェーに伝えられたものであるが、何よりもまず完全な伝説相を伝えている『ティードレクス・サガ』(Thidreks Saga af Bern)が挙げられよう。このほかにフェロー諸島のニーベルンゲン伝

-
- 1)このほかにも十三世紀の『ビーテロルフとディエトリエフ』(Biterolf und Dietlieb)及び『大薔薇園』(Der große Rosengarten)が挙げられるが、これらはいずれもディートリヒを主人公としたもので、むしろディートリヒ伝説に属するものである。(雪山俊夫：ニーベルンゲンの歌基礎の研究 大岡山書店1934年77頁及び 302頁参照)
 - 2)この作品の生成は十四世紀だと推定されているが、それは遺されていない。とにかく現存する最古のものは十六世紀の韻文であり、これを種本として十七世紀には民衆本『不死身のジークフリート』も生まれている。(雪山俊夫：同上書 80 頁参照)
 - 3)雪山俊夫：同上書 275-301頁参照
 - 4)同上書 276頁参照

説に関する三個の舞踊譚詩⁵⁾、デンマークの譚詩『クレモルトの復讐』(Kremolds Haevn)並びに『ヴェーン島の記録』(Hvenische Chronik) などもある⁶⁾。これらは上記の第一次伝承の『エッダ』や『サガ』と比べて比較的新しい伝説相を伝えており、ともに『ニーベルンゲンの歌』成立の解明にはなくてはならない重要な資料である。『ニーベルンゲンの歌』を研究するにあたって、我々はまずこれらの新旧二つの伝説相を整理しておかねばなるまい。そこで本章では、ニーベルンゲン伝説の中でも特に重要な『歌謡エッダ』、『ヴォルスンガ・サガ』及び『ティードレクス・サガ』を取り上げて、まずは新旧二つのニーベルンゲン伝説相をまとめることにしよう。

I. 『歌謡エッダ』

ニーベルンゲン伝説の最も古い型が忠実にしかも豊富に遺されているのが、北海の孤島アイスランドであるが、では一体なぜ、そのような伝説がこの孤島に遺されているのであろうか。これを理解するためには、まずアイスランドの発見と植民の事情をふりかえってみなければならない。

アイスランドは古く「地の果てテュレ(Thule)」と呼ばれた伝説的な島である⁷⁾が、石器時代の遺跡は一つも発見されていないので長い間無人島であったと考えてよいであろう。その無人島を発見したのはノルウェーのヴァイキングたちで、860年頃のこととされている。アイスランドに遺されているアリ・トルギルスソン(Ari Thorgilsson, 1068-1144)の『アイスランド人の書』⁸⁾及び『植民の書』⁹⁾などによれば、最初に入植を試みたのはノルウェーのフローキという男であったが、自らアイスランド(氷の島)と名づけたこの島に住みつくには至らなかった。その後西ノルウェーから入植を試みたインゴルブという男は、874年頃にレイキャヴィク(現在の首都)に家を建てて、入植に成功した最初の人だと言われている。それ以来わずか六十年ほどの間(874-930)に、およそ四百家族、五万人と推定される多数の人々が西ノルウェー及び南ノルウェーから移住してきたが、これ

5)すなわち、『レギンの歌』(Regin Smidur)、『ブリュンヒルド譚詩』(Brinhildar-Táttur)、『ホグニの譚詩』(Högnar-Táttur)の三つである。Vgl. Helmut de Boor: Die färröischen Lieder des Nibelungenzyklus. Heidelberg 1918. (雪山俊夫: 前掲書 495頁参照)

6)雪山俊夫: 前掲書 293頁参照

7)ギリシアの商人ピュティアスは紀元前325年の夏、大きな無人島(アイスランド)に来て、この島を ultima Thule 「世界の果てのテュレ」と呼んだ。

8)山室静訳: 『アイスランド人の書』(山室静: 「サガとエッダの世界」社会思想社1982年所収)

9)山室静訳: 『植民の書』(抄)(二) 北欧文化通信社「北欧」第9号1975年、第13号1976年

はノルウェーの国内事情に原因が認められる¹⁰⁾。すなわち、当時小国分立の状態にあったノルウェーでは、ハラルド美髪王(在位 860-933)がオスロ地方の小領主から身を起し、統一王権の道を歩んでいたが、872年のハフルスフィヨルドの海戦で大勝利を収めて彼の願いが叶えられると、彼の圧政を快しとしなかった豪族たちはこの孤島に移住するに至った¹¹⁾のである。ついで出たホーコン善王、オーラヴ・トリグヴェソン王らがキリスト教に改宗(999年または1000年)して貴族たちにもそれを強制したところから、いよいよアイスランドは古い信仰と慣習を守ろうとする人々をひきつけ、こうして彼らは自分らの拠って立つ古い神話や伝説を保存記録し、自分らの植民移住後の歴史をも記録し始めた¹²⁾。この植民事情とキリスト教強制によって、ノルウェーに伝わる神話や英雄伝説の多くがアイスランドに伝えられることになったのであり、それが「エッダ」である。

「エッダ」(Edda)という語は、しかし、本来ならスノリ・ストルルソン(Snorri Sturluson 1179-1241)の著書にのみあてられるべきものである。彼はアイスランド随一の歴史家、詩人であり、また有力な政治家でもあったが、1218年頃にアイスランドの若いスカルド詩人(Skalden)のために詩学書を書いた。この著書の写本の一つ——1325年頃筆写されたウプサラ(Upsala)の古写本——に、「この書物はエッダと呼ばれる。スノリ・ストルルソンがこれを編纂した」と記述されているところから、彼の詩学書にエッダという名が冠せられていたことは判明する。しかし、「エッダ」という語の意味については不明である。「エッダ」は「詩学」(Poetik)を意味すると説く人もいれば、それは「曾祖母」(Urgroßmutter)の意味で、老婆が子供等に古い童話を物語って聴かせるように、エッダは後代の人々に古代ゲルマン人の神々や英雄について物語るものであるという意味をほめかしていると説く人もある¹³⁾。またスノリはアイスランドの優れた学者セームンド・シグフスソン(Saemund Sigfusson, 1056-1133)の孫にあたるヨーン・ロフトソン(Jon Loftsson)の養子として、アイスランドの南部にあり学芸の中心地でもあったオッディ(Oddi)で幼時十六年間(1181-97)も養育されていたというので、「エッダ」は「オッディの書」(das Buch von Oddi)を意味し、制作の由緒を示すものであるという説もある¹⁴⁾。これらのうちいずれが正しいかは決定されないが、それはともかく、スノリの手に成った文学入門書が「エッダ」と呼ばれたのである。

ところが、1643年にアイスランドの南西部スカルホルト(Skalholt)の司教ブリニョルフ・スヴェンソン(Bryniolf Sveinsson)が、一農家の納屋の中から古ぼけた羊皮紙の写本を発見した。それはゲルマン神話及び英雄伝説を取り扱った二十九個の歌謡の写本であ

10) 谷口幸男訳：エッダ——古代北欧歌謡集 新潮社1973年 解説 282頁参照

11) 同上書 282頁 及び山室静：サガとエッダの世界 27頁参照

12) 山室静：北欧文学の世界 東海大学出版会1969年 10-11頁参照

13) 雪山俊夫：前掲書277 頁参照

14) 同上書277 頁参照

り、十三世紀の後半(1270年頃)に書写されたものであったが、標題が欠けていたので、それをスノリのエッダの原本だと思い込んだブリニョルフは、ただちに作者はスノリの先祖セームンドだと信じて、『賢者セームンドのエッダ』(Edda Saemund multiscii)と標題をつけた。1662年にデンマーク王に献じられてコペンハーゲンの王立図書館に蔵されている「王の写本」(Codex Regius)がこれである¹⁵⁾。これらの古詩は、のちにセームンドの作ではないことが証明され、作者も集録者も今日不明であるが、便宜上『セームンドのエッダ』として伝えられており、これがいわゆる『歌謡エッダ』あるいは『古エッダ』であって、それ以来スノリのエッダを『散文エッダ』あるいは『新エッダ』と呼ぶようになったのである。

さて、まずそのスノリの『散文エッダ』は全体が三部に分れている。第一部「ギルヴィのまどわし」は神々の住居アスガルドを訪ねたギルヴィ王と神々との対話という形で書いた、いわゆる北欧神話の要約である。第二部は「詩人の語法」と題されて、新古の多くの詩を引用しながら、その詩法やケニングという表現法¹⁶⁾を説明している。第三部「韻律一覧」は彼自身の作った長い詩にコメントをつけたもので、詩作の見本を示したものである。この三部が相俟って、まことに優れた文学入門書になっているのであるが、この中でスノリは、多くの古詩を引用し、なかでも第二部においては、ニーベルンゲン関係の英雄伝説を多く伝えているのである。しかし、『ニーベルンゲンの歌』の生成過程の解明をめざす我々にとってこの『散文エッダ』よりも重要なのはもう一つの『歌謡エッダ』の方であろう。この『歌謡エッダ』はもともと二十九篇の古詩を含んでいたが、その後もこの種の古詩が発見されて、現在では断片を混じえて、三十七篇を数えるに至っている¹⁷⁾。このエッダは、その内容からして、大きく第一部「神話」と第二部「英雄伝説」の二つに分けられるが、前者の中にはルーネ文字の起源や古代の人生観や習慣を説いた教訓詩・箴言詩ともいべきものをも若干含んでいる。英雄伝説を扱った詩は量的には神話詩よりも多く、しかもその中の英雄伝説のほとんどがドイツの『ニーベルンゲンの歌』と同じ英雄ジークフリート(北欧ではシグルズ)を取り扱っている。それらを一つ一つここで簡単にまとめておくのも決して無駄ではあるまい。以下、ニーベルンゲン伝説に関係のあるもの全てに

15) ただし、1971年以降はアイスランドのレイキャヴィク(Reykjavik)に戻され、アイスランド大学保管となっている。(Vgl. Werner Hoffmann: Das Nibelungenlied. Stuttgart 1982. S. 47.)

16) 例えば、「黄金」を「エーギルの火」というふうに言い換える語法。ちなみに、そのように表現されるのは、エーギルが神々を招待した際、広間に運ばせた黄金の延板が輝いて、酒宴の照明となったからである。(谷口幸男: 前掲書 303頁参照)

17) グスタフ・ネッケル(Gustav Neckel)及びハンス・クーン(Hans Kuhn)の編集テキスト(Carl Winter・Universitätsverlag Heidelberg)は、現在この三十七編のほかに『散文エッダ』と『ヴォルスンガ・サガ』からの引用詩をも含んで刊行されている。

ついて簡単にその内容・特徴等をまとめておきたい¹⁸⁾。

1) 『フンディング殺しのヘルギ』I (十一世紀中頃 アイスランド)

エッダ歌謡の第二部とも言ふべき「英雄歌謡」の序文を飾っているのがこの歌謡である。これは第一詩節において「太古の時代に」という神話的文体で始まり、エッダ歌謡の第一部「神話」の序文『巫女の予言』の第一詩節と結びついている。しかし、『巫女の予言』では世界の出来事が予言されることになっているのに対して、ここでは個々の英雄の称賛が主題である。至るところにケニング(例えば、川の光→黄金)が用いられているところから、スカルド詩人による作と考えられるが、ヘルギについて次のような英雄譚が語られている。

シグムンド王(Sigmund)の最初の妃ボルグヒルド(Borghild)は王子ヘルギ(Helgi)を生んだ。王子は手厚い保護を受けて成長した。十五歳を迎えると、戦いに出かけ、強剛フンディング(Hunding)を打ち殺した。フンディングの子らはその後、ヘルギに償いを要求したが、ヘルギは逆にフンディングの子らをことごとく討ち取った。その遠征中にヘルギはヘグニ(Högni)の娘シグルーン(Sigrun)に出会い、彼女が無理やりグランマル(Granmar)の恐ろしい息子ヘズブロッド(Hödbrodd)と婚約させられていることを知る。ヘルギは兵を集め船に乗って、ヘズブロッドの国へ攻め寄せる。フンディング殺しのヘルギは先頭を切って戦い、勝利を収めて、シグルーンの愛の祝福を受ける。この祝福の頂点でもってこの歌謡は終わっている。

2) 『フンディング殺しのヘルギ』II (九世紀中頃または十二世紀末 ノルウェー)

この歌謡は上記の『ヘルギの歌』Iと密接な関係にあるが、それよりも古いものであるとも言われている。ヘルギの出生からシグルーンの愛を獲得するまでの話は『ヘルギの歌』Iと平行しているが、この『ヘルギの歌』IIでは、その後のヘルギの最期と、墓塚でのシグルーンとの抱擁が語られている。

ヴェルスング(Wölsung)の子シグムンド王はブラールンド(Bralund)のボルグヒルドを娶った。二人の間に息子が生まれ、ヘルギと名づけられ、ハガル(Hagal)によって養育された。フンディングという強大な王がいたが、ヘルギの父シグムンド王とはいつも敵対関係にあった。ヘルギはフンディング王を攻めて、これを倒した。フンディング殺しのこの

18) 歌謡の内容・特徴等をまとめるにあたっては、次のものを参照する。なお、括弧内に示す成立時期及び場所は谷口訳本巻末の解説に拠る。

Arthur Håny (übertragen): Die Edda. Götter- und Heldenlieder der Germanen.
Zürich 1987.

谷口幸男訳: エッダ——古代北歐歌謡集 新潮社 1973年

松谷健二訳: エッダ(筑摩世界文学大系10「中世文学集」所収) 筑摩書房 1974年

ヘルギは入江に碇泊しているとき、ヘグニ王の娘シグルーンがヴァルキューレとなって空や海を駆けているのに出会う。二人は言葉を交わすが、シグルーンはヘルギを以前からよく知っていると言う。

一方、スヴァリンスハウグ(Svaringshaug)に住む強大な王でグランマルという王がいた。その長男はヘズブロッド、次男はグズムンド(Gudmund)そして三男はスタルカズ(Star-kad)といったが、その長男ヘズブロッドは諸王の会議に出て、ヘグニの娘シグルーンとの婚約を取り決めた。シグルーンはこれを聞くと、ヴァルキューレたちとともにヘルギを探して空や海上を駆けた。その頃ヘルギはフンディングの息子たちと戦っていた。ヘルギを見つけたシグルーンは、彼の頸に抱きついて口づけをして一部始終を話した。愛情の告白を受けたヘルギは、多くの船隊を集めて、グランマルの息子たちを攻めた。その中にはシグルーンの父ヘグニ、その子のブラギ(Bragi)とダク(Dag)もいたが、ダク以外は全て倒れた。ヘルギはシグルーンを娶ったが、短命の運命にあった。ヘグニの子ダクが父の復讐のためオーディン(Odin)に供犠を捧げると、オーディンはダクに槍を貸し与えたからである。ダクは義兄弟のヘルギを見つけ、その槍で刺し貫くと、ヘルギはその場で倒れた。

ヘルギのために墓塚が作られた。シグルーンはヘルギに会いに墓塚に行き、そこで二人は愛と悲しみの言葉を交わして、墓塚の中のベットに共に臥した。シグルーンは心痛と悲哀のあまり、その後あまり長くは生きなかった。ヘルギとシグルーンは生まれ変わったと言われている。彼はハッディンギャルの勇士ヘルギ(Helgi, der Haddingenfeind)と呼ばれ、彼女はハールヴダン(Halfdan)の娘カーラ(Kara)と呼ばれたが、このカーラもヴァルキューレであったという。

3) シンフィエトリの死について

この部分は散文で書かれており、一つのサガの断片のように見える。ヘルギの異母兄シンフィエトリの死を中心として叙述しているが、最後にはヴェルスングの子孫の中でも最も偉大な人物シグルズの誕生が記述されており、この散文部分は本来のニーベルンゲン伝説の始まりであると言えよう。

ヴェルスングの子シグムンド王には三人の息子があつた。長男がシンフィエトリ(Sin-fjǫtli)で、次男がヘルギ、そして三男がハムンド(Hamund)であつた。シグムンドの妻ボルグヒルドには弟がいたが、この弟とシンフィエトリとが同じ女に求婚した。シンフィエトリはその母の弟を殺して帰国すると、継母から毒を飲まされてその場で死んだ。シグムンドは息子を腕にかかえてフィヨルドへ行くと、一人の男(オーディン)に出会い、その小舟を借りて死体を運んだ。シグムンドはその後エイリミ(Eyrimi)の娘ヒョルディース(Hjǫrdis)を娶った。二人の間に生まれた息子がシグルズ(Sigurd)である。シグムンド王はフンディングの息子たちとの戦いで倒れ、ヒョルディースはハールプレク(Hjalprek)王の子アールヴ(Alf)と再婚した。シグルズはここで少年時代を過ごしたが、一族の中でも最も優れた人物に成長した。

4)『グリーピルの予言』(十二世紀後半 アイスランド)

ニーベルンゲン伝説の主人公シグルズ物語を導入しているのがこの歌謡である。シグムンドとヒョルディースの息子シグルズは、グリーピル(Gripir)——彼はヒョルディースの弟エイリミの息子であり、従ってシグルズの叔父にあたる——の館にやって来て、グリーピルに直面し、自分の未来を予言してもらう。歌謡全体はほとんどこのシグルズとグリーピルの対話から成り立っており、シグルズは次のような予言を聞かされる。

シグルズは、天下に並びない者となって、まずは^{どうも}悍猛なフンディングの息子たちを討ち取って、父とエイリミの復讐を遂げたあと、グニタヘイズ(Gnitaheide)でレギン(Regin)とファーフニル(Fafnir)を殺害して黄金をわがものとする。その後、グューキ王(Gjuki)の客となったあと、鎧をまとったまま山に寝ている麗しい王女に出会い、鋭い剣でその鎧を切り裂き、王女からルーネ文字と医術を教わる。それからヘイミル(Heimir)の屋敷を訪れてそこの客となる。ヘイミルは養父としてブズリ王(Budli)の娘ブリュンヒルド(Brynhild)を育てているが、この娘にシグルズは魅せられてしまう。その後、シグルズはグューキの客となるが、そこの王妃グリームヒルド(Grimhild)はシグルズに妻として自分の娘グズルーン(Gudrun)を差し出すと同時に、自分の息子グンナル(Gunnar)にはブリュンヒルドへの求婚を勧める。シグルズは、その求婚の旅に同行することを約束する。グンナルはシグルズと姿、身振りをすりかえて、ブリュンヒルドと婚約する。二組の婚礼がグューキの広間で同時に行われる。シグルズとグズルーンは幸福な生活を送るが、ブリュンヒルドの方は不幸な結婚をしたと考え、その復讐に策をめぐらす。シグルズが誓いを守らなかったことをブリュンヒルドはグンナルに言いつけ、その挑発にのって、グンナル王はシグルズ暗殺を決意する。兄弟たちがシグルズを殺そうと決めたとき、グズルーンの心は悲歎に暮れる。全てが王妃グリームヒルドのせいで、こうしてシグルズは命を失う運命にあるのである。このような予言を聞いたシグルズは、「運命には勝てない」と言い捨ててグリーピルの館を去ってゆく。このようにここで予言されたシグルズの運命が以下5)から 11)までの個々の歌謡において語られるのである。

5)『レギンの歌』(十世紀中頃 ノルウェー)

シグルズはヒャールプレク王の飼育馬のところへ行って、グラニと呼ばれた馬を自分のために選ぶ¹⁹⁾。そのころ、フレイズマルの子レギンがヒャールプレクのところに来ていた。彼は^{こびと}侏儒であったが、頭がよく、シグルズを養育し、教え、とても可愛がった。レギンはシグルズに次のような出来事を語る。

「オーディンとヘーニル(Hönnir)そしてロキ(Loki)の三神がアンドヴァリ(Andwari)の滝——アンドヴァリはかますに姿を変えてこの滝に住んでいた——にやって来たとき、レギンの兄オトル(Ótr)が川獺に化けてその滝で鮭をつかまえて川岸で食べているところを、

19)『ヴォルスンガ・サガ』ではこの名馬獲得にはオーディンが関与している。

ロキが石を投げて殺してしまい、その皮を剥いだ。その晩、神々はフレイズマルのところに宿を求め、獲物を見せたところ、捕えられて、身代金として川獺の皮を黄金で満たし、その外側も赤い黄金で覆うことを要求された。そこで黄金を手に入れるためにロキはラン(Ran) のところで網を手に入れ、それからアンドヴァリの滝に入って網を投げて、アンドヴァリを捕えて、その黄金を奪い取った。侏儒は岩の間に入って、こう言った。「私(グストGust)が所有していた黄金は二人の兄弟の死となり、八人の王の不和の種になるようにしてやる。」アース神たちは財宝をフレイズマルに渡す。ファーヴニルとレギンはオトルの賠償金を分けてくれと父に要求するが、拒絶され、ファーヴニルは父が寝ているところを剣で突き刺して殺してしまう。レギンは父の遺産の分け前を要求したが、拒否される。」

このようなことをレギンはシグルズに語って、ある日、グラム(Gram)という剣を与えて、ファーヴニルを討つように唆す。しかし、シグルズは「父の仇をとるよりも黄金に眼がくらんだとあっては、エイリミの生命を奪ったフンディングの息子たちに笑われるであろう」と言って、ヒアールブレク王から与えられた水軍をひき連れて、まずは仇討ちに出かける。彼らは大嵐に遭い、岩礁の前を航行しているとき、一人の男が崖の上に立っていて、乗せてくれと言うので、乗せてやる。すると、嵐はおさまった。その男は実はオーディンであり、シグルズは彼から戦闘の心得や吉兆の見分け方を教えてもらった。シグルズはこうしてフンディングの子リュングヴィ(Lyngvi)兄弟と戦い、彼らを打ち倒して父の仇を討ったのである。

この歌謡はいくつかの断片に分けられるが、それらを散文の挿入が一つに結び合わせている。前半は侏儒レギンの語りという体裁を取って、侏儒たちの世界が語られている。アンドヴァリはかます、オトルは川獺そしてファーヴニルは竜に化けて登場しており、この歌謡は幻想的なメルヒェン的要素を含んでいると言えるが、ここで初めて語られるアンドヴァリの「黄金の呪い」のモチーフはのちのニーベルンゲン伝説全体を貫くのである。この歌謡の後半になって、本来のニーベルンゲン伝説の英雄シグルズの物語となるが、ここではまだ悪竜退治については語られずに、ゲルマン英雄伝説の不変のモチーフである「父の仇討ち」が先行している。しかし、それにはオーディンが関与していて、シグルズの勝利は最後に簡潔に散文で記されているだけである。

6)『ファーヴニルの歌』(十世紀 ノルウェーまたはアイスランド)

この歌謡は上記の『レギンの歌』と密接に結びついており、『レギンの歌』で語られずにいたシグルズの悪竜退治が語られている。すなわち、レギンはファーヴニルを殺すようにシグルズをけしかけ、二人はグニタヘイズに出かける。シグルズは道に大きな穴を掘り、その中に身を潜め、ファーヴニルがその上に這い進んだとき、彼の心臓を刺し貫くのである²⁰⁾。

20)『ヴォルスunga・サガ』ではオーディンが関与している。

ここまでは散文で叙述されていて、本来の歌謡はこのファーフニルが心臓を突き刺された場面から始まっている。ファーフニルは、すなわち、「黄金はお前の命取りとなる」と二度まで言い捨て、またレギンがお前を裏切って殺すだろうと教えながら、息絶える。シグルズとファーフニルが戦っている間、身を潜めていたレギンは、戦いの後、倒れているファーフニルに歩み寄って、リジル(Ridil)という剣で心臓を切り取り²¹⁾、シグルズにその心臓を火であぶってくれと頼む。シグルズはファーフニルの心臓を枝に刺してあぶった。心臓から流れる血が泡立って、すっかりあぶりあがったとき、指でつまんで、食べることができるかどうか試した。するとシグルズは指を火傷したので急いで口の中に突っ込んだ。ファーフニルの心臓の血が彼の舌につくと、彼は鳥の言葉がわかるようになった。彼は四十雀^{しじゅうから}たちが藪でさえずっているのを聞き、レギンが最初から裏切る魂胆でいるのを知り、レギンの首を刎ねてしまう。さらに四十雀は、ヒンダルフィアル(Hindarfjall)の山に一人の戦いの乙女が眠っているのを教える。彼女はシグルドリーヴァ(Sigrdrifa)といい、彼女はオーディンの意に反して別の男を倒したので、木の棘で刺されて眠りにつかされているという。シグルズはファーフニルの莫大な黄金を二つの箱に詰めて名馬グラニの背中に積んで出発する。

7)『シグルドリーヴァの歌』(900年頃 ノルウェー)

シグルズはヒンダルフィアルに馬でのぼると、山上では火が燃えているような光炎が天にまで輝き映えていた。そこに進むと楯の垣があり、旗が掲げてあった。シグルズは楯の垣の中に入ってみると、そこに一人の男が完全武装して横になって寝ていた。頭から兜をはずしてみると、それは女であることがわかった。シグルズは名剣グラムで女の鎧を切り裂くと、女は目を覚ます。

この場面まで散文で述べられており、本来の歌謡がそのあとに続くが、女はシグルドリーヴァと名乗り、ヴァルキューレであった。このシグルドリーヴァ、すなわち「勝利を駆け立てる女性」(Sieg-Voran-Treiberin)がブリュンヒルドであることは、のちに挙げる11)の『ブリュンヒルドの冥府への旅』から明らかである。彼女は、兜のグンナル(Helm-Gunnar)とアウザの弟アグナル(Agnar, Audas Bruder)という二人の王が戦う際、オーディンの意に反して、兜のグンナルを倒したので、その仕返しに眠りの茨で刺されて眠りにつかされたのだと語って聞かせる。彼女はシグルズにルーネ文字の知識を与えたあと、さまざまな忠告をも与えるが、第十一の忠告でこの歌謡は中断している。

このようにこの歌謡はルーネ文字の知識や人生訓に満ちた忠告が大半を占めていて、一つの「格言詩」となっていると言ってもよい。第十一の忠告で悲劇的な余韻を漂わせることによってようやく再びシグルズの個人的な運命に結びつけられている。

21)『ヴォルスunga・サガ』ではシグルズがリジルという剣で竜の心臓を切り取ることに
なっている。

8)『シグルズの歌』(断片)(九世紀初期 ノルウェー)

この歌謡は冒頭と末尾が失われていて、前後の事情が不明であるが、それは 10)『シグルズの歌』あるいは『ヴォルスンガ・サガ』からある程度推測される。とにかくこの歌謡はシグルズが殺害される場面から始まっている。諫止するヘグニ(Högni)に対して、グンナルはシグルズが誓いを破ったことを楯にとってシグルズ暗殺を主張し、弟のゴトホルム(Gothorm)を唆す。シグルズの死はそのあとほんの二行だけで「ライン河の南で殺害された」と片づけられていて、どのような手段でゴトホルムによって殺害されたかは語られていない。とにかくシグルズ暗殺の首尾よい結果を聞いたブリュンヒルトは、一度心の底から笑うが、シグルズが二人の間に剣を置くことによって忠実に誓いを守っていたことをあとで打ち明ける。暗殺後のブリュンヒルトの満足と後悔が語られたところで、歌謡は中断している。

9)『グズルーンの歌 I』(十一世紀前半 アイスランド)

この歌謡では夫シグルズを殺害されたグズルーンの悲嘆と訴えが一貫して歌われている。悲しくて身も張り裂けんばかりのグズルーンを、キューキの妹ギャヴラク(Giaflaug)とフン国の王妃ヘルボルグ(Herborg)の二人が慰めようとして、自らの悲しみの体験を語るが、グズルーンはシグルズの死骸を目にして心が硬くはりついてしまうばかりである。キューキの娘グルレンド(Gullrönd)がグズルーンに向かって愛しい夫の口髭に口づけをするようにと勧めるに至っては、グズルーンの悲しみは頂点に達する。グズルーンはありし日のシグルズをほめ称えながら、シグルズを欺いた兄グンナルを責め立てて、こう言う。「あなたたちはこの国を滅ぼしてしまうでしょう。兄上グンナル、黄金はあなたの意のままにはなりません。シグルズを欺いたのですから、黄金の腕輪があなたの命取りになるでしょう。」これを聞いたブズリの娘ブリュンヒルトは、このような言葉をグズルーンに言わせるように仕向けたグルレンドを非難するが、グルレンドは逆に「あなたこそ王侯の禍のもとだ」と言って逆襲する。すると今やブリュンヒルトは「兄アトリこそあらゆる不幸の源だ」と言って、罪を彼女の兄アトリになすりつける。ブリュンヒルトは、シグルズの傷を見ると、眼からは火が燃え、口からは毒を吹いた。

このあと散文で、グズルーンは三年半の間、デンマークのハーコンの娘ソーラのところに滞在し、一方ブリュンヒルトは自ら刃に伏して死んだことを付け加えているが、この歌謡は筋の展開を述べるものではなく、シグルズ暗殺直後のグズルーンとブリュンヒルトの心理に関心を抱いたもので、内面的な歌謡となっていると言えよう。

10)『シグルズの短い歌』(十一世紀末または十三世紀初め アイスランド)

この歌謡は、上記8)の『シグルズの歌』(断片)で欠落していたシグルズのキューキ族訪問の場面から始まっている。しかし、シグルズがその二人の兄弟(グンナルとヘグニ)と誓いでもって友誼を結び、彼らの妹グズルーンを娶ったことは、ほんの二詩節でし

か語られていない。グンナルがやがてブリュンヒルドに求婚し、その際シグルズが手助けをしたことなども、ほんの二詩節で片づけられていて、抜き身の剣を二人の間に横たえていたことが語られているだけである。主なアクセントはむしろグンナルに嫁いだブリュンヒルドの「嫉妬」の方に置かれていると言えよう。すなわち、ブリュンヒルドは、シグルズとグズルーンがともに床につき、シグルズが妻を愛撫するとき、シグルズに嫉妬の念を覚え、悶々の情を抱く。その嫉妬はついには憎しみの念となってシグルズ暗殺の考えを起こさせる。彼女はグンナルに、シグルズを亡きものにしないならば、かつての身内のところへ戻って、眠って生涯を過ごすつもりだと主張する。困り果てたグンナルは最も頼りにしていたヘグニに相談する。グンナルはシグルズを欺いて黄金を奪い取ることを提案して、シグルズ暗殺をほのめかす。ヘグニは、しかし、誓いを破るのはふさわしいことではないと言って、暗殺を諫止する。グンナルはそこで信義の誓いには縛られていない頭の悪い弟のグトホルム(Guthorm)を唆すことにした。軽率な弟を唆すのはわけはなかった。シグルズの胸についに剣が突き立った。シグルズはグトホルムに向かって剣グラムを投げつけると、グトホルムは二つになって倒れた。ベッドのグズルーンはシグルズの血で目を覚まし、絶望して手を打ち鳴らしたが、気丈なシグルズはベッドに身を起して、災いのもとブリュンヒルドであり、自分は義兄に立てた誓いを破ってはいないことを明言して、ついに息を引き取った。グズルーンは絶望して激しく手を打ち鳴らした。ブズリの娘ブリュンヒルドは、その悲鳴を聞くと、一度心から笑った。グンナルから災いの張本人として罵られたブリュンヒルドは、自分が愛したのはシグルズだけであると言って、死出の旅路につくことを決意する。グンナルはあわててヘグニに災いの種をひき止めぬ方がよいとさえる。生きてゆく望みを失ったブリュンヒルドは、グンナルに向かって将来を予言する。すなわち、「グズルーンはブリュンヒルドの兄アトリと結婚するが、シグルズへの悲しい思慕を抱きつづけるであろう。グンナルは妹のオッドルーン(Oddrun)を妻に所望するがアトリがそれを許さない。アトリはグンナルを蛇牢に入れるだろう。けれども、アトリもグズルーンによって生命を落とすであろう。グズルーンは高い波に運ばれてヨーナク(Jonaker)の国に着き、ヨーナクの息子たちを産むだろう。シグルズとの間の娘スヴァンヒルド(Swanhild)をイェルムンレク(Jörmunreck)のもとに送ることになるが、スヴァンヒルドはビッキ(Bikki)の悪企みにあって、身を滅ぼし、グズルーンの悩みは増すばかりとなるであろう。」このようなことを予言したブリュンヒルドは、大きな火葬場をつくって、自分の横にシグルズを並べて焼いてくれるよう頼んだあと、あの世へと旅立ってゆく。このようにグンナルの妻ブリュンヒルドがこの歌謡の中心に置かれていて、彼女の憎しみと愛とが一貫して語られている。

11) 『ブリュンヒルドの冥府への旅』(十一世紀または十二世紀初め アイスランド)

ブリュンヒルドの死後を取り扱っているのがこの歌謡である。ブリュンヒルドは、車の中に横たわったまま焼かれ、この車で冥府への道を走り、女巨人の住む館にやって来たと

いう。歌謡全体はブリュンヒルドと女巨人の対話から成り立っているが、ギューキー族滅亡の罪を押しつけられたブリュンヒルドは、自らの人生を正当化するために、ここで自分の生涯と運命とをかいつまんで語る。すなわち、アウザ (Auda) の若い弟に勝利を与えて、オーディンの激怒を買ったこと、そして赤と白の楯で隙間なく囲まれたスカタルンド (Skatalund) に閉じ込められ、恐れを知らぬ勇士だけが自分の眠りを目覚めさせることができるようにされたこと、その勇士はグラニに乗って炎を乗り越えて来たが、八夜の間、互いに相手の上に手を置くこともしなかったこと、ところが、事実反して自分がシグルズに抱かれて寝たという非難をギューキーの娘グズルーンから受けたとき、自らは、はからずも、婿選びで欺かれたことを知ったということなどを語ったあと、自分とシグルズは決して別れることはないと言う。

上の7)で述べたシグルドリーヴァがブリュンヒルドであることは、この歌謡から明らかである。

12) 『ニヴルング族の殺戮』^{おろく}

これは編者がシグルズの歌謡と彼の死後のグズルーンの運命を語る歌謡とをつなぐために散文で説明を加えた部分である。この散文部分は、しかし、出来事の詳しい事情を叙述してはおらず、主な事実を数え上げるだけに終わっている。

ギューキー族はファーフニルの遺産の黄金を全て手に入れた。アトリはブリュンヒルドの死がギューキー族のせいであると知って、両者の間に不和が生じた。ギューキー族はアトリにグズルーンを嫁がせることで折り合った。グズルーンは忘れ薬でもって言いなりにされたのである。その後、アトリ王はギューキー族を招待することにして使者を送ったが、グズルーンはアトリの奸計を知り、彼らに来てはいけないとルーネ文字で知らせた。それにもかかわらず、結局、ギューキー族はアトリのところにきて、ヘグニは心臓を切り取られ、グナルは蛇牢に入れられ、豎琴をかき鳴らして蛇を眠らせたが、一匹の蛇に肝臓をかまれて死ぬ。

このようなギューキー族の最期が手短かに語られているが、このような短い散文の挿入は、個々の歌謡を一つに結びつけ、読者にできるだけまとまった全体を伝えようとするエッダ歌謡の編者の意図をはっきりと示しているものと言えよう。

13) 『グズルーンの歌』Ⅱ (十世紀中頃または十二世紀末 アイスランドまたはノルウェー)

この歌謡は上述の『ニヴルング族の殺戮』における結末の説明からわかるように、グズルーンがアトリの宮廷で、そこに滞在していたスィオーズレク王 (Thjodrek) に向かって自らの生涯を語る歌であり、全体がグズルーンの独白として語られている。

その独白によれば、シグルズが殺されたのは、シグルズが優れた人物であったから、彼女の兄弟たちは枕を高くして眠ることも、事を決することもできなかったためとされてい

る。グズルーンが夫のことを問いただすと、グンナルは頭を垂れ、ヘグニが痛ましいシグルズの死を語った。グズルーンがシグルズの死骸を捜しに森へ行き、シグルズの遺体のそばに坐った夜は、彼女には一層真っ暗な夜に思われた。グズルーンは三年半の間、デンマークのハーコン(Hakon)の娘ソーラ(Thora)のところにとどまり、金糸で刺繍をしたりして過ごした。やがて、母グリームヒルドが、グズルーンに過去のことを忘れさせるために、冷たくて苦い飲物の杯を持って来た。この場面から突然、グズルーンの回顧の中で、本人とその母グリームヒルドとの対話が展開されている。すなわち、母グリームヒルドはグズルーンにアトリの妻になることを勧め、グズルーンはいいやいやながらアトリのもとに嫁ぐ結果となったことが生き生きと語られている。グズルーンがアトリに嫁ぐところで数節が欠落していて、グズルーンの到着から結婚式までは不明である。それから再びグズルーンの回顧の中で、今度は本人とアトリとの対話が展開されるが、アトリがグズルーンに夢の話をし、それをグズルーンが占いながら対話を交わしているところで、歌謡は中断している。

14) 『グズルーンの歌』Ⅲ (十一世紀前半 アイスランド)

この歌謡は『ヴォルスンガ・サガ』には伝えられていないものである。十一詩節の短い歌謡であるが、それ自身まとまった一つの物語となっている。

アトリがグズルーンに、侍女のヘルキャ(Herkja)が噂していたことを打ち明ける。すなわち、グズルーンとスィオーズレクが一つの褥に寝て、やさしく一緒に布にくるまったというのである。グズルーンはその噂を否定して、身の潔白を晴らすため、中傷者ヘルキャとともに深湯くかたぢをする。すなわち、煮えかえる鍋の底に手を伸ばして輝く石を拾い上げるのである。グズルーンは無事であったが、ヘルキャは手に火傷やけどを負い、悪臭を放つ沼に沈められて殺される。こうしてグズルーンは恨みを晴らしたのである。

15) 『オッドルーンの歎き』 (十一世紀前半 アイスランド)

この歌謡も『ヴォルスンガ・サガ』には完全には伝えられておらずに、ただブリュンヒルトの予言の中で触れられているだけである。オッドルーンは、ブリュンヒルトと同じく、アトリの妹であるとされているが、とにかく彼女はグンナルの恋人である。伝承を自由に取り扱っている歌謡であると言えよう。

アトリの妹オッドルーンは、ヘイズレク王(Heidrek)の娘ボルグニー(Borgny)が重病だということを聞いて出かける。ボルグニーはヴィルムンド(Wilmund)という名の勇士との間に関係を結び身重のまま、五年が過ぎたというのである。オッドルーンはボルグニーのために効目のある呪文を唱えると、男と女の可愛い双生児が生まれた。このボルグニーに向かってオッドルーンは自らの不幸を語る。それによると、オッドルーンは恋人グンナルと密通しているところを、兄アトリの使者に見つけれ、使者はそのことをアトリに告げた。アトリはヘグニの胸から心臓を切り取り、グンナルを蛇牢に入れた。グンナルは豎

琴を弾いていたが、それはオッドルーンに助けを求めようと考えたからである。オッドルーンはグンナルを助けようと思ったが、アトリの哀れな母が蛇に化けてグンナルの心臓に噛みついた。このような歎きをオッドルーンは語ったのである。グンナルが海を越えた恋人に助けを求めて^{センチメンタル}竖琴を弾くという感傷的なモチーフは、ミンネザング風に響き、英雄文学の反抗的精神とは異質のものであるが、オッドルーンが恋人グンナルの死を嘆くこの哀調を帯びた歌謡はエッダの優美な創作の一つとされている。

16) 『アトリの歌』(九世紀 ノルウェー)

この歌謡は、ライン・フランケン^{ライン・フランケン}のニーベルンゲン伝説が北欧へ伝承された形式とほとんど同じ形で遺されている歌謡であると言われている。『ニーベルンゲンの歌』の後編にあたるブルグント伝説の原型を推定させる貴重な遺産である。

アトリはギューク族のグンナルのもとにクネーフレス(Knefröd)という名の使者を立て、自分の国に招待することを伝える。グンナルはヘグニの忠告にもかかわらず、アトリの国へと出かけてゆく。彼らが到着すると、妹グズルーンは兄たちが謀られていることを伝え、すぐに立ち去るよう忠告するが、もはや遅すぎた。彼らはブルグント(Burgund)の一派グンナルを捕え、足かせをかけ、がんじがらめに縛り上げた。彼らは、グンナルに黄金で生命をあがなうつもりはないかと尋ねると、グンナルは「ヘグニの血まみれの心臓を、わしの手に載せてみろ」と答える。彼らはヒャルリ(Hjalli)の心臓を切り取って皿に載せてグンナルの前に持ってくると、グンナルは答える。「これは臆病者ヒャルリの心臓だ。皿の上に置かれてもたいそうふるえている。胸の中にあつたときは、倍もふるえておつたに違いない。」そこで実際ヘグニの心臓がえぐり取られたが、ヘグニは笑って涙ひとつ流さなかった。血まみれの心臓が皿に載せられて、グンナルの前に運ばれてくると、グンナルは言った。「これは剛勇ヘグニの心臓だ。臆病者ヒャルリとは違う。皿の上に置かれても、ほとんどふるえない。胸の中にあつたときも、そうふるえなかったろう。アトリよ、ニヴルンクの宝は、ヘグニが死んだ今、このわし以外の者には秘められておる。フン族の公達の手に輝くよりは、河の底に輝く方がよかろう。」このあとグンナルは蛇の這いまわる牢の中に入れられたが、手で竖琴をかき鳴らして、黄金を守った。

アトリはそこを立ち去って家に戻ると、グズルーンは王に料理を差し出して、こう言う。「あなたは今、蜜をつけてご自分の息子たちエルプ(Erp)とエイティル(Eitil)の血まみれの心臓を召し上がったのです。」その場は騒然となったが、グズルーンは涙をひとつも流さなかった。アトリは正体を失うほど飲み、武器も持たず、グズルーンに対して注意を払わなかった。グズルーンはその残忍な手に剣を取り、ベットに血を吸わせ、犬を放ち、建物に火を放って、兄たちの仇を討ったのである。

17) 『グリーンランドのアトリの詩』(1100年頃 グリーンランド)

この歌謡は、グリーンランドで作られたと言われているが、北極熊の記述のほかには、特別グリーンランドをほめかすようなものは含んでいない。とにかく上記 16)の『アトリの歌』と同じ素材を取り扱ったもので、新しい伝承でもって物語を拡大し、ずっとのちに成立したものである。エッダの英雄歌謡の中で最も長い作品となっている。

アトリは義兄弟であるギューキー族が急ぎ国を訪れるよう、あわただしく使者を送った。王妃グズルーンは賢く、気を配って、陰謀の中身を聞いて、兄弟たちを救おうと思ってルーネ文字を彫ったが、使者ヴィンギ(Wingi)がそれを渡す前に改竄した。使者たちは歓迎された。グンナルは、もしヘグニが同意すれば、と招待を約束した。ヘグニはアトリの招待に異を立てなかった。

ヘグニの妻コストベラ(Kostbera)は賢い女でルーネに通じていたので、グズルーンの警告を推測して、夫にいくつかの悪い夢のことを語って、旅立ちを思いとどまらせようとするが、ヘグニは「妻がどんな夢を見ようと、アトリの心に邪心はない」と言って、意に介しない。グンナルの妻グラウムヴォル(Glaumwörr)も同様に夢を語って、夫を思いとどまらせようとするが、グンナルは「とにかく行くことは決っているのだから、運命を逃れることはできない」と覚悟する。

夜が明けると、彼らは五人の下僕を連れて出発する。美しく着飾った女たちが、フィヨルドに隔てられるところまで見送り、絶えず警告したが、彼らは耳をかさなかった。彼らは力一杯漕いで、ブズリ王の子アトリの館へやって来た。ヘグニが戸をたたいたとき、ヴィンギが脅かしたので、彼らはヴィンギを突きとばして打ち殺した。アトリの一行は集まり、両者は憤怒に燃えながら罵声を投げ合った。グズルーンは兄弟たちを救おうとして、和睦を試みるが、彼女の言をいれる者は誰もなく、全員が反対した。グズルーンは身内の四人を守って戦った。戦いは翌日の午前中まで続いて、フン族が優勢となった。アトリは、ヘグニを捕え、その心臓をえぐり出せ、グンナルを絞首台にかけ、蛇を入れろと指示する。アトリの家令ベイティ(Beiti)はヘグニの代わりに料理人ヒャルリを殺そうとするが、ヘグニはそれをかばってやり、自らが捕えられる。しかし、ヘグニは高笑いし、苦痛によく耐えた。グンナルも竖琴をとり、足指を動かして演奏した。彼らはこうして死んでいったが、最後まで勇士の誉れを捨てなかった。

二人を打ち負かしたことをアトリは誇らしく感じ、妻グズルーンを厳しく非難したが、グズルーンは狡猾だったので、心の中を打ち明けず、うわべは快活そうに振舞った。彼女は胸に大きな企てを抱きながら自分とアトリとの間の子供たちの幼い生命を締め、あるまじくも、二人の喉をかき切った。アトリは息子のことを尋ねると、彼女は答える。「酒宴のとき、あなたが盃に使ったのは子供たちの頭蓋骨です。飲み物の中にも子供たちの血を混ぜました。子供たちの心臓は串で焼き、それをあなたは、一人で平らげました。」二人は恨みを投げ合い、敵意ある言葉を交わした。グズルーンは、ヘグニの第三子フニヴルンク(Hniflung)とともに、アトリを討った。アトリは骸になって、遺言通り、葬儀が行われ

た。その後、グズルーンは自らの生命を断とうとしたが、それは果たされず、彼女が死んだのは後になってからことである。

コストベラとグラウムヴォルという二人の登場やヘグニの身代わり、そして結末部分のアトリとグズルーンとの対話などは新たに付け加えられたものであり、これによって作者の心理的内面的な描写への関心が窺える。逆にアトリにとってその行動を決定づけるニーベルンゲン財宝のモチーフは、この歌謡では削除されている。上記 16) の『アトリの歌』があらすじを生き生きと迫力のあるスタイルで語っているのに対して、この歌謡はきめ細かく心理的内面的描写を展開させたものと言ってよいだろう。

18) 『グズルーンの煽動』(十一世紀前半または十二世紀前半 アイスランド)

上記の歌謡『グリーンランドのアトリの詩』の結末には散文による説明が付け加えられていて、グズルーンのその後のことが語られている。それによると、海に身を投げたグズルーンは、ヨーナク王の国に流され、そこの王の妻となった。王と彼女との間にできた息子たちはセルリ(Sörlí)、エルプ(Erþ)そしてハムジル(Hamdir)といった。グズルーンは先の夫シグルズとの間にスヴァンヒルドという娘を儲けていたが、娘はこのヨーナク王のもとで養育された。その後スヴァンヒルドはイェルムンレク王の妻となるが、ビッキという男の奸計にあって、王の命令で馬に踏みつけられて殺されてしまう。娘スヴァンヒルドを殺されたグズルーンが、息子たちに姉の復讐をするようにけしかけるのがこの歌謡である。剛勇のハムジルは、「皆が心をついにすれば、イェルムンレクに対して復讐を遂げることができるだろう」と言って出かけるが、しかし、歌謡の表題があてはまるのは、冒頭からここまでのほんの八詩節であり、九詩節から最後まで、あとに残ったグズルーンが自らの不幸な生涯を回想する歌謡となっている。第七詩節で笑いながら倉庫から兜や甲冑を選び出したグズルーンが、突然第九詩節で泣きながら数々の悲しい話を語り始める場面はとりわけ印象的である。シグルズの暗殺、アトリとの再婚、アトリへの復讐、海への身投げ、ヨーナク王との三度目の結婚そしてスヴァンヒルドの殺害等をグズルーンは次々に回想するが、その嘆きは、『シグルズの短い歌』におけるブリュンヒルトの場合と同じように、シグルズと同じ火葬堆の上で死んで、あの世で彼と一緒にになりたいという望みで頂点に達する。あの世で一緒にになりたいというモチーフも『シグルズの短い歌』の結末にあるブリュンヒルトの言葉を想起させる。ブリュンヒルトは確かにこの歌謡ではどこにも登場してはいないが、しかし、このグズルーンの歌謡は詩人の意識の中でブリュンヒルトの歌謡と結びついていたことは明らかである。グズルーンの運命とブリュンヒルトの運命が対をなしているように、このグズルーンの歌謡もブリュンヒルトの歌謡と対をなしているのである。

19) 『ハムジルの歌』(九世紀後半 ノルウェー)

この歌謡は上記の『グズルーンの煽動』と密接に関係しており、そこで最後まで語られていなかった息子たちの復讐の実行が語られている。

娘スヴァンヒルドを殺されたグズルーンが、息子たちにその復讐をけしかけると、息子のハムジルとセルリは馬に乗って山を越えて出かけてゆく。途中腹違いの弟エルプに出会うが、役立たぬと思って殺してしまう。イエルムンレク王の館に着いて、二人は戦うが、弟のエルプが生きていたら王の首はとんでいたろうにと後悔する。セルリは館の破風のそばで倒れ、ハムジルは館の後で死ぬ²²⁾。

この歌謡は、もともとは古いゴートの伝説に基づいていたが、その後南ゲルマンのニーベルンゲン伝説と結びついてできたもので、最も称賛すべき英雄歌謡の一つであるとされている。グズルーンはここでも悲劇的な女傑として現われている。彼女は、すなわち、彼女の最後の息子たち向かって復讐をけしかけることによって、その子らをも失うのである。その後のグズルーンについてはもはや語るものはなく、この歌謡が『歌謡エッダ』におけるニーベルンゲン伝説を伝える最後の歌謡である。

以上、『歌謡エッダ』におけるニーベルンゲン伝説の全ての歌謡を紹介してきたが、これらの歌謡は、括弧内にも示しておいたように、音韻などの研究からそのほとんどが九世紀初期から十三世紀初期までの間に作られたものであることが分かっている。歌謡の発生地に関しても、とりわけ長い『グリーンランドのアトリの詩』だけはグリーンランドで作られているが、他はアイスランドとノルウェーとで生成したもので、集録されたのは十三世紀の後半、アイスランドにおいてであるとされている。

ライン・フランケンから北欧へ伝承される際、地名、人名等はもちろんその土地にふさわしい形に改められたり、新たに創作されたりした。地名に関してはただラインとフランケンラントだけが伝えられているのみで、あとは新たに付け加えられたものである。人名に関しては、それに相当する北欧の発音に変えられていった。すなわち、ジークフリート(Sigfrid)はシグルズ(Sigurd)に、グンテル(Gunther)はグンナル(Gunnar)に、ハーゲン(Hagen)はヘグニ(Högni)に、ゴトマール(Gotmar)はグットルム(Guttorm)に、ギービヒェ(Gibiche)はギューキ(Gjúki)に、そしてアッティラ(Attila)はアトリ(Atli)に変えられていった。またグリームヒルド(Grimhild)の名前は母に移り、娘は今やグンテル(Gunther)に合わせてグズルーン(Gudrun=Gunth-run)と呼ばれた²³⁾。しかし、ここ北欧において最も大きな改変を見たのはブリュンヒルドであろう。ブリュンヒルドは名称こそほとんど変えられてはいないが、北欧ではアトリの妹となっており、さらには予言者としても登場し、グートルーンよりも重要な人物である。否、それどころか、ブリュンヒル

22) 『ヴォルスンガ・サガ』ではオーディンが関与している。

23) Vgl. A. Heusler : a. a. O., S. 14.

ドが北欧伝説の中心人物であると言ってもよいであろう。ブリュンヒルド伝説はドイツにおいてよりも北欧において一層強く発展していったのである。

このような展開を見た『歌謡エッダ』の中には、上で指摘したように、北欧で生成発展し、ライン・フランケンからの伝承というよりはむしろ純北欧的な性質のものももちろん多いが、しかし、だいたいライン・フランケンのゲルマン伝説に基づいており、『ニーベルンゲンの歌』よりもより古い精神を示しており、全く異教的であって、また『ニーベルンゲンの歌』には伝えられていないシグルズの生い立ちや悪竜退治及び財宝獲得等が詳細に歌われていて、ニーベルンゲン研究にはなくてはならない重要な資料の一つである。

しかし、『歌謡エッダ』は年代と作者とを異にした歌謡の集録であり、ニーベルンゲン伝説に関する部分についても、類似の歌謡が集録されているのみで、一個の明白な筋を生み出すようにはまとめられていない。シグルズの死を取り扱っている『シグルズの歌』では、上で見てきたように、欠落部分もあって、不明の部分も多い。ところが、このような欠落部分を補ってくれるものが今日の我々に伝えられている。『ヴォルスunga・サガ』がそれである。『ヴォルスunga・サガ』は欠落部分を補ってくれるだけでなく、『エッダ』ではばらばらであった筋を一つにまとめてくれている。さらにシグルズの父についても語っている。次にこの『ヴォルスunga・サガ』を取り扱い、北欧における第一次伝承としてのニーベルンゲン伝説の特質をまとめることにしたい。

Ⅱ. 『ヴォルスンガ・サガ』

古代中世アイスランド文学は「エッダ」、「スカルド詩」、「サガ」の三つに分けられる。第一の「エッダ」は、すでに述べたように、古代ゲルマンの神話と英雄伝説を伝える古詩であり、詩形も素朴で力強く、客観的叙事詩的性格を持っているのに対して、第二の「スカルド詩」は逆に、かなり高度の技巧をもった作品であり、作者個人の刻印を示している。このように両者は本質的には異なるものの、詩形がいずれも韻文という点では同じである。この二つに対して散文で書かれたものが第三の「サガ」である。

「サガ」(Saga)という語はドイツ語でいう Sage と同じ語源から出ている言葉であると言われているが、ドイツ語の Sage が「口碑」「民譚」など、素朴な民間の話に用いられているのに対し、アイスランドの Saga は「物語」「語られたもの」といったほどの意味で、これを広義に用いるときは散文で書かれた全ての叙述を含ませることができるものである²⁴⁾。一般的に考えて、「サガ」は歴史的事件ないし人物の散文物語であると言っても差し支えないであろう。このような「サガ」が王などの前で語られたのは十一世紀頃に始まると言われるが、それが文字に写されるのは十二世紀後半からであり、隆盛期はおおよそ百年間続いたと考えられている²⁵⁾。このわずか一世紀ばかりの間に多くのサガが書かれ、現存するものだけで百五十から二百篇にも達すると言われている²⁶⁾。この歴大なサガを分類する方法はこれまでにさまざまに行われてきたが、様式的に見て、1)「歴史的サガ」、2)「文学的サガ」、3)「叙事詩的あるいは伝奇的サガ」、4)「空想的サガ」の四つに分類した山室静の分類法²⁷⁾が注目に値する。それによると、まず1)の「歴史的サガ」は、物語というよりも主として歴史的記述たることを期したもので、上ですでに引用したアリ・トルギルスソンの『植民の書』と『アイスランド人の書』をはじめとして、ノルウェー王朝史とも言うべきスノリの『ヘイムスクリングラ』、グリーンランドの発見と植民を取り扱った『赤毛のエリクのサガ』²⁸⁾など数多くあり、作者の分らないサガの中にあってこの歴史的サガには作者が分っているものが多い。2)の「文学的サガ」は、上記の歴史的サガが客観的な歴史記述をねらい、時代や人物を歴史の流れの中で辿っているのに対して、個人の像を浮き上がらせることに主眼があり、伝記、あるいは歴史上の人物を扱った小説に近いものである。これこそサガの中心をなすもので、『エギルのサガ』『ニャールのサガ』『ラックサー谷の人びとのサガ』『エイルの人びとのサガ』『グレティルのサガ』といういわゆる五大サガ²⁹⁾をはじめとして、他にも優れたものが

24) 山室静：サガとエッダの世界 177頁参照

25) 山室静：北歐文学の世界 16頁参照

26) 同上書16頁参照

27) 同上書 120-135頁参照

28) 山室静訳：赤毛のエリク記 —古代北歐サガ集— 冬樹社1974年

29) 谷口幸男訳：アイスランドサガ 新潮社1979年所収

多い。とにかくリアリスティックな筆致で書かれ、近代小説に近いものである。これに対して3)の「叙事詩的あるいは伝奇的サガ」は、力強いリアリズムを失い、古き英雄たちを取り扱った叙事詩的な物語であり、成立もやや後期(十三世紀後半から十四世紀)に属すると言われている。この「伝奇的サガ」がさらに小粒となり、浪漫的童話的な内容となったのが4)の「空想的サガ」である。「伝奇的サガ」がだいたいにおいてまだ悲劇的精神に貫かれているのに対して、この「空想的サガ」は、ユーモアやアイロニーがふえてきて、物語はハッピー・エンドで終わっている点が特徴的である。この浪漫的童話的サガは、結局はサガの衰弱形態を示すものであると言えよう。

山室静の分類法はこのようにそのまま「サガ」の変遷を示してくれる点においても注目し得る分類法であると言えるが、さてここで我々が問題にしようとしている『ヴォルスunga・サガ』は、3)の「叙事詩的あるいは伝奇的サガ」に属するもので、十三世紀初めから終わりの間、恐らくは1260年頃にアイスランドの物語詩人(Sagamann)によって散文でまとめられたものである。この『ヴォルスunga・サガ』は、上ですでに指摘したように、『歌謡エッダ』の知らないシグルズの父シグムンド(Sigmund)の物語を伝えているのみならず、『歌謡エッダ』の欠節八葉を補ってもあるし、さらに『歌謡エッダ』の諸歌謡の相互の不十分な連絡をなだらかにして筋をまとめてもいるので、ニーベルンゲン伝説の北歐伝承についての概観を知ることができる点に大きな意義があると言えよう。『ニーベルンゲンの歌』の成立過程を理解する上でも重要な資料の一つなので、以下、この『ヴォルスunga・サガ』をあらすじの上から六つに分けて、北歐におけるニーベルンゲン伝説の概要をまとめ、それによってその特質をまとめてみたい³⁰⁾。

『ヴォルスunga・サガ』の梗概

1)シグルズの出生(ヴォルスンガー族の系譜)

オーディン(Odin)の息子シギ(Sigi)は、ある時スカジ(Skadi)という男の奴隷ブレジ(Bredi)と鹿狩りに出かけた際、相手の獲物の方が単に多いという妬みからその奴隷を殺害した。死体を埋めて犯行を隠そうとしたが、罪が明るみに出て、追放の身となった。しかしシギは、別れ際にオーディンから与えられた手勢を連れて、その後略奪遠征を始めたところ、常に勝利に恵まれ、ついにはフーナランド国(Hunenland)を奪い取ることができた。さらには身分の高い妻をも娶り、強力な王となってその国を支配した。妻との間には息子レリル(Rerir)が生まれ、息子は父のもとで成長して有能な男となった。

シギが老人となったとき、妻の兄弟たちが彼を妬み、攻め寄せて彼を倒してしまう。そ

30) 梗概をまとめるにあたっては、次のものを参照する。

Paul Hermann (Übertragen) : Nordische Nibelungen. Köln 1985.

菅原邦城訳：ゲルマン北歐の英雄伝説(ヴォルスunga・サガ) 東海大学出版会1979年

谷口幸男訳：ヴォルスungaサガ(「アイスランドサガ」所収) 新潮社1979年

の危機に居合わせなかった息子のレリルは、友人と国の豪族たちの支援を得て、父の仇を討ち、国々と権力と財産を我がものにし、父よりも一層有力な者となった。レリルはさらに自分に相応しい妻を獲得し、二人は長くともに暮したが、子供は一人もできなかった。そこで二人は神々に祈願したところ、オーディンは巨人フリームニル(Hrimnir)の娘フリオーズ(Hljod)にりんごを渡してレリルのもとに届けさせた。それを食べた妻はほどなく身ごもったが、子供を産めないまま、長いときが過ぎた。その間レリルは遠征に出かけて、病にかかり死んでしまう。一方、身重のまま六冬^{とせ}を経た妻も、自分の腹を切って子供を取り出させたあと、世を去る。生まれた子供は予想通り身体が大きくてヴォルスング(Völsung)と名づけられ、父の跡を継いでフーナランド国の王となった。ヴォルスング王はやがて、巨人フリームニルから送られてきたその娘フリオーズを妻にして、十人の息子と一人の娘を儲ける。長男はシグムンド(Sigmund)、娘はシグニュー(Signy)と呼ばれ、二人は双生児であった。

ガウトランド国(Gautland)のシッゲイル王(Siggeir)は、このヴォルスング王の娘シグニューに求婚するが、彼女自身はそれを嫌う。しかし、父の決意によって婚約が整い、結婚の饗宴がヴォルスング王のところで執り行われる。その当日、一人の男(オーディン)が入って来て、館の真ん中に立っていたりんごの木に剣を突き刺し、「この剣を抜き取った者にこの剣を与えよう」と言い残して立ち去る。人々はその剣を抜き取ろうとするが、誰にもうまくいかない。最後にヴォルスングの息子シグムンドになってようやくその剣は抜き取られた。シッゲイルは黄金でその剣を買い取ろうとするが、拒否される。愚弄されたと思ったシッゲイルは、仕返しを思いめぐらし、翌日新妻を連れて故国へ帰ってゆく。

三ヶ月後、ヴォルスング王と息子たちはシッゲイル王の招きに応じてガウトランドに出かけてゆくが、シグニューから前もってシッゲイル王の企みを聞き知る。しかし、ヴォルスング王は「逃げずに、逆に雄々しく討って出る」決心をして、両族は翌日相戦うこととなる。敵は大軍だったため、十人の息子以外はヴォルスング王とともに倒れてしまう。十人の息子たちは捕えられて、森の中で牝狼の餌食に晒される。九夜つづけて同じ牝狼がやって来ては一夜に一人だけ喰い殺し、最後にシグムンド一人になるまで、皆殺されてしまった。この狼はシッゲイル王の母親で、妖術と魔法のためにこの狼の姿をしていたのだという。さて、十日目の夜、シグニューはあらかじめ兄のもとに家来を送り、兄の顔と口の中に蜂蜜を塗りつけさせておいたので、狼は舌で彼の顔をすっかり舐めてしまい、そのあと舌を彼の口の中にも入れてしまう。そのときシグムンドは勇を鼓して狼の舌に噛みつくと、狼は死んでしまった。妹の機転で窮地を脱したシグムンドは、森の中に造られた地下室に隠れ住んで、必要なものは妹から手に入れる。シッゲイル王はもちろんヴォルスング一族はみんな死んでしまったものと思っていた。そうしているうちにシッゲイル王は妻との間に二人の息子を儲けていたが、上の息子が十歳になると、シグニューはその子供をシグムンドのもとに送る。シグムンドが父の仇討ちをする際にその子供が役立てばと思っただけのことである。ところが、その子供はとても臆病だったので、ヴォルスング一族の復讐の

ためには役立たないと思って、シグムントはその子供を殺してしまう。次の冬にもシグニューは二番目の息子を同様にシグムンドのもとに送るが、この子供も臆病だったので殺されてしまう。

そこである時、シグニューは魔法使いと姿を取り替えて、兄のところに出かける。妹は道に迷ったふりをして宿を頼む。シグムンドはそれが妹だとは気がつかないまま、妹と同じ床で三夜寝て、妹は身ごもる。それからシグニューは兄のもとを去ってもとの姿に戻ったが、しばらくして一人の男子を産む。シンフィエトリ(Sinfjötli)と名づけられ、十歳の頃、この子供も同様にシグムントのところに送られるが、先の二人とは異なって臆病ではなく、勇ましい児であった。しかし、シグムンドはシンフィエトリはまだ仇討ちには幼なすぎると考え、修行をさせる。十分成長したとき、シグムンドはシンフィエトリと一緒にヴォルズング一族の仇討ちに出かける。シンフィエトリはシグニューとシッゲイル王との間に新たに生まれていた二人の幼い子供を殺して、両者の戦いは始まった。ところが敵は大勢だったため、シグムンドとシンフィエトリは捕えられて大きな墳^{つか}の中に閉じ込められる。シグニューがまたもや機転をきかせて二人にこっそりと肉のほかに剣を届けたので、二人はその剣で板石を切り割って墳から抜け出すことに成功する。二人は敵が寝静まっている大広間に火をつけ、反撃に出る。シグムンドは妹に大広間から出てくると勧めたが、しかし、シグニューは、この仇討ち成就のためになした自分の悪行の数々に罪を感じて、シンフィエトリは兄の子供であることを打ち明けたあと、火の中にとび込んでシッゲイル王と家来もろとも死んでしまう。

仇討ちを果たしたシグムンドとシンフィエトリ父子は故国に帰って、ヴォルスング王の後釜になっていた王を追ひ払い、シグムンド自らが国王となる。シグムンドはボルグヒルド(Borghild)という妻をもらい、ヘルギ(Helgi)とハームンド(Hamund)という二人の息子を儲ける。その息子ヘルギは、優れた人物となり、略奪遠征ではフンディング王(Hunding)に出会ってこれを倒し、さらにその息子たちをも返り討ちにして名声を博する。合戦から戻る途中には、ヘグニ王(Högni)の娘シグルーン(Sigrun)と出会い、彼女のためにその強制的な婚約者グランマル王(Granmar)の息子ヘズブロッド(Hödbrodd)と戦い、勝利を収めて彼女シグルーンと結婚し、その国にとどまり、名高い立派な王となる。

ヘルギの腹違いの兄シンフィエトリもまた略奪遠征に出かけたとき、一人の美女に出会って恋をし、その恋敵(継母ボルグヒルドの弟)と戦い、勝利を収める。しかし、それがために帰国後継母ボルグヒルドによって毒を飲まされて死んでしまう。シグムンドは息子の亡骸^{なきがら}を懷に抱いて森を通り、あるフィヨルドまで来ると、小舟の男(オーディン)にその亡骸を委ねる。シグムンドは家に帰ると、ボルグヒルドを追ひ払う。彼女はそれから少しして死んでしまう。シグムンド王は自分の王国を治めつづける。

シグムンド王はその後エイリミ王(Eylimí)の娘ヒョルディース(Hjördis)に求婚する。このヒョルディースに対して、フンディング王の息子リュングヴィ(Lyngvi)も求婚する。父王から夫の選択を迫られた娘ヒョルディースはシグムンド王を選んで、結婚の祝宴が催

される。そのあとシグムンド王はフーナランドへと帰国するが、舅のエイリミ王もこれに同行する。一方、恋に破れたリュングヴィ王は軍勢を集めてシグムンドの国へ攻め寄せる。戦いの続く中、片目の男（オーディン）が入って来て、シグムンド王の前で槍を上げる。シグムンドはその槍に斬りつけると、彼の剣は真っ二つに折れる。これによって、戦運は逆転し、シグムンド王並びにその舅エイリミ王は軍勢とともに倒れてしまう。勝利を取めたリュングヴィ王は、逃亡中のヒョルディースを手に入れることはできなかったが、これで全てヴォルスング一族を殺したものだと思っていた。ところが、森へ逃げていたヒョルディースは、すでにシグムンドの子供を身ごもっていた。ヒョルディースは、夜になって戦死者の横たわる場へ赴くと、シグムンドはまだ少し息があった。シグムンドは妻に、折れた剣の破片を大事に保存し、それを生まれる息子に与えるよう言い残すと、息を引き取る。

ヒョルディースは、やがて夜が明けてそこを通りかかったデンマークのハールプレク王(Hjalprek)の息子アールヴ王(Alf) に救われ、彼の王国でのちに結婚する。ヒョルディースは真実を打ち明けて、大きな誉れを受けながら暮らすうち、シグムンド王の息子を産む。その子供はその後ハールプレク王のもとに連れて来られて、シグルズ(Sigurd)と名づけられた。シグルズはこうしてハールプレク王のもとで成長したのである。

2)若きシグルズの冒険

さて、シグルズはフレイズマル(Hreidmar)の息子レギン(Regin) を養父として教養を積む。ある日のこと、レギンの勧めに従ってシグルズはハールプレク王に馬を一頭要求したところ、好きなものを自分で選んでもよいという許可を得る。次の日シグルズは馬選びに出かけると、一人の長い髭の老人（オーディン）に出会い、老人の知恵で名馬グラニ(Grani)を手に入れる。レギンはさらにまたこのシグルズの力を借りて、竜となっているファーフニル(Fafnir)を倒そうと思い、ファーフニルの黄金について次のように物語る。

「レギンの父はフレイズマルといい、力があり、裕福であった。息子にはファーフニルとオトル(Otr) とレギンの三人があった。オトルがアンドヴァリ(Andvari) の滝で魚をとっていたある日のこと、オーディンとロキ(Loki)とヘーニル(Hönnir)の三神がそこを通りかかり、ロキは石を投げて川瀬の姿をしたオトルを殺し、その皮を剥いだ。その晩三神はフレイズマルのもとに来て、獲物を見せたところ、息子オトルの皮だったので、フレイズマルは彼らを捕り押さえ、その償いと彼らの身代に黄金を要求した。そこで彼らは黄金を手に入れるためにロキを遣わせた。ロキは、アンドヴァリの滝でその黄金を奪い取ってしまったが、そのとき侏儒^{こびと}アンドヴァリは、黄金の腕環と黄金一切を所有する者は誰でもそのために死ぬことになる^{こと}と言ひ捨てて石の中へ入って行った。三神は黄金をフレイズマルに手渡したが、その後ファーフニルが父（フレイズマル）を殺して黄金を一人占めにし、今は凶悪な大蛇と化してその財産の上にとぐろを巻いているのである。」

このような話を聞いたシグルズは、そのファーフニル退治のためにレギンに剣を造らせるが、どれもすぐ折れてしまうものであった。そこでシグルズは自分の母を訪ねて、父シ

グムンド王の折れた剣をもらい受け、それでもって再度レギンに剣を造らせた。すると今度は砕けも折れもしない剣グラム(Gram)が完成した。レギンは約束通りシグルズにファーヴニルを殺すようにと命ずるが、叔父(母の弟)グリービル(Gripir)から自分の運命を聞き知ったシグルズは、その前にシグムンド王たちの仇を討たなければならないと言って、フンディングの息子たちの国へと船に乗って出かけてゆく。

出発して数日後、海は暴風が吹き大波となったが、ある岩鼻を通り過ぎる際、そこで船に呼びかけた一人の男(オーディン)を乗せると、たちまち風は静まり、一行は航海を続けた。フンディングの息子たちの王国に着くと、シグルズは名剣グラムをかかげて勇敢に戦い、相手のリュングヴィ王(Lyngvi)とその兄弟ヒョルヴァルズ(Hjörvard)をはじめ、王の息子たちをも残らず殺して、輝かしい勝利を収めて帰国する。

帰国するやシグルズは、今度はレギンとの約束通りファーヴニル退治のために荒野へ出かける。シグルズは、そこで出会った長い髭の老人(オーディン)の教えに従い、溝を何本か掘り、その中の一つの溝に身を潜めた。竜がその溝の上に這ってきたとき、シグルズは左の肩胛骨の下に剣を突き立てると、剣は柄のつけ根まで刺さった。竜は、「黄金はそれを所有する者にとっては命取りとなるだろう」と言い捨てて、死んだ。シグルズは、リジル(Ridil)という剣で竜から心臓を切り取って、串の上で焼いた³¹⁾。心臓から泡が出てきたとき、シグルズは焼けているか調べるために指でさわってみたが、その熱さのため突然指を口に突っ込んだ。竜の心臓の血が舌に触れたとき、彼は鳥の言葉が理解できるようになった。鳥たちがさえずっている声から、レギンが裏切る魂胆でいることを知ると、シグルズは名剣グラムを振り上げてレギンの頭を斬り落とした。そしてシグルズは竜の心臓の一部を食べると、残りは取っておく。そのあとシグルズはファーヴニルの通った跡をたどってその洞窟に行き、そこで莫大な黄金を見つけ、ついにその所有者となったのである。

鳥の声に従って、シグルズは、そのあとヒンダルフィヤル(Hindarfjall)の山へ出かける。そこで彼は男装して眠っている戦乙女ブリュンヒルド(Brynhild)を見つけ、彼女を目覚めさせる。彼女は、オーディンの意に反してヒャールムグンナル(Hjalmgunnar)を倒したために眠りの棘で刺されたこと、オーディンに結婚を強制されたが、逆に恐れることを知るような男とは結婚しないという誓いを立てたことなどを語る。シグルズはブリュンヒルドからさまざまな教えを聞いたあと、「あなたより賢い人はいない、あなたを私の妻にすることを誓う」と言うと、ブリュンヒルドも「一番にあなたを夫にしたいと思う」と言い、こうして二人は互いに婚約を誓い合った。

シグルズはブリュンヒルドと別れて、ブリュンヒルドの姉ベックヒルド(Bekkhild)を妻にしていたヘイミル(Heimir)の邸にやって来た。その息子アルスヴィズ(Alsvið)からシ

31) 『エッダ』中の『ファーヴニルの歌』ではシグルズではなく、レギンがリジルという剣でその龍の心臓を切り取ることになっている。(註21参照)

グルズは大歓迎を受け、そこに滞在することになる。その頃、ヘイミルの養い娘ブリュンヒルドは養い父のもとに戻って女館で侍女たちとともに暮らしていた。ある日のこと、シグルズは高い塔へ飛んでいった彼の鷹を捕えようとしたとき、美しいブリュンヒルドを見つけて、ここで二人は再会する。「あなたはグューキ(Gjúki)の娘グズルーン(Gudrun)を娶ることでしょう」と言うブリュンヒルドに対して、シグルズは「私は王の娘などにひっかかりません。私はあなたを妻にするか、全く結婚しないかのいずれかです」と誓う。彼女も同じように語ったので、シグルズは彼女に黄金の腕環を与えて、二人はこうして誓いを新たにした。

3)シグルズの結婚(二組の結婚)

さて、グューキ王という名の王がいた。彼はラインの南に王国を有し、妻はグリームヒルド(Grimhild)といったが、彼女は魔法使いで、邪^{よこ}しまな心の婦人であった。彼らの間には三人の息子、グンナル(Gunnar)、ヘグニ(Högni)、グットルム(Gutthorm)と一人の娘グズルーン(Gudrun)がいた。あるとき、その娘グズルーンは一羽の美しい鷹の夢を見て、やがて求婚して来る殿御が誰なのかを知るために、ブズリ王の娘ブリュンヒルド(その兄がアトリ)の館を訪ねる。ブリュンヒルドは予言術に^た長けていたからである。グズルーンは大きな雄鹿についての不吉な夢を物語ると、ブリュンヒルドはグズルーンの一生を予言してこう言う。「あなたのもとに、私が自分の夫に選んでおいたシグルズ様が行くでしょう。あの方にグリームヒルド様は、毒を混ぜた蜜酒を与え、これは私たち皆を重大な争いに巻き込むでしょう。あなたは彼を夫にし、まもなく失くすでしょう。あなたはアトリと再婚します。あなたは兄弟を失い、アトリを殺すでしょう。」このような占いを聞いたグズルーンは、悲しい気持ちになってグューキ王のもとに帰ってゆく。

さて、その予言の中のシグルズは、夥しい黄金を携え名馬グラニに乗って、アルスヴィズのもとを離れる。馬に乗り続けて辿り着いたのはグューキ王の城である。シグルズは大変厚いもてなしを受けて、そこに滞在することになる。シグルズはグンナルとヘグニと一緒に馬を乗りまわしたが、どの才芸でもシグルズは二人にまさった。グリームヒルドは、シグルズがいかに深くブリュンヒルドを愛していて、いかに頻繁に彼女のことを語ることか気がついた。そして心の中で、シグルズがここに居を定めてグューキ王の娘を妻にしたならば、一層大きな幸運であろうと考える。そこでグリームヒルドは、ある晩のこと、酒席でシグルズのもとにいき、^{さかすき}角杯をすすめた。これを飲んだシグルズは、その中には忘れ薬が入っていたので、ブリュンヒルドのことをすっかり忘れてしまった。またあるとき、グリームヒルドはさらにグューキ王を説き伏せて、グズルーンをシグルズの妻にさせるよう努める。こうしてシグルズとグンナルは義兄弟の誓いを交わし、シグルズはグズルーンと婚礼を挙げた。シグルズはグズルーンに、竜(ファーフニル)の心臓の一部を与え食べさせると、彼女は以前よりもはるかに冷酷かつ賢くなった。二人の間に生まれた息子はシグムンド(Sigmund)といった。

さて、またあるとき、母グリームヒルドはさらに自分の息子グンナルのもとに行って、ブリュンヒルドに求婚するよう勧める。グンナルは母グリームヒルドの指示に従ってシグルズを伴い、ブリュンヒルドの父ブズリ(Budli)王のもとに赴き、求婚話を切り出す。ブズリ王は、もし本人が拒まなければと、それを承知したが、「娘は非常に自尊心が強くて自分の決める男しか夫にしないだろう」と答える。次にグンナルらはブリュンヒルドの養父ヘイミルのところへ行き、用向きを話すと、ヘイミルは「彼女の広間の周りに燃えている火を乗り越えてやって来る男だけを彼女は夫にする気だ」と答える。グンナルらは近くにある彼女の広間に出かけると、その周りには火が燃えていた。グンナルはゴティ(Goti)という馬に、そしてヘグニはホルクヴィル(Hölkvir)という馬に乗っていた。グンナルは自分の馬を火に向けて駆り立てるが、馬は逡巡して進まない。シグルズの名馬グラニを借りてもグンナルは火を乗り越えることができない。そこで、グリームヒルドが二人に教えておいたように、シグルズとグンナルとは姿を替えた。グンナルの姿をしたシグルズは名剣グラムを携え、名馬グラニに拍車を加えると、名馬グラニは火炎の中へ躍り込む。炎を越えて広間の中でブリュンヒルドに出会うと、彼はグューキの子グンナルだと名乗る。そこでブリュンヒルドは誓い通り、彼を歓迎する。そこに彼は三夜とどまり、彼女と床を共にするが、彼は名剣グラムを抜き身のまま自分たち二人の間に置いた。さらに彼は、前に彼女に与えた腕環(アンドヴァリの贈物)を彼女の手から抜き取って、ファーヴニルの遺産の中から別の腕環を与えた。このあと彼は、同じ火を乗り越えて、連れのもとに戻って、グンナルと再び姿を替えた。こうして後日、ブズリ王が息子のアトリとともに娘ブリュンヒルドを伴ってグューキ家を訪れると、グンナルはブリュンヒルドと婚礼の祝宴を挙げたのである。幾日にも及ぶその祝宴が果てた時、シグルズはブリュンヒルドと交わした誓いをことごとく思い出すが、そのままにしておいた。

4) シグルズの最期

ある日のこと、女たちが水浴びのためにライン河に出かけたとき、ブリュンヒルドが一番に河の中に入ると、グズルーンはそれはどういうことなのかと言ってわけを尋ねる。ブリュンヒルドは「私の父はあなたの父よりも強力で、夫も多くの偉業をなし、燃える炎を乗り越えたのに対し、あなたの主人はハールプレク王の奴隷であった」と言って、グズルーンと対等でなければならない理由はないと主張する。これに対してグズルーンは反発して言う。「夫のことを悪^{あし}ざまに言うのは、あなたにふさわしくありません。なぜなら、あの方があなたの最初の夫ですから。つまり、あの方はファーヴニルを殺し、あなたはグンナル王だと思っておられますが、あの炎を乗り越えもなさいました。そして、あなたのそばに寝て、あなたの手から腕環（アンドヴァリの贈物）を取ったのです。」こう言って、その腕環を見せると、ブリュンヒルドは顔が蒼くなって、ついに塞ぎこんで病の床についてしまう。深い悲嘆ののち彼女はついにグンナルに向かって、「私は生きていたくありません。あなたがシグルズを私のベットに來させたとき、あの方は私だけでなくあなたまでも欺いたのです。私は同じ館に二人の夫を持とうとは思いません。シグルズか、あなたか、あるいは私のいずれかが死ななければなりません」と言って、シグルズ暗殺をグンナルに要求する。グンナルは、あれこれ悩んだ挙げ句、弟ヘグニに「シグルズを殺せば、我々は黄金と全ての権力を欲しいままにできる」と言って、シグルズ暗殺をほのめかすが、ヘグニは警告して言う。「敵対行為でもって誓いを破ることは、我らにふさわしくはない。彼は、我らにとって大きな助けにもなっているのだから。」このヘグニの警告に対して、グンナルは「弟のグットルムを唆そう。あれは若く、あまり物事をわきまえていないし、また我々の誓いにも全く加わっていないから」と言って、暗殺に固執する。そこで二人は弟グットルムを呼び寄せて説得し、ついにグットルムはグリーンヒルドの勧めなどもあって、殺人を行う約束をしてしまった。グットルムは翌朝、シグルズがまだ床の中で休んでいるとき、彼のもとに入ってゆき、二度は怯んだものの、三度目に剣を抜いてシグルズに斬りつけると、剣先はシグルズの下布団まで突き刺さった。シグルズは剣グラムを取って、グットルムめがけて投げつけ仇は討つものの、自らも息絶えてしまう。夫の血に浸されて目覚めたグズルーンは苦しみの吐息をはいた。望みを遂げたブリュンヒルドは、笑い声をあげたが、しかし、やがてグンナルに向かって、シグルズは結婚の夜に実は花嫁の貞操を大切にすることを告白するとともに、将来の出来事を予言したのち、シグルズの死骸を焼く火の中に自ら身を投じて彼の死に殉じてしまう。

5) グズルーンの再婚（アトリの最期）

シグルズを失ったグズルーンは歩みつづけ、デンマークのハールヴ王(Half)の館にやって来て、ハーコン(Hakon)の娘ソーラ(Thora)のもとに三年半の間とどまる。母グリーンヒルドは、そこへ出かけ、アトリ王との再婚を勧める。グズルーンは堅く断るが、ついには説き伏せられて、気が進まぬままアトリ王のところへ赴く。豪華な祝宴が催されて、グ

ズルーンはアトリの妻となった。しかし、彼女の心は一度としてアトリのために喜ぶことはなく、結婚生活は、さほど睦まじいものではなかった、否、むしろ冷たいものであった。

やがてアトリ王は、シグルズが有していた夥しい黄金は一体どうなったであろうかと思いをめぐらし、策を練る。アトリ王は、グンナル兄弟を招待することにして、使者ヴィンギ(Vingi)を遣わす。ズルーンはこの陰謀を知り、兄弟たちに知らすべく、^{ズルーン}文字を刻み、黄金の腕環を一つ取って、これに狼の毛を結え、それを使者たちに渡しておいた。しかし、ヴィンギは手紙を見つけて、内容を変え、ズルーンは兄弟たちがアトリに会いに来るのを望んでいるかのようにした。一行が到着して使者ヴィンギを通じて招待を受けたグンナルは、ヘグニの警告にもかかわらず、使者の巧みな言葉に説き伏せられて、ついに訪問の旅を約束する。

ヘグニの妻コストベラ(Kostbera)も、またグンナルの妻グラウムヴォル(Glaumvör)も、不吉な夢を語って旅を思いとどまらせるが、一行は翌朝出発する。ヘグニの息子たち、ソーラル(Solar)とスネーンヴァル(Snönvar)らも旅に加わった。一行は船を力の限り漕いで行って、陸地に上がり、それからしばらく馬に乗って森の中を進むと、ついにアトリの市に着いた。ヘグニは門を破り開け、一行は市の中に入る。このときヴィンギはこの招待が欺きであったことを明らかにして威すが、ヘグニは「戦うべきところでは我々は決して引き退りはしない」と強気の返事をする。それから一同が彼にとびかかり、ヴィンギを打ち殺してしまう。

一行がこうして王の館に馬を乗りつけると、アトリ王はさっそく黄金を要求する。グンナルは拒んだため、両者の間は激しい戦いとなる。これを知ったズルーンは和解を試みるが、彼らは拒んだ。グンナルとヘグニはアトリ王の戦陣に割って入り、勇敢に戦ったが、結局グンナル兄弟の手勢はことごとく滅びて兄弟二人だけとなった。グンナルとヘグニはついに多勢に敗れ、捕えられた。アトリ王がグンナル王に、もし自分の命を助けたくば黄金のありかを知らせよと言うが、それに答えてグンナル王は言う。「その前に、弟ヘグニの心臓が血だらけになっているのを見なければならぬ。」そこでアトリ王の家来たちは臆病者ヒヤリ(Hjalli)をつかまえて、その心臓を切り取り、グンナル王の前に持ち出すと、彼は答える。「これは臆病者ヒヤリの心臓で、剛勇ヘグニの心臓とは似ても似つかぬわ。これはひどくびくびく震えておる。持主の胸の中にあつたときはこの倍も震えていたろう。」アトリは家来たちに今度は実際にヘグニの心臓を切り取らせた。ヘグニは苦しみに晒されている間笑っていた。彼らはグンナルにヘグニの心臓を見せると、グンナルは答える。「これは確かにヘグニの心臓だ。あまり動かないし、持主の胸の中にあつた間はもっと動かなかつたろう。今、わし一人だけが黄金のありかを知っている。決定を左右するのは今はわし一人だけだ。」アトリは捕虜を蛇の棲む牢獄につないだ。そこでグンナルの両手はかたく縛られていた。グンナル王はズルーンから送られた豎琴を足で奏でた。すると牢の中の蛇は豎琴の調べでことごとく眠ってしまったが、ただ一匹の恐ろしい大まむしだけは、眠らずに、彼の体の中に喰い入って、ついに彼の心臓に噛みついた。グンナ

ルはついにこうして並々ならぬ勇気をもって命を落としたのである。

アトリ王は大勝利を収めたと思い、妻のグズルーンと和解しようと努める。彼女はやさしい物言いをするようになるが、心の中は以前と変わらなかった。アトリ王は彼女の言葉を真に受けて、戦いで死んだ者たちのために葬いの宴を催す。彼女は王に恥をかかせる機会をうかがい、自分とアトリとの間の二人の息子をつかまえ、二人の喉をかき切った。息子たちはどこにいるのかと王が尋ねたとき、彼女はこう答える。「あの児らはもういません。あの児らの頭蓋骨は盃に使われてここに 있습니다。あなたはその盃であの児らの血をぶどう酒に混ぜて、お飲みになったのです。それから私はあの児らの心臓を取り出して串で焼きましたが、あなたはそれをお食べになったのです。」二人は憎しみの言葉を数多く言い合った。

ヘグニには、ニヴルンク(Niflung)という息子が生き残っていて³²⁾、グズルーンに父の仇を討ちたいと話した。彼はアトリ王に対して非常な憎しみを抱いていたのである。そこでグズルーンとニヴルンクは計略を練る。二人は、晩にアトリ王が酒を飲んでから床について寝入ってしまったとき、そこに現われて、二人が一緒に剣をアトリ王の胸に突き刺す。こうしてアトリ王を殺害したのち、グズルーンは館に火を放たせ、アトリ王一族をことごとく滅亡させたのである。

6)グズルーンの娘と息子たち

グズルーンは自分の行為に罪を感じて海へ身を投げ入れたが、波に助けられてヨーナクル王(Jonakr)の砦^{まち}に達した。ヨーナクル王は、グズルーンを妻にし、ハムジル(Hamdir)とソルリ(Sörlir)とエルプ(Erp)の三人の息子を儲けた。グズルーンにはかつてシグルズとの間に生まれたスヴァンヒルド(Svanhild)という名の娘もいたが、この娘はここで育てられた。

この娘スヴァンヒルドにヨルムンレク王(Jörmunrek)という強力な王が求婚する。その求婚の使者となったのが息子のランドヴェール(Randver)である。ヨルムンレク王の助言者でビッキ(Bikki)という男も同行していた。婚約はまとなり、スヴァンヒルドは嫁としてヨルムンレク王のもとへ旅立つ。その旅の途中ビッキが王の息子ランドヴェールに「あなたが彼女を妻にするのがふさわしい」と唆し、スヴァンヒルドへやさしい言葉をかけせると、彼女もそれに応じた。しかし帰国すると、ビッキは今度はヨルムンレク王を唆してこう言う。「王子様がスヴァンヒルド様の愛をすっかり獲得してしまっておられます。あの方は王子様の愛人です。」王は怒って一旦は息子ランドヴェールを絞首台につけよと

32) 『歌謡エッダ』中の『アトリの歌』ではなるほどグズルーンは一人で仇を討ったことになっているが、しかし、『グリーンランドのアトリの詩』ではヘグニの第三子フニヴルンク(Hniflung)とともに仇討ちをしたことになっている。それにしてもこの息子の登場はいかにも唐突である。

命令するが、息子の動作から思い止どまり処刑を中止させる。しかし、その間すでにビッキが手を打ち、王子は死んでいた。ビッキはスヴァンヒルドにも処刑を行うよう王に助言すると、王は彼女を城門に縛りつけ、馬に踏みつけさせようとする。ところが彼女が目を開いているときは、馬はとても彼女を踏みにじれなかった。これを見たビッキは、彼女の頭に皮袋をかぶせるように言って、こうしてスヴァンヒルドは馬に踏みにじられて殺されてしまった。

グズルーンはこの娘の死を聞き知り、息子たちに仇討ちを勧める。ハムジルとソルリは仇討ちに出かける途中、自分たちの弟エルプを見つけ、どのような手助けをするつもりなのかと尋ねる。「片手がもう一つの片方の手を、片足がもう一つの片方の足を助けるように」と答えると、兄たちはそれは意味のないことだと思って、弟を殺してしまう。ハムジルとソルリは旅を続けて、ヨルムンレク王のところに着くと、ただちにこれを襲った。ハムジルは王の両手を、ソルリは両足を斬り落としたが、このときハムジルが「もしも弟エルプが生きていたら、王の首は落ちていたろうに」と言って弟殺害を後悔する。ヨルムンレク王の家来たちは二人を攻めるが、二人は立派に雄々しく防戦した。そこへ一人の男、白髪で年とった片目の男（オージン）がやって来て、ヨルムンレク王はその老人から知恵を与えてもらって、家来たちに石を二人に向けて投げつけさせると、それが二人の最期となったのである。

以上『ヴォルスンガ・サガ』のあらすじを六つに分けてまとめてきたが、1)はシグルズが誕生するまでのヴォルスング一族の系譜であり、2)～4)がそのシグルズに関して冒険、結婚、暗殺等を語っており、シグルズ暗殺後の未亡人グズルーンの再婚とその子供たちの物語を伝えているのが5)と6)である。『ヴォルスンガ・サガ』全体は従ってヴォルスングの子孫シグルズを中心とするものであることが明らかであるが、このシグルズを軸としてヴォルスング一族とグューキー族の系譜を図式化するとすれば、巻末の図式Ⅱ、Ⅲ（341－2頁）のようにまとめることができるであろう。

その図式Ⅱからも一目でわかるように、シグルズ誕生までの物語で中心にいるのは、ヴォルスング王の双生児シグニューとシグムンドである。この二人に至る系譜は、物語としては簡潔すぎるきらいがある。この部分を語る『歌謡エッダ』も伝えられていないことを考慮に入れば、これは、系譜上主神オーディンとヴォルスングをつなぐためにサガの作者あるいは編集者が新たに付け加えたものと考えてよい³³⁾であろう。その後のシグニューとシグムンドを中心とする物語についても、『歌謡エッダ』には遺っていないが、シグムンドの息子ヘルギとシンフィエトリに関しては、すでに上で紹介したように三つの歌謡が『歌謡エッダ』に遺されている。このヘルギ及びシンフィエトリとその父シグムンドの求婚については、『ヴォルスンガ・サガ』では次のような興味深いパラレルが認められる。

33) 菅原邦城訳・解説：前掲書 204頁参照

ヘルギ	シンフィエトリ	シグムンド
1. 恋敵ヘズブロッド (戦いによる勝利)	1. 恋敵(継母ボルグヒルトの弟) (戦いによる勝利)	1. 恋敵リュングヴィ (花嫁自身の選択)
2. シグルーンと結婚	2. ある美女と結婚	2. ヒョルディースと結婚
3. その国の王となる	3. 帰国後、継母より毒殺	3. 恋敵より攻め滅ぼさる

それぞれ求婚する場合に恋敵が存在していて、たいていはそのためにのちに死ぬこととなるのである。ただヘルギだけは『ヴォルスンガ・サガ』において最期までは語られていないが、しかし、『歌謡エッダ』中の『フンディング殺しのヘルギ』Ⅱによれば、やはり恋敵ヘズブロッドの援助者ヘグニ(シグルーンの父)の子ダクによって殺されることになっている。それが『ヴォルスンガ・サガ』では語られずに、ヘルギが途中で退場しているのはこの作品の構成の不徹底さを示すものと言えようか。それはともかく、シグルズが誕生するまでのヴォルスンガ一族の系譜は、ドイツからの伝承というよりも北欧で生成発展した部分が多く、より北欧的であると言ってよいであろう。

この『ヴォルスンガ・サガ』の中心に位置するシグルズの物語2)~4)に関してはだいたいにおいてドイツの伝承と考えてよいが、シグルズの冒険の中にもオーディンが関与していて北欧神話的傾向を強めている点に大きな特徴がある。父の仇討ちを果たすシグルズは、今やオーディンの英雄であり、名剣グラムも名馬グラニも結局のところオーディンから渡されたものである。シグルズがそのあとの筋で目覚めさせることになるブリュンヒルドも、ワルキューレであり、その魔法の眠りもオーディンによって罰として与えられていたものである。しかもこのブリュンヒルドにはさらに強い関心が寄せられ、ブリュンヒルドの内面化がより深くなっている点にもこの作品の大きな特徴がある。すなわち、ブリュンヒルドはシグルズと誠実な誓いとともに婚約を誓うが、その後グンナルの母の忘れ薬によってシグルズがグズルーンと結婚することとなり、これによってブリュンヒルドの嫉妬と憎しみと愛とが一層内面化される結果となっているのである。さらにこのグンナルの妻ブリュンヒルドはアトリの妹となり、オッドルーンの姉ともなって、ブリュンヒルト伝説とブルグント伝説を結びつけるだけではなく、重要な役割を演じる予言者ともなっていて、いくつかの伝説を結びつける重要な人物となっている。このようにブリュンヒルト伝説は北欧では南のドイツにおいてよりももっと強く発展し、新たな伝説へと成長していったのである。

シグルズがキューキ王の娘グズルーンと結婚後、暗殺されたそののちの物語5)~6)では、巻末の図式Ⅲ(342頁)からも明らかなように、中心人物はグズルーンである。このグズルーンは下記のようにヴォルスング一族のシグニューと明白なパラレルを示していると言えよう。

シグニュー	グズルーン
1. シッゲイル王といやいや結婚	1. アトリ王といやいや結婚
2. シッゲイル王の招待 (兄弟たちに夫の悪企みを伝える)	2. アトリ王の招待 (兄弟たちに夫の悪企みを伝える)
3. 兄を二度助ける	3. 兄弟たちに和解を勧める
4. 復讐のため二人の子供を犠牲にする	4. 復讐のため二人の子供を犠牲にする
5. 復讐を遂げる (火を放つ→死ぬ)	5. 復讐を遂げる (火を放つ→生き延びる)

ただグズルーンの場合は、シグニューと違って、火を放って、その後海に身を投げて自殺をはかるものの、波に助けられて、生き延び、三度目の結婚をしている点で、パラレルをくずしているが、しかし、それによってグズルーンは今度はヴォルスング一族のシグムンドの三度に及ぶ結婚とパラレルを示す結果となっている(巻末図式Ⅱ、Ⅲ参照)。

そのほかにも父の仇討ち、シグニューの機転、嫉妬、姿交換等、いくつかのパラレルを指摘することができるが、しかし、全体の構成は稚拙な点を多く残しているのもまた事実である。シグルズは二度までブリュンヒルドと別れて旅立つことになっているが、その動機があいまいであり、このような点でも『ヴォルスング・サガ』はいかにもいくつかの歌謡をつなぎ合わせたといった感じである。しかし、『ヴォルスング・サガ』は、『歌謡エッダ』の知らないシグルズの父シグムンドの物語を伝えているのみならず、『歌謡エッダ』の欠落部分を補ってもあるし、さらに『歌謡エッダ』の諸歌謡の相互の不十分な連絡をなだらかにして筋をまとめているので、ニーベルンゲン伝説の北欧伝承についての概観を得ることができる点に大きな意義があると言えよう。とにかくこの『ヴォルスング・サガ』は、オーディンに結びつけられて北欧神話的傾向が強いとはいえ、古い伝説相を伝承するものであり、その点で『ニーベルンゲンの歌』の成立過程を考察する上でも重要な資料の一つとなっているのである。

Ⅲ. 『ティードレクス・サガ』

『ニーベルンゲンの歌』の成立過程を理解する上で重要な資料として『歌謡エッダ』及び『ヴォルスンガ・サガ』とともに是非とも考慮に入れられねばならないのが『ティードレクス・サガ』(Thidreks Saga af Bern)である。東ゴートのディートリッヒ大王(Dietrich von Bern)は、北欧ではティードレク(Thidrek)と呼ばれ、ジークフリートとともに古代ゲルマン時代の英雄として最も人々に愛された伝説的人物であるが、このディートリヒに関するドイツの歌謡や説話が、ヴェストファーレンの町ゾーストを經由し、ニーダーザクセンのハンザ商人たちを介してノルウェーに伝えられると、その地の物語詩人たち(Sagamänner)はこの英雄に興味を抱き、彼に関する説話を書写したりした。その後北欧の一物語詩人——それはアイスランド人であったと称されている——の手によって、それらの説話が1250年頃集録されて『ティードレクス・サガ』と命名された。この編纂は南方文化に関心を有するノルウェーの老ハーコン王(Hakon der Alte, 1217-63)の命に依るものと伝えられ、その後さらに二人の物語詩人によってベルゲンにおいて編集された。今日ストックホルムに蔵されている羊皮紙本はその原本である。

この説話集はもちろんティードレクを中心人物とするものであるが、ニーベルンゲン伝説も含んでいる。ニーベルンゲン伝説に関するものだけについて言うと、それは単なる複写ではない。上部ドイツもしくはラインの叙事詩、ヴェストファーレンの地方伝説、下部ドイツの歌謡から編集された限りにおいて、ドイツ的性格を示し、素材は古いものではなく、比較的新しい伝説相を含んでいる。この点で北欧第二次の伝承を探るための最も重要な資料を提供しているのである。以下、『ティードレクス・サガ』におけるニーベルンゲン伝説に関する部分(Niflunga Saga)をまとめて、『歌謡エッダ』及び『ヴォルスンガ・サガ』と異なる点を指摘し、新しい伝説相を探っておきたい³⁴⁾。

『ティードレクス・サガ』の梗概

1) ジグルトの出生

タルルンゲン国(Tarlungen)のジグムント王(Sigmund)はイスパニア(Hispania)のニードゥング王(Nidung)に使者を送り、彼の娘ジジベ(Sisibe)を妻にもらいたいと求婚した。ニードゥング王の返事は、見知らぬ国へ嫁がせるわけにはいかないので、国王自らが求婚に来るなら承諾するということであつた。そこでジグムント王は四百名の騎士を引き連れてニードゥング王のもとに出かける。華やかな歓迎を受け、約束通り求婚が承諾され、盛大な結婚式が行われた。宴が五日間続いたのち、ジグムント王は妻を連れて自分の国へと帰って行く。

帰国して数日後、ジグムント王は義弟のドラゾルフ王(Drasolf)から、援助を依頼さ

34) まとめるにあたっては Fine Erichsen : Die Geschichte Thidreks von Bern (Thule 22. Band) Jena 1924. を使用する。

れて、ただちに軍勢を集めて出かけて行った。留守中は二人の伯爵ハルトヴィーン(Hartwin)とヘルマン(Hermann)に国の保護を委ねていたが、ハルトヴィーンは不実にも、ある日ジジベ王妃に不義の求愛をした。執拗な求愛を王妃はもちろんのこと拒絶した。ハルトヴィーンはヘルマンにも援助をあおぎ、王妃を説き伏せようとしたが、王妃は堅く拒否した。その後も求愛が繰り返されたが、ハルトヴィーンの目的は達せられなかった。

やがてジグムント王が戦場で大手柄を立てて帰国するという知らせが入った。ハルトヴィーンとヘルマンは、留守中の不義を王妃が国王に全て話してしまうことを恐れて、策略を練る。二人は国王を出迎えに出かけて、先手を打つことにした。国王に会って、ハルトヴィーンはこう言う。「王妃様は召使いと関係を結び、召使いは毎晩王妃様の腕の中で眠りました。王妃様は今そのお子を宿しておられます」と。ヘルマンも、そのことは真実であると付け加えたので、国王は不貞の王妃をどうしたものかと、二人に相談するが、ハルトヴィーンの入知恵に従って、十年間もの間誰も足を踏み入れたことのないシュヴァーベンの森に連れて行って、彼女の舌を切り取って、彼女をそこで過ごさせることにした。

二人の伯爵は急いで城に戻って、国王がシュヴァーベンの森で待っている旨を王妃に伝えた。王妃はただちに支度をして、二人の伯爵とともに出かけるが、誰も足を踏み入れたことのない森の谷間に下りて行くと、だまされたことを知って、ひどく泣いた。ハルトヴィーンは国王に言いつけられた通り、王妃の舌を切り取ろうとすると、ヘルマンは何の罪もない王妃を助けようと言い出したので、二人は戦いとなった。この瞬間王妃は倒れて、一人の男の子を産み落とした。彼女は持って来たガラス容器の中に子供を入れ傍らに置いた。二人の伯爵は激しく武器を交わして戦ったが、ハルトヴィーンが王妃の横たわっているところに倒れたとき、その足がガラス容器にあたって、ガラス容器は川の中に行ってしまった。この瞬間ヘルマンは剣を振り上げてハルトヴィーンの首を刎ねた。王妃は子供の入れられた容器が川に流れたのを見て、気絶し、死んでしまった。

ヘルマンはジグムント王のもとに戻って虚偽を交えた報告をすると、国王は、命じた通りに実行しなかったヘルマンを咎め、怒って彼を追放の身にした。ヘルマンは馬に乗り去って行ったが、死罪を免れたことを喜んだ。一方、ジグムントは彼の国を支配したが、ジジベのことをいたく哀れんだ。

2)若きジグルトの冒険

さて、子供の入れられたガラス容器は川を下って海へ流れ出た。まもなく引き潮でもって陸に着いた。そこへ一匹の雌鹿が寄って来て、子供をその住み家へと連れて帰った。そこには二匹の子鹿がいたが、雌鹿はその子供にも同じように乳を飲ませたりした。子供は十二箇月間そこにとどまり大きくなった。

ある日、ミーメ(Hime)という鍛冶屋の男が炭焼きのため森に出かけた。ミーメが炭焼き窯のそばにいと、その雌鹿に育てられた子供が近寄って来た。ミーメはその子供を家に連れて帰って、養育することにした。子供はジグルト(Sigurd)と名づけられ、ミーメ

のもとで成長し、十二歳になった。ジグルトは乱暴で、ミーメの下僕をぶちのめしたので、誰もそれに耐えられなかった。ミーメはジグルトに鍛冶屋のまねをさせてみるが、何の役に立ちそうにも見えなかったので、ジグルトを殺すことを企んだ。ミーメにはレギン(Regin)という弟がいたが、その弟は強くはあったが、意地が悪く、魔法を使っていたので、竜になって森の中で過ごしていた。ミーメはその弟の竜のところへ出かけて、ジグルトを殺してくれと頼む。翌日、ミーメはジグルトに九日分の食糧を与えて炭焼きのため森へ行かせた。ジグルトは森へ行くと、仕事を済ませたあと、一度に九日分の食べ物、飲み物を平らげてしまった。そこへ大きな竜が現われたが、ジグルトは簡単に竜を打ち倒し、それを料理して食べることにした。斧で竜の肉を切り取って、鍋を火にかけた。やがて料理が煮えたか調べるために指を鍋の中に入れたところ、彼は火傷^{やけど}をして咄嗟に指を口の中に入れた。すると、彼は鳥の言葉がわかるようになり、二羽の鳥が枝でさえずっているのを聞いた。その鳥のうちの一只がジグルトにミーメの悪企みを教えた。さらにジグルトは竜の血を身体や手に塗りつけると、角質となったので、衣服まで脱いで身体の至るところに塗りつけた。しかし、肩の間だけは血がつかなかった。ジグルトがミーメのもとに帰ると、ミーメはジグルトの機嫌をなおそうとして、グラム(Gram)という剣などを与えるが、ジグルトは逆にその剣でもってミーメを試し斬りにした。

ジグルトはその後、ブリュンヒルト(Brühnild)の城を訪ねた。ブリュンヒルトは馬の飼育場を所有しており、名馬グラネ(Grane)がいるとミーメから聞いていたからである。城に着くと、城門が閉まっていたので破って入って行った。騎士たちと戦っているうちに、ブリュンヒルトがこの騒ぎを聞きつけて、ジグムントの息子ジグルトが来たことを悟り、彼を喜んで迎え入れた。しかし、彼はブリュンヒルトから何者であるかを尋ねられても、答えることができず、逆に彼女から自分の素性を教えてもらった。ブリュンヒルトは彼の願いに応じて名馬グラネを与えた。ジグルトはさらに旅を続けベルタンゲン国(Bertangen)のイーズンク王(Isung)のもとに行った。彼は十一人の息子を持っていて強力な戦士であった。ジグルトを歓迎し、彼を助言者かつ旗手にして長いこと自分のそばに置いたのである。

3)ジグルトの結婚(二組の結婚)

アルドリアーン(Aldrian)という名の国王がニフルンゲン^国~~国~~(Niflungen)を支配していた。国王にはグンナル(Gunnar)、ゲールノーツ(Gernoz)、ギーゼルヘル(Giselher)そしてグリームヒルト(Grimhild)の四人の子供がいたが、ヘグニ(Högni)はその四名とは異父兄弟であった³⁵⁾。アルドリアーンの死後、グンナルが国王となって国を支配していた。

35) この作品の中ではヘグニは、すなわち、ニフルンゲン国王アルドリアーンの妃と或る妖精との間に生まれた子供であるとされている。(Vgl. Fine Erichsen : a.a.O., S.223-4)

このグンナル王はあるときティードレク王の供をして評判高いベルタンゲン国のイーズンク王のところに出かけた。そこでティードレク王は、その国に滞在していたジグルトと決闘するが、結果はティードレク王の勝利に終わり、ジグルトはその後ティードレク王とともにグンナル王のニフルンゲン国へ行くことになる。ニフルンゲン国ではジグルトがグンナル王の妹グリームヒルトを妻にもらい、盛大な結婚式が行われる。宴は五日間続いたが、その席上で若きジグルトは義兄グンナルに向かって、ゼーガルト(Seegard)のブリュンヒルトに求婚するがよいと勧めた。ジグルトは道を心得ているので、手助けをするというのである。グンナル王は、ティードレク、ヘグニそして若きジグルトに伴われて、ブリュンヒルトの城へ出かけて行った。そこに着くと、ブリュンヒルトはティードレク王とグンナル王を丁重に出迎えたが、若きジグルトはとても悪くあしらった。彼が今や一人の妻を持っていることを彼女は知っていたからである。初めて会ったとき、ジグルトとブリュンヒルトは婚約を誓っていたのである³⁶⁾。ジグルトは彼女がグンナルと結婚することを勧めるが、彼女は誓いを破ったジグルトをなじる。そこへティードレク王とグンナルも話し合いに加わり、結局ブリュンヒルトはグンナルの妻になることを承諾した。

今や大きな饗宴が準備され、グンナル王はブリュンヒルトと結婚式を挙げた。その第一夜、グンナル王はブリュンヒルトの横に寝ようとしたところ、彼女は力づくでそれを許さなかった。二人は格闘したが、彼女は帯で彼の手と足を縛り上げ、彼を釘に吊してしまった。彼は朝までそこに吊されていた。朝になって解かれたが、このことを王と王妃は誰にも話さなかった。第二夜も第三夜も同様であった。そこでグンナル王は、兄弟の誓いを交わしていたジグルトに助けを求めるべく、彼に真実を話した。するとジグルトは答えて言う。「彼女は、処女である限りは、力で彼女に匹敵しうる男はいないような女性です。しかし、彼女は処女が奪われれば、普通の女性よりも強いということはありません。」グンナルは、ジグルトが誰にも漏らさぬことを信じて、彼に全てを委ねた。ジグルトも約束した。さて、夜になってグンナルがベットにつくことになったとき、彼は若きジグルトが彼の寝床につくよう手はずを整えた。ジグルトは頭に頭巾をかぶり、それからブリュンヒルトを押さえつけて、彼女の処女を奪ってしまった。朝になったとき、彼は彼女の手から指環を抜き取った。そのあと、彼はグンナルと衣服を交換したが、それに気づいた者は誰もいなかった。宴は五日間続いた。そこで客人たちは出発の準備をした。グンナル王はブリュンヒルトの町を治めるべく、一人の領主を任命し、自らは妻ブリュンヒルトとともにニフルンゲン国へと帰って行く。帰国すると、グンナルは義弟の若きジグルトと兄弟のヘグニ及びゲールノーツとともに平和に国を治めた。一方、ティードレク王は家来を連れて故国のベルン(Bern)へと帰って行った。

36) ところが、この作品で二人が初めて出会った場面では、婚約を誓い合ったという記述は欠落している。編者が書き落としたのであろうか。

4)ジグルトの最期

ニフルンゲン国のヴェルニツァ (Werniza) の町ではグンナル王がこうしてその弟ヘグニと若きジグルトとともに平和に君臨していたが、あるとき二人の王妃が口論をしてしまった。王妃ブリュンヒルトが広間に入って行ったとき、グリームヒルトが立ち上がって礼を行わなかったからである。なぜ立ち上がらないのかという質問に対して、グリームヒルトは答える。「まず第一にこの座席は私の母のものであり、ここにすわるのはあなたよりも私の方がふさわしい。」これに対してブリュンヒルトは、「たとえあなたの母がここにすわり、あなたの父がこの町を支配していたにせよ、現在は私がここにすわるべきです。あなたはジグルトのあとを追って森へ行って雌鹿の小道を捜し回るがふさわしいでしょう」と答える。グリームヒルトはついに「あなたの処女を奪ったのは誰ですか。あなたの最初の夫は誰ですか」と尋ねる。ブリュンヒルトが求婚の旅の次第を語ってグンナルがその人だと答えると、グリームヒルトは「あなたの処女を奪ったのは、若きジグルトです。証拠がこの黄金の指環です。これは彼があなたの処女を奪ったあと、指から抜き取って、私にくれたものです」と応戦する。ブリュンヒルトはその指環を見ると、自分のものであることを悟り、みんなのいる前でこのことを口論したのを後悔した。ブリュンヒルトは大変赤くなって、黙って一言も言わずに立ち上がって外へ出た。

ブリュンヒルトは、グンナル、ヘグニそしてゲールノーツの三人が狩りから戻って来るのを見かけ、彼らを出迎えて、彼女の嘆きを訴えた。ジグルトが誠実の誓いを破ったと聞かされたグンナルは、ジグルトの暗殺を企んで広間に入った。グンナルもヘグニもゲールノーツも、何も聞かなかったかのように振舞った。若きジグルトはこのとき狩りに出かけていて、まだ帰ってはいなかったが、二、三日後の夕方、戻って来た。

何日か経って一同がまた狩りに出かけることになった。グンナル王らはジグルトとともに馬に乗って森へ出かけて行き、疲れ果てるまで猛獣を追った。とても暑かったので、彼らはとても疲れていた。小川のところで、グンナルがかがんで水を飲み、その弟ヘグニも飲んだ。今や若きジグルトもやって来て、他の者と同様、身をかがめて水を飲んだ。そのときヘグニが立ち上がって彼の槍を両手でつかんでジグルトの両肩の間に突き刺すと、槍は彼の心臓を貫いて胸から出てきた。ジグルトは無念の思いを口に出しつつ、息絶えた。彼らはジグルトの死骸をかかえて城へと帰って行った。

ブリュンヒルトは胸壁に立っていると、グンナルとその弟ヘグニ、ゲールノーツが若きジグルトの遺体を運んで帰って来るのが見えたので、急いで彼らを出迎えに行き、死体をグリームヒルトのところに運ぶように命じた。死体がベットの中に投げ込まれると、グリームヒルトは目を覚まして、死んでいる夫を発見して嘆いて言った。「あなたの楯は傷ついておらず、兜もどこも壊れていない。あなたは殺害されたに違いない。誰が殺したかわかったら、きっと復讐をしてやろう」と。それに答えてヘグニは、ジグルトは殺されたのではなく、猪にやられたのです、と説明する。グリームヒルトは、その猪とやらはあなたヘグニ以外の何者でもない、と言ってひどく泣いた。彼らはそこを去って広間に入ったが、

気分は上々であり、ブリュンヒルトも同様、決して悲しむことはなかった。一方、グリームヒルトは家来を呼んで若きジグルトを埋葬させた。彼の死が人に知られると、誰もがジグルトほど立派な勇士はいないと、彼の死を悼んだ。

5) グリームヒルトの復讐

ズザート(Susat) のアッティラ王は、若きジグルトが死んでその妻グリームヒルトが未亡人であることを聞いて、彼女に求婚するため、彼の甥オージト(Osid)を使者としてニフルンゲン国へ遣わせた。アッティラ王の意向を聞き知ったグンナル王は、グリームヒルトのもとへ行き、事情を話すと、彼女は兄が了解するなら、喜んで同意する旨を伝え、婚約は何の問題もなくまとまった。

オージトより吉報を受け取ったアッティラ王は、ただちに花嫁グリームヒルトを迎えるべく、五百名の騎士と多くの小姓を連れて、ニフルンゲン国へと向かう。その頃アッティラ王のもとに滞在していたティードレク王も同行する。グンナル王は客人たちを丁重に出迎え、そこでは盛大な宴が催され、アッティラ王とグリームヒルトが結婚式を挙げた。宴が終わると、グンナル王は別れにあたってティードレク王に若きジグルトの馬グラニを贈り、辺境伯ロディンゲイル(Rodingeir)にはジグルトの剣グラムを与えた。アッティラ王一行はズザートへ帰り、国を護った。しかし、彼の妻グリームヒルトは毎日愛しい先の夫ジグルトのために涙を流していた。

七年が過ぎたとき、グリームヒルトはある夜アッティラ王に向かって兄弟たちを招待するよう説き伏せる。その際彼女は国王に、ジグルトの財宝のことを話し、その財宝がこの国へ来たら国王のものであることを約束した。アッティラ王は、黄金欲の強い人物であったので、ただちに彼らを招待することにし、ニフルンゲン国へ使者を送った。

使者たちはニフルンゲン国に到着すると、グンナル王に用向きを伝えた。グンナル王は兄弟ヘグニ、ゲールノーツ、ギーゼルヘルを呼んで相談する。ヘグニは抜け目ないグリームヒルトを警戒して招待に応ずることに反対するが、グンナル王はフン族の国へ行くことを主張し続ける。ヘグニは繰り返し諫止したが、自分の母のことを非難されたのがしゃくにさわり、招待の旅に応じる決心を明らかにした。

母后オーデ(Ode) は不吉な夢を見たことを語って、思いとどませようとするが、ヘグニは「旅立ちはずでに決定されたことなのだから、変えるわけにはいかない」と言って、夢など気にせずに旅立ちを主張する。母后はせめてギーゼルヘルだけでもとどまるようにと働きかけるが、ギーゼルヘルも出かける決意を示して、武器を持って来た。

グンナル王は千人の家来を集めて出発した。一行はライン河とドーナウ河が合流するところ³⁷⁾ へ来ると、船が見つからずに、その夜はテントを張ってそこにとどまることにな

37) このあとに続く「流れが合流するところでは川幅はとても広かった」という記述のために、編者の想像の中でライン河とドーナウ河を合流させたのであろうか。とにかく、この渡河の場面では広い河が考えられている。

った。ヘグニは、ほかの者たちが眠っている間、武器を手にとって河の上流へと出かけた。すると、水の乙女たちに出くわし、一族の運命を占わせたところ、乙女たちは「あなた方はこの河を渡ることにはできますが、戻って来ることはできません」と答えたので、ヘグニは剣で乙女たちを斬り殺してしまった。そのあとヘグニはさらに上流へのぼって渡し守を見つけてニフルンゲン族のところに戻って来た。ヘグニが戻ると、一族は大喜びで、その船に乗った。河の中央に来たとき、ヘグニは一族のフン族への旅の知らせが先行するのを防ぐためにその渡し守の首を刎ねた。「なぜそんな悪いことをするのか」というグンナルの質問に対して、ヘグニは「なぜこの旅で悪いことをするのを慎む必要がありますでしょうか。誰も戻って来れないことはわかっているのです」と答える。ヘグニが舵を取って、何とか対岸に渡り、何度か繰り返して全軍の渡河を終了させた。一族はさらに進んで行った。

一行は辺境伯ロディンゲイルの国バカラール(Bakalar)の国境へ来たとき、見張人エッケヴァルト(Eckeward)と出会い、その夜はロディンゲイルのところに宿を頼むことになった。ロディンゲイルはニフルンゲン族を丁重に出迎えた。一行は飲んで楽しく過ごした。ロディンゲイルは妻グデリンダ(Gudelinda)と相談して、娘を花嫁としてギーゼルヘルに与えることになった。妻は、しかし、気がかりであった。彼女はグリームヒルトが毎日彼女の先の夫ジグルトの死を嘆き悲しんでいることを知っていたからである。翌朝、一行が出かけるにあたって、ロディンゲイルは黄金の兜をグンナルに、新しい楯をゲールノーツに贈り、ギーゼルヘルには娘と名剣グラム——若きジグルトがかつて所有していた——を贈った。ヘグニには、何がよいかと尋ねたところ、ヘグニ自身が申し出たナウドゥング(Naudung)の楯を贈ることになったが、それを見て辺境伯夫人は彼女の兄ナウドゥングの死を思い出してひどく涙を流した。一行は旅立つが、ロディンゲイルも家来たちをひき連れて自ら彼らに伴ってついて行った。

一行はトルタ(Thorta)という名の町を経て、ついにアッティラ王の居城ズザートに着く。王妃グリームヒルトは一行が町に入ってくるのを見ると、若きジグルトの傷のことを思い出して、ひどく泣いたが、ニフルンゲン族を出迎え、挨拶をした。アッティラ王も義兄弟たちを丁重に出迎えた。グリームヒルトは彼らが上着の下に鎧を身に着けているのを見て取った。ヘグニはグリームヒルトを見ると、フォルケール(Folkher)とともにすぐに兜をかぶり、しっかりと結びつけた。「ジグルトが所有していたニフルンゲンの財宝は持ってきたか」というグリームヒルトの質問に対して、ヘグニは「財宝は何一つ持参していないが、楯と兜と剣は持ってきた」と答えて、戦う態度を見せる。グリームヒルトはギーゼルヘルとグンナルの間にすわって、ジグルトのことを嘆くと、ヘグニがまたもや口を出して、「ジグルトの話はやめよう。傷はもう治りはしないのだ」と言い返す。グリームヒルトは立ち上がって去って行く。ニフルンゲン族はその夜は酒を飲んで楽しく過ごし、ぐっすりと落ちついて眠ったが、翌朝ヘグニはティードレクから、「フン族の国では注意するがよい。グリームヒルトは毎日若きジグルトのことを嘆いているから」という警告を受けた。

ニフルンゲン族は皆起きると、町の中を行進した。その華やかな行列を見ようとして、

多くの人が外へ出て来た。なかでも最も人々の興味を引いたのは、有名なヘグニであった。彼は背丈が高く肩幅も広く、長いくすんだ灰色の顔をしていて、片目しかなかったが、それは鋭く輝いていた。アッティラ王はその日、庭園で宴を催すことにして、準備をさせた。その間グリーンヒルトはまずティードレク王、次にブロドリーン(Blodlin)、そして最後にはアッティラ王のところに行って、復讐の援助を依頼するが、いずれも拒否された。宴の準備ができると、アッティラ王は客人たちを庭園へと招く。ニフルンゲン族がそこへ入ると、王妃が武器を持って歩かぬように言う。ヘグニは、フン族の国にいる限り、武器はわが身から放すわけにはゆかないと言って反抗する。彼らは武装したまま庭園の中に入った。彼らはさらに入口に見張人として小姓たちを置いた。ヘグニとゲールノーツがそれを指図したのである。

今やグリーンヒルトはイールンク(Irung)のところに行き、復讐を依頼すると、イールンクは王妃のためにそれを承諾し、部下に武装を命じる。王妃はまず外のニフルンゲン族が庭園に入って来られないよう、また中にいるニフルンゲン族が生きて外に出られないようにと、小姓たちを打ち殺させた。王妃はそれから宴の行われている庭園に入って行き、自分の席についた。すると彼女の息子アルドリアーンが跳んで来て彼女に口づけをする。王妃は息子に向かって、勇気があるなら、ヘグニのところに行って、こぶしで彼の頬をぶってみろ、と唆す。子供は言われた通り実行した。それは子供とは思えないほどの強力な一撃だった。ヘグニは左手で子供の髪をつかんで、「母の仕業だな」と言いながら、右手で剣を握り、子供の頭を斬り落とし、グリーンヒルトの胸の中に投げ込む。ヘグニは子供の保育官をも斬り殺す。アッティラ王はこれを見てフン族の勇士に武装を命じて、ニフルンゲン族と戦うこととなった。ティードレクは自分の館に戻って、両者が戦いとなったことを嘆いた。この日はこうして激しい戦いが繰り広げられた。戦いは庭園の中でも、またその外でも行われた。アッティラの甥オージトはグンナルと敵意を見せ合って長い間戦い、ついにグンナルを捕えて、国王と王妃のもとに連れて来た。アッティラ王は王妃の助言でグンナルを蛇の牢へ閉じ込めさせた。グンナルはそこで命を落としたのである。

グンナルが捕えられたことを聞いたヘグニとゲールノーツは、たけり狂ったようにフン族と戦う。ギーゼルヘルも名剣グラムで多くの兵を殺す。彼らの攻撃はとても激しかったので、フン族は逃げたり殺されたりした。ニフルンゲン族は庭園からすっかり外へ出ると、大きな^{とき}関の声を上げ、逃げて行ったフン族を臆病な犬だと罵った。ニフルンゲン族は町の中を駆けて進んだが、すでに暗い夜であった。アッティラ王は館を閉じたのでニフルンゲン族は何もできなかった。

夜が明けて再び激戦となった。ゲールノーツはブロドリーンと対戦し、激しい戦いのあと相手の頭を斬り落とす。このことを聞いた辺境伯ロディンゲイルは怒って部下とともにニフルンゲン族を討つため、戦いに加わった。ヘグニはフン族の真っ只中で勇敢に戦ったあと、客殿に入って戸口を防衛する。グリーンヒルトはヘグニを見て、客殿に火を放たせ、イールンクにヘグニの首を討ち落としてくるようにと励ます。イールンクは燃えている客

殿の中に突入し、ヘグニの太ももに傷を負わせて戻って来る。イールクは再度王妃の励ましで突進して行って、ヘグニと戦うが、今度はヘグニが槍をイールクの胸に突き刺し、イールクは命を落としてしまった。

次いでロディンゲイルも鋭くニフルンゲン族に攻撃をしかけた。若きギーゼルヘルが彼と対戦した。ギーゼルヘルの剣グラムは大変切れ味がよかったので、ロディンゲイルは大きな傷を受けて倒れて死んでしまった。ロディンゲイルはかつて自分がギーゼルヘルに贈ったその剣で命を失ったのである。

ロディンゲイルが死んだことを知ったティードレクは、これまで中立の態度を取っていたが、もはやじっとすわったままではできなくなり、怒ってニフルンゲン族に攻撃をしかけ始める。さすがのヘグニも退かざるをえず、ゲールノーツとギーゼルヘルのいる広間に逃げ込む。ティードレク王とヒルディブランド(Hildibrand)があとを追う。ティードレク王はその中に勇敢に攻め入り、戸口のところでフォルケールと渡り合い、兜をめがけて最初の一撃を加えると、頭は斬り落とされる。ヒルディブランドはゲールノーツに攻撃をしかけ、剣で斬り込むと、ゲールノーツは致命傷を受けて倒れ死んでしまう。今やこの客殿ではティードレクとヘグニが対決し、ほかのところでヒルディブランドとギーゼルヘルが対決しているだけであった。そこへアッティラ王が現われ、ヘグニは、ジグルトの死んだ当時はまだ五歳であったギーゼルヘルの命を請うが、しかし、ギーゼルヘルは兄弟たちよりも生き延びることを潔しとせず、激しくヒルディブランドに攻撃をしかけ、ついに倒されてしまう。今やティードレク王とヘグニは長い間激しく戦い合ったが、いずれが勝つともほとんどわからなかった。戦いは長く続いたので、二人は疲れけがをしていた。二人はお互い罵り合うと、ティードレク王は怒りのあまり荒々しくなったため、ヘグニの鎧は大変熱くなり、火傷をしてヘグニはついに捕えられてしまった。

グリームヒルトは燃えている家から大きな燃え木を持ってきて、彼女の兄ゲールノーツとギーゼルヘルの口の中へその薪を入れて生死を確かめていた。ティードレク王はそのグリームヒルトのむごい行動を見て、アッティラ王に向かって嘆いた。アッティラ王も「彼女は悪魔だ。彼女を殺すがいい」と言ったので、ティードレク王はグリームヒルトに跳びかかって、彼女を断ち斬った。

ティードレク王は深傷を負ったヘグニを看護させたが、ヘグニの寿命は長くはなかった。ヘグニはティードレク王に、夜一緒に過ごすことのできる女性を与えてほしいと願い出ると、それが実現された。朝、ヘグニはこの女性に言う。「時が経てば、お前は私の息子を産むであろう。子供にはアルドリアーンと名づけてほしい。ここにある鍵をお前が保管し、子供が大きくなったら、それをその子に与えよ。この鍵はニフルンゲン財宝が隠されている地下室の鍵だ。」こう言ってヘグニは死んでしまった。後日譚によれば、ヘグニとこの女性との間に出来た子供アルドリアーンは、のちにアッティラ王に対して復讐を遂げ、自らニフルンゲン国の王となるのであるが、とにかくこうしてアッティラ王、ティードレク、ヒルディブランドを残してニフルンゲン族はことごとく滅びて行ったのである。

以上、『ティードレクス・サガ』におけるニーベルンゲン伝説に関する部分を五つに分けてまとめてきたが、1)はジグルトが誕生するまでの両親の物語であり、2)～4)はそのジグルトに関して冒険、結婚、暗殺等を取り扱っており、ジグルト暗殺後の未亡人グリームヒルトを中心人物としてその復讐等を語ったものが5)である。それぞれは『ヴォルスンガ・サガ』の1)、2)～4)、5)に相当するが、両者の間にはかなりの相違があることが明らかである。ジグルト（シグルズ）とグリームヒルト（グズルーン）を中心にして『ヴォルスンガ・サガ』との比較において『ティードレクス・サガ』の特徴を簡単にまとめると次のようになる。

まず1)ではジグルトの両親のことが語られているが、ここではジグルトの父ジグムント王は、『ヴォルスンガ・サガ』のシグムンド王のように北欧の主神オーディンには全く結びつけられてはいない。従って、オーディンの意志によって戦死することもない。彼の国タルルンゲンを支配し続けるのである。従って、のちに父の仇討ちをするという筋がなくなっている。ここにおいて死ぬこととなるのは父ではなく、逆にその母ジジベの方である。ジグムント王の子供を宿していたジジベは、二人の伯爵の奸計にあつてシュヴァーベンの森の中へ連れ出され、そこで一人の息子を産み落とし、その子の容器が川に落ちたのを見て、気絶して死んでしまうのである。

一方、2)で語られるその子供ジグルトについても、子供は雌鹿に救われて、鹿の子供たちと一緒に育てられ、その後森の中で鍛冶屋ミーメに拾われ、ジグルトと名づけられて十二歳になるまで、そこで養育されるなど、『ヴォルスンガ・サガ』には全く見られない別の伝承が語られている。十分に成長したジグルトがその後悪竜を退治し、鳥の言葉がわかるようになり、ブリュンヒルトを訪ねて出かけてゆくことは、なるほど『ヴォルスンガ・サガ』にも見いだされる筋であるが、しかし、その行動への動機は異なっている。すなわち、悪竜（レギン）を退治する結果となったのは、『ヴォルスンガ・サガ』のように、財宝獲得をもくろむ養父（レギン）に悪竜退治を唆されたのではなく、逆にミーメが乱暴なジグルトを悪竜に殺してもらおうと企んだことによるのであり、またジグルトがブリュンヒルトを訪ねて出かけて行ったのも、『ヴォルスンガ・サガ』においてのように鳥の言葉に従ったのではなく、ミーメに名馬がいることを教わっていたからである。

3)で語られる二組の結婚についても、『ヴォルスンガ・サガ』ではグーキ王の妃グリームヒルトによって忘れ薬を飲まされてシグルズがグズルーンと結婚するのに対して、ここではそのようなことは語られていない。もう一つのグンナルの結婚についても、『ヴォルスンガ・サガ』では邪し^よまな心の母グリームヒルトが息子グンナルにブリュンヒルトとの結婚を勧めるのに対して、ここにおいてはジグルト自身が義兄グンナルにブリュンヒルトとの結婚を勧めるのである。その結婚話を取り決める際にも『ヴォルスンガ・サガ』のようにシグルズがグンナルと姿を交換して炎を越えるといった行動はなくなっている。ただ姿交換のモチーフはここにも伝承されていて、グンナルから事情を聞き知ったジグルトは頭巾をつけてグンナルの代わりにブリュンヒルトの床に入るのである。『ヴォルスンガ

・サガ』ではシグルズがブリュンヒルドとの間に抜き身の剣グラムをおいて花嫁の貞操を大切にしたいのに対して、ここではジグルトはグンテルの許しを得てブリュンヒルトの処女を奪ってしまうのである。

従って、4)で語られる両王妃口論——『ヴォルスンガ・サガ』ではライン河の中、『ティードレクス・サガ』では広間で展開される——のあとのジグルト暗殺にも違いが生じてくる。『ヴォルスンガ・サガ』では、すなわち、ブリュンヒルドから恥辱を聞き知ったのをきっかけとして、グンナルが黄金に目をつけて、ヘグニの忠告にもかかわらず、グットルムを唆してジグルズを暗殺してしまうのに対して、『ティードレクス・サガ』では結局ジグルトが秘密を暴露して誠実の誓いを破ったという理由で、全員が合意して、彼を暗殺してしまうのである。暗殺の場所も『ヴォルスンガ・サガ』のベットから『ティードレクス・サガ』では森の中へと変わっている。しかもグットルムではなく、ヘグニが暗殺を実行するのである。このように見てくると、『ティードレクス・サガ』の方が『ニーベルンゲンの歌』のあらすじにより近いものであることが明らかであろう。

このことは、5)で語られるグリームヒルトの復讐の物語になるとさらに一層明らかとなる。『ヴォルスンガ・サガ』では母グリームヒルトの勧めによりグズルーンはいいやアトリと再婚するのに対して、『ティードレクス・サガ』では『ニーベルンゲンの歌』と同じようにアッティラの求婚（使者オージト）を受けて、グリームヒルトはアッティラと再婚するのである。しかし、いずれの場合にも夫婦生活は睦まじいものではなかった。

数年後グンナル一族を招待する際にも、『ヴォルスンガ・サガ』ではアトリ王がシグルズの黄金に目をつけて、グンナル一族を招待すべく、使者ヴィングを遣わすが、『ティードレクス・サガ』ではグリームヒルトが先の夫シグルトの黄金のことをアッティラにほめかしながら使者を遣わせる。従って、一族がフン族の国に到着した際、黄金を要求するのも前者ではアトリ王であり、後者ではグリームヒルトである。このように両者は役割が逆になっていて、後者の方が『ニーベルンゲンの歌』に近いことが明らかである。そのあと両民族が戦うことになったときも同様である。『ヴォルスンガ・サガ』のグズルーンは、すなわち、両民族の和解を試みているのに対して、『ティードレクス・サガ』のグリームヒルトは逆に戦いの激化を煽っており、戦いを引き起こすために自らの息子を宴の席に連れ出させるのである。両者の決定的な相違は、結局のところ、『ヴォルスンガ・サガ』のグズルーンはそのあと殺害される兄弟たちのために夫のアトリに復讐をするのに対して、『ティードレクス・サガ』のグリームヒルトは先の夫ジグルトのために兄弟たちに復讐を企ててゆくという点であろう。この点でも後者の方が『ニーベルンゲンの歌』に近いものであることが明らかである。

このように見てくると、『ティードレクス・サガ』は『ニーベルンゲンの歌』に近い比較的新しいニーベルンゲン伝説を含んでいることが理解できよう。渡河の場面や辺境伯口

ッディンゲイルのもてなしの場面ばかりではなく、両民族の戦いの描写³⁸⁾ に関しても、『ティードレクス・サガ』は『ニーベルンゲンの歌』と同じような経過を辿っていて、より詳しく語られてもいる。ここから両者は同類の素材を用いたであろうことが推定されるが、しかし、もちろん両者には相違点もある。最も著しい相違点は結末部分であろう。ティードレク（ディエトリヒ）がヘグニ（ハゲネ）を捕えて王妃の前に連れてゆく点は両者に共通しているが、しかし、『ティードレクス・サガ』ではそのあとディートリヒは深傷を負ったヘグニのために看護をさせることになっていて、グリームヒルトはヘグニを殺さないことになっている。ヘグニは戦いで受けた深傷のためにやがて死ぬこととなるのである。ヘグニを自らの手で殺さない代わりにグリームヒルトは倒れているゲールノーツとギーゼルヘルの口に燃えている薪を入れて、生死を確かめることになっていて、その残虐な行為のためにティードレクによって成敗されるのである。武術の師匠ヒルデブラントによって成敗される『ニーベルンゲンの歌』とは異なった結末であるが、どちらかと言えば、『ティードレクス・サガ』におけるグリームヒルトの方がより粗野な面を残していると言えよう。『ティードレクス・サガ』はとにかくニーベルンゲン伝説の新しい伝説相を伝えていることは明らかであり、より古い伝説相を伝えていて北歐神話化されていた『ヴォルスンガ・サガ』とは反対に、この『ティードレクス・サガ』は低ドイツ的性格の新しい伝説相を伝えるものなのである。

38) ここで『ティードレクス・サガ』における第二日目の戦いの場面を整理しておくと、次の通りとなろう。先に記した戦士がニフルンゲン族であり、後の戦士がフン族である。なお、それぞれの戦いで敗れた方に下線部を施しておく。

- ①まずゲールノーツがブロードリーを倒す。
- ②ヘグニが二度にわたる戦いでイーレンクを倒す。
- ③ギーゼルヘルがロディンゲイルを倒す。
- ④フォルケールはティードレクによって倒される。
- ⑤ゲールノーツはヒルディブラントによって倒される。
- ⑥さらにギーゼルヘルもヒルディブラントによって倒される。
- ⑦最後にヘグニはティードレクによって捕えられて看護を受けるが、深傷のために翌日死ぬ。

なお、グンナルは戦いの最初にオージトによって捕えられ、蛇牢にて死ぬことになっている。またクリエムヒルトは兄弟たちの口に燃え木を入れて生死を確かめるが、この無残な行為のためにディートリヒによって成敗される。

五、六世紀のライン河畔フランケン領土を発祥地として生じたニーベルンゲン伝説は、以上述べてきたように、遅くとも九世紀の初めにはスカンディナヴィアへ伝承され、さらにハラルド美髪王による統一後にはアイスランドへも伝承されて、それ以来およそ四百年間もの長きにわたって、さまざまに改作されていったのであり、それらを今に伝えるものが十三世紀に収録された『歌謡エッダ』である。この『歌謡エッダ』の特徴は、何よりもまず北欧の詩人たちがそれらの歌謡にオーディンを登場させて北欧神話的傾向を強めている点であろう。ヘルギやシンフィエトリの物語ばかりではなく、シグルズの冒険の中にもオーディンがはまり込んでいるのであり、父の仇討ちを果たすシグルズは、今やオーディンの英雄なのである。そしてそのシグルズによって目覚めさせられた乙女ブリュンヒルドはワルキューレとなっていて、彼女の魔法の眠りは、いくつかの歌謡から明らかなように、オーディンによって罰として与えられたものである。しかもこのブリュンヒルドという人物には北欧の詩人たちは特別に深い関心を見だし、彼女に予言者として重要な役割を与えているばかりか、かつてはあまり目立たなかった彼女の嫉妬にアクセントをつけている。殊に『シグルトの短い歌』においてはブリュンヒルドのかなえられなかった恋、嫉妬、復讐、シグルズと同じ火葬堆の上にあがって死にたいという希望が述べられていて、ブリュンヒルドの内面的な歌謡となっている。またグンナルの妻ブリュンヒルドはアトリの妹になり、第二の妹オッドルーンも創作され、ブリュンヒルト伝説とブルグント伝説を結びつけるだけでなく、いくつかの伝説を結びつける人物ともなっている。このようにブリュンヒルドはドイツにおいてよりも北欧においてより重要となっているのであり、ブリュンヒルト伝説は北欧においては南のドイツにおいてよりももっと強く発展し、新たな伝説へと成長していったと言える。

このような北欧人の詩作による「エッダ」は頭韻の歌謡という芸術形式によって実行されたが、十二世紀からは「サガ」という芸術形式で実行され、まとまりのなかったニーベルンゲン伝説はここに初めて一つにまとめられたのである。十三世紀に収録された『ヴォルスンガ・サガ』が、すなわち、それであるが、この作品においては、上で見てきたように、オーディンが一貫して全体の筋の展開に関与していて、オーディンによって北欧神話に結びつけられ、一つのあらすじにまとめられているところがその特質である。さらにこの作品のもう一つの特徴は、『歌謡エッダ』よりもブリュンヒルドの内面化がより深いことである。すなわち、シグルズは救い出したブリュンヒルドに誠実の誓いを誓うが、その後魔法に通じたグンナルの母によって忘れ薬を飲まされ、その結果彼はグズルーンに求婚し、彼の求婚者ブリュンヒルドはグンナルに譲り渡されるのである。「前もっての婚約」と誠実の誓いをもったこの伝説はアイスランドにおいては支配的となったのであり、これによってブリュンヒルトの嫉妬と憎しみと愛とが一層内面化される結果となったのである。しかし、二度までブリュンヒルドと別れて、シグルズはなぜ旅立つのか、はっきりしていない。いかにもいくつかの歌謡をつなげたという感じである。しかし、この作品は、『歌

謡エッダ』には遺されていない部分をも保存しているという点において大きな意義があると言えよう。

このように第一次伝承の『歌謡エッダ』と『ヴォルスンガ・サガ』は古い伝説相を伝えていて北欧神話化されているのに対して、第二次伝承の『ティードレクス・サガ』は比較的新しい伝説相を伝えていて、低ドイツ的性格を如実に示している。ジグムントとその子ジグルトもここではオーディンに結びつけられることはない。ジグルトがのちに会うこととなるブリュンヒルトもここではオーディンによって罰せられた炎の中の女性、ヴァルキューレでもなく、またアッティラに結びつけられてもいない。ブリュンヒルトがここで登場しているのは、グリームヒルトとの口論を展開し、ジグルト暗殺のきっかけを作るためであり、『ヴォルスンガ・サガ』においてのように、ジグルトの死後自刃することもない。『ティードレクス・サガ』の編者がブリュンヒルトにそれほどの関心を示してはいないことが明らかである。ブリュンヒルトに代わって逆に多大の関心を集めているのがグリームヒルトである。『ヴォルスンガ・サガ』においてグズルーンはアトリに復讐をするのに対して、『ティードレクス・サガ』ではグリームヒルトはジグルトの暗殺者である兄弟たちに復讐を遂げるのである。そのためジグルト暗殺者のヘグニも注目を浴びることとなる。『ヴォルスンガ・サガ』においては諫止するだけの役割を演じていたヘグニは、上で見てきたように、『ティードレクス・サガ』ではジグルトの殺害者となっているのであり、グリームヒルトの招待に応じてアッティラの国へ出かける旅の途上ばかりではなく、アッティラの居城での戦いにおいても、またこの戦いの結末においても疑いもなく重要な主人公なのである。

このように『ティードレクス・サガ』ではブリュンヒルトに代わってグリームヒルトが表面に出てきて、その結果ヘグニの姿が次第に重要人物となり、グンナルの影が薄くなっていることが明らかであるが、このクリエムヒルトの姿が目立ってくるにつれて、ブリュンヒルト伝説とブルグント伝説は次第に内面的に結びつくような観を呈しているのである。しかし、ブリュンヒルト伝説とブルグント伝説の二つは、ここにおいてはゆるく結びついていただけであり、それらは本質的には二つに分かれたままであったと言わなければならない。その二つの伝説を初めて内面的にも外面的にも一つに結びつけて叙事詩へと完成させたのが十三世紀初頭のドーナウ地方のニーベルンゲンの詩人なのである。

第二章 『ニーベルンゲンの歌』の成立

—— ホイスラーの発展段階説 ——

前章では、北歐におけるニーベルンゲン伝説を考察してきたが、それでは一体ドイツでは『ニーベルンゲンの歌』はどのような変遷を辿り成立したのであろうか。原型が遺されていないドイツにおいては北歐への伝承等から推測するしか方法はないが、この叙事詩の成立についての研究は、結局のところラッハマンの歌謡理論にまで溯らねばならないであろう。『ニーベルンゲンの歌』を二十個の歌謡に還元しようとするラッハマンの歌謡理論は、序章でも述べたように、歌謡と叙事詩の本質的相違から否定されざるを得ないが、しかし、それは必ずしも無稽のものではなかった。『ニーベルンゲンの歌』がさまざまな伝説相を呈しつつ生成発達してゆく過程において、多数の歌謡が存在していたことは、前章で述べたような『歌謡エッダ』への伝承などからも推測されるように、明白な事実だからである。ラッハマンがただ『ニーベルンゲンの歌』の直接素材として二十の歌謡を指摘したという点が受け容れられ得ないだけのことである。それを修正し、『ニーベルンゲンの歌』の直接素材として叙事詩が存在していたことを主張してその生成過程に画期的な進展をもたらしたのが、アンドレーアス・ホイスラーの研究である。ホイスラーの研究については序章でも若干触れておいたが、ホイスラーにしてもなるほど後編の素材は叙事詩——いわゆる『古きニーベルンゲン災厄』(Die ältere Nibelungenot)——であったと主張するにしても、しかし、前編の直接素材はやはり歌謡であったとしている。前編の素材が歌謡であったか叙事詩であったかについては、さまざまに論じられている¹⁾が、それは別問題として残しておくにしても、とにかく『ニーベルンゲンの歌』には二つの伝説が根底にあったことだけは明らかである。それをホイスラーはブリュンヒルト伝説とブルグント伝説に分けて、『ニーベルンゲンの歌』の成立過程を明らかにしている²⁾。『ニーベルンゲンの歌』の内容分析をめざす我々にとって、このホイスラーの発展段階説を顧みて、この叙事詩の生成過程を正しく把握しておく必要があることは言うまでもない。以下、ホイスラーの発展段階説を辿りつつ、とりわけ登場人物たちの特徴に関して詳しく考察し整理しておくことによって、本研究第Ⅱ部における構造分析の前提ともなるべき土台をここで築き上げておくことにしよう³⁾。

1) 序章15-6頁参照のこと。

2) 巻末 340頁に図式Ⅰとして掲げた系図参照のこと。

3) まとめるにあたっては、Andreas Heusler: Nibelungensage und Nibelungenlied.

Darmstadt 1973. を使用する。前史に関しての固有名詞の表記はだいたいにおいてホイスラーに従うが、『ニーベルンゲンの歌』における固有名詞については中世ドイツ語に従って表記する。

I. ブリュンヒルト伝説

1. 第一段階 —— Fränkisches Brünhildenlied ——

ブリュンヒルト伝説は五、六世紀のライン・フランケンで初めて生まれたと推定されるが、ドイツには遺っていない。しかし、その伝説はやがてノルウェーに移植され、さらにはその植民地アイスランドにも達し、幸い『歌謡エッダ』の形で伝承されているので、その最古の姿態を探り出すことができる。もちろん、北欧の伝承をそのまま受け入れてはならないが、しかし、北欧の伝承を注意深く慎重に考えることでもって、ライン・フランケンの原型を次のように探り出すことができるのである。

ブリュンヒルト伝説の原型

ライン河畔のウォルムスにブルグントの国王たち、すなわち、ギービツヒェの息子たちであるグンテル、ギーゼルヘルそしてゴトマールが支配していた。彼らの妹は美しいグリーンヒルトで、彼らの武術の師匠が残忍なハーゲンであった。

ある日、彼らの宮廷に背丈の高い一人の異国の英雄が、装いも見事に逞しい馬に乗ってやって来た。それはニーダーラインのジグムント王の息子ジークフリートであった。孤児として彼は荒野の中で、ある妖精の鍛冶屋のもとで成長し、恐ろしい竜を退治し、その溶けた角質の皮膚で不死身となり、両肩の間の一箇所を除けば、傷つけられえないのである。彼はまた、父の遺産をめぐる争いをしているアルプの領主たち、すなわち、ニーベルンゲン族を打ち殺し、彼らの黄金であるニーベルンゲンの財宝を奪い取った。その財宝を彼は馬に積んでいるのである。

ギービツヒェ一族はその名高い勇士を丁重に迎え入れた。勇士は彼らと痛飲し、彼らとともに戦いにも出かけた。彼らは勇士と血を混ぜて飲み、兄弟の誓いを立て、勇士を共同支配者とした。彼らはさらに勇士にグリーンヒルトを妻に与えた。こうして彼らは生活を楽しみ、ジークフリートはギービツヒェ宮廷の支えであり、輝きであった。

あるとき、勇敢な乙女ブリュンヒルトの噂が伝わってきた。彼女ははるか北のある島に君臨していた。彼女の黄金に輝く城のまわりには不思議な炎の壁があった。その壁を越えて彼女のもとにやって来る勇士だけに彼女は妻として従う誓いを立てていた。グンテルはこの乙女に求婚しようと望んだ。そこで、道を知り尽くしていたジークフリートが彼を案内し、援助することとなったのである。

彼らは四人でライン河を下って海に出た。ブリュンヒルトの炎の壁の前に立ったとき、グンテルは馬に拍車をかけて炎に向かって行ったが、馬は後じさりする。そこでジークフリートは自分の馬を彼に与えたが、この馬でもグンテルはその場から進むことはできない。今やジークフリートは彼と姿を替え、自分の馬に乗り、炎に向かって疾駆する。すると大地は揺れ、炎は天に向かって荒れ狂い、沈み、その勝利者の前で消えた。

ジークフリートはブリュンヒルトのもとに入って行き、自らをギービツヒェの息子グンテルと名乗り、彼女を妻にしたいと望んだ。彼女はためらった。なぜなら、その炎の試練

に打ち勝つ者があるなら、それはただ一人、竜を殺したジークフリート以外にはないと彼女は思っていたからである。彼女は言う。「あなたはあらゆる者の中でも第一の者でなければ、私に求婚してはいけません。しばしば私は剣を抜いてきましたが、今でも私の心は戦いに向けられています。」しかし、彼が誓いを催促すると、彼女は折れて、自分の夫として彼に挨拶をした。

三夜ジークフリートはグンテルの姿でブリュンヒルトのそばに寝たが、抜き身の剣を二人の間に置いていた。初夜はそうにする風習であると彼は説明した。

四日目の朝、彼は彼女の手から指環を抜き取った。それから彼は連れのもとに戻り、再びグンテルと姿を替えた。ブリュンヒルトを連れて彼らはウォルムスに帰り、そこでグンテルの婚礼の酒を飲んだ。ジークフリートはしかし指環を自分の妻に与えて、出来事を彼女に全て話しておいたのである。

彼らは平和のうちに年月を過ごした。あるとき、ブリュンヒルトとグリームヒルトがライン河で水浴びをしていたとき、ブリュンヒルトが河の上流に行った。「私は気高い女性であり、私の夫はあらゆる勇士の中でも第一の者である。すなわち、グンテルは炎を跳び越えたが、ジークフリートは森の猛獣と一緒に生活し、鍛冶屋の下僕であった」と彼女は言うのである。グリームヒルトは彼女の思い上がりをあざけてこう言う。「私の夫は竜を退治し、妖精の財宝を獲得しました。そして炎を跳び越えて、あなたのこの指環を奪ったのも私の夫です。あなたがその側女^{そばめ}になったその男をあなたはどのようにして罵ることができるのですか。」

するとブリュンヒルトは蒼ざめ、家に帰り、その晩は一言も口にしなかった。グンテルが二人きりになって彼女に尋ねると、彼女は答える。「私はもうこれ以上生きようとは思いません。なぜなら、あなたがジークフリートに私の寝床を共にさせたとき、ジークフリートは私とあなたを欺いたからです。私は一つの館に二人の夫を持つつもりはありません。ジークフリートが死ぬか、それともあなたか私かのいずれかが死ななければなりません。」グンテルは驚いた。彼はその訴えを信じたが、黙っていた方がよいと思った。彼女は答える。「グリームヒルトは全てのことを知っていて私を辱しめます。あなたが私を失いたくないなら、あなたはあの男を片づけなければなりません。国なき騎士としてこの宮廷に来ていながら、今ではあなた方を陰に追いやっているあの男を。彼とともにその幼い子供もこの世から消えてゆかなければなりません。」

グンテルは弟たちを訪れて、ジークフリートは兄弟の誓いを破り、自らの命を失うこととなったことを告げた。ギーゼルヘルは忠告^{ちくこ}してこう言う。「一人の女性にけしかけられてはなりません。ブリュンヒルトは妹を妬^{ねた}んでいるのです。我々がジークフリートをかかえこんでいる限り、我々に匹敵する一族がどこにいるか私は知りません。」そこでハーゲンが言葉をはさんだ。国王は私生児を養育するつもりなのか、と。ジークフリートがその息子とともに亡き者となれば、自分たちの上に立つ英雄はもはやいない、そのときは自分たちこそニーベルンゲン財宝の持ち主なのだ、と。

そこで兄弟たちは同意した。ハーゲンはその行為を自分が引き受けることを約束した。彼は誓いを交わしてはいなかったのである。そして彼はジークフリートの背中の中の傷つく箇所を知っていたのである。

ハーゲンとグンテルは狩りの準備をした。五人全員で逞しい猪を追いかけた。その猪に追いつき殺したのはジークフリートであった。それから彼らは喉がかわき、ある小川にやって来た。そしてジークフリートは飲むために腹這いとなった。そのときハーゲンが槍を両肩の間に突き刺すと、槍は心臓を貫いた。ジークフリートは死につつ卑怯な裏切り者たちを呪った。彼は妻と防ぐすべも知らない子供のことを思って嘆いた。殺害者たちは歓声を上げて喜んだ。午前中の間彼らは猪を追ったが、今やより強い獣を射止めたのである。

彼らはその遺体を積み込み、夜になって帰宅した。彼らはグリームヒルトの部屋をこじあけ、死体を寝ている者のベッドの中に投げ込んだ。彼女がその血で目ざめたとき、彼女は叫び声を上げたが、耳をつんざくような声だったので、棚の上の水差しがガチャガチャ鳴り、宮廷のガチョウが金切り声を上げたほどであった。広間にいたブリュンヒルトはその叫び声を聞いた。そこで彼女は、最後に、館全体が鳴り響くほどに、大きな声で笑った。「あっぱれ、皆様、今や誰もあなた方の支配を否定なさいますまい！」一方、グリームヒルトは、兜と楯が打ち砕かれてはいなかったもので、これは卑怯者のなせる殺害だと見て取った。そこで彼女は殺害者たちに向かって災いを訴えた。しかし、国王たちは勝利に酔いふけて夜ふけまで酒宴を張った。

朝早くブリュンヒルトは家の者たちを自分のベッドの前に呼んだ。そして泣きながら彼女は彼らに事実を打ち明けて言った。すなわち、ジークフリートはグンテルに対して兄弟の誓いを忠実に守った。彼の抜き身の剣が寝床を分けていたのだから。グンテルの方こそ彼の誓いを忘れていたのだということを。「あなた方にとってよいことであれ、悪いことであれ、私の生は終わりました。欺きでもってあなた方は私を手に入れたのです。悪からは悪が生じたのです。」そして彼女は自分の剣を脇腹に突き刺したが、それを誰も止めることはできなかった。

このような内容のブリュンヒルト伝説が五、六世紀にライン・フランケンで生まれたと推定されるのであるが、この伝説が生まれた背景にどのような歴史的事実が関与していたかについては、断言できるものはない。ただプロコップの『ゴート戦争』(Ⅲ, 1)の中に読み取られるゴート族に関する歴史的事実が指摘されてよいかも知れない。それによると、540年頃のゴート族のある気高い貴婦人が水浴中に王妃を侮辱した。王妃は泣きながら夫のもとにゆき復讐を要求する。国王はそのゴート女性の夫を裏切り者として中傷し、それを殺害によって片づけた。名前は伏せられているが、それぞれの人物がグリームヒルトとブリュンヒルト、グンテルとジークフリートにあたることは明らかである。

確かにこの伝説のブルグント国王たち、ギーギッヒェ(Gibiche)、グンテル(Gunther)、ギーゼルヘル(Giselher)及びゴトマール(Gotmar)等の名前は歴史的名称として確認さ

れるが、しかし、この伝説は少なからず超現実的なものを含んでいる。まずジークフリートについて言えば、財宝の獲得やその不死身の肌、誰にも負けない英雄であること、そして求婚の手段としての炎越え、人物の姿交換、剣で隔てて三晩床に入ることなどがそれである。ブリュンヒルトについても、彼女はなるほど半神的女性のヴァルキューレではなく、この世の「楯の乙女」として登場するが、しかし、炎の壁の外側へ出て行って、血族もない見知らぬブルグント国で王妃となるなど、少なからず予感に満ちたものを投げかけている。この二人の主人公ジークフリートとブリュンヒルトは魔法の国からの生き物のようにブルグント国王たちのウォルムス社会へと入り込んでいるのである。この伝説は、しかし、『ヒルデブラントの歌』のような写実性を欠いているからと言って、メールヒュンのような英雄の冒険を伝える説話でもない。このブリュンヒルト伝説は当時の上流社会から純粹に考え出された魂の葛藤を内容とするものである。

その内面的葛藤の悲劇的主人公がブリュンヒルトである。ブリュンヒルトは身分高き高慢な女性であったが、欺きによってグンテルの妻となる。炎越えの試練に耐えられる気高き勇士ジークフリートが自らその欺きを実行して、その勇士はブリュンヒルトの夫とはならない。別の女性の夫である。知らぬ間に愛の誓いが破られていたにせよ、これは明らかに恥辱であり、ブリュンヒルトの名誉が傷つけられたことを意味している。義妹クリームヒルトに対する嫉妬及び欺いて勝ち誇っているジークフリートへの憎しみといった感情から、ブリュンヒルトは復讐せずにはいられない。彼女は武器を手にして復讐するのではなく、夫グンテルを唆し、嫉妬の行為へと駆り立てることによって復讐を実行する。ブリュンヒルトは、しかし、復讐を果たしたあと、事実を明らかにし、殺害されたジークフリートの不当な罪をきれいに拭い取って、自らも死に赴かなければならない。体面を汚された結婚に終止符を打つためではなく、罪滅ぼしとして自らに制裁を下すためである。このような行為のあとではもはやそれ以上生きていられないのである。だから、一つの復讐伝説であり、復讐する女性の物語である。しかし、父、兄弟あるいは夫のための復讐ではなく、被った侮辱のため、破壊された生活のための復讐である。求婚伝説ではあるが、愛の合一是語られない。英雄はここでは恋人ではない。愛はこの伝説においては推進力ではなく、ただあるのは高貴な女性の名誉、誓い、権力意志だけである。従って、グリームヒルトはここではまだ副主人公である。彼女の課題は、とりわけ川の中での口論によって欺きを明らかにし、復讐を呼び起こすことにある。さらに彼女はジークフリートと兄弟たちとの間の絆を強固にし、傷つけられた女性の感情の中に嫉妬の感情をもたらず役割を演じているが、ジークフリート暗殺後彼女はどうなるのか、その後の彼女については語られていない。この伝説は結局のところジークフリートの死を中心としたブリュンヒルトの伝説であり、その魂の葛藤を内容とするものなのである。

この伝説は、『ヒルデブラントの歌』などから推定されるように、頭韻の歌謡であり、夕方、中央の土間で火を炊いている従者たちが杯を交わしつつ痛飲している間に、スコープ(Skop)と呼ばれる宮廷詩人が主君広間で朗読して聴かせたもので、約十五分間で終わる

簡潔な歌であった。しかし、文字に写して残すことを詩人たちは考えていなかった。こうして歌われていた伝説歌謡はのちに、遅くとも九世紀の初めにはスカンディナヴィアへ伝承され、それがさらにはアイスランドへも伝承されることとなるのである。

ブリュンヒルト第一段階はこうして北欧へと伝承されていったが、その後のドイツでは九、十世紀の経過中、英雄文学は頭韻から脚韻へとかわった。この脚韻はローマの賛美歌に由来するもので、当初はかなり単調な形式であったが、歳月とともに言語が次第になだらかになって二行の脚韻長詩句を発生させた。こうした転回は吟遊詩人によって促され、彼らはスコープと呼ばれた宮廷詩人に代わって英雄文学を保護したのである。それはなるほど戦士貴族から民衆への移行であったが、聴衆や後援者の好みはなおも英雄的なものに傾いていたので、素材は騎士時代に至るまで古代的で厳しいまま変わらなかった。そして英雄伝説はこうして久しく吟遊詩人の歌謡であったのである。

2. 第二段階 —— J ü n g e r e s B r ü n h i l d e n l i e d ——

ブリュンヒルト伝説の原型に次の段階としての変化が生じたのはようやく十二世紀の終わりになってである。もちろんその作品はドイツには遺されていないが、前段階で『エッダ』が果たしてくれたと同様に、北欧へ伝承された『新しいブリュンヒルト歌謡』がその推測を可能にしてくれる。それはノルウェーのベルゲンにいるザクセンの商人たちの間に歌われていたもので、それを聴いていたアイスランド人が1250年頃古ノルト語の散文でその内容を書き留めた。『ティードレクス・サガ』がそれである。この『ティードレクス・サガ』を常に『エッダ』及び『ニーベルンゲンの歌』と比較考察することによって、我々はドイツにおけるブリュンヒルト伝説の第二段階をかなり正確に推測することができるのである。

この段階においてギービヒェ(Gibiche)やギービヒュンゲ(Gibichunge)という名は消失し、国王とその国民はライン地方の発音に従ってブルゴント族(Burgonden)と呼ばれ、ゴトマール(Gotmar)はゲルノート(Gernot)に、グリームヒルト(Grimhild)はクリエムヒルト(Kriemhild)に移された。

名前だけではなく、筋においても改変を見た。なかでも深く改変されたのがブリュンヒルトに関する事柄である。炎越えと姿交換といった超現実的な話は当時の人々にはもはや馴染むことのできないものとなり、求婚試みとしてはそれに代わって競技が取り入れられた。すなわち、ブリュンヒルトに求婚する者は、石投げ、幅跳び、そして槍投げで彼女に打ち勝たなければならない。グンテルにはそれは克服することができず、ジークフリートが隠れ蓑に身を隠してその手助けをするのである。それでもって成行きは以前よりはより現実的となったのである。

この変化によって婚礼初夜の剣の場面はなくなった。しかし、それを無造作に削除するわけにはいかなかった。クリエムヒルトが証拠の指環を見せてブリュンヒルトを「側女」と罵る筋のためである。そこで付け加えられたのが次のような筋立であろう。すなわち、

ブリュンヒルトは結婚の夜、グンテルを拒む。復讐をかませる。ジークフリートはまたもやグンテルに手助けをするのである。ジークフリートはグンテルの許しを得て、グンテルの夜衣裳を着て寝床へ行き、その強い女性と格闘し、彼女から処女とともに超女性的な力を奪い取ってしまうのである。このようなことは前段階のスコープの詩人たちは歌うことができなかったが、吟遊詩人たちは歌ったのであり、ここに我々は副業として道化者で手品師でもあった吟遊詩人たちの姿を垣間見るのである。

この宿命的な改変はさらに婦人たちの口論とグンテルの前での嘆きにも影響を及ぼした。「ジークフリートは私とあなたを欺いたのです」というブリュンヒルトの嘆きは、もはや意味を持たなかった。グンテルは自分が欺かれたのではないことを知っており、彼自身がブリュンヒルトへの欺きを欲していたからである。だから、今や重点が置かれるようになったのは、ジークフリートは秘密を漏らした、そしてクリエムヒルトは証拠を突き出して義姉を侮辱したという点である。従って、婦人たちの口論は、もはや川の中ではなく、にぎやかな舞台、すなわち、広間の中で起きる必要があった。ブリュンヒルトは苦情も復讐の要求も、夫との密かな対談ではなく、ハーゲンのいるところで申し立てる。婦人たちの口論は宮廷的な出来事となり、名誉の座をめぐる戦いとなったのである。従って、そのあとの結末も変わってくる。人々の前でのブリュンヒルトの辱しめはジークフリートの死でもって償われたのだから、ブリュンヒルトの別れの言葉、すなわち、死んだジークフリートを中傷から拭ぐうためのかつてのおごりかな結末の文章は消失した。その代わりに、『ティードレクス・サガ』で伝承されているような結末を恐らくドイツの吟遊詩人は詩作したのであろう。すなわち、ブリュンヒルトは帰って来る狩人たちを出迎え、よい獲物を射止めたことの祝いの言葉を述べ、その死体をクリエムヒルトのベットの中に投げ込むように要求する。「彼女は今や彼を死人として抱くがよい！」これが歌謡におけるブリュンヒルトの最後の語りであったのであろう。これは憎しみに満ちた復讐女性にはふさわしい言葉であり、かつての深い魂の葛藤は消失したのである。未亡人の悲しみの叫びに対する返事としてのブリュンヒルトの高笑いも消失し、それに代わって目立ってくるのがクリエムヒルトの嘆きの描写である。出狩前のクリエムヒルトの気がかりな不安と悲しげな夫婦の別れ。それから未亡人が群衆の前で、あらわになった夫の死体の上に身を乗り出して、張り上げる嘆きなどが展開されることとなったのである。かつてはブリュンヒルトが占めていた結末をこの第二段階の歌謡においては、クリエムヒルトが占領してしまったのである。しかし、クリエムヒルトはブリュンヒルトに代わって結末だけではなく、最初の場面をも占領してしまった。すなわち、彼女は母オーデ(Ode)に、美しい鷹が二羽の鷲に引き裂かれてしまったという夢を語るのである。この冒頭部分はすぐさま新しい女性の伝説を明らかにしているのであり、反対にブリュンヒルトはより小さく、より表面的となったのである。

このような内容の第二段階の歌謡は、第一段階のものの約二倍の長さのものであり、その語り方はよりゆっくりしたものであったろう。母オーデ以外には新しい人物を登場させ

ず、また饗宴のような宮廷的描写を展開させることもなく、物語の筋はほっそりと静かに前へ進んでいった。それは相変わらず、吟遊詩人がその記憶から朗読したまさに「歌謡」であり、詩形も二行の脚韻長詩句であった。

このような「歌謡」はライン地方のフランケン人で、フランスの詩を知っていた教養のある吟遊詩人によって詩作されたのであろう。フランスの詩や騎士的な鷹の夢などから十二世紀末がほのめかされるが、しかし、その他の箇所では第一段階の原型から伝えられたものであり、古代的生活様式、粗野で悲劇的な精神の多くは保持されたのである。こうした第二段階のブリュンヒルト歌謡が数年後ドーナウ地方の『ニーベルンゲンの歌』の詩人の手に渡って、その前編の直接の素材となったのである。

Ⅱ. ブルグント伝説

1. 第一段階 —— Fränkisches Burgundenlied ——

それでは、もう一つの伝説、ブルグント伝説はどのような状況にあったのであろうか。この伝説の第一段階も、やはり五、六世紀の間にフランケン英雄歌謡として発生したと推定されるが、この頭韻の歌謡も、ブリュンヒルト伝説と同様、原型は失われている。しかし、それはやがてノルウェーやアイスランドに伝承されてゆき、アイスランドのエッダ歌謡に新旧二つの『アトリの歌』が遺されている。このうち古い方の『アトリの歌』は伝承されてきた伝説形式に近い形で残されており、主にこの歌謡を『ニーベルンゲンの歌』と比較考察することによって次のようなブリュンヒルト伝説の原型が得られるのである。

ブルグント伝説の原型

ギービツヒュー族であるウォルムスのブルグント国王たちは、ジークフリートの未亡人で彼らの妹であるグリームヒルトをフン族の強大な国王エッツェルと結婚させた。彼女は彼から二人の息子エルフェとオルテを儲けた。ウォルムス人たちは多くの財宝を所有していた。それは、ジークフリートの死後彼らの所有となったニーベルンゲンの財宝である。グンテルとハーゲン——ハーゲンはここではギービツヒュー族の三人とは異父兄弟であり、ある妖精と王妃の息子として考えられている——は、その黄金をライン河に隠し、どちらかが生きている限りは、その隠し物のありかを秘密にしておこうという誓いを立てていたのである。

この財宝を手に入れたくてたまらないエッツェルがウォルムスに使者を送り、一族を自分の宮廷に招待したことで歌謡は始まっている。使者は広間で宴会（第一の宴会）の際に委託された伝言を伝えた。使者は国王たちに彼の主君からの測り知れない贈物と名誉とを約束したのである。ハーゲンはそれを疑い、招待に応じないよう忠告するが、グンテルはその旅に臆して出かけないで過ごすくらいなら、むしろ狼や熊にニーベルンゲンの遺産を委ねた方がよいと言う。その異父兄弟ハーゲンに向かってグンテルは、お前はお前の父の、到底英雄とは言えない妖精に似ていると言って非難する。そこでハーゲンは怒って旅立ちに従った。

暗い予感に襲われながら四人の国王は少ない従者を連れて出かける。彼らはライン河を越え、力強く漕いだので、櫂と留め杭が壊れたほどである。その後ハーゲンは船を河に流してしまう。帰ることなどは彼は考えていないのである。

フン族との国境で彼らは一人の眠っている戦士に出会った。その戦士はグリームヒルトが、彼女の兄弟たちに警告を与えるために、使いに出していたものである。長い騎行のあと彼は河のほとりで昼夜幾日も見張りをしていたので、つい眠り込んだのである。彼の警告は遅過ぎた。境界は踏み越えられたが、決意は動じなかった。

彼らは国を越えてエッツェルの胸壁の高い城にやって来た。その城は武装者たちでいっぱいであった。彼らが広間へ入って行ったとき、グリームヒルトが歩み寄って言った。

「あなたは裏切られたのです、グンテル様！あなたは鎖かたびらもなくそんなにわずかの兵でフン族の陰謀に対してどうされるつもりですか。」

彼らはフン族が催す酒宴（第二の宴会）の席に腰をおろした。エッツェルは多くの財宝を要求した。グンテルはそれを反抗的に拒絶した。そこでエッツェルは彼の戦士たちを彼らの中に割って入らせた。最初の突撃でグンテルは捕えられた。殴り合いでギーゼルヘルとゴトマールはほかの者たちとともに倒れた。ハーゲンはさらに戦いつづけ、八人のフン族を倒したところで、彼も狼轡をかまされて連行された。

エッツェルはグンテルの前に歩み出て、財宝と引き換えに自分の命を助けたくはないかと尋ねる。しかし、グンテルは、宝の隠し場所を漏らす前に、ハーゲンが死んだことを知らなければならないと答える。そこでエッツェルはハーゲンの心臓を切り取らせるために使いを出した。笑いながらハーゲンはナイフに耐えた。グンテルは弟の赤い心臓が深皿の上に載せられているのを見たとき、こう言う。「今はじめて私は確実にニーベルンゲンの財宝の持ち主だ。もはやハーゲンは生きてはいないのだから！今や秘密は私一人だけしか知らない。黄金の指環はライン河に沈めておこう。お前たちフン族の手に入って輝くことはあるまい！」

そこでエッツェルは彼を蛇の牢に投げこませた。グリームヒルトが彼に差し出した豎琴をグンテルはひるむことなく奏でたが、ついには彼は毒蛇に噛みつかれて殺されてしまった。

エッツェルの広間ではフン族が宴会（第三の宴会）のために集まった。悲しみを押えながら、王妃は、強い酒を食卓にのせ、エッツェルにおいしい物を差し出す。それから彼女は彼にこう打ち明けて言う。「あなたが食べたのはあなたの子供たちの心臓です。決して二度とあなたはエルフェとオルテを自分の前に呼ぶことはできません！」彼女は自らの子供を復讐のために殺していたのである。荒々しい戦士たちは泣いた。グリームヒルトだけが涙を流さなかった。彼女は黄金の指環を国王の財宝部屋から取り出して戦士たちにばら撒いた。戦士たちがうっとりとして眠り込むように仕向けるためである。エッツェル自身は、酒と恐怖で麻痺してしまい、彼のベットに沈み込んでいた。ここでグリームヒルトは剣を彼の胸に突き刺した。それから彼女は火をつけ、燃える広間の中で一族もろとも自らの生命をも絶ったのである。

この伝説もまた、ブリュンヒルト伝説と同様に、「歌謡」であったと推定されるが、ここでは決定的に魔法的で神話的だと言える特徴は現われず、その伝説の素材は、ブリュンヒルト伝説の場合とは逆に、歴史的事実に容易に結びつけられ得る。その伝説の三つの柱として次のような五世紀の歴史的事実が指摘されよう。まず第一は、437年にライン・ヘッセン地方のブルグント族はフン族によって恐ろしい敗北を被り、その国王グンディハリ(Gundihari)は一族とともに倒れたという事実である。しかし、もっと作用を及ぼしたのは、第二の歴史的事実、すなわち、その十六年後の453年に、恐れられていたフン族

の支配者アッティラ(Attila)が突然の死を遂げたという事実である。彼は夫人ヒルディコ(Hildiko)の側のベットの中で大量の咯血をして死んだのであるが、まさに「このこと」が英雄文学の芽になりえた。すなわち、フランケンの一詩人は、アッティラの殺人者をヒルディコだと見て取って、この二つの歴史的事実を一つに結びつけ、復讐行為、兄弟たちの復讐としたのである。十六年という時間的差異は「一日」に圧縮され、グンディハリが倒れた次の日の夜、ヒルディコが兄弟たちの復讐を夫アッティラに対して行うという英雄文学が生まれたのである。さらにその上第三の歴史的事実として、アッティラの息子たち、エルラク(Ellak)とエルナーク(Ernak)の二人が父の死後まもなく世を去ったということである。そこからその作品の中に二人の未成年の虐殺が盛り込まれることとなったのである。

こうしてフランケンの一詩人によって詩作されたこの原型には、すきまもないほど英雄文学の息吹が感じ取られる。その悲劇的雰囲気を漂わせるために何よりもまず重要な役割を演じているのが、ハーゲンとグンテルである。フン族のエッツェルから招待を受けたブルグント側のハーゲンは、それを諫止するが、この諫止は危険をすでに悟っていることを表している。しかし、それにもかかわらず彼らは結局フン族の国へと鎖よるいも身につけず、また軍勢も連れずに出かけて行くのである。このように反抗的に危険へと向かってゆくところに聴衆は名誉というものを感じ取ったのである。グンテルについても、フン族の国で捕えられたとき、彼は強力な反抗の言葉で自らの命の救出をはねつけるが、ここにおいて我々は精神的な勝利、死に晒された者の歓声を味わい尽くすことができる。またグリームヒルトも英雄文学らしい雰囲気を漂わせていると言えよう。自分の夫を殺害したばかりではなく、自分の子供たちをも犠牲にするのである。子供たちの心臓を火であぶるという残忍な彼女の行為は、エッツェルがハーゲンとグンテルを殺したことへの報復である。ハーゲンの心臓が見せびらかしのために持ち出されたように、グリームヒルトは子供たちの心臓を差し出すのである。それから彼女は自らに対して制裁を下し、自ら炎の中に身を投げ入れて、恐ろしい行為の償いをするのである。ブリュンヒルト伝説の第一段階と同様に、ここでもまた復讐女性としての女性が登場するが、ここでは兄弟たちのための復讐である。ハーゲンは、異父兄弟であれ、父母を同じくする兄弟であれ、グリームヒルトと血縁関係であらねばならないのである。

このようにハーゲン、グンテル、グリームヒルトが重要な役割を果たしているが、ラインの黄金もまた重要である。冒頭に出てくるラインの黄金は意味深長なモチーフの一つであり、フランケンの詩人は、この黄金ゆえにブルグント族の主君たちがフン族の国で命を落としたのだとして、そのためにまず秘密の誓いを作り出したのであるが、この秘密はのちにエッツェルが財宝の隠し場所を質問する場面でグンテルの反抗的な言葉に意味を与えることになるのである。そのほかにも、船を激しく漕いだり、その船を河に流してしまう行為などは、死を覚悟した断固たる心の表現である。眠っている警告者の意味するところは、宿命的に「遅すぎた」ということを表している。皿の上の心臓は、秘密を知っている

弟の死を表しており、さらに蛇の牢でのグンテルの竖琴の演奏は彼の勇敢さを証明しているのである。

ブリュンヒルト伝説の第一段階はブリュンヒルトの内面的な魂の葛藤を取り扱うものであったが、このブルグント伝説第一段階は、このように非常に明るい見せ場を多く持っている。すなわち、前者では二人の人間の間で一つの運命が織り成される密かな場面があったが、後者ではそのようなものはなく、もっと騒々しく、もっと公的な性質のものである。冒頭と中央と結末にそれぞれ置かれている三つの酒宴がその性質を決定づけていると言えよう。また両者の結末部分についても、前者はブリュンヒルトの別れの挨拶によって内面的に特徴づけられているのに対して、後者では燃え落ちてゆく広間の描写によって外面的な作用を及ぼす結果となっている。

しかし、このような相違にもかかわらず、我々に推定されるこのブルグント伝説はすでにブリュンヒルト伝説にいわば「接近させられて」(angerückt)いる。エッツェル(アッティラ)の殺人者グリームヒルト(歴史上のヒルディコ)はジークフリートの妻と同一視されている。この伝説の軸にあたる財宝もかつてジークフリートが所有していたニーベルンゲンの財宝と同一視されている。この同一視は、独立して生じていた二つの伝説を結びつけるきっかけであったかも知れない。このように二つの英雄伝説は互いに接近しているが、しかし、内的に結びついているのではない。それらは長い間独立的に生じた。恐らくブルグント伝説は460年頃、ブリュンヒルト伝説は580年頃に生じた。そして百年後に二つの歌謡は接触し合い、人物の名前などを借り合ったということはいえよう。そのように二つの伝説は、新しい環境の下に根をおろすまで、ゆるく結びついたままだったのである。

2. 第二段階 —— Baiwarisches Burgundenlied ——

八世紀以来上部ドイツの文書にはクリエムヒルト(Kriemhilt)、ハグノ(Haguno)、ニプルンク(Nipulunc)、ジークフリート(Sigfrid)という名前が見られるが、これは当時ニーベルンゲン伝説がバイエルン・オーストリアの英雄詩人たちにも知られていたことを証明するものと考えてよいだろう。しかし、このドーナウ地方では以前から最も好まれた英雄素材はディートリヒの逃亡伝説であり、エッツェルが、逃亡してきた君主や英雄たちの温和な保護者となっている。こうしたエッツェル像は東ゴート人のもたらしたものであった。ところが、フランケン人によって描かれたブルグント歌謡のエッツェル像は第一段階ですでに述べたように、黄金欲が強く残忍な裏切り者であった。それはバイエルン人には信じられない像であった。そこで彼らに受け入れられるためには、裏切り者エッツェル王の負担を軽くしなければならなかった。この要求に応じてドーナウ地方の詩人によって改作された結果が、すなわち第二段階であるが、これはのちの第三段階から推定する以外に方法はない。第三段階から推定して、第二段階には次のような改変が認められよう。

まず最も決定的な改変は、ブルグント族に対する反逆をクリエムヒルト⁴⁾に行わせているという点である。だから彼女はエッツェルの財宝欲望を受け継ぐのであるが、これは理にかなっていた。なぜなら、ジークフリートの遺産は彼女に与えられるべきものであるからである。しかし、黄金欲望からのみ彼女は兄弟を殺害するわけにはいかない。もっと強い衝動としてジークフリートのために復讐することとなったのである。クリエムヒルトはジークフリートの暗殺を赦し忘れることはできなかった。エッツェルの妻となったのも、その復讐のためであり、今や彼女がそのためにブルグント族を招待することとなるのである。従って、かつてはエッツェルの役割であったものが、今や彼女に移っている。財宝の隠し場所についての質問、縛られたものの殺害命令等がそれである。もちろんクリエムヒルトは以前の段階から維持しているものもあるが、しかし、それは新しい意図に従って作り変えられている。かつてはグンテルが悪意もなく、鎧も身につけず広間に入って来たことで、クリエムヒルトはびっくりしたが、今や彼女がびっくりするのは、客人たちが不信の念をもって外套の下に鎧をつけているということである。

こうしてエッツェルに対する復讐がブルグント族に対する復讐へと移ったため、当然のことながら次の改作点としてエッツェルの死が消失した。従って、歌謡の終わりの約三分の一、すなわち、身の毛もよだつ恐ろしい宴会、国王を短刀で刺し殺したり、客殿の人々を焼き出すこと等はなくなったのである。しかし、この結末の三分の一はあっさりとはなくなったのではなかった。保持されるべきものは保持されて、それに新しい意味を与えたのである。次の四点にまとめられよう。まず第一は子供たちの殺害に関する改変である。クリエムヒルトは今やブルグント族に対して復讐をするのであるから、自らの手で子供たちを殺してその心臓を皿の上に載せて食卓に出す必要はなくなった。しかし、彼女は依然として子供たちを復讐の犠牲にする。すなわち、彼女はハーゲンがその子供を殺すように仕向けるが、これはエッツェルとブルグント族とを敵対させるため、すなわち、彼女の復讐のためである。この復讐の犠牲という点では同じままである。第二は王妃が黄金をばら撒くことである。かつてはフン族にばら撒いて、油断させるためであったが、今やブルグント族に攻撃を仕掛けるよう刺激するためにフン族の家来たちにばら撒くのである。第三は広間を焼くことである。かつては罪滅ぼしのために広間を焼いて一族と自らを滅びさせたのだが、今やそれはブルグント族に対する武器となっているのである。しかし、あとにも先にも火をつけるのはクリエムヒルトである。第四はクリエムヒルトの死である。第一段階の広間燃焼においてはクリエムヒルトは自ら刑死を決心した。第二段階においても兄弟たちに復讐を遂げたので、生き延びるわけにはいかない。死ぬことは両者において共通しているが、詩人は他人の手によって殺されることにした。なぜなのか。詩人及びその聴衆

4)伝説がこの第二段階で南の方へ移る際に、古いグリームヒルトという名称は新しくクリエムヒルトに移ったのであろう。ちなみに、歴史的な名前ゴトマル(Gotmar)もこの段階でゲールノートに代えられたのである。

の同情は今やブルグント族の方にあった。ブルグント族という名において復讐させるためには、エッツェルもフン族も何の役に立たなかった。新しい人物が必要となった。それがディートリヒ・フォン・ベルンである。

このディートリヒの役割は第二段階の詩人の創作であろう。このゴート族の英雄がどのようにしてブルグント伝説に入ってきたかは、簡単に説明できる。ディートリヒ逃亡の作品からバイエルンの詩人には、ディートリヒがエッツェルの宮廷に滞在していたということを知っており、このブルグント族滅亡に無関係のままにはしておけなかったのである。そこでディートリヒには、次のような役割、すなわち、できる限り中立の立場をとるが、クリエムヒルトの所業を見るに見かねて、ついには剣を振り上げて、女悪魔を真っ二つに断ち斬るという役割が与えられたのである。しかし、このためにのみ、彼は登場したのではなかった。彼はブルグント族の最強の者ハーゲンを征服するのであり、それによって英雄行為を称えられていたのもであろう。ハーゲンがゴート族の英雄を敵に持ったならば、そのことはハーゲンををも高めたのである。そして賛嘆されたディートリヒの干渉によって戦いが終わったこの結末は確かに一つの高まりなのである。

ディートリヒのほかにもう一人ディートリヒ伝説からこの歌謡に入ってきた人物がいる。エッツェルの弟ブレーデル (Blödel) がそれである。エッツェルが平和を愛する国王となったからには、フン族の中に別の活動的、攻撃的な勇士が必要となったのである。このブレーデルの役割は、クリエムヒルトの唆しに屈服してしまう最初の人物であり、部下に戦いのため武装させる人物ということにあるが、さらに彼はグンテルを征服し、またハーゲンによって倒されることによってディートリヒに武器を取らせるという重要な役割をも演じているのである。

その戦いの経過は次のように推定されよう。饗宴が始まる前に、ブレーデルは王妃の命令により広間の入口をふさぐ。広間の中ではハーゲンによってエッツェルの息子が首を刎ねられ、それから戦いの混乱が起こる。そこからディートリヒとともに国王夫妻がのがれ出るが、客人たちは閉じ込められたままである。グンテルはついに捕えられて連行される。クリエムヒルトは夜になって広間に火をつける。広間の中のブルグント一族は朝になって逃げ出すが、敵の槍と矢の雨にあたって倒れてしまう。ハーゲンだけが戦いつづけ、次から次へと敵を倒してゆくが、その犠牲となった者たちの中には国王の弟ブレーデルもいた。今やディートリヒは傍観しているわけにはいなくなり、ハーゲンと対決し、彼を征服して、縛り上げて王妃クリエムヒルトに引き渡す。それから財宝の隠し場所についての質問が続くのである。

これを第一段階と比較してみれば、なるほどグンテルが縛られ、一族が皆倒れ、最後にハーゲンが捕えられるといったある種の枠組みは動じないままであるが、しかし、この場面の筋は大変豊かにされている。一つの場面からおよそ六つの場面が生じたのである。このことを引き起こしたのが、ディートリヒ伝説から取り入れられた新しい二人の人物ディートリヒとブレーデルであり、さらにはまた原型の結末部分からこの場面に移された子供

の殺害と広間焼きであるが、この豊富化は失われた原型の結末部分の三分の一を埋め合わせてもいる。従って、全体の分量は原型とほぼ同じものであったと考えてよいであろう。

饗宴からあとの筋はこうして豊かにされているのに対して、饗宴に先立つ招待、旅そして到着の場面はほとんど変更を加えられなかったものと考えてよいが、ただ王妃の母の警告する夢はすでにこの第二段階が付け加えたものであろう。なぜなら、グリーンランドの歌謡の夢の対話はその夢に由来するだろうからである。

最後に、さらに重要な改変はハーゲンがグンテルよりも高められている点である。原型は、歴史的事実に合わせて、グンテルを決定的な英雄として、財宝に関する質問の場面でもあの感銘的な反抗の言葉をグンテルに語らせたのであるが、この第二段階においてはその逆である⁵⁾。ハーゲンこそが今や最後のブルグント人であり、彼こそが王妃に財宝の秘密を拒み、クリエムヒルトによって殺されるクライマックスの人物なのである⁶⁾。すなわち、ブルグント族滅亡はジークフリートのための復讐となったことがここでも明らかである。なぜなら、ハーゲンこそジークフリートの殺害者であったのだから。ハーゲンこそ英雄となったのである。

このことによって今や明らかなのは、ブリュンヒルト伝説とブルグント伝説が内面的に結びついているということである。第一段階では、あらずじそのものによってではなく、ただ人物たちと財宝だけによってゆるく結びつけられていたに過ぎなかったが、第二段階においてフン族の裏切りはジークフリートの復讐のためであるという考えが現われるや否や、その二つの伝説は互いに接して生長したのである。この二つの伝説が順番に朗読されたならば、ジークフリートの死は二重奏の転回点であったのであろう。しかし、このことを「一つ」に融合し、互いに釣り合わせることは、それほど簡単なことではなく、この難しい課題がついに為し遂げられるのは第三段階の詩人を経て最後のニーベルンゲンの詩人によってなのである。

ちなみに、形式においてこの第二段階の上部ドイツの詩は、未だに同時代の『ヒルデブラントの歌』と同じく頭韻であったが、その後脚韻の文体へと移ってゆき、数百年間、その内容を大きく変えることなく、朗読されたのである。

5) 『歌謡エッダ』の『グリーンランドのアトリの詩』でグンテルよりもハーゲンを重く取り扱っているのは、この伝説の影響のように思われる。

6) クリエムヒルトがハーゲンの前に持ってきたのは、切り取られた兄の心臓であったのか、頭であったのかは、不明であると言わざるを得ないだろう。

3. 第三段階 —— Österreichisches Burgundenepos ——

こうしたバイエルンのブルグント伝説は、1160年になってドーナウ地方でさらに新しい改変を見ることになった。それはその頃より高度な詩才を有する吟遊詩人によって作り上げられたものであり、この詩人によって初めて、歌い物の詩から六倍ないし八倍の量を有する読み物の叙事詩が発生することとなったのである。一大転回点であると言えるが、この進歩には数十年前から準備がなされていた。最初の刺激はフランスからやって来た。すなわち、1100年頃フランスの僧徒が初めてローラン(Roland)の英雄叙事詩を作り上げ、それをのちに一人のバイエルン人がドイツ語に翻訳した。ついでアレクサンダー大王を歌ったフランスの叙事詩が、フランケン人によってドイツ語に翻訳されたが、これがバイエルン地方にも反響を及ぼしたのである。いずれも僧徒によって翻訳されたが、すぐのちには吟遊詩人たちも立ち上がって、読み物の詩作を始めたのである。1150年に書かれた『ローター王』(König Rother)の作者はバイエルンにいたラインの吟遊詩人であったが、これはドーナウ河畔パッサウからハンガリー国境までのオーストリアの吟遊詩人に大きな影響を及ぼした。この地方ではディートリヒ逃亡、ブルグント族滅亡といった英雄物語が愛されていたので、それらを素材としてオーストリアの吟遊詩人によって叙事詩が作られるのは、必然のことであった。まず最も愛されたディートリヒの叙事詩が発生し、まもなく1160年頃ブルグンデン叙事詩、すなわち、『古きニーベルンゲン災厄』(Die ältere Nibelungenot) ——以下『災厄』と略記——が生成したのである。これが第三段階である。

もちろんこの最初の叙事詩は現在遺っていない。しかし、それはこの地方でニーベルンゲン詩人の素材となる一方、ザクセン地方にも伝承され、それがさらにのち(1250年頃)には一人の北欧人の手もとにも達して、彼はノルウェーのベルゲンの町にてドイツ語の英雄物語を古ノルト語で書き写したのである。すなわち、『ティードレクス・サガ』がそれである。この作品及びフェロー諸島のバラード、デンマークの歌謡『クレモルトの復讐』などから第三段階がかなり正確に再現できるのである。

この第三段階によって我々は、ブリュンヒルト伝説第二段階の『新しいブリュンヒルト歌謡』と同様に、中世の隆盛期を形成する騎士と吟遊詩人の時代に入るのである。

まずこの叙事詩の作者は形式を一新した。これまでの英雄歌謡の詩節の結末は、規則的であるのが少ない二行の長詩句であったが、この詩節は読み物としての叙事詩のためにはすぐに息切れのするほどあまりにも短いもので、非芸術的に思われた。『ローター王』の詩人が用いた短い押韻二行連句も、短い歩調の形式で、重みがあるというよりはかわいいもので、パトスには不向きなもので、その詩人には好まれなかった。彼は今やその頃キューレンベルクの詩人が用いたキューレンベルクの調べと呼ばれた詩形を用いた。それは古い二行の長詩句を二倍にしたもので、本来抒情詩のためのものであったが、第三段階の詩人はそれを読み物としての叙事詩に使用したのである。その詩の結末の「韻」は、しかし、もちろんその時代にふさわしく、まだかなり自由で、古代性を保持していた。「言語」に

についても、のちの『ニーベルンゲンの歌』に見るような柔らか味のある流暢さと抒情的な膨らみはなかったが、しかし、この『災厄』は貴族の委託者を持っていて、宮廷的聴衆を対象としたものに相違ない。キューレンベルクの詩節を採用した点から見ても、『災厄』詩人は騎士的ミンネザングに通じていたことが窺える。しかし、新しい騎士習慣はまだ1160年当時の詩人言語にはほとんどしみ通ってはいなかった。フランスのロマンはドイツ、殊に南東においてはまだ知られていなかったのである。「内容」においてもこの第三段階は、習俗・内面的生活において流行的・騎士的と言うよりも、むしろ古代ドイツ的・英雄的な性格のものであった。『ティードレクス・サガ』に伝えられている六歳の子供が母の命令でハーゲンに加える平手打ちは、この『災厄』に由来するもので、これは十世紀のエックハルトの『ヴァルタリウス』(Waltharius, 920-30)を想起させるものであり、この第三段階には古い吟遊詩人の持つ野生味が残されていたのである。

しかし、『災厄』詩人は新しい詩形である叙事詩にこの伝説を盛ろうとしたので、様式の変化とともに人物や場面をも拡大しなければならなかった。叙事詩への拡大は言語上の膨らみやゆったりとした描写によってのみ成就するものではなく、そのためには文学的感覚を必要とした。彼はその文学的感覚をもって、場面と人物たちを新しく創り出していったのである。その点でも彼は、今までの詩人とは異なって、画期的であったと言ってよいであろう。さらに彼は、ニーベルンゲン族が千人の戦士を伴って出発するように拡大し、出発、旅、そして到着がこれをより詳しくして、フン族の宮廷での混み入った大量戦闘への道を開いているのである。もはやかつてのように舞台は、一つの選り抜きの戦いで占められているのではなく、深みを獲得し、うごめく背景を得たのである。

一つの場面がいかに叙事詩へと拡大されていったか、一例を挙げて具体的に見てみよう。「ウォルムス人たちの力強い船旅」は本来は一つの場面であり、エッダでは四行の長詩句を用いて次のように語られている。

力強く彼らは漕ぎ、龍骨はまさに半分に折れんばかりであった。

背を後ろに倒した姿勢で、彼らは怒りを発して、櫂を漕いだ。

端綱はぼろぼろにちぎれ、留め杭は破裂した。

彼らは、船を波にまかせて、さらに進んで行った。

(『グリーンランドのアトリの詩』第37詩節)

これは暗示的な、圧縮的な歌謡芸術であり、刺激的な気分でふくれ上がっているが、これを『災厄』詩人は少なくとも次のような九つの場面に構成しなおしているのである。

まず一行は夜に広いドーナウ河畔に達するが、船が見つからない。一行は夜の休みのためにテントを張る(第一場面)。食事のあと、グンテルは弟ハーゲンに見張人のことを尋ねる。ハーゲンは自ら見張人となって、河の下流へと船を探しに出かける役を買って出る。グンテルはそれを承諾する(第二場面)。皆が寝静まったとき、ハーゲンは武器を手を取

って、月の輝く中を河沿いに下ってゆく（第三場面）。するとハーゲンは、二人の水の精が河の中で泳いでいるのに出くわす。岸边にあった彼女らの衣服を奪い取って、ハーゲンはその一人に尋ねる。「我々は無事フン族の国へ着き、戻って来られるか」と。彼女は答える。「あなた方は無事フン族の国に着きますが、そこで死ぬことになります。」そこでハーゲンは剣を引き抜いて、「ここに横たわっている。私は未来に希望を抱いてフン族の国へ行くのだ」と言うや否や、二人を真っ二つに斬り殺す（第四場面）。ハーゲンはさらに進むと、渡し守に出会い、こう呼びかける。「向こう岸へ渡してくれ。そうしてくれるなら、黄金の指環を与えよう。」すると、その男は、「見知らぬ人を渡すことはできません。私は主君からそれを禁じられているのです」と答えたので、ハーゲンは叫ぶ。「私はそなたの主君、エルズング伯の戦士だ。」こう言って、黄金の指環を高く上げると、つい最近新妻を迎えたばかりの渡し守はその妻のために指環を手に入れることを決心する。彼は陸に着けて、ハーゲンを乗せると、ハーゲンは別のところに漕いで行くようにと命令する（第五場面）。ニーベルンゲン族のもとに戻ると、一族は眠りから起き上がって、その船を大喜びで出迎える（第六場面）。グンテル王と百名の家来がその船に乗る。ハーゲンは大変力強く漕いだので、二つの櫂は壊れ、留め杭ははずれてしまった。そこでハーゲンは、これを作った男を呪い、跳び上がって渡し守の頭を刎ねてしまう。グンテルはその行為を咎めるが、ハーゲンは叫んで、「渡し守はもはや我々のことをフン族に知らせることはできない。また私は、我々のうちで誰も故郷へは戻れないことを知っているのだ！」と言う（第七場面）。彼らが上陸する前に、グンテルが操縦していた舵は壊れ、船は転覆して、全員はずぶ濡れとなって岸に着く（第八場面）。残りの家来たちが渡河を終えたあと、ハーゲンは、「臆病者はこの河を越えて逃げることはできないのだ」と言って、船を壊して河に流してしまう（第九場面）。

一つの場面からこうして九つの場面へと拡大されていったのであるが、ここには対話等の挿入などもあって叙事詩的な広がりがある。古い伝承から受け継がれた特徴（櫂が壊れることなど）は終わり頃になってようやく現われ、新たな縁飾りさえつけられている。これら全てでもってかつての筋から一人の英雄ハーゲンが生まれ出て来たのである。

ともかくも、このような方法で伝説のほとんど全ての部分が拡大されていったのである。この叙事詩の冒頭部分についても、エッダの二つの『アトリの歌』はすぐに欺きの使者派遣でもって始まっているのに対して、この叙事詩ではずっと昔に溯って、未亡人クリエムヒルトへのエッツェルの求婚でもって始まる。これは、もちろん、まだ簡単なものではあるが、『ニーベルンゲンの歌』に一步近づいたものと言えよう。

招待についてもウォルムスの宮廷での相談の場面が生じ、そこで初めてギーゼルヘルが生き生きとした輪郭をもって登場する。

フン族への旅は、ベッヒェラーレンのリュエデゲールのもとに滞在することでもって、新しい重要な拡大を見た。同様にエッツェルンブルクでの滞在も異常なほど豊かになった。以前の段階ではエッツェルンブルクに到着すると同時に、すぐさま戦いが始まったが、こ

ここでは一連の静かな出迎えの場面が展開されている。すなわち、ディートリヒは客人たちを出迎えに行き、彼らに警告をする。ニーベルンゲン族が行列を作って国王の館に向かっている間、塔や窓辺には美しく着飾った婦人たちが立っていて、ハーゲンの不気味な姿に感嘆する。出迎えの広間でクリエムヒルトは家来たちとともに三度にわたって長い歓迎の挨拶をする。エッツェルはハーゲンのことを質問して、昔の日々を思い出す。このようなものは以前の歌謡においては不可能であろう。それは叙事詩人のゆったりした歩調を特徴づけている。

そのあと詩人は、何も起こらない第一の宴会を展開させている。それはエッツェルを気前よい主人として示し、彼の宮廷の立派な様子を見せている。ハーゲンとフォルケールの見張りの夜が続いて、そのあと二日目となる。

この二日目によりやく本来の敵対関係が始まる。クリエムヒルトの願い出は、受け継がれたのであるが、三倍になっている。すなわち、ブレーデルの援助を得る前に、彼女は二つの無駄な頼みをエッツェルとディートリヒにする。それから第二の宴会となって、争いが勃発する。

この両民族間の戦い⁷⁾にも三つの大きな挿入物がある。ゲールノート（前段階ではハーゲン）によるブレーデルの死、ハーゲンとイーリンクとの二度にわたる戦い、舅ギーゼルヘルによるリュエデゲールの悲劇的な死である。さらにハーゲンとディートリヒが斬り合う前の戦闘場面も、一つ一つの戦いとなる。すなわち、フォルケールとヒルデブラントという二人の新たに導入された戦士が目立ってくる。取っておかれたゲールノートとギーゼルヘルも目立ってくる。その後の財宝の隠し場所についての質問とクリエムヒルトの死は、第二段階からそのまま移されたものであるが、とにかくこうしてエッツェル王のもとでの滞在は拡大によって重苦しい歓迎から虐殺へと移って行くことができたのである。

このような多くの場面は、もちろん新しく創作された「人物たち」を支えとしている。

7)『古きニーベルンゲン災厄』における戦いの経過（第一章66頁脚註38の『ティードレクス・サガ』参照のこと）を整理すると、下記ようになる。先に記した戦士がブルグント族側、後の戦士がフン族側であり、下線部が敗北を喫した方である。

①まずゲールノートがブレーデルを倒す。

②ハゲネが二度にわたる戦いの末イーリンクを倒す。

③ギーゼルヘルが舅リュエデゲールを倒す。

④フォルケールはディートリヒによって倒される。

⑤ゲールノートはヒルデブラントによって倒される。

⑥ギーゼルヘルもヒルデブラントによって倒される。

⑦グンデルは、戦いの最初にブレーデルによって捕えられていたが、ここで殺害される。

⑧ハーゲンは、ディートリヒによって捕えられ、王妃によって殺害される。

なお、クリエムヒルトはこのあとディートリヒによって成敗される。

母ウオテ、渡し守、ドーナウの妖精、辺境伯夫人ゴテリントとその娘、フン族の兵士たちはそれほど重要ではないが、より重要なのは、ライン側ではフォルケール、フン側ではヒルデブラント、イーリンクそしてリュエデゲールである。しかし、前段階にすでに登場するゲールノートもギーゼルヘルも『災厄』詩人による重要な創作人物と言ってよいだろう。『災厄』詩人が初めてその二人に名前だけの登場ではなく、重要な役割を演じさせているからである。これら六名について検討しておく、次のようになろう。

まず一人目の「フォルケール」はハーゲンの戦友であるが、ハーゲンとは正反対に楽しげな戦士の意気のよさを感じさせる。彼は、すなわち、videlœre（ヴァイオリン弾き）であり、吟遊詩人であり、不安気なニーベルンゲン族を眠りにつかせるために、ヴァイオリンを弾きながら、その夜の見張り役を勤めている。このようなフォルケール像は『災厄』詩人の創作であり、さらに詩人はこのようなフォルケールをディートリヒに倒させることによって称えているのである。

二人目の「ヒルデブラント」はディートリヒ伝説に由来するが、戦術心得のある荒々しい武術の師匠であり、アーメルンゲンの最古の人物である。彼は、ディートリヒのように、三十年間をフン族のところで過ごしたので、ニーベルンゲン族滅亡に関与させることは容易であった。『災厄』詩人は終わり頃に彼を登場させ、ブルグントの二人の若い国王ゲールノートとギーゼルヘルに打ち勝つ役目を与えたのである。これはヒルデブラントにとってはあまりにも高い任務のように見えるが、しかし、より深く考えてみれば、そこには用意周到な計算があったのである。最初の戦いの日に捕えられるグンテル王は別として、ゲールノートとギーゼルヘルは最後に倒れる者となっていたが、しかし、敵側ではディートリヒとヒルデブラントの二人しか残っていなかった。あとでクリエムヒルトに制裁を下すディートリヒが、なおもその上にブルグントの主君を殺害するということは、『災厄』詩人にはあまり好まれなかった。そこでゲールノートとギーゼルヘルに勝つ役割はヒルデブラントに与えられたのである。そしてディートリヒにはその釣り合いのため、最後にハーゲンを捕えるという役目のほかに、フォルケールを殺すという役目が与えられたのである。

三人目の「イーリンク」はチューリンゲンの英雄伝説に由来する人物であるが、ここではクリエムヒルトに仕え、誰もニーベルンゲン族に対抗する勇気のない中であって、イーリンクは、クリエムヒルトに黄金でもって買収されたとはいえ、勇敢にハーゲンに向かって突進し、彼に傷を負わせる役目を果たす。しかし、二度目の対決でハーゲンの槍によって貫かれる。

四人目の「ゲールノート」は前段階では活動しない人物であったが、ここではエッツェル王の弟ブレーデルを打ち倒すという彼にふさわしい課題が与えられたのである。

しかし、これら一連の新しく創造された人物たちの中でも最も印象深い人物は、五人目の「リュエデゲール」である。彼はその居城ベッヒラーレンで、そこを通るブルグント人たちのよい主人となり、彼らに立派な武器を贈るのみならず、娘を若きギーゼルヘルと婚約までさせる。さらに客人たちを案内してフン族の国へ行き、そこで婿の若きギーゼルヘ

ルから、しかも自分の贈った剣でもって殺される運命にあるのである。英雄的悲劇の精神からまさに作り上げられた創作であり、最も気高い、古代ゲルマン的模範にふさわしいものである。このリュエデゲールの死には、しかし、もう一つのことが結びついている。彼の死がディートリヒに行動を起こさせるのである。第二段階においてはブレードルの死がディートリヒの突進を呼び起こしたと推定されるが、ここではその役をリュエデゲールが果たすのであり、ここでも彼は『災厄』詩人の一連の新しい創作人物の中でも最も印象的な人物であると言えよう。

リュエデゲールとの関係で挙げられねばならないのが六人目の「ギーゼルヘル」である。彼の存在でリュエデゲールの悲劇が光り輝いている⁸⁾。若きギーゼルヘルは彼の婿にふさわしい。ギーゼルヘルは十五歳と考えてよいであろう。『災厄』詩人はこの人物を激しい気性の大人たちとは対をなす魅力に溢れた若い王子として作り上げたのである。

以上の六名を『災厄』詩人は前段階の四名（グンテルとハーゲン、そしてブレードルとディートリヒ）に加えて、全部で十名としたのであったが、両陣営にそれぞれ五名ずつという賢明な計画に従って配置したのである。しかも死ぬ順番を見るがよい（本章87頁脚註7参照）。まずフン族のブレードルが死に、ついでチューリングンのイーリンク、そのあとリュエデゲール、そしてラインのフォルケール、最後にラインの国王たちゲールノート、ギーゼルヘル、ついにグンテルそしてニーベルンゲンの頼みの人ハーゲンという順序で死を遂げるのである。最後まで一つの確かな上昇を表しているのである。このように第二日目の戦いは、第一日目の戦いと対をなすものとして構成されていて、友人同志の戦い、残忍な運命の意志として我々の心を揺り動かす戦いのために取っておかれたのである。以上のような方法で、第三段階は一つの読み物の叙事詩へと拡大されていったのである⁹⁾。この第三段階の叙事詩がやがてドーナウ地方のニーベルンゲンの詩人の手に渡って、もう一つの素材であるブリュンヒルト歌謡と結び合わされて、今や『ニーベルンゲンの歌』が成立するのである。

8)すなわち、ギーゼルヘルが舅リュエデゲールを殺害するのである。

9)では、この読み物であるはずの叙事詩はなぜ書き残されなかったのであろうか。歌い物の『ブリュンヒルト歌謡』は歌われるのが目的であるから、書き残されなかったで済むが、この『古きニーベルンゲン災厄』は読み物としての叙事詩である。この点に関してアンドレーアス・ホイスラーは、すぐのちには『ニーベルンゲンの歌』が出現したので、これがこの伝説の頂点としてたくさんの写本に書かれることとなったためであると説明している。

Ⅲ. 『ニーベルンゲンの歌』の成立

1. ブリュンヒルト伝説第三段階 —— 前編 ——

では、そのように二つの素材を一つにした際、ニーベルンゲンの詩人はどのような改作を行なったのであろうか。ブリュンヒルト伝説第三段階、すなわち、『ニーベルンゲンの歌』前編においては、まずジーフリトは、生い立ち等の点で改変を施されて、もはや両親なき私生児ではないとされている。すなわち、前段階まで伝承されてきたように、荒野の中で、ある妖精の鍛冶屋のもとで成長するのではなく、父ジグムントの宮廷で全くの輝きの中で成長するのである。だから彼には今や一定の国が与えられた。ニーデルラントという国がそれであり、ジーフリトは今やその国の騎士的王子である。彼はブルゴントの国へ出かけたときも、以前の段階のようにすぐさまクリエムヒルトと結婚するのではない。ジーフリトの結婚がもはや最初にかかるのではなく、ブリュンヒルトへの求婚の旅のあとようやく、グンテルの結婚と一緒に行われるという点が主たる大きな改作点である。これまでの段階ではウォルムスに到着後ただちにジーフリトとクリエムヒルトの結婚が成立したが、今や最終段階においてはジーフリトはクリエムヒルトの愛を勝ち取るためには、グンテル王を援助しなければならない。従って、ジーフリトは今や数百詩節の長きにわたって求婚する求婚者である。彼がウォルムスにとどまり、ザクセン戦争にも参戦し、イーゼンシュタインへの旅にも助力するということは、全てジーフリトがクリエムヒルトにいかにかふさわしいかということを示している。ブリュンヒルト伝説は今や、騎士時代の興味にふさわしく、愛の物語となったのである。

こうしてジーフリトはもはや鍛冶屋で成長する孤児ではないのだから、両王妃口論における「ジーフリトは鍛冶屋の下僕であった」という言葉には全くの根拠がないことになる。しかし、詩人はその種の言葉なしで済ますことはできない。何とかブリュンヒルトにジーフリトのことを身分の違うものとして罵ることができるようにさせなければならない。そこで創り出されたのが、イーゼンシュタインのブリュンヒルトにジーフリトをグンテル王の家来だと見せかけるといふ新しい根拠づけである。こうしてジーフリトはグンテル王の家来としてグンテル王を援助するのであるが、これによって、「クリエムヒルトは家来(eigenman)を夫に持っている」というブリュンヒルトの叱責が根拠づけられたのであり、詩人はこうして受け継がれた諸関係を新たに基礎固めしたのである。従って、ブリュンヒルトの涙は、詩人によって苦しまぎれではあるが、身分違いの結婚によるものとして説明されえたのである。

さらにもっと深くあらすじの内部に入り込んでいる改変は、結婚式当日の寝室場面であると言えよう。前段階ではグンテル王はジーフリトにブリュンヒルトの身体については全ての権利を認めていたのであったが、これはニーベルンゲンの詩人及びその騎士的・宗教的聴衆にはもはや耐えられないものであった。当時の聴衆の感情によれば、グンテルは、自分の花嫁ブリュンヒルトがジーフリトに愛されるのを見るよりは花嫁が殺されるのを見るのがよい(655詩節参照せよ)のである。だから今やジーフリトはグンテル王のいる

ところで、隠れ蓑で身を隠し、乙女と格闘し、彼女を打ち負かしてグンテルに譲り渡たすという筋の展開に改変されたのである。

ブリュンヒルトは処女としてグンテルに引き渡されるという限りにおいては原型（第一段階）と同じになったが、しかし、『ニーベルンゲンの歌』におけるこの改変は、王妃たちの口論に大きな影響を残している。「あなたはジーフリトの側女だ」というクリエムヒルトの言葉は、前段階から受け継がれたものであるが、これをニーベルンゲンの詩人は、上で述べたブリュンヒルトの罵りの言葉と同様、なしで済ませることはできなかった。しかし、このクリエムヒルトの言葉は事実ではなく、今や中傷であり、ブリュンヒルトの復讐の動機はただ一つ人々の前で辱しめを受けたということだけである。従って、両王妃口論の場面も、原型のようにライン河の中でもなく、また第二段階のようににぎやかな広間でもない。それは騎士たちの競技を見るときに始まり、決定的な罵りは教会の入り口のところで、すなわち、神への祈りの前後に口にされるのである。

この侮辱によってジーフリトが暗殺されることになるが、グンテルはこの暗殺の際には前段階よりももっと意志が弱く、それに代わってハゲネが目立って暗殺の唯一の煽動者であり、推進者となっている。ジーフリトに対して復讐がなされるべきであるという言葉も、最初ハゲネの口から出るのであって、もはやブリュンヒルトの口から出るのではない。詩人はグンテルにはあまり関心を寄せておらず、彼には諫止する役割を割り当てているほどである。「あの人（ジーフリト）は我々の祝福と名誉のために生まれてきたのだ」（872, 2）という言葉は、866詩節の警告の言葉¹⁰⁾とともに、ギーゼルヘルの言葉に属していたが、それは今やニーベルンゲンの詩人によってグンテルの言葉に移されているのである。詩人がグンテルの負担軽減をねらっていることは明らかである。グンテルとクリエムヒルトはのちに実際和解することになるが、ハゲネとは決して和解しないのである。詩人は、ハゲネが断固としてその行為の責任を自分に担う後編のことを前もって考えているのである。

- 10) グンテルとハゲネがジーフリトの命を取ろうとしている話を聞いて、ギーゼルヘルは、次のように警告する。

<<Ir vil guoten recken, war umbe tuot ir daz?
jane gediente Sî frit nie alsolhen haz,
daz er dar umbe solde verliesen sî nen lîp.
j a ist es harte lîhte, dar umbe zûrrent diu wîp.>> (866)

「立派な勇士諸君が、どうしてそんなことをされるのだ。
ジーフリトは決して命をとられるほど、
人の恨みを買うような人間ではない。
女のひとたちは、つまらぬことのために争ったりするものだ。」

ハゲネが復讐の推進者となることによって、グンテルと同様に背後に隠れる結果となっているのがプリュンヒルトである。前段階においてプリュンヒルトは狩りの前にハゲネと二人だけで話し、狩りのあとの出迎えの場面においても祝辞を述べたのであったが、これらは意味深長に削除されている。殊に第二の場面は、プリュンヒルトにとって重要であった。すなわち、その場面は、その行為の創始者たる彼女を再度前景へ出させ、クリエムヒルトが悲しみながら言葉を口にする前に、プリュンヒルトに締めくくりをつけさせたのであった。ところが『ニーベルンゲンの歌』ではプリュンヒルトが小おどりして喜ぶ場面がない。全てが終わったあと、さらに百詩節あとにようやく、二、三の色あせた詩行(1100)で、クリエムヒルトの悲嘆に関連づけられてプリュンヒルトの傲慢さとその冷たさが指摘されているだけである¹¹⁾。今や『ニーベルンゲンの歌』においては、プリュンヒルトはグンテルの前での彼女の訴え(第十四歌章)以来、言葉も話さずに、もはや舞台に登場しない。「そのことをプリュンヒルトが勧めたのだ」(1010)というようなわずかの指摘が残っているだけである。しかし、プリュンヒルト像が目立たなくなっているのを叙事詩人の知識不足だと解してはならない。詩人はよく知っていたのであるが、意識的にプリュンヒルトを退場させたのである。今やジーフリートの死の文学は、すなわち、もはや最初そうであったプリュンヒルトの悲劇ではない。重心はクリエムヒルトにずらされたのである。

『ニーベルンゲンの歌』における改作の多くはこの目的に向かって作用しているのである。なるほどプリュンヒルト伝説が第一段階から第二段階へと移った際に出会ったような根本的な変動は起こらず、外面的な輪郭はほぼ残ったままであるが、しかし、意味、伝説の魂は新しいものとなっていたのである。アイスランド文学においてはプリュンヒルトがますます重要になっているのとは逆に、こうして『ニーベルンゲンの歌』においてはクリエムヒルトに重心が移されたのである。

11) すなわち、1100詩節で次のように語られている。

Prünhilt diu schœne mit übermüete saz.
 swaz geweinte Kriemhilt, unmære was ir daz.
 sine wart ir guoter triuwe nimmer mē bereit.
 s î t getet ouch ir vrou Kriemhilt diu vil herzenlîchen leit.
 (1100)

美しいプリュンヒルトは^{きょうまん}驕慢であった。
 どれほどクリエムヒルトが泣こうと、^{とんじやく}頓着するところではなかった。
 もはや彼女に対する真心などは持ち合わせてはいなかった。
 王妃クリエムヒルトも、やがて手痛い悩みを与えたのだ。

2. ブルグント伝説第四段階 —— 後編 ——

では、『ニーベルンゲンの歌』後編にあたるブルグント伝説の最終段階においてはどうか。まずニーベルンゲンの詩人は、地位あるいは気質に従って「登場人物たち」に関して若干改変を施している。「ギーゼルヘル」は、やっと武器を持つことのできる年齢に達したという少年ではなく、また「ハゲネ」ももはや妖精の子、すなわち、ブルグント国王たちの異父兄弟ではなく、彼らの家来となっている。これらは前編と後編を結びつけるために、前編に従ったものであるが、特にハゲネの場合は人間的なものへ近づけて気高くすることにも役立っている。かつて妖精が上品な王妃ウオテを強姦したという考えは、ニーベルンゲンの詩人には不愉快であったに違いない。「彼の顔は灰のように青ざめていた」という妖精の子としての外面は、選り抜きの戦士の観念には矛盾した。ハゲネを妖精の子だと罵ることは、騎士であるディエトリヒにはもはやふさわしくはなかった。クリエムヒルトの復讐も、それが血縁関係でない家来に向けられるとき、よく理解できるものであり、より人間的であり、またニーベルンゲン忠誠がその荘厳さを得るのも、ハゲネが兄弟のときではなく、家来となったときはじめてなのである。

文字通り気高く描かれているのが「フォルケール」である。フォルケールは『災厄』詩人によって吟遊詩人として創作されていたが、『ニーベルンゲンの歌』の詩人は彼を自ら三十人の家来を旅に連れてゆく主君(Lehnscherr)へと高めた。その際彼にやはりヴァイオリンを持たせ、かつては見張人であったフォルケールに、芸術家として従事するという役割をも与えた。フォルケールはさらにベッヒェラーレンに現われ、その辺境伯夫人の前で甘い調べをヴァイオリンで奏で、彼女にその歌を歌って聞かせるのであり、彼は歌う抒情詩人であり、ミンネゼンガーなのである。

内面的に気高く描かれているのが「エッツェル」である。前段階ではクリエムヒルトが少なくともまだ、ブルグント族の財宝でもってエッツェル王を誘惑し、復讐の援助をするように彼を仕向けることができたが、ここではそれらは削除され、今やエッツェルは決して不実な人物ではない。両民族の戦いとなったときも、エッツェルは、前段階では遠くから攻撃を指揮し、戦いに火をつけていたと言えるが、ここではもっと穏やかな人物で、戦いとなったことを嘆くほどである。五世紀の最も強力な戦士領主アッティラ(エッツェル)がここにおいてどのような像で終わっているかは、注目すべきである。

「クリエムヒルト」は、なるほど前段階と同様に復讐魔のままであるが、しかし、それでも彼女には「気高くする」改変が施されている。ブルグント伝説第一段階においてエッツェルへの復讐者であったクリエムヒルトは、第二段階より兄弟たちへの復讐者となったが、その際彼女の行動には二つの衝動があった。すなわち、一つはかつてのエッツェルの役割から受け継いだ財宝への欲望であり、もう一つは第二段階において創られたジーフリトのための復讐である。この二つの衝動はいわば競い合っていたが、ニーベルンゲンの詩人は二箇所以外ではそのクリエムヒルトの財宝欲望を採り消しているのである。さらに彼女の子供の死についての罪もクリエムヒルトから取り去られているが、このことはあとで

述べるほかの包括的な改作と関係がある。

「リュエデゲール」の悲劇的役割は、すでに前段階の詩人によって入念に創り出されていた¹²⁾。しかし、リュエデゲールは『災厄』ではまだエッツェルの仲人ではなかった。『災厄』では王弟ブレーデルがその役目を果たしていたと推定される¹³⁾が、そのブレーデルの役目を今や『ニーベルンゲンの歌』ではリュエデゲールがその誓いでもって果たするのである。この誓いは新しいものをもたらした。今やエッツェルへの臣従と恩義ばかりではなく、誠実な誓いによる王妃との結びつきもまた重要なのである。それは精神的な深化であり、同時にそれはクリエムヒルトの役割をも強めている。

これら一連の新しく整えられた主要人物に最後には「ディエトリヒ」も属するが、彼についてはあとで述べる。

こうして主要人物たちには前段階とは違った色合いが付け加えられていったのであるが、出来事の点で主な改変を施されたのは、まず「エッツェル王の息子殺害」である。ニーベルンゲンの詩人はここで大胆に創造的に前進したのである。前段階では次のように語られていたと推測される。クリエムヒルトは、すなわち、王弟ブレーデルを戸外のブルグント族と戦わせるよう仕向けたあと、主君たちとともに広間での饗宴の席につく。彼女は六歳の子供——その名前は恐らくオルテ (Orte) であったろう、のちにはオルトリエア (Ort-lieb) となるのである——を唆して、ハーゲンの頬を平手でなぐらせる。「母の仕業だな」と言うや否や、ハーゲンは子供の首を切り落として、母親の胸もとに投げつける。「これが、その子供を育てた報酬だ」と言って、ハーゲンはさらにその保育官の頭をも刎ねる。これによって両民族の戦いとなり、エッツェル王は自分の家来たちを呼び寄せて戦わせる。戸外でブルグント族を倒したブレーデルは、戸口をふさぎ、味方のファン族だけを広間から退出させる。ブルグント族は広間の中から逃げ出そうとするが、それをブレーデルが阻むのである。

このように語られていた手本をニーベルンゲンの詩人が改変するには四つの理由があった。まず第一に、小さな王子の平手打ちはあまりにも非宮廷的であった。第二に、母親が意識的に子供を犠牲にすることはあまりにも非人間的であった。第三に、詩人は戸外での大量虐殺をダンクワルトの名誉ある行為にするつもりであった。すなわち、新たに創作された人物のダンクワルトは、ブレーデルを打ち殺し、虐殺から免れることになっていたのである。このことは、第四の理由と結びついている。すなわち、第四に、詩人はその広間の戸口での戦いにおいてはニーベルンゲン族を目立たせて、彼らを賛美しようとしてい

12) 本章88-9頁参照のこと。すなわち、『災厄』詩人はディートリヒ伝説からリュエデゲールを取り入れたのみならず、リュエデゲールにはブルグント族を丁重にもてなす役割を与え、さらにのちにはそのブルグント族の一人若きギーゼルヘルから殺されるといふ悲劇的な人物としてリュエデゲールを登場させていたのである。

13) ちなみに、『ティードレクス・サガ』ではオージトが求婚の使者となっている。

るのである。この四つの理由からその場面は次のように改変されたのである。すなわち、クリエムヒルトはその子供を広間に連れて来る。エッツェルはその子供を叔父たちに紹介して言う。「この子は、大きくなったら、そなたたちの援助者となろう。」これに対してハゲネは「この若い王子は短命のように思われる」という下劣な返事をする。国王たちは驚く。このとき、戸口にダンクワルトが現われて、ハゲネに向かって叫ぶ。「兄上ハゲネよ、あまりにも長くすわっていなさる。味方の騎士や従士は殺されましたぞ」と。これを聞くや、ハゲネは行動を起こして、王子の頭を斬り落とす。今や両者の和平は保たれず、破滅へとひた走りに駆けるのである。

この場面は前段階では些細な筋であったが、ここでは王子の頭を刎ねるというハゲネの行為は宿命的なものにまで高められており、これは、ニーベルンゲンの詩人が大成功を収めた最もドラマチックな瞬間である。しかもその際王子の頭は、前段階のようにハーゲンによって投げつけられるのではなく、ハゲネの一撃によってそのまま母親の膝もとに飛び落ちるのである。保育官を殺す際の「これがその報酬だ」というハゲネの荒々しい言葉も、ここではもはやハゲネの口から出るのではなく、詩人による客観的な叙述(1962, 4)において語られているだけである。

このように広間の戸口でブルゴント族が目立つことによってニーベルンゲンの詩人には一つの課題が生じてきた。エッツェルとクリエムヒルト、ディエトリーヒとリュエデゲールは、広間の中で倒れてはならず、ブルゴント族の承諾でもって無傷のまま戸外へ出る必要がある。これをニーベルンゲンの詩人は「ディエトリーヒのとりなし」によって達成する。怯えたクリエムヒルトは、すなわち、ディエトリーヒに助けを求める。彼はグンテル王と言葉を交わして、広間から外へ出る許しを得る。今やディエトリーヒは王妃を小脇にかばい、また他の側にはエッツェルを護りながらその場を抜け出す。彼のあとリュエデゲールも退却の自由を得る。しかし、一人のフン族が一緒に出てゆこうとすると、フォルケールはその首を刎ねてしまうのである。

このような場面はこの作品の中にあるだけであって、以前の段階にはどこにも見いだされない。ここでは、騎士たるブルゴント族の賞賛もさることながら、とりわけ賞賛されているのがディエトリーヒの偉大さである。ディエトリーヒは、前段階ではただ静的な役割しか与えられていなかったが、ここでは彼の偉大な力は戦闘を「終わらせる」のであり、これでもってニーベルンゲンの詩人は作品の結末におけるディエトリーヒの登場の基礎固めをしているのである。「ディエトリーヒのとりなし」は重要な改作点であることが明らかであろう。

そのあと新たに始まるより激しい戦いの場面でも「英雄たちの対決」において改変が施されている。前段階では両陣営ともに五人の戦士を配置して、よく考え抜かれた対決(本章87頁脚註7参照)を生んでいた。それをニーベルンゲンの詩人はさらに名前を与えた

六名の戦士¹⁴⁾を導入して新たに組み立てたのである¹⁵⁾。

その六名のうち、ディートリーヒの家来ウォルフハルトとダンクワルトは重要な意味を持っているが、そのほかの残りの四名はむしろ埋め草である。すなわち、ヘルプフリーヒはダンクワルトの殺害者であり、イルンフリトとジゲスタップはフォルケールの犠牲となり、ハーワルトはハゲネの犠牲者となるだけである。

それよりも重要なのは次のような改変である。前段階において若きギーゼルヘルは舅のリュエデゲールを殺害する役目を担っていたが、『ニーベルンゲンの歌』ではそれが彼の兄ゲールノートに移されている。これは容易に感じ取られる緩和の一つである。しかし、リュエデゲールが客人に贈った武器によって倒れるという前段階の英雄主義的考えは保持されていて、この贈物をニーベルンゲンの詩人はギーゼルヘルからゲールノートに移しているのである。そして二人は相討ちでともに倒れるのであるが、ゲールノートがリュエデゲール自身によって死の一撃を得るならば、このことは、リュエデゲールを戦士として称え、武術の師匠ヒルデブラントの手よりもより気高い手によってゲールノートを死なせるという二重の効果を持っているのである。

一方、若きギーゼルヘルもまた、もはやその年老いたヒルデブラントによって血を流すべきではない。ギーゼルヘルは戦い相手として若い熱血漢ウォルフハルトを得て、同様に相討ちとなってともに倒れるのである。より新しいパートナーを見いだしたのである。

-
- 14) すなわち、ブルゴント族側ではダンクワルト一人だけで、フン族側ではウォルフハルト、ヘルプフリーヒ、イルンフリト、ジゲスタップそしてハーワルトの五名である。
- 15) 『ニーベルンゲンの歌』における戦いの場面についても、その経過を整理しておこう。先に記した方がブルゴント族、後がフン族であり、下線部が敗北を喫した方である。なお、括弧内は全く新しい創作部分である。脚註 7の『古きニーベルンゲン災厄』と比較し、両者の相違に注目されたい。

①ダンクワルトがブレードを迎え撃つ。

②ハゲネが二度にわたる戦いの末イーリンクを倒す。

(フォルケールがイルンフリトを倒す。)

(ハゲネがハーワルトを倒す。)

③④ゲールノートとリュエデゲールが相討ちでともに倒れる。

(フォルケールがジゲスタップを倒す。)

⑤フォルケールはヒルデブラントによって倒される。

(ダンクワルトはヘルプフリーヒに倒される。)

⑥ギーゼルヘルはウォルフハルトと相討ちでともに倒れる。

⑦グンテルは、ディートリヒによって捕えられ、王妃の命令で殺害される。

⑧ハゲネは、ディートリヒによって捕えられ、王妃自身によって殺害される。

なお、クリエムヒルトはこのあとヒルデブラントによって成敗される。

従って、ヒルデブラントにはもはやゲールノートとギーゼルヘルを倒すという役目はなくなったが、それは、彼が最後にクリエムヒルトを殺害する役目を与えられていたので、すでに好都合なことであった。ゲールノートとギーゼルヘルの代わりに、ヒルデブラントの犠牲となったのはフォルケールである。

このフォルケールは今まではディエトリーヒによって倒されることになっていたが、このことはニーベルンゲンの詩人には地位上の不調和だと感じられた。しかし、それよりも強い理由があった。ニーベルンゲンの詩人は、最後にブルゴントの二人グンテルとハゲネだけが生き残っているときにようやく、ディエトリーヒを登場させようとしているのである。

グンテルは前段階の叙事詩においてはエッツェル王の弟ブレーデルによって捕えられてクリエムヒルトの前に連れて行かれ、そのときから最後の財宝に関する質問の場面で、刎ねられた首が運ばれてくるまで、我々の視野から消えたままであったが、ブルゴント国王グンテルが一番に戦場から退場することは、ニーベルンゲンの詩人には納得がいかなかった。さらにフン族のブレーデルはグンテルを取り押さえるに足らずにあまりにも身分が低かった。身分感情と芸術的必要性がニーベルンゲンの詩人に考えを吹き込んで、グンテルは敵の最も立派な人物ディエトリーヒによって、しかもあらすじの頂点でようやく打ち負かされるということになったのである。そのように今やブレーデルはグンテルを捕えるという偉業を失ったばかりか、最初の戦いですぐさまダנקワルトに倒されてしまうこととなったのであり、戦いの中の最後を飾るのは、ディエトリーヒがハゲネとグンテルを捕えるということとなったのである。これは大きな大胆な改作点の一つである。

このような改作には、新しい創作人物ダנקワルトへの配慮、ブルゴント族の名誉への配慮、グンテル王への配慮、そしてフン族の価値低下といったいくつかの文学的動機が絡み合っているのであるが、しかし、この独自の入れ替えは、八人の伝承された英雄の死の「順序」が前段階と「同じ」であるということを妨げはしなかった¹⁶⁾。ただ唯一の例外が、国王ゲールノートがフォルケールに先行しているということだけであるが、これはゲールノートがリュエデゲールによって倒れ、その死がしっかりした位置を持っているからである。順序が高まりとして構成されているということは注目すべきであり、ニーベルンゲンの詩人は前段階のそれを尊重する術を心得ていたのである。

上記のような経過をたどっている個々の戦いは全く新しい外観を得たのであるが、そのために貢献したのが、上でも述べてきたように、とりわけディエトリーヒが違ったふうに干渉しているということであろう。この人物は『ニーベルンゲンの歌』ではさらに結末においても重要な改変を施されている。前段階においてはディエトリーヒが最後の場面で王妃クリエムヒルトを真っ二つに斬るのであったが、このことにニーベルンゲンの詩人は耐えられなかった。そこでその代役を担う最も適切な人物として、粗野な性格を保持してい

16) 脚註15の括弧内以外の下線部に注目せよ。

るヒルデブラントが選ばれたのであったが、そのことでもってディートリヒは立派な騎士に精練されているとも言えるのである。

以上のように、ホイスラーは『ニーベルンゲンの歌』の最終段階における主な改作点を指摘しているのであるが、結局のところニーベルンゲンの詩人の改作は、そのほとんどがクリエムヒルトに関連しているものであり、この新しいクリエムヒルト像によってブリュンヒルト伝説とブルグント伝説はここに初めて一つの調和的秩序へと統一されたと言えるのである。

まとめ

以上のようにホイスラーの発展段階説を見てくると、素材の片方の枝ブリュンヒルト伝説においては第一段階から第二段階を経て、『ニーベルンゲンの歌』前編へと移るに従ってブリュンヒルトに代わってクリエムヒルトが表面化してくるのが明らかである。冒頭において語られている「クリエムヒルトの鷹の夢」はなるほど前段階においてすでに語られていたものと推定されるが、しかし、それはまだブリュンヒルト伝説の枠内にとどまったままであり復讐については触れられていなかった。ニーベルンゲンの詩人はその「鷹の夢」を踏襲してクリエムヒルトを中心人物としたばかりか、さらにその中に夫のための復讐を盛り込むことによって前編と後編とを結びつけることに成功したのである。全体が夫のための復讐となったため、その夫ジーフリトもその生い立ち等の点で改作を施されねばならない。そこで今やジーフリトはニーベルンゲンの詩人によって、上でも述べてきたように、ニーデルラントの騎士的王子として登場することとなったのである。かつてニーベルンゲンの財宝を獲得し、また竜を退治して肌が不死身の甲羅と化したという前段階までのジーフリト像は、ハゲネの語りの中でしか語られていない。クリエムヒルトとの結婚も前段階のようにただちには実現しないで、長い間彼はミネを求めて悩み努める中世の騎士である。ついに果たした結婚後も、ジーフリトは前段階のようにそのままウォルムスにとどまるのではなく、一旦故国へと帰って、父のあとを継いで王位につくのである。これによってブリュンヒルトによる招待が必要となるが、ブリュンヒルトは今やこの招待とそのあとの口論のために登場しているに過ぎない。ジーフリト暗殺はブリュンヒルトの侮辱をきっかけとして今やハゲネの陰謀によって実行されてゆくのであり、これは夫のための復讐という全体の構成にも役立っている。今やジーフリトの死は、かつてのブリュンヒルトの悲劇ではなく、クリエムヒルトの復讐のためのものである。ジーフリトの死もこまかく描かれていて、クリエムヒルトの悲しみも細叙されている。『ニーベルンゲンの歌』の改作の多くはこの目的に向かって作用していると言ってもよいであろう。

素材のもう一つの枝ブルグント伝説においても、クリエムヒルトが中心になっていることは明らかである。前段階では簡単に語られていたと推測されるエッツェルとの再婚の場面についても、クリエムヒルトの苦悩が細叙されていて拡大されている。その際重要な役割を演じているのがリュエデゲールである。このリュエデゲールは前段階『古きニーベルンゲン災厄』ではまだエッツェルの仲人ではなかった。上で見てきたように、王弟ブレーデルがその役を持っていたと推定されるが、『ニーベルンゲンの歌』ではこのリュエデゲールがエッツェル王の求婚の使者となり、しかも誠実な誓いを立てることによってクリエムヒルトとの新たな結びつきが生まれてくるのである。このリュエデゲールとクリエムヒルトとの誠実関係は、ニーベルンゲンの詩人独自の意味深長な創作部分であり、これが素材に由来するということはほとんどないと言ってよいであろう。この誓いによってクリエムヒルトはエッツェル王との再婚を決意するのであるが、それはとにかくジーフリトの復讐のためである。そしてその企てを実行に移すのが、十三年後の招待である。第二段階以

来、クリエムヒルトには「財宝への執着」と「夫のための復讐」という二つの衝動があって、この二つがいわば競い合っていたのであるが、『ニーベルンゲンの歌』では愛しいジーフリトのために復讐するという事の方に重きが置かれることになったのである。この愛のための復讐が中心話題となることによって、ジーフリトの殺害者ハゲネも目立つ結果となるのは当然である。ニーベルンゲンの忠誠がもう一つのテーマとなるのである。ブルグント族たちがかつての主人公の役割を取り戻すのである。このニーベルンゲンの忠誠とクリエムヒルトの亡き夫に対する誠実な愛とが真正面から衝突し、激しい対立を繰り返しながら悲劇が高まってゆくところにこの作品の特質があるのであるが、これについては本研究第Ⅱ部「悲劇の構図」において詳しく論ずる予定である。

それはともかく、以上のようにニーベルンゲンの詩人によって施された改作点を振り返って『ニーベルンゲンの歌』全体の構成に注目してみよう。ニーベルンゲンの詩人の改作によって全体のあらすじが前編と後編で釣り合うように構成されたのである。『ニーベルンゲンの歌』は、すなわち、前編と後編とがともに結婚と招待という出来事から成り立ち、しかもそれらはいずれも十数年という時間によって隔てられていることがわかる¹⁷⁾。北はニーベルンゲンの国及びイースラントから南はフン族の国に至まできわめて広範囲な空間が物語の舞台となっている『ニーベルンゲンの歌』において、あらゆる人物たちは前編では二度にわたってライン河畔のウォルムスに集結し、後編では同じく二度にわたってドーナウ河畔のエッツェルンブルクへと集合するのである。ウォルムスとエッツェルンブルクとを拠点とした結婚と招待の旅を軸にして、前編と後編とが均整のとれた二重構造を有していることが明らかである。上で触れる機会のなかったジーフリトの募兵の旅を含めて、全体を図式化するとすれば、巻末の図式Ⅳ(343頁)のようにまとめることができるであろう¹⁸⁾。『ヴォルスンガ・サガ』や『ティードレクス・サガ』では、構成の点で粗雑な傾向があり、単に素材を結び合わせただけという観を呈していたが、『ニーベルンゲンの歌』では全体が有機的な関連を有しつつ、しかも前編と後編とが対をなして構成されているのである。このような整然とした構成を詩人はクリエムヒルトという人物を中心に置くことによって初めて為し遂げることができたのであり、『ニーベルンゲンの歌』の詩人はここにおいて初めて二つの素材を発展的に統一することに成功したとすることができるのである。

17) 前編と後編との間もまた十三年間(vgl. 1142, 1)という時間で隔てられている。原文ではもちろん前編と後編の区別はつけられてないが、一般の慣例に従って本研究においても両編に分けて考えることにしたい。

18) 前編と後編との間の十三年間、及び両編における結婚と招待との間の十年間あるいは十三年間という時間は、写本Cではいずれも十二年間に統一されている。(vgl. C772, 2; C1157, 2; C1417, 4)

第三章 キューレンベルクの詩人と

『ニーベルンゲンの歌』

『ニーベルンゲンの歌』は、第二章の結論として得たように、整然たる構成を有する作品である。それは単に出来事が次から次へと展開する絵巻物のような構成になっているのではなく、原因と結果の連鎖に沿って主題が展開してゆく統一的構成を有している。そのように個人の詩作にしてはじめて可能な統一的構成を有する『ニーベルンゲンの歌』は、では一体誰によって詩作されたのであろうか。興味ある問題であり、また『ニーベルンゲンの歌』研究に携わる限り、一度は考えてみるべき問題であらう。この問題に関してはこれまでも数多くのニーベルンゲン研究者たちがさまざまな考察を試みてきたのであったが、しかし、いずれも納得のゆく結論は導き出されなかった。思うに、恐らくこれから先にも『ニーベルンゲンの歌』の作者の名前は求められないことであらう。それは不可能事に等しいのである。

それにもかかわらず、ここで敢えて一度取り上げて検討してみる価値のある論説が一つある。1862年発表のフランツ・プファイファ (Franz Pfeiffer) の研究書『ニーベルンゲンの歌の詩人』(Der Dichter des Nibelungenliedes)¹⁾がそれである。この論説は発表されてからすでに一世紀以上もの年月を経てきているが、その結論部にはなおも疑問が残るとしても、現在の我々のニーベルンゲン研究には恰好の資料を提供してくれるのである。プファイファの唱えるところは、結局のところ、キューレンベルクの詩人 (Der von Kurenberg) ないしはキューレンベルガー (Kurenberger) —— プファイファ自身はキュルンベルガー (Kurnberger) と綴っている —— と現在呼ばれている詩人が『ニーベルンゲンの歌』の作者だというのである。そしてその名をマゲネス・フォン・キュルンベルク (Magenes von Kurnberg) といい、それはパッサウの僧侶レギンマール (Reginmar, 1121-38) の文書に証明として記載されているという。しかし、そのキューレンベルクの詩人と『ニーベルンゲンの歌』の詩人とを同一人物だと見なすと、そこからさまざまな問題が生じてくる結果となり、ヴィルヘルム・シェラー (Wilhelm Scherer)²⁾などもこの論説を非難している。

キューレンベルクの詩人はドイツ文学史の上では初期ミンネザングの最初の詩人として名前が挙げられるに過ぎず、その歌謡も現在の我々には全部でわずか十五詩節しか残されていない。それらの十五詩節は以下の執筆にも必要となってくるので、巻末(346-

1) Franz Pfeiffer: Der Dichter des Nibelungenliedes, Wien, 1862.

2) Wilhelm Scherer: Der Kurenberger. ZfdA. 17, 1874. S. 561-81.

350頁)に付録Iとして載せておく³⁾が、詩節の数が少ないこともあって解釈することは我々にはかなりむづかしい。西洋の研究にあっても、キューレンベルクの詩人の歌謡は部分的にもまだ不明瞭のところが多く、従って全体的にも不明瞭のままで、解釈もまたさまたけである。しかし、この歌謡の詩節形式であるいわゆる「キューレンベルクの詩節」は、第二章において述べたように、ブルグント伝説第三段階の詩人によってその叙事詩のために用いられたと言われており⁴⁾、ここでキューレンベルクの詩人の歌謡を『ニーベルンゲンの歌』と比較検討してみるのも決して無駄ではあるまい。

そこで本章では、プファイファの論説を引き合いに出して、その両者を比較検討しながら、考察を進めてゆくことにしたいが、しかし、ここではプファイファの論説の是非を問うことが目的ではなく、この考察の最終的な目的は、キューレンベルクの詩人の歌謡と『ニーベルンゲンの歌』とを比較することによって、むしろ両者のそれぞれの特徴をより正確に把握することにあるということを前もって付け加えておかなければならない。

I. キューレンベルクの詩人と『ニーベルンゲンの歌』

1. 「私有財産」としてのニーベルンゲン詩節

『ニーベルンゲンの歌』は、周知の通り、四行から成る詩節で構成されており、この詩節のことを一般に「ニーベルンゲン詩節」(Nibelungenstrophe)と呼んでいる。ところで、このニーベルンゲン詩節は当時一般に用いられていた、民衆の創造的な精神から生まれた伝統の詩節形式なのであろうか。それとも一個人の独創的な詩的技巧なのであろうか。この問題に結論を下すために、プファイファは詩節構成の発生について考察を進めている⁵⁾。以下、簡単にその考察を要約してみよう。

まず古代の諸民族に関して言うと、彼らは叙事的詩(die epische Poesie)だけしか知らず、それは詩節構成にはなっていなかった。確かにスカンディナヴィア北方の古代の詩、エッダ歌謡においては非常にしばしば詩節に分けられた構成が認められるが、しかし、それは決して規則的ではなく、耳よりはむしろ目だけに確認されうるものである。古代ゲルマン人種の叙事的詩を形成していたのは長詩句(Langzeile)であり、とにかくそれは詩節構成になっていなかった。それは至るところで一般に用いられたいわば「共有財産」だったのである。九世紀にオトフリート(Otfried)がラテン語の賛美歌から脚韻を借りてきて、頭韻の代わりにそれをドイツ語の詩に取り入れたのであったが、しかし、以前からの叙事的長詩句(epische Langzeile)の性格は変わらないままであった。十二世紀初めになってようやく抒情詩とともに詩節構成が現われたのである。なるほど十二世紀以前にも、――

3)引用は Des Minnesangs Frühling, I. Texte, bearbeitet von Hugo Moser und Helmut Tervooren, (S. Hirzel Verlag) Stuttgart 1977. に拠る。

4)第二章84-5頁参照

5)Vgl. Franz Pfeiffer : a. a. O., S. 7-17.

たとえそれらの作品が現在我々の手許に遺されていないにしても、——恐らく民族的な抒情詩が存在していたのであろうが、しかし、それらは抒情詩的(lyrisch)というよりはむしろ叙事詩的(episch)であったろう。十字軍が始まってのち、否、一部は十字軍の結果として、ようやく個性的すなわち主観的な抒情詩が発展してきたのである。民衆全体の所産である叙事詩が、例えばある民族全体の歴史的過去の出来事や宗教的觀念を詩的に神々しくするのに対して、抒情詩的歌謡は個人の産物であり、個人的思想感情の表白、すなわち個性の表現である。そのようにして抒情詩が独立性に目ざめるとともにすぐさま詩節構成が現われた。詩の内容とともに形式も変化したのである。当初は単純素朴で飾りがなかった詩節形式も、抒情詩がより広い範囲を描写するようになればなるほど、それだけ一層高度な技巧をともなって発展していった。もちろんこの芸術豊かな詩節構成はただ抒情詩のみに限られていただけではなく、すぐさま叙事詩にも取り入れられていった。そしてその際、注目すべきことは、詩節を創り出した者はそれと同時にその所有者であったということである。言い換えるならば、詩節は他人によって模倣されることは許されるとしても、その詩節を変えないでそのまま他人が使用することは許されなかった。つまり、プファイファは、その創造者の文学的所有権が不文律として行使されていたと主張する。従って、『ニーベルンゲンの歌』に用いられた詩節は当然のこととして一個人の独創的な詩的技巧であると言えることができる。とにかくニーベルンゲン詩節は自由に一個人が発見したもので、決して伝承されたり、あるいは新しく民衆から生じてきたいわば「共有財産」としての詩節ではなかった。このようにプファイファはニーベルンゲン詩節を一個人の芸術的技巧であると認めて、キューレンベルクの詩人の詩節に注目する⁶⁾。その詩節の一つにこういうのがある。

<<Ich stuont mir nehtint späte an einer zinne,
dô hört ich einen rîter vil wol singen
in Kûrenberges wîse al ûz der menigîn.
er muoz mir diu lant rûmen, alder ich geniete mich sîn.>>

「私は昨晚おそく胸壁に佇んでいた。

その時私は一人の騎士がすばらしく歌うのを聞いた。

キューレンベルクの調べで群衆の中から歌っていた。

彼は私の国を去るべきか、それとも私が彼の愛を受け入れるであろうか、と。」

この詩節はその作者に因^{ちよ}んで詩節が命名された唯一の例である。「キューレンベルクの調べで」(in Kûrenberges wîse)と称され、それでもって明らかに作者固有の財産であ

6) Vgl. ebd. S. 17-8.

ると表現されている。しかもこの詩節は『ニーベルンゲンの歌』のそれとよく似ている。従って、ここでキューレンベルクの詩人と『ニーベルンゲンの歌』の詩人とは同一人物ではあるまいかという一応の可能性も生じてくるのである。両者を同一人物だと主張するプファイファの論説の根拠はそのほかに一体どこにあったのであろうか。

2. フランツ・プファイファの論説の根拠

プファイファは何よりもまずキューレンベルクの詩人の歌謡と『ニーベルンゲンの歌』における言語の比較考察を行い、両者が言い回しの点で一致していることに注目している⁷⁾。まず>>einen leides manen<<「ある人に苦しみを思い出させる」という慣用句——あまり使用されない表現——が『ニーベルンゲンの歌』(1699, 1763, 1784, 2315詩節)にもキューレンベルクの詩人の歌謡(I-2)⁸⁾にも出てくれば、同様にあまり用いられない慣用句>>einen trübrigen muot gewinnen<<「悲しい気持ちに襲われる」が『ニーベルンゲンの歌』(188)にもキューレンベルクの詩人の歌謡(II-4)にも出てくる。また「体験する」という意味の>>geleben<<が『ニーベルンゲンの歌』(695, 704, 847, 1247, 1379, 2122)に出てくれば、キューレンベルクの詩人の詩節(I-2)にも出てくる。また>>daz lant rûmen<<「その国を去る」という表現は、確かに他の詩人によっても用いられているが、しかし、『ニーベルンゲンの歌』(66, 251, 360, 446, 701)においてよりも頻繁に出てくるものはほかにはないし、またキューレンベルクの詩人の歌謡(II-2, II-10)にも二度出てくる。そして>>sich eines dinges genießen<<「ある事に喜んで従事する」という表現が『ニーベルンゲンの歌』(1056)にもキューレンベルクの詩人の歌謡(II-2)にも用いられている。さらに、あまり用いられない表現>>einem ein dinc benomen<<「ある人からある者を奪う」が前者では544, 1033, 1988詩節に、後者ではII-2に現われている。そしてまた>>eines künde gewinnen<<「ある人と知り合いになる」という表現が『ニーベルンゲンの歌』(88, 480)でもキューレンベルクの詩人(II-1)にも使われているのである。

以上のように、プファイファは『ニーベルンゲンの歌』とキューレンベルクの詩人の歌謡における語法の一致を主張するのであるが、ここで我々は一応そのような一致は「偶然」ではあるまいかと疑問を抱くことができる。しかし、それをあらかじめ予測してプファイファはこう言う。「それを偶然だと思ふ者は他の詩人との比較を続けてもらいたい。たとえ全ての歌謡を読み終えたにしても、ここで提示された例の半分をも見つけることができないことに気がつくだろう⁹⁾」と。この言葉の真偽の判断には長い歳月の研究を前提とするので、これは今後の課題として残しておくほかなす術はないが、ただここで注目し

7) Vgl. ebd. S. 25-6.

8) 番号は巻末に載せた歌謡のそれに従う。

9) Franz Pfeiffer : a.a.O., S. 26.

たいのは、キューレンベルクの詩人と『ニーベルンゲンの歌』の詩人とを結びつける決定的なものとしてさらにプファイファは両者における文学的特質を挙げている¹⁰⁾ ということである。すなわち、キューレンベルクの詩人の歌謡の描写には飾り気がほとんどなく簡単で、その内容も本質的にはのちの主観的な抒情詩の作品とは異なっている。それは純粹な意味での恋愛歌謡ではなく、抒情的なものと叙事的なものとが溶け合っているいわば抒情的物語詩とでも言うべき歌謡である。反対に、『ニーベルンゲンの歌』には抒情的なものが溶け込んでおり、そのことは作品そのものからでも容易に読み取ることができる。

<<Swenne ich stān aleine in mīnem hemedē,
unde ich gedenke an dich, ritter edele,
sō erblüet sich mīn varwe, als der rōse an dem dorne tuot,
und gewinnet daz herze vil manigen trūrigen muot.>>

「私が一人肌着のままで佇みながら、
貴い騎士よ、あなたのことを想えば、
私の顔の赤く燃えるさまは、まるで薔薇が棘のそばで赤くなるかの如く、
そして心は多くの憂いに襲われてしまうのです。」

このキューレンベルクの詩人の歌謡で若い貴婦人が赤面するのを >>sō erblüet sich mīn varwe <<というふうに描写しているこの表現は、実は『ニーベルンゲンの歌』にも用いられている。すなわち、クリエムヒルトの兄弟たちがザクセン勢との戦いから無事帰還したという報告とともにジーフリトの英雄的な活躍の知らせを受け取ったときのクリエムヒルトの表情がそれである。

do erbluete ir liehtiu varwe, dō si diu mære reht' ervant. (240,4)
彼女がこの吉報を聞きとったとき、彼女の明るい顔は紅に燃えた。

そしてこれに似た同じような表現がそのあとにもう一度出てくる。

Dō si den hōhgemuoten vor ir stēnde sach,
do erzunde sich sīn varwe. ... (292,1-2)

彼女が眼前に立っている意気揚々たる勇士に目を注いだとき、
彼の頬は赤く燃えた。 . . .

10) Vgl. ebd. S.23-5. u. S.27-8.

『ニーベルンゲンの歌』のこの二箇所の表現はそれぞれ第四歌章と第五歌章において描写されているが、この両歌章、殊に第五歌章では抒情的な感情が明確に吐露されていると言うことができる。第五歌章に属する281-3詩節にはこうある。

Nu gie diu minneclîche, also morgenrôt
tuot ûz den trûeben wolken. da sciet von maneger nôt,
der si da truog in herzen und lange het getân.
er sach die minneclîchen nu vil hêrlîchen stân. (281)

Jâ lûhte ir von ir wæte vil manec edel stein.
ir rōsenrōtiu varwe vil minneclîchen scein.
ob iemen wûnschen solde, der kunde niht gejeihen,
daz er ze dirre werlde het iht scæners gesehen. (282)

Sam der liehte mâne vor den sternē stat,
des scîn sô lûterlîche ab den wolken gât,
dem stuont si nu gelîche vor maneger frouwen guot.
des wart dâ wol gehæhet den zieren helden der muot. (283)

さながら^{あけぼの}曙の光が暗い雲間から射すように
今や愛らしい姫は姿をあらわした。長いあいだ彼女を
胸に想いつづけてきた勇士（ジーフリト）は積もる悩みをのがれて、
愛らしい姫の気高く^{たかす}佇む姿をばしみじみと見たのである。

彼女の身につけた衣裳からは幾多の宝石が光を放ち、
また彼女のばら色の頬はろうたげに輝いた。
どんな人がどう考えてみてもこの世において、
これ以上美しいものを見たことがあるとは言うことができまい。

雲間から^{こころ}皓々たる光を放つ満月が、
星々を圧して照りわたるように、
彼女もまた数あるみめよき婦人の前に照りまさっていた。
そのため、たくましい^{ますらお}益荒男たちも、胸をときめかした。

クリエムヒルトが、暗い雲の中から突然現われてくる美しい曙の光に喩えられて、初めて
ジーフリトと出会うことになるこのすばらしい描写、『ニーベルンゲンの歌』の中でも最

も抒情性を漂わせているこの胸ときめくほどのすばらしい描写は、叙事詩人というよりはミンネゼンガーとしての溢れ出る感情を吐露したものではあるまいか。ここにおいては叙事詩の中に濃い抒情詩的色彩が溶け込んでいるのである。それは、あのキューレンベルクの詩人の歌謡の中に叙事詩的なものが含まれているのとちょうど逆の現象であって、両者は相互に特徴を決定づけているのである。

キューレンベルクの詩人と『ニーベルンゲンの歌』の詩人とを同一視することのできるものとしてさらにプファイファは、キューレンベルクの詩人の故郷が『ニーベルンゲンの歌』の詩人と完全に一致することを指摘している¹¹⁾。『ニーベルンゲンの歌』はドーナウ河周辺の地理に詳しいオーストリアの詩人によって書かれたと推測するのが現在の定説であるが、そのドーナウ河の岸辺がキューレンベルクの詩人の故郷でもあったというのである。そしてその名をマゲネス・フォン・キュルンベルクと言ひ、その名はパッサウのレギンマル僧侶の文書に証明として記載されている——これがプファイファの論説の結論である。

3. フランツ・プファイファの論説の問題点

しかしながら、キューレンベルクの詩人を『ニーベルンゲンの歌』の作者だと認めた場合、そこで問題となってくるのは、キューレンベルクの詩人が活動していた期間と『ニーベルンゲンの歌』の成立年代との食い違いである。キューレンベルクの詩人が活動していた期間は、一定の記載がないので正確には決定されないが、しかし彼は、文書上1143-71年と証明されうるディートマル・フォン・アイスト (Dietmar von Eist) にとにかく先行するのであるから、キューレンベルクの詩人の活動期間は十二世紀の前半、およそ1120-40年であると推定される¹²⁾。それに対して『ニーベルンゲンの歌』が1190年以前に成立したことは決してありえない事実である。このことの証明になるのが詩と韻の性質である。詩と韻に関連してその状態と変化を我々が十二世紀の最後の十年間ほど正確に知ることのできる期間はドイツ文学史上ほとんど例がない。すなわち、その少し前の1185-90年にハインリヒ・フォン・フェルデケ (Heinrich von Veldeke) が彼の叙事詩『エネイーデ』 (Eneide) を詩作したが、この叙事詩においてはじめてドイツで芸術的な自覚をもって、規則的な詩の構成のほかに韻の完全な精確さ、韻の完全な一致が取り入れられたのである。それ以前にあっては韻に恣意と不正確さが支配し、ただ単に類音が支配していたに過ぎなかった。ハインリヒ・フォン・フェルデケが同時代人のもとで中世全体を通じて宮廷文学の「父」であったのは、すなわち、この類音が彼によって

11) Vgl. ebd. S. 28.

12) ただし、この詩人の活動期間については研究者によって若干の相違があり、1150-70年とする者もある。いずれにしても『ニーベルンゲンの歌』との間にかなりな年代の食い違いがあることには変わりはない。

はじめて規則と法則にまで高められたからである。彼以前にあっては、例えば kint — dinc、lîp — zît、wart — stark、lop — got、klagen — haben、sêle — ere などといった韻があらゆる詩人に一般に用いられた韻だったのである。もし『ニーベルンゲンの歌』が現在ある形で1190年以前に詩作されていたならば、それは確かにそのような韻を示しているであろう。しかし、『ニーベルンゲンの歌』においてそのような韻は全くないのであって、『ニーベルンゲンの歌』の韻は十二世紀末から十三世紀半ばまでに生じたたいの詩におけると同じほど純粹かつ精確なのである。今日我々に知られている『ニーベルンゲンの歌』は、だからどうしてもこの時期(1200年頃)に属しなければならない。

従って、キューレンベルクの詩人の歌謡と『ニーベルンゲンの歌』との間には六十年から八十年というかなりな年代の食い違いがある。しかし、そのことをプファイファは認識していたのであるが、そのかなりな年代の食い違いは問題ではないと言う。なぜなら、彼の考えによれば、現在ある形の『ニーベルンゲンの歌』は詩人のもともとの作品ではなく、より古い詩をのちに、宮廷社会の趣味に従って改作したものであると考えるからである。その際改作はただ単に韻に限られたことなく、全体にわたって補足されたりして量がふやされたのであり、しかもこのことは、カール・ラッハマンによって考えられている方法——すなわち、それによれば改作者は古い詩節を全てそのままにしておいてところどころに新しい詩節をさし込んで拡大したのであるとするラッハマンの方法で起こったのではないとプファイファは考えるのである。

それでは一体その改作者とは誰だったのであろうか。プファイファはその改作以前の原型の作者を追求していたように思える。それならば、たとえキューレンベルクの詩人が『ニーベルンゲンの歌』の詩人だとしても時代の食い違いで矛盾がないわけである。しかし、形式と内容は一つである限り、プファイファの言う原型の『ニーベルンゲンの歌』と現在我々に伝えられている『ニーベルンゲンの歌』とは内容もかなり異なったものであるに違いない。そして我々がここで問題にしているのは、プファイファの言う前段階の作者ではなく、今日あるテキストの原作者である。この点、プファイファの視点は我々のそれと相容れないものがある。

さらにプファイファの見解を否定する決定的な根拠が挙げられる。プファイファのようにキューレンベルクの詩人と『ニーベルンゲンの歌』の詩人とを同一人物と見るならば、先にも述べた通り、ニーベルンゲンの詩人は1120—40年頃の人となる。しかし、この1120—40年では、のちにホイスラーの研究によって明らかにされることになる『ニーベルンゲンの歌』の前段階『古きニーベルンゲン災厄』(Die ältere Nibelungenot)¹³⁾ さえ発生しなかった頃である。以上のことを考え合わせると、プファイファの言うキューレンベルクの詩人と『ニーベルンゲンの歌』の詩人との同一視は適切ではないように思われる。

13) 巻末(340頁)のホイスラーの『ニーベルンゲンの歌』系図を参照のこと。

Ⅱ. 『ニーベルンゲンの歌』における抒情的特質

しかし、プファイファの考察は、キューレンベルクの詩人を『ニーベルンゲンの歌』の詩人に結びつけて、両者を比較検討することによって両者のそれぞれの特色を的確に理解させてくれる機会を我々に与えてくれたという点で、それなりに資するところがあったのではあるまいか。プファイファの指摘するように、『ニーベルンゲンの歌』には抒情詩的要素も含まれているのである¹⁴⁾。特にクリエムヒルトとジーフリトが初めて出会うことになる第五歌章においてはまさにその通りである。ニーベルンゲンの詩人はその印象的な出会いの日として聖霊降臨祭の朝を選び、饗宴をその背景に選んでいる。クリエムヒルトは彼女の母ウオテと多くの着飾った美しい婦人をつき従え(279, 1-3)、さながら曙の光が暗い雲間から射すように姿を現わした(281, 1-2)。長い間彼女を胸に想いつづけてきたジーフリトは、ようやく積もる悩みをのがれて、愛らしい姫の気高く佇む姿をばしみじみと見た(281, 2-4)。彼女の身につけた衣裳からは多くの宝石が光を放ち、また彼女のぼら色の頬はろうたげに輝いた(282)。雲間から明るい光を放つ満月が、星々を圧して照り渡るように、彼女もまた多くのみめよき婦人の前に照りまさっていた(283)。王子ジーフリトとしては、哀歓交々いたる思いであった(284, 4)。

Er dāht' in sīnem muote:	<<wie kunde daz ergān,
daz ich dich minnen solde?	daz ist ein tumber wān.
sol aber ich dich vremeden,	sō wære ich sanfter tōt.>>
er wart von den gedanken	vīl dicke bleich unde rōt. (285)

Dō stuont sō minneclīche	daz Sigmundes kint,
sam er entworfen wære	an ein permint
von guotes meisters listen,	alsō man im jach,
daz man helt deheinen	nie sō scænen gesach. (286)

彼は心に思った、「どういふ間違いで、
姫を恋するようになったのか。それはとんでもない思いあがりだ。
さりとして思いあきらめるくらいなら死んだ方がよほどまだ。」
思い乱れるあまりに、彼は赧^{あか}くなったり蒼^{あお}くなったりした。

このときジゲムントの王子が優雅な姿で立っているさまは、
さながら名匠^{わざ}の技をもって羊皮紙に描いた画のようであり、
いかなる若武者でもこれほどに端麗な男は、

14) Vgl. Franz Pfeiffer : a. a. O., S. 27-8.

ついぞ見たことがないと人々が噂したほどであった。

このようにクリエムヒルトが姿を現わすさまを暗い雲間から輝き出てくる曙の光に喩え、クリエムヒルトのその輝かしい美しさをも、雲間から光を放つ満月が星々を圧して輝き渡るさまに喩え、またジーフリトを名匠が羊皮紙に描いた画に喩えているこの第五歌章は、ほかの歌章とは違って素材となる伝説もなく、ニーベルンゲンの詩人の自由な創作である。古代ゲルマンの英雄歌謡に魅せられていたニーベルンゲンの詩人も、一方では当時の汎ヨーロッパ的な宮廷文学の影響下にあったことは間違いない。ニーベルンゲンの詩人はジーフリトとクリエムヒルトの物語をミンネ文学の形式で表現し、全体の愛の物語はミンネザング風に刻みこまれた感情と思考において発展しているのである。この二人のミンネについてはのちに第Ⅱ部において詳述する予定であるが、とにかく、古代ゲルマンの素材を宮廷文学へ移行したことは、ニーベルンゲンの詩人の新しい偉大な業績であったとすることができるであろう。

Ⅲ. キューレンベルクの詩人の歌謡における特質

一方、キューレンベルクの詩人の抒情詩的歌謡には叙事詩的要素が溶け込んでいると言える。我々はここで彼の作品を具体的に取り扱って、その特質を考察してみよう。

キューレンベルクの詩人の歌謡はきわめて単純な形式に、素朴な感情が盛り込まれていて、飾り気もほとんどなく、韻における多様性も少なく、本質的にはのちの主観的な抒情詩の作品とは異なるものである。

<<Ez hât mir an dem herzen vil dicke wê getân,
daz mich des geluste, des ich niht mohte hân
noch niemer mac gewinnen. daz ist schedelîch.
j ð ne mein ich golt noch silber: ez ist den liuten gelîch. >>

「私の心は非常にしばしば悲しくなります。

私は、まだ自分が手に入れたことのないものが

欲しくてたまらないのです。残念なことです。しかし、

金や銀のことを言っているのではありません。それは人々に同じことなのです。」

この歌謡で「それは人々に同じことなのです」とは、すなわち、「恋人」のことを言っているのであり、要するに、この詩節が意味するところは「私が欲しくてたまらないのは恋人です」という切ない気持ちである。このように直接的な表現を避けて、間接的な表現手段をしばしば用いているのもキューレンベルクの詩人の特徴である。しかし、彼は個人的な感情を吐露したのではない。個人的な感情を客観化しているところにキューレンベルクの詩人の歌謡の大きな特色がある。

<<Vil lieben vriunt verkiesen, daz ist schedelîch;
swer sînem vriunt behaltet, daz ist lobelîch.
die site wil ich minnen.
bite in, daz er mir holt sî, als er hie bevor was,
und man in, waz wir redeten, dô ich in ze jungest sach.>>

「愛するお方に去られてしまうのは、心の痛いことです。

愛するお方を傍に持っていることは、うれしいことです。

そういう習慣を私は好みます。

あの方が以前のように私に好意を寄せるよう頼んで下さい。

この前お会いした際私たちは何を言い合ったか、思い出させて下さい。」

この詩節においても最初の二行でまず一般的な事柄を述べて、次に「そういう習慣を私は好みます」というふうに自分の意見を述べる。そしてその次の最後の二行で締めくくりとして個人の感情が吐露されている。その詩節においても見捨てられた女性の切ない気持ちがひしひしと感ぜられる。男と女の「別離」というモチーフはキューレンベルクの詩人の歌謡に一貫したモチーフである。I-2 の歌謡もそうであるし、II-1、II-8、II-11 の歌謡もまた明らかにそうであると言える。しかし「別れ」のモチーフの代表的な例は何と言っても「鷹の歌」——キューレンベルクの詩人の歌謡の中でも二詩節が互いに関連し合っている唯一の例の「鷹の歌」であろう。以下、もう少し正確なキューレンベルクの詩人の特色を把握するために、ここでその二詩節を詳しく考察してゆくことにしたい。

<<Ich zoch mir einen valken mere danne ein jar.
do ich in gezamete, als ich in wolte han,
und ich im sin gevidere mit golde wol bewant,
er huop sich uf vil hohe und vlouc in anderiu lant.

Sit sach ich den valken schone vliegen,
er vuorte an sinem vuoze si dine riemen,
und was im sin gevidere alrot guldin.
got sende si zesamene, die gelieb wellen gerne sin!>>

「私が一羽の鷹を飼育して一年以上になった。
私が鷹を思い通り飼育し、
そして私が鷹の翼を黄金で飾ってやった時、
鷹は空高く舞い上がり他国へ飛んで行った。

それからのちに私は鷹が美しく飛ぶのを見た。
鷹はその足に絹の帯をなびかせ、
鷹の翼は一面黄金色に輝いていた。
神よ、愛し合う二人を一緒にし給え。」

この「鷹の歌」でまず問題となるのは、第一詩節四行目の鷹が飛び立つ(vliegen) ということはただ単に「飛び立つ」という動作のみを意味しているのか、それともそれは象徴的に解釈されなければならないのかということである。この問題に関して、ドイツの中世抒情詩研究者たちは、世界文学の中からこれに似た例を多く集めて議論をたたかわせてきたのであったが、彼らがそろって疑いをいれなかった点の一つだけある。すなわち、「さすらい」というモチーフが問題であり、そのモチーフの核心は「鷹」を「恋人」と見なすこ

とから成り立っているということである。例えば、『ニーベルンゲンの歌』においても「鷹」＝「恋人」（つまり、この叙事詩では「夫」）ということが暗示されている。

In disen hohen  ren troumte Kriemhilde,
wie si z ge einen valken, starc, sc en' und wilde,
den ir zw ne arn erkrummen. daz si daz muoste sehen,
ir enkunde in dirre werlde leider nimmer gescehen. (13)

Den troum si d  sagete ir muoter Uoten.
sine kundes niht besceiden baz der guoten:
<<der valke, den du ziuhest, daz ist ein edel man.
in welle got beh eten, du muost in sciere vloren h n.>> (14)

この栄華の中にあつてある時クリエムヒルトは夢を見た。
それは彼女が飼っていた強い、美しい、^{たけ}猛しい鷹が、
二羽の鷲の爪に引き裂かれたところであつた。
彼女にとってこんなに悲しいことはほかにあろうとも思われなかつた。

彼女はこの夢のことを母君ウオテに物語つた。
母は愛らしい姫に、次のような夢の占いを聞かせねばならなかつた。
「そなたが飼っていた鷹^{とのか}というのは気高い殿御のことじゃ。
運が悪いと、そなたは殿御をすぐに失わねばなるまい。」

そしてその「鷹」が暗示していた「殿御」とはそのあとの詩節によってジーフリトその人であるということが明らかになる。

Kriemhilt in ir muote sich minne gar bewac.
s  t lebte diu vil guote vil manegen lieben tac,
daz sine wesse niemen, den minnen wolde ir l p.
s  t wart si mit  ren eins vil k enen recken w p. (18)

Der was der selbe valke, den si in ir troume sach,
den ir besciet ir muoter. wie s re si daz rach
an ir n hesten m gen, die in sluogen sint!
durch s n eines sterben starp vil maneger muoter kint. (19)

クリエムヒルトは心のうちで恋というものをあきらめた。
こうして、いとしと思うような殿御をも知ることなしに、
この優しい姫は長い年月、楽しい日々を送りむかえた。
だがやがて彼女も、晴れて或る勇士の妻となる日が来た。

この勇士こそ、姫が夢に見て、母君が占ったあの鷹であったのだ。
後にこの勇士を殺害した自分の近親の人々に、
彼女はどれほどひどい復讐を遂げたことであつたろうか。
この一人の死のために幾多の母の子らは命を失ったのだ。

このように「鷹」は「殿御」、つまりは「恋人」を暗示しているということを吟味しながら、キューレンベルクの詩人の歌謡を考察してゆくならば、よりによってこのキューレンベルクの詩人の「鷹の歌」が一羽の鷹を失ったことへの単なる嘆きに過ぎないという解釈は不十分ではあるまいか。この歌謡における「鷹」はすなわち「恋人」であるというふうに象徴的に解釈されなければならないのである。

それでは次に、この「鷹」を象徴的に解釈しなければならないならば、この歌謡は、恋人に見捨てられた女性の嘆きというモチーフに「嫉妬」というモチーフがさらに加わるのであろうか。すなわち、第二詩節の飾りである「絹の帯」(sîdîne riemen)は第一詩節の「私が鷹の翼を黄金で飾ってやった」(ich im sîn gevidere mit golde wol bewant)飾りとは別のもの、ある新しい結びつきを示すものとして理解すべきであらうか。第一詩節と第二詩節におけるこの「飾りの機能」の問題に関して、ここで注目したいのはヴィルヘルム・シェーラー(Wilhelm Scherer)の現代語訳である¹⁵⁾。

<<Ich sah seitdem den Falken oft in stolzem Flug.
Doch ach! an seinen Fü ß en er seidne F e s s e l n trug,
Ein f r e m d e s Gold ihm glänzte roth im Gefieder——.
O sende Gott den Liebsten, sende mir ihn wieder!>>

キューレンベルクの詩人の原作テキストには何の記載もない「見知らぬ」(fremd) 黄金は、このシェーラーの解釈によれば、「見捨てられた」というモチーフに「嫉妬」というモチーフを付け加えていると言える。そして「鎖」(Fesseln) はここでは鷹の付属品の言葉で

15) Wilhelm Scherer : Vorträge und Aufsätze zur Geschichte des geistigen Lebens in Deutschland und Österreich. Berlin 1874, S.119. (Vgl. Carl Wesle : Das Falkenlied des Kurenbergers. ZfdPh. 57, 1932. und Peter Wapnewski : Des Kurenbergers Falkenlied. Euphorion 53, 1959.)

はなく、新しい第三者との結びつきの「甘い圧制」の象徴として理解されている。果してこの歌謡に第三者の登場は必要であろうか。このシェーラーの解釈では不十分であると言えるのではあるまいか。

鷹はその飼い主の女性から飛び去って行った。その鷹がのちに美しく飛ぶ (schöne vliegen) のを彼女が再び見るとは一体何を意味するのであろうか。彼女が鷹の足に見つけた飾りは一体何を意味するのであろうか。

「他国へ飛んで行った」(vlouc in anderiu lant) という表現はその所有者の「意志に反して」ということを確かに前提としているが、しかし、鷹が他の保護者のもとへ飛んで行ってしまったということを指し示してはいない。飛び去ってしまった鷹は誰の所有ともならず慣れた大空で飛び舞うことも考えられるからである。鷹を連れ戻し再び自分のものとする事ができないならば、ただ日々美しくなる鷹の舞うさまを見て喜ぶほかはない。甘い言葉をかけて近寄ると、鷹はすばやく飛び去ってしまうからである。このときの所有者の苦い経験が甘くせつなく「美しく飛ぶ」(schöne vliegen) という像のうしろに隠されているのであって、とにかく鷹は第二詩節で初めて他国において鎖をつけられたのではない。その飾りは飛び去ったあと初めて飾られたということに関しては何も語られていないからである。鷹は初めから足に絹の帯が飾りつけられていたのである。従って、第二詩節の >>alrot guldin<< という表現は第一詩節の >>mit golde wol bewant<< という表現の言い換えと見なされるのが適切であろう。すなわち、彼女が再び一羽の鷹を見たとき、鷹は飾りをつけていたが、それは彼女の愛の「しるし」——彼女にはよく知られた「しるし」——なのであって、言い換えれば、飾りは彼女の所有を示す「しるし」であるという機能を持っているのである。精神上的の財産が鷹の足のところにある絹の飾りによって表現されているのである。従って、第二詩節は「嫉妬」の対象となる第三者を導入しているのではなく、その女性は飛び去ったものを認識し、それを彼女の失われた財産として認識しているということを暗示しようとしている。つまり、黄金と絹の帯とが彼女に示しているのは、その鷹は彼女のものであったということである。八行という短い詩の中に二度も翼が飾られていることを描写しているのは非芸術的だと一見批判の声もあるかも知れないが、しかし、それらの飾りは新しい恋仇という第三者を暗示しているのではなく、人間の精神、その中でも最も偉大なもの、すなわち、「愛」を認識することを教えているのである。そして彼女は叫ぶのである。

<<got sende sî zesamene, die gelieb wellen gerne sî n!>>

「神よ、愛し合う二人を一緒にし給え。」

八行の詩の中で突然外側へはみ出してしまったようなこの最後の一行で、しかし、キューレンベルクの詩人は主観的な感情を客観的なおおいのうしろに隠してしまっている。従って、このキューレンベルクの詩人の「鷹の歌」は「一緒にし給え」という「訴え」では

なくて「嘆き」である。歌謡のそれぞれの表現から読み取られるように、見捨てられた女性の「嘆き」である。その嘆きは、しかし、あまりにも個人的なものは取り去られていて、文学的に像へ転換することでもっともうすでに（決して最後の一行の叫びでもってではない）個人的な運命を一般的な運命に転換してしまっている。主観が客観化されているのである。個人の経験が文学的な象徴の過程を経て、一般的な運命の明示となっている。この客観化を越えて、見捨てられた女性は自己克服に至る。客観化は自己克服である。見捨てられた女性一人が話題となっているのではなく、愛する者全てが問題となっているのである。

しかし、この個人的な感情の客観化がキューレンベルクの詩人の歌謡の特徴であるだけでなく、歌謡が一般的な格言に流れ込んでいるということも特質の一つである。

Wîp unde vederspîl diu werdent lîhte zam.
swer sî ze rehte lucket, sô suochent sî den man.
als warb ein schoene ritter umbe eine vrouwen guot.
als ich dar an gedenke, sô stet wol hōhe mîn muot.

女性と鷹は飼育するのが容易だ。

それらを巧みに誘う心得のある者の所へと飛んで行く。

このようにして美しき騎士は高貴な女性に求愛するのである。

そのことを考えると、私は意気揚々となるのだ。

この歌謡では、まず最初の二行で格言風に女性と鷹の飼育について述べ、次に第三行目で客観的に貴婦人に対する騎士の求愛を、そして最後の一行で個人的に自分の告白を述べている。「そのことを考えると、私は意気揚々となるのだ」——人間の胸の奥底からほとぼしり出る愛を発散させている一行である。キューレンベルクの詩人の「鷹の歌」にしても、この格言に流れ込んでいる歌謡にしても、否、またほかの別れの対話にしても、結局のところ、これらの歌謡は人間の胸の奥底から尽きることなくほとぼしり出る熱い愛をテーマに歌っていると言えるのではあるまいか。「愛」はキューレンベルクの詩人の十五の歌謡全てを通じて言えるテーマである。

まとめ

以上、考察してきたように、キューレンベルクの詩人と『ニーベルンゲンの歌』の詩人とを同一視する見解はなおも問題が残っている。恐らくは両者は同一人物ではなかったであろう。しかし、両者を同一人物と見たプファイファの論説は、両者を比較検討することによって両者のそれぞれの特徴を的確に把握することのできる機会を我々に与えてくれたのである。

キューレンベルクの詩人の歌謡は、きわめて単純な形式に、素朴な感情を表現したものであり、本質的にはのちの主観的な抒情詩の作品とは異なる。それは普通の種類の愛の歌謡ではなく、叙事的なものへ飛び込んでいる抒情的物語詩的歌謡である。抒情詩的なものと叙事詩的なものとは分かれず、感情の吐露と教訓がここではなおも溶け合っている。個人的な感情の客観化がキューレンベルクの詩人の特徴であるばかりではなく、その歌謡が一般的な格言へ流れ込んでいることも特記すべき一つの特徴である。

このキューレンベルクの詩人の歌謡とは正反対に、叙事詩『ニーベルンゲンの歌』には抒情詩的音色が鳴り響いていると言える。ジーフリトとクリエムヒルトとのミンネザング風な恋愛の物語の発展は、恐らくニーベルンゲンの詩人自らの自由な創作であろうが、しかし、まさにそれゆえに、つまり、古代ゲルマンの伝説によったものではなく自らが新しく創造したものであるがゆえに、そこに描写された表現の特色はニーベルンゲンの詩人における注目すべき特質ではあるまいか。『ニーベルンゲンの歌』前半における抒情詩的色彩は、恐らくニーベルンゲンの詩人が当時のミンネザングから受けた影響であろう。古代ゲルマン歌謡の遺産を新しい一つの「宮廷文学」へ発展的に統一させたということがニーベルンゲンの詩人の本来の業績であると言わなければならない。古代ゲルマンの伝説を素材に用いながら、このように宮廷文学の特徴、しかも抒情的色彩をも合わせ持っている点で、『ニーベルンゲンの歌』は厳密な意味において「民衆叙事詩」ではなく、十三世紀初頭に新しく生まれた特異性を有する一つの「宮廷文学作品」であると言えるのである。

第四章 『ニーベルンゲンの歌』 写本Cの特質

— 写本Bとの比較において —

『ニーベルンゲンの歌』は、第一章から第三章において述べてきたように、古代ゲルマンの英雄伝説を素材として1200年頃ドーナウ地方で統一的な構成を有する叙事詩の形式で成立したが、成立当時好評を博するや否や、さまざまな写本に書き継がれてさらに伝承されていった。現在までに発見されている写本は、完本・断片を合わせると三十数種類にも及ぶと言われており¹⁾、当時のもう一つの英雄叙事詩『クードルーン』がただ一つの写本でしか遺されていないことを考え合わせれば、この『ニーベルンゲンの歌』がいかに当時よく読まれていたかが容易に理解されよう。これら多数残存している写本のうち、叙事詩の最後の語句が「ニーベルンク族の災厄」(der Nibelunge nōt)となっているものと「ニーベルンク族の歌」(der Nibelunge liet)となっているものとがある。両者のうちどちらが原型に近いものであるかについては、十九世紀初めのラッハマンの歌謡集積説にまで溯り、約一世紀の間実にさまざまな研究がなされてきたが、ブラウネの研究²⁾以後、最も原典に忠実な写本は「災厄」(nōt)本群の中にあることが一般に認められ、ザンクト・ガレン本の写本Bが今日では代表的な定本であるとされている³⁾。一方、最後の言葉が「歌」(liet)で終わっている写本Cは、原典成立後に入念に企てられた改作であることが一般に認められている⁴⁾。この写本Cで施された改作については、リーリエンクロン⁵⁾やバルチュ⁶⁾からパンツァー⁷⁾及びホフマン⁸⁾に至るまで繰り返し考察されており、殊にホフマンは、写本Cで展開される世界観が写本Bのそれとは全く異なっていることを主張している。一体、この写本Cは原典に最も近いと言われている写本Bに対してどのような特質を示しているのであろうか。なかでも作品全体を貫くクリエムヒルトの復讐について

1) Vgl. Friedrich Panzer : Das Nibelungenlied. Entstehung und Gestalt. Stuttgart 1955. S. 64-73.

2) Wilhelm Braune : Die Handschriftenverhältnisse des Nibelungenliedes. Betr. 25, 1900.

3) Vgl. Fr. Panzer : a. a. O., S. 73.

4) Vgl. Werner Hoffmann : Die Fassung C des Nibelungenliedes und die Klage. In: Festschrift Gottfried Weber, 1967. S. 109.

5) Rochus von Liliencron : Über die Nibelungenschrift C. Weimar 1856.

6) Karl Bartsch : Untersuchung über das Nibelungenlied. Wien 1865.

7) Fr. Panzer : a. a. O., S. 74-98.

8) W. Hoffmann : a. a. O.

その船は長いうえに丈夫で幅広く大きかったので、
群がる多くの勇士らには大いに役立った。

船は、すなわち、一度に四百名の勇士と一緒に運ぶことができたのである。

と補足詩節で語られることによって、読者に語られた内容の信頼度を深めていると言える。一行がフン族の国に到着し、両民族の激しい戦いとなったとき、エッツェル王の妃クリエムヒルトが宮殿に火を放たせた場面(B2111=C2168)もまた同様であり、その火事からブルゴント族たちが逃れることができたのも、そのあとの補足詩節が語っているように、「その広間が丸天井造りであった」(daz der sal gewelbet was, C2178, 1) からである。

従って、ここで言えることは、写本Cは現実的な描写の傾向が強いということである。このことはまた、写本Bにおいてはしばしば騎士の数などが幻想的に多くなっているのに、写本Cではその数を可能な数字にまで減らしているという事実によっても裏書きされる。例えば、グンテル王がプリュンヒルトを求めての求婚旅行に出かける際、写本B 339詩節では「三万人の騎士」を調達させるよう申し出るが、写本C 347詩節では「二千人の騎士」に改められているし、また写本B 1117詩節ではニーベルンゲンの宝が「八千人の軍兵」によって運ばれたということになっているのに、一方写本C 1130詩節では「千二百人」によって運ばれたというふうに改作されているのである。

このように改作者Cが事実在即しているということは、彼はまたあらゆる神秘的なものを好まないということにおいても明らかである。すなわち、写本Bの改作者が語るニーベルンク族とは「強い巨人」(starke risen, B94, 2)であるが、写本Cの詩人が語るニーベルンク族とは「巨人のように強い」(starc als risen, C95, 2)のである。そしてまた写本B 100詩節でわかることは、竜の血を全身に浴びたジーフリトは「その肌が不死身の甲羅となった」(sîn hât wart hurnîn)が、一方写本C 100詩節によると「そのあとすぐれた英雄は、どんな武器も傷つけることができないような固い皮膚となった」(des ist der helt gemeit von alsô fester hiute, daz in nie wâfen sît versneit.)のである。

従って、以上のことから言えるのは、写本Cの詩人はメールヒェン的な要素を取り除いているということであり、ジーフリトはもはや古代ゲルマンの不死身の英雄ではなく、中世騎士社会における英雄である。改作者Cはさらに宮廷的儀礼によく通じた人であり、宮廷的形式を守ることには価値を置いているということも明らかである。そのことをよく表しているのが、殊に地位の高い人ないしは話し相手の人をまず先に挙げることによってテキストをより宮廷化させる改作である。例えば、写本Bでジーフリトはグンテル王にこう言っている。

<<der gesellen bin ich einer, daz ander soltu wesen.>> (B342, 1)

「一行は、私がまずその一人、そしてあなたが二人目。」

これに対して写本Cでは

<<der gesellen sî t ir einer, der ander sol ich wesen>> (C350, 1)
「一行は、あなたがまずその一人、そして私が二人目。」

と改作されている。さらにこの作品の最後、すなわち、大崩壊のあとでも、改作者Cは宮廷的儀礼を守ることを怠ってはいない。すなわち、改作者Cは、写本Bの

Dietrîch und Etzel weinen dō began. (B2377, 3)
そこでディエトリーヒとエッツェルは泣き悲しんだ。

という順序を

Ezel unde Dietrîch weinen dō began. (C2437, 3)
そこでエッツェルとディエトリーヒは泣き悲しんだ。

というふうに礼儀正しい順序に改作しているのである。

さらにまた改作者Cは明晰なものと合理的なものを好む詩人であり、些細なことにまで正確さを要求する詩人だということも明らかである。例えば、写本B 1924詩節でダンクワルトは「ジーフリト殿が亡くなられたのは、私がまだ子供の折のことです」(ich was ein wenic kindel, dō Sî frit vloes den lîp.)と語っているが、しかし、ダンクワルトはプリュンヒルトを求めての求婚旅行の随行者であったことを考えれば、この彼の言葉は矛盾することになる。そこで写本Cの改作者は1976詩節で「ジーフリト殿が亡くなられたのは、私がまだ小さな従者の折のことです」(ich was ein vil kleiner kneht, dō Sî vrit vloes den lîp.)というふうにダンクワルトに語らせることによって少なくともその矛盾を和らげている。そしてまた写本B 911詩節でグンテル王が「ワスケンの森へ」(hin zem Waskenwald)狩りをしに行こうと提案するが、そのあとの918詩節で「彼らはライン河を越えてゆくのである」(si wolden über Rî n)と語られている。しかし、ワスケンの森はライン左岸のヴォーゲーゼン(Vogesen)山脈の森のことと解されている⁹⁾のであるから、ライン河を渡る必要はない。確かにそれは矛盾である。そこで写本Cの改作者は919詩節でワスケンの森の代わりにライン右岸にある「オーデンの森」(zem Otenwalde)を入れて地理上正確に修正しているのである。

このように改作者Cは外面的に矛盾を取り除いたり小さなことにまで正確さを要求したりするが、しかし、彼がどのようにして些細なことにまで正確さを要求したのか、その実に念入りな努力は次に挙げる若干の例でも明白である。

9)デ・ボァ(Helmut de Boor)のテキストにおける911詩節の脚註を参照のこと。

ジーフリトが隠れ蓑を使ってグンテル王に扮しプリュンヒルトと競技をするが、プリュンヒルトが競技に負けると、ジーフリトは「では貴い姫よ、我々と共にここを立ってラインの国へお越し願ひましょう」と言う。すると、これに対してプリュンヒルトは写本Bではこう答えている。

<<des enmac niht ergan.>> (B475,1)

「そうはいきません。」

なぜなら、その前に一族郎党のものに申し出る必要がある(B475=C486) からである。すなわち、プリュンヒルトは競技の前に交わした約束を拒絶しているわけではないのである。だから、写本Cではプリュンヒルトはより正確に

<<des enkan noch niht ergan.>>(C486,1)

「まだそうはいきません。」

というふうに副詞「まだ」(noch)を付け加えて答えているのである。

またそのあとの詩節でジーフリトは船に乗るために——つまり、その船でニーベルンゲンの国へ行こうと思っている——隠れ蓑を身につけて海岸へ行くが、そこにあったその船こそジーフリト、グンテル王ほか二名の仲間がプリュンヒルトの国であるイーゼンシュタインへやって来たのと同じの船であることは自明の理である。ところが写本Bの詩人は次のように語っている。

Dannen gie dā Sî frit zer porten û fden sant
in sî ner tarnkappen, da er ein schiffel vant. (B482,1-2)

ジーフリトはそこから海岸にある城門へ、
隠れ蓑を身につけて出かけた。そこに小舟が一艘^{やつ}見つかった。

そこで改作者Cはその船をはっきりさせるために

Sî frit der vil küene dannen gie zehant
in sî ner tarnkappen dā er daz schiffil vant. (C493,1-2)

勇士ジーフリトはそこからすぐに隠れ蓑を身につけて
出かけて行った。するとそこにその船が見つかった。

というふうにその不定冠詞(ein)を定冠詞(daz)に置き換えているのである。

またジーフリトがグンテル王に呼び出されたとき、不興げな人々を見てこう尋ねた。

<<waz weinent dise vrouwen? daz het ich gerne erkant,
oder von welchen schulden mich der künig habe besant.>> (B856, 3-4)

「ご婦人方はなんで泣いておられるのですか。お聞きしたい。
また国王はどういうわけで私をお呼び出しになったのですか。」

ここで注目したいのは besenden (呼び出す) という動詞であるが、これは身分の高い人によって家来や親族が戦闘ないし宮仕えに呼び集められる際に使われる言葉である¹⁰⁾。確かにここでジーフリトは仮の家来となっているので矛盾はないが、しかし、宮廷的儀礼を守る改作者Cには好ましくないと思われ、彼は

<<waz weinent dise vrouwen? daz het ich gerne erkant,
oder von welchen schulden der künig habe nach mir gesant.>> (C864, 3-4)

というふうに besenden の代わりに nach senden を用いている。

さらにまたこの叙事詩の最後のあたりでクリエムヒルトがハゲネに向かって言う言葉に

<<daz truoc mîn holder vriedel, dō ich in jungest sach.>> (B2372, 3)
「これ(剣)は私のいとしい夫の見納めの日に夫が携えていたものです。」

という言葉があるが、これは詳しく考察すると正確ではない。なぜなら、クリエムヒルトが最後にジーフリトの棺の中を見たとき、彼は剣を持っていなかったことが明らかだからである。それゆえ、写本Cの詩人は次のように改作している。

<<daz truoc mîn holder vriedel, dō ir im nâmet den lîp
mortlich mit untriuwen.>> (C2432, 3-4)

「これ(剣)は私のいとしい夫が不実にもそなたに
殺害されたとき携えていたものです。」

この改作の場合、同時にハゲネに対する反感が強まっていることは重要である。すなわち、彼の行為はここで「不誠実」(untriuwe)な行為として決めつけられている。従って、それに引き続いて起こるクリエムヒルトのハゲネ殺害は内面的には「誠実」(triuwe)の結果でありその表現であると特徴づけられているのである。

10) Vgl. Friedrich Vogt : Zur Geschichte der Nibelungenklage. 1913. S.145.

II. 写本Cにおける人物描写の特質

このように外面的な矛盾を取り除くためばかりではなく、ハゲネの不誠実を非難すると同時にクリエムヒルトの誠実を称賛するために改作が行われたということは特記すべきことである。それでは、そのほかの箇所でのこのハゲネ及びその共犯者グンテル王そしてその妃プリュンヒルトは写本Cの改作者によって一体どのように改変されているのか、また彼らの犠牲者であるジーフリト及びクリエムヒルトは一体どのように評価されているか、この点に関して以下もう少し詳しく考察してみよう。

まず改作者Cは写本B 1 2 1 詩節にあるハゲネの形容詞「強い」(starc)を削除している(C121)が、これは全く何も意味してはいない。なぜなら、その他のところ(C152, 1; 173, 4; 1852, 1; 2033, 1)では反対にその形容詞を添えているからである。これに似た形容詞として「勇敢なハゲネ」(der küene Hagene, C537, 2; 1658, 2) ないし「勇敢な男ハゲネ」(Hagene der küene, C415, 3; 1448, 2; 1459, 4)そして「経験豊かなハゲネ」(der wîse Hagene, C1639, 1)などがあるが、これらの形容詞は人物の個人的特徴を示す形容詞ではなく、単なる形式的なものであり、何の意味も有しておらず、さらに容易に交換することのできる類いのものである。しかし、次のような改作、「トロネゲのハゲネ」(von Tronege Hagene, B903, 1; 1001, 1)→「不実な男」(der ungetriuwe, C910, 1; 1012, 1)、「グンテル王の家来」(des künic Guntheres man, B984, 4)→「まことに不実な家来」(der vil ungetriuwe man, C993, 4)の場合には、形式的なものを越えて一つの意味を含んでいる特徴的な付加語であり、写本Bから写本Cへの改作の意図が明白に分かるのである。また改作者Cが写本B 1 2 8 1 詩節の「^{どうも}猛なハゲネの権力」(Gewalt des grimmen Hagenen)における grimme を übel (C1304, 1)に取り替えていることも注目すべき改作である。すなわち、ハゲネは全く極悪非道の人物であるが、しかもその際中世ドイツ語の übel は悪魔に添えられる付加語である¹¹⁾。さらに写本B 1 2 6 0 詩節の「憎いハゲネ」(der leide Hagene)を写本Cでは「殺害者ハゲネ」(der mordær Hagene, C1282, 4)という言い回しに取り替えているのも、ハゲネの価値を下げている改作として注目に値するものである。またハゲネがジーフリトの背中を槍で突き刺したのち、写本Bでは

als o grimmeclîchen ze flühten Hagen nie
gelief noch in der werlde vor deheinem man. (B982, 2-3)

ハゲネはこの世の誰からもそのような逃げざまを
したことがないほど、恐ろしい勢いで逃げ出した。

というふうに語られているのであるが、入念な改作者Cはその副詞 grimmeclîchen (恐

11) Vgl. W. Hoffmann : a. a. O., S. 122.

ろしい勢いで)を *angestlîchen* (怖^こくなって) (C991,2)に置き換えている。この改作の副詞は実際ふさわしいものであり、ジーフリトの仕返しに追いつかれはしないかという恐れを示すハゲネの価値を下げていることにも役立っているのである。そしてまたハゲネが司祭をドーナウ河へ突き落とす場面はハゲネの非難をますます強くしていると言える。すなわち、写本Cではこの場面に五つの補足詩節 (C1621-5)が補われて写本Bよりも詳しく述べられているが、これは宗教的要素を濃くするためというよりはむしろハゲネの行動を全面的に非難するためである。その最初の補足詩節にはこう語られている。

Dô des küniges kappelan daz schif zehouwen sach,
hin wider überz wazzer er ze Hagenen sprach:
<<ir morder ungetriuwer, waz het ich iu getan,
daz ir mich ane schulde ertrenket woldet hân?>> (C1621)

王の司祭はその船が壊れてしまったのを見たとき、
河越しにハゲネに向かってこう言った。

「不実な人殺しめ！わたしがそなたに何をしたというのだ。
そなたは理由もなく私をここで沈めようとしたとは！」

司祭が口にしたこの言葉はまさに改作者C自身のハゲネに対する評価の言葉にもなるのではあるまいか。ハゲネに対する非難は、このように改作者C自身の考えを登場人物に語らせることによってさらに強くなっているのである。ジーフリトが死ぬ前に直接ブルゴント族に向かって言う次の補足詩節の言葉も、改作者C自身の立場を明らかにしているものとして注目に値するものである。

Er rampf sich bitterlîche, als im diu nôt gebôt,
unt sprach dô jæmerlîche: <<der mortlîche töt
mag iuch wol getriuwen her nach disen tagen:
geloubt an rehten triuwen, daz ir iuch selben habt erslagen.>> (C1008)

彼は苦しみに堪えがたく烈しく身をもがいて
痛ましくこう言った。「この殺害の死をそなたたちは
後の日にきっと悔やむことになるであろう。そなたたちは
そなたたち自身を殺したのだということを真の誠実にかけて覚えておくがよい。」

ここではさらに *triuwe* (誠実)という言葉が用いられているということばかりではなく、この補足詩節に言明されている改作者C自身の思考もまた重要である。すなわち、彼らブ

ルゴント族たちは彼らの卑劣な行為のために彼ら自身のちの日に死ぬことになるであろう、否、それどころか彼らはもうすでに死ぬことになっていたのである。言い換えれば、罪は罰をもたらすという改作者C自身の考えがここではよりよく理解されるのである。

改作者Cによるグンテル王の価値づけも全体として同様にグンテル王の罪をより重くするという傾向を示している。写本Cでは一度ハゲネとあるところをグンテル王に置き換えることさえあったのである。すなわち、写本Bには

Hagen sîne triuwe vil sêre an Sîfriden brach. (B971,4)

ハゲネはジーフリトに対して手ひどく誠実を裏切ったのである。

とあるのに、写本Cでは

Gunther sîne triuwe vaste an Sîvrîde brach. (C980,4)

グンテル王はジーフリトに対して手ひどく誠実を裏切ったのである。

と語られている。もちろん、この改作はハゲネの罪を軽くするためではなく、むしろグンテル王の罪を重くするために施された改作であり、ここで改作者Cは、以前に国王兄弟三人がジーフリトに誓った誠実な誓い（写本B692＝写本C701）のことを考えていたのである。しかし、グンテル王の罪を重くしていると言える写本B887詩節、すなわち、

<< Sô wol mich dirre mære>>, sprach der künic dō,
als ob er ernstliche der helfe wære vrō.
in valsche neig im tiefe der ungetriuwe man. (B887,1-3)

「それは有難いことです」と国王は、
さながら真面目にこの援助を喜んでいるかのように言って、
この不実な男は偽って頭を下げて見せた。

というこの詩節は改作の際写本Cでは削除されている。その結果、グンテル王の価値づけにおいては反対の傾向も確認される。従って、この限りではグンテル王の場合、改作の方向づけは完全に定まっているというわけではない。しかし、包括的に述べれば、グンテル王に対する非難の傾向は明白である。先程挙げた写本B887詩節のためには、写本B880詩節4行目

der künic begonde zûrnen, do er diu mære bevant. (B880,4)

国王はこの報告を聞いて、憤りを発した。

の改作、すなわち写本C 8 8 8 詩節4行目

d o begunde zurnen Gunther, als ob ez w re im unbekant. (C888, 4)
グンテル王は、あたかもそれを知らないかのように、憤りを発した。

がある種の代用を果たしているし、そしてまた写本B 1 1 1 5 詩節1-2行目

Ez enwart nie suone mit s o vil trāhen m e
gefūeget under vriunden. . . . (B1115, 1-2)
親族の間で、かくも涙を流して和解が
なされた例^{たし}はかつてなかった。 . . .

の改作 (写本C 1128, 1-2)

Ez enwart nie suone mit s o vil trāhenen m e
mit valsche gefūeget. . . . (C1128, 1-2)
偽って、かくも涙を流して和解が
なされた例^{たし}はかつてなかった。 . . .

並びに写本Bには見られない補足詩節(C1160, 1-3)

S i t daz diu frowe Kriemhilt a f Gunther verk o s
und doch von s i nen schulden den gr o zen hort verl o s,
d o wart ir herzenleide t a sint stunde m e r. (C1160, 1-3)

王妃クリエムヒルトはグンテル王を赦したのであったが、
しかしグンテル王の落度によって多大な宝を失うこととなったので、
彼の心の苦しみは千倍にも増したのであった。

をさらにその上加えるならば、この部分で特徴的なグンテル王の非難を強めていることは十分に明白である。

プリュンヒルトに関しても写本Cにおいてはその非難が一層強まっていると言える。自分の主人の家来だと思っているジーフリトが、なぜグンテル王のところに伺候しないのか、その募る疑いの念をプリュンヒルトは写本Bにおいてはこう言葉に表している。

<<er hat uns nu vil lange lützel dienste getan.>> (B724,4)

「彼はもう長いこと宮廷に伺候もしていないではないか。」

しかし、写本Cではこの部分にあたる詩は次のように改作されている。

<<daz er uns niht endienet, des wolde ich gerne ein ende han.>>(C731,4)

「彼が宮廷に伺候もしないなんて、そんなこと私は絶対に決着をつけてやる。」

すなわち、プリュンヒルトの言葉はもっと攻撃的になっていることが明らかである。この点に関連づけて写本B 813 (=C 820) 詩節のあとに写本Cの改作者は二つの補足詩節を付け加えてこう語っている。

Dō gedaht diu küniginne <<ine mac niht langer dagen.
swie ich daz gefüege, Kriemhilt muoz sagen,
warumbe uns alsō lange den zins versezzen hat
ir man, derst unser eigen. der vrage han ich keinen rat.>> (C821)

Sus warte si der wîle, als ez der tiufel riet.
die fröude und ouch die höhgezît mit jamer si dō schiet.
daz ir lac amme herzen ze lieht ez muose komen.
des wart in mangan landen von ir jammers vil vernomen. (C822)

そこで王妃（プリュンヒルト）は考えた。「私はもはや黙っていることができない。なんとしても私はクリエムヒルトに言わせなければならない。なにゆえに私たちの家来である彼女の夫が私たちに貢物を怠ったのか、そのことを質問せずにはいられない。」

そのようにして彼女は悪魔に魅入られて時が来るのを待ったが、彼女は飲びと饗宴を悲しみでもって終わらせたのである。彼女の心に懸かっていたものが明白にならざるをえなかったのであり、それゆえに彼女によって生じた悲しみが多くの国で聞かれたのである。

全体としてプリュンヒルトの非難を強めている補足詩節であるが、さらに彼女のそのあとの行為は悪魔の示唆として特徴づけられている。プリュンヒルトの行動を悪魔の唆しに起因させることはある種の意味で幾分プリュンヒルトの罪を軽くすることを意味していることは確かである。しかし、プリュンヒルトは悪魔の道具として明らかに価値が落ちてしま

っているのである。また写本B 8 2 3詩節に対して写本C 8 3 2詩節ではさらに次のように改作されて、プリュンヒルトはその義妹クリエムヒルトとの口論で、再び貢物を果たさないというモチーフに戻っている。すなわち、

<<mich müet, daz ich sô lange niht zins von im gehabt hân.>> (C832, 4)
「私はもう長いこと彼から貢物を受けていないのが腹立たしいのです。」

という言葉に改めている。このことはその限りではプリュンヒルトの非難を強めていると言えるのではあるまいか。なぜなら、この改作では、ジーフリトはプリュンヒルトに貢物の義務があるのであり、決してグンテル王に対してではないとも解釈することができるからである。

このように写本Bに対して写本Cでは一般にハゲネ及びグンテル王そしてプリュンヒルトは否定的により鋭く非難されているが、一方彼らの犠牲者ジーフリト及びクリエムヒルトは肯定的に評価されている。写本Cにおける補足詩節(973)は次のようにジーフリトを何の欠点もない人物だと称賛し、ブルゴント族の行為を untriuwe (不誠実)だと特徴づけている。すなわち、

D o ne hete niht der sinne der küene veige man,
daz er sich ir untriuwe kunde hân verstan:
er was in ganzen tugenden alles valsches blôz.
s î nes sterbens muose engelten s î t der s î n nie niht genôz. (C973)

死ぬべき運命にあった勇士(ジーフリト)は
彼らの不実に気がつく気配がなかった。彼は全ての徳において全くの欠点なしの勇士であった。彼の存在を好ましく思わなかった者(グンテル王)は、ジーフリト暗殺の罪を償わなければならなかったのである。

ジーフリトを高く評価していると同時にグンテル王を非難している詩節と言うことができよう。

またクリエムヒルトに関しても改作者Cはその罪を軽くするために至るところで改作を施している。例えば、写本B 1 1 0 5詩節では

s î t rach sich wol mit ellen des küenen Sî frides wî p. (B1105, 4)
やがて猛きジーフリトの妻は、手痛い復讐をば遂げるのである。

と語られているが、改作者Cはこの詩を次のように、クリエムヒルトの行動の決定的な理

由、すなわち、彼女の態度の根本となっている triuwe (誠実) という動機がはっきりと表れるように改作したのである。

s i t rach sich harte swinde in grōzen triuwen daz wî p. (C1116, 4)
やがてその妻は真の誠実から手痛い復讐をば遂げるのである。

この関係で次の補足詩節もまた注目に値するものである。

getriuwer wî p deheine ist uns selten ę bekant. (C1159, 4)
かくも誠実な女性は我々にはかつて知られた例がないほどである。

同じように、クリエムヒルトの息子オルトリエプが犠牲となる場面でも、クリエムヒルトは改作によってその罪を軽くされているとすることができる。すなわち、写本Bにおいては次のように語られている。

D o der strî t niht anders kunde s i n erhaben
(Kriemhilt ir leit daz alte in ir herzen was begraben,)
d o hiez si tragen ze tische den Etzelen sun.
wie kunde ein wî p durch r a c h e immer vreisli c h e r tuon? (B1912)

戦いを始めるのに他に方法とはなかったので、
(クリエムヒルトの胸中には古き怨恨^{えんこん}が根を張っていたのだ)
彼女はエッツェル王との間に出来た息子を食卓に連れてこさせた。
婦人にして復讐のためかくも恐ろしい業を誰がなし得たか。

このようにクリエムヒルトの行為は非難するには十分なものであり、自分の立場に控え目な写本Bの詩人は力をこめてクリエムヒルトの有罪を宣告していると言えるが、一方写本Cの改作者にとってのクリエムヒルト像は、写本Bの詩人によって考えられているクリエムヒルト像とは相容れないものであり、それゆえに改作者Cはクリエムヒルトにとって不利な写本Bの詩節を次のように改作している。

D o die fürsten gesezzen w a r e n ü b e r a l
und nu begunden ezzen, d o w a r t in den sal
getragen zuo den fürsten daz Ezelen kint.
d a von der kü nec r i c h e gewan vil starken j a m e r s i n t. (C1963)

主君（ブルゴント族）たちは至るところにすわって今や食事を始めた。
そこでエッツェル王の子供が主君のところへ
連れて来られた。そのために勢威ある国王（エッツェル）は
のちに手痛い苦しみをば受けることとなったのである。

すなわち、クリエムヒルトに不利な点は削除され、そのことによってクリエムヒルトの罪は軽くされていると言える。このようにクリエムヒルトの復讐は、それに関係のあった者たちばかりではなく、関係のない無数の人たちにまでも影響を及ぼしたのであるから、まさに彼女の罪を重くしなければならないところであるが、しかし、改作者Cは逆に至るところに改作を施してクリエムヒルトの行為を擁護しているのである。改作者Cがいかにクリエムヒルトの復讐行為を擁護しているか、特にこの点についてもう少し詳しく考察し、それによって写本Bと写本Cの相違を明確にすることにしよう。

Ⅲ. クリエムヒルトの復讐 —— 写本Bと写本C ——

全生涯を捧げたクリエムヒルトの復讐を考える際に見落してはならないものに、和解のモチーフ、すなわち、クリエムヒルトとグンテル王との間になされた和解のモチーフがある。この和解については写本Bでは1113詩節以下で語られている。

Dō si verkiesen wolde ûf Gunthern den haz,
ob er si küssen solde, ez zeme im desten baz.
wære ir von sinem râte leide niht getan,
sō möht' er vrevellichen wol zuo Kriemhilde gān. (B1114)

Ez enwart nie suone mit sō vil trāhen mē
gefüeget under vriunden, ir tet ir schade wē.
si verkōs ûf si alle wan ûf den einen man.
in het erslagen niemen, het ez niht Hagene getan. (B1115)

彼女がグンテル王に対して憎悪の念を捨てようとしたとき、ハゲネも彼女に口づけしたならば一層ふさわしかったろう。彼の謀略によって彼女に悩みが加えられなかったとしたら、彼も大きな顔してクリエムヒルトの前へ行けたのである。

親族の間で、かくも涙を流して和解がなされた例は
かつてなかった。彼女は被った損失^{こうひ}のために心が痛んだ。
しかし彼女はただ一人を除いて、全ての人を赦した。
ハゲネ以外の何者も、かの勇士（ジーフリト）を殺しはしなかったのだ。

しかし、この和解は口づけでもって成立しており、明らかな言葉でもって語られていない。ただ写本B 1131詩節には、なるほどグンテル王の誓いの言葉が叙せられているが、しかし、そのほか(B1114, B1394, B1460)では口づけだけが語られているのである。この和解の口づけの意味について、ハンス・クーン¹²⁾は L.クレッツェンバッハーを引き合いに出して、この仲裁の口づけの意味は「古いカトリックの礼拝式における平和の口づけ」(osculum pacis) からのみ説明されとしている。すなわち、クーンによれば、この口づけは兄弟(姉妹)間の愛のしるしであり、神において仲直りしたしるしであり、神聖な意味を持つものであった。口づけは恐らく写本Bの詩人にとっては和解の特に重要な儀式の

¹²⁾ ^{1962.} Hans Kuhn: Der Teufel im Nibelungenlied. Zu Gunthers und Kriemhildens Tod.
ZfdA. 94, 1965. S. 290.

一つであると思なされていたに違いない。従って、このようにしてなされた神聖な和解を破ったクリエムヒルトの行為を詩人はただ悪魔の干渉としてしか説明することができなかったのである。

Ich wæne der übel valant Kriemhilde daz geriet,
daz sie sich mit friuntscheffe von Gunthere schiet,
den si durch suone kuste in Burgonden lant. (B1394, 1-3)

クリエムヒルトが、ブルゴントの国で和解の口づけをした
グンテル王と、兄妹の情誼^{じょうぎ}を絶つようと
彼女を唆したのは恐らく悪魔でもあったであろう。

この場合、写本B（写本A, M）では二行目に Gunthere の代わりに Giselhere とあるのであるが、しかし、刊本は全体の内容から言って Gunthere とするのが習慣である¹³⁾。いずれにしてもクリエムヒルトの兄弟の一人が意味されている。それゆえに詩人は神聖な口づけによってなされた兄妹の和解を破ったのは悪魔の仕業であるとしか語るすべを知らなかったのである。しかもここで用いられている valant（悪魔）という語は写本Bではひどく悪い意味を持つものとして使用されている。その女性形 valandinne がクリエムヒルトの表現としてのみ、しかもあの神聖な和解を破ったことと関連してのみ用いられているだけになおさらそうである。すなわち、まず最初に valandinne が用いられるのは、グンテル王とハゲネの一行がフン族の国へ到着して「偽りの心を抱いた」(mit valschem muote, B1737, 2) クリエムヒルトによって迎えられたときのことである。グンテル王とハゲネが武器を預けるのを拒んだとき、クリエムヒルトが彼らに対して陰謀を企てていたことが明らかとなって(B1747)、ディエトリヒが憤然としてクリエムヒルトに立ち向かい、彼女のことを「鬼女」(valandinne, B1748, 4) だと罵る。二度目にその言葉が用いられるのは、彼女がグンテル王の首をハゲネの前に持って行った(B2369, 3) ときのことである。このときハゲネがクリエムヒルトのことを「鬼女」(valandinne, B2371, 4) と呼んだのである。このように、神聖な形式でなされていた兄妹の和解を破り兄の首を刎ねさせる程にまで及んだクリエムヒルトの悪行は、この valandinne という言葉の中に含まれているのである。しかし、以前、この邪悪な大胆な企てに彼女を唆したのは「悪魔」(valant) であった。悪魔が彼女をそのように唆したのであり、クリエムヒルトが、ジーフリトのために全生涯を捧げた復讐達成の直前になって、突然再び黄金への欲望にとりつかれ、そのために復讐を断念する心の動きを見せた(B2367, 3-4) とき、もうすでに悪魔が彼女からあらゆる力を奪い取り、彼女はもはや理性と意志とを支配してはいなかった。そのあとの悲

13) Vgl. H. Kuhn: a. a. O., S. 290. またデ・ボアのテキスト1394詩節の脚註参照のこと。

劇は全て悪魔の仕業であり、従って、クリエムヒルトがなしたことは、ただ兄を殺害することによってクリエムヒルト自身が悪魔となったことだけである。今や人間の意志を超えた暗い悪魔の力が支配し、写本Bにおける筋立を決定しているもの、ブルゴント族滅亡の悲劇へと駆り立てているものは、抗しがたい暗い運命の力なのである。

この写本Bに対して改作の写本Cは、valantという語の使用においても、またブルゴント族兄妹の和解の形式においてもかなり異なっていることが明白である。まず valant (写本Bでは上述の1394詩節で一度だけしか用いられていない) が写本Cで用いられているのは、プリュンヒルトが「悪魔の女性」(des valandes wîp, C447,4 = des tiuveles wîp, B438,4)と呼ばれているときと、フォルケール(dem valande, C2054,4 = dem tiuvel, B2001,4) 及びハゲネ (dem selben valande, C2371,4 = dem tiuvel, B2311,4) が「悪魔」(のような奴)と呼ばれているときの三箇所である。従って、valantが「悪魔そのもの」を表していた写本Bとは異なって、写本Cではただ単に「悪魔のような奴」を言い表しているのである。valantの女性形 valandinne —— 写本B、Cともに二度同じ箇所(B1748,4=C1789,4及びB2371,4=C2431,4)で用いられている—— に関しても写本Cでは写本Bとは異なって単に「悪魔のような奴」という意味で使われていると考えられる。一方、写本Bで「悪魔そのもの」として使われていた、そして筋の決定をその「悪魔」に委ねていたB1394詩節の valant は、写本Cでは削除され全く別の内容の詩に改作(C1421,1-3) されている。しかし、その代わり写本Cは、写本Bには見られない補足詩節の二箇所、筋の決定を「悪魔」に委ねている。すなわち、補足詩節C822によれば、「悪魔に魅入られて」(als ez der tiufel riet)、プリュンヒルトは時が来るのを待ちクリエムヒルトとの宿命的な口論を始めたのである。またもう一つの補足詩節(C2143)にはこうある。

Sine het der grôzen slahte also niht gedaht.
 si het ez in ir ahte vil gerne dar zuo bräht,
 daz niwan Hagene aleine den lîp dâ hete lān.
 dō geschuof der übel tiufel, deiz über si alle muose ergān. (C2143)

彼女(クリエムヒルト)はそのように大きな戦いを
 考えもしなかった。彼女はただ自分の計画では
 ハゲネ一人の命を奪い取りたかっただけなのである。
 それが全ての者にまで及んだのは悪魔の仕業である。

この二つの補足詩節で写本Cの詩人は二度とも tiufel (悪魔)を用いており、それでもってこの言葉 tiufel は改作者にとって、写本Bとは逆に、valantよりも強い意味であ

ることが明らかである¹⁴⁾。しかし、この場合「悪魔」の干渉は筋の展開を悪魔に委ねるというよりはむしろ、補足詩節C 2143から特に明らかなように、クリエムヒルトの罪を軽くするためである。クリエムヒルトが復讐しようとしたのはただハゲネだけに対してであり、自分の兄たちを殺すことは欲しなかったということはさらに補足詩節C 1882, C 1947で強調されているだけに、写本Cの改作者からすれば、クリエムヒルトはその兄たちの死には責任がないのである。

写本Bにおける和解の場면을写本Cの改作者が改作した箇所からも同じこと、しかもグンテル王の罪は重くされ、それだけクリエムヒルトの罪が軽くされていることが窺える。その和解を叙した写本B (B1113-5 = C1124-8) は写本Cでは入念に改作されて、二つの補足詩節(C1124, 1125)も補われている。上述した写本Bの和解の場面(B1114-5)にあたる写本Cの改作(C1127-8)をここに挙げて両者を対比してみよう。

D o si verkiesen wolde	û f in den gr ozen haz,
Gunther gezogen l i che gie	gegen ir dar n aher baz.
durch des hordes liebe	was der r a t get a n;
dar umbe riet die suone	der vil ungetriuwe man. (C1127)

Ez enwart nie suone	mit s o vil tr ahenen m e
mit valsche gef u e get.	ir tet ir schade w e.
si verk o s û f si alle	wan û f den einen man.
in het erslagen niemen,	het ez niht Hagene get a n. (C1128)

彼女が彼（グンテル王）に対して大きな憎悪の念を捨てようとしたとき、
グンテル王は上品な足どりで彼女に近づいて行った。
しかし、和解の提議がなされたのも財宝のためであった。
 財宝ゆえにその不実な男（グンテル王）は和解に応じたのである。

偽りの心をもって、かくも涙を流して和解がなされた例は^{ためし}
 かつてなかった。彼女は被った損失^{こひ}のために心が痛んだ。
 しかし彼女はただ一人を除いて、全ての人を赦した。
 ハゲネ以外の何者も、かの勇士（ジーフリト）を殺しはしなかったのだ。

14) ただし、「悪魔」(tiuvel=tiufel) が形式的表現として使われている——例えば、「そちなどの知ったことではない」(ir habet den tiuvel get a n, B1993, 4=C2046, 4) 等——ところでは、両写本間における相違はない。

改作が施されたのは下線部である。なかでも特に重要なのは、和解がグンテル側によって「偽りの心をもって」(mit valsche gefüetet) なされた、しかも「その財宝ゆえに」(durch des hordes liebe) ということである。そして「不誠実な男」(der vil ungetriuwe man) という表現の中にグンテル王は不実な罪があるとされている。一方、彼の妹クリエムヒルトは彼について、その少し前の補足詩節(C1124, 4) で明らかにこう言っている。

<< mîn munt im giht der suone, im wirt daz herze nimmer holt.>>(C1124, 4)
「私の口が彼に和解を与え^なるとしても、心は決して和むことはありません。」

ここで「私の口」(mîn munt) とあるのは、「口に出して和解を誓おうとも」と理解されがちであるが、しかし、上で述べてきたように、写本Cの改作者が大変小さな点にまで気を配っていることを考えれば、この mîn munt は和解の口づけのことがほのめかされているとも理解される¹⁵⁾。従って、写本Cにおけるクリエムヒルトとグンテル王との和解は、守る義務もない単なる外面的な偽りの和解となったのである。しかもその和解の口づけは写本Cにおいては、写本Bとは全く異なって、それほど神聖で重要な意味を持ってはいないのであり、写本Cの改作者は、クリエムヒルトが厳かな真の和解によって結びつけられていることを欲していなかったことが明らかである。それゆえ、写本Bにおいて神聖な口づけによって結ばれていた和解の言葉も、またそれをクリエムヒルトに破るようにとの悪魔の唆し(B1394, 1-3) も、写本Cでは不必要になり、削除されたとも考えられる¹⁶⁾のである。

このように写本Cにおけるクリエムヒルトとグンテル王との和解は単なる見せかけとなったのだから、ジーフリートの死に対するグンテル王の責任は償われないうままであり、しかもグンテル王は財宝のゆえに(C1127, 3) その見せかけの和解をしたのであるから、次に起こる財宝強奪の卑劣な行為——それはクリエムヒルトの悲しみをますます深めた(C1156 = B1141) ——にも重い責任があるのである。このことは写本Cの補足詩節(von sînen schulden, 1160, 2)で明らかに語られており、財宝強奪の卑劣な行為に対するグンテル王の共同責任をひた隠しにしようと努めている写本Bとは正反対に、写本Cではグンテル王の罪が重くされているのである。従って、クリエムヒルトがグンテル王を最後に殺させたことは、写本Cにおいては理解できることであり、赦されもすることである。写本Cの補足詩節2428で改作者が、クリエムヒルトのグンテル王殺害の責任をひたすらハゲネに押

¹⁵⁾ ^{Vgl.} H. Kuhn : a. a. O., S. 297.

¹⁶⁾ ただ写本C1448(= B1460) 詩節にはなお和解の口づけの記載が見られるが、しかし、これは無頓着なものであり、成行きにとっては意味のないものだと考えられる。
(Vgl. H. Kuhn : a. a. O., S. 298.)

しつけようとしているだけになおさら頷けることである。すなわち、ハゲネがクリエムヒルトにグンテル王を殺させるような言葉 (C2427 = B2368) を吐いたのは、要するに、「ハゲネはクリエムヒルトが自分の命を奪ったあとで、彼女の兄は生かして故国へ帰らせるかも知れないと思った」 (C2428, 3-4) からである。このようにグンテル王の死は写本Cにおいては全てハゲネの責任にされているのであり、従って、ハゲネの死もまた完全に正当なのである。ジーフリトが死の直前にハゲネに向かって言った言葉 (補足詩節C 1008) のごとく、「彼らは彼ら自身を殺す」結果となったのである。ここにおいて、写本Cにおける悲劇は人間の過失の結果であり、罪が罰をもたらした結果であるという改作者自身の考えがよりよく理解されるのである。

まとめ

以上のように見てくると、写本Bに対して写本Cの特質は明らかである。まず写本Bは非現実的・メルヒェン的な要素をかなり多く含んでいるのに対して、改作の写本Cでは現実的な描写の傾向が強く、より宮廷化され、また明晰なものと合理的なものを含んでいて、細かな点に至るまで正確さを示している。しかし、写本Cは、そのような外面的な矛盾を取り除いているばかりではなく、ハゲネの不誠実を非難すると同時にクリエムヒルトの誠実さを称賛している点に大きな特質がある。すなわち、写本Bの詩人が悲劇の原因を悪魔に委ね、運命と罪とを複雑に絡ませながら、クリエムヒルト評価に関しては中立的な立場を取っているのに対して、この写本Cの改作者は、クリエムヒルトの行為を弁護し、それと同時にハゲネの行為を全面的に非難しようと努めているのである。確かに写本Cにおいても、写本Bと同じように、筋の展開を悪魔に委ねている箇所が見いだされるが、しかし、それは写本Cにおいてはクリエムヒルトの罪を軽くするためであり、原因を全てハゲネに押しつけるためである。そしてハゲネを絶対的に否定し、それと同時にクリエムヒルトの立場を全面的に擁護することによって、写本Cの改作者はかつて写本Bの詩人が十分明らかにすることのできなかった悲劇の原因と償いをここで合理的・道徳的に明らかに示そうと試みているのである。言い換えれば、『ニーベルンゲンの歌』写本Cは、ニーベルンゲン悲劇の中に超現世的な「運命」の力を見る写本Bの悲劇観に対して、それとは異なった自らの世界観を展開していると言える。このことは、すでに述べたように、一般に写本Bにおいてはメルヒェン的な要素が強いのに対して、写本Cでは現実性が強いことから窺える。すなわち、「巨人のように強い」 (starc als risen, C95, 2) ニーベルンク族が登場する写本Cにおいては、竜の血を全身に浴びた勇士ジーフリトは「いかなる武器をもってしても傷つけることができないような固い皮膚となった」 (von also vester hiute, daz in nie wafen sît versneit, C100, 4) のに対して、「強い巨人」 (starke risen, B94, 2) のニーベルンク族の写本Bにおいては、ジーフリトは「その肌が不死身の甲羅となった」 (sîn hût wart hurnîn, B100, 3) のであるが、しかし、それにもかか

わらず写本Bの不死身の英雄ジーフリトも暗い運命の力によって死すべき運命にあったのである。クリエムヒルトの復讐に関しても、写本Bでは罪と罰との動機が確かにないわけではないが、しかし、そこではあらゆる動機をも凌ぐ暗い「運命」の力が全く支配的であったのであり、悲劇は宿命的な運命と罪との複雑な絡み合いの中で展開するのである。写本Cの改作者も確かにその悲劇的基盤から離れることができなかったのであるが、しかし、彼はそれを広範囲にわたってやわらかくしていったのであり、そしてその上に彼自身の道徳的解釈をいわば「つぎ木」したのである¹⁷⁾。従って、写本Cは二つの写本のうちでどちらかと言えば「より中世的」なものである。すなわち、その作品が、ニーベルンゲン悲劇を人間の過失の結果として合理的・道徳的に説明するために、英雄主義的・悲観主義的世界観を制限しようとしたことによって、「より中世的」な作品であると結論づけることができるのである。

17) Vgl. W. Hoffmann : a. a. O., S. 130.

第五章 『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』

前章では、『ニーベルンゲンの歌』の写本の中で最も原典に近いと言われている写本Bと、のちに入念な改作を施されたと考えられている写本Cとを比較考察し、それぞれの特徴を探り出しておいたが、この両写本を比較考察する際に見落としてはならない当時の作品がもう一つ挙げられる。『ニーベルンゲンの歌』のほとんど全ての完本¹⁾においてその後日譚として付け加えられている『哀歌』²⁾がそれである。この作品は宮廷的押韻二行連句で書かれた四千行以上から成るものであるが、この表題は、すなわち、作品の最後の行(4322)で >>ditze liet heizet diu klage.<< (この歌は『哀歌』と呼ばれる)と語られていることに由来する。この表現はすぐさま『ニーベルンゲンの歌』の最後の言葉を思い出させる。すなわち、『ニーベルンゲンの歌』写本B(2379,4)では >>daz ist der Nibelunge nôt.<< (これがニーベルンク族の災厄である)となっており、写本C(2440,4)でも >>daz ist der Nibelunge liet.<< (これがニーベルンク族の歌である)と締めくくられているのである。しかし、この『哀歌』という作品は、最後の行でもって『ニーベルンゲンの歌』をすぐさま連想させるだけでなく、その中に語られている内容から言っても、『ニーベルンゲンの歌』と切り離すことができないほど密接に関連しているものであり、また事実『ニーベルンゲンの歌』と一緒にしてのみ理解されうるものであり、そうしてはじめて我々の関心を得るものである。この両民族の死闘による大崩壊のあと、殊にヒルデブラントによるクリエムヒルトの衝撃的な死のあと、エッツェル王などわずかに生き残った者たちはそのすざまじい最期を一体どのように感じ、その後一体どのように振舞ったのであろうかということは、我々には大変興味があるところである。一体、この作品は『ニーベルンゲンの歌』とどういう関係にあったのであろうか。『ニーベルンゲンの歌』との密接な関係を確認するためにも、また『ニーベルンゲンの歌』との本質的な相違を理解するためにも『哀歌』の全体的な内容を知っておく必要があるので、本章ではまず簡単にその『哀歌』の内容の概観を試み、そのあとこの作品が『ニーベルンゲンの歌』の両写本とどういう関係にあり、またそれらに対してどういう特質を有している作品であるのかについて考察したい。

1)ただし、十五世紀半ばに書写されたと推定されている写本k (Piaristenhandschrift k) だけは例外である。(Vgl. Friedrich Panzer : Das Nibelungenlied. Entstehung und Gestalt. Stuttgart 1955. S.68 und 74.)

2)テキストには Karl Bartsch : Diu Klage mit den Lesarten sämtlicher Handschriften. (F.A.Brockhaus) Leipzig 1875. を用いる。括弧内の数字はテキストの行を表す。

I. 『哀歌』の内容

『哀歌』の詩人はまず『ニーベルンゲンの歌』の叙述を短く繰り返すことでもって語り始める³⁾が、その際『ニーベルンゲンの歌』前編はただ簡単に、しかし、後編の登場人物と出来事に関しては比較的詳細に叙述している。その描写は586行まで続くが、それは『哀歌』の詩人がニーベルンゲン悲劇の原因となった人物やその行動を強い調子で道徳的に判断を下しながら語り続ける——その内容については本章の至るところで触れられる筈である——ということによって比較的詳しい叙述となっている。

587行目でようやく『哀歌』本来の主題に入る。まず第一にフン族のエッツェル王がその悲劇についていかに凄まじく嘆き悲しんだか、そしてその周囲の者たちもいかに節度を忘れて嘆いたか、そのさまを執拗なまでに繰り返して描写したあと、663行からは、戦いで宮殿に倒れた無数の死者を広範囲にわたって取り除く作業を始めたので、広間までの道は広くなり人々は進むことができたさまを述べている。しかし、広間の前にはクリエムヒルト (der scænen Uoten kinde, 726) がヒルデブラント (Hildebrant, 733) に殺されて倒れたままになっていたのも、彼女の家来もディエトリーヒ (Dietrich, 759) も、そしてエッツェル王も再びこの誠実な女性の死を嘆き悲しんだ。さらに彼女の息子オルトリエプ (Ortlieb, 863) 並びにエッツェル王の弟ブレーデリーン (Blædelîn, 870) の死体もまたなお残っていたので、再び大きな嘆きの声が聞かれた。この悲劇の原因をボテルンクの子 (der sun Botelunges, 886) エッツェル王は自分自身に押しつけている。すなわち、神の一撃 (der gotes slac, 954) がエッツェル王の上に襲いかかったのである。なぜなら、彼は五年間キリスト教徒だったのに、そのあと再び異教徒に戻った (vernogieren, 988) からである。上記三名の死者 (クリエムヒルト、オルトリエプそしてブレーデリーン) は担架で連れ去られて棺に保管された。同じように主な死者イーリング (Iring, 1081)、グンテル王 (Gunter, 1135)、ハゲネ (Hagene, 1285)、フォルケール (Volkêr, 1331)、ハゲネの弟ダンクワルト (Dancwart, 1415)、ウォルフプラント (Wolfprant, 1461)、ジゲスタップ (Sigestab, 1485)、ウォルフウィーン (Wolfwîn, 1521) そしてそのほかのベルンの英雄たち⁴⁾も連れ去られた。八百名あるいはそれ以上の死者がすでに運び去られた。そこでウォルフハルト (Wolfhart, 1652)、ギーゼルヘル (Gîselher, 1786) 及びゲールノート (Gêrnôt, 1851) そしてついにはリュエデゲール (Rüedegêr, 1959) もまた、さらに千七百名ものキリスト教徒並びに異教徒の死骸も見いだされた。そこでヘルヒェ王妃 (Helche,

3) 以下、『哀歌』の内容をまとめるにあたっては Fr. Panzer : a.a.O., S. 74-7. を参照する。

4) すなわち、ニートゲル (Nîtgêr, 1543)、ゲールバルト (Gêrbart, 1547)、ウィークナント (Wîcnant, 1555)、ジゲヘル (Sigehêr, 1561)、そしてウィークハルト (Wîchart, 1563) の五名。このうちゲールバルトとウィークハルトは『ニーベルンゲンの歌』にも語られているが、ほかの三名は語られていない。

2191) が育てた高貴な乙女たち——その中にはヘルヒェ王妃の姪ヘルラート (Herrat, 2201)もいた——もやって来て、しまいにはその国中の住民も昼夜区別なく殺到し、親族の死骸を捜し歩き、見つけては運び去るのであった。そのため、死者でいっぱいだった宮殿は次第に死骸がなくなった。ブルゴント国の三人の国王をはじめ高貴な者たちは棺に入れられ、次々に埋葬されたが、人々は主君たちが埋葬されるまで三日間休むこととてなかった。そのほか莫大な数の死者たちのためには大変大きくてしかも大変深い特別な穴が掘られ、そこに埋葬された。今やあらゆる者が眠りの場所に埋葬されたとき、墓から帰って来た者たちから最も大きな悲しみが聞かれた。それはキリスト教徒にとっても異教徒にとっても悲しい別れのときであった。エッツェル王は非常に意気消沈していたので、人々は王の気持ちを慰めようとしたが、無駄であった。そこでヒルデブラントとディエトリーヒが彼に、倒れ死んだ騎士たちの武具や武器を集めて、生き残った者たちのために保管しそれらを各々の国へ送るのが得策だと忠告したところ、エッツェル王はこの提案を喜んで受け入れた。そこで吟遊詩人スウェンメリーン (Swemmelin, 2529)が使者となって十二名の使者たちとともに武器を運んでライン河畔のウォルムスへ悲しい知らせを持って行くこととなった。使者たちはウィーン (Wien, 2755)を越えてトレイゼンムーレ (Treisenmûre, 2795)を通りベッヒェラーレン (Bechelaren, 2799)へと進んで行った。そこではリュエデゲールの夫人ゲテリント (Götelint, 2808)とその娘が主人の帰りを待ち受けていたが、ただ血なまぐさい真実の報告を聞いて、兩人は意識を失い倒れてしまった。

スウェンメリーンはドーナウ河をさらに進んでパッサウ (Pazzouwe, 3294)へやって来た。そこでは有名な僧侶ピルグリム (Pilgrim, 3298)が使者たちの知らせを聞いて狼狽した。ピルグリムはスウェンメリーンに帰りには是非とももう一度自分のところに立ち寄ってほしいと頼んだ。僧侶は、すなわち、悲劇の全貌を詳しく聞いて、それを書き留めさせたかったのである。

スウェンメリーンはバイエルンを通して、さらにシュワーベン (Swaben, 3494)を通してライン河ほとりのウォルムスへとやって来た。そこではグンテル王の妃プリュンヒルトがその訃報を聞いて口から血が流れ出るほど悲しく嘆いた。ロールゼ (Lörse, 3683)の寺院のそばに家を建てて隠居生活をしていたウオテは、その話が彼女の耳に入ると急いでウォルムスへ赴いたが、悲惨な話を聞いて苦しみあまり七日後に死んで、ロールゼの僧院に埋葬された。献酌侍臣のジンドルト (Sindolt, 3743)、ルーモルト (Rûmolt, 4017)及びその国の人々は、プリュンヒルトの息子を騎士にして王冠を戴かせるべきだと主張した。そこでウォルムスの宮廷は少しながら喜びを取り戻した。スウェンメリーンはエッツェル王のもとへ帰って行った。

さて、エッツェル王の宮殿ではヒルデブラント、ディエトリーヒそしてヘルラートがその国を去ることとなった。これを知ったエッツェル王の悲しみはますます大きくなった。別れを告げたあと、彼らはまずベッヒェラーレンへ向かった。そのリュエデゲールの夫人ゲテリントは三日前に死んでいた。そこでディエトリーヒはゲテリントの娘ディエトリ

ント⁵⁾に、一緒に国を治めることのできる男性を世話してあげようと約束して、自分の国へと帰って行った。

ところで、パッサウの僧侶ビルグリムはのちの人たちのためにその悲劇を初めから終わりまで彼の書記コンラートをしてラテン語で書き留めさせた。スウェンメリーンとそのほかの人たちが報告したと同じように書き留めさせたのである。その後その話はしばしばドイツ語でも語られたので、みんなにはよく知られている。この歌がすなわち『哀歌』である。

本来『哀歌』はここで終わっているのであるが、しかし、次に明らかにのちに補足されたであろうと考えられる38行の叙述が続いている。そこにはその後エッツェル王がどうなったのか、いくつかの可能性を挙げて語っているが、結局「エッツェル王はどのように最期を遂げたのか、そのことについては今なお誰も知らない」という言葉で締めくくられている。

要するに、『哀歌』は『ニーベルンゲンの歌』における悲劇の原因とその無残な結果について道徳的に判断を下しながら語ったあと、死骸の処理とその埋葬、そのたびに起こる大きな悲嘆、そしてそのあと武器の保管並びに使者の派遣について語ったものであり、特にエッツェル王、ヒルデブランとそしてディエトリヒの三人に死者の生前の活躍ぶりを語らせることによって、ブルゴント族とフン族との戦いで倒れた英雄たちに寄せるいわば一種の「鎮魂歌」ともなっている作品である。

Ⅱ. 『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』

以上の『哀歌』の内容紹介から明確に言えることは、『哀歌』の詩人は確かに『ニーベルンゲンの歌』をよく知っていたということである。『哀歌』で述べられていることは『ニーベルンゲンの歌』の描写によく似ているばかりではなく、多くの箇所でも同一である。『哀歌』の詩人はその叙述のために繰り返し出典をほのめかす手法を用いているが、その出典が、はっきりとではないにしても暗に『ニーベルンゲンの歌』を指し示していることは容易に考えられる。『哀歌』の最初の部分にはこう語られている。

Ditze alte mære	この古い話は
bat ein tihtære	ある詩人が
an ein buoch schriben.	一冊の本に書いた。
des enkundez niht beliben,	そのため
ez ensi ouch noch dā von bekant,	ブルゴント国の人々が
wie die von Burgonden lant	その当時榮譽をもって
bī ir zīten und bī ir tagen	いかに暮らしていたかが

5) このリュエデゲールの娘は『ニーベルンゲンの歌』では名前なしで登場している。

mit  ren heten sich betragen.

今日でもなお知られている。

(17-24)

そしてこのあとエッツェル王の勢威について語っているところでは

der rede meister hiez daz
tihten an dem m re,
wie r ch der k nec w re,
diu rede ist gnuoc wizzenl ch.
er het aller t  gel ch
zwelf k nige under im ⁶⁾.
von der w rheit ich daz nim.

物語の詩人は、その国王が
いかに裕福であったか、
その話を詩作した。
その話はよく知られているものである。
国王は常に十二名の国王を
自分の配下に従えていた。
それは本当のことである。

(44-50)

そしてそのあと再度『ニーベルンゲンの歌』を暗示しながら

Iu ist daz dicke wol gesagt
wie Etzel h te bejagt
f rsten lobel che
heim in s niu r che
durch eine gr ze wirtschafft.

諸君にしばしば語られている
ところによると、エッツェル王は
大饗宴のために
誉れ高き国王たちを
自分の国に招待したということだ。

(159-63)

というふうには語られている。これらは確かに中世ドイツ文学でよく好んで用いられる、原典を引き合いに出す一つの手法であり、形式的なものではあるが、しかし、その背景には『ニーベルンゲンの歌』の知識が基礎になっていることは両者の内容が一致することからも明らかである。

しかし、そのあとクリエムヒルトの復讐という行為について語っているところの叙述はそのことに関して疑問をもたらす。

6) 『ニーベルンゲンの歌』 (B1391, 3 = C1418, 3) : unt daz si (Kriemhild bei Etzel)
alle z ite zwelf k nige vor ir sach. (クリエムヒルトはいつも十二人の手にかし
ずかれていた) 及び B1235, 2 = C1259, 2 を参照のこと。なお、十二人の王というのは
エッツェル王の宮廷に亡命して来ている他国の王たちのことであろう。

Des buoches meister sprach daz ǣ: 本の作者はかつてこう言った。
 dem getriuwen tuot untriuwe wē. 不誠実が誠実なものを悲しめる。
 s i t si durch triuwe tōt gelac, 彼女は誠実のために死んだのであるから、
 in gotes hulden manegen tac 神の恩恵の中で多くの日々を天国で
 sol si ze himele noch geleben. なおも生きることができるのである、と。

(569-73)

ここで引用した詩をそのままの形で『ニーベルンゲンの歌』の中に見いだそうとしても無駄である。この点で『哀歌』の詩人が『ニーベルンゲンの歌』を知っていてそれを手本に用いたということに関して疑問が生じてくるのである。

この点に関してフリードリヒ・パンツァーは「中世での引用は現代の基準で測られてはならない⁷⁾」と述べている。すなわち、彼によれば、内容がその引用された箇所の内容と一致しているとき、中世における引用の本質はもうすでに満たされているのであり、従って、同一性と類似性との間の相違は当時の中世においては言語的にも概念的にもまだ知られてはいず、両者は *gleich* (同じ) という一つの語で表されていたということも考えられるのである。その例としてパンツァーが挙げているが、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハは『パルチファル』において、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ——彼はチューリングエンの方伯の宮廷でのあまりにも乱雑な社会を批判している——の有名な格言 >>Der in den ǝren siech von ungeschichte s i,<< (不運にも耳を煩っている者は)⁸⁾を >>guoten tac, bǝse unde guot!<< (今日は、悪しき方々に善き方々よ)⁹⁾という言葉で引用したのである。このヴォルフラムの言葉はヴァルターの格言には現われていない。しかし、それはその内容の才気溢れた完全に正確な意味を与えている。

『哀歌』と『ニーベルンゲンの歌』の場合にもそのようなことが考えられるとパンツァーは言うのである。事実、上に挙げた『哀歌』の本文はなるほど『ニーベルンゲンの歌』には見いだされえないが、しかし、恐らくは『ニーベルンゲンの歌』の知識を基にして陳述された考えなのである。なぜなら、ジーフリト殺害は不誠実な者の仕業であったというこ

7) Fr. Panzer : a. a. O. S. 84-5.

8) この詩を資料Ⅱとして巻末 (351頁) に載せてあるので参照のこと。なお、この詩は次のテキストに拠る。 Franz Pfeiffer (Hrsg.) : Walther von der Vogelweide. (F. A. Brockhaus) Leipzig 1864. S. 202.

9) この部分を資料Ⅲとして巻末 (352頁) に載せてあるので参照のこと。なお、この引用は次のテキストに拠る。 Albert Leitzmann (Hrsg.) : Wolfram von Eschenbach, Parzival Buch I-VI (7. Auflage) (Max Niemeyer Verlag) Tübingen 1961. また、邦訳するにあたっては加倉井肅之・伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一の四氏の共訳本 (郁文堂) を参照する。

とは『ニーベルンゲンの歌』では一度ならず強調されて語られているし、クリエムヒルト自身もまた彼女とジーフリトとの関係において「誠実」の原型であったということを『ニーベルンゲンの歌』は最初から最後まではっきり述べようと努めているからである。従って、『哀歌』の詩人がその手本に用いたものは確かに『ニーベルンゲンの歌』以外の何ものでもなかったのである。

またそのほかの副次的な点でも『哀歌』の表現は『ニーベルンゲンの歌』のそれと異なっていることが多いが、しかし、それも『哀歌』の詩人が『ニーベルンゲンの歌』を知らなかったという理由にはならない。例えば、『ニーベルンゲンの歌』(B2219, 3 = C2277, 3)ではゲールノートがリュエデゲールによって打ち殺されるとき「石のごとく固い兜を貫いて」(durch helm vlinsherten)とあるのに、『哀歌』(1854-5)では「胸を」(gein den brusten unden)突き刺されたことになっている。また『ニーベルンゲンの歌』(B1343, 1 = C1370, 1)ではフラーヒェン国の公爵の名が「ラームンク」(Der herzoge Rāmunc ūzer Walachen lant)¹⁰⁾となっているのに、『哀歌』(347)では「ジゲヘル」(Sigeher von Walachen)という名になっている。さらにベルンのジゲスタップ公(Der herzoge ūz Berne Sigestap, B2258, 1 = C2317, 1)は『ニーベルンゲンの歌』(B2283, 3 = C2342, 3)では「ディエトリーヒの甥」(Dietriches swester sun)となっているのに、『哀歌』(1484-95)によると「ディエトリーヒの従弟」ということになっている。しかし、これら小さな相違は何も意味してはいないと言えよう。なぜなら、そのような不注意はよくあるもので、例えば、イーリンクは『哀歌』402行と419行の二箇所では「ロートリンゲン出身」(von Lutringe)となっているのに、そのあとの1102行では『ニーベルンゲンの歌』における「デンマークの辺境伯」(von Tenemarke der marcgrave Trinc, B2028, 1 = C2084, 1)という表現と同じように「デンマークの勇士」(des vil kŭenen Tenen lîp)ということになったりしているからである。もう一つ例を挙げると、『哀歌』3900行以下では、第一にグンテル王がディエトリーヒによって取り押えられ、そのあとハゲネが同じくディエトリーヒによって取り押えられることになっているが、『ニーベルンゲンの歌』ではその逆、すなわち、まず第一にハゲネが、次にグンテル王が捕えられることになっている。しかし、『哀歌』のそのような手違いはすぐあとで同じように無頓着に

Hagen und ouh Gunthêr

ハゲネとグンテル王は

mohten dō niht strîten mēr:

これ以上戦うことができなかった。

dō twanc si Dietrich beide.

その二人をディエトリーヒが取り押えた。

(3931-3)

というように正しい順序に訂正されている。同じように、『哀歌』の詩人はブルゴント族

10) Walachen(B)=Vflachen(C)

のことを確かに『ニーベルンゲンの歌』と完全に一致させて規則的に Burgonden (22, 188 など)¹¹⁾ ないしは Burgondære (3300)と呼んでいるのに、しかし、一度だけ「ライン・フランク族」(den stolzen Rînfranken, 303)とも呼んでいるが、これも無頓着な表現であって、詩人にとってはそれほど重要なものではなかった。すなわち、ある手本をそのまま正確に再描写しなければならないという義務は中世においても全く知られていなかったということが考えられるからである。実際、『哀歌』がその手本にある主要な出来事全てを述べ、そのほかの副次的なものもその手本と完全に一致していなければならないと要求するのは誠に不合理というものではあるまいか。

否、それどころか『哀歌』の詩人はさらに『ニーベルンゲンの歌』には見られない多くのものをも語っているが、それも至極当然のことである。それに当てはまるものとしては主に人物などの名前を挙げることができる。例えば、リュエデゲールの娘は『ニーベルンゲンの歌』では名前が呼ばれないままになっているが、一方『哀歌』では「ディエトリント」(Dietlint, 4229)と呼ばれている¹²⁾。同じように、『ニーベルンゲンの歌』には語られていないリュエデゲールの馬の名も『哀歌』では「ボイムント」(Boymunt, 2855)と呼ばれている。そしてまた『ニーベルンゲンの歌』で語られているエッツェル王の宮殿での凄まじい戦闘を『哀歌』の詩人は、その上にポーランドのヘルマン(Der herzoge Herman, ein fürste ūzer Pœlân, 345-6)とトルコのワルベル(ūz Türkîe, Walber der edelvrîe, 355-6)という新しい人物を登場させることによって増大させている。さらにディエトリートの家来たちに関しても『哀歌』の詩人はニートゲール(Nîtgêr, 1543)、ウィークナント(Wîcnant, 1555)そしてジゲヘル(Sigehêr, 1561)というような『ニーベルンゲンの歌』には語られていない名前を新しく付け加えている。同じように、ヘルヒェ王妃が育てた高貴な乙女たち——ただし、ヘルラートだけは『ニーベルンゲンの歌』にも名が挙げられている——にも一連の新しい名前が付けられている。すなわち、ニートゲール王の娘ジゲリント(Sigelint, 2206)、フランス(Vrancriche)のリウデゲール王(Liudegêr)の娘ゴルトルーン(Goldrûn, 2208)、ノルマンディー(Normandî)の或る国王の娘ヒルデブルク(Hildeburc, 2217)、ギリシア(Krieche)の或る国王の娘ヘルリント(Herlint, 2215)そしてジントラム王(Sintram)の娘アデリント(Adelint, 2223)という名前がそれである。さらにオーストリア(Österrîche)の女王として乙女のイザルデ(Isalde, 2759)をウィーンに配属させているが、これも『哀歌』の詩人が新しく付け加えたものである。

しかし、そういった人物の名前においてばかりではなく、あらずじにおいても『ニーベルンゲンの歌』には語られていない若干の小さな特徴を指摘することができる。例えば、ヒルデブラントはフォルケールに打ち殺されずに済んだが、それはヘルプフリヒ(Helf-

11) そのほかに288, 440, 463, 486, 734, 1310, 1414, 1786, 1840, 2586行で使われている。

12) 本章脚註 5参照

rich, 1347) の手助けがあつてはじめて可能であつたこと、そしてブルゴント国の若きギーゼルヘルはディエトリーヒの家来ウォルフウィーン(1521)、ニートゲール(1543)及びゲールバルト(Gerhart, 1547)を、グンテル王は同じくディエトリーヒの家来ウィークナント(1555)、ジゲヘル(1561)及びウィークハルト(1563)をそれぞれ殺したこと、また同じくディエトリーヒの家来ウォルフプラント(1461)はダנקワルトによって打ち殺されたこと、そしてグンテル王はベルンのディエトリーヒに捕えられる前に彼を三度も打ちのめした(1195)こと、さらにウォルフウィーンがヒルデブラントの甥(1529)であること、そしてさらにイルンフリト(Irnfrid, 395)がチューリングゲン(Dü ringen)を、ハーワルト(Hawart, 399)がデンマークを、イーリンク(401)がロートリングゲンを去ってエッツェル王のところにやって来ていたということ、これら全ての記載は『ニーベルンゲンの歌』においては見いだされえないものである。このように『哀歌』の詩人は『ニーベルンゲンの歌』に欠けているものも多く語っているが、しかし、その背景には明らかに『ニーベルンゲンの歌』の知識が基礎となっていたということは、以上述べてきたことから明確に認識できるのである。

Ⅲ. 『ニーベルンゲンの歌』写本Cと『哀歌』の依存関係

『哀歌』が『ニーベルンゲンの歌』と密接な関係にあり、その知識を前提にしていることは、以上の考察からも容易に理解されよう。ところで、前章でも述べたように、『ニーベルンゲンの歌』には「災厄」(Not) 本と「歌」(Liet) 本という二つの写本群があり、両者のうちどちらが原型に近いものであるかについては、1900年のブラウネの研究によって一応の決着を見ることとなり、それ以来、最も原典に忠実な写本は「災厄」本群の中にあり、その中でも写本Bが今日では代表的な定本であるとされている。これに対して、一方の「歌」本群中の写本Cは原典成立後に入念に企てられた改作とされているのであるが、ここで注目すべきは、『哀歌』はこの『ニーベルンゲンの歌』写本Cと多くの共通点を有しているということである。このことを証明しているのがまずはロールゼ(Lörse)という地名である。すなわち、『哀歌』3682-7行及び3986-7行の二箇所にはロールゼという地名が出てくる。

Uote diu vrouwe hêre
ze Lörse in ir hûse was,
dâ si venjete unde las
an ir salter alle ir tagezît,
in einem münster, daz was wît,
des si von êrste da began.
(3682-7)

高貴な婦人ウオテは
ロールゼの彼女の家の中にいた。
彼女は、自分が最初に建てた
広い修道院の中で
一日中祈りながら
聖書の詩篇を読んでいた。

...
diu edel Uote wart begraben
ze Lörse bî ir aptei.
(3986-7)

...
高貴なウオテは
ロールゼの僧院に埋葬された。

このクリエムヒルトの母ウオテがウォルムスからロールゼに移ってそこに住んでいて最後にはそこに埋葬されたという描写は、『ニーベルンゲンの歌』写本Bには見られないが、写本Cには次のように語られている。

Eine rîche fürsten aptey
nach Dancrates tōde
mit starken rîchen urborn,
daz klōster dâ ze Lörse,
...

stifte vrou Uote
von ir guote,
als ez noch hiute hat,
des dinc vil hōhe an êren stat. (C1158)

Da was der frouwen Uoten
ze Lörse bî ir klōster

ein sedelhof bereit
mit grōzer rîcheit.

dar zöch sich diu witewe von ir kinden sî t,
dâ noch diu frouwe hêre begraben in eime sarke lî t. (C1161)

ウオテ婦人は、ダンクラートの死後、
彼女の領地より今もなお入る夥しい収益でもって
王者にふさわしい一つの僧院を建てた。
それはロールゼの地にあつて、大変名誉ある僧院である。

...

そこで貴婦人ウオテはロールゼの僧院のそばに
非常にすばらしい一つの館を建てた。
そこへのちに彼女は自分の子らと離れて暮らすこととなったのである。
そこには今もなおその高貴な婦人が一つの棺の中に埋葬されている。

すなわち、この二詩節は写本Cの改作者が写本Bを改作する際あとから付け加えた補足詩節¹³⁾であり、写本Bには見いだされないものである。従つて、このロールゼに関する叙述の点で、『哀歌』は写本Cと何らかの関係があつたことは確かである。

また両者を結びつけるものとして次に挙げられるのは、エッツェル王の背教に関する叙述である。まず『哀歌』ではこう語られている。

<< mîniu apgot scuofen daz ich louc	「私の偶像の ^{せい} 所為で、私は
s îner starken gotheit,	神聖なキリスト教を欺くこととなり、
daz ich lie die kristenheit.	私はキリスト教を退けた。
daz ist âne zwîfel war:	私が五年間キリスト教徒であつたことは
ich was kristen wol fünf jâr;	疑いもなく本当のことである。
doch gescuofen si daz sider	しかし、そののち私の偶像が私をして
daz ich mich vernogierte wider,	再び異教徒にならしめ、以前と同じように
und wart in als ê undertan.>>	私はそれらに従うこととなったのだ。」
(982-9)	

エッツェル王が五年間キリスト教徒だつたのち、再び異教徒に戻つたというこの記載は、『ニーベルンゲンの歌』写本Bには見いだされえないが、しかし、写本Cにはこう語られている。

13) 実際この部分にはロールゼに関する八詩節の補足詩節(C1158-65)が続いているが、ここでは特に関係のある二詩節だけを挙げる。

<<Ern ist niht gar ein heiden, des sult ir sicher sîn.
 j a was vil wol bekêret der liebe herre mîn,
 wan daz er sich widere vernôgieret hat.>> (C1284, 1-3)

「彼は全くの異教徒ではないことをあなたにご承知下さい。
 事実、私の主君（エッツェル王）は改宗していたのですが、
 彼は再び異教徒となったのです。」

すなわち、リュエデゲールがクリエムヒルトにエッツェル王と結婚するようにと勧めているこの詩節は、写本Bにはない写本Cの改作者の補足詩節なのである。

このように『哀歌』が『ニーベルンゲンの歌』写本Cと何らかの密接な関係にあったことは、さらに「ルーモルトの忠告」(Rumoldes rat)によって決定的にされると言ってよいであろう。まず『哀歌』においてルーモルトはこのように意見を述べている。

<<hete mîn herre getan <u>als ich im mit triuwen riet,</u> do er von disem lande schiet, sone wære er niht erstorben.>> (4060-3)	「私の主君がこの国を出発するとき、 <u>私が彼に真心をこめて忠告していたように</u> 彼がもししていれば、 彼は命を失うことはなかったであろう。」
--	--

ここで特に重要なのは下線部の4061行目である。この一行を『ニーベルンゲンの歌』両写本における「ルーモルトの忠告」と比較するならば、『哀歌』と『ニーベルンゲンの歌』写本Cとの関係が明白になってくる。まず rat（忠告）とその動詞形 raten をルーモルトは『ニーベルンゲンの歌』両写本で使用しており、同じように triuwe（真心）という語を用いて話している。すなわち、『ニーベルンゲンの歌』写本Bでは、

<<Welt ir niht volgen Hagene, wand ich iu bin <u>mit triuwen</u> daz ir sult hie belîben unde lat den künec Etzel	iu <u>rætet</u> Rûmolt, vil dienstlîchen holt, durch den willen mîn, dort bî Kriemhilde sîn.>> (B1466)
--	---

「もしハゲネ殿の言葉に従わないならば、
真心をもって忠実にお仕え致すこのルーモルトが進言致します。
 私の言うことをお聞きになって、当地にお留まり下さい。
 クリエムヒルト様のことはエッツェル王にお任せなさいまし。」

<<Des rat ich iu beliben, rîch sint iuwer lant.
 man mac iu baz erlæsen hie heime diu pfant
 danne dâ zen Hiunen. wer weiz, wie iz dâ gestat?
 ir sult beliben, herren: daz ist der Rûmoldes rat.>> (B1469)

「それゆえ、お留まりになるようお勧め致します。お国は豊かであり、
 フン族の国よりもここの方が万一の危険から守られます。
 向うの様子など、誰にもわかりはしません。
 王様、お留まりなさいまし。これがルーモルトの忠告です。」

一方、写本Cではこう語られている。

<<Und welt ir im niht volgen, iu rætet Rûmolt
 (ich bin iu mit triuwen vil dienstlichen holt),
 daz ir hie belibet durch den willen mîn,
 und lat den künic Ezele dort bî Kriemhilde sîn.>> (C1494)

<<Des rat ich iu beliben: rîch sint iuwer lant.
 man mag iu michel sanfter læsen hie diu pfant
 danne dâ zen Hiunen: ine weiz, wiez dâ gestat.
 ir sult beliben, herre: daz ist mit triuwen mîn rat.>> (C1499)

写本Cにおけるこの二詩節は邦訳すると写本Bのそれとほとんど同じ意味になるが、しかし、写本C 1499詩節では

E daz si schieden dannen, der künic ze rate gie
 mit sînen hœchsten mannen. unberihtet er niht lie
 lant unde bûrge: die der solden pflegen,

den liez er ze huote

vil manigen ûzerwelten degen. (C1553)

彼らがそこから出発する前に、国王は主な家臣たちと
相談をした。国や数々の城を彼はそのままにして
おきはしなかった。城を護るべき人々には
国王は護衛として多くのすぐれた勇士を残して置いたのである。

しかし、この *scheiden* という動詞は両写本のそのあとの詩節(B1520=C1554)にも再度用いられているので、この *scheiden* という動詞に決定的な確証を得るのは非常にむずかしいところである。それにもかかわらず、以上述べてきたことを考え合わせれば、ここでは少なくとも一つの視点、すなわち、『ニーベルンゲンの歌』写本Cと『哀歌』との間には相互の影響関係があるという一つの視点がほのめかされうると言ってもよいであろう。

また本文の内容だけではなく韻律に関してまで『ニーベルンゲンの歌』写本Cと『哀歌』とは相互に影響し合っていることが明らかである。例えば、写本B 2086 詩節のあとに写本Cでは次の補足詩節が付け加えられている。

Sine het der grôzen slahte also niht gedaht.
si het ez in ir ahte vil gerne dar zuo bräht,
daz niwan Hagene aleine den lîp dâ hete lān. (C2143, 1-3)

彼女はそうように大きな戦いを考えもしなかった。
彼女はただ彼女の計画では
ハゲネ一人の命を奪い取りたかっただけなのである。

一方『哀歌』では次のように語られている。

<u>Diu enhetes niht also gedaht.</u>	彼女はそのようなことは
<u>si het iz gerne dar zuo bräht,</u>	考えもしなかった。彼女は
<u>dô siz prûeven began,</u>	それを計画したとき、
<u>daz niwan der eine man</u>	ただ一人の男の命を、
<u>den lîp hête verlorn.</u>	奪い取りたかっただけなのである。
(259-63)	

このように両者は内容から表現方法及び韻律に至るまで全くといってよいほど似かよっているのである。

しかし、ここで確認しておかなければならないのは、このように『哀歌』と『ニーベルンゲンの歌』写本Cとの間には内的・外的な影響関係があると認められても、それだからといって、『哀歌』の詩人が写本Cを手本に用いたということにはならないということである。なぜなら、その逆、すなわち、写本Cの詩人が『哀歌』を参照したということも考えられるからである。否、それどころか、写本Cは写本Bと『哀歌』との間の矛盾を取り除く努力から生じたものであるとも言われているくらいである¹⁴⁾。

では一体、写本B→『哀歌』→写本C、あるいは写本B→写本C→『哀歌』のうち、どちらの順序でそれぞれの作品が生じてきたのであろうか。ヴェルナー・シュレーダー¹⁵⁾は、W.ブラウネ¹⁶⁾とFr.フォークト¹⁷⁾の研究以来『ニーベルンゲンの歌』写本B→『哀歌』写本B→『ニーベルンゲンの歌』写本C+『哀歌』写本Cという年代順が確定していると述べているが、しかし、この確証も決定的ではない。ヴェルナー・ホフマン¹⁸⁾は、とにかくこの問題に関しては、『哀歌』写本B→『ニーベルンゲンの歌』写本Cという前提からは出発しない新しい研究が必要であると提起している。従って、両者の依存関係、すなわち、『哀歌』が写本Cの手本となったのか、それとも写本Cが『哀歌』の手本となったのかは容易に決定することができないのである。

また、その三つの作品の相対的年代順決定の問題だけではなく、『ニーベルンゲンの歌』両写本及び『哀歌』の成立年代決定の問題に関しても異論のあるところである。Fr.パンツァー¹⁹⁾とW.シュレーダー²⁰⁾が、『ニーベルンゲンの歌』両写本と『哀歌』の成立をヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチファル』第八巻成立(遅くとも

14) Vgl. Friedrich Wilhelm : Über die Fassungen B und C des Nibelungenliedes und der Klage, ihre Verfasser und Abfassungszeit. München 1916, S. 18. u. 23-4.

15) Werner Schröder : Das Leid in der Klage. ZfdA. 1951. S. 54.

16) Wilhelm Braune : Die Handschriftenverhältnisse des Nibelungenliedes. 1900.

17) Friedrich Vogt: Zur Geschichte der Nibelungenklage. Marburg 1913.

18) Werner Hoffmann: Die Fassung C des Nibelungenliedes und die Klage. 1767. S. 139.

19) フリードリヒ・パンツァーによれば、すなわち、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチファル』第八巻における「ルーモルトの忠告」引用(420, 25-421, 10)は『ニーベルンゲンの歌』写本Cに由来するものと推定し、従って、『パルチファル』第八巻が遅くとも1206-7年に成立したときには、写本Cはもうすでに成立していたというものである。(Vgl. Fr. Panzer: a. a. O., S. 98.)

20) ヴェルナー・シュレーダーもFr. パンツァーと同じように、ヴォルフラムの『パルチファル』第八巻における「ルーモルトの忠告」は『ニーベルンゲンの歌』写本Cの知識を前提としているばかりではなく、『哀歌』の知識をも前提としていると考えるのである。(Vgl. W. Schröder : a. a. O., S. 56-7.)

1206-7年)以前だと推定している一方、Fr. ヴィルヘルム²¹⁾は、『ニーベルンゲンの歌』写本Bの成立を1190-1200年、『哀歌』並びに『ニーベルンゲンの歌』写本Cの成立を1214年以後、しかも『ニーベルンゲンの歌』写本Cは写本Bと『哀歌』との間の矛盾を取り除くため1226-28年(あるいはもっとのち)に詩作されたものと推定している。さらにもう一つ別の見解としてW. ホフマン²²⁾は、将来詳しい研究によって『ニーベルンゲンの歌』写本Bは1200年に生じ、およそ十年遅れて『ニーベルンゲンの歌』写本Cが成立し、それから1220年に『哀歌』が成立したという結論、すなわち、それぞれの作品が年代的に十分な間隔をもって成立したという結論に達しなければならないと述べている。要するに、ここではっきりと言えることは、ただ『ニーベルンゲンの歌』両写本と『哀歌』の作者たちはとにかく同時代の人であり、恐らくはお互いに影響を及ぼし合ったということであり、それぞれの成立年代並びに依存関係については正確なことは何も決定されえないのである。

21) 彼の見解を要約すると次のようになる。まず『ニーベルンゲンの歌』写本Bはバッサウの僧侶ヴォルフゲル (Wolfer, 1191-1204)の依頼でオーストリアの詩人によって詩作された。『哀歌』は、バイエルン公爵ルートヴィヒ (Ludwig der Kehlheimer) ——ロールゼ (Lörse)の修道院と密接な関係があった——がフリードリヒ二世 (1212-50)より領地としてラインプファルツを授けられた1214年以後にようやくバイエルンの詩人によって詩作された。この『哀歌』と『ニーベルンゲンの歌』写本Bとの間の矛盾を取り除くため、『ニーベルンゲンの歌』写本Cが、恐らく1226年から1228年までに(あるいはもっとのちであるかも知れないが)、バイエルンの詩人によってヴィッテルスバッハ家(Wittelsbach)のために詩作された。恐らく『哀歌』の詩人と『ニーベルンゲンの歌』写本Cの詩人は同一人物であったろうというのが結論である。(Vgl. Fr. Wilhelm : a. a. O., S. 23-4.)

22) Vgl. Werner Hoffmann : a. a. O., S. 142.

IV. 『哀歌』の特徴

このように『ニーベルンゲンの歌』写本Cと『哀歌』の依存関係については決定が下されえないが、しかし、ここで特記すべきは、この二作品が特にクリエムヒルトを弁護し、ハゲネを非難する点で一致しているということである。『哀歌』では、すなわち、『ニーベルンゲンの歌』写本Cと同じように、クリエムヒルトは「誠実」(triuwe)から復讐を遂げた(Z.B., 156-8)のであり、その復讐の行為も正当である(Z.B., 138)という確信が至るところで述べられており、またそれと同時に『哀歌』は繰り返し全ての責任をハゲネに押しつける努力(Z.B., 1253; 1300-1)をしていると言うことができるからである。しかもその場合、クリエムヒルトを擁護しハゲネに全ての責任を押しつける傾向は、『ニーベルンゲンの歌』写本Cにおいてよりも『哀歌』においての方がより鋭くより執拗に描写されている。このことは、例えば、『ニーベルンゲンの歌』両写本ではクリエムヒルトが「鬼女」(valandinne)と呼ばれている(B1748, 4=C1789, 4及び B2371, 4=C2431, 4)のに対して、『哀歌』ではハゲネが「悪魔」(valant, 1250)と呼ばれ、さらに大惨事の原因がハゲネの高慢(Übermuot, 4031)であると語られていることから明らかであるし、また『ニーベルンゲンの歌』両写本においてヒルデブラントがクリエムヒルトを打ち殺すことに対して、『哀歌』の詩人は次のように語っていることから明らかである。

daz was diu küneginne,
die mit unsinne
het erslagen Hildebrant.

(731-3)

それは王妃(クリエムヒルト)であった。
無分別にヒルデブラントが
彼女を打ち殺したのである。

durh daz verlös ouch si den lip
von Hildebrande ane nōt.

(750-1)

そのために彼女はヒルデブラントから
理由もなく殺されてしまったのである。

すなわち、クリエムヒルトが無分別な(mit unsinne)ヒルデブラントに殺されたのは謂われのない(ane nōt)ことなのであり、『哀歌』の詩人自身次のように確信していたのである。

swer ditze mære merken kan,
der sagt unschuldic gar ir lip,
wan daz daz vil edel werde wip
tæte nâch ir triuwe
ir rache in grözer riuwe.

(154-8)

この話を本当に知っている人は、
彼女のことを無罪だと言うであろう。
なぜなら、この高貴な女性は
彼女の誠実から
その復讐を遂げたからである。

そして、誠実から行動する人に関しては『哀歌』の詩人は次のように確信していたのである。

s i t si durch triuwe t o t gelac,
in gotes hulden manegen tac
sol si ze himele noch geleben.
got h a t uns allen daz gegeben,
swes l i p mit triuwen ende nimt,
daz der zem himelr i c h e z i m t.

彼女は誠実のために死んだのであるから、
神の恩恵の中で多くの日々を彼女は
天国でなおも生きることができるのである。
神が我々全員に約束していることによると、
その生が誠実で終わる者は
天国へ行くのにふさわしいからである。

(571-6)

『ニーベルンゲンの歌』の「鬼女」は誠実のために『哀歌』では永遠の至福を勝ち得たのである。クリエムヒルトの行為に関してこれほど鋭く解釈を変えているものは他には考えられないほどである。このように『哀歌』においてはクリエムヒルトを強く支持する傾向がより鋭くなっているのであるが、それと同時に悲劇の張本人であるハゲネの行動に対する非難も一段と鋭くなっている。『哀歌』におけるルーモルトはハゲネの行為を次のように非難している。

< m i n e herren die h a n ich verlorn	「私は主君たちをただハゲネの高慢ゆえに
niwan von Hagenen ü bermuot;	失ったのだ。高慢はしばしば
diu dicke gr o z e n scaden tuot.	大きな悲しみをもたらすものだ。
do er Kriemhilde nam ir man	ハゲネがよからぬ心を抱いて
und ir ir guot an gewan	彼女の夫の生命と
in gr o z e n untriuwen,	財産を奪い取ったとき、
ich sah ez an ir riuwen,	私は彼女の悲しみを見てわかったが、
swie siz ane getrüege,	彼女は何が起ころうと
daz man si drumbe slüege,	彼ら（ハゲネとグンテル王）を
swenne iz ouch geschæhe.	殺すことを考えていたのだ。
Hagen ir manege smæhe	ハゲネは常に理由もなく
zir scaden a n e schulde erb o t	彼女に損害を与えたばかりではなく、
zallen z i t e n a n e n o t ;	多くの罵りの言葉を吐きかけたが、
des er niht tuon solde,	人が注意しようとしたとき、ハゲネは
ob manz merken wolde:	それをすべきではなかったのだ。
wand es was im gar ze vil;	それは、あまりな行為であり、
darumbe ihz ir niht w i z e n wil.	それゆえ私はクリエムヒルトを責める
waz het S i f r i t , ir man,	つもりはない。彼女の夫ジーフリトが

im ze leide getân?
der wart âne sculde ermort.>>
(4030-49)

ハゲネに何をしたというのだ。
彼は謂われもなく殺害されたのだ。」

しかし、『哀歌』はさらに『ニーベルンゲンの歌』写本Cを超えて、ニーベルンゲン悲劇を、もっぱらブルゴント族の主君たちから承諾を得て行動した残忍なハゲネに対する罪として、すなわち、神が与えた正当な「罰」として解釈しようと努力しているさまが明らかである。『哀歌』の詩人はヒルデブラントを通じてその大惨事に関する自分自身の見解を述べていると言えよう。

<<ine kan mihs anders niht versten, wan daz die helde ûz erkorn den vreislîchen gotes zorn nu lange her verdienet hân. done kunde langer niht gestân über ir zil einen tac: dô muosen si den gotes slac lîden durch ir übermuot, des lîgt hie manec helt guot, der in manegem sturme herte sich dicke wol erwerete, und sint nu hie erstorben. daz hant si in selbe erworben.>>	「選り抜きの勇士たちは 恐ろしい神の怒りを 今や長い間得ていたとしか 私には理解できません。 神の怒りは、もはや一日として待てず、 今や大爆発し、 彼らはその高慢のゆえに神の一撃を 被らなければならなかったのです。 そのため多くの勇士がここに倒れている のです。彼らは激しい多くの戦いで しばしば生き延びてきたのですが、 今やここに殺されています。 彼らは自ら死を得たのです。」
(1270-82)	

ここで語られていることは、『ニーベルンゲンの歌』改作者Cがその補足詩節 (C1008)でジーフリトに死ぬ直前の最後の言葉として口に出させたもの、すなわち、「そなたたちはそなたたち自身を殺したのだということを真の誠実にかけて覚えておくがいい」という言葉²³⁾を思い起こさせる。『哀歌』においても、彼らは彼ら自身を殺した、言い換えれば、罪は天罰をもたらすという考えがここでよりよく理解されるのである。

このようにクリエムヒルト側を全面的に擁護しハゲネ側を絶対的に非難する一方、また『哀歌』の詩人にとって特別な関心は、エッツェル王の性格をキリスト教的意味において浄化することである。戦いで倒れてしまったブルゴント族たちにも、また残忍なハゲネ (1283-94) にも対するエッツェル王の嘆きは驚くほどにまで達している。ブルゴント族が

23) 第四章 125頁参照

結局彼の敵であり、そして彼の息子をも殺害し、多数の家来を殺してしまったということはもはやエッツェル王の頭の中にはない。彼は異教徒であったけれども、敵であれ味方であれ、死んだ者への憐れみは大きかった(874-5) のであり、敵だとはいえ、彼は敵をも嘆かずにはいらなかった(1226-7)のである。エッツェル王は自分の弟ブレーデリンの亡骸に向かってこう叫んでいる。

<<du tæte ungüetlichen,
vil lieber bruoder, ane mir.
swie sold ich getrouwen dir
daz du mînen gesten,
degenen aller besten,
ie erzurndest den muot,
daz si dich, mære helt guot,
dâ von ze tûde hant erslagen?
die selben helde muoz ich klagen,
wand ich in hête gesant
mîne boten in ir lant,
daz si mich sehen solden.

(892-903)

...
daz ir Hagene het getân,
des weste ich wol diu mære:
swie lieb si mir wære,
ich het in nimmer doch erslagen.
ob er vor mir ze tûsent tagen
solde hân geslâfen,
sone het ich mîn wâfen
nimmer über in erzogen.>>

(922-9)

「愛する弟よ、お前は
私に悪いことをしてくれた。
お前が、私の客人である
立派な勇士たちの心を怒らせ、
そのために彼らが立派な勇士のお前を
打ち殺したなんて、
一体私はお前を
どのように信じたらよいのか。
彼らを私は嘆かなければならないのだ。
なぜなら、この私が
彼らの国へ使者を遣って
私を訪問するように取り計らったからだ。

...
ハゲネがクリエムヒルトにしたことは
私もよく存じている。
たとえ彼女が私にとって可愛くあっても、
私は決してハゲネを打ち殺しはしない
だろう。たとえハゲネが私のところで
千日間滞在していたにしても、
私は決して彼に
私の武器を向けなかったであろう。」

「汝の敵を愛せよ」(Liebet eure Feinde!) という戒律がこの異教徒にはこの上なく満たされているように思われるとパンツァーも述べている²⁴⁾。ホフマンの言葉を借りて言えば、ここで『哀歌』は「キリスト教的・道徳的教本」(eine christlich-moralische Lehrdichtung) となっているのである²⁵⁾。この点からある程度推測できることは、パン

24) Vgl. Friedrich Paner : a.a.O., S.83.

25) Vgl. Werner Hoffmann : a.a.O., S.138.

ツァーも推定している²⁶⁾ ように、『哀歌』の詩人は恐らく聖職者 (Geistlicher)であつたろうということであり、少なくとも彼は偉大な悲劇詩人ではなかった。絶え間ない嘆きの繰返しと過度な嘆きの表現が「英雄文学」とはかなり異なった性質のものにしている。『哀歌』の詩人が、『ニーベルンゲンの歌』写本Bの悲劇詩人とはかなり離れた存在にあつたということは、『哀歌』の詩人が古代ゲルマンの英雄ジーフリトをただ副次的な人物、すなわち、クリエムヒルトを擁護するための単なる一人物として、しかも名前を挙げている程度に過ぎないというテキスト上の事実からも明白である。『哀歌』においてジーフリトはもはや古代ゲルマンの不死身の英雄ではなく、単なるクリエムヒルトの亡夫でしかないのである。このように古代ゲルマン伝説の本質的な遺産は踏襲せずに、単なる悲劇の結果として戦場に倒れている使者たちをキリスト教の立場から嘆き悲しんだという点で、この『哀歌』は純粹に「中世的」なものとなっているのである。

まとめ

以上のように見てくると、『哀歌』は、『ニーベルンゲンの歌』写本Cと同じように、クリエムヒルトを擁護していることが容易に理解できよう。『哀歌』においては、すなわち、クリエムヒルトは夫への誠実からハゲネに復讐を遂げたとされており、ヒルデブラントによる成敗は正当ではない(507-9) ののである。確かにクリエムヒルトの死は彼女がハゲネを自らの手で殺し(734-5; 748-9)、またグンテル王をも殺させた(3936-9)からであるが、しかし、『哀歌』において繰返し強調されているのは、『ニーベルンゲンの歌』写本Cと同じように、クリエムヒルトはもし可能ならば復讐はハゲネだけに限り他の者は生かしておきたかった (236-42; 259-63) ということである。ハゲネはあらゆる不幸の原因を作った張本人である (1253; 1298-1301)と語られ、人々からも呪われ (1297)、さらにはヒルデブラントに「悪魔」(valant, 1250) とさえ呼ばれている。このように『哀歌』においてもたいていの罪は、『ニーベルンゲンの歌』写本Cと同じように、ハゲネになすりつけられており、『哀歌』の詩人は、ジーフリトの死のためのクリエムヒルトの復讐は正当 (138) だと思っていたのである。否、それどころか、上でも述べたように、「彼女は誠実ゆえに死んだのであるから、神の恵みにより永遠に天国で生きることができるのである」(571-3) とさえ称えられている。クリエムヒルトの行為を弁護し、それと同時にハゲネの行為を絶對的に非難しようとするこの傾向は、『ニーベルンゲンの歌』写本Cにおいてよりもこの『哀歌』において一層鋭くなっているのである。

従って、この限りにおいて『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』との内的関係、すなわち、クリエムヒルトを弁護し、ハゲネを否定する傾向を視点とした両者の内的関係は、ただ写本B→写本C→『哀歌』という順序においてのみ見られうる。しかし、これらの作品

²⁶⁾ ^{vgl.} Friedrich Paner : a.a.O., S.90.

の内的関係にそれらの年代学的関係を結びつけてはならないであろう。この内的関係は必ずしも時代的連続の表現である必要はないからである。もし両者の関係を同じものとして取り扱うなら、それは危険でさえある。とにかく本研究ではこの三つの作品の相対的年代順並びに成立年代決定の問題は、未解決のままにしておかざるをえない。ただここでの結論として我々が確認しておきたいのは、『哀歌』は、『ニーベルンゲンの歌』写本Cと同じように、『ニーベルンゲンの歌』原典において展開されているいわば英雄主義的・悲観主義的世界観に対して反対の声を表したものであり、さらにまた『哀歌』はキリスト教的要素が多分に入り込むことによって純粹に「中世的」な作品となっているということである。

以上、第一章から第五章まで『ニーベルンゲンの歌』の成立に関して、伝説、生成過程、作者、写本及び後日譚等の問題を取り扱ってきたが、このように見てくると、『ニーベルンゲンの歌』は実にさまざまな詩人及び作品が複雑に絡み合って、それらの影響関係から成立した作品であることがわかるであろう。『ニーベルンゲンの歌』成立には数多くの詩人たちが関与してきたのであるが、しかし、画期的な功績を挙げたのは、ブリュンヒルト伝説とブルグント伝説を一つに結び合わせた十三世紀初頭のドーナウ地方の詩人である。この詩人をもって我々はニーベルンゲンの詩人と称するのであり、この詩人の原型たる叙事詩に最も近い形がザンクト・ガレンの写本Bでもって伝えられていると考えられるのである。もちろんこの写本Bは書写される際に新たに書き加えられた部分も多いことは否めず、厳密に言えば、『ニーベルンゲンの歌』の原型であるとは言えないが、しかし、それはともかく、以下、第Ⅱ部においてはこの写本Bに基づいて、あるときには写本Cをも引き合いに出して、またハルトマンのアルトゥース・ロマーンとも比較しながら、『ニーベルンゲンの歌』という作品の構造分析を行い、今度はテキストそのものの中からこの叙事詩の特質を探り出してゆくことにしよう。これが第Ⅱ部における課題である。

第Ⅱ部 悲劇の構図

第六章 『ニーベルンゲンの歌』における クリエムヒルト像の特質

『ニーベルンゲンの歌』は、第I部「作品の成立」で明らかにされたように、ブルグント族滅亡の叙事詩、いわゆる『古きニーベルンゲン災厄』にブリュンヒルト伝説が結び合わされて成立したものであるが、ニーベルンゲンの詩人はその際、クリエムヒルトを自らの作品の中心に置き、クリエムヒルトを独自の方法で形象化することによって、二つの素材を一つにすることに成功したのである。前編にあたるジーフリートの死の文学は、従って、かつてのブリュンヒルト悲劇ではなく、クリエムヒルトの復讐物語の前提部となった。重心はブリュンヒルトからクリエムヒルトに移されたのであり、ブリュンヒルトの役割は両王妃口論を展開させ、ジーフリート暗殺のきっかけを作るだけである。北欧ではブリュンヒルトがますます重要となっているのに対して、ドイツではクリエムヒルトが中心人物となっている。このクリエムヒルトを中心人物に据えたことはニーベルンゲンの詩人のまず第一の業績である。ニーベルンゲンの詩人は、当時のほかの中世叙事詩の宮廷的「貴婦人」(frouwe)と比べられるところがあり、また一部分は言語使用に関してさえもミンネザングの「貴婦人」(frouwe)と比べられるところのクリエムヒルト像を作り上げたのである¹⁾。ところが、この「宮廷的」なクリエムヒルトのほか、異教的英雄的領域に属する古いクリエムヒルトもなお存続しつづけていることもまた周知の事実である。宮廷的貴婦人クリエムヒルトは後編に至って愛しい夫^{いと}ジーフリートの復讐のため実兄たちを無残にも滅ぼしてしまうのである。しかも、この復讐魔としてのクリエムヒルトは、後編において初めて登場するのではなく、前編の冒頭からすでに予示されている。最初からこのように予定されているクリエムヒルトの二つの像は、一体、どのように解釈したらよいのであろうか。全体はとにかくこの女性によって統一されているのであり、この人物の理解こそこの作品の解釈の鍵であるように思われる。そこで本章では、この作品の構成におけるクリエムヒルトの行動と性格づけ及びその役割を考察することによって、この作品におけるクリエムヒルト像の特質を明らかにしておきたい。

I. 貴婦人(frouwe)クリエムヒルト

1. ジーフリートとの結婚 —— liebendes magedin ——

『ニーベルンゲンの歌』における中心的な人物はクリエムヒルトであり、この作品の筋はまさにこのクリエムヒルトをめぐる展開するということは、冒頭の第一歌章の導入詩

1) Vgl. M.W. Armstrong : Rolle und Charakter. Studien zur Menschendarstellung im Nibelungenlied. Göppingen 1979. S.239.

節からも明らかである。第一詩節は前置きとして恐らくのちに付け加えられたものであるから、叙事詩はもともと純粹なクリエムヒルトの次のような詩節でもって始まっていたのである²⁾。

Es <u>wuohs</u> in Burgonden	ein vil edel magedin,
daz in allen landen	niht schœners mohte sîn,
Kriemhilt geheizen:	si <u>wart</u> ein scœne wîp.
dar umbe muosen degene	vil verliesen den lîp. (2)

むかしブルゴントの国に、いともあてなる姫が生まれた。

その名をクリエムヒルトといい、世にまたとあるまじき美しい姫で、

やがてひとりまへの麗人として生い育ったが、

彼女のためにはあまたの勇士が命を失う運命であった。

一行目の「生まれた」(wuohs)と三行目の「生い育った」(wart)は、成長してゆくクリエムヒルト像の伝記的性格を強調している³⁾。そのあとの第四詩節でようやく挙げられるブルゴント国王兄弟は、すでに固定されてしまった、刻印されてしまった人物として描かれているだけに、このクリエムヒルトの「いともあてなる姫」(ein vil edel magedin, 2, 1)から「ひとりまへの麗人」(ein scœne wîp, 2, 3)への成長過程の描写は、全体をクリエムヒルト・ロマーンとして決定づけている⁴⁾と言える。『ニーベルンゲンの歌』はこのようにクリエムヒルトの名を挙げることでもって始まっており、のちのあらゆる出来事はクリエムヒルトとの関係で起こる、否、それどころか、上記引用詩節の四行目からも明らかのように、クリエムヒルトによって惹き起こされるのである。

このことをさらにもっと明白に示しているのが、その直後に語られるクリエムヒルトの「鷹の夢」である。ブルゴント国の栄華の中にあつてあるときクリエムヒルトは悲しい夢を見たのであるが、それは、彼女が飼っていた強い、美しい、猛々しい鷹が、二羽の鶯の爪に引き裂かれたという内容のものであった。この夢のことを母后ウオテに物語ると、母は姫に「その鷹というのは気高い殿御のことで、運が悪いと、そなたは殿御をじきに失わねばなるまい」(14)という夢占いをする。「恋のよろこびが結局悲しみをもたらす」(17)ということを手でいろいろの女の例で知っていたクリエムヒルトは、心のうちで恋というものをあきらめて、長い年月、楽しい日々を送りむかえたのであるが、しかし、やがて彼女も、晴れてある勇士の妻となる日が来たのである。この勇士こそ、姫が夢に見たあの

2) Vgl. ebd. S. 248.

3) Vgl. ebd. S. 250.

4) Vgl. ebd. S. 252-3.

鷹であったが、詩人はこの「鷹の夢」を締めくくって次のように語っている。

Der was der selbe valke,	den si in ir troume sach,
den ir besciet ir muoter.	wie sere si daz rach
an ir nêhsten magen,	die in sluogen sint!
durch sîn eines sterben	starp vil maneger muoter kint. (19)

この勇士こそ、姫が夢にみて、母君が占ったあの鷹であったのだ。
後にこの勇士を殺害した自分の近親の人々に、
彼女はどれほどひどい復讐を遂げたことであつたろうか。
この一人の死のために幾多の母の子らは命を失ったのだ。

愛らしいブルゴント姫とともにすでにブルゴント族滅亡の復讐魔としてのクリエムヒルトも予示されており、全体はこの一女性によって統一されていることが明らかである。このクリエムヒルトの「鷹の夢」は、第Ⅰ部の第二章でもすでに述べておいた⁵⁾ように、素材においてすでに語られていたものと推定されるが、しかし、それはまだブリュンヒルト伝説の枠内にとどまったままであり、復讐については触れられていなかった。ニーベルンゲンの詩人はその「鷹の夢」を踏襲してクリエムヒルトを中心人物としたばかりか、さらにその中に夫のための復讐を盛り込むことによって前編の素材と後編の素材とを一つに結びつけることに成功したのである。

全体が愛しい夫のための復讐となったため、その夫ジーフリトはその生い立ち等の点で改作を施されねばならない。伝承によれば、ジーフリトはもともとは古代ゲルマンの英雄であり、実際にこの作品の中でも、彼はニーベルンゲンの財宝を獲得し、また竜をも退治して肌が不死身の甲羅と化して、いかなる武器でもって傷つけられ得ない英雄となったということがあとでハゲネによって語られているが、しかし、この作品ではニーベルンゲンの詩人によって改作が施されて、とりあえずまずはニーデルラントの騎士的王子として登場することとなったのである。クリエムヒルトの鷹の夢のあと、すぐに紹介されてジーフリトはニーベルンゲンの詩人によってこう語られている。

D o <u>wuohs</u> in Niderlanden	eins edelen küneges kint,
des vater der hiez Sigemunt,	sîn muoter Sigelint,
in einer rîchen bürge	wîten wol bekant,
nidene bî dem Rîne:	diu was ze Santen genant. (20)

5)第二章99頁参照

さて、ニーデルラントの国に氣高い一人の王子が生まれた。

父の名はジゲムント、また母はジゲリントと呼ばれた。

それはライン河の下流地方で、ひろくその名がきこえている
ザンテンという立派な城下町でのことである。

この「生まれた」(wuohs)という表現はクリエムヒルトの場合と対をなしていることは明らかである。ジーフリトは、「いともあてなる姫」(ein vil edel magedin, 2, 1)のクリエムヒルトと同様に、固定された人物ではなく、成長する「氣高い一人の王子」(eins edelen küneges kint, 20, 1)として登場し、やがて一人前に成人して、宮廷にも出かけるようになり(24, 1)、また分別をもって美しい女にも愛を求めるようにもなってきた(26, 3)のである。ブルゴント国に世にも美しい乙女がいるという噂を聞いた(44, 2)とき、ジゲリントの王子が求めたのは「位たかき乙女の愛」(höhe minne, 47, 1)であったと表現されているのも決して意味のないことではない。ジーフリトは高きミンネを求めて冒険の旅に出かけてゆく典型的な中世騎士としても描かれているのである。ジーフリトは、従って、クリエムヒルトの高きミンネを求めてウォルムスへ旅立つ限り、素材で語り継がれたような神話的な誉れ高い英雄とは全く別物であり、原始時代の悪竜退治者かつ財宝強奪者でもなく、また全く人間になり下がった神々の子でもなく、「氣高い一人の王子」(eins edelen küneges kint)であり、それをもって「いともあてなる姫」(ein vil edel magedin, 2, 1)としてのクリエムヒルト自身の正確な相対物(Pendant)なのである⁶⁾。以後、ジーフリトがブルゴント国に到着して展開される二人の物語はミンネザング風に刻み込まれた感情と思考において進展していると言ってもよいであろう。ウォルムスに到着したジーフリトは心に愛らしい乙女クリエムヒルトのことを想い(132, 2)、一方乙女の方も彼のことを想い(132, 3)、幾たびか彼のことをひそかに優しく噂していた(132, 4)が、両人はそのことを知らないばかりか、お互いに出会う機会とてない。あてなる王女クリエムヒルトはしばしば窓ごしに、城庭で競技に打興じるジーフリトの姿を眺める(133)だけである。一方、ジーフリトも満たされぬ愛ゆえに嘆くミンネゼンガーの悲しみ(trüren)に陥る。

Er gedäht' ouch manege zîte: <<wie sol daz gescehen,
daz ich die maget edele mit ougen müge sehen?
die ich von herzen minne und lange han getan,
diu ist mir noch vil vremde: des muoz ich trûric gestan.>> (136)

彼の方でも幾たびか考えた。

「自分が久しいあいだ心から慕っているかの氣高い姫を、

6) Vgl. M. W. Armstrong : a. a. O., S. 255.

この眼で見るためにはどうしたらよいのであろう。

自分にとって姫がまだ赤の他人にすぎないとは、悲しいことだ。」

こうして実際まる一年の間兩人は互いに会える機会一度としてなかったが、その後ザクセン勢とデンマルク勢に対する戦いでジーフリトは手柄を立てることによってやっとその祝宴でクリエムヒルトに会える機会を得る。ザクセン戦争もただクリエムヒルトに結びつけられていることは明らかであり、彼女がその祝宴で外面的にこの世の全てのものを凌いで輝く美しい姫として描かれているのもっともなことであろう⁷⁾。

Nu gie diu minneclîche, also der morgenrôt
tuot ûz den trûeben wolken. da sciet von maneger nôt,
der si da truog in herzen und lange het getan.
er sach die minneclîchen nu vil hêrlîchen stan. (281)

Jâ lûhte ir von ir wæte vil manec edel stein.
ir rôsenrôtiu varwe vil minneclîchen scein.
ob iemen wûnschen solde, der kunde niht gejeihen,
daz er ze dirre werlde het iht scœners gesehen. (282)

Sam der liehte mæne vor den sternem stat,
des scîn sô lûterlîche ab den wolken gât,
dem stuont si nu gelîche vor maneger frouwen guot.
des wart dâ wol gehæhet den zieren helden der muot. (283)

さながら^{あけぼの}曙の光が暗い雲間から射すように
今や愛らしい姫は姿をあらわした。久しいあいだ彼女を
胸に想いつづけていた人はようやく積もる悩みをのがれて、
愛らしい姫の気高く^{たたず}佇む姿をばしみじみと見たのである。

彼女の身につけた衣裳からは幾多の宝石が光をはなち、
また彼女のぼら色の顔はろうたげに輝いた。
どんな人がどう考えてもこの世において、
これ以上美しいものを見たことがあるとは言うことができまい。

7) 下記引用の下線部についてはのちの脚註 9を参照のこと。

雲間から^{こうこう}皓々たる光をはなつ満月が、
星々を^{つら}圧して照りわたるように、

彼女もまた数あるみめよき婦人の前に照りまさっていた。

そのため、たくましい^{ますらお}益荒男たちも、胸をときめかした。

このクリエムヒルトの初めての出現は、ジーフリトを甘い困惑の中へと陥らせる。王子ジーフリトとしては、哀歓交々いたる思いであり(284, 4)、クリエムヒルトの美しさに直面してミンネザング風の「妄想」(wān, 285, 2) が彼の心の中に起こる。

Er dāht' in sīnem muote: <<wie kunde daz ergān,
daz ich dich minnen solde? daz ist ein tumber wān.
sol aber ich dich vremeden, sō wære ich sanfter tōt.>>
er wart von den gedanken vil dicke bleich unde rōt. (285)

Dō stuont sō minneclīche daz Sigmundes kint,
sam er entworfen wære an ein permint
von guotes meisters listen, alsō man im jach,
daz man helt deheinen nie sō scænen gesach. (286)

彼は心に思った、「どういう間違いで、
姫を恋するようになったのか。それはとんでもない思いあがりだ。
さりとして思いあきらめるくらいなら死んだほうがよほどましだ。」
思い乱れるあまりに、彼は^{あか}赧くなったり^{あせ}蒼くなったりした。

このときジゲムントの王子が優雅な姿で立っているさまは、
さながら名匠の^{わざ}技をもって羊皮紙に描いた画のようであり、
いかなる若武者でもかほどに端麗な男は、
ついぞ見たことがないと人々が噂したほどであった。

本来古代ゲルマン的な勇士であるジーフリトも、ここではクリエムヒルトの相対物として、ミンネの苦しみをも経験する宮廷的騎士として描かれている。やっと会うことができ、挨拶を受けたにしても、ジーフリトはまだなおクリエムヒルトを妻にすることはできない。この愛の実現の延期は、兩人の愛の深さを表していると言えよう。愛を勝ち取るためには、もう一つの試練を克服しなければならない。それは、すなわち、グンテル王がブリュンヒルトの愛を求めてイースラントへ旅立つ際に援助をすることである。本来古い素材に属す

るこのイーゼンシュタインへの随行は、ここでは先のザクセン戦争と同様、クリエムヒルトに対するジーフリトのミンネ奉仕に変えられてしまっているものであり、この冒険をも見事に克服してのちようやく、ジーフリトはやがてクリエムヒルトを妻にすることができるのである。

このようにグンテル王の求婚は同時にジーフリトの「目的達成」をも意味しているのであり、その限りにおいてこのイースラントでの出来事もクリエムヒルトの伝記をさらに先へ進めている⁸⁾と言えるが、さらにここで特記すべきはこの両者の求婚から結婚までの出来事が対比的に描かれているということである。ジーフリトがブルゴントの国に美しい乙女がいるという噂を伝え聞いて(44,2)ウォルムスに出かけて行ったように、グンテル王も海のかなたに一人の美しい女王が君臨しているのを伝え聞いて(328) イースラントへ出かけて行くのであるが、「乙女^がの愛を自分一人の力で手に入れる」(59,1)ジーフリトに対して、グンテル王の場合は最初から他人の力を借りて(332)の求婚である。美しい乙女を面前にしたときのジーフリトの悩みがミンネザング風の「妄想」(wān, 285)であったのに対して、グンテル王のそれは「恐怖」(sorgen, 441, 4)である。なぜなら、プリュンヒルトは実に恐ろしい習慣を続けていて、彼女の愛を求めようとする者は、槍投げ、石投げ、幅跳びの三種競技において、いずれも勝ちを取めなければならず、その一種目たりと敗れば首を失う定めとなっているからである。噂に違^がわず怪力ぶりを発揮して、プリュンヒルトが登場したとき、グンテル王の心のうちは次のように語られている。

Er dāhte in sīnem muote: <<waz sol diz wesen?
der tiuvel ūz der helle wie kund'er dā vor genesen?
wær' ich ze Burgonden mit dem lebene mīn,
si müeste hie vil lange vrī vor mīner minne sīn.>>(442)

彼は心に思うよう、「これはなんとしたことか。

地獄の悪魔といえども、これには命を全うするわけにいくまい。

おれが生きてブルゴントの国へかえれたら、

もはや二度とこんな女に思いをかけることはなからう。」

これを先程引用した285詩節のジーフリトの心のうち、すなわち、ミンネザング風の「妄想」(wān, 285, 2)と比較してみるがよい。求婚する騎士が対照的に描かれていると同時に、求婚される女性の方も著しいコントラストをなして描かれていることが容易に理解されよう。事実、プリュンヒルトよりもクリエムヒルトを優遇していることは、その描写から明らかである。イースラントでの競技をジーフリトの秘策によって何とか克服してウ

8) Vgl. H. W. Armstrong: a. a. O., S. 264.

オルムスに帰って来たとき、二人の女性についてこう語られている。

Die vrouwen spehen kunden unt minneclîchen lîp,
die lobten durch ir schœne daz Guntheres wîp.
dô sprâchen dâ die wîsen, die hetenz baz gesehen,
man mœhte Kriemhilden wol vor Prûnhilden jehen. (593)

女性や、肉体美を見る眼のある人は、
その美しさの点でグンテル王の妃をほめ^た讃えた。
けれども、もっと眼のたかい老巧のものは、クリエムヒルトのほうに
プリュンヒルトよりも優位をみとめることができようといった。

プリュンヒルトよりもクリエムヒルトの方が高められていることは、さらにそれぞれの婦人が花婿と結ばれる場面でも明らかである。クリエムヒルトは兄グンテルから結婚の話を聞かされたとき、「乙女ごろの慎ましやかさ」(in magtlîchen zûhten, 615, 1)と当然の服従(613)でもって、兄の望みと同時に自分のひそかに抱いていた望みに従うのであり、王子ジーフリトが品位ある愛をもって花嫁のそばにかしづいたときも、「彼女は彼にとっていのちとなった。彼女の一身は、千人の他の女にも換えがたいものであったろう」(629)と称えられている。これに対してグンテル王が花嫁のそばに横たわろうとすると、プリュンヒルトはこれを拒み、夫に対して手ひどい苦痛(leide, 636, 4)を与えたのである。またもやジーフリトの秘策でもって初めてグンテルはプリュンヒルトを妻とすることができるのであり、ジーフリトの場合と著しいコントラストをなしていることは一目瞭然である。このようにグンテル王とプリュンヒルトとの間の肉欲的な愛と著しいコントラストをなして、ジーフリトとクリエムヒルトとの理想的な結婚は、ミンネザング風に展開されているのであって、要するに、クリエムヒルトは中心的人物であり、もっぱら愛する乙女(liebendes magedîn)として描かれているのである。しかし、まさにこのプリュンヒルトと対比的に描かれたクリエムヒルトの愛がのちには悲惨な悲劇の原因ともなるのであり、そこにまたこの『ニーベルンゲンの歌』のミンネの悲劇的な特質があるのである。

2. プリュンヒルトとの口論 —— leidende frouwe ——

求婚の際に対照的に描かれていたクリエムヒルトとプリュンヒルトは、結婚して王妃の地位に就いたのちも対比的に描かれていると言えよう。クリエムヒルトが王妃というよりは相変わらず夫を愛する宮廷的貴婦人であるのに対して、プリュンヒルトの方は王妃という地位に固執した高慢な王妃として描かれている。二組の夫婦がそれぞれの国で暮すうち、ニーデルラントの国での榮譽のさまが噂として伝わってくる(720) と、嫉妬心の強い高慢なプリュンヒルトは始終こう考えていたのである。

Nu gedaht' ouch alle zîte daz Guntheres wîp:
<<wie treit et also hōhe vrou Kriemhilt den lîp?
nu ist doch unser eigen Sîfrit ir man:
er hat uns nu vil lange lützel dienste getân.>> (724)

しかるに、グンテルの妃は始終こう考えていた、

「妃クリエムヒルトがあんなに氣位の高いのは、一体どうしたわけであろう。

夫のジーフリトは私たちの臣下であるのに、

もう久しいこと宮廷に伺候もしていないではないか」と。

ジーフリト夫妻が彼女に疎遠に打過ぎて、ニーデルラントの国からいっこう出仕もしないことはプリュンヒルトには面白からぬ(leit, 725, 2)ことであつたのである。「来いと命ずるわけにもゆかぬ」(727, 3)と言うグンテル王に対して、プリュンヒルトは抜かりなく、「国王の家来たるものはどんなによい身分であろうと、主君の命令とあれば、それに従わぬわけには参りますまい」(728, 1-2)と言い返したあと、企みに満ちた巧みな言葉(729-30)でもってグンテル王を説き伏せる。王妃があくまでもせがむので、国王もとうとう饗宴への招待という形でジーフリト夫妻に招待の使者を送るのである。一方、招待の知らせを受けたクリエムヒルトは、懷郷の悩み(herzeleide, 741, 3)をおぼえていた女性として描かれており、この便りは美しいクリエムヒルトには好ましく思われた(753, 4)。企みに満ちた招待側のプリュンヒルトと対照的に、招待を受けたクリエムヒルトは歓びのために顔を輝かして(770)、喜んでその招待に応じたのであり、彼女としては何の意図もない。ブルゴントの故郷に恋いこがれて旅立つのである。

ジーフリト夫妻がウォルムスに到着したときも、クリエムヒルトは世にも美しい女性として描かれている(799) 一方、王妃プリュンヒルトは依然としてジーフリトを臣下として見ている(803) 高慢な王妃として描かれている。やがてこの二人が相並んで座につき、誉れ高い二人の武士のことを語り合ったときも、クリエムヒルトはただ何の意図もなく、愛する夫の誉れを称えて「私の夫は、すべてこれらの国々を支配するだけの力量のある人です」(815, 3-4)と言ったに過ぎないが、この無邪気な言葉がプリュンヒルトには気に入らない(816)。そこでクリエムヒルトが繰り返してこう言う。

D 8 sprach aber Kriemhilt: <<nu sihestu, wie er stat,
wie rehte h rl che er vor den recken g t,
alsam der liehte m ne vor den sternen tuot?
des muoz ich von schulden tragen vr  l chen muot.>> (817)

クリエムヒルトが言い返した、「あの人の様子をごらんなさいませ。

^{さっそう}颯爽として武士たちの前を行く姿は、

^{こうつ}暗々たる月が星々を^い圧して大空をわたるようではございませんか。

私がこんな晴れやかな気持でおられるのも当然でしょう。」

クリエムヒルトがこのようにジーフリトの颯爽たる姿を星よりも美しく輝く月に^{たと}喩えるとき、彼女がかつてザクセン戦争後の祝勝会の場面でほめ称えられたと同じ言葉 (283, 1-3) ⁹⁾を用いているのも、決して偶然ではない¹⁰⁾。夫ジーフリトを愛する女性としてクリエムヒルトは、単に無意識的に愛しい夫を称える言葉を述べたに過ぎないのに、その無邪気な言葉がブリュンヒルトの王妃としての威厳を傷つけ、そのことが男たちの地位に関する両王妃への口論へと発展してゆく¹¹⁾。従って、この両王妃口論で言えることは、クリエムヒルトではなく、ブリュンヒルトがその口論を先へ先へと駆り立てており、クリエムヒルトを意識的に怒りへと刺激しているということである。クリエムヒルトは長い間自制したのち、ついに怒りを覚えて (839, 1)、ブリュンヒルトを側女 (^{そばめ}kebse, 839, 4) と罵るが、このとき彼女にそのような言葉を吐かせたのも、結局はジーフリトへの彼女の情熱的な愛である¹²⁾。ジーフリトを愛する妻として彼女は夫をグンテル王の家来 (man, 821, 4-822, 4)に見られることに耐えられずに、しまいにはあらゆる宮廷的貴婦人としての「節度」 (ma  ) をも忘れてしまうが、これも彼女の情熱の激しさを示すものと解釈することができよう¹³⁾。このジーフリトへの熱烈な愛が、こうして両王妃の口論を激化し、悲劇の原因ともなったのである。

ハゲネの策略によって一族が再度ザクセン戦争に出かけることになり、ハゲネが^{いとまご}暇乞いのためクリエムヒルトの座所に伺候したときも、クリエムヒルトはただ夫ジーフリトを愛するがゆえに、夫の身を心配してハゲネにこう言う。

<<Iedoch bin ich in sorgen, swenn' er in str te stat
und vil der g rsch zze von helden hande g t,

9) 本章 166頁脚註 7参照

10) Vgl. M. W. Armstrong : a. a. O., S. 273.

11) Vgl. ebd. S. 271.

12) Vgl. ebd. S. 274.

13) Vgl. ebd.

daz ich da verliese den mînen lieben man.
hey waz ich grôzer sorge dicke umbe Sîfriden hân!>> (900)

「ただ私が恐れるのは、もしあの人^{あの人}が戦場に立って、
勇士たちの手から沢山の投槍が飛んできたりしたら、
私は愛する夫を失いやしないかと、心配なのです。
ほんとに私は時々ジーフリトのために、ひどく心を痛めていますから。」

クリエムヒルトは夫を愛するがゆえに、夫の急所をハゲネに打ち明けてしまう。しかし、
戦闘が中止となり、狩りに出かけることになると、その打ち明け話をしたことによってか
えってクリエムヒルトの心配は増してくる。打ち明け話によって、今や「愛する女性」
(liebende frouwe) クリエムヒルトから「心配する女性」(sorgende frouwe) クリエムヒ
ルトが生じてきたのである。彼女はその不安を夫にほのめかしてこう警告する。

Si sprach zuo dem recken: <<lat iuwer jagen sîn.
mir troumte hînte leide, wie iuch zwei wildiu swîn
jageten über heide, dâ wurden bluomen rôt.
daz ich sô sêre weine, des gêt mir wærlîche nôt. (921)

Ich fürhte harte sêre etelîchen rât,
ob man der deheinem... missedienet hât,
die uns gefüegen kunnen vîentlîchen haz.
belîbet, lieber herre: mit triuwen rât' ich iu daz.>> (922)

彼女は勇士にいった、「狩りはお止めなさいまし。
昨晚、私は二ひきの猪が、野原であなたを追いかけている
いやな夢をみました。草花が朱^{あけ}に染まったのです。
私がこんなに泣くというのも、わけのないことはありませんもの。」

私たちに敵意を抱きかねないような人たちの中の、
だれかの感情をそこねてでもいたとすると、そういう人が
何か悪企みでもしやしないかと、それがとても気にかかるのです。
行かないで下さいまし、真心をもってお留めいたします。」

「親戚から悪い報いを受けるはずはない」(923, 4) と軽くうけながすジーフリトに向かっ
て、再度彼女は警告する。

<<Neina, herre Sifrit! ja fürht ich dînen val,
 mir troumte hînte leide, wie ob dir zetal
 vielen zwêne berge: ine gesach dich nimmer mē.
 wil du von mir scheiden, daz tuot mir an dem herzen wē.>> (924)

「いいえ、ジーフリト様、私はあなたが最期を遂げられるのが怖いのです。
 昨晚、私は二つの山があなたの上に崩れかかる厭な夢をみました。
 もうあなたの姿が見えないのです。
 別れてゆかれるのが、心から悲しくてなりません。」

彼女は良心の悩みに苦しめられ、災いを予感する女性であるが、夫の英雄としての誇りを大切に
 する気持ちから彼女はハゲネに秘密をもらしたことを打ち明けることができない。
 しかも彼女は、かつてプリュンヒルトに関する秘密を軽率に口にしていただけに、今回も
 夫の秘密を不注意にもしゃべったということを打ち明けることはできないのである。彼女
 の二度にわたる警告の中には、彼女の愛と不安が複雑に入り混ざっていると言えよう。

夫を気づかうクリエムヒルトの予感は的中する。翌朝、戸口の前に一人の騎士が殺され
 て倒れているのを侍臣が彼女に告げ知らせると、クリエムヒルトはそれが夫であることを
 確かめるに先立って、ハゲネの問いを思い出すや、深い悲しみに打たれて、そのまま床に
 くずおれてしまう。失神から目ざめたあと、彼女は叫んで言う。

dō sprach si:<<ez ist Sifrit, der mîn vil lieber man:
 ez hât geraten Prûnhilt, daz ez hât Hagene getan.>> (1010,3-4)

彼女はいった、「これは私のいとしい夫、ジーフリト様だ。
 プリュンヒルトが企んで、ハゲネのした仕業です。」

本人を確認するまでもなく、クリエムヒルトはそれが夫だと悟るのである。事実、勇士の
 横たわっているところへかけつてみると、案の定それは夫であり、彼女は彼に深い愛情
 を示してこう叫ぶ。

Dō rief vil trûreclîche diu kûneginne milt:
 <<owē mich mînes leides! nu ist dir dîn schilt
 mit swerten niht verhouwen; du list ermorderōt.
 wesse ich, wer iz het getan, ich riet' im immer sînen tōt.>> (1012)

心やさしい王妃は悲嘆に沈みながら叫んだ、
 「おお、なんという悲しいことだ。あなたの楯は

剣で切り裂かれてはいない。あなたは暗殺されたのだ。

その下手人が判明したら、きっとこの殺害の復讐をしよう。」

後編で実行される彼女の復讐がジーフリトへの愛に基づくものであることを証拠づけている詩節であると言えよう。この復讐の考えは、彼女の熱烈な愛を証明するものであり、彼女の愛がゆるぎないものであることはさらにジーフリト埋葬の際にも容易に読み取られよう。墓場での彼女の失神(1066;1070)とそしてついには、棺はすでに閉じられてしまっていた(1068)けれども、埋葬の前にもう一度夫を見たいという彼女の希望は、彼女の情熱の激しさを示している¹⁴⁾。埋葬後、父王ジゲムントは帰国したのに、クリエムヒルトはウォルムスにとどまったのも、ジーフリトのそばにいたいからであり、事実彼女はジーフリトの魂の冥護を祈るために、寺院に詣でることをやめなかった(1102-3)。心から夫を愛する女性は今やその愛ゆえに節度なく「苦しむ女性」(leidende vrouwe)であり、この過度な苦しみは、永久的な宗教的修練によっても和らげられはしないほど、深いものなのである¹⁵⁾。

このような彼女を決定的に悲しめる女性にさせてしまうのがハゲネによる財宝強奪である。またもやハゲネの策略によって、兄と和解したクリエムヒルトは、ジーフリトの財宝をウォルムスへと運ばせるや、それをハゲネに奪われてしまうのである。この財宝強奪はクリエムヒルトにとって新たな悲しみを意味しているが、クリエムヒルトは死んだジーフリトを悲しんでいるのであって、財宝に基づく権力のことを悲しんでいるのではないことは次の詩節から明らかである。

Und were sîn tûsent stunde noch also vil gewesen,
und solt' der herre Sifrit gesunder sîn gewesen,
bî im were Kriemhilt hendebloz bestan.
getriuwer wîbes künne ein helt nie mër gewan. (1126)

しかし、たとえこの宝がその千倍あったとしても、
もし勇士ジーフリトを元のすやかな身に返すことができたなら、
クリエムヒルトは手を空しくして彼の許に留まったであろう。
勇士たるもの、こんな貞節な妻はもった例がなかった。

財宝強奪がクリエムヒルトにとってさらに悲しいことであったのは、すなわち、それがジーフリトの後朝の贈物であったからである。要するに、前編ではクリエムヒルトの限りない愛が展開されており、愛が深ければ深いだけ、その悲しみも深いのである。

14) Vgl. ebd., S. 281.

15) Vgl. ebd. S. 284-5.

II. 復讐魔 (valandinne) クリエムヒルト

1. エッツェル王との再婚 —— triuwe な未亡人 ——

ジーフリトに対するクリエムヒルトの愛がいかに深いものであったかは、後編においてもエッツェル王の求婚を受けたとき明らかとなる。フン族のエッツェル王の使者リュエデゲールがウォルムスに着いたとき、使者の到着とその趣を辺境伯ゲーレがクリエムヒルトに伝えるが、クリエムヒルトはゲーレに向かって、まずこう言って結婚の意志のないことを明らかにする。

Dō sprach diu jammers rîche: <<i>iu sol verbieten got
und allen mînen vriunden, daz si deheinen spot
an mir armer üeben. waz sold' ich einem man,
der ie herzeliebe von guotem wîbe gewan?>> (1218)

悩み多き妃は答えた、「神はおん身にも、一族の皆々にも、
哀れな私をからかうようなことはお許しなさいませう。
これまですぐれた婦人によって心からの喜びを味わっていた^{とご}殿御に対し、
私がどうすればよいというのです。」

彼女は断固として求婚を拒んだので、今度はゲールノートとギーゼルヘルとがやって来て、彼女を説得するが、彼女を説いて、男を愛するような気持ちを起こさせることは誰にもできはしなかった。そこで勇士たちは「せめて使者との対面だけは許してやるがよい」(1220)と説得して、クリエムヒルトは翌日リュエデゲールに会うことになるが、リュエデゲールは、参内してみると、常日頃と変わらぬ黒い衣裳をつけている妃を見だし、ひたすら悲しみの念(jamer, 1228, 2)に閉ざされているその様子に十分気がついた。リュエデゲールからエッツェル王の趣を聞き知ると、彼女は答える。

Dō sprach diu küneginne: <<marcgrave Rüedegêr,
wær' iemen, der bekande mîniu starken sêr,
der bæte mich niht triuten noch deheinen man.
jâ verlôs ich ein den besten, den ie vrouwe gewan.>> (1233)

妃はこたえた、「辺境伯リュエデゲールよ、
私の手ひどい心の痛みを知っている人なら、
二度と男を愛せよと勧めはしますまい。かつていかなる婦人も
得たことのないようなすぐれた^{とご}殿御を私は失った身なのです。」

「心の痛み(leide)をいやす(ergetzen)ものとしては、優しい愛情のほかにはございません」(1234)と言って彼女を慰めさとスリュエデゲールに対して、クリエムヒルトはさらにこう答える。

Dō sprach diu küneginne: <<wie möhte mînen lîp
immer des gelusten, deich wurde heldes wîp!
mir hat der tōt an einem sō rehte leit getan,
des ich unz an mîn ende muoz unvrœ lîche stân.>> (1238)

妃がこたえた、「英傑の妻になったとて、
どうして私にとって嬉しいことがありましょう。
一人の男の死によって、それはひどい悩みをあたえられましたので、
私は命が終るまで、楽しい時とてありますまい。」

彼女の決意が固いことを悟ったスリュエデゲールは、翌日再度対面できることを一縷の望みとして、ひとまずそこを辞するが、一方、クリエムヒルトはそのあとギーゼルヘルと母后とに迎えをやって、この二人に自分の胸のうち——自分にとってふさわしいのは泣くことだけ(1242,3-4)ということ——を語る。王弟ギーゼルヘルが姉に向かって、その悲しみは強大な国王エッツェルとの結婚によって償われましょうと言ってしきりに納得させようとするが、彼女はそれをも固くはねつけてこう言う。

Si sprach: <<mîn lieber bruoder, zwîu rætestu mir daz?
klagen unde weinen mir immer zæme baz.
wie sold' ich vor recken da ze hove gān?
wart mîn lîp ie schœne, des bin ich āne getan.>> (1245)

「いとしい弟よ、どうしてそのようなことをお勧めになるのです。
泣き悲しむのが私にはふさわしいことで、武士たちを後ろに従えて
宮廷へ出向くことなど、できることはありません。
それに元のように美しい身でもないのです。」

母后ウオテも同様に愛する姫に向かって兄弟たちの勧めに従うがよいと説得するが、そのときも彼女の心のうちは依然と変わらぬままである。

Si gedahte in ir sinne: <<und sol ich mînen lîp
geben einem heiden (ich bin ein kristen wîp),

des muoz ich zer werlde immer schande han.
gæb' er mir elliū rīche, ez ist von mir vil ungetan.>> (1248)

彼女は心に思った、「もしこの身を異教徒にゆだねなどしたら
(キリスト教徒であるのに)、私は一生涯、
世の辱かしめをうけねばなるまい。よしんばすべての国々を
あたえられようと、そんなことは承諾できはしない。」

この話はこれで打ち切って、クリエムヒルトはその晩、夜の明けるまで寝床の中でとつお
いつ物思いにふけたが、彼女の眼は乾くひまとてなかった(1249)のである。

このような強い決心は、前編の「クリエムヒルトの鷹の夢」の際に見られた愛の断念と
対をなしている——母后ウオテはまたもやここでも結婚を勧める——と考えることができ
るが、翌日再度リュエデゲールに直面し、彼の誠実な誓いを聞くや、彼女の決心はゆらい
でしまう。このリュエデゲールの誠実な誓いは、第二章ですでに指摘した¹⁶⁾ ように、素
材には由来せず、この作品で初めて創作されたもので、その点で重要な場面であるが、こ
のときクリエムヒルトの決心の背景には確かにジーフリトへの誠実な愛があったのである。
彼女はこう考えたからである。

Do gedahte diu getriuwe: <<sīt ich vriunde han
also vil gewinnen, sō sol ich reden lān
die liute, swaz si wellen, ich jāmerhaftez wīp.
waz ob noch wirt errochen des minen lieben mannes lip?>> (1259)

Si gedahte: <<sīt daz Etzel der recken hat sō vil,
sol ich den gebieten, sō tuon ich, swaz ich wil.
er ist ouch wol sō rīche, daz ich ze gebene han.
mich hat der leidege Hagene mīnes guotes āne getān.>> (1260)

貞節な妃は考えた、「私はみじめな女だけれど、
こんなにたくさんの味方を手に入れた以上、
世の中の人にはなんとでも言いたいように言わせておこう。
いとしい夫の復讐ができさえすれば、そんなことは何であろうか。」

彼女は思った、「エッツェル王はあまたの武士を擁しているのだから、

16) 第二章94頁参照

彼らを支配することができれば何事でも思うようになる。
また彼は富貴の身ゆえ、私は施すこともできよう。
私の財宝は憎いハゲネが奪い去ったのだ。」

エッツェル王との再婚の決意も結局はジーフリトへの誠実からであり、それは下線部のように「誠実な女性」と呼ばれていることから明らかである。彼女はただジーフリトへの誠実な愛のためにエッツェル王と結婚するのであり、この結婚はクリエムヒルトにとって目的達成のための手段に過ぎなかったのである。その意味で、このエッツェル王との再婚は前編のジーフリトとの結婚とコントラストをなすものであると言えよう。ジーフリトとの結びつきは、上でも指摘したように、いわば自然的に「乙女ごろの慎ましやかさと兄への当然の服従」でもって決定したのに対して、エッツェル王との結びつきは復讐という企みを含んだものであるからである。

ウォルムスを発ってフン族の国での結婚式での外面的な華やかさは、もちろんクリエムヒルトの内面的な心の状態と著しいコントラストをなしている。詩人はこう語っている。

Wie si ze Rīne sæze, si gedaht' ane daz,
b i ir edelen manne; ir ougen wurden naz.
si hetes vaste hæle, deiz iemen kunde sehen. (1371, 1-3)

ラインにおいて気高い夫とともにくらしただけの事を想い起こして、
王妃の眼は涙にぬれた。しかし彼女はそれを固く秘していたので、
だれにも気づかれることはなかった。

表面的な栄華の中にあって、内面的には本来のクリエムヒルト、すなわち、ジーフリトの誠実な未亡人が登場しており、この未亡人は過去のことを彼女の生活の中から消し去ることはできない。それだけに復讐への義務もまたなお一層避けがたいものとなった。なぜなら、復讐の実行のみがエッツェル王との結婚を正当化し、ジーフリトに対する誠実を裏切った罪から彼女をまぬがれさせることができるからである¹⁷⁾。まさにこの彼女の夫に対する激しい誠実な愛が、前編と同じように、その後さらに大きな悲劇をもたらすのである。

17) Vgl. M.W. Armstrong : a.a.O., S. 297.

2. ハゲネとの対立 —— grimme な鬼女 ——

その誠実な愛に基づく復讐がついに実行へと移されるのが十三年後である。エッツェル王とともに十三年もの間大きな誉れの中に暮らす日々ではあっても、彼女は故郷で我が身に加えられた悩み (leide, 1391, 4) を忘れはしなかったのであり、次のように語られている。

Si gedaht' ouch maniger  ren von Nibelunge lant,
der si da was gewaltic, unt die ir Hagenen hant
mit S frides t de hete gar benomen,
ob im daz noch immer von ir ze leide m hte komen. (1392)

彼女はかつてニーベルンゲンの国で自分が有しており、
ジーフリトの死とともにハゲネに奪われた
あまたの栄華のことを考えるとともに、その恨みを今でもなお
彼に対して報いることができやしないかと考えたのである。

復讐の念は彼女の胸から去ることはなかった(1396, 1)が、このとき彼女の心の中では一方
で忠実な兄弟への郷愁が働いていたことも事実である。殊にお気に入りの弟ギーゼルヘル
と相並んで歩いているところを夢に見ては(1393, 2)、強い兄弟への愛着をつのらせるが、
この「あこがれの傷心と復讐欲」の混合もまた結局はクリエムヒルトのジーフリトに対す
る誠実を深める結果ともなっている。兄弟への愛着にもましてジーフリトへの愛の方が大
きいのであり、彼女の心は愛しい夫の復讐へと駆り立てられているからである。そこでク
リエムヒルトは、前編のプリュンヒルトがグンテル王を説き伏せたと同様、エッツェル王
を言葉巧みに説き伏せて、ブルゴント族を招待することになる。素材ではエッツェル王が
財宝への欲望からブルゴント族を招待する¹⁸⁾ が、『ニーベルンゲンの歌』ではクリエム
ヒルトにその動機を与えている。彼女はもちろん夫エッツェルに一族招待の本来の動機を
打ち明けることはしない。前編のプリュンヒルトと同様、言葉巧みな説得でもって夫エッ
ツェルを欺き、愛しい夫ジーフリトの復讐のため一族を招待するのである。ここではクリ
エムヒルトは、だまされた前編とは対照的に、長い目で計画を立て、策略的に計算する復
讐魔として登場している¹⁹⁾。エッツェル王が使者として二人のヴァイオリン弾きスウェ
ンメリーンとウェルベリーンを選び出すや、クリエムヒルトは彼らをひそかに自分の部屋
に招き寄せて巧みな言伝を依頼する。

<<Unde swaz ir m iner vriunde immer muget gesehen
ze Wormez b  dem R ne, den sult ir niht verjehen,

18) 第二章93頁参照

19) Vgl. M. W. Armstrong : a. a. O., S. 299.

daz ir noch ie ges het betrüebet mînen muot.
und saget mînen dienst den helden küene unde guot. (1415)

Sagt ouch mîner muoter die ere, die ich hân.
und ob von Tronege Hagene welle dort bestân,
wer si danne solde wîsen durch diu lant?
dem sint die wege von kinde her zen Hiunen wol bekant.>> (1419)

「ラインの畔のウォルムスで、私の親戚のどんな人に会っても、
私が物悲しそうにしているのを見たなどということは、
決して申してはなりません。そして勇ましい立派な武士たちに、
私からよろしくと伝えてもらいたいのです。

母上にも、私が大きな誉れを担っていることとお話しなさい。
次に、もしトロネゲのハゲネが彼方に留まろうとするなら、
一体だれが国々を通して道案内をするのです。
あの人は幼少のころからフン族の国への道を知っているのだ。」

クリエムヒルトは今や前編とは逆に陰謀家の役割を果たしている。一方、このような招待の知らせを受けたブルゴント族は、もちろんのことハゲネの反対にあって、激しい議論が飛び交うが、結局のところハゲネの意に反して、招待に応ずる決意をする。国王兄弟から罵りの言葉を受けたハゲネは、名誉を重んずる心から、もはやブルゴントの国にとどまることはできずに、勇敢に旅立つことを明らかにする、ハゲネはハゲネで策略を練って、クリエムヒルトの欺きに抵抗しようとする。クリエムヒルトは、戻って来た使者の報告(1499, 4)によって、自分の計画がハゲネによって見破られているという確信を持つが、これによって彼女の方も、ハゲネを捕えて復讐を遂げるにはどんな異常な努力を必要とするかを悟るのであり、ここに両者の対立が初めて表面化し、高まり始めるのである。

このようにブルゴント族を欺いてその到来を待ち受けるクリエムヒルトは、前編とは逆に、陰謀家の役割を果たしていることが明らかである。一方、前編において陰謀家として描かれていたハゲネは、逆に英雄の役割を演じていて、フン族の国までの旅の途上にあってはニーベルンゲン族にとって「杖とも柱とも頼む人間」(ein helflicher tröst, 1526, 2)として詩人によってほめ称えられている。前編と後編でのハゲネの役割が交換されたのである。今やブルゴント族滅亡の叙事詩本来の英雄ハゲネが生まれ出てきたのであり、このハゲネと、これを出迎えるクリエムヒルトとの対立は最初から激しいものである。偽りの心を抱きながら一族を出迎えたクリエムヒルトは、ハゲネにこう言う。

Si sprach:<<nu sî t willekomen, swer iuch gerne siht.
 durch iuwer selbes friuntschaft sô grûeze ich iuwer niht.
 saget, waz ir mir bringet von Wormez über Rî n,
 dar umb ir mir sô grôze soldet willekomen sîn.>> (1739)

王妃はいった、「おん身に会いたがっている人は、
 おん身を歓迎もするでしょう。しかし私はおん身の^{よし}好誼のために
 挨拶をしようとは思わぬ。ただラインの^{かた}彼方ウォルムスから
 何を持参したかを聞きたい。それによっては歓迎もしようが。」

このような挨拶に対してハゲネの方も決して負けてはいない。反抗的な嘲笑でもって答え
 (1740)、そのあとすぐさまクリエムヒルトが「ニーベルンゲンの宝はどこへやったか」
 (1741)と挑戦的に詰問するに及んでも、ハゲネは堂々と真正面から反抗心を示して次のよ
 うに答える。

<<En triuwen, mîn vrou Kriemhilt, des ist vil manec tac,
 daz ich hort der Nibelunge niene gepflac.
 den hiezen mîne herren senken in den Rî n,
 dâ muoz er w rliche unz an daz jungeste sîn.>> (1742)

「王妃クリエムヒルト様、私がニーベルンゲンの宝を手放してから、
 事実ながい年月がたっておるのです。主君がたは
 あれをライン河に沈めよとご命令になりました。
 宝は、まことに世界の末日まで河底にあるに違いありません。」

「あの宝は私のものであり、かつて私が護っていたものなのに、おん身は少しもこの私の
 国に持って来てはくれなかった」(1743, 2-3)と責め立てるクリエムヒルトに対して、ハゲ
 ネは時を移さずまたもやクリエムヒルトの嘆きをあざけてこう答える。

<<J â bringe ich iu den tiuvel>>, sprach aber Hagene.
 <<ich hân an mînem schilde sô vil ze tragene
 und an der mînen brünne; mîn helm der ist lieht.
 daz swert an mîner hende des enbringe ich iu nieht.>> (1744)

「私はあなたに何一つ持参しておりません、」
 ハゲネが重ねていった、「私は^{たて}楯やら^{よろい}鎧やら、また^{かぶと}輝く兜やら

手に持っている剣やらで、持物は沢山ありますが、
いずれもあなたに差しあげるものではございませぬ。」

ハゲネの言葉として「私は何一つ持参していないが、楯や鎧や兜は持ってきた」という表現が『ティードレクス・サガ』に伝承されている²⁰⁾ ことを考えれば、この箇所におけるクリエムヒルトとハゲネの問答は素材に由来するものと推定されてよいが、とにかくここでの問答の結果は明らかである。クリエムヒルトの苦しみを嘲笑うかのごとく常に皮肉な答え方をするハゲネがこの場面の指導権を握っているものであり、クリエムヒルトとしてはその反抗的な侮辱を甘受しなければならない。それだけに一層彼女はあきらめることができない。ディエトリヒがその場で呼びかけたように、クリエムヒルトはまさに「鬼女」(valandinne, 1748, 4)へと堕ちてゆくのである。

その後王冠を戴きながら近づいて来るクリエムヒルトに対してハゲネが立ち上がって礼をしない第二の出会いの場面において、両者の対立がさらに高まるのは当然の成行きである。ハゲネは立ち上がって礼をしないどころか、膝の上にジーフリトの輝く剣を横たえて、クリエムヒルトを意図的に刺激するのである。猛きハゲネの仕打ちも、彼女を泣かせるためであったろう (1784, 4) と詩人自らも語っている。ハゲネのこのような傲然たる反抗によって彼女は、宮廷的な貴婦人としての「節度」(mæze) を忘れて憎悪のこもった挨拶 (1787) をするが、これに対してもハゲネは平然とこう答える。

<< Nach mir sande niemen>>, sprach dō Hagene.
<<man ladete her ze lande drie degene,
die heizent mīne herren, und bin ich ir man.
deheiner hovereise bin ich selten hinder in bestan.>> (1788)

「私はだれにも招かれはいたしません、」ハゲネが答えた、
「この国へ招かれたのは、三人の王様だけですが、
それは私の主君であり、また私はその家来の身。
いかなる宮廷への旅にも、留守に残ったためしはないのです。」

「彼らは私の主君であり、また私はその家来の身」(1788, 3)という言葉がなるほど前編におけるジーフリトの言葉(386, 3; 420, 4)²¹⁾ を揶揄するものではないにしても、しかし、ここでハゲネが答える言葉は全て挑戦的な言動であることは確かである。「なぜジーフリトを討ち果たしたか」(1789)という詰問に対しても、ハゲネは今や隠し立てはせず(1971,

20) 第一章61頁参照

21) 後述第八章 213頁及び 216頁参照

1)に、正々堂々と自らの反抗を明らかにする。これがクリエムヒルトに対する真正面からの挑戦でなければ一体何であろうか。このような傲然たるハゲネの態度に対して、クリエムヒルトの郎党はだれひとりとして戦うものがなかったので、王妃は心から情けなく感じたが、このクリエムヒルトの陰謀の失敗は、彼女をあきらめさせるのではなく、さらにひどい行動に駆り立てる(1848, 1-3)。必死でいろいろな者に頼むが、いずれも拒否されて、クリエムヒルトはますます怒り(grimme, 1865, 1)を激しくしてゆく。彼女はもはや苦しむクリエムヒルトではなく、復讐欲に^お堕ちた、憎しみと欲求不満に荒れ狂う「grimme(^{どうもう}猙獰)な鬼女」としてのクリエムヒルトであると言ってもよいであろう。

そのクリエムヒルトの非人間化が最もひどく示されているのが、戦いを始める手段として、自らの息子を広間へ連れて来させたときであることは言うまでもない。この場面は、第二章において述べた²²⁾ように、なるほどクリエムヒルトの残忍さが幾分和らげられて、いわば「気高く」されているとは言うものの、素材に由来するクリエムヒルトの無慈悲な行為が残っていることは1912詩節²³⁾からも明らかである。クリエムヒルトは、すなわち、戦いを始めるために、エッツェル王との間に出来た子供を食卓に連れ出したのである。「婦人にして復讐のためかくも恐ろしい業を誰がなし得たか」(1912, 4)と詩人によっても語られているが、この恐ろしい(vreislîcher, 1912, 4)行為によって初めてクリエムヒルトは、エッツェル王を戦いに誘い込むことに成功する。エッツェル王は、すなわち、その場でハゲネによって打ち殺された自らの息子のためにブルゴント族と戦うこととなるのであり、これも愛しい夫ジーフリット仇討ちのためのクリエムヒルトの一つの策略であるとすれば、いかにクリエムヒルトが悪意のある策略家へと^お堕ちているかが明らかである。

エッツェル王の参戦によって戦いは、もはやクリエムヒルトとハゲネ二人だけの個人的な戦いではなく、両民族をあげての死闘となって、本来のブルゴント族滅亡の物語が展開するが、最終場面において三度目の対決としてクリエムヒルトとハゲネの個人的な二人の争いが繰り広げられる。リュエデゲールの死によって参戦することとなったディエトリーヒがついにハゲネとグンテルを捕えて、別々の獄舎へ閉じ込めたときのことである。王妃はハゲネのいる獄舎へ行って、憎しみをこめて次のようにハゲネに言葉をかける。

<<welt ir mir geben widere, daz ir mir habt genomen,
s o muget ir noch wol lebende heim zen Burgonden komen.>> (2367, 3-4)

「もしおん身が先に私から奪ったものをまた返すつもりなら、
命を助けてブルゴントの国元へかえしてとらせよう。」

22) 第二章93-4頁参照

23) 第四章 130頁参照

この言葉における「私から奪ったもの」とは確かにハゲネに強奪された財宝を示しているが、しかし、心の内ではジーフリトの死のことをほのめかせてもいるのである²⁴⁾。従って、この実現不可能なクリエムヒルトの要求は復讐行為の激化として理解されねばならないであろう。これまで被った多くの侮辱の仕返しを要求するクリエムヒルトに対して、ハゲネは依然として激しく反抗して言う。

Dō sprach der grimme Hagene: <<diu rede ist gar verlorn,
vil edeliu küneginne. ja hān ich des gesworn,
daz ich den hort iht zeige, die wīle daz si leben
deheiner mīner herren, sō sol ich in niemene geben.>> (2368)

猛々しいハゲネがいった、「そのようなお言葉は何の役にも立ち申さぬ、
貴いお妃様。わしは、わが主君がたがお一人でもご存生の間は、
宝のありかを言わぬと誓ったのでござる。
それゆえわしは何びとにも宝は差しあげられぬのだ。」

ハゲネはこのような言葉巧みな策略でもって、クリエムヒルトに実兄グンテルの首を打ち落とさせるが、これはすぐあとのハゲネの言葉からも明らかなように、「ハゲネの考えたとおりの成行き」(2370,4)であったのであり、ここでもクリエムヒルトはハゲネとの口論において敗北を喫したままである。それではハゲネは償いをしないことになるかと悟ったクリエムヒルトは、

<< sō wil ich doch behalten daz Sîfrides swert.
daz truoc mīn holder vriedel, dō ich in jungest sach,
an dem mir herzeleide von iuwern schulden geschach.>> (2372,2-4)

「それならばせめてジーフリト殿の剣を^お貰っておきましょう。
これは私がいとしい人の見納めの日に、あの人の携えたもの。
私の心痛はおん身のために生じたものです。」

と言って、名剣バルムンクを鞘から抜き取って、ハゲネの頭を打ち落としたが、この言葉がクリエムヒルトの最後の言葉となったのも決して意味のないことではない。クリエムヒルトの復讐は、愛しい夫^{いと}ジーフリトの死による「心の悲しみ」(herzeleide)²⁵⁾ からなさ

24) Vgl. Werner Schröder : Die Tragödie Kriemhiltis im Nibelungenlied. ZdfA. 90, 1960/61. S. 154.

25) この「心の悲しみ」(leit)に関しては第九章において詳しく論ずる予定である。

れたのであり、愛しい夫ジーフリトへの変わらぬ愛のあかしでもあると言えよう。ここで、復讐するクリエムヒルトのほかにも、愛するクリエムヒルトも最後まで存続していることが示されているのであり、彼女の全ての企てはジーフリトに対する彼女の愛によって決定されていることが容易に理解できよう。なるほど後編に至っては英雄ハゲネの活躍が目立ってきて、本来のブルゴント族滅亡の物語が展開されているが、しかし、その中でクリエムヒルトの愛の物語も平行的に同時に続行しているのであって、上記の引用詩節の言葉でもって、ブルゴント族滅亡の物語とクリエムヒルトの復讐の物語は一つになるのである。

まとめ

以上のように見てくると、クリエムヒルトは冒頭の詩節から登場して、それ以後ほとんど舞台を去ることがないことが容易に理解できよう。確かにジーフリトやハゲネの活躍が目立ってくる場面もかなりの範囲にわたって詳細に述べられているが、しかし、全体のあらすじはジーフリトの死とそのための復讐という二つに収束するのであり、つまりは全ての出来事がことごとく彼女との関係によって起こるのである。彼女が運命を導くというよりは運命が彼女を支配しているにしても、彼女は前編と後編を結びつけるあらすじの糸を保持していることだけは明らかである。この前編と後編を結びつけるものが、すなわち、ジーフリトへの彼女の激しい愛である。確かにクリエムヒルトが夫のために実兄たちに復讐を行うという改作はすでに前段階で出来上がってはいたが、しかし、ニーベルンゲンの詩人はそのジーフリトの死をブルゴント族滅亡伝説に有機的に結びつけたのであり、この愛のために復讐するという新しいモチーフこそはニーベルンゲンの詩人の最も固有な業績の一つであると言ってよいであろう。このため『ニーベルンゲンの歌』には一見矛盾するかに見える二人のクリエムヒルトが描かれる結果となったが、しかし、この冒頭の無邪気な愛する女性から結末の復讐する女性へのクリエムヒルトの変貌にこそ作品全体の特徴があると言えるのではあるまいか。否、この矛盾を隠そうとするのではなく、むしろ表面に強く出すことによって物語の効果を出しているのである。しかも、このクリエムヒルトの二重像は作品の冒頭からすでに予示されているのであって、クリエムヒルトはあらゆる節度をも越えてジーフリトを愛し、悩みそして復讐するだろうということは最初から明らかなのである。「歎びも結局は悲しみに終わる」ということを示しているこのクリエムヒルトの変貌は、だから、作品全体の構成の特徴をも表しているのである。結末の復讐魔クリエムヒルトをきわだたせるために、つまりは全体の構成のために、詩人は前編においてはクリエムヒルトを愛する女性として強く打ち出しているのである。このようにクリエムヒルトは多層的であり、否それどころか予測することのできないものでもあり、矛盾を含んだものでもある。ここにクリエムヒルト像の特質があるのである。

この矛盾の多い人間像の形象でもって、『ニーベルンゲンの歌』のクリエムヒルトは、同時代のアルトゥース・ロマーンにおける類型的な貴婦人たちとは異なった存在である。

つまり、クリエムヒルトは、宮廷的な貴婦人の「節度」(maze)をも超えて、愛しい夫ジーフリトの復讐のために全生涯を捧げるのであり、この意味において彼女は筋の展開に決定的な性格づけをされていると言えよう。しかし、クリエムヒルトは、テキストをより詳細に検討してみると、自然のままに生きているに過ぎないことが明らかである。言い換えれば、彼女は外側の刺激によって変貌する女性である。まず前編で「魔の夢」を見て殿御の愛を拒絶したはずのクリエムヒルトも、ニーデルラントの王子ジーフリトの出現によって「愛する乙女」(liebendes magedin)となり、まさにその夫への愛ゆえに「悲しむ未亡人」(leidende Witwe)ともなる。もはやいかなる殿御の妻になる意志のなかった後編のクリエムヒルトも、リュエデゲールの誠実な誓いによってようやくエッツェル王の妻となる決意をするのであり、これによって初めてクリエムヒルトは、厳密な意味において物語の筋を動かす人物となったと言えるが、しかし、ハゲネとの三度にも及ぶ口論においても、上で述べてきたように、ハゲネから嘲笑的な刺激を受けることによって「瘡痍(ぐさもう)な鬼女(värlandinne)」へと墮ちてゆくのである。この意味において、筋を決定的に動かしているのは、クリエムヒルトただ一人の意志であるとは言い難く、なかでもとりわけハゲネの存在を無視するわけにはいかない。ハゲネという敵対する人物がいて初めてクリエムヒルトの存在意義が強まるのである。さらにまたこのハゲネの存在によってこの作品は、ただ単にクリエムヒルト・ロマンであるばかりではなく、それと同時に、世界歴史的出来事、すなわち、フン族によるブルゴント族の滅亡(437年)を内容に持っている作品であることもまた確かである。『ニーベルンゲンの歌』は、畢竟、クリエムヒルトの世界とハゲネの世界が交錯する戦いの世界である。このもう一つのハゲネの世界についてはだから次章で詳しく論ずる必要があるが、ともかくこのニーベルンゲン悲劇はクリエムヒルトの愛とハゲネの権力という二つのモチーフが交錯する世界であり、この二つのモチーフが対立しながら、一つの悲劇的世界を形成しているところに中世盛期の『ニーベルンゲンの歌』の特質があるのである。

第七章 ニーベルンゲン悲劇の構図

— ハゲネの役割 —

『ニーベルンゲンの歌』の全体の構想にとって、前章で述べたクリエムヒルトとともに、同じようになくなくてはならない重要な人物として挙げられねばならないのが、言うまでもなくトロネゲのハゲネであろう。クリエムヒルトとハゲネの対立こそこの作品の全体を支える柱でもあるのである。ところが、ハゲネは、伝記的に描かれているクリエムヒルトとは対照的に、その生い立ち等に関しては断片的であると言わなければならない。『歌謡エッダ』や『ヴォルスンガ・サガ』あるいは『ティードレクス・サガ』とは異なって、この『ニーベルンゲンの歌』ではハゲネはブルゴント国第一の家臣として登場するが、しかし、その素性については、トロネゲの生まれ(9,1;1753,2)で、父はアルドリアーン(Aldrian, 1539,2;1753,2)であるという以外、『ニーベルンゲンの歌』のテキストからは何も知ることはできない。アルドリアーンという珍しい名称を伝承している『ティードレクス・サガ』の中にはヘグニ(ハゲネ)の出生に関する記述が見いだされる¹⁾が、それによると、ヘグニはニフルンゲン国王アルドリアーンの妃と或る妖精との間に生まれた子供であり²⁾、幼少の頃からとても人間とは思えず、まるで妖怪のようで、身体は大きくて、不気味で、陰険な容貌をしていたとある。恐怖を起こさせるこのハゲネの風貌は『ニーベルンゲンの歌』の中にも伝えられていて、前編と後編で、しかもそれぞれグンテル王の旅で一行が目的地に着いた場面において見いだされる。すなわち、前編でイースラントの国に到着したとき、プリュンヒルトの家臣がハゲネを見て語る言葉には、ハゲネは「逞しい体格をしてはいるが、しばしば荒々しい眼つきをする(von swinden sînen blicken)ので、恐怖を呼び起こさせ、心柄も陰しい人間」(413)とある。後編でもまた、フン族の国に到着した場面で、ハゲネは「堂々たる^{たいく}体軀であって、胸幅はひろく、その頭髮は灰色をまじえており、両脚は長く伸び、眼光は炯々^{けいけい}と光を放って(eislîch sîn gesihene)いた」(1734)と詩人自身によっても語られている。前編と後編で対をなしつつ明白に語られているこのハゲネの荒々しい(swinde, 413,3)氷のように冷い(eislîch, 1734,4)眼の表現は、いずれも恐怖をひき起こさずにはいない。このような不気味で恐ろしい風貌をもつハゲネが、なるほど生い立ちは断片的ではあるが、しかし、『ニーベルンゲンの歌』の筋の展開に並々ならぬ影響を与えていることは確かである。この作品の最初の方でも、ニーデルラントの

1) Fine Erichsen(Übertragen) : Die Geschichte Thidreks von Bern. (Thule 22. Band) Jena 1924. S.223-4.

2) ヘグニ(ハゲネ)は、従って、アルドリアーンの実子グンナル、ゲールノーツ、ギーゼルヘル及びグリムヒルトとは異父兄弟ということになる。

父王ジゲムントが息子のジーフリトに警告している言葉によれば、「ハゲネは思い上がって (mit übermüete)、無礼なこと (höfverte) もしかねぬ男であり、ザンテンの人々の身に災い (leit) をかもす恐れがないとはいえぬ」(54) 存在であるとされている。ここですでにハゲネは前編ではジーフリトの殺害者として、従って、後編ではクリエムヒルトの敵対者として位置づけられているのであり、ニーベルンゲン悲劇の構図は、ほかならぬこのハゲネによって描かれていると言っても過言ではあるまい。そこで本章では、ハゲネが筋の展開の中で果たしている役割を考察し、ニーベルンゲン悲劇の構図を描き出すことによって、この作品の持つ特質を探り出すことにしたい。

I. ジーフリト暗殺におけるハゲネの役割

1. 二つの求婚 —— 進言者としてのハゲネ ——

『ニーベルンゲンの歌』前編においては二つの求婚が語られており、のちのジーフリト悲劇はこの二つの求婚に起因するが、これらいずれの求婚においても重要な役割を演じているのが言うまでもなくトロネゲのハゲネである。ハゲネは、上でも若干触れた通り、この作品ではブルゴント国第一の家臣として登場し、常にグンテル王のそばに仕え、国王が最も頼みとする助言者³⁾であるが、心柄は険しい (grimme gemuot, 413, 4) 人物であって、その二つの求婚にも多大の影響を及ぼさずにはいないのである。まず作品の最初の方でジーフリトがクリエムヒルトのミンネを求めてウォルムスにやって来たときも、ハゲネは「諸々の国や、異境のことまで知っている」(82, 1) 知識豊かな武士としてグンテル王に呼び出され、到着の勇士ジーフリトの英雄譚について長々と物語り (86-101)、彼を丁重に出迎えるようグンテル王に進言する (101) が、その際ジーフリトについてハゲネが、ニーベルンゲンの財宝獲得と不死身の甲羅と化した肌のことを語ったのも決して意味のないことではない。クリエムヒルトにとってジーフリトは前述の通りミンネを求める宮廷的な騎士であったが、しかし、ハゲネにとってはジーフリトは古代ゲルマンの英雄であることが明らかである。ニーベルンゲンの財宝とジーフリトの不死身の肌はジーフリトの権力の大きさを意味し、ブルゴント国にとっては大きな脅威であったが、しかし、まさにそれゆえにこそ、心柄の険しいハゲネは、ここでジーフリトと戦うのではなく、逆にジーフリトの権力を利用しようと企むのである。ここですでにジーフリトはハゲネの宿敵なのであり、ハゲネの丁重な歓迎の進言ほど陰険なものはないのである。

そのようなハゲネが早速ジーフリトの権力を利用することを企むのが、すぐあとに起こるザクセン戦争のときである。リウデガストとリウデゲールが攻めてくることを知ったゲールノートは積極的に戦いの姿勢を見せる (150) のに対して、ハゲネはジーフリトを利用

3) 『歌謡エッダ』中の『シグルズの短い歌』の中にもグンナルはヘグニを最も頼りにしていたということが明記されている。(谷口幸男訳：エッダ —— 古代北欧歌謡集 新潮社1973年156頁参照)

すべく、国王に進言してこう言う。

Dō sprach von Tronege Hagene: <<daz endunket mich niht guot.
Liudegast unt Liudegær die tragent übermuot.
wir mugen uns niht besenden in sō kurzen tagen.>>
sō sprach der küene recke, <<wan muget irz Sîvrîde sagen?>>(151)

トロネゲのハゲネはいった、「それはよろしくありません。
リウデガストとリウデゲールはひどく自信をもっています。
味方はそう短時日のうちに兵を集めるわけには参りません。」
さらに勇士はいう、「何ゆえジーフリトに仰しゃらぬのです。」

ハゲネはジーフリトの力を利用しようとしていることが明らかであり、国王に良策を進言する者として現われている。このハゲネの進言によって、ジーフリトが援助することとなり、戦いが始まる。ハゲネは部隊長の役を受け持つが、ザクセン戦争の英雄はジーフリトただ一人である。ハゲネは進言者であるに過ぎない。なるほどハゲネはブルゴント国第一の家臣としての本来の指導的な役目をジーフリトに奪われてしまっている⁴⁾かに見えるが、しかし、彼は逆にジーフリトの力を巧みに利用しているのであり、全てはハゲネの策略なのである。

グンテル王がイースラントのプリュンヒルトに求婚することになったときも同様である。それを知ったハゲネは国王にこう進言する。

<< Sō wil ich iu daz rāten>>, sprach dō Hagene,
<<ir bittet Sîvrîde mit iu ze tragene
die vil starken swære, daz ist nu mîn rāt,
s it im daz ist sō kûndec, wie ez um Prûnhilde stat.>> (331)

「ではわしの意見を申しあげよう、」ハゲネが口を出した、
「この困難な仕事には、ジーフリト殿にも、
^{かたはだ}片肌ぬいでいただくようお願いなさるのが上分別かと思います。
プリュンヒルトの事はジーフリト殿がよく心得ておられるから。」

ジーフリトがニーベルンゲンの宝の中でも特に不思議な力を持つ「隠れ蓑」 (97, 3; 336-

4) Vgl. Marianne Wahl Armstrong : Rolle und Charakter. Studien zur Menschendarstellung im Nibelungenlied. Göppingen 1979. S. 151.

8)を所有しているのみならず、イースラントのプリュンヒルトの事(330) 及びその国への正しい航路を心得ている(378, 3) ということを知っているハゲネは、このイースラントへの求婚の旅でもジーフリトの力を利用しようとしている。否、それどころか、ハゲネの進言はグンテル王の求婚を実現させるのみならず、同時にジーフリトとクリエムヒルトとの結婚をも実現させようと積極的に働きかけてもいる。国王グンテルが旅立ちにあたって立派な衣裳の準備を母后ウオテに依頼しかけようとする、ハゲネは国王に次のように進言することからもそれは明らかである。

D o sprach von Tronege Hagene mit h rl chen siten:
<<waz welt ir iuwer muoter s lher dienste biten?
I at iuwer swester h ren, wes ir habet muot:
s o wirdet iu ir dienst zuo dirre hovereise guot.>> (346)

そのときトロネゲのハゲネが居ずまいを正して口を開いた、
「このような仕事を、なにゆえ母君になどお願いなされますか。
^{ごい}御意のほどは妹君にお聞かせなさいませ。
あの方のお心尽くしこそ今度の訪れの旅には役立つでしょう。」

イースラントへ旅立つ際だけではなく、イースラントで勝利を収めて帰還する途中でも、ジーフリトをクリエムヒルトに結びつけようとするハゲネの努力が窺える。トロネゲのハゲネは、すなわち、ジーフリトを使者として派遣することを国王に進言するのである。

<<Nu bitet Si fride f eren die boteschaft;
der kan si wol gewerben mit ellenthafter kraft.
versage er iu die reise, ir sult mit guoten siten
durch iuwer swester liebe der bete in vriuntl chen biten.>> (532)

「使者の役を果たすことは、ジーフリト殿におたのみ下さい。
あの方なら申しぶんなく、やっつけられましょう。
もしも使いの旅を拒まれるようだったら、おん妹君のため、
友情をもってねんごろにお頼みになるようお願い申します。」

ハゲネはジーフリトをクリエムヒルトと結ばせようとしていることがこの言葉からも明らかであり、筋はこうして全てハゲネの進言によって、グンテルとプリュンヒルトとの結婚のみならず、ジーフリトとクリエムヒルトとの結婚が実現される結果となるのである。
『ニーベルンゲンの歌』前編における二つの結婚は知識豊かなハゲネの進言によるもので

あると言っても過言ではないであろう。

このようにハゲネの進言はことごとく筋を大きく展開させることにつながっているが、ハゲネは、すでに指摘したように、心柄の険しい者である限り、国王への進言には常に何か企みが隠されていることは容易に読み取ることができよう。ジーフリトを味方に引き入れクリエムヒルトに結びつけたのも、究極的にはブルゴント国を護り繁栄させるためであり、不死身のジーフリトは、ハゲネからすれば、ブルゴント国繁栄のために利用されたに過ぎない。不死身のジーフリトと心柄の険しいハゲネとが和合することが決してありえないということは、結婚式のとジーフリト夫妻がニーデルラントの国へ帰国するにあたって、クリエムヒルトがハゲネを家来に加えることを口にする、ハゲネは顔色を変えて断固としてこう答えることから明らかである。

do gewan dar umbe Hagene ein zornlîchez leben;
er sprach:<<jane mac uns Gunther ze werlde niemen gegeben. (698, 3-4)

Ander iuwer gesinde lat iu volgen mite,
want ir doch wol bekennet der Tronegære site;
wir müezen bî den künigen hie en hove bestan.
wir suln in langer dienen, den wir alher gevolget han.>> (699)

ハゲネはそのため^{ふっぜん}佛然色をなして答えた、
「グンテル様は私どもをこの世の誰にもお譲りにはなれませぬ。

あなた様の、ほかのご家来をお連れなさいませ。
トロネゲ出身のものの氣風は、よくご存じのはずでございます。
私どもはこの宮廷の王様たちのもとに留まらねばなりません。
これまでお仕えた方に今後もお仕えいたすのです。」

ここで不死身のジーフリトと心柄の険しいハゲネとの対立がかすかに表面化し始めているのであり、両者は最初から宿命的な対立関係にあったことは明白である。従って、ハゲネの国王への進言はジーフリトを味方に入れようとするものであるというよりはむしろ、上で述べたように、ジーフリトの権力を逆に利用しようとするものであり、ハゲネはこの二つの結婚の実現に際しては彼の豊かな知識に基づいてその都度常にイニシアティヴを取っていると言えるのである。

2. 招待の旅 —— 陰謀家としてのハゲネ ——

ジーフリトとハゲネとの宿命的な対立は、十年後、グンテル王とプリュンヒルトとがジーフリト夫妻を饗宴に招待したことから徐々に表面化してゆく。その対立を助長するのが、ニーベルンゲンの財宝に対するハゲネの欲望である。ハゲネがジーフリトの権力を妬み、ニーベルンゲンの黄金に以前から目をつけていたということは、ジーフリト夫妻を饗宴に招待した際、ハゲネが口にした言葉からも明白である。

<<Er mac>>, sprach dō Hagene, <<von im sampfte geben.
er'n kundez niht verswenden, unt sold er immer leben.
hort der Nibelunge beslozen hāt sīn hant.
hey sold er komen immer in der Burgonden lant!>> (774)

「あの方は、」ハゲネがいった、「それくらい^{ふところ}のものを懐から出すのは容易なことです。永久に生き^{ながら}存えても財産を使いきれはしません。何しろニーベルンゲンの宝をもっているのです。あの宝がブルゴントに来たらいいのだが。」

ハゲネがジーフリトをクリエムヒルトに結びつけた動機は、なるほど『ニーベルンゲンの歌』のテキストにはどこにも記されていないが、しかし、この引用詩節から考えてみるに、その動機の一つとしてニーベルンゲンの財宝へのハゲネの飽くなき欲望を挙げてもよいのではないか。結婚によって得た信頼関係をうまく利用して、ハゲネはニーベルンゲンの財宝を奪い取ろうとしていると考えることもできるからである。事実、権力の象徴であるこのニーベルンゲンの黄金こそ、ジーフリトとハゲネとの対立の根源であり、のちのニーベルンゲン悲劇の芽でもある。ハゲネの行動するところ、常にこの黄金が関与しており、その財宝強奪をめざして巧みな策略を企ててゆくのであり、その企て実行の恰好のきっかけがクリエムヒルトによるプリュンヒルトの恥辱である。クリエムヒルトから罵言を受けたプリュンヒルトはあまりに打ちしおれていたので、ハゲネは王妃のところへ伺候して、子細を尋ねる。王妃から子細を聞いたハゲネは即座に「それは、クリエムヒルトの夫が償わねばならない」(864, 3) と誓って、ジーフリトの命をとろうと謀るのである。その話を聞いたギーゼルヘルは真心からそれをやめるよう忠告するが、それに対してハゲネはこう言う。

<<Suln wir gouche ziehen?>> sprach aber Hagene:
<<des habent lützel ēre sō guote degene.
daz er sich hāt gerüemet der lieben vrouwen mīn,
dar umbe wil ich sterben, ez engē im an daz leben sīn.>> (867)

「私たちは私生児を長く養っておくべきでしょうか、」
ハゲネが言い返した、「それは立派な武士の名誉ではありません。
お妃様の一件を自慢話にしたとあっては、
あの人の命をもらうか、さもなくば自分で死んでしまいます。」

『歌謡エッダ』と『ヴォルスンガ・サガ』ではグンナルが黄金と全ての権力を欲しいままにできるのだと言って、シグルズを亡き者にしようと企み、ヘグニがそれを諫止している⁵⁾が、『ニーベルンゲンの歌』ではその逆である。ハゲネは始終グンテル王を唆し、もしジーフリトが亡きものとなれば、多くの国々が王の領土となるであろうと説いた(870, 2-3)のである。ジーフリトとグンテル王の二人の求婚の際にはウォルムスの繁栄のために良策を進言するだけの家臣であったハゲネは、ここに至ってはウォルムスの権勢を拡大するための陰謀家として国王を唆す者となっているのであり、ハゲネの心柄がだんだんと険しくなっていることが明らかである。恐ろしくて強い(872, 3) ジーフリトを相手にしては誰も手足がでまいと言うグンテル王に向かって、ハゲネは知恵ある陰謀家として自信たっぷりにこう言う。

<<Nein er>>, sprach dō Hagene. <<ir muget wol stille dāgen.
ich getrūwez heinliche also wol an getragen:
daz Prūnhilde weinen sol im werden leit.
j a sol im von Hagenen immer wesen widerseit.>> (873)

「その心配はございません、」ハゲネがいった、
「王様は何も仰しゃらずと結構です。私が密かにうまく工夫をしますから。
ブリュンヒルト様のお嘆きをあの男に思い知らせてやりましょう。
ハゲネは永久にあの男を敵といたします。」

ブリュンヒルトの恥辱がきっかけとなって、ジーフリトとハゲネとの敵対関係が今やはっきりと表面に現われたのである。心柄の険しいハゲネは策略を用いずにはいない。巧みな策略(874-5)をグンテル王に説明したあと、ハゲネはグンテル王にまずジーフリトから戦いの援助の約束を手に入れさせる(884-6)。次にハゲネはクリエムヒルトの座所に伺候して、一同が出陣する旨を告げ、暇乞いをする(891, 3-4)とき、夫のことを心配するクリエムヒルトの心をうまくとらえてジーフリトの弱点を聞き出す(899-902)。ジーフリトの秘密を知ったハゲネはさらに、一族が戦場に立った時、ジーフリトのどこを護ればよいかが

5)谷口幸男訳：エッダ 156 頁、菅原邦城訳・解説：ゲルマン北欧の英雄伝説 104-5 頁参照、並びに谷口幸男訳：アイスランドサガ 586頁参照。

わかるように、ジーフリトの衣裳の上に小さな印を縫いつけておくよう依頼する (903, 1-3) 。詩人も語っているように、クリエムヒルトは夫の恙なきを願ったのに、それが命を縮める (903, 4) こととなったのである。詩人はさらにこの場面をこう語っている。

dō wand' ouch des diu vrouwe, ez sold' im vrume sîn:
dō was dā mite verrāten der Kriemhilde man.
urloup nam dō Hagene, dō gie er vrœ l i che dan. (905, 2-4)

Des küniges ingesinde was allez wol gemuot.
ich wæne immer recke deheiner mē r getuot
sō grōzer meinræte, sō dā von im ergie,
dō sich an sī ne triuwe Kriemhilt diu küneginne lie. (906)

妃はこれが夫の身に役立つことと思ったのだが、
あに計らんやクリエムヒルトの夫は、これに乗ぜられたのである。
ハゲネは暇乞いを告げて、北叟笑みつつ退出した。

国王の郎党はいずれも嗜れやかな様子であった。
だが思うに、ハゲネがなしたような恐ろしい裏切りは、
他のいかなる武士も敢えてしないところであろう。
王妃クリエムヒルトは、彼の誠実に信頼したことなのだから。

ジーフリトとクリエムヒルトとの信頼関係を逆手にとって、恐ろしい裏切り行為を行うハゲネは、巧みな策略家であったことが明白である。巧みな陰謀家ハゲネの秘策はもちろんとどまるところなく、戦いが中止になって、グンテル王がワスケンの森へ熊や猪の狩りに出かけようと提案した (911, 1-3) ときもなお続くが、これも、テキストから明らかなように、「あの不実きわまる男、ハゲネの企みによる」 (911, 4) ものだったのである。ハゲネはまず飲み物を持って出かけるのをわざと忘れて (967) 、冷たい泉の湧いているところへ行くことを提案する (969, 1-3) 。この提案はハゲネにとってなくてはならないものである。ジーフリトが背を見せるところを槍で突き刺す以外には、不死身のジーフリトを殺害する方法はなかったからである。策略通り、ハゲネはジーフリトが泉の上にかがんで水を飲んでいるところを、衣裳の上に縫いつけられた十字めがけて、槍で突き刺す (980-1) ののである。細かな点に至るまで前もって計算されたハゲネの用意周到な策略によって、不死身の英雄ジーフリトもついには滅んでゆかなければならない結果となったのであるが、このような策略を弄したハゲネの本来の意図は、ジーフリトに致命傷を負わせたあとにハゲネ自身が口にする言葉からも明らかである。

D o sprach der grimme Hagene: <<jane weiz ich, waz ir kleit.
ez hat nu allez ende unser sorge unt unser leit.
wir vinden ir vil wenic, die getürren uns bestan.
wol mich, deich siner hērschaft han ze rate getan.>> (993)

悍^{どうも}猛なるハゲネがいった、「なぜお嘆きになるのか分かりません。
我々の心配も悩みも、これですっかり片づきました。
我々に楯つくような人間はもういなくなりました。
この男の権勢^{くじ}を挫いてしまってよかったと思っているのです。」

ジーフリトの存在はブルゴント国にとっては心配であり悩み(993, 2)であったのであり、ハゲネはウォルムスを護るために不死身の英雄ジーフリトを殺害したのである。このハゲネの言葉は、権力のモチーフが『ニーベルンゲンの歌』ではすっかり削除されたのではなく、決定的な箇所では時代錯誤の残物として保持されたままであるということを示している⁶⁾のである。

ハゲネがプリュンヒルトの恥辱の復讐だけのためにジーフリトを殺害したのではなく、本質的なところでは彼にとって財宝に関わる権力が重要であったということは、さらにジーフリト暗殺後三年目に、ウォルムスを護るためだけではなく、拡大をはかるために、ジーフリトの黄金に目をつけて、グンテル王にクリエムヒルトと和解することを進言することからも明らかである。

D o sprach der helt von Tronege: <<möht ir daz tragen an,
daz ir iuwer swester ze vriunde möhtet han,
s o kœme ze disen landen daz Nibelunges golt.
des möht ir vil gewinnen, wurd' uns diu küneginne holt.>> (1107)

ある時トロネゲのハゲネがいった、「お妹御様と^{いもうとご}
仲直りなさるような手だてはございませんか。
もしそうなったら、ニーベルンゲンの黄金^{ごうごん}がこの国へ参ります。
王妃が我々の味方になれば、あなたは大したお金持になれますが。」

ハゲネ本来の企みはニーベルンゲンの黄金にあったのであり、ハゲネの行動には常に財宝が関与していたことが明らかである。和解ののち、王妃クリエムヒルトが人々の勧めに従い、夥しい宝物をニーベルンゲンの国から取り寄せて、ラインの畔へ運ばせた(1116)とき、

6) Vgl. M.W. Armstrong : a.a.O, S. 152-3.

詩人も語っているように、ハゲネがこれに欲を出したのも、まったく無理のないことであった(1123, 4)。ニーベルンゲンの財宝の中でも黄金づくりの小杖の性能を知り得た者は、この世の何者をも征服することができる(1124, 1-3)とも語られている。財宝は権力の象徴である。貧しきものにも富めるものにもクリエムヒルトが財宝を施し与えているのを見たハゲネは、だからグンテル王に進言してこう言う。

Hagen sprach ze dem künige: <<ez solde ein frumer man
deheinem einem wîbe niht des hordes lān.
si bringet ez mit gābe noch unz ūf den tac,
dā'z vil wol geriuwen die kûenen Burgonden mac.>> (1130)

ハゲネが王にいった、「有能な男ならば、
女などに財宝を^{おまかせ}委ねてはおかないでしょう。
あの方は施しによって、とどのつまり
勇敢なブルゴント人を後悔させるようなことを仕出かされるでしょう。」

国王グンテルは、クリエムヒルトとの和解の誓言を持ち出したものの、ハゲネの巧みな進言によって唆され、結局ハゲネがクリエムヒルトから夥しい宝物をとりあげ、全ての鍵を預ってしまうこととなった(1132)。さらにハゲネは、国王たちの留守中に、その夥しい財宝をとりあげて全てローヒェにおいてライン河に沈めてしまった(1137)。クリエムヒルトは、この時ほど彼を憎んだことはなかった(1139, 4)と詩人も語っている。かくて夫の死と、彼らから宝を全部とられたこととで、彼女の心は新たな悩みのためにいほど重くなったが、この彼女の新たな悩み(leidē, 1141, 1)⁷⁾のために、のちにはより大きな災いがもたらされることとなるのである。『ニーベルンゲンの歌』におけるハゲネは、こうして自らの企てを詳細に至るまで正確に前もって計算し、巧みな策略でもって企てを実行してゆく、もっぱら陰険で不実な男として描かれているのであり、とにかく『ニーベルンゲンの歌』前編の悲劇の構図は、こうしてジーフリートの財宝強奪を企む陰謀家ハゲネによって描かれていると言ってもよいであろう。

7) このleidē、すなわち、leit については第九章で詳細に論ずる予定である。

Ⅱ. ブルゴント族滅亡におけるハゲネの役割

1. エッツェル王の求婚 —— 警告者としてのハゲネ ——

前編の物語の筋が二つの求婚によって動き始めたように、後編でも物語はエッツェル王の求婚によって動き始めるが、ここでも重要な役割を演じているのがハゲネである。ハゲネは前編と同じく後編でも広い知識を持った人物として登場している。リュエデゲールがエッツェル王の使者としてウォルムスにやって来たときも、ハゲネは知識豊かな武士としてグンテル王に呼び出されて(1177, 4)、到着の使者はフン国の位高く勇猛なる武士リュエデゲールである(1180; 1181, 4) ことをグンテル王に伝えるのである。前編と同じように、ここでも客人はウォルムスでうやうやしく出迎えられ(1183, 4)、前編と対をなしているのであるが、しかし、前編の筋はハゲネの思い通りに展開していたのに対して、後編になると反対にハゲネの意志に反したことが起こる。ハゲネは使者リュエデゲールがもたらしたエッツェル王の求婚に反対するのである。

Si rietenz al gemeine; niwan Hagene
der sprach ze Gunther dem küenen degene:
<<habt ir rehte sinne, sô wirt ez wol behuot,
ob sis joch volgen wolde, daz irz nimmer getuot.>> (1203)

彼らは異口同音に賛同したが、ただハゲネ一人だけが
勇士グンテルにむかっていった、「正しい分別をおもちならば、
十分にご用心なされて、よしんばお妹君がご承知遊ばされようとも、
お見合わせになるほうがよろしいと存じます。」

知識と経験豊かなハゲネはただちにブルゴント国の危険を感じたのである。クリエムヒルトにとって幸いとなることなら、エッツェル王の求婚に応じてもよい(1204)と考えるグンテル王に向かって、ハゲネは繰り返してこう警告する。

Dô sprach aber Hagene: <<nu lat die rede stan.
het ir Etzeln künde, als ich sîn künde hân:
sol si in danne minnen, als ich iuch hære jehen,
sô ist iu aller êrste von schulden sorgen geschehen.>> (1205)

しかし重ねてハゲネがいった、「その話は^お措きなさいまし。
あなたが私と同様エッツェルのことをよくご存じであつたら、
そしてそれなのに私が承る通りお妃様があの王と結婚なされたら、
まずもってあなたにきっと悩みが生じましょう。」

前編のハゲネを進言者とすれば、後編の彼は警告者ということになろう。前編ではことごとくグンテル王に進言していたハゲネは、後編に至ることごとくグンテル王に警告を発し反対するのである。数々の苦しみ(1208, 3; 1209, 1)を与えたクリエムヒルトにこれからでも誠を尽くして、その苦しみの贖いをするがよい(1208-9)と主張するギーゼルヘルに向かっても、ハゲネはこう警告する。

<<Daz ich da wol bekenne, daz tuon ich iu kunt.
sol si nemen Etzel, gelebt si an die stunt,
si getuot uns noch vil leide, swie siz getraget an.
ja wirt ir dienende vil manic wætlîcher man.>> (1210)

「私によくわかっていることを申し上げます。もしもお姫様が
エッツェルに嫁がれることになり、それまでご存生になったら、
きっと我々にできる限りの苦難をお与えになりましょう。
多くの^{おつわ}颯爽たる武士が仕えるでしょうから。」

ギーゼルヘルと同様のこと(1211)を主張するゲールノートに対しても、ハゲネは再度同様の警告をする。

Dô sprach aber Hagene: <<mir mac niemen widersagen.
und sol diu edele Kriemhilt Helchen krone tragen,
si getuot uns leide, swie si gefüege daz.
ir sult iz lan belîben, daz zimt iu recken michel baz.>> (1212)

ハゲネはまたもいった、「私の申すことはどなたも
否むことができますまい。クリエムヒルト様がヘルヒェの王冠を
戴かれたら、何とか企らんで我々に悩みを^{おほわ}与えられましょう。
お取りやめになるほうが、貴いお武家方に相応しいことです。」

ハゲネの警告は、国王兄弟三人にそれぞれ同様の警告をすることによって、執拗なほどに強められているとも言える。ハゲネは前編では積極的にクリエムヒルトをジーフリットに結びつけようと努めたのに対して、後編ではクリエムヒルトがエッツェル王に結びつくことに強く反対するのである。前編と後編とが著しいコントラストをなしていることが明らかである。前編で自分の思い通りに事を運んだハゲネは、今度ばかりは、国王兄弟とも意見が対立することとなり、結局のところクリエムヒルトの再婚は本人の意志に委ねられることとなる(1214)のである。

ハゲネの警告は、畢竟、ジーフリトがクリエムヒルトに遺した財宝に基づいている。ハゲネがクリエムヒルトから奪い取ってライン河に沈めたと言うものの、妃は今なお百頭の駄馬をもってしても運びきれぬほどのニーベルンゲンの国の黄金を持っていた(1271, 1-2)のである。その財宝でもって多くの家来を召しかかえ、ジーフリトの復讐を実行しないではないことをハゲネは確信していたのであり、ニーベルンゲンの財宝は今なおハゲネにとっては脅威だったのである。ジーフリトとハゲネとの宿命的な対立はジーフリトの死後も続いているのであり、この意味でクリエムヒルトはジーフリトの真の後継者であると言えよう。後編におけるクリエムヒルトとハゲネとの対立は、根本的にはジーフリトとハゲネとの対立にほかならない。ハゲネの意識の中にはジーフリトが今なお財宝という形で生き続けているのである。躊躇^{ちゅうちゅう}していたクリエムヒルトがついにエッツェル王との結婚を決意して、ジーフリトの遺した財宝をフン族の国へ持って行って、手ずから分かち与えようとしている噂がハゲネの耳に聞こえたときも、ハゲネはこう警告する。

Er sprach:<< sî t mir vrou Kriemhilt nimmer wirdet holt,
s ð muoz ouch hie belî ben daz Sî frides golt.
zwiu sold' ich mî nen fî nden l an s ð michel guot?
ich weiz vil wol, waz Kriemhilt mit disem schatze getuot. (1272)

Ob si in bræhte hinnen, ich wil gelouben daz,
er wurde doch zerteilet û f den mî nen haz.
si'n habent ouch niht der rosse, diu in solden tragen.
in wil behalten Hagene, daz sol man Kriemhilde sagen.>> (1273)

彼はいった、「クリエムヒルト殿がわしに決して好意を抱かれぬ以上、
ジーフリトの宝はここに留^どめておかねばならぬ。
あれほど大きな宝をどうして敵の手に委^ゆねられよう。
クリエムヒルト殿があ^の宝で何をするかはわかっているのだ。

あの方がここから宝を持ち出したら、
わしに対する憎しみをあおるためにばら撒^まかれるに違いないのだ。
あの人たちには運搬に必要なだけの馬の用意がないのだから、
宝はハゲネが預かっておくと、クリエムヒルト殿に申すがよい。」

この趣を聞いて、クリエムヒルトはひどく胸を痛め(1274, 1)、まさにこの財宝ゆえに、ここでハゲネとクリエムヒルトとの対立が表面化し決定的となったのである。黄金に執着するクリエムヒルトに向かって、リュエデゲールはエッツェル王の沢山の黄金を保証する

が、それに対してクリエムヒルトはこう言う。

Dō sprach diu küneginne: <<vil edel Rüedegær,
ez gewan küniges tohter nie rîcheite mæ r,
danne der mich Hagene ane hat getan.>> (1276, 1-3)

すると妃はいった、「気高いリュエデゲールよ、
ハゲネが私から奪った財宝ほどおびただしい富は、
いかなる王女もかつて手に入れたことの無いものです。」

クリエムヒルトにとって重要なのはジーフリトが遺したニーベルンゲンの黄金であり、それを奪い取ったハゲネとクリエムヒルトとの対立はもはや避けがたい運命へと深まっていたのである。ここでも財宝が重要な役割を演じていることが領けよう。前編では財宝への飽くなき欲望からハゲネが巧みな策略によってクリエムヒルトを欺いていったのであるが、後編では逆にこれからクリエムヒルトがその財宝返還を求めてハゲネに陰謀を企ててゆくのである。全くの裏返しであり、この点でも前編と後編とが著しいコントラストをなしていることが明らかである。

2. 招待の旅 —— 英雄としてのハゲネ ——

ハゲネとクリエムヒルトとの対立は、それから十三年後クリエムヒルトがブルゴント族をフン族の国へと招待したとき、さらに深められることになる。まず使者がブルゴントの国ウォルムスに到着したときも、ハゲネは知識豊かな武士として使者がエッツェル王のヴァイオリン弾きであることを報告し(1432)、ハゲネは丁重に出迎えることを進言するが、その使者がもたらした招待の話については猛烈に反対する。

Daz er wol möhte rîten in Etzelen lant,
daz rieten im die besten, die er dar under vant,
ane Hagen eine. dem was ez grimme leit.
er sprach zem künige tougen: <<ir habt iu selben widerseit. (1458)

Nu ist iu doch gewizzen, waz wir haben getan.
wir mugen immer sorge zuo Kriemhilde hân,
wand ich sluoc ze tûde ir man mit mîner hant.
wie getorste wir gerîten in daz Etzelen lant?>> (1459)

国王は当然エッツェルの国に赴かれるがよいと、
そこに居合わせた主だった人々はそう勧めたが、
ただハゲネ一人だけはひどくそれを厭がり、ひそかに国王にいった、
「それはあなたご自身に戦いを挑むというもの。」

我々が何をしたかは、あなたは篤とご承知のことです。
我々はいつ何ときでもクリエムヒルト殿を警戒せねばなりません。
私があの方の夫をこの手にかけて殺したのですから。
どうしてのこのこエッツェルの国へなど行けましょう。」

クリエムヒルトとの和解を持ち出して、彼女が恨みを捨て、ブルゴント族のかつての所業をゆるしたのだ(1460)と主張するグンテル王に向かって、またもやハゲネは警告してこう言う。

<<Nu lat iuch niht betriegen>>, sprach Hagene, <<swes si jehen,
die boten von den Hiunen. welt ir Kriemhilde sehen,
ir muget dâ wol verliesen die ere und ouch den lîp:
jâ ist vil lancræche des künec Etzelen wîp.>> (1461)

「フン族の使者がなんと申そうと、」ハゲネがいった、
「だまされてはなりません。もしクリエムヒルト殿にお会いになったら、
あなたの名誉もお命もないものとなりましょう。
エッツェル王の妃は、なかなか執念ぶかいお方ですから。」

このハゲネの警告は、十三年前のエッツェル王求婚のときと対をなしているのであるが、しかし、今回はゲールノートとギーゼルヘルから侮辱的な言葉(1462-3)を受けるや否や、ハゲネの態度は警告者から逆に攻撃者へと変身する。前編ではプリュンヒルトの恥辱によってハゲネは単なる進言者から不実な殺害者へと変身したのに対して、後編では自らの侮辱によって警告者から逆に攻撃者へと変身するのである。

Dō begonde zürnen von Tronege der degen:
<<ine wil, daz ir iemen füeret uf den wegen,
der getürre rîten mit iu ze hove baz.
s ît ir niht welt erwinden, ich sol iu wol erzeigen daz.>> (1464)

するとトロネゲの勇士は^{ふっぜん}怫然として怒った、
「私以上にフン族の宮廷へゆく勇気のあるものを、
旅路にお連れになることなどはあり得ません。どうしても
おやめにならないからには、私の勇気のほどをお目にかけましょう。」

招待の旅には容易ならぬ陰謀が隠されていることを知りながらも、武士としての名誉を重んずるハゲネは、それを避けることはできず、ついに招待の旅へと出かけてゆく決心をするのである。今や警告者としての役割はルーモルトが演じ、ハゲネは逆に戦闘の準備をする。ハゲネは今や本来の勇猛な武士となったのであり、夢などにも惑わされることもない。ウオテから不吉な夢を聞いたときも、こう言う。

<<Swer sich an troume wendet>>, sprach dō Hagene,
<<der enweiz der rechten mære niht ze sagene,
wenn' ez im ze ̅ren volleclîchen st̅e.
ich wil, daz mîn herre ze hove nâch urloube g̅e. (1510)

Wir suln gerne rîten in Etzelen lant.
dâ mac wol dienen kûnegen guoter helde hant,
dâ wir dâ schouwen müezen Kriemhilde h̅ h̅gezî t.>> (1511, 1-3)

「夢などを信じる人は、」そのときハゲネがいった、
「自分の誉れが申しぶんなく広まっているのに、
分別を失って迷ってばかりいる者なのです。わが主君には、
ご婦人たちのところに参られて暇乞い^{いとまご}をなさるようお勧め申したい。

私どもは勇んでエッツェルの国に参りましょう。
そしてクリエムヒルト殿にまのあたり接する折には、
勇ましい武士たちが王様がたのお役に立つでしょう。」

ハゲネは恐怖のためには左右されはしない(1513, 1)ことを明らかにして、フン族の国へと旅立つが、今やハゲネが恐怖を恐れぬ真に勇敢な武士であることを最もよく明示するのが、ドーナウ河渡河の場面であろう。河水はみなぎりあふれ、流れも極めて速かったので、一行は渡ることができない。ハゲネは渡し守を捜しながら、岸辺をあちこち歩いていると、水の乙女に出会い不吉な予言を受ける。すなわち、「王室の司祭以外は誰も生きて帰れない」(1542)という不吉な予言を聞いたハゲネは、渡河の際、司祭を河に投げ落とすが、司祭が神の御手に救われて無事にまた元の岸へかえり着くのを見て、水の乙女たちの占いが避けがたい運命であることを悟ると、ハゲネは船を打ちくだいて流れに投じてしまうのである。フン族の国からラインへ帰る際にどうして河を渡るのかというダンクワルトの質問に対して、二度とそういうことはあるまいと答えて、さらにこう言う。

D o sprach der helt von Tronege: <<ich tuon iz ü f den wan:
ob wir an dirre reise deheinen zagen han,
der uns entrinnen welle durch zä gelîche nôt,
der muoz an disem wä ge doch lîden schamelîchen töt.>> (1583)

トロネゲの勇士はなお語った、「我々の今度の旅路で、
臆病気を出して逃げてかえるような卑怯者があった場合、
そういう徒輩はこの河でみじめな死を
遂げる方がよいと思うので、こうやっておくのだ。」

ハゲネはここで自ら模範的にゲルマン武士の堅固な反抗精神を示すことによって、一行の武士たちに勇気を奮い立たせるのである。まさにこの英雄精神のためにフォルケールはハゲネを心から尊敬するようになる(1584)のであり、このハゲネこそブルゴント族を支える英雄であると言えよう。このドーナウ河渡河の場面を語るに先立って、ニーベルンゲンの詩人もハゲネのことをニーベルンゲン族にとっては「杖とも柱とも頼む人間」(ein helf-
lîcher tröst, 1526, 2)であったと語っている。このtröst の本来の意味は「信頼、

信用」(Zuversicht, Vertrauen)であり⁸⁾、ここでハゲネがその古代ゲルマン的英雄精神のために称えられていることは確かである。ここでは巧みに策略を弄する前編の不実なハゲネというイメージはない。むしろ反対に、ハゲネは今や運命を恐れることもなく堂々と破滅へと突き進む勇猛果敢な英雄なのである。

ベッヒェラーレンの国⁹⁾を経てフン族の国に到着したときも、ハゲネの姿はフン族のあまたの勇士にとっては堂々たる英雄として映る。ハゲネは、あらゆる武士にまさって剛勇なクリエムヒルトの夫、ニーデルラントのジーフリトを討った男と取沙汰されていたので、トロネゲのハゲネとは一体いかなる人物であろうかと、フン族の宮廷では並々ならぬ騒ぎであった(1733)と詩人によっても語られている。ジーフリト殺害行為は、今や奇妙にもフン族の勇士にはもはや道徳的汚点としてではなく、むしろ英雄的行為として考えられている¹⁰⁾のである。

偽りの心を抱きながらニーベルンゲンの人々を出迎えた(1737, 2)クリエムヒルトに対面したときも、ハゲネは英雄として自信たっぷりに、クリエムヒルトの挑発的な態度に反抗するということは前章でもすでに述べた¹¹⁾が、ハゲネはその際慎重に答えているので、挑発しているクリエムヒルトは自ら挑発されている者でもあり¹²⁾、両者の間はますます険悪化してゆくばかりである。なぜジーフリトを殺害したのか(1789)という質問に対しても、ハゲネは堂々とかう答える。

Er sprach: <<waz sol des mēre? der rede ist nu genuoc.
ich binz aber Hagene, der Sîfriden sluoc,
den helt zu sînen handen. wie sēre er des engalt,
daz diu vrouwe Kriemhilt die schœnen Prûnhilden schalt! (1790)

Ez ist et āne lougen, kûneginne rîch,
ich hān es alles schulde, des schaden schedelîch.

8) Vgl. Gottfried Weber: Das Nibelungenlied. Problem und Idee. Stuttgart 1963.
S. 242-4.

9) 辺境伯リュエデゲールの国であるベッヒェラーレンでは、古代ゲルマン的な色彩の強いドーナウ河渡河の場面とは全く対照的に、宮廷的な雰囲気が漂っているが、ここでもハゲネは重要な役割を果たしている。ハゲネは、すなわち、リュエデゲールの娘との婚約をギーゼルヘルに勧めたり(1678)、リュエデゲールの今は亡き息子ヌオドゥンクの楯を引出物として要求したり(1698)して、のちの悲劇性を高めているのである。

10) Vgl. M. W. Armstrong: a. a. O., S. 158-9.

11) 第六章 180-3頁参照

12) Vgl. M. W. Armstrong: a a O., S. 160.

nu rechez, swer der welle, ez sî wîp oder man.
ich enwolde danne liegen, ich hân iu leides vil getan.>> (1791)

ハゲネが答えた、「これ以上の問答はご無用、
こんな話はもう沢山だ。手だれの勇士ジーフリトを討ったのは、
いかにもハゲネです。クリエムヒルト様から加えられた
美しいブリュンヒルト様の恥を、見事に晴したわけですね。

身分の高いお妃様、隠し立てはいたしません。
あなたの手ひどい痛手はみんな私のしたことです。男でも女でも、
復讐をしようと思うものはするがよい。私は嘸^{うそ}つきにならぬ以上、
あなたに数々の苦難を加えた由を申し立てるほかありません。」

ハゲネは前編とは対照的にもはや隠し立てはしないのである。それどころか反対に、ジーフリト暗殺行為の理由づけとしてブリュンヒルトの恥辱を指摘することによって、クリエムヒルトを責め立ててもある。クリエムヒルトとのこれら全ての口論においてはハゲネが常に攻撃される者であるが、しかし、同時にハゲネは攻撃する女性に勝ち誇っている者でもある¹³⁾。若い時分からハゲネのことを知っているフン族の武士も語っているように、ハゲネは今や「知慧 (ze witzzen) もまさり、獐猛な男 (ein grimme man)」(1798, 3)であり、いかなることにも決してたじろぐことのない剛勇の武士である。

このような最強の者としてのハゲネを最も印象的にきわだたせているのはもちろん最終場面である。ハゲネはなるほど最後にはディエトリーヒの手で縛められてクリエムヒルトの前に突き出されるが、しかし、捕えられても彼は巧みな弁舌でもってクリエムヒルトに負けてはいない。クリエムヒルトから「もしおん身が先に私から奪ったものをまた返すつもりなら、命を助けてブルゴントの国元へかえしてとらせよう」(2367, 3-4)という言葉をかけられても、ハゲネは反抗の態度を見せて、決して室のありかを口にはしない。「では決着をつけよう」と言って、ただちに実兄グンテルの首を打ち落とさせた(2369)クリエムヒルトに向かって、ハゲネは最後の言葉としてこう言う。

<<du hast iz nach dînem willen z'einem ende bräht,
und ist ouch rehte ergangen, als ich mir hête gedaht. (2370, 3-4)

Nu ist von Burgonden der edel künec töt,
Gîselher der junge unde ouch her Gernöt.

13) Vgl. ebd. S. 162.

den schaz den weiz nu niemen wan got unde mî n:
der sol dich, va landinne, immer wol verholn sî n.>> (2371)

「あなたは思いのままに決着をおつけなされた。
それはまたわしの考えたとおりの成行きであったのだ。

今はブルゴントの気高い国王をはじめ、
若君ギーゼルヘルにゲールノート様もお果てなされた。
宝のありかを知るものは、神とこのわしとのほかは一人としてござらぬ。
鬼女よ、あなたには宝は永久に隠されたままに相成り申そう。」

死を覚悟したこのハゲネの最後の言葉こそ、ハゲネの最高の強さを示していると言えよう。ハゲネはこの反抗的な言葉によってその場でクリエムヒルトから頭を打ち落とされるのであるが、殺害されても彼は勝者である。ニーベルンゲンの財宝のありかを明かさぬまままたじろぐことなく滅びていったハゲネは、巖のように揺がぬ英雄として不屈の精神を絶対化の中で強く生きたと言えるからである。『ニーベルンゲンの歌』におけるこのようなハゲネの不屈の精神は、『歌謡エッダ』や『ヴォルスンガ・サガ』において生きながら心臓をえぐりとられても笑って涙ひとつ流さなかったヘグニの英雄精神——しかもそのえぐりとられた心臓は皿の上に置かれてもほとんど震えなかったというヘグニの不屈の精神を彷彿させる¹⁴⁾ が、この作品の後編におけるハゲネこそまさに古代ゲルマンの真の英雄であったと言ってもよいであろう。彼はこの不屈の精神で後編の筋の進行を決定する人物であり、従って、ニーベルンゲン悲劇全体の筋そのものを支配している人物であると言えるのである。『ニーベルンゲンの歌』における悲劇の構図はこうして前編では不実なハゲネによって、また後編では英雄ハゲネによって描かれていると言っても過言ではないのである。

14) 第一章36頁及び50頁参照

まとめ

以上のように見てくると、トロネゲのハゲネは『ニーベルンゲンの歌』においては前編と後編とで著しいコントラストをなしていることが明らかである。前編ではグンテル王の進言者に過ぎない人物から次第にグンテル王を唆しジーフリトを殺害する陰謀家へと変身してゆくのに対して、後編ではクリエムヒルトの再婚に反対する警告者から逆にクリエムヒルトの挑発に反抗し自ら破滅へと突進してゆく攻撃的な武将となるからである。前編のハゲネが次第に不実な策略家へと^お堕ちていっているならば、後編のハゲネは堂々たる英雄へと高められているのである。このようなハゲネのコントラスト的二重像は、二つの素材を一つに組み合わせて統一させた結果に基づくものである。ニーベルンゲンの詩人はクリエムヒルトを自分の叙事詩の中心に置くことによってブリュンヒルト伝説とブルグント伝説とを一つに結び合わせることに成功したのであるが、クリエムヒルトが中心人物となることによってその敵対者が必要となったのである¹⁵⁾。それがトロネゲのハゲネであり、この二人の敵対関係こそが作品全体に統一性を与えている¹⁶⁾のである。

クリエムヒルトとハゲネとの敵対関係は、しかし、前編においては根本的にはジーフリトとハゲネとの宿命的な対立である。ハゲネが物語の最初からすでにジーフリトの敵対者として位置づけられていたことは、ジーフリトがニーデルラントの国を出るとき彼の父がハゲネについて語った言葉(54)からもすでに明らかであり、ハゲネが到着の勇士ジーフリトについてニーベルンゲンの財宝と不死身の肌のことを語ったのも決して古い伝説の「残物」ではない。ハゲネはこの財宝の強奪を企んで、さまざまな策略を弄してゆくのであり、ジーフリト暗殺の悲劇はまさにこの財宝に目をつけているハゲネの企みによって展開されているのである。このようにジーフリトとハゲネとの対立は財宝をめぐる展開しており、まさにニーベルンゲンの財宝に由来する権力のモチーフは前編の本質的なところで保存されたままであると言えるのである。

ジーフリトとハゲネとの宿命的な対立は、後編ではクリエムヒルトとハゲネとの対立となる。後編でクリエムヒルトの再婚と招待に反対するハゲネの執拗な警告も、結局のところ、ジーフリトがクリエムヒルトに遺した財宝に基づいており、この意味においてクリエムヒルトはジーフリトの後継者でもある。フン族の国でのハゲネとクリエムヒルトとの対決も、本質的なところでは財宝をめぐる争いにほかならない。最後に財宝を自由にすることができる者が勝利を取めたことになるのであり、財宝は今や二人の宿敵にとってはまさに「勝利の呪物」である¹⁷⁾。ニーベルンゲン財宝に由来するこの権力のモチーフは後編でも本質的なところで保存されたままであることが頷けよう。

ニーベルンゲン財宝に基づく権力のモチーフは、このように『ニーベルンゲンの歌』全

15) Vgl. M. W. Armstrong : a. a. O., S. 146.

16) Vgl. ebd. S. 147.

17) Vgl. ebd. S. 164.

体を貫き、作品の核心にあるとも言えるが、しかし、この財宝は、前章においてすでに述べたように、クリエムヒルトにとってはハゲネとは別のもう一つの意味を持っていたことを指摘しておかなければならない。財宝はクリエムヒルトにとっては副次的なものであり、彼女がそれを欲しがったのも実はその財宝がジーフリトの^{さめざめ}後朝の贈物であり、従って、ジーフリトの象徴であったからである。最終場面でクリエムヒルトがハゲネに向かって言った「もしおん身が先に私から奪ったものを返すつもりなら、命を助けてブルゴントの国元へかえしてとらせよう」(2367, 2-3)という言葉も、確かに表面的にはハゲネに強奪された宝のことを言っているのであるが、しかし、その心の内ではジーフリトの死のことをほめかせているとも言える¹⁸⁾のである。ハゲネが宝を返せば、ハゲネの不正、ハゲネの罪の告白となり、夫殺害によって苦しみを受けたクリエムヒルトが彼に象徴的に勝ったことになる。しかし、クリエムヒルトは、ハゲネの言葉(2368, 1-3)に唆されて、実兄グンテルの首を刎ねさせるが、これはハゲネの思い通りのことだったのである。ハゲネはハゲネで決してクリエムヒルトに弱みを見せはしない。それではハゲネは償いをしないことになる。と悟ったクリエムヒルトは、「それならばせめてジーフリト殿の剣を貰っておきましょう。これは私の愛しい人^{いと}の見納めの日に、あの人^{いと}が携えていたもの。私の心痛はおん身のために生じたものです」(2372, 2-4)と言って、名剣バルムンクを鞘から抜き取って、ハゲネの頭を打ち落としたが、この言葉がクリエムヒルトの最後の言葉となったのも決して意味のないことではない。クリエムヒルトの復讐は、愛しい夫^{いと}ジーフリトの死による「心の悲しみ」(herzeleide)からなされたのであり、夫への変わらぬ愛のあかしでもあると言えよう。この作品にハゲネが「権力」のモチーフをなおも保持する役割を果たしているならば、クリエムヒルトは「愛」のモチーフを新しく取り入れる役割を果たしているのであり、この二つのモチーフが全体にわたって激しく対立しつつ、悲劇が展開しているところにこの作品の特質があると言えるのである。

^{Vgl.}
18) Werner Schröder : Die Tragödie Kriemhilds im Nibelungenlied. ZfdA. 90, 1960/61. S. 154.

第八章 『ニーベルンゲンの歌』における 悲劇の二重構造

—— ジーフリトとリュエデゲールの役割 ——

以上のように見てくると、『ニーベルンゲンの歌』の全体の構成は、クリエムヒルトとハゲネとの敵対関係によって、前編と後編とが見事な均整を保つこととなったと言えよう。『ニーベルンゲンの歌』は、要するに、第二章でもすでに指摘しておいたように、前編と後編とがともに結婚と招待という出来事から成り立ち、しかもそれらはいずれも十数年という時間によって隔てられているのである²⁾。前編では、すなわち、ジーフリトとグンテル王の二組の結婚が成立して十年後(vgl. 715, 2)、グンテル王の妃ブリュンヒルトがジーフリト夫妻を饗宴へと招待し、後編でもまたエッツェル王の結婚式後十三年目(vgl. 1390, 4)にして、国王の妃クリエムヒルトがブルゴント族を饗宴へと招待することとなるからである。登場人物たちは前編では二度にわたってライン河畔のウォルムスに集結し、後編では同じく二度にわたってドーナウ河畔のエッツェルンブルクへと集合するのであり、全体を図式化するとすれば、巻末に掲げた図式Ⅳ(343頁)のようにまとめることができるであろう。このような整然とした構成の中にあって、結婚と招待のいずれの旅にも関与していて重要な役割を演じているのが、前編ではニーデルラントの英雄ジーフリトであり、後編ではベッヒェラーレンの辺境伯リュエデゲールである。両者はいずれものちの悲劇の契機となる両国王の求婚の旅において援助者として尽力しているばかりではなく、招待の旅では招待された者(ジーフリト)あるいは案内者(リュエデゲール)としてその饗宴の地へと赴いているのである。副次的な人物として理解されがちなジーフリトとリュエデゲールは、それぞれ前編と後編において、なくてはならない人物であることが容易に理解できよう。しかもこの二人は、よく考察してみると、前編と後編で著しい対応関係を示している。ジーフリト像については『エッダ』や『サガ』に見られるような古代的な性格がこの作品にも伝承されているのに対して、リュエデゲールの人物形象には十三世紀初頭の詩人による創作部分が多い³⁾とされているが、このような二人の人物形象並びにその役割を理解することは、『ニーベルンゲンの歌』を解く重要な鍵であると言っても過言ではないであろう。そこで本章では、結婚と招待という二つの出来事の二重構造を軸として、その中におけるジーフリトとリュエデゲールの人物形象及びその役割を考察することによって、『ニーベルンゲンの歌』前編・後編の特質、すなわち、ニーベルンゲン悲劇の二重構造の特質を探ってみることにしたい。

1)第二章 100頁参照

2)第二章 100頁脚註17及び18参照

3)相良守峯：ドイツ中世叙事詩研究 243頁 及び本研究第二章94頁参照

I. 両国王の求婚 —— グンテル王とエッツェル王 ——

『ニーベルンゲンの歌』本来の筋は、ジーフリトの求婚とグンテル王の求婚によって大きく動き始めるが、全体の構成を考えた場合は、グンテル王の求婚とエッツェル王の求婚とが前編と後編で均整のとれた二重構造をなしていると考えられる（巻末343頁の図式IV参照）であろう。両国王の求婚はそれぞれのちの両王妃の leit（屈辱、悲しみ）の復讐——これも二重構造をなしている——への契機となるからである。この両国王の求婚は、単に男性として美しい乙女の愛を求めるジーフリトの場合とは異なって、いずれも国王として王妃を求めている点⁴⁾で共通しているが、求婚の動機には明らかな相違が認められる。グンテル王は、海のかなたに美しい乙女がいるという噂を伝え聞いて(328)、ウォルムスからイースラントへと旅立つ決心をするのに対して、エッツェル王は、逆に受動的に身内の人々から再婚の話として、ブルゴントの国にいる誇り高い寡婦クリエムヒルトを勧められるからである。自発的なグンテル王の求婚が一種の「冒険」(Abenteuer)の形式をとっているとすれば、他動的なエッツェル王のそれは「純粋な国家行為」(ein reiner Staatsakt)である⁵⁾と言えよう。グンテル王の求婚が冒険的なものであれば、グンテル王のそれに対する決意も、それにふさわしく堅固なものである。

D o sprach der vogt von R i ne: <<ich wil nider an den s e
hin ze Pr ün hilde, swie ez mir erg e.
ich wil durch ir minne w ägen m i nen l i p:
den wil ich verliesen, s i ne werde m i n w i p.>> (329)

さてラインの国王がいった、「どんな結果になろうと、
わしは海の方へ下って行って、プリュンヒルトを訪ねよう。
あの女の愛を得るためには、身命をも賭するつもりだ。
もしあれを妻となしえないくらいなら、わしは生きてはいない。」

この向こう見ずな決意に対して客人のジーフリトは、グンテル王に求婚の旅を思いとどまらせようと忠告する。なぜなら、プリュンヒルトは、勇壮なる武人を相手とし、愛を賭けて三種の競技を行い、一種目たりと敗れば、その武人は首を失うことになる(326-7)という実に恐ろしい習慣(330, 2)をつづけていたからである。古代ゲルマン的な冒険を必要とする危険な求婚の旅であると言えるが、しかし、グンテル王の決心は変わらない。積極的なこの前編のグンテル王に対して、後編のエッツェル王は消極的であり、控え目である。

4) ジーフリトの求婚を自然的求婚であるとすれば、両国王の求婚は社会的求婚であると考えられることもできよう。

5) Vgl. Helmut de Boor(Hrsg.): Das Nibelungenlied. Wiesbaden 1972. Erläuterung S. 14.

Dō sprach der künic rîche: <<wie möhte daz ergan,
 s î t ich bin ein heiden unt des toufes niht enhân ?
 s ô ist diu vrouwe kristen: da von s ô lobt sis niht.
 ez müese s î n ein wunder, ob ez immer geschiht.>> (1145)

勢威ある王がいった、「どうしてそんなことができよう。
 わしは異教徒であって、洗礼をうけたことはない。
 むこうはキリスト教徒だから、とても承諾するはずがないのだ。
 もしそんなことができたなら、奇跡というしかあるまい。」

グンテル王の場合は身のまわりの者たちから反対されたのに対して、エッツェル王の場合は逆に説得される(1146)のである。このように求婚の動機は全く対照的であるが、しかし、両者の求婚はともにそれぞれの意味において困難なもの(vgl. 331; 1145)であることには変わりがない。そこでグンテル王の求婚に援助を施すことになるのが、ニーデルラントの英雄ジーフリトであり、一方エッツェル王の求婚に重要な役割を演じているのが、ベッヒェラーレンの辺境伯リュエデゲールである。ジーフリトとリュエデゲールは、このように国王の求婚の援助者という点で、前編と後編で対応関係にあるのであるが、両者はこの作品では詳細に至るまで全く対照的であると言わなければならない。

まずジーフリトは本来冒険を求めて旅をする英雄であり、とある山の麓ではニーベルンゲン族と戦い、その財宝を奪い取り、宝の所有者となった(87-99)という古代ゲルマンの英雄である。またジーフリトは、ある日竜を退治したとき、その血を全身に浴びて、そのため肌が不死身の甲羅と化し、どんな武器も彼を傷つけ得ない英雄ともなった(100)というのである。これに対してリュエデゲールは、のちに登場するエッケワルトの言葉を用いて表現すれば、「さながら五月が草木の花を育てるがごとく、胸のうちに徳性を育む」(1639, 2-3)宮廷的騎士であり、贈与を一つの美德と考えた典型的な中世騎士である。ジーフリトが本質的に古代ゲルマンの英雄にふさわしく「冒険をする者」・「獲得する者」であるなら、リュエデゲールは宮廷的騎士にふさわしく「忠実に仕える者」・「与える者」であると言えよう。とにかく古代ゲルマンの伝説の雰囲気漂っているジーフリトの場合に対して、リュエデゲールの場合は全く宮廷的な雰囲気が漂っているのである。

このような二人の本質的な相違は、国王の求婚に際して援助の依頼を受けた場面からも明らかである。ここで両編の依頼の場면을対比してみよう。まずグンテル王は、ハゲネの忠告(331)に従って、プリュンヒルトのことはよく心得ている(331, 4)という客人のジーフリトに向かって援助を依頼する。

Er sprach:<<wil du mir helfen. edel s î vrit,
 werben die minneclîchen? tuostu, des ich dich bit,

und wirt mir z'eime trûte daz minneclîche wîp,
ich wil durch dînen willen wâgen êre unde lîp.>> (332)

そこで王がいった、「ジーフリト殿、いとしい女への求婚に、
力を貸してはいただけまいか。もしおん身がこの願いを容れ、
あのいとしい女がわしの妻となるようなら、
わしはおん身のために名誉をも身命をも惜しまない所存です。」

これに対して、ジゲムントの王子ジーフリトは、危険を伴う援助の報酬として次のような
要求をする。

<< gîstu mir dîne swester, sô wil ich ez tuon,
die scænen Kriemhilde, ein kûneginne hêr.
sô ger ich deheines lones nâch mînen arbeiten mêr.>> (333,2-4)

「もし妹君を、あの貴い王女なる美しいクリエムヒルトを
私にお与え下さるなら、^{おろこ}欣んでお力添えをいたしましょう。
それ以外には私の骨折りに対し、何らの恩賞も望みません。」

この要求に対してグンテル王は、美しいブリュンヒルトがこの国へ来た暁には妹を妻とし
て差し上げようと、ジーフリトの手を握って約束する(334)。二人は誓いを固め(335,1)、
ここに一つの契約が成立するが、この場面におけるジーフリト像は『エッダ』や『サガ』
に伝承されているような古代的な人物形象を前提としている。すなわち、ジーフリトはブ
リュンヒルトと面識のある(331,4) 古代ゲルマンの英雄であり、そのことを知っていたハ
ゲネがグンテル王に進言して、グンテル王から援助の依頼を受けることとなったのである。
国王の求婚が古代ゲルマンの国への冒険的な旅であれば、援助者もまた古代ゲルマンの勇
士でなければならないのである。

しかし、本来古代ゲルマンの勇士であるジーフリトはグンテル王との契約によって、リ
ュエデゲールと同じように、国王に仕える中世の宮廷的騎士に変身したと言わなければなら
ない。古代ゲルマンの英雄ジーフリトは今や、気高きクリエムヒルトのミンネを求めて
「仕える」(vgl. 388) 中世の騎士であり、この契約は必然的に、ジーフリトはグンテル王
の家来であり、グンテル王はジーフリトの主君であるという主従関係へと発展する。イー
ゼンシュタインの城を目の前にしたとき、ジーフリトはそのことを一行の者たちに明らか
にしている。

<<Unt wil iu helden raten, ir habt einen muot.

ir jehet gelîche, ja dunket ez mich guot.
 swenne wir noch hiute für Prünhilde gan,
 sô müezen wir mit sorgen vor der küneginne stân. (385)

Sô wir die minneclîchen bî ir gesinde sehen,
 sô sult ir, helde mære, wan einer rede jehen:
 Gunther sî mîn herre, und ich sî sîn man.
 des er da hat gedingen, daz wirt allez getân.>> (386)

「ついでには勇士の方々にお勧めいたしておきますが、
 皆が調子を合わせ、同じような言い草をするのがよいかと存じます。
 今日にもプリュンヒルトに直面するときは、
 我々は用心してあの女王の前に立たなければなりません。

すなわち、あの美しい女王が家臣とともにいるところに出たら、
 高名の各位には、言うことを一つにさせていただきたい。
 つまり、グンテル王は私の主君であり、私は家来であると。
 そうすれば王の希望なさることが実現いたしましょう。」

ジーフリトは、従って、グンテル王の求婚の旅にあたって二重の像で行動しなければならない。すなわち、表面上はグンテル王に仕える中世騎士として、また肝心な「力」を必要とするところでは古代ゲルマンの英雄として行動しなければならないのである。

このようにジーフリト像の中には二重の像が認められるが、後編のエッツェル王の依頼の場合はどうであろうか。求婚に控え目なエッツェル王は、幼少の折からクリエムヒルトのことはよく知っている(1147,4)というベッヒェラーレンの辺境伯リュエデゲールに、使者としての手助けを依頼する。

Er sprach:<< sô wirb ez, Rüedegêr, als liep als ich dir sî.
 und sol ich Kriemhilde immer geligen bî,
 des wil ich dir lônên, so ich aller beste kan.
 sô hastu mînen willen sô rehte verre getân. (1151)

Ôzer mîner kameren sô heiz' ich dir geben,
 daz du unt dîne gesellen muget vræ lîche leben,
 von rossen und von kleidern allez daz du wil.
 des heize ich iu bereiten zuo der botscheftē vil.>> (1152)

王がいった、「ではリュエデゲールよ、何とかひと肌
ぬいではもらえまいか。クリエムヒルトと契ることができたら、
能うかぎりの恩賞をとらせるつもりだ。そうなればおん身は
わしの願いをいみじくも果たしてくれたことになるから。

わしは掛かりの者に言いつけて、おん身と供のものが
愉快に旅のできるよう、わしの宝庫から乗馬でも衣裳でも、
おん身の欲するだけのものをなんでも取らせよう。
使命を果たすために、十分な準備をととのえさせるつもりだ。」

求婚に際しての援助の依頼という点で、前編との対応は明らかである。しかし、後編において国王に答えるリュエデゲールの返事はジーフリトとは全く異質のものである。

<<gerte ich dî nes guotes, daz were unlobelî ch.
ich wil dîn bote gerne wesen an den Rî n
mit mî n selbes guote, daz ich hân von der hende dî n.>>(1153,2-4)

「あなた様の財宝をいただくなどは、ほめた話ではございません。
お使いの儀は、私がこれまでいただいてある
自分の私財をもって、ラインへ赴きたいと存じます。」

恩賞も旅支度のための財宝も要らないというこのリュエデゲールの控え目な態度は、使命を果たした暁には国王の妹を妻にもraitたいと望むジーフリトと対照的である。「忠実に仕える者」としてのリュエデゲールの宮廷的徳目がこの場面できわめて簡潔に表現されているのである。とにかく、この依頼の場面で言えることは、ジーフリトは、恐ろしい習慣をつづけている(330,2) プリュンヒルトのことをよく心得ている(331,4) 古代ゲルマンの英雄であり、一方リュエデゲールはウォルムスに住む気高きクリエムヒルトのことを幼少の折から知っている(1147)宮廷的騎士ということである。

このように国王・援助者がともに冒険的・野心的である前編においては、秘策に満ちた、契約上の主従関係が成立し、古代ゲルマン的な要素と中世騎士的な要素との融合が見られるのに対して、国王・援助者がともに控え目な後編においては、誠実な主従関係が支配しており、全く宮廷的であると言えよう。前編ではこの契約上の主従関係によって、また後編ではこの誠実な主従関係によって国王の願いが叶えられ、結婚が実現するのであるが、それらの主従関係はまたのちにはそれぞれの悲劇の原因ともなっている。

Ⅱ. ジーフリトの援助 —— 隠れ蓑の秘策 ——

本来古代ゲルマンの勇士であるジーフリトは、こうしてグンテル王との契約によって中世の騎士ともなったのであるが、この古代ゲルマン的な要素と中世騎士的な要素との融合は、イーゼンシュタインへの旅立ちの準備の際にも認められる。十分な威容を保って(mit vollen ęren, 339, 2) 船出をするため多勢の軍勢を召集することを提案するグンテル王に向かって、ジーフリトはこの求婚の旅にもっとふさわしい策として小人数で出かけることを提案する。

<<Wir suln in recken wī se ze tal varen den Rī n.
die wil ich dir benennen, die daz sulen sī n.
selbe vierde degene varn wir an den sē.
so erwerben wir die frouwen, swie ez uns dar nach ergē. (341)

「私たちは武者修業^{てい}の体で、ライン河を下ってゆくのです。
一行に加わるべき人数を申しあげれば、私たちを入れて四人だけで、
海を渡って参るのです。成行きのほどはいかにもあれ、
これであの婦人を手に入れることにしましょう。」

宮廷的な旅立ちではなく、武者修業の体で(in recken wī se, 341, 1)、わずか四名で小舟で出かけるのであり、これは『歌謡エッダ』や『ニーベルンゲンの歌』の原型を想起させるように、全く冒険的であり、古代ゲルマン的である。しかし、この旅立ちの場面でも二つの要素の融合が見られる。グンテル王から衣裳のことを尋ねられると、ジーフリトはこう答えるのである。

<< Wat die aller besten, die ie man bevant,
die treit man z'allen zī ten in Prūnhilde lant.
des sulen wir rī chiu kleider vor der frouwen tragen,
daz wirs iht haben scande, sō man diu mē re hē re sagen.>> (344)

「プリュンヒルトの国では、およそこの世で見出され得る
最上の衣服を常住身につけております。それゆえ女王の前では、
人の噂にのぼっても恥かしくないような、
立派な衣裳を着なければなりませんまい。」

こうして衣裳を準備するさまが長々とこまやかに (343-70) 描写されているが、四人乗りの小さな舟と衣裳の豪華さとが全く対照的であり、この一行の旅立ちは「武者修業の旅」

(Vgl. in recken wî se, 341, 1)であると同時に、「宮廷的な旅」(vgl. höfscen rî ten, 350, 1)でもあるのである。

ジーフリトはこうして二重の像でイーゼンシュタインへ出かける。航海中は、ジーフリトはイースラントへの航路を心得ている古代ゲルマンの勇士である。ところが、イーゼンシュタインの城に到着したときは、グンテル王の家来でなければならない。ジーフリトはグンテル王が鞍に乗るまで、その毛並美しく、丈高く、たくましい駿馬の手綱を手に支え(397, 1-2)、グンテル王に仕える(397, 3)のである。詩人も語っているように、ジーフリトはおよそこれまで、他の勇士のため鎧のそばに侍るというような奉仕はかつてしたことがなかった(398, 2-3)が、しかし、そのためプリュンヒルトに直面したとき、事がうまく運んだのである。プリュンヒルトから最初に挨拶を受けたジーフリトは、この旅における彼の立場を明らかにする。

<<Vil michel iuwer genade,	mîn vrou Prünhilt,
daz ir mich ruochet grüezen,	fürsten-tochter milt,
vor disem edelen recken,	der hie vor mir stat,
wand'er ist mîn herre:	der êren het ich gerne rat. (420)

Er ist geborn von Rîne,	waz sol ich dir sagen mē r?
durch die dîne liebe	sî n wir gevarn her.
der wil dich gerne minnen,	swaz im dā von geschiht.
nu bedenke dichs bezî te:	mîn herre erlāzet dich es niht. (421)

Er ist geheizen Gunther	unt ist ein kunic hēr.
erwurbe er dîne minne,	sone gērt' er nihtes mēr.
ja gebōt mir her ze varne	der recke wolgetān:
mōht' ich es im geweigert han,	ich het iz gerne verlan.>> (422)

「プリュンヒルト姫よ、私の前に立っておられる
やんごとなきお方に先立って、私にご挨拶を賜りましたことは、
恵みぶかい姫よ、まことに忝なく^{かたじけ}存じます。けれども、
この方は私の主君なので、この光栄はご辞退申したいのです。

わが君はラインの生まれ、と申せば、ほかに何を申しあげよう。
我々は、おん身の御意を得ようと参った次第です。
王は、成行きはいかにもあれ、おん身に愛を求めようのご所存。
今の中^{うち}にご思案下さい。王は断念はいたされません。

この方はグンテルと申されて、位たかき国王です。

おん身の愛をさえ得られれば、それ以上の望みはもたれません。

この天晴れな勇士が、私に船出するよう命ぜられたのです。

おことわりできたら、私もやめておきたかったのですが。」

この言葉によって、プリュンヒルトは、自分に求婚しているのはグンテル王であることを知り、ただちに彼との競技の準備をする。しかし、競技は実際にはジーフリトが行うのである。表面的には中世の騎士としてグンテル王に仕えていたジーフリトも、この困難な危険な競技においては古代ゲルマンの英雄に戻らなければならない。その変身の道具が、かつての冒険の旅でアルプリーヒから奪い取っていた隠れ蓑、すなわち、それを身につけると、姿が見えなくなるばかりか、自分自身の力の外に十二人分の力が加わる(336-8)というあの隠れ蓑である。この隠れ蓑の秘策によって、ジーフリトは、グンテル王の代わりに競技を行い、石投げ、幅跳び、槍投げの三種目において、いずれも女王を打ち負かすことに成功する。ジーフリトはこのようにグンテル王の求婚に援助を施すにあたって、二重の人物として、すなわち、表面上は中世の騎士として、また肝心な陰のところでは古代ゲルマンの英雄として、グンテル王に仕えているのである。

ジーフリトのこの二重の像は、三種競技の終了後にも認められる。まず、古代ゲルマンの英雄として働くのがニーベルンゲン^{ニールンゲン}の国への募兵の旅である。競技終了後、日毎に朝な夕な、続々とプリュンヒルトの一族郎党が城へ詰めかけているのは求婚者たちにとって危機を招く恐れがあったので、ジーフリトは選り抜きの軍兵をひき連れて戻って来ることを約束(479-80)して、古代ゲルマンの英雄として隠れ蓑を身につけて(482, 2)、百マイルかそれ以上も離れたニーベルンゲン国(484)に出かけるのである。その国でジーフリトは、まず門番である勇猛な巨人と戦い、その巨人を縛りあげると、次には獐^{こびと}猛な侏儒、あの荒武者アルプリーヒと戦い、その侏儒をも同様に縛り上げるが、これらの戦いはジーフリトが古代ゲルマンの英雄であることの証明でなければ、一体何であろう。ジーフリトはアルプリーヒに向かって、あらん限りの精鋭の武士を選び、千人のニーベルンゲン族を集めてくれるように要求すると、ほどなくおよそ三千の兵が集まった(505, 1)。その中から最もすぐれたもの一千が選ばれ(505, 2)、その兵を連れてイースラントの国へ戻る。この一千のニーベルンゲン兵と、プリュンヒルトの臣下の中から選ばれた二千の軍兵が、こうして女王の供をしてブルゴントの国へ渡ることになるが、この旅では逆にジーフリトは、ミネを求める中世の騎士(vgl. 536)として、グンテル王の先触れの使者となって一足先にラインへと首尾よい知らせをもたらすのである。前編の中でもそれほど重要な筋の展開をもたらさないこのニーベルンゲン国への募兵の旅(第八歌章)とウォルムスへの先触れの使者の旅(第九歌章)とは、このようにジーフリトがグンテル王に二重の像で「仕えている」ことのあかし、ジーフリトがグンテル王の家来であるということの実証としても役立っていると言えるのではあるまいか。無用の長物と思われがちな筋も、ジーフリトの二重の像

の描写に寄与しているものであり、細部に至るまで巧みな構造を有している作品であることが窺えるのである。

こうしてジーフリトの二重の像によってグンテル王の求婚の旅は首尾よく成功を収め、イースラントの女王は今やグンテル王の花嫁としてラインへと旅立つが、ジーフリトの超人的な力によっていわば「征服」された彼女の結婚は、すなわち、欺かれ、ひどい恥辱を与えられたことを意味している。これがのちに暴露されるに及び、重大な悲劇へと発展してゆくのである。その悲劇の契機は、しかし、ウォルムスでの二組の結婚式の際にすでに見られうる。すなわち、家来であるはずのジーフリトが国王の妹クリエムヒルトと並んで坐っているのを見て、プリュンヒルトは突然泣き始める。美しく躡けのよいクリエムヒルト姫がなぜ家臣であるジーフリトの妻となったのか、それがプリュンヒルトには悲しい (leit, 618, 2; 620, 2) のであり、その理由がわからぬうちは処女のままでいるつもりだ (635) と言って、ついには結婚式の夜のグンテル王の愛撫をも拒んでしまう。それどころか、凛々しいプリュンヒルトは、彼女の着衣を掻き乱そうとしているグンテル王を縛り上げ、一晩中一本の釘にかけて壁に吊したのである。プリュンヒルトの leit (恥辱) はこうしてグンテル王の leit (恥辱) をも呼び起こし、再度ジーフリトに援助をあおぐ。またもやジーフリトの隠れ蓑による秘策で、ひとまず事態は表面的には落ち着きを取り戻して、ジーフリト夫妻は故国へと帰るのであるが、しかし、奥深いところではすでにのちの悲劇の種がまかれていたのである。全面的にジーフリトの援助を必要とするグンテル王の求婚は、最初から最後まで秘策に満ちていて、前編の悲劇はこうして人の目に見えないところで秘策によって展開されてゆくのである。

Ⅲ. リュエデゲールの奉仕 —— 誠実な誓約 ——

このように二重の像でグンテル王に仕えている前編のジーフリトに対して、後編のリュエデゲールは徹頭徹尾宮廷的騎士としてエッツェル王に仕えていると言える。リュエデゲールが全く宮廷的であるということは、ジーフリトが四名で武者修業の体で(341, 1) イースラントに出かけたのに対して、リュエデゲールは豪華な衣裳を身につけた五百名の派手やかな武士をひきつれて行く(1155)ことから明白である。ジーフリトの旅が本質的には古代ゲルマン的な英雄の旅(Reckenfahrt)であるとすれば、リュエデゲールのそれは中世騎士の宮廷への旅(Hoverreise)であると言えよう。ブルゴントの国ウォルムスに到着して、悩み多きクリエムヒルトが使者との対面を拒むことをしなかったのも、この使者リュエデゲールの宮廷的徳目のゆえであり、そのことを彼女も明らかにしている。

<<Daz enwil ich niht versprechen>>, sprach daz vil edel wîp,
 <<ich ensehe gerne den Rüedegêres lîp
 durch sîne manige tugende. wêr' er niht her gesant,
 swerz ander boten wære, dem wêr' ich immer unbekant.>> (1221)

「それまで拒もうとは思いません、」高貴な妃が答えた、
 「リュエデゲールは、あまたの徳を積んだ人ゆえ、
 よろこんで会いましょう。もしほかの人が使者としてきたのなら、
 私は決して対面などしようとは思わないけれど。」

こうしてひたすら悲しみの念(jâmer, 1228, 2)に閉ざされていたクリエムヒルトに対面を許されたリュエデゲールは、彼女の手ひどい心の痛み(starken sêr, 1233, 2)を聞かされると、誠実な気持ちで彼女を慰めてこう言う。

<<Waz mac ergetzen leides>>, sprach der vil küene man,
 <<wan friuntliche liebe, swer die kan begân,
 unt der dan einen kiuaset der im ze rehte kumt?
 vor herzenlicher leide niht sô græz lîchen frumt. (1234)

Und geruochet ir ze minnen den edeln herren mîn,
 zwelf vil rîcher krône sult ir gewaltec sîn.
 dar zuo gît iu mîn herre wol drîzec fürsten lant,
 diu elliu hat betwungen sîn vil ellenthaftiu hant.>> (1235)

「心の痛みをいやすものとは」と、^{かみい}敢為なる男子がいった。

「優しい愛情のほかにはございません。ご自分にふさわしい方を選んで、その愛情を得ることさえできますれば。心の痛手には、これにまさる良薬とてないのでございます。

もしあなたが私の貴い主君と契りをお結びになりましたら、十二の豪華な王冠を手にお入れなさいます。なおその上にわが主君は、その豪勇をもって征服なされた無慮三十の国々をも、あなた様にお贈りなさるのでございます。」

ジーフリトの交渉は三種競技という動的な冒険的交渉であったが、リュエデゲールの場合には全く静的な説得であり、宮廷的交渉である。クリエムヒルトの堅固な決心を和らげ曲げさせたのも、結局のところ、翌朝再度対面した際リュエデゲールが真心から誓った宮廷的な誓言である。彼女の意志の固いことを悟ったリュエデゲールは、ついにいつまでも彼女に仕えることを誓うのである。

Er sprach zer küneginne: <<lat iuwer weinen sîn.
ob ir zen Hiunen hêtet niemen danne mîn,
getriuwer mîner mäge, und ouch der mînen man,
er müeses sêr' engelten, unt het iu iemen iht getân.>> (1256)

彼は妃にいった、「お嘆きはおやめ下さいまし。
あなた様がフン族の国で、よしや私と、私の一族と、
私の郎党とのほかに一人の家来をもお持ちになりませんでも、
誰かがあなた様に害を加えたら、手痛い仕返しをして差し上げます。」

リュエデゲールのこの言葉にクリエムヒルトの心は軽くなって、そのあかしとしての誓いを要求する。

si sprach:<< sô swert mir eide, swaz mir iemen getuot,
daz ir sît der nêhste, der bûeze mîniu leit.>> (1257,2-3)

「では誓いをたててもらいましょう。誰ぞが私に害を加えたら、
皆に先んじてまずおん身が私の恨みを晴らして下さると。」

こうして辺境伯リュエデゲールは、すべての家来たちもろとも、いつまでも真心から彼女に仕えること、そしてエッツェル王の国の勇士たちも、彼女の名誉を守るためには、決し

て何事をも辞しはせぬことを固く誓った(1258)が、このリュエデゲールの誠実な誓いは、前編でグンテル王とジーフリトとの間で交わされた誓い(335)、すなわち、ジーフリトがブリュンヒルトの前で口にする「グンテル王はジーフリトの主君である」(386,3; 420,4)という契約と明らかな対応関係にある⁶⁾と言ってもよいであろう。ジーフリトの誓約によって前編の悲劇がそののちに展開してゆくように、後編でも同様にこのリュエデゲールの誓約によって悲劇が展開してゆくからである。クリエムヒルトの結婚の決意の中には、すなわち、はっきりと復讐の意図が読み取られるのである。

Do gedahte diu getriuwe: << sî t ich vriunde hân
alsô vil gewinnen, sô sol ich reden lân
die liute, swaz si wellen, ich jâmerhaftez wîp.
waz ob noch wirt errochen des mînen lieben mannes lîp?>> (1259)

Si gedahte:<< sî t daz Etzel der recken hat sô vil,
sol ich den gebieten, sô tuon ich, swaz ich wil.
er ist ouch wol sô rîche, daz ich ze gebene hân.
mich hat der leidege Hagene mînes guotes âne getân.>> (1260)

貞節な妃は考えた、「私はみじめな女だけれど、
こんなにたくさんの味方を手に入れた以上、
世の中の人にはなんとでも言いたいように言わせておこう。
いとしい夫の復讐ができさえすれば、そんなことは何であろうか。」

彼女は思った、「エッツェル王はあまたの武士を擁しているのだから、
彼らを支配することができれば何事でも思うようになる。
また彼は富貴の身ゆえ、私は施すこともできよう。
私の財宝は憎いハゲネが奪い去ったのだ。」

結婚の決意の瞬間クリエムヒルトは突如として、愛しい夫の死を悼む愛らしい宮廷的貴婦人から、恐ろしい復讐魔へと変身したのである。ブリュンヒルトの結婚は彼女の力の減退を意味していたのに対して、クリエムヒルトの場合は逆に権力の増大を意味している。ジーフリトの超人的な力によって婚礼の旅をいわば「強いられ」て、しとやかな作法を守って、自分の国を立ち出でた(526)ブリュンヒルトとは全く対照的に、リュエデゲールの誠

6) Vgl. Josef Szöverffy : Das Nibelungenlied. Strukturelle Beobachtungen und Zeitgeschichte. Wirkendes Wort 15, 1965. S.236.

実な誓約によって決心させられたクリエムヒルトの旅は、逆に全く古代ゲルマン的である。なるほど、表面的には華やかな結婚の祝宴が繰り広げられるが、クリエムヒルトの心の中では苦しみ(leit)が満ちていたのであり、そのことは次の詩節からも明確である。

Wie si ze Rîne sæze, si gedaht' ane daz,
bî ir edelen manne; ir ougen wurden naz.
si hetes vaste hæle, deiz iemen kunde sehen. (1371,1-3)

ラインにおいて気高い夫とともにくらしただけの事を想い起こして、王妃の眼は涙にぬれた。しかし彼女はそれを固く秘していたので、だれにも気づかれることはなかった。

ブリュンヒルトの涙は他人の目に見られたのに対して、クリエムヒルトの涙は逆に固く秘められており、それだけにクリエムヒルトの復讐の意欲のほどが窺える。婚礼の旅の華やかさとクリエムヒルトの心の中の暗さとが著しく対照的であり、後編の筋はこのようにだんだんと雲行きがあやしくなっていくのである。

このようなクリエムヒルトのいわば古代ゲルマン的なものへの旅の中にあって、クリエムヒルトの暗い心と著しい対照をなして、明るい光を投げかけているのが、リュエデゲールの誠実な心からの案内と宮廷的なもてなしである。婚礼の旅の途中、リュエデゲールは自らの領地ベッヒェラーレンで丁重なもてなしをするのである。ジーフリトと全く対照的な奉仕であることが理解できようが、しかし、両者いずれの援助も、ともに契約あるいは誓いといったものが問題となっていて、それがのちのそれぞれの悲劇の原因となる点では共通しているのである。

..

IV. 両王妃の招待 —— プリュンヒルトとクリエムヒルト ——

前編における二組の結婚式及び後編における再婚のあとは、なるほど一見幸せて静かな日々が続いているかのように見えるが、両王妃の心の中では常に容易ならぬものが吹き荒れていたことは事実であり、その悲劇への兆しは、果たして、いずれの場合にもまず王妃による饗宴への招待という形で表面に出てくる。この二つの招待に関しても、前編と後編とで明らかな二重構造をなしていると言えよう。

まずプリュンヒルトの場合、招待の本来の動機は何なのか、それについてはテキストにおいて明確に語られている。

Nu gedaht' ouch alle zîte daz Guntheres wîp:
<<wie treit et alsô hōhe vrou Kriemhilt den lîp?
nu ist doch unser eigen Sî frit ir man:
er hat uns nu vil lange lûtzet dienste getân.>> (724)

しかるに、グンテルの妃は始終こう考えていた、
「妃クリエムヒルトがあんなに気位の高いのは、一体どうしたわけであろう。
夫のジーフリトは私たちの臣下であるのに、
もう久しいこと宮廷に伺候もしていないではないか」と。

この考えを彼女は胸中に抱いたまま、口には出さなかったが、彼らが彼女に疎遠に打過ぎて、ジーフリトの国からいっこう出仕もしないことは、プリュンヒルトにしてみれば面白からぬこと (leit, 725, 2) であった。以前のような強い「力」をもはや持ち合わせておらず、地位という表面的なものに固執するプリュンヒルトは、ジーフリトに伺候させたいというのが本来の動機である。国王グンテルにも彼女の心のうちを打明けて話してもみた (726, 3) が、応じてくれないので、ついには虚偽を並べ立ててこう言う。

Si sprach: <<vil lieber herre, durch den willen mîn
sô hilf mir, daz Sî frit unt ouch diu swester dîn
komen zuo disem lande, daz wir si hie gesehen.
sone kunde mir zwære nimmer lieber geschehen. (729)

Dîner swester zûhte unt ir wol gezogener muot,
swenne ich dar an gedenke, wie sampfte mir daz tuot,
wie wir ensamt sâzen, do ich êrste wart dîn wîp!
si mac mit êren minnen des kûenen Sîfrides lîp.>> (730)

妃がいった、「愛^{いと}しい王様、私のために、
ジーフリトとお妹君とがこの国へきて、私たちと対面できますよう、
お力をかしては下さいませんか。そうなれば、
私にとってこんな嬉しいことはございません。

お妹君の淑^{しとや}かな物腰、躰^{たて}けのよいお心ばえ、
それにまた私があなたの妻となりましたころ、あの方と一緒に
坐^まったことなどを思い起こすと、どんなに和やかな気がするでしょう。
あの方は勇士ジーフリトの妻として立派な方です。」

以前結婚式の宴の席で一緒に坐ったとき、プリュンヒルトは、和やかな気がしていたどころか、悲しい(leit, 618, 2; 620, 2)ほどであったことを考えると、このプリュンヒルトの言葉の中には悪意が潜んでいることがわかる。彼女の真意は別のところにあったことを当然のことながらグンテル王は感じ取ることができた筈であるが、彼女があくまでもせがむので、ついに国王は饗宴に招待するという名目で使者ゲーレを遣わす決心をする (vgl. 735; 736)。使者は悪意に満ちたプリュンヒルトの伝言をもってジーフリトの国へ出かけてゆくのである。

一方、後編におけるクリエムヒルトの場合にも、招待の動機はプリュンヒルトと同様、別のところにある。クリエムヒルトはフン族の国で大いなる誉れを担ってはいたが、故郷で我が身に加えられた悩み(leit, 1391, 4)を忘れることはできなかったのである。彼女がハゲネに復讐の念を抱いていたことは、テキストにおいても明確に読み取られうる。

Si gedaht' ouch maniger  ren von Nibelunge lant,
der si d  was gewaltic, unt die ir Hagenen hant
mit Sifrides t de hete gar benomen,
ob im daz noch immer von ir ze leide m hte komen. (1392)

Des willen in ir herzen kom si vil selten abe.
si gedahte:<<ich bin s  r che unt h n s  gr ze habe,
daz ich m nen v nden gef ege noch ein leit.
des w re et ich von Tronege Hagen gerne bereit.>> (1396)

彼女はかつてニーベルンゲンの国で自分が有しており、
ジーフリトの死とともにハゲネから奪われた
あまたの栄華のことを考えるとともに、その恨みを今でもなお
彼に対して報いることができやしないかと考えたのである。

復仇の念は彼女の胸から去ることとはなかった。

彼女は思った、「私の権勢と、この大きな富とをもってすれば、
憎い人たちに目にもの見せるに十分だ。

なんとかトロネゲのハゲネに思い知らせてやりたいものだ。」

ハゲネが近くにさえいたら、愛しい夫の仇を報いることができる(1397, 2-3)のだが、それはしかし叶わぬこと(1397, 4)である。そこで彼女は自分の一族をフン族の国に呼び寄せることを、優しい気持ちで許してくれるように、国王エッツェルに願い出るのである。クリエムヒルトも、プリュンヒルトの場合と同様、虚偽を並べ立ててこう言う。

Dō sprach diu küneginne: <<iu ist daz wol geseit,
ich han vil höher mäge; dar umbe ist mir sō leit,
daz mich die sō selten ruochent hie gesehen.
ich hœre mīn die liute niwan für ellende jehen.>> (1403)

そこで王妃がいった、「あなたもよくご承知のことですが、

私には身分のよい親族がおるのでございます。

それがめったに私を訪ねてくれないのを悲しく存じます。

世間の人が私を風来坊のように取沙汰していると聞きますので。」

「風来坊」(ellende, 1403, 4)どころか、クリエムヒルトはフン族の国で大いなる榮譽を担っていた——この限りでは、侮辱を受けたプリュンヒルトとは正反対である——という事実を考え合わせると、彼女の言葉の中にも、プリュンヒルトの場合と同様、虚偽が混ざっていることが容易に理解できよう。クリエムヒルトが悪い企みを抱いている(1399)とはつゆほども知らない——この点でグンテル王とは異なる——エッツェル王は、ただちに妻の願いを受け入れて、客人たちを饗宴に招待すべく、ブルゴントの国へ使者スウェンメリーンとウェルベルを遣わす(1408)のである。使者たちは、前編のプリュンヒルトの場合と同様、クリエムヒルトの悪意に満ちた伝言をもって出かけてゆくのであり、この点でも前編と後編とは対をなしていると言えよう。

このように両王妃の leit はいずれも秘められており、これまで勇士たちから欺かれてきた(クリエムヒルトについては後述)両王妃は、今や逆に欺く側にあるのである。そのように秘められた王妃の leit に全く気づいていないという点でも、ジーフリトとリュエデゲールは前編と後編で対応関係にあるのである。

まずジーフリトがプリュンヒルトの真意に気づいていないということは、彼が快く招待に応じた(vgl. 758-9) ことから明らかである。ジーフリトは何の災いを予感することも

なく、王妃とともに沢山の素晴らしい衣裳を馬に積んで(778) 歓楽の期待される土地に向かって馬を進める(779, 3) のである。ウォルムスに到着した際にも、ジーフリトは、王妃とともに華やかに (mit vil grozen  ren, 791, 1) 出迎えられ、丁重なる歓待(787, 2-3; 791, 4)を受けたのであるが、しかし、華やかな饗宴の日々が続くうち、プリュンヒルトの leit が徐々にあらわとなってくるのである。

このように前編では招待の旅が容易に決定され、旅そのものも平穩のうちに終わるが、後編の場合にはそれとは逆に重臣ハゲネの猛反対で激しい議論が飛び交い、結局ハゲネが王弟ゲールノート(1462)とギーゼルヘル(1463)に侮辱されたことから決定されたブルゴント族の旅立ちは、重々しい武装を整えて(1471)の出発であり、旅の途上でもさまざまな苦難が待ち受けているのである⁷⁾。このような並々ならぬ旅立ちであるにもかかわらず、旅の途上で一族を歓待するベツヒェラーレンの辺境伯リュエデゲールは、ジーフリトと同様、何の災いを予感していない。それどころかリュエデゲールは、宿舎の依頼を受けたとき、口元に微笑を浮かべてこう答える。

<<nu wol mich dirre m re, daz die k nige h r
geruochent m iner dienste, der wirt in niht verseit.
koment si mir ze h se, des bin ich vro unt gemeit.>> (1646, 2-4)

「これは嬉しいお知らせです、貴い王たちが私を
お役に立てて下さるとは。辞退などはいたしません。
皆様が私の館^{やかた}にご入来^{じやらい}となったら、欣喜雀躍^{さんぎしゃくやく}いたします。」

リュエデゲールは、ディエトリーヒ(vgl. 1718; 1723; 1724)とは異なって、全く遺憾なこと
と思うこともなく、一行を心から歓迎する。勇士らが、これにまさるもてなしをうけた例
はないであろう(1668; 1671) ことは随所に語られている。歓迎したのみか、息女をギーゼ

7)このため前編の旅はほんの十数詩節(778-88)で済まされているのに対して、後編の旅は
実に二百詩節以上(1506-1717) も費やされて、こと細かに語られている。この点でも前
編と後編とは著しい対照をなしていると言えようか。ともかく、詩人の関心は、前編に
おいてはすでにウォルムスでの両王妃の口論に向けられているのに対して、後編では出
発前から嵐が吹き荒れているブルゴント族の旅の様子、すなわち、ブルゴント族がいか
にして運命に向かって突き進んで行ったか、その過程に向けられている。前編でジーフ
リトが旅立つ国は今やニーベルンゲン国(778, 3) と呼ばれており、同様に後編でも鎖鎧
を身につけて出かけるブルゴント族はニーベルンゲン族(1523, 1; 1526; 1527)と呼ばれて
いる。前編と後編におけるこれらの旅は、全く対照的であるとはいえ、いずれもニーベ
ルンゲン族の旅であり、破滅への旅であると言えよう。

ルヘルと婚約までさせてしまう。引出物をたっぷりと贈ったのみか、さらには旅路の案内をしてフン族の国まで出かけてしまうのである。フン族の国に到着したときも、ハゲネとクリエムヒルトとが最初から激しく対立している(1737-46) ことにももちろん気づくことなく、リュエデゲールはエッツェル王にこう言う。

<<ir muget si sehen gerne; ir triuwe diu ist guot,
der mîner vrouwen mâge sô schône kunnen pflegen.
si bringent iu ze hûse vil manegen wêtlîchen degen.>> (1815,2-4)

「王様には、お客人を^{よろこ}び欣んでお迎えになられます。
お妃様のお身内の方々は、厚い真心を^{いであ}いだいておられ、
この館^{やかた}へも^{いでたち}扮装麗しい武士をあまたお召連れになりました。」

武士をあまた連れてきたのも一族の厚い真心だと理解している。クリエムヒルトの真意に気づいたとき、リュエデゲールはすでに窮地に立たされていたのであるが、しかし、それをリュエデゲールの落度だと咎めることができようか。プリュンヒルトの leit に気づいていないジーフリトにも同じことが言えよう。悲劇はいかんともしがたい運命の力によって展開されてゆくのであり、その中で彼らはただ彼らの誠実を尽くすのみである。彼らの行為が誠実であればあるほど、のちに起こる彼らの悲劇はそれだけ一層深まってゆく結果となるのである。

V. ジーフリトの暗殺 —— triuwe な勇士 ——

ジーフリトの暗殺は結局のところ、イースラントでプリュンヒルトに向かって言ったあの契約上の言葉(420-2)に起因している。高貴なる二人の王妃が饗宴の席でそれぞれの夫の自慢話を始めた(819-21)とき、クリエムヒルトは自分の夫がいろいろな点で大きな誉れを得ている(819,3)ことを持ち出せば、プリュンヒルトは、初めて二人に直面した折にジーフリトが自分で、自分はグンテル王の家来であると言った(820-1)ことを取り上げて反論するからである。両王妃の口論はこの「臣下」(eigen, 821, 3)の問題をめぐる展開し、瞋恚の炎(826)は広大な聖堂の前で燃え上がる。結局、プリュンヒルトは、「力」による征服を意味している指輪と帯とを見せつけられて、ついに泣き出してしまう。これほどひどい恥辱はほかにはないのである。彼女が泣いているのを見て、わけを尋ねたハゲネは、子細を聞くと、即座に、それはクリエムヒルトの夫が償わなければならないと誓って(864)、ジーフリトの命をとろうと謀る(865)。グンテル王が諫めても、ハゲネはしきりに暗殺を主張し、始終グンテル王を唆かして(870)、ついには秘策を打ち明けて主君をも説き伏せるのである。

ジーフリトは、しかし、その秘策に気づいていない。不実なブルゴント一族に対してジーフリトは逆に誠実な客人として描かれていると言えよう。グンテル王や家来の人々が沈んでいるところを見いだしたジーフリトは、以前と同じように、誠実な心から援助を申し出る(883)。すなわち、リウデガストとリウデゲールとが再度戦いを挑んでいるという事情を聞いて、それがハゲネの策略だとも知らずに、戦いに出かけることを約束する。しかし、その誠実が逆手にとられて裏切られることとなるのである。

裏切られるのはジーフリトのみならず、クリエムヒルトもまた同様である。否、プリュンヒルトと同様、まずクリエムヒルトが欺かれる必要があるのである。ハゲネはクリエムヒルトのところへ出かけて、夫の出陣のことを心配する彼女の心を巧みに利用してジーフリトの弱点を聞き出すために、偽りの援助を約束する。

<<Vrouwe>>, sprach dō Hagene, <<unt habt ir des wān,
daz man in mūge versnīden, ir sult mich wizzen lān,
mit wie getānen listē ich daz sol undertstēn.
ich wil im ze huote immer rīten unde gēn.>> (897)

「お妃様、」ハゲネがいった、「もしもあの方が何者かに
傷でも負わされることをご心配なさるなら、
どういう工夫でそれを防いだらよいかお聞かせ下さいまし。
私は馬上でもまた徒歩の場合でも、いつもご守護いたしましょう。」

かくて彼女はハゲネの誠実を信じて、止せばいいのに、ジーフリトの打明け話、すなわち、

ジーフリトがかつて山の麓で竜を退治した折、竜の血を浴びたときのことを話したのである。

<<Ich meld iz ûf genade, vil lieber vriunt, dir,
daz du dîne triuwe behaltest ane mir.
dâ man dâ mac verhouwen den mînen lieben man,
daz lâz' ich dich hœren; deist ûf genade getân. (901)

Dô von des trachen wunden vlôz daz heize bluot
und sich dar inne badete der küene ritter guot,
dô viel im zwischen die herte ein lindenblat vil breit.
dâ mac man in versnîden: des ist mir sorgen vil bereit.>> (902)

「私は、親愛なハゲネよ、おん身が私に信実を
つくしてくれることを信じて、どこがいとしい夫の急所であるかを
打明けておきましょう。こういうお話をするのも、
ひとえにおん身の信実を信じればこそそのことなのです。

竜の傷口から熱い血潮が流れ出し、
天晴れな勇士がそれをからだに浴びた際、
両方の肩の骨の間に一枚の広い菩提樹の葉がおちてきました。
この場所こそあの人の急所なのです。これが私の心配の種なのです。」

さらにその上、止せばいいのに、戦場でジーフリトのどこを護ればよいかが一目でわかるように、衣裳の上に小さな印を縫いつけておくようにというハゲネの要求にも応じてしまう。クリエムヒルトはこれが夫の身に役立つことと思ったのだが、あに計らんやクリエムヒルトの夫は、これに乗ぜられたのである(905, 2-3)。

ジーフリトの弱点を聞き出したハゲネは、これで戦争に出かけてゆく必要もなくなったので、策略通り、再度贖の使者を遣わせて戦闘中止の知らせを告げさせた上、次の策略として、ジーフリトの意気盛んな心(909, 1-2)をうまくとらえて、戦闘の代わりに森へ狩りをしに出かけることを提案する。不実きわまるハゲネの企らみ(911, 4)にはもちろんジーフリトは気づく由もない。ただクリエムヒルトは、自分がハゲネに打ち明けた話を思い出し、狩りを止めるよう忠告する。すなわち、二匹の猪が野原でジーフリトを追いかけて、草花が朱に染まったという不吉な夢を持ち出して説得する(921-2)が、ジーフリトは依然として一族を信頼しきったままである。

Er sprach:<< mīn triutinne, ich kum in kurzen tagen.
 ine weiz hie niht der liute, die mir iht hazzes tragen.
 alle dīne mäge sint mir gemeine holt,
 ouch hān ich an den degenen hie niht anders versolt.>> (923)

彼がいった、「かわいい妃よ、わしは日ならずして帰ってくる。
 当地でわしに対して敵意を抱くような人たちがいるとは思わぬ。
 そなたの親戚はみなわしに好意をもっている。
 わしとして勇士たちから悪い報いをうけるはずはない。」

再度クリエムヒルトが、二つの山が夫の上に崩れかかるいやな夢を見たことを持ち出して説得する(924)が、ジーフリトは信じきったまま、狩りへと出かけてゆく。このように不吉な夢に基づく妻の忠告にもかかわらず一族を信じきって狩りに出かけてゆくジーフリトは、中世騎士と同時に、運命の力に導かれて破滅へと向かって進んでゆく古代ゲルマンの英雄でもあると言えよう。確かにジーフリトは悲劇的結末の運命を悟ってはいないが、古代ゲルマン的英雄精神がジーフリトをしてその運命に向かって突き進ませるのである。否、運命を自分自身は悟っていないところにジーフリトの悲劇的特質があると言えよう。言い換えれば、ジーフリトの悲劇性はその中世的な triuwe (誠実)の中にこそあるのである。狩りが終わって、泉まで競争して一番にジーフリトが着いた場面でもジーフリトの tugent (作法正しさ)は、明確に語られている。

Die Sifrides tugende waren harte grōz.
 den schilt er leite nider, alda der brunne vloz.
 swie harte sō in durste, der helt doch niene tranc,
 ē daz der kunic getrunke; des sagt er im vil bāesen danc. (978)

ジーフリトはきわめて作法正しい勇士であった。
 彼は泉の流れるほとりに楯をおき、のどの渴きははげしかったけれど、
 国王の飲むまでは決して水を飲もうとはしなかった。
 しかるに国王は彼にひどい報い方をしたのである。

ジーフリトのこの作法正しさ(zūhte, 980, 1)が悪用されたのである。すなわち、グンテル王の飲んだあとで泉の水を飲もうとした⁸⁾ところを、ハゲネが衣裳の上の印をめがけて槍

8)王妃たちは優位をめぐって醜い争いをしたのに対して、ジーフリトとグンテル王は反対に作法正しい振舞いをしている点、対照的で興味深い。

で突き刺すのである。しかも突き刺されたその槍は、ジーフリトが泉までの競走に際して自ら身につけてきた(vgl. 975; 980) ものである。ジーフリトの triuwe もクリエムヒルトの triuwe も、こうして逆手に取られてしまったのである。 triuwe が悪用されたということは、瀕死の手傷を負ったジーフリト自身の口からも明確に聞かれる。

D o sprach der verchwunde: <<ja ir vil bæsen zagen,
was helfent mîniu dienste daz ir mich habet erslagen?
ich was iu ie getriuwe; des ich engolten hân.
ir habt an iuwern mægen leider übele getân. (989)

Die sint dâ von bescholten, swaz ir wirt geborn
her nâch disen zîten. ir habet iuwern zorn
gerochen al ze sêre an dem lîbe mîn.
mit laster ir gescheiden sult von guoten recken sîn.>> (990)

^{ひんし}
瀕死の手傷を負った勇士はいった、「心のまがった卑怯者、
こんなにして殺されるようでは、わしの日頃の心尽くしは
なんの役に立ったか。わしの誠実がこんな報いをうけるとは。
おん身らは遺憾にも一族の名折れとなる所業をしでかした。

これからのち生まれてくるおん身らの^{けんぞく}眷族は、
このために汚名をうけるであろう。おん身らはわしに対し、
その恨みをあまりにむごく報いた。この罪業によっておん身らは、
立派な武士たちから見放されることになる。」

信実のころ(triuwe, 991, 3)を有するものは、彼を悼み嘆いたが、実にこの天晴れな勇士は、それに値したのである(991, 3-4) と詩人も明らかにしているように、ジーフリトの悲劇の特質はその triuwe にあると言ってもよいであろう。本来古代ゲルマン的な英雄であるジーフリトは、こうして中世騎士の徳目の一つである誠実(triuwe)を持ち合わせたきわめて理想的な騎士として滅びてゆくのであり、彼が誠実であればあるほど、それだけ一層彼の死は多くの者から、誰よりもまずクリエムヒルトから悼く嘆かれ、それがさらにのちの後編の悲劇へとつながってゆくのである。

VI. リュエデゲールの最期 —— tugent の父 ——

このように前編においてブリュンヒルトの leit の復讐の犠牲となったのがジーフリトであれば、後編で展開されるクリエムヒルトの leit の復讐において最大の犠牲者となったのは言うまでもなくリュエデゲールである。王妃の leit には気づかずに誠実からその招待の旅に応じたジーフリトと同様、リュエデゲールも王妃の leit に気づくことはなく、真心からブルゴント族を自らの領地で歓待したのみか、息女をギーゼルヘルと婚約させた上、さらに一族をフン族の国へと案内したのであったが、その誠実から出た行為が彼の場合もまた逆に悲劇へと転化してゆくのである。しかし、ジーフリトの triuwe が秘策によって欺かれたのとは異なって、リュエデゲールの triuwe はあからさまな葛藤の中に立たされるのである。両民族の戦いとなってそれを衷心から打嘆くリュエデゲールの悲劇的状況は、罵言を吐きかけられたために殴り殺したフン族の武士に向かって言う言葉においてよく表されている。

<<Hin, du zage mære>>, sprach dō Ruedegēr.
 <<ich han doch genuoge leit unde sēr.
 daz ich hie niht envihte, zwiu wîzest du mir daz?
 j a wære ich den gesten von grōzen schulden gehaz, (2143)

Unde allez daz ich möhte, daz het ich in getan,
 niwan daz ich die recken her gefüeret han.
 j a was ich ir geleite in mînes herren lant;
 des ensol mit in niht strîten mîn vil ellendes hant.>> (2144)

「失せろ、心の曲った卑怯者、」リュエデゲールがいった、
 「わしはあり余るほどの悩みと苦しみをもっているのだ。
 それをこの場で戦わぬなどと、なんで貴様は咎めるのだ。
 わしとてあの客人たちには当然敵意を抱いている。

もしわしがあゝの勇士たちを案内した身でなかったら、
 あの人たちに思うがままの仕打ちをも加えたであろう。
 だが主君の国への案内役を勤めたればこそ、
 残念ながらブルゴント勢と戦うわけにはゆかぬのだ。」

誠実であるがゆえに、リュエデゲールはブルゴント族を相手にして戦うわけにはゆかないのであるが、王妃クリエムヒルトがそこへやって来て、かつての誓いを思い出させると、リュエデゲールは ēre (名誉) と sēle (魂) とを区別してこう言う。

<<Daz ist ane lougen: ich swuor iu, edel wîp,
daz ich durch iuch wâgte ere unde ouch den lîp.
daz ich die sêle vliese, des enhan ich niht gesworn.
zuo dirre hohgezite braht' ich die fürsten wol geborn.>> (2150)

「あなた様に名誉や生命をも捧げるとお誓い申し上げたことは
否みはいたしませぬ、気高いお妃様。しかし魂までも犠牲にするとは
誓いませんでした。私はあの生まれ貴い王様がたを、
自分でこの饗宴にお連れ申したのでございます。」

このように悩むリュエデゲールに対して、クリエムヒルトとエッツェル王が二人して彼の
足もとにひざまづいて嘆願するに及んでは、リュエデゲールの嘆きは頂点に達する。

<<Owê mir gotes armen, daz ich dize gelebet han.
aller mîner êren der muoz ich abe stan,
triuwen unde zûhte, der got an mir gebot.
owê got von himele, daz mîchs niht wendet der töt! (2153)

Swelhez ich nu laze unt daz ander began,
sô han ich bœslîche unde vil übele getan:
laze aber ich si beide, mich schiltet elliu diet.
nu ruoche mich bewîsen, der mir ze lebene geriet.>> (2154)

「ああ、このような目にあうとは、なんと惨めな身であろう。
あらゆる名誉をなげうち、神に授けられた信義も礼節も
捨ててしまわねばならぬとは。天つ神も哀れとおぼせ。
死んでしまったらこうした目にも会うまいに。」

どちらかを捨てて、他の一つを行なっても、私は悪いやつ、
怪しからぬ男といわれましょう。さりとて両方とも捨ててしまえば、
世の人みんなが私を罵るでしょう。
私に生命をあたえ給うたものよ、どうぞ教えを垂れて下さいまし。」

リュエデゲールの悲劇も、結局のところジーフリトと同じように、国王の求婚の際に誓っ
たあの誓言 (1256) に基づいている。リュエデゲールはわが身に痛手と苦悩 (2156) とを

招くことを知っていたので、できることならまず最初にエッツェル王とクリエムヒルトの願いを拒みたく思い、領土も城も返して、「もって生まれた足で、異国へさすらいの旅に出かける」(2157,4)ことを申し出る。しかし、それはリュエデゲールにとって可能ではない。エッツェル王は彼の主君であり、リュエデゲールはその臣下として彼にいつまでも仕える義務があるばかりか、さらにクリエムヒルトに対しては求婚の旅で誓ったあの誓言(1256)があるからである。フン族の国王と王妃は彼を決して自由にさせはしない。それどころか、ますます援助を願い出るのであり、リュエデゲールのこの上もない苦悩(2159-61)に対してクリエムヒルトが無慈悲な要求を続けたとき、リュエデゲールの決意も定まった。もちろん討死の覚悟である。彼は身も魂も賭けることとなった(2166,1)のであり、自らの家来に向かってこう呼びかける。

er sprach:<<ir sult iuch wafen, alle mîne man.
die küenen Burgonden die muoz ich leider bestan.>> (2167,3-4)

彼はいった、「わが勇士の面々、みんな武装をととのえるのだ。
わしは不本意ながら、ブルゴントの勇者たちと戦わねばならぬ。」

しかし、この瞬間リュエデゲールの内から「英雄的なもの」が生じたのであって、自ら破滅へと突き進んで行って、如何にして英雄としての名誉を汚すことなく滅んでみせるかということが、今やリュエデゲールの課題である。英雄的なものは「ある」(sein)のではなく、「成る」(werden)のであって、今や破滅に向かって突き進んでゆくリュエデゲールは宮廷的騎士ではなく、古代ゲルマン的英雄である。以前の宮廷的騎士リュエデゲールが悩み嘆いていたのであり、今や武装して戦いに突入してゆくのは古代ゲルマン的英雄リュエデゲールである。兜をかぶって(2170)、自分の縁者であるブルゴント族のいるところに来ると、リュエデゲールは、交誼を絶つ旨を宣告し(2175)、ついには客人たちと戦うのである。そのリュエデゲールについてこう語られている。

Der vogt von Bechelaren gie wider unde dan,
also der mit ellen in sturme werben kan.
dem tet des tages Rüedeger harte wol gelîch,
daz er ein recke were, vil küene unt ouch vil lobelîch. (2213)

ベッヒェラーレンの領主は、
勇力をもって戦場で功名をたてる者にふさわしく、
あなたこなたと駆けめぐった。実にこの日のリュエデゲールは、
勇敢にして誉れたかい武将たるに恥じない働きぶりを示したのだ。

リュエデゲールは今や、勇力をもって(mit ellen) 戦場を駆けめぐる武将(recke)である。彼は甲冑姿も凛々しく、腕並すぐれた勇者の面目を発揮した(2215)のである。彼が手にした勇士の数は夥しく(vgl. 2215, 2)、それがためブルゴント族の剛勇なゲールノートも、もはや黙って見てはおられぬ状態となり、かつてリュエデゲールから贈られた剣を持って、リュエデゲールと対決する。英雄的な誉れ(e re, 2218, 3)を立てようとする二人は互いに躍りかかり、鋭利な剣の一撃を互いに相手に加える。壮絶な一騎討ちで両者は相果てるのである。ジーフリトが自らの投槍で突き刺されたと同様、リュエデゲールもかつて自らが贈った剣で刺されたのであり、その点共通しているが、しかし、死を予感することもなく騙し討ちにあったジーフリトの最期とは対照的に、リュエデゲールは死を覚悟した勇敢なる戦いで命を落すのである。ジーフリトの死が「他者による暗殺」であったとすれば、リュエデゲールの死は「自己破滅」であると言えよう。とにかく、ジーフリト悲劇の特質は古代ゲルマン的勇士の騎士化にあり、それに対してリュエデゲール悲劇の特質は宮廷的騎士の英雄化にある。ここでニーベルンゲンの詩人は宮廷的なものからいかにして英雄的なものが生じるかを描き出しているのであり、これがすなわち後編の内容とするものであると言ってよいであろう。

しかし、リュエデゲールの死は単なる勇敢な英雄の死ではない。彼は客人たちのところに出かけて戦う前に、本来の宮廷的騎士としての特質にふさわしくなおも贈物をするのである。戦っているうちにフン族から楯を切り裂かれてしまったハゲネは、すなわち、リュエデゲールに対して親称の du で次のように話しかける。

<<Daz des got von himele geruochen wolde,
daz ich schilt sō guoten noch tragen solde,
sō den du hast vor hende, vil edel Rüedegêr!
so bedorfte ich in den stürmen deheiner halsperge mêr.>> (2195)

「いとも気高いリュエデゲール殿、天つ神のみ恵みにより、
今おん身が手にしておられるような立派な楯をわしも持てるようになったら、
どんなに嬉しかろう。そうすればわしは戦場で、
もはやいかなる鎧もつける必要はないのだが。」

この要求は単に物質的な武装のことを意味しているのではない。ハゲネが身を守ることで
できる楯なら、回りに倒れた騎士たちの楯が沢山ある筈だからである。この象徴的な楯の
願い出に対してリュエデゲールもハゲネに du で答える。

<<Vil gerne ich dir were guot mit mînem schilde,
torst' ich dir in bieten vor Kriemhilde.

doch nim du in hin, Hagene, unt trag' in an der hant.
 hey soldest du in füeren heim in der Burgonden lant!>> (2196)

「クリエムヒルト様に^{はばか}憚ることなく差しあげてよろしければ、
 わしは^{よろこ}欣んでおん身にこの楯をご用意していたすであろうが。
 いや、ハゲネ殿、これはおん身に差しあげる、持ってゆかれよ。
 願わくはブルゴントの国へこれを持ち帰られるように。」

リュエデゲールがこのようによろこんでその楯を贈ろうと申しいでたとき、あまたの武士の眼は熱い涙にうるんで見えた(2197, 1-2)。傲岸冷酷な心ざまの男であったハゲネも、リュエデゲールが今や最期の時にのぞんで申しいでた贈物に接しては、さすがに深く心を動かされた(2198, 1-3)のであり、それゆえハゲネは、楯を受け取ると、自分は彼には攻撃をしかけないことを誓うのである。このハゲネの態度はリュエデゲールにその名誉を回復させている⁹⁾と言えよう。最後の生の瞬間においても限りない「徳性」(tugent)を証明して見せたリュエデゲールの死は、詩人も賛嘆しているように、まさに「あらゆる美徳の父」(vater aller tugende, 2202, 4)の死であった。自らの楯を贈与するという気高い心及びそのために剣を放棄するという高貴な心は、ハンス・ナウマンの言葉を借りて言えば、十三世紀初頭の騎士的・キリスト教的基盤においてようやく成長した花であり、この楯の贈与の瞬間は全く宮廷的な瞬間である¹⁰⁾と言えよう。壮絶な戦いがますます激しくなってゆく中であって、リュエデゲールの行為は、全く明るい光を投げかけており、ここにリュエデゲールのこの作品における役割があるのである。

このように理想像として描かれているだけに多くの者から嘆かれ、その死はさらに悲劇を大きくする結果となっている。これまで中立的な態度をとっていたディエトリーヒの参戦もこのリュエデゲールの死がきっかけ(vgl. 2329-32)である。ディエトリーヒの干渉によって戦いも悲劇の頂点に達するのであり、その死によってさらに悲劇が大きくなってゆく点でも、ジーフリトと同じ役割を果たしていると言えよう。ニーベルンゲン悲劇はこうしてジーフリトの暗殺とリュエデゲールの死という二重の悲劇によって展開されてゆくのであり、両者は全体のテーマにとってもなくてはならない人物であることが容易に理解できるのである。

9) Vgl. Friedrich Maurer : Die Einheit des Nibelungenlieds nach Idee und Form. Der Deutschunterricht 5, 1953. S. 35.

10) Hans Naumann : Rüedegers Tod. DtVjs. 10, 1932. S. 399. u. S. 402.

まとめ

以上、結婚と招待という二つの出来事を軸として物語構造をこまかに分析してきたが、全体を一つにまとめてみるならば、巻末の図式V(344頁)のように図式化することができよう。この図式Vからも明らかに確認できることは、『ニーベルンゲンの歌』は前編と後編とが細かな点に至るまで均整のとれた結婚と招待の二重構造をなしており、その中で重要な役割を演じているのが、前編ではジーフリトであり、後編ではリュエデゲールであるということである。しかも、両者は、これまで見てきたように、ともに対照的であり、彼らの活躍とその悲劇はそれぞれ前編と後編の特質でもある。クリエムヒルトとハゲネが二つの伝説を結びつける役割を果たしているならば、ここで考察したジーフリトとリュエデゲールはそれぞれ『ニーベルンゲンの歌』の前編と後編の特徴を決定づけているとも言えるのである。

前編の筋を決定づけているジーフリトは、すなわち、本質的には古代ゲルマンの英雄であり、決定的なところでは彼の超人的な力が威力を発揮する。ジーフリトはこの作品において古代ゲルマン的雰囲気を作り出していると言える。グンテル王の求婚の旅においても、ジーフリトはブリュンヒルトのことやイスラントへの航路を心得ている古代ゲルマンの英雄なのである。しかし、ジーフリトはその際グンテル王との契約によって国王に「仕える」中世騎士になったとも言わなければならない。以後、ジーフリトは二重の像でグンテル王に仕えるが、この古代ゲルマン的な要素と中世騎士的な要素との融合は、上で考察してきたように、至るところに見いだされる。招待の旅でウォルムスへ出かけ、狩りを行うことになったときにも、この二つの要素の融合は認められる。すなわち、妻の不吉な夢の忠告にもかかわらず、狩りに出かけてゆくジーフリトは、運命に向かって突き進む古代ゲルマンの勇士であると同時に、一族を信頼しきった誠実な中世騎士でもあるのである。まさにこの「古代ゲルマン的勇士の騎士化」という点にジーフリト悲劇の特質があると言える。従って、古代ゲルマン的なものと中世騎士的なものとの融合は、決して「裂け目」でも「矛盾」¹¹⁾でもなく、むしろこの作品におけるジーフリト像の特質であり、また秘策に満ちた前編の内容の特質でもあるのである。

この前編のジーフリトの二重の像に対して、後編のリュエデゲールは徹頭徹尾宮廷的である。求婚の旅の際のエッツェル王との主従関係においても誠実であり、悲しみに暮れるクリエムヒルトが使者としての彼に直面する気になったのも、彼の誠実ゆえであれば、またエッツェル王と結婚する気になったのも彼の誠実な誓約のためである。その彼の誠実さとは逆行するようにクリエムヒルトの結婚の決意によって後編の筋はだんだんと雲行きがあやしくなっていくだけに、リュエデゲールのこのようなとりわけ誠実な態度は、宮廷的な明るい雰囲気を作り出しており、その点でもこの作品において重要な役割を果たしているのである。激しい議論の末に決定された招待の旅においても、彼の誠実はもてなしとな

11) Vgl. Helmut de Boor : a. a. O., Erläuterung S.16.

って展開されるが、この誠実がまた彼の悲劇の原因ともなる。しかし、リュエデゲールはのがれられないその苦境の中からいかにして勇猛果敢な英雄として滅んでみせるか、言い換えれば、死によっていかに生きるかを感動的に示しているのである。最後の瞬間になって初めて示したこの「宮廷的騎士の英雄化」にリュエデゲール悲劇の特質があると言えるが、これはまたブルゴント族滅亡、すなわち、騎士的なものから英雄的なものがいかに生じ、そしていかに滅びるかを高らかに歌い上げている後編の内容の特質でもあるのである。

このように両編の赴きは「古代ゲルマン的英雄の騎士化」と「宮廷的騎士の英雄化」という点でも全く対照的であるが、しかし、いずれにおいてもそれぞれの方法で古代ゲルマン的な要素と中世騎士的な要素とが見事な融合を示しながら、前編ではブリュンヒルトの leit（恥辱）の復讐が、そして後編ではクリエムヒルトの leit（悲しみ）の復讐が、同じ結婚と招待という構造の中で繰り返し語られてゆくのであり、全編のテーマであるニーベルンゲン族全滅の悲劇、すなわち、ニーベルンゲンの財宝を所有している一族全滅の悲劇も、その対照的な二重構造によってさらに一段と高められ強められてゆく結果ともなっているのである。

第九章 『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』 における leit の特質

以上のように見てくると、『ニーベルンゲンの歌』は二つの leit (恥辱、悲しみ) の復讐の物語であると言えよう。前編ではプリュンヒルトの leit の復讐が、そして後編ではクリエムヒルトの leit の復讐が、同じ結婚と招待という二重構造の中で繰り返して語られているのである。この二つの leit はいずれも rechnen (復讐) を引き起こすという点において共通しているが、しかし、それらは本質的なところでは異なっていると言わなければならない。クリエムヒルトとプリュンヒルトが性格等の点で対比的に描かれていることは、上でも何度か指摘してきたが、この leit に関しても両者はもちろん著しいコントラストをなしているのである。この二つの leit の違い、つまりはプリュンヒルトの leit との比較におけるクリエムヒルトの leit の特質は、この作品の本質に触れるものであることは確かである。このクリエムヒルトの leit の特質を考察するのが本章の課題であるが、その前にまず、leit とはそもそもどういう意味を持つ単語なのであろうか。この作品において leit という単語ほど頻繁に用いられているものはないが、しかし、その意味は『哀歌』とは異なって実に多種多様である。

この中高ドイツ語の leit を新高ドイツ語の Leid と同一視してはならないことは言うまでもないことである。フリードリヒ・マウラー(Friedrich Maurer)は、Leid (悲しみ)、Betrübnis (憂愁) のほかに schmerzliches Verlangen (切ない欲求) しか挙げていないカール・バルチュ (Karl Bartsch) の不十分な訳語¹⁾に対して、さらに Sorge (心配) と Beleidigung (侮辱)、Entehrung (恥辱) を加えてこの中高ドイツ語の leit の訳語を次のように分類している²⁾。

1. Leit = Sorge (心配)、すなわち、trübe Voraussicht der Möglichkeit eines Unglücks, des drohenden Verlusts (不幸が起こり、何かを失いそうな陰鬱な予感)
2. Leit = Schmerz (痛み) a) Körperlicher Schmerz (肉体的な痛み)
b) Seelischer Schmerz (精神的な痛み)
3. Leit = schmerzliches Verlangen (切ない欲求)、従って、Sehnsucht (憧れ)

1) Vgl. Karl Bartsch: Der Nibelunge Not, II, 2. Hildesheim (Nachdruck) 1966. S. 194.

2) Friedrich Maurer: Leid. Studien zur Bedeutungs- und Problemgeschichte, besonders in den großen Epen der staufischen Zeit. Bern/München 1951. vierte Auflage 1969. S. 13-38.

4. Leit = angetanes Unrecht (加えられた不正)、Beleidigung (侮辱)、Entehrung (恥辱)

leit という語はこのような多種多様な意味に用いられているのであるが、この中で特に問題となるのは、第四番目の leit である。プリュンヒルトの leit は確かに王妃としての「侮辱」(Beleidigung, Entehrung)として常にもっぱら第四番目の意味に用いられていると解して差し支えはないが、しかし、クリエムヒルトの leit についてはどうであろうか。クリエムヒルトの leit は、プリュンヒルトの leit とは対照的に、状況に応じて実にさまざまな意味に用いられているが、問題は夫ジーフリトを殺害されたのちに恐ろしい行動へと駆り立てるクリエムヒルトの leit である。マウラーは、クリエムヒルトの行動においては「leit による *ere* (名誉) の毀損」(verletzte Ehre durch angetanes Leid)³⁾という観念が決定的な役割を演じていて、復讐はまさにこの侮辱された *ere* の回復を求めての行動であると解し、さらにニーベルンゲンの財宝をめぐる問題にもこの leit と *ere* の観念を適用している⁴⁾。これに対してヴェルナー・シュレーダー(Werner Schröder)は、財宝はジーフリトの「^{さぬさぬ}後朝の引出物」(morgengabe)であり、クリエムヒルトにとってまさにジーフリトその人の象徴である⁵⁾と説く。すなわち、シュレーダーによれば、クリエムヒルトの本来の leit は愛しい夫^{いと}ジーフリトの死による「悲しみ」であり、そこに「屈辱」(Beleidigung)を見ることは適切ではないというのである。

そこで本章では、この二人の見解を手がかりとして、『ニーベルンゲンの歌』における leit⁶⁾、なかでもクリエムヒルトの leit、ないしそれと密接な結びつきを示す leit、並びにその同類語を順に考察しながら、leit という語の整理を試みてみようとするものである。その際是非とも『哀歌』における leit と比較しておく必要がある。『哀歌』における leit の特質をも織り込みながら比較検討することによって、『ニーベルンゲンの歌』におけるクリエムヒルトの leit の特質を探り出すことにしたい。

I. 『ニーベルンゲンの歌』における leit の特質

1. ミンネ体験 —— lieb と leit ——

『ニーベルンゲンの歌』におけるクリエムヒルトの leit の特質を考察するにあたって、

3) Vgl. ebd. S. 30.

4) Vgl. ebd. S. 21-2.

5) Vgl. Werner Schröder: Die Tragödie Kriemhilds im Nibelungenlied. ZdfA. 90, 1960/61. S. 41-80 u. 123-160.

6) ここで言う leit とは、中性名詞 leit 及び女性名詞 leideのみならず、動詞 leiden、形容詞 leit 並びに副詞 leideを含めたものを意味し、本章ではこれら全てのものを考察の対象としたい。『哀歌』に関しても同様である。

まずその leit の前提、すなわち、ジーフリトとクリエムヒルトとの愛について述べなければならない。叙事詩本来の筋は、これまでついで「心の悩み」(herzen leit, 44, 1) というものを知らなかったニーデルラントの王子ジーフリトが、ブルゴントの国に世にも美しい乙女がいるという噂を聞いて(44, 2-3)、ミンネを求めての旅へと出かけてゆくことでもって動き始めるのである。しかも彼が求めたのは「位高き乙女の愛」(hohe minne, 47, 1; 131, 4)であり、以下ジーフリトとクリエムヒルトとの愛の物語はミンネザング風に刻み込まれた感情と思考において展開し、この高きミンネを得るためにはジーフリトは数多の「労苦」(arbeit, 137, 4)をなめねばならない。

Sus wont' er bi den herren, daz ist alwar,
in Guntheres lande volleclîch ein jâr,
daz er die minneclîchen die zîte niene gesach,
dâ von im sît vil liebe und ouch vil leide gescach. (138)

かくして彼はグンテルの国に、王たちとともにまる一年を過ごしたが、そのあいだかの愛らしい乙女と会う機会は一度としてなかった。彼女のためにその後彼は幾多の幸福(liebe)と、また苦難(leide)をも味わわなければならなかった。

まずその第一の「労苦」(arbeit, 137, 4)及び「苦難」(leide, 138, 4)とは、ザクセン勢とデンマルク勢に対する戦いであり、この戦いにジーフリトが自ら進んで出かけて行ったのも、のちの第二の「労苦」であるイースラントへの旅のときと同じように⁷⁾、ただ一人の愛らしい乙女の愛を得るためであった。一方、クリエムヒルトの方もその戦いの間、心から愛する人(224, 4)のことを心配していた。その戦闘での大勝利を収めた結果についての使者たちの報告の中でも、彼女が特に興味を持ったのはジーフリトの行為についてである。

Ir scænez antlütze daz wart (vor liebe, C) rōsenrōt,
do mit liebe was gesceiden âz der grōzen nōt
der wætlîche recke, Si vrit der junge man. (241, 1-3)

あの若く凛々^{りり}しい王子ジーフリトが、嬉しくも(mit liebe)戦争の苦難からまぬがれたということを聞いたとき、姫の麗しい顔容は(飲^{かん}びの^{はせ}あまり、vor liebe 写本C)ばら色に染まった。

7) 333, 388 詩節のほかには535, 536 詩節も参照のこと。ちなみに、ジーフリトの行動の動機がクリエムヒルトのためであったということを示すものとして、その他に 258詩節 4行目、260詩節 1-2行目、304詩節をも参照のこと。

ジーフリトは彼女の心にとっては自分自身の兄弟たちよりももっと大きな存在だったのである。こうして戦いで手柄を立てることによって、ジーフリトはその祝宴でクリエムヒルトに会える機会を得る。しかし、クリエムヒルトの初めての出現は、ジーフリトを甘い困惑へと陥らせる。

Sivride dem herren wart beide lieb unde leit. (284,4)

王子ジーフリトとしては、哀^{こもこも}歎交々いたる思い(lieb und leit) であった。

クリエムヒルトの美しさに直面してミンネザング風の「妄想」(wan, B285,2)⁸⁾が彼の心の中に起こるのである。この場面においては特に抒情的な要素が感じ取られ、当時のミンネザングの影響が考えられてよいであろう⁹⁾。しかし、そうしているうちに、ブルゴントの王弟ゲールノートの提言(288-9)で、——政治的な意図がないわけではなかったが——ついに初めての出会いの挨拶が許される。今こそウオテの美しい王女に会えるのだと思うと、ジーフリトの胸は「曇なき歎び」(lieb ane leit, 291,2)に溢れてきた。美しい姫の挨拶を聞いて、彼の胸は高鳴りを覚えた(292,4)。さらにジーフリトは彼女から口づけを受けた。それは彼にとってこの世でまたとあるまじき「歎び」(liebe, 297,4)であった。そこで早速口を開いたのは、先の戦いでジーフリトによって人質として捕えられていたデンマルクの国王である。

<<diss vil hohen gruozes lît maneger ungesund
(des ich vil wol enpfinde) von Sivrides hant.>>(298,2-3)

「こんな特別の恩寵^{おんちょう}があればこそ、ジーフリト殿の手で、
(わしにも覚えがあるが)あまたの勇士が傷を負わされたのだ。」

ミンネの力の恐ろしさを示した詩節と言えよう。王女の心を得るためにジーフリトほど尽くした者もない(296,4)のである。ジーフリトは意中の人がかくも自分に心を寄せてくれたのに対し、運命の神にいつまでも感謝の念を捧げることができた(301,2-3)。彼の胸に育くまれているクリエムヒルトは、彼にとっては命となった(353,3)のである。そ

8) 渡辺啓一：ミンネジンゲルの所謂 wan に就いての精神的考察（東京帝国大学独逸文学会「独逸文学」第1年第2輯1937年）参照。この論文の冒頭で、渡辺は、この『ニーベルンゲンの歌』B285詩節における wan は同じ叙事詩の32詩節あるいは1583, B1980詩節における wan とその意味を異にし、ミンネザングにおける例えば Heinrich von Morungen(MF136,1)等の wan とその意味を同じくするものであることを指摘している。

9) 第三章 109-110頁参照

の後、第二の「労苦」——ブリュンヒルトを求めてのグンテル王の求婚の旅に随行すること——によって美しいクリエムヒルトは猛きジーフリトの妻となるのである。

このようにジーフリトとクリエムヒルトとの愛の物語はミンネ文学の形式で展開されており、宮廷的ミンネ奉仕としての求婚の様式を示していると言えよう。そしてこのミンネ体験における leit は「恋の悩み」とも言うべきもので、「歡び」(lieb) に対する概念であることは、leit がしばしば lieb と共に用いられていることから明らかである。もっとも、この lieb und leit という対句は、ジーフリトとクリエムヒルトとの恋愛に関してのみ特別用いられているのではなく、他の関係でももちろんのこと広く一般的に用いられている¹⁰⁾ ことは前もって言うておかなければならない。さらにジーフリトのミンネに関しても、例えば上述の138詩節4行目——そのため彼はのちに幾多の幸福(vil liebe) と苦難(vil leide) をも味わわなければならなかった¹¹⁾ ——における lieb と leit は「恋の歡びと悩み」以上のものをすでにほのめかしていることも指摘しておかなければならない。すなわち、宮廷的ミンネ奉仕としての求婚の様式化を示しているのは、二人の愛の表面だけであり、結ばれたミンネも徐々に崩れてゆくのである。しかも、この愛の破滅は、叙事詩の冒頭でクリエムヒルトが鷹の夢を見た(13, 1-3)ときからすでに定められていたことである。彼女の鷹が二羽の鷲の爪に引き裂かれた恐ろしい夢を見た姫クリエムヒルトが母后ウオテに

<< ez ist an manegen wîben vil dicke worden scîn,
wie liebe mit leide ze jungest lôn en kan.
ich sol si mîden beide, sone kan mir nimmer missegan.>> (17, 2-4)

「恋の歡び(liebe) が結局悲しみ(leide) をもたらすということは、もう、いろいろの女の例で、はっきりしています。私は恋も悩みも両方捨てますから、悪いことも起りますまい。」

10) 例えば、110 詩節2 行目(lieb oder leit)及び665 詩節4 行目(lieb unde leit)はジーフリトとクリエムヒルトの恋愛に直接関係はない。また lieb という語が使われていなくとも、leit が否定の mæzliche, niht とともに用いられて lieb の意味を表している箇所がある。mæzliche leit (B193, 4; B347, 4) ないし niht ze leit (556, 2; 1297, 1; 1306, 4; 1309, 2) などがそれである。反対に wenic liebes (B1413, 4) は leide (C1441) の意味である。

11) これと同じ表現として44詩節4行目では vreude と arbeit が用いられていることも参照のこと。

「この乙女のために彼は後日、幾多の歡び(vil vreuden) と、また苦しみ(arbeit)とを招くに至ったのである。」(44, 4)

と語る言葉の中には、もうすでにこの叙事詩が悲劇に終わることを暗示している。ここにおける leit は、上述の「恋の悩み」以上のもの——殿御の情けによる災い(nōt, 15, 4)——を指し示しており、具体的に示せば、ジーフリトの死、すなわち、クリエムヒルトの本来の leit をほのめかしていると言ってもよいであろう。詩人にとってクリエムヒルトの leit は彼女の愛の歓び(lieb, vreude) が壊されたことに基づくものだと表現することが問題でなかったならば、このようにジーフリトとクリエムヒルトの愛の物語に格別甘美な色彩を与えはしなかったであろう。クリエムヒルトの lieb (歓び) が大きければ大きいほど、のちに起こるクリエムヒルトの leit はそれだけ一層深いものとなるのである。

2. プリュンヒルトとグンテル王 —— ere の反対概念としての leit ——

その愛の破綻の発端となったのが、プリュンヒルトを求めての求婚の旅にジーフリトが随行し、何の意図もない些細な策略、すなわち、グンテル王は主君であり、ジーフリトはその家来である(386, 3) という些細な策略を用いたことである。この些細な策略もジーフリトにしてみれば、ただクリエムヒルトの愛を得るために(388) 用いたに過ぎなかったが、しかし、それが悲劇の発端となるのである。このジーフリトの策略によってブルゴントの国で二組の結婚式が執り行われることになったその宴の席でのことである。

Der künic was gesezen unt Prünhilt diu meit.
dō sah si Kriemhilde (done wart ir nie sō leit)
bî Sîfride sitzen: weinen si began.
ir vielen heize trähene über liehtiu wange dan. (618)

国王とプリュンヒルト姫とはすでに座についていたが、
彼女はクリエムヒルトがジーフリトと並んで坐っているのを見て、
泣き始めた。(こんな口惜しい(leit)ことはなかったのだ。)
熱い涙が、白い頬の上を流れ落ちた。

グンテル王が彼女の涙を見て、その理由^{わけ}を尋ねると、プリュンヒルトはこう答える。

<<Ich mac wol balde weinen>>, sprach diu schœne meit.
<<umbe dîne swester ist mir von herzen leit.
die sihe ich sitzen nâhen dem eigenholden dîn.
daz muoz ich immer weinen, sol si alsô verderbet sîn.>> (620)

「私は泣かないわけには参りません、」と美しい姫が言った。
「お妹君のことが、私は心から悲しい(leit)のでございます。

あの方は臣下の身分の者と並んで坐っているではありませんか。
あんなに身を^{かた}貶すなんて、泣かぬわけに参りません。」

この二詩節におけるプリュンヒルトの leit (悲しみ)、すなわち、熱い涙を流す要因とは一体何なのであろうか。プリュンヒルトの leit と涙に関しては、これまでさまざまに論ぜられてきた¹²⁾ が、ここで伝説・歌謡の潜在的な作用を認めて、プリュンヒルトの涙の背後にあるものはジーフリトへの失恋、クリエムヒルトへの嫉妬であると説くにしても、また反対に伝説・歌謡は全く無視して、プリュンヒルトはグンテル王の妃として「王家全体の恥辱」(die Schmach der ganzen Familie)¹³⁾ を感じていたのだと解するにしても、いずれにせよ、ここでは表面的には少なくとも女性としてあるいは王妃としての「恥辱」(Beleidigung, Entehrung) が読み取られてよいのではあるまいか。また自分に対するグンテル王の求婚に何か欺瞞があったのではないかという疑惑から来る「恥辱」も働いていたと考えても差し支えないであろう。ここですでにプリュンヒルトは「恥辱」を受けているのである。であるからプリュンヒルトは「どうしてクリエムヒルト様がジーフリトの妻になったかをおっしゃって下さらない限りは、私はお側に寝なくともよいように、逃げるところがあれば逃げたいくらいです」(622, 2-4) と執拗に絡んできて、さらに新婚の^{ふしど}臥所でも、グンテル王が彼女をかき抱こうとすると、「そうは参りません。事の筋道がわからぬうちは乙女のままでおります」(635, 2-4) と言ってグンテル王を拒否してしまうのである。しかも、グンテル王がなおも彼女の愛を戦い取ろうとすると、彼女は自分の帯で王の手足を縛りあげ、彼を一本の釘にかけて壁に吊してしまうのである。

一方、プリュンヒルトによって「手ひどい苦痛」(großer leide, B636, 4) を与えられたグンテル王の leit は、「肉体的な痛み」(Körperlicher Schmerz) の意味も可能であるが、それよりも——マウラーが指摘している¹⁴⁾ ように——国王としての「恥辱」(Beleidigung, Entehrung) を意味していると言える。そのことは、プリュンヒルトが「グンテル様、一人の女の手で縛りあげられているのを家来などから見られるのは、具合の悪いこと(leit, 640, 1)ではないでしょうか」と言ったことに対して、グンテル王が「それはおん身の名前にも傷がつこう。わしにとっても名誉(ehre, 641, 1)なことではない」と語っていることから明らかである。そこでグンテル王の頼み(641, 2-4)によってプリュンヒルトはすぐに縛めを解き、彼を立ち上がらせた(642, 1)。この日、国王だけは、頭に冠を戴きながら、心は^{おめ}快々として楽しまなかった(643, 3-4)。国王として、男として彼は

12) 桜井和市：プリュンヒルト＝ジーフリト伝説——歌謡と叙事詩——（手塚富雄教授還暦記念論文集「ドイツ文学における伝統と革新」筑摩書房1965年）参照

13) Helmut de Boor(Hrsg.) : Das Nibelungenlied. Wiesbaden 1972. 620詩節の脚註を参照のこと。

14) Vgl. Friedrich Maurer : a. a. O., S. 26 u. S. 31.

「屈辱と痛手」(laster unde schanden, B649, 1) を被ったのである。この沈んだ顔のグンテル王を見たジーフリトが事情を知ると、ジーフリトは再度隠れ蓑を用いて助力することを誓う(651-4)。このジーフリトの助力は、グンテル王にとっては「歎び」(liep, 665, 4)であり、かつまた「悲しみ」(leit, 665, 4)であった。ここにおける leit は、単に liep の反対語として理解されようが、しかし、さらに *ere* の反対概念としての「屈辱」(Beleidigung, Entehrung) が含まれていると解してもよいであろう。こうしてジーフリトの助力でプリュンヒルトはグンテル王の妻となり、表面上は一応静けさを取り戻したのである。

3. 両王妃の口論 —— schande としての leit ——

しかし、ジーフリトが王妃クリエムヒルトを連れてザンテンへ帰国したのちも、グンテル王の妃プリュンヒルトは始終、家臣であるジーフリトが久しいこと宮廷に司候しないことを不思議に思っていた(724)。ジーフリトとクリエムヒルトが彼女に対して疎遠になり過ぎて、ジーフリトの国から一向に出仕もしないことは、彼女にとって「面白からぬ」(leit, 725, 2)ことであった。ここにおける leit も、王の妃として「侮辱」されていたと解されて差し支えないであろう¹⁵⁾。そこでプリュンヒルトは夫に頼んでジーフリトとクリエムヒルトを招待することになる。一方、「懷郷の悩み」(herzeleide, 741, 4)¹⁶⁾ を覚えていたクリエムヒルトにとっては、それは非常に嬉しい知らせであった(741, 4)。そこで彼らはグンテル王の国へと向かうこととなり、ここに両王妃の口論が始まるのである。

プリュンヒルトは、まずジーフリトが自分で自分はグンテル王の家来であると言った(821, 2; vgl. 420, 4) ことを楯に取り攻撃をしかけてくるが、それに対してクリエムヒルトは公然と、自分が「位高く自由の身」(adelvrî, 828, 1)であり、ジーフリトの妃として「辱しめを受けてはならない」(ane schande, 831, 2) ことを証明しようとする。ジーフリトがプリュンヒルトの家来であり、従って、プリュンヒルトがジーフリトとクリエムヒルトの二人を支配している(821, 2-3; vgl. B825, 1-2 u. 827, 2)というプリュンヒルトの主張は、実際不当なもの(vgl. B825)であり、グンテル王によっても以前プリュンヒルトに対して根拠のないものとして説明されている(623) のだから、その主張はクリエムヒルトによって「思い上がり」(ü bermüete, B825, 4; 842, 1) としてはねつけられるばかりである。

15) Vgl. ebd. S. 31.

16) ここにおける herzeleide は「郷愁」(Heimweh) の意。(Vgl. F. Maurer: a. a. O., S. 27. und W. Schröder: a. a. O., S. 47.) これと同じ「憧れ」(Sehnsucht) を表す leit としては、母后ウオテと多くの美しい乙女たちがフン族へ嫁ぐクリエムヒルトに寄せた「愛慕」(leit, 1285, 4) 及びヘルラートがヘルヒェに対して抱いていた「思慕」(groziuleit, 1389, 4) 並びにベッヒェラーレンを出で立った人々が親愛なる一族のものに対して持っていた「眷戀^{けんれん}の悩み」(leit, C1751 = sêr, B1712) を挙げることができよう。

<<Waz mac mir daz gewerren? dīn übermuot dich hat betrogen.
 du haest mich ze dienste mit rede dich an gezogen.
 daz wizze in rehten triuwen, ez ist mir immer leit.
 getriuwer heinliche sol ich dir wesen umbereit.>>(842)

「それは一向構いません。あなたは高ぶった心 (übermuot)に欺かれて、
 私を自分の侍女だなどと仰せになったのです。
 これは私としても悲しい(leit)ことですが、よく覚えていて下さい。
 以後は縁者のよしみなどは、お断わり致しますから。」

このクリエムヒルトの言葉における leit は、マウラーが指摘しているように、なるほど
 プリュンヒルトがクリエムヒルトに与えた「侮辱」的な言葉と関連しているとも考えられ
 る¹⁷⁾ が、しかし、ここではシュレーダーの指摘の如く、「痛惜の念」(lebhaftes Be-
 dauern)¹⁸⁾を表すもので、クリエムヒルトに対する「侮辱」(Beleidigung, Entehrung)
 としての leit の意味を持つものではない。両王妃口論において「辱しめ」を受けるのは、
 むしろプリュンヒルトの方ばかりだからである¹⁹⁾。すなわち、グンテル王の結婚の夜の
 秘密を暴露される(840,2-4)ことでもってクリエムヒルトから歯止めをかけられ「口惜し
 く」(leide, B846,4 = laster, C854,4)になっていたプリュンヒルトは、さらに証拠とし
 て金の指輪を見せつけられ(847,2-3)、プリュンヒルトにとってこんな「口惜しい日」
 (leideren tac, 847,4)はなかったのである。「その指輪は盗まれていたものです」(848,
 1-2)と反論しても、それが結局決定的な「恥辱」のきっかけとなる。

Do sprach aber Kriemhilt: <<ine wils niht wesen diep.
 du möhtes wol gedaget han, und wære dir e re liep.
 ich erziugez mit dem gürtel, den ich hie umbe han,
 daz ich niht enliuge: ja wart mīn Sifrit dīn man.>> (849)

クリエムヒルトが再び言った。「私は盗人ではないはずです。
 あなたが名誉 (e re)を重んじられるなら、黙っておられればよいのに。
 私がうそつきでない証拠には、私が締めている
 この帯をごらん下さい。夫は確かにあなたをそばめとしたのです。」

17) Vgl. Fr. Maurer : a. a. O., S. 31.

18) Vgl. W. Schröder : a. a. O., S. 54.

19) この関係で 837詩節 4行目: ze leide Prünhilde (プリュンヒルトを悩ますために)
 も参照のこと。

ここにおいて王妃としてのプリュンヒルトの「名誉」(ēre)は、ほとんど埋め合わせられないほどに傷つけられている(853, 1-2)。彼女自身グンテル王に向かって「ひどい恥辱」(der vil grōzen schande, 854, 4)を訴えている。

<<Si treit hie mīnen gūrtel, den ich hān verlorn,
und mīn golt daz rōte. daz ich ie wart geborn,
daz riuwet mich vil sere, dune beredest, kunic, mich
der vil grōzen schande; daz diene ich immer umbe dich.>>(854)

「あの方は私が失くした帯を締め、私の純金の指輪をはめているのです。
もしあなたが私のこのひどい恥辱(schande)を弁明して下さいなら、
私は生まれたことを口惜しく存じます。
弁明して下さいなら、いつまでも恩に着ますが。」

ここにおいて846詩節と847詩節における leit は、schande (恥辱、不名誉)で代用されていることは注目すべきである。両王妃の口論におけるプリュンヒルトの leit は、schande と同一的に用いられ、明らかにēreの反対概念として用いられているのである。すなわち、この口論においてもっばらプリュンヒルトに付け加えられた leit は、本質的には王妃あるいは女性としての「名誉」(ēre)の「恥辱」(schande)という意味を帯びている。シュレーダー²⁰⁾も指摘している通り、ここではマウラーの解釈が適切である。プリュンヒルトの「恥辱」でもってブルゴント王家は「侮辱」されたのである²¹⁾。「名誉」の「恥辱」というものを、ブルゴント側のハゲネは血でもって償わなければならない(erarnen, 864, 3; leit, 873, 3)と考え、またオルトウィーンも「王様のお許しがあれば、私がジーフリトを存分にやっつけます」(leit, 869, 3)と復讐を誓う。こうしてプリュンヒルトの leit (恥辱)がジーフリトの leit (死)を呼び起こし、それがのちに宿命的な leit の絡み合いへと発展してゆくのである。

4. ハゲネの謀略 —— *sorge* としての leit ——

もちろん欲することもなく、また予感することもなく、クリエムヒルトが引きずり込まれていったジーフリト暗殺の準備が進められている間に、leit の影がクリエムヒルトの幸せの上に横たわり始めた。その leit の影はまずジーフリトのための *sorge* (心配)として現われる。

20) Vgl. W. Schröder : a. a. O., S. 54-5.

21) Vgl. Fr. Maurer : a. a. O., S. 20.

<<Iedoch bin ich in sorgen, swenne' er in strite stat
und vil der gærschütze von helden hande gat,
daz ich da verliese den mînen lieben man.
hey waz ich grôzer sorge(leide,c) dicke umbe Sîfriden han!>>(900)

「ただ私が恐れるのは、もしあの人が戦場に立って、
勇士たちの手から沢山の投槍が飛んできたりしたら、
私は愛する夫を失いはしないかと、心配(sorgen)なのです。
ほんとに私は時々ジーフリトのために、ひどく心を痛めて(sorge) いますから。」

ここで4行目の sorge (写本B) が写本Cでは leideとなっていることは注目すべきである²²⁾。 sorge がのちに leit を生むことは必定である。止せばいいのに(898, 4)、クリエムヒルトはハゲネが信実 (triuwe, 901, 2) を尽くしてくれることを信じて、夫の急所——竜の血を身体に浴びた際一枚の菩提樹の葉が落ちてきた、あの両方の肩の骨の間こそジーフリトの急所であるという彼女の「心配の種」 (sorgen, 902, 4) ——を打ち明けたからである。彼女は夫の恙^{つつが}なきを願ったのに、それが結局命を縮めることとなる(903, 4)。すなわち、衣裳の上に絹糸で目立たない十字の印を縫いつけておく(904, 1-2) ことは、夫の身に役立つことと思った(905, 2) のだが、逆にクリエムヒルトの夫は謀られたのである(905, 3)。 sorgeを取り除こうとしたことが、反対に sorgeとしての leit を増やす結果となったのである。偽りの戦いが中止となって、狩りに行くこととなった朝のことである。

- 22) ちなみに、この sorgeとしての leit は本章で触れる機会のない箇所でも比較的頻繁に用いられている。(Vgl. Fr. Maurer: a. a. O., S. 24. 及び W. Schröder: a. a. O., S. 47-8.)
例えば、ジーフリトがクリエムヒルトのミンネを求めてウォルムスへ旅立つ際のジゲムントの leit (50, 3; 56, 1; vgl. sorge, 51, 2) 並びに後に残る者たちの leit (70, 1; vgl. sorgen, 67, 2)、またザクセン勢とデンマルク勢の攻撃に脅えるグンテル王(たち)の leit (139, 4; 148, 1; 153, 1; vgl. sorgen, 153, 1) などがそれである。ただし、この sorge としての leit は必ずしも起こる必要はない。例えば、ジーフリトが無事クリエムヒルトを妻として帰国したとき、ジゲムント父王らの「憂い」 (leit, 709, 3) は取り除かれたのであり、またグンテル王の多大の「憂慮」 (leit, 244, 4) も戦いに勝つと歓び (mit vreuden) に終わったのである。しかし、たいていの場合 sorge としての leit は起こる可能性を持っている。ドーナウ河を渡ったあと、二度と故国へ帰ることのできないことを憂えた (sorgen, 1590, 3) ブルゴント族たちの leide (1590, 2) は至極道理のあること (nô t, 1590, 4) であり、宿命的である。本論におけるクリエムヒルトのジーフリトに対する sorgeとしての leit もまた宿命的である。

done dorfte Kriemhilde nimmer leider gesîn. (918,4)
クリエムヒルトにとって、これ以上心配な(leider)ことはなかった。

Si sprach zuo dem recken: <<lat iuwer jagen sîn.
mir troumte hînte leide, wie iuch zwei wildiu swîn
jageten über heide, da wurden bluomen rôt.
daz ich sô sêre weine, des gêt mir wêrlîche nôt.>> (921)

彼女は勇士に言った。「狩りはお止めなさいまし。
昨晚、私は二匹の猪が、野原であなたを追いかけている
厭な(leide) 夢を見ました。草花が朱に染まったのです。
私が泣くというのも、わけのないことはありませんもの。」

「可愛い妃よ、わしは日ならずして帰って来る」(923,1) と軽くあしらうジーフリトに向
かってクリエムヒルトは再度恐れを訴える。

<<Neina, herre Sîfrit! ja fürht ich dînen val.
mir troumte hînte leide, wie ob dir zetal
vielen zwêne berge: ine gesach dich nimmer mē.
wil du von mir scheiden, daz tuot mir an dem herzen wē.>> (924)

「いいえ、ジーフリト様、私はあなたが最期を遂げられるのが怖いのです。
昨晚、私は二つの山があなたの上に崩れかかる厭な(leide) 夢を見ました。
もうあなたの姿が見えないのです。
別れてゆかれるのが、心から悲しくてなりません。」

このように嘆いたにもかかわらず、ジーフリトはほどなく別れの挨拶をして出かけて行っ
た(925,3) が、悲しくも(leider, 925,4)²³⁾ 彼女はその後二度と、健やかな彼を見ることが
できない運命にあったのである。

23) ここにおける leider は副詞 leideの比較級で間投詞と見てよいであろう。(Vgl.
Matthias Lexer: *Mittelhochdeutsches Handwörterbuch*.) この間投詞は以下におい
ても何度か出てくる筈であるが、ここでは少なくともジーフリトの死、すなわち、ク
リエムヒルトの leit と直接関係があると言ってよいであろう。

5. ジーフリト暗殺 —— jamer としての leit ——

翌朝、「一人の騎士が部屋の前に斃れています」(1007,3)という「悲しい知らせ」(vil leider mære, 1006,4)を持って侍臣が来たとき、クリエムヒルトはすぐにそれがジーフリトであることを悟ったのであろうか、常ならず激しく嘆き始めた(1007,4)。

E daz si reht' erfunde, daz iz wære ir man,
an die Hagenen vrage denken si began,
wie er in solde vrستن; dō wart ir erste leit.
von ir was allen vreuden mit sînem tōde widerseit. (1008)

それが夫であることを、彼女が確かめるに先立って、
彼の身をどうして護ったらよいかというハゲネの問いを彼女は思い出した。
そこで彼女は初めて悲しみ(leit)に打たれたのである。
彼の死と共に、彼女は一切の歡樂に思いを断った。

このときクリエムヒルトの本来の leit は始まったのである。彼女の「悲嘆」(jamer, 1009,3)は果てしもなく、「心の痛手」(von herzen jamer, 1010,2)のために、彼女の口からは血がほとばしった。斃れていた勇士は赤く血潮に染まっていたが、ジーフリトであることがすぐに確認された(1011,3)。王妃は悲嘆に沈みながら(1012,1)叫んだ。

<<owē mich mînes leides! nu ist dir dîn schilt
mit swerten niht verhouwen; du list ermorder ot.>> (1012,2-3)

「おお、何という悲しい(leides)ことだ。あなたの楯は
剣で切り裂かれてはいない。あなたは暗殺されたのだ。」

「悲しめる王妃」(diu jamerhafte, 1014,1)は使者を通じてニーベルンゲン国の父王ジゲムントに彼女の「悲しみ」(jamer, B1014,5 = disiu mære, C1026,3)を伝えさせた。

<<Wachet, herre Sigemunt! mich bat nâch iu gân
Kriemhilt mîn vrouwe, der ist ein leit getan,
daz ir vor allen leiden an ir herze gât.
daz sult ir klagen helfen, wand' ez iuch sêre bestât.>> (1017)

「お目ざめなさいませ、ジゲムント王様。
お妃クリエムヒルト様のお使いとしてお迎えに参じました。」

どんな悲しみ(leiden)よりもあの方の胸にこたえる変事(leit)が起きました。
これは王様にも一大事ゆえ、お妃様ともどもお嘆き下さいまし。」

するとジゲムント王は起き上がって、そのクリエムヒルトの身に起こった「変事」(leit, 1018, 1) とは何事であるかと尋ねた。使者はジーフリトが殺されたこと(1018, 4)を知らずと、ジゲムントが痛く驚愕したのも当然であった(1020, 4)。「世にも悲しい知らせ」(den vil leiden mæren, 1015, 3) を信じられなかった(1015, 4)ジーフリトの家来たちは、「あまりの悲しみに」(vor leide, 1022, 3)頭も朦朧とし、「ひどい悩み」(vil michel swære, 1022, 4) に胸が悶えていた。クリエムヒルトは彼らに「嘆き」(diu leit, 1035, 1) を共にして下さいと頼む必要はなかった。クリエムヒルト(jâmer, 1030, 1) のみならず一族郎党の者たちにとってもジーフリトの死はまず第一に「心痛」(jâmer, 1025, 2; 1026, 4)だったのである。ウォルムスの市民たちにとっても「悲しい」(leit, 1037, 1; leide, 1064, 2)ことであった。ハゲネ及び家来たちとその愁嘆の場へとやって来たグンテル王さえも知らぬ振りして妹の「悲しみ」(leit, 1041, 1; schanden, B1041, 2=leide, C1053, 2)を嘆いているが、しかし、「悲しめる女性」(das jâmerhafte wîp, 1041, 4) クリエムヒルトはグンテル王に対してその見せかけの弔慰を非難している。

<<Wær' iu dar umbe leide, so'n wær es niht geschehen.
ir hetet mîn vergezzen, des mag ich nu wol jehen,
da ich dâ wart gescheiden unt mîn lieber man.>> (1042, 1-3)

「もしあなたにとってこれが悲しい(leide) ことだったら、
こんな事は起こらなかったでしょう。私が愛する夫を失った時には、
あなたは私のことなど忘れておいでだったと思います。」

グンテル王らは頑強にこれ——彼女に leit(C1055, 1)を加えたこと——を否定した(1043, 1)が、ハゲネが死骸のそばへ寄るとジーフリトの傷口から再び血が流れ始め、殺人の罪はハゲネにあることが分明となった(1044, 4)。この世の何人も彼女を慰めるすべはなかった(1049, 4)。ジーフリトを弔うミサの誦詠が終わった(1055, 1)とき、クリエムヒルトは言う。

<<Drî tage und drî nahte wil ich in lazen stan,
unz ich mich geniete mînes vil lieben man.
waz ob daz got gebiutet, daz mich ouch nimt der töt?
s o wære wol verendet mîn armer Kriemhilde nōt.>> (1056)

「三日三晩の間、遺骸はこのままにして、
心ゆくまで愛しい夫と別れを惜しみましょう。
神の思召^{おぼしめ}で私がこのまま死んでしまったら、
哀れなクリエムヒルトの苦しみ(not)もおしまいになるのです。」

「このまま死んでしまったら」という彼女の切望はジーフリトへの思慕である。彼女の悲しみがここではさしあたって復讐の考えより強かったことが明らかである。さらに埋葬直前になると、貞節な妻 (ir getriuwer lîp, 1066, 2) として「悲痛」(jamer, 1066, 2) のあまり悶絶しそうになったクリエムヒルトはこう願ひ出る。

<< lat mir nach mînem leide daz kleine liep geschehen,
daz ich sîn schœne houbet noch eines müeze sehen.>>(1068, 1-2)

「私の嘆き(leide) の後に、ささやかな喜び(liep)を私に与えておくれ。
あの方の美しい顔をもう一度拝ませてもらいたいのだ。」

彼女は「その哀傷の念の強さに」(mit jammers sinnen starc, 1068, 3)、いつまでもそれを願ってやまなかったので、立派な棺は破られなければならなかった(1068, 4)。クリエムヒルトは今や死せる気高い勇士に口づけをし(1069, 3)、彼女の明るい眼からは、「悲痛のあまり」(vor leide, 1069, 4) 血の涙が流れ、窮^{ようちゆう}乏たる婦人は「傷心のために」(vor leide, 1070, 4) 玉の緒も絶えんばかりであった。

従って、ここではっきりと言えるのは、シュレーダー²⁴⁾の主張するように、クリエムヒルトはジーフリトの死を悲しんでいるのであって、決して彼女が関与したジーフリトの権力のことを悲しんでいるのではないということである。すでに何度か出てきたが、ジーフリト殺害後、クリエムヒルトは強調されかつ繰り返されて「悲しめる王妃」(diu jamerhafte, 1014, 1)ないし「悲しめる女性」(daz jamerhafte wîp, 1041, 4; C1424, 4; C2432, 4)あるいは「悩み多き妃」(diu jammers rîche, 1031, 1; C1125, 4; C1164, 1; 1218, 1)と表現され、また彼女自身「私はみじめな女」(ich jamerhaftez wîp, 1259, 3)と呼んでいることはそのために特に注目すべきことである。なぜなら、この付加語的表現は、ブリュンヒルトのために用いられている写本C1555, 4(daz jamerhafte wîp)の一箇所を除けば、『ニーベルンゲンの歌』ではもっぱらクリエムヒルトのために用いられているからである。この表現が彼女のためにのみ用いられているのも決して偶然ではない²⁵⁾のであり、そこに含まれているのはまさに「心痛」、ジーフリトの死による「悲しみ」

24) Vgl. W. Schröder : a. a. O., S. 63.

25) Vgl. ebd. S. 61.

である。ジーフリト暗殺によるクリエムヒルトの leit は、詩人によって交互に leit と jamer で表現されている全く取り乱した「悲しみ」であると言ってよいであろう。

6. 財宝強奪 —— 新たな leit ——

こうしてクリエムヒルトは夫を失い、「悲しみ」(leide, 1106, 1) を知って以来、実に三年半を経たが、またもやハゲネの策略によってニーベルンゲンの財宝を強奪され、さらに新たな leit を加えられることとなる。この不実な財宝強奪は、クリエムヒルトにとっては新たな leit を意味している。ジーフリトの死んだのち、彼女は実に十三年というものの、「数多の苦悩の中で」(in manigem sere, B1142, 2=in manigen leiden, C1157, 2) 暮らしたが、それも二重の理由があるのである。

Mit iteniuwen leiden beswæret was ir muot,
umb ir mannes ende, unt dō si ir daz guot
alsō gar genamen. dō gestuont ir klage
des lîbes nimmer mære unz an ir jungesten tage. (1141)

かくて夫の死と、彼らから宝を全部奪われたこととで、
彼女の心は新たな悩み(iteniuwen leiden)のためにいとど重くなったが、
彼女の嘆きは生きている限り、
最後の日に至るまで、止むこととはなかったのである。

一見、この詩節は、財宝強奪でもってクリエムヒルトの「名誉」(ere) —— なかでも権力状態に基づく彼女の「名誉」(ere) —— を侵害していると言えよう。財宝強奪という卑劣な行為によってクリエムヒルトは愛する夫の復讐をするための権力手段を奪い取られてしまったと考えられるのである。従って、マウラーがこの点で彼の解釈の本来の出発点を見いだしたと信じたのも不思議ではない。すなわち、マウラーが、クリエムヒルトの leit を、ジーフリト暗殺と財宝強奪によって引き起こされた「ハゲネによる侮辱」²⁶⁾ と同一視するとき、彼は上で引用した 1141 詩節を支えとしていることは明らかである²⁷⁾。ハゲネから見れば、なるほど財宝強奪は権力状態に基づくクリエムヒルトの名誉(ere) であると言っても差し支えないであろう。しかし、クリエムヒルト側から見ればどうであろうか。テキストを入念に読んでみると、シュレーダーが指摘しているように、クリエムヒルトが夫の死と財宝強奪で新たな leit を経験したということは、そのほかの理由を持っていることが明らかである。すなわち、ニーベルンゲンの宝は、結婚の折に彼

26) Vgl. Friedrich Maurer : a.a.O., S. 30.

27) Vgl. W. Schröder : a.a.O., S. 67.

女に贈られた「後朝の引出物」(morgengabe, 1116, 4)であり、ジーフリトが彼女に残した唯一のものであるだけに、それはそれだけ一層象徴的な意味を有しているのである²⁸⁾。それを侵害できないことは、剛勇なるアルプリーヒも強調している(1118, 3-4)。詩人も、財宝それ自体ではなく、ジーフリトが問題であることをほのめかしている。

Und wære sîn tûsent stunde noch also vil gewesen,
und solt' der herre Sîfrit gesunder sîn gewesen,
bî im wære Kriemhilt hendeblôz bestân.
getriuwer wîbes künne ein helt nie mër gewan. (1126)

しかし、たとえこの宝がその千倍あったとしても、
もし勇士ジーフリトを元のすこやかな身に返すことができたなら、
クリエムヒルトは手を空しくしても彼の^{もと}許に留まったであろう。
勇士たる者、こんな貞節な妻は持った例がなかった。

愛する女性にとって富と権力は夫と比較してそれほどのものをも意味してはいない。クリエムヒルトにとって問題なのは、忘れられない夫であって、失われた名誉と権力ではない。従って、クリエムヒルトの「新たな」(iteniuwîu) leitとは、ジーフリトの象徴である財宝を強奪されることによって「夫殺害による leit」がさらに深くなったという意味に解すべきであろう。クリエムヒルトの leit がもっぱら夫の死に基づくものであることは、以下の考察においてもさらに証明されることになる筈である。

28) Vgl. ebd. S. 67.

7. エッツェル王の求婚 —— leit と ergetzen ——

さて、物語は後編に入って、クリエムヒルトはフン族の国王エッツェルの求婚を受けることになるが、その使者リュエデゲールにとってもクリエムヒルトは全く悲しむ女性 (jamer, B1228, 2=weinen, C1252, 2) として映る。彼の報告に対するクリエムヒルトの答えは明確である。

Dō sprach diu küneginne: <<marcgrāve Rüedegēr,
wær' iemen, der bekande mîniu starken sēr,
der bēte mich niht triuten noch deheinen man.
jā verlös ich ein den besten, den ie vrouwe gewan.>> (1233)

妃は答えた。「辺境伯リュエデゲールよ、
私の手ひどい心の痛み(sēr)を知っている人なら、
二度と男を愛せよと勧めはしますまい。かつていかなる婦人も
得たことのないような優れた^{ところ}殿御を私は失った身なのです。」

「心の痛み (leides, 1234, 1) を癒す (ergetzen, 1234, 1) ものとは、優しい愛情のほかにはございません。ご自分に相応しい方を選んで、その愛情を得ることさえできますれば、心の痛手 (leide, B1234, 4= swære, C1258, 4) には、これにまさる良薬とてないのでございます」とリュエデゲールは言い、またギーゼルヘルも「王はきっとあなたの悩み (dîniu leit, 1243, 2) を慰めてくれる (ergetzen, 1244, 1) でしょう」と説き伏せようとする²⁹⁾ が、クリエムヒルトはもはやいかなる男をも愛する気は見せなかった (1254, 1)。そこでリュエデゲールが、自分は彼女の身に起こったいかなることに對しても「償いをする」 (ergetzen, 1255, 3) つもりであること、誰かが彼女に害を加えたら、手痛い「仕返しをしてあげる」 (engelten, 1256, 4) ことを伝え、その言葉は驚くほど効き目があった。妃の大きな心の悩みは幾分か和らいできた (1255, 4; 1257, 1) ののである。

si sprach:<< sō swert mir eide, swaz mir iemen getuot,
daz ir sīt der nēhste, der büeze (reche C) mîniu leit.>> (1257, 2-3)

彼女は口を開いた。「では誓いを立ててもらいましょう。誰ぞが私に害を加えたら、皆に先んじてまずおん身が私の恨み(leit)を晴らして(büeze)下さると。」

29) これに関連して次の辺境伯ゲールの言葉(ただし、直接クリエムヒルトに向かって言った言葉ではない)も参照のこと:「妃の身に悪いことが起こったら、王はきっとそれを報いるでしょう。」(er mac si wol ergetzen, swaz si leides ie gewan. 1215, 4)

こうしてリュエデゲールの固い誓い(1258, 4)を受け取ると、ついに彼女は悲しみつつも、勇士らの前でエッツェル王の妻となることを誓う(1263, 3-4)が、ここで注目すべきは、1208詩節から1255詩節までのわずか四十八詩節の中に *ergetzen* という動詞が五回(1208, 3; 1215, 4; 1234, 1; 1244, 1; 1255, 3)クリエムヒルトと結びつけられて用いられていることである。クリエムヒルトの *leit* を「贖う」(*ergetzen*)ものとしてはもはや「復讐」(*engelten*, 1256, 4; *büezen*, B1257, 3=*rechen*, C1279, 3) 以外にはないのであって、エッツェル王の求婚の承諾もただひたすら愛しい夫の復讐を考えてのことであり、エッツェル王の権力は目的としてではなく、ただ単に復讐の手段としてのみ興味があったのである。次の詩節でクリエムヒルトが「貞節な妃」(*diu getriuwe*)と表現されていることは注目すべきである。

Do gedahte diu getriuwe: <<si t ich vriunde han
alsō vil gewinnen, sō sol ich reden lan
die liute, swaz si wellen, ich jamerhaftez wip.
waz ob noch wirt errochen des minen lieben mannes lip?>> (1259)

貞節な妃は考えた。「私は惨めな女だけれど、
こんなに沢山の味方を手に入れた以上、
世の中の人には何とでも言いたいように言わせておこう。
愛しい夫の復讐ができさえすれば、そんなことは何であろうか。」

クリエムヒルトの *leit* (夫を失った悲しみ)は「復讐する」(*errechen*)ことを強要し、彼女の残りの生涯は愛しい夫の復讐のために捧げられるのである。

8. クリエムヒルトの復讐 —— *leit* と *rechen* の絡み合い ——

こうして数々の「悲しみ」(*leide*, 1333, 2; 1371, 4) を経てきたクリエムヒルトは、エッツェル王の妃となり、フン族の国で過ごすこと十三年に及んでも、故郷で我が身に加えられた「苦しみ」(*leide*, 1391, 4; C1421, 2)は忘れられず、今でもハゲネに対してその恨みを晴らす(*ze leide*, 1392, 2) ことができはしないかと考えた。そこで彼女は計画としてブルゴント族をフン族の国へ招待することを実行した。

ブルゴント族がフン族の国に着いたとき、クリエムヒルトの *leit* の本来の性質についてはディエトリーヒの警告の言葉(1724; 1730) が明らかに語っているが、とにかく彼女の *leit* は相変わらずジーフリートの死ゆえの「悲しみ」である。従って、ブルゴント族を出迎えたとき、クリエムヒルトがすぐさまニーベルンゲンの宝のこと(1741)を口に出したのも、それは結局のところ黄金ないし権力への欲望からではない。財宝強奪とその所有者ジーフリートの死のために悲しい年月を過ごしてきたクリエムヒルト(C1783, 4)にとって、財

宝が副次的なものであることは、写本Cの補足詩節1785でクリエムヒルト自身が明確に語っている。

<< Jāne rede ihz niht darumbe, deich mēre goldes welle gern.
ich hāns sō vil ze gebene, deich iuwer gābe mac enbern.
ein mort und zwēne roube, die mir sint genomen,
des mōhte ich vil arme noch ze liebem gelte komen.>> (C1785)

「私は宝が欲しくてこう言うのではありません。

おぬし（ハゲネ）が与えてくれなくとも私には施すべきものが沢山あります。

殺害によって私から夫を奪い、そして財宝を奪ったこととで、

哀れな私はその償いをして頂きたいのです。」

財宝は彼女にとって副次的なものであり、彼女がそれを欲しがったのも実はその財宝がジーフリトの象徴であり、ジーフリトの一部であったからである。このことはすぐあとに出てくるジーフリトの名剣バルムンク——それをハゲネが膝の上に横たえている(1783, 1-3)のを見て、クリエムヒルトは悲しみに襲われた(1784, 1)——の場面からも確証されることである。

ez mante si ir leide: weinen si began.
ich wēne, ez hete dar umbe der küene Hagene getān. (1784, 3-4)

彼女には無念の思い(leide)が突き上げてきて涙が流れ出した。

猛きハゲネの仕打ちも、彼女を泣かせるためであったろう。

一方、ハゲネも——詩人が明らかにしているように——外面的な反抗の表現としてジーフリトの名剣を膝の上に置いたのであり、それがクリエムヒルトの leit に火をつけたのである。クリエムヒルトのハゲネに対する次の質問は彼女の leit の根源に触れている。

Si sprach:<<nu saget mir mēre, zwiu tātet ir daz,
daz ir daz habt verdienet, daz ich iu bin gehaz?
ir sluoget Sîfriden, den mînen lieben man.
des ich unz an mîn ende immer genuoc ze weinen hān.>> (1789)

王妃が言った。「なお聞きたいことがある。

おん身はなんのため、私の恨みを買うようなことをしたのか。

おん身は私の愛しい夫ジーフリトを討ち果たした。

そのため私は一生涯、いつも泣いて暮らさなければならないのだ。」

これに対してハゲネは、「ジーフリト殿を討ったのは、いかにもこのハゲネ。あなたによって加えられたプリュンヒルト様の恥 (schalt) を見事に晴らした (engelten) までです」(1790, 2-4) と答えると同時に、その結果に対する彼の責任をも自覚しているのである。

<<Ez ist et a ne lougen, küneginne rîch,
ich han es alles schulde, des schaden schedelîch.
nu rechez, swer der welle, ez sî wîp oder man.
ich enwolde danne liegen, ich han iu leides vil getân.>> (1791)

「身分の高いお妃様、隠し立ては致しません。

あなたのひどい痛手 (schaden) はみんな私のしたことです。男でも女でも、復讐 (rechen) をしようと思う者はするがよい。私は嘘つきにならぬ以上、あなたに数々の苦難 (leides) を加えた由を申し立てるほかありません。」

このハゲネの明らかな殺害の自白は、クリエムヒルトの復讐計画にとって、彼女のその態度を正当化するという意味を持っていた。クリエムヒルトもそれを利用してすぐさまこう言う。

Si sprach:<<nur hœret, ir recken, wa er mir lougent niht
aller mîner leide. swaz im dâ von geschiht,
daz ist mir vil unmære, ir Etzelen man.>> (1792, 1-3)

彼女が言った。「聞いておくれ、勇士たち。この男は私の苦しみ (leide) が全て自分のせいだと認めている。エッツェル王の郎党たちよ、もうこの男がどんな目に会おうと、私の知ったことではない。」

今やクリエムヒルトは消極的に耐え忍ぶ女性ではなく、自分自身が leit (1824, 4) を与えるべき状況にあることを理解し、「復讐」 (rechen, 1904, 4) を開始してゆくのである。

まずクリエムヒルトはディエトリーヒとヒルデブランに助力を申し出て断わられたものの、エッツェル王の弟ブレデリーンに対しては巧みな言葉 (1906-7) で助力を得た。ブレデリーンは鎖鎧に身を固めた一千の兵士を引き連れて、ダンクワルトの軍に襲いかかったが、それも「ジーフリトを討ったダンクワルトの兄ハゲネのせいで、彼も他の武士たちも償い (engelten) をしなければならない」(1923, 4; vgl. 1925, 4) というのである。しか

し、その場でブレデリーンとその郎党らが殺害され、この由々しき知らせがフン族の武士のもとに伝えられると、彼らは「悲しみ」(leit, 1933, 2) 怒りに燃えて、さらに戦いは大きくなり、九千の従卒と、そのほかダנקワルトの郎党なる十二名の騎士とが無残な戦死を遂げる(1936, 2-3)結果となる。危うくその場を逃れたダנקワルトがそのことを兄のハゲネに報告すると、クリエムヒルトの「無念の思い」(herzeleide, 1960, 2) を以前から知っていたハゲネはこう叫ぶ。

<<nu trinken wir die minne unde gelten 's küneges wî n.
der junge vogt der Hiunen, der muoz der aller erste sîn,>>(1960, 3-4)

「我々は討たれた者たちを弔うため杯を酌んで、国王の振舞酒のお礼としよう。まず若いフン族の王子を血祭にあげねばならぬ。」

こうして王子オルトリエプが犠牲となり、次いでイーリンクも討たれ、このleit(2066, 3; 2069, 2) がまた弔合戦を引き起こし、「痛手」(leit= diu michel arbeit des schaden zuo den schanden, 2095, 1-3) を受けたエッツェル王も仕返しをすべく、和平と和解をきっぱりと断わり、今や戦いは血で血を洗うフン族とブルゴント族全体の戦いへと突入していったのである。

この惨劇の演じられたのは夏至の日のことであった。クリエムヒルトは「胸の恨み」(herzeleit, 2086, 2)を近い肉親や数多の郎党に対して晴らし(errechen, 2086, 2)たのである。「悪いこと」(leit, 2102, 1)をした覚えのない弟ギーゼルヘルが「情け」(genade, 2102, 4)をかけてくれるよう頼むと、「恨み」(ungenade, 2103, 1)を持っているクリエムヒルトは言う。

<<mir hat von Tronege Hagene sô grôziu leit getan,
ez ist vil unversüenet, die wile ich hân den lip.
ir müezet es alle engelten>>, sprach daz Etzelen wî p. (2103, 2-4)

「トロネゲのハゲネは、私の生きている限り、決して償うことのできないほどのひどい仕打ち(leit)を私に加えたのです。おん身たち皆で償わ(engelten)なくてはなりません」とエッツェル王の妃は言った。

ハゲネから受けたクリエムヒルトの leit は、ブルゴント族全体で償われなければならないのである。エッツェル王の武士たち、そしてリュエデゲールにクリエムヒルトが「晴らしてくれる」(errechen, rechnen)よう頼む「痛手」(leit; 2108, 2; 2109, 3; 2151, 3) とは、相変わらずジーフリトの死のことである。この痛手の復讐を遂げようとして、ついにリュ

エデゲールも犠牲となり斃れてしまうが、この誠実な辺境伯の死がまたディエトリーヒの家来たちに「悲しい思い」(leit, 2255, 4; 2257, 4; 2259, 3; 2267, 2)を呼び起こし、彼らはリュエデゲールの「仇を討つ」(rechen, 2282, 4; 2285, 4)こととなる。その仇のためにヒルデブラントに討たれたフォルケールの死をハゲネが見て、ハゲネも「仇討ち」(rechen, 2289, 4)しようとする。ハゲネがヒルデブラントに言う。

d ð sprach er zuo dem degene: <<ir geltet mīniu leit.
ir habt uns hinne erbunnen vil maneges recken gemeit.>> (2304, 3-4)

彼はその勇士に言った。「おん身はわしの悲しみ(leit)を償わ(gelten)ねばならぬ。
おん身はわしたちから数多の天晴れな勇士を奪い去ったのだ。」

そこでハゲネとヒルデブラントとの一騎討ちとなり、leit と rechen との絡み合いが続くこととなる。すなわち、深傷を負ってハゲネから逃れてきたヒルデブラントを見て、ディエトリーヒがさらに「痛手」(leit, 2309, 2; 2319, 1)を受け、その「痛手」(leide, 2326, 3)の「復讐」(rechen, 2327, 3)のためにディエトリーヒがグンテル王とハゲネのところに赴くのである。

<<Gunther, künec edele, durch die zühte dîn
ergetze mich der leide, die mir von dir sint geschehen,
und süene iz, ritter küene, daz ich des künne dir gejeihen.>>
(2336, 2-4)

「貴い国王グンテル殿、おん身によって与えられた悲しみ(leide)を、
おん身の徳操にかけてわしに償って(ergetzen)もらいたい。
勇武なる騎士よ、わしの納得のゆくような償い(süenen)をしてほしい。」

<<Gunther unde Hagene. ir habt beide mich
s ð sêre beswæret daz herze und ouch den muot,
welt ir mich ergetzen, daz irz vil billîche tuot.>> (2339, 2-4)

「グンテル王にハゲネ殿。汝ら二人は
わしの心も魂をも痛く苦しめたのだ。
わしに償いをされる(ergetzen)のは当然のことではあるまいか。」

ここでハゲネとディエトリーヒとの対決が始まるが、以前からの戦闘に疲れていたハゲ

ネはついに取り押えられ、クリエムヒルトの手に引き渡された。幾多の激しい「悩み」(leide, 2353, 4)を経た後のこととて、彼女は一方ならず歎び、ひとまずハゲネの身柄を獄舎に閉じ込めた。このことで「恥辱」(leide, 2356, 4; 2358, 3)を受けたグンテル王もこのあとディエトリーヒと渡り合うが、結局捕えられて、ハゲネとは別の獄舎に入れられた。王の「苦しみ」(leide, 2362, 3)を見て、彼女の「憂い」(sorgen, 2362, 3)は大方消え失せた。しかし、兩人を獄舎に閉じ込めるだけではクリエムヒルトの「悩み」(nōt, 2354, 3)は「償われ」(ergetzen, 2354, 3; 2355, 3)えなかった。やがて、エッツェル王の妃は恐るべき「復讐」(rechen, 2365, 3; rache, B2366, 4=gerechen, C2425, 4)を彼ら兩人に対してなしたのである。

まず王妃はハゲネのところに行き、憎しみをこめて「もしおん身が先に私から奪ったものをまた返すつもりなら、命を助けてブルゴントの国元へ帰してとらせよう」(2367, 3-4)と言葉をかける。この言葉は表面的にはハゲネに強奪された宝のことを言っているが、しかし、第六章ですでに述べた³⁰⁾ように、その心の内ではジーフリトの死のことをほのめかしているのである。ハゲネが宝を返せば、ハゲネの不正、ハゲネの罪の告白となり、夫殺害によって苦しみを受けたクリエムヒルトが彼に象徴的に勝ったこととなる。しかし、「我が主君方が一人でも生きている間は、宝のありかを言わぬと誓ったのでござる」(2368, 1-3)というハゲネの言葉に唆されて、実兄グンテルの首を打ち落とさせたことは、ハゲネの思惑通りのことだったのである。

<<den schaz den weiz nu niemen wan got unde mîn:
der sol dich, vā landinne, immer wol verholn sîn.>> (2371, 3-4)

「宝のありかを知る者は、神とこのわしとのほかには一人としてござらぬ。
鬼女よ、あなたには宝は永久に隠れたままに相成り申そう。」

決してハゲネはクリエムヒルトに対して弱みを見せはしない。それではハゲネは「償い」(gelten, 2372, 1)をしないことになると悟ったクリエムヒルトは

<< sō wil ich doch behalten daz Sîfrides swert.
daz truoc mîn holder vriedel, dō ich in jungest sach,
an dem mir herzeleide von iuwern schulden geschach,>> (B2372, 2-4)

「それならばせめてジーフリト殿の剣^ちを貰っておきましょう。
これは私の愛しい人の見納めの日に、あの人が携えていたもの。
私の心痛(herzeleide)はおん身のために生じたものです。」

30) 第六章 183-4頁参照

と言う³¹⁾ や否や、名剣バルムンクを鞘から抜き取って、高く振り上げてハゲネの頭を打ち落とした。この言葉がクリエムヒルトのこの世での最後の言葉となったのも決して意味のないことではあるまい。クリエムヒルトの復讐は、マウラーの言う *ere* の回復からではなく、シュレーダーの主張のごとく、あくまでもジーフリトの死による「心の悲しみ」(*herzeleide*)からなされたのである。しかしながら、この恐ろしい仕打ちもまた「仕返し」(*rechen*, 2375, 4) を受けずにはいなかった。老将ヒルデブラントが怒りに燃えてクリエムヒルトに一太刀を加えたのである。こうして *leit* がまた *leit* を呼び起こし、*leit* と *rechen* との絡み合いの中で、ついには両民族の滅亡という凄惨な結末にまで至ったということが、すなわち「ニーベルンゲンの災い」(*der Nibelunge nôt*, B2379, 4) である。

以上のように見てくると、『ニーベルンゲンの歌』における *leit* は、その意味の多様性に特質があると言えよう。あるときは *lieb* の反対概念、*sorge* ないし *nôt*, *sêr*, *arbeit* などの同一概念として、またあるときは「愛慕・思慕、懐郷の念」(*Sehnsucht*) の意味として、あるいは「痛惜の念」(*lebhaftes Bedauern*) の表現として用いられているばかりではなく、ブリュンヒルト並びにグンテル王の場合のように *ere* の反対概念「屈辱」(*schande*, *laster*) として用いられているなど実にさまざまな場合が指摘されうるのである³²⁾ が、しかし、ジーフリト暗殺後におけるクリエムヒルトの *leit* ——この叙事詩の理解のためにはきわめて重要なクリエムヒルトの *leit* ——に関しては、まず第一に「愛する者を失った悲しみ」として用いられていると言ってよいのではあるまいか。*leit* が多様な意味で用いられている『ニーベルンゲンの歌』の中にあって、とりわけクリエムヒルトの *leit* は、愛しい夫ジーフリトを亡くした「精神的な悲しみ」として意味されているのである。

31) 写本Bにおけるこの場面は写本Cでは3-4行目が次のように改作されているが、意味深長なクリエムヒルトの最後の言葉であることに変わりはない。

<<daz truoc mîn holder vriedel, dō ir im nâmet den lîp
mortlîch mit untriuwen,>> sprach dō daz jâmerhafte wîp. (C2432, 3-4)
「これは私の愛しい人がおん身によって不実にも殺害されたとき、
あの人が携えていたものです」と悲しめる王妃は言った。

32) ただし、本章では問題が複雑多岐にわたることから『ニーベルンゲンの歌』における *leit* の例証を全て挙げることはできなかった。しかし、この叙事詩の筋の展開にとって重要な *leit* の例証はできる限り網羅したつもりである。

Ⅱ. 『哀歌』における leit の特質

では、『ニーベルンゲンの歌』の後日譚と言われる『哀歌』においてはどうか。『哀歌』における leit³³⁾ は、結論から先に言えば、『ニーベルンゲンの歌』におけるような多様性はなく、どんな場合にも「侮辱・恥辱」(Beleidigung, Entehrung) という意味ではなく、徹頭徹尾「愛する人たち、優れた英雄たちを失った精神的な悲しみ」(den seelischen Schmerz über Verlust geliebter Menschen und den Tod ausgezeichneter Helden)³⁴⁾ を意味している。「大惨事」(leide, 208) ——クリエムヒルトの「悲しみ」(leit, 349; 391)による「大惨事」(leit, B510; leide, C198; 555)——によって「ありとあらゆる者たちが苦しみのあまり、いかに悲しんだか」(wie in begunde leiden/vor jämer daz leben allen, B298-9) ということが、この詩における本来のテーマであり、執拗なまでに「悲しみ」の表現が繰り返されている。

フン族とブルゴント族との戦いで「悲しい」(leit, 307)結果となった後のエッツェル王の leit もまたもっぱら多数の死者に対する精神的な悲嘆である。

dem wirte gie sîn zît hin	主人(エッツェル王)にとって時は、
mit <u>leide</u> (jämer, C) und ouch mit sêre.	<u>悲しみ</u> (leide) と苦しみと共に過ぎて
(590-1)	行った。

宮殿に斃れている死者たちの痛ましい光景を見て、王は苦しみ嘆いた(leit, B618; 1004)のである。過度な嘆きと自己負罪(vgl. 932-1007)のために、エッツェル王にとっては敵と味方の区別もなかった(vgl. 1226-7)。

<<nu riuwent si mich beide.	「今や両方が私を悔やませるのだ。
von schulden ist mir <u>leide</u>	私が私の部下とブルゴント族のために
umbe mîne recken unde sie.>>	<u>悲しい</u> (leide) のも当然だ。」
(1243-5)	

さらに彼はハゲネが自分の敵であり、自分の息子をも殺したのであるということをすっかり忘れてしまっているように思われる。彼は「悲しみながらも」(in leide, 1284) 慈悲深くハゲネの死骸を主君グンテルやそのほかの家来たちのところへ運んでやるようにと命

33) 本稿では『ニーベルンゲンの歌』の場合と同じように『哀歌』に関しても写本Bのほかに写本Cをも考慮に入れて考察を進めてゆきたい。テキストには次のものを使用する。Karl Bartsch(Hrsg.): *Die Klage mit den Lesarten sämtlicher Handschriften*. (F.A. Brockhaus) Leipzig 1875.

34) Werner Schröder: *Das Leid in der Klage*. ZfdA. 88, 1957/58. S. 58-9.

令する。国王エッツェルが声高く嘆くと、婦人たちも一緒に嘆いた (652-3; vgl. mit grōzen leiden, 881; mit grōzen leide, 1589)。心に「悲しみ」(leit, 655)が生じると一緒に嘆くというのは人々の習慣だからである。「国王たる者が女々しく悲しんでいるとは、いつもの国王らしくありませぬ」(1018-25)と言ってエッツェル王を非難するディエトリーヒでさえも、「苦しみのあまり」(mit leide, 1410; 1468) 気も狂わんばかり(in unsinne, 1410)に「彼の悲しみ」(elliu siniu sêr, 1469; aller sîner leide, 1673; leiden, 1907)を嘆いた。リュエデゲールの死骸を見ると、エッツェル王とディエトリーヒは本当にその「苦しみ」(ir leit, 2173)が大きくなったのであった。老将ヒルデブラントにしてもまた同様(ze leide, 1546)で、ディエトリーヒとヒルデブラントの「苦しみ」(ir leit, 1584; vgl. der leide, 1803)はあまりにも痛ましかったので、誰もそれを語ることができない。キリスト教徒も異教徒も嘆き悲しんだ(von herzenlichem leide, 1847)。そこへヘルヒェ王妃が育てた八十六名の乙女たち——その中にはヘルヒェ王妃の姪ヘルラートもいた——もその「惨事を見るため」(durch leide scouwe, 2207; zuo der leiden ougenweide, C2301)に「悲しみながら」(mit leide, B2189)やって来て、しまいにはその国全体の住民も昼夜区別なく殺到し、人々は親族の死骸を捜し回った。死者が血の中から運び出されると、新たに婦人たちの嘆きが生じた。「悲しみで」(bî jamer, 2267)彼女たちの誠実がわかった。乙女たちや多くの高貴な婦人たちは、「悲しみ」(ir leit, 2272)には黄金が相応しくないと、多くのすばらしい衣服を脱いだ。

こうして敵、味方(die lieben zuo den leiden, 2180)³⁵⁾ 区別なく遺骸は取り除かれ、かつて死骸でいっぱいだった館は今や空虚となった。ディエトリーヒは美しいヘルラートと話をし、自分がどんなに「辛く」(leides, 2290)ても、彼は彼女の「苦しみ」(ir leit, 2291)を憐れんだ。ありとあらゆる者たちが「苦しみと痛ましさ」(mit leide und ouch mit sêre, 2416)をもって次々に埋葬されたとき、最も大きな悲しみが聞かれた。それはキリスト教徒にとっても異教徒にとっても残酷な別れのときであった。エッツェル王が非常に意気消沈して嘆くと、ディエトリーヒは「神があなたを苦しみ(leide, 2451)から慈悲深く解放して下さる(ergetzen, 2450)でしょう」と言って王を慰めようとするが、何の役にも立たなかった。ディエトリーヒの堅固な心も一部沈んでしまったほどである。「悲しみのあまり」(vor leide, C2590) 飲びを忘れてしまったディエトリーヒに向かって「我々は悲しいからといって(durch unser leide, 2508)誠実を忘れてはなりませぬ」と言ってヘルラートと一緒にこの地を去ることを勧めるヒルデブラントの言葉(B2496-2513=C2594-2613)に対しても、ディエトリーヒは、

35) ここにおける形容詞 leideは verhaßt (憎まれた)に等しく、これが名詞的に用いられて「敵」という意味になっている。特殊な場合の一つである。なお、これと同種の表現として写本B 276行: den lieben zuo den leiden (敵も味方も)が挙げられよう。(Vgl. W. Schröder: Das Leid in der Klage. ZfdA. 88, 1957/58. S. 58.)

<<wie sol ich von disen leiden
mit uren mîn gescheiden,
s i t ich den schaden hân genomen?
ô w e waz leider mære komen
muoz hin wider ûf den wegen,
von danne ein ieslîcher degen
reit zuo dirre hâhzî t!>>

(2515-21)

「私は損害を被ったのだから、
どのようにしてこの苦しみ(leiden)から
榮譽をもって離れることができようか。
ああ、各々の者が饗宴へと
出かけて行った道を、
今度は何と悲しい(leider)知らせが
通らなければならないのか！」

と、このように嘆いてしか、ヒルデブラントの勧めを受け入れることができなかったのである。そこでヒルデブラントとディエトリーヒの兩人がエッツェル王に、「大きな災いのちに」(nach grôzem leide, 2549) 称賛高くありたいと欲するなら、倒れ死んだ騎士たちの武具や武器を集めて、生き残った者たちのためにそれらを各々の国へ送り返すのが得策だと忠告したところ、エッツェル王はこの提案を喜んで受け入れた。そこで吟遊詩人スウェンメリーンが使者となってほかの十二名の使者たちと共に武器を運んでライン河畔のウォルムスへ「悲しい知らせ」(ir herzen leit, 2667; vgl. leide, 2629)を持って行くこととなり、「多くの心の苦しみ」(mit manegen herzeleiden, B2707; C2820)を持って出かけて行った。

使者たちは、彼らの「悲しみ」(ir leit, B2793)——それを誰も知らないことの方が「悲しむ」(leit, C2905)よりはましであったろうが——を道中出会う人たちにも伝えてほしいというディエトリーヒの願いを果たしながら、「悲しみつつ」(vor leide, C2903)もウィーンを越えてトレイゼンムーレを通りベッヒェラーレンへと進んで行った。そこではリュエデゲール夫人ゲテリントとその娘が「苦しみなき飲び」(lieb ane leide, 2840; vgl. niht ze leit, C2931)を持って主人の帰りを待ち受けていたが、——夢などから彼女らは大きな「悲しみ」(leide, 2988)が近づいているのを予感していたのであろうか——彼女らが出迎えたものと言え、「心の苦しみ」(herzeleit, B2843; vgl. leide, C3194)と長く続く「悲しみ」(arbeit, B2844)だけであった。娘のディエトリントは母親に嘆いた。王妃クリエムヒルトがその親族を「悲しいことに」(leider, B3073)³⁶⁾ 悪意を持って出迎えたのが自分たちにも「悲しい」(leide, C3194) 結果となったのである、と。夫人にとっても飲びは「悲しみ」(mit dem leide mîn, 3095) でもって奪われ、娘にとってもこれ以上「悲しい」(leider, 3152) ことはなかった。

スウェンメリーンら一行はその後ドーナウ河をさらに進んでバッサウへとやって来た。

36) ここにおける leider は間投詞。(脚註23を参照のこと。)この場合、のちに起こる悲劇に結びつけられていると言えよう。

そこでは有名な僧侶ピルグリムがその使者たちの知らせを聞いて「悲しみのあまり」(vor leide, C3453)狼狽したが、その「悲しみ」(leit, B3422)が生じたのも全てハゲネのせい³⁷⁾であることを認識した。使者はバイエルン——そこではエルゼがその話を耳にして悲しんだ(leit, B3506)——を通りさらにシュワーベンを通してライン河ほとりのウォルムスへとやって来た。そこでスウェンメリーンはグンテル王の妃プリュンヒルトと対面することになる。使者を「侮辱する」(leiden, 3621)³⁸⁾ 権利などないことを確証したプリュンヒルトは、そのあと使者の報告、要するに、グンテル王をはじめゲールノートにギーゼルヘル及びその家来たちは誰一人として生きていないということ、そのためにプリュンヒルトが「悲しむ」(iuwer leit, 3633)とそれは「心配で気苦労」(sorge unde arbeit, B3634)でもあるというエッツェル王とディエトリーヒの言伝、並びに「苦しみ」(leit, 3639)を嘆くのも程々にするのがよいという僧侶ピルグリムの言伝を聞いたのであった。するとかつてフン族の国で起こったほどの大きな悲しみが生じた。「悲しみのあまり」(von grōzen leide, 3665)彼女の口からは多くの血が流れ出たほどである。広いウォルムスの街では女も子供もプリュンヒルトと共にその「悲しみ」(ir leit, 3711)を嘆いた。地方の家来たちもやって来て、プリュンヒルトの「悲しみ」(riuwe, 3734)を和らげ、多くの婦人たちを「苦しみから」(von leide, 3737)離そうと努めるが、プリュンヒルトは喜ぶことがなかった。そこで猷酌侍臣のジンドルトがやって来て「御子息があなたと私たちの大きな悲しみ(leide, 3759)を歓びに変えて下さる(ergetzen, 3758) ことでしょう」と言って王妃を慰めると、少しばかり落ち着きを取り戻した。そこでスウェンメリーンが群衆の前に立って彼らに事の次第を語り続けた。すなわち、ジーフリトを殺してその妻を「悲しく」(ze leide, 3783)させたのはハゲネであるが、その婦人がハゲネに抱いていた憎しみほど「痛ましい」(leiden, 3786) 憎しみをついぞ聞いたことがないこと、そのために生じた戦いの数々、死者への「悲しみのあまり」(vor leide, 3896)ディエトリーヒとヒルデブラントは生きたくはなかったほどであったこと、並びにハゲネとグンテル王をディエトリーヒが取り押さえてクリエムヒルトに手渡したのが「悲しい」(leide, 3934) ことであったことなどを長々と(3778-3947) 語ったのである。この報告を聞くと、人々はすぐに嘆きの大きな声をあげた。国中至る所で人々の嘆きは大きかった。こうして今やクリエムヒルトの「悲しみ」(ande, 3966)が「痛ましく」(sē re, 3967)もその復讐を遂げた(errechen, 3967)のであった。クリエムヒルトの復讐はハゲネとグンテル王だけにとどまらず、プリュンヒルトにまで及んだのである。プリュンヒルトは今こうして「苦しみ」(leit, 3972)を耐えているのは一体どうしてだろうかと考えた。かつてクリエムヒルトが苦しんでいた

37) 概して『哀歌』ではハゲネの行為を否定する傾向が強いが、このことについては第五章参照のこと。

38) この動詞 *leiden* だけが『哀歌』では「侮辱する」という意味で用いられている。
(Vgl. Werner Schröder : Das Leid in der Klage. ZfdA. 88, 1957/58. S. 65-6.)

(leit, B3973)ものが「悲しくも」(leider, C4036; C4041)³⁹⁾ 今やプリュンヒルトを苦しめている(leit, B3974)のである。一体そこで誰が歎びを持ち得たであろうか。ロールゼの寺院のそばに家を建てて隠居生活をしていたウオテも、彼女の愛する子らのために嘆き、「苦しみのあまり」(vor leide, 3959)倒れてしまい、「苦しみ」(daz leit, B3988)が彼女の心を二つに切り裂いて、ついにロールゼの僧院に埋葬された。乙女も婦人も大いに悲しかった(leide, 3990)。グンテル王の国中は悲しみでいっぱいだった。そこでルーモルトも今や宮殿にやって来て、事の次第を聞くと嘆いたが、ジンドルトと同様に、グンテル王の息子に王冠を戴かせるべきことを勧めると、「悲しみ」(leides, C4140)は一部慰められ、宮廷も家来たちも「その悲しみ」(ir leit, C4151)が少し歎びに変わったのであった。そこでスウェンメリーンはエッツェル王のもとへ帰って行った。

さて、エッツェル王の宮廷ではヒルデブラント、ディエトリーヒそしてヘルラートがその国を去ることとなった。このことはエッツェル王にとってかつて受けた「苦しみ」(leides, 4120)よりも「辛い」(leide, 4121)ものであった。「このひどい悲しみ」(von disen starken leiden, 4143)のために、国王は倒れて瀕死の状態であった。彼らの旅立ち「死」ではないにしても「喪失」に変わりはないのであった。エッツェル王の「悲しみ」(leit, 4194)はますます深く、彼は一言も話すことができなかった。

swie grözer hērscefte er pflac,	彼がたとえどんな主権を
dar zuo was er nu gedigen,	握っているにせよ、
daz si in eine līezen ligen	彼は一人にさせられ、
und niemen ūf in niht enahte.	彼には誰も目をくれなかった。

(B4200-3)

この見捨てられた状態こそ、エッツェル王の取り乱した精神の本来の「悲しみ」(leit)である。ディエトリーヒらが彼のもとを去ってから、彼は何を始めたのか、そして彼はどのような最期を遂げたのか、そのことについては今なお誰も知らない。

一方、エッツェル王の国を去ったディエトリーヒら三名はまずベッヒェラーレンに向かった。そこへ彼らが到着したとき、リュエデゲールの夫人ゲテリントは「苦しみのあまり」(vor dem vil starken leide, 4237)三日前に死んでいた。そこでディエトリーヒは悲しみ

39) ここにおける leider は間投詞。(脚註23を参照のこと。)この場合も、一族の者たちを失ったという「悲しみ」に関係があると言えよう。

嘆く (leider, C4315) ⁴⁰⁾ その娘ディエトリントに向かって、「悲しみ」 (leide, 4259) を和らげるよう励ましたあと、「悲しみと苦しみ」 (von jamer und von leide, B4268 = von allem dīme leide, C4334) から解き放つために、—— そしてその後彼女に「悲しみ」 (leit, 4289) を与える者は誰一人としていなかったのであるが、—— 一緒に国を治めることのできる男性を世話してあげようと約束して、自分の国へと帰って行ったのである (4278)。

以上、『哀歌』におけるほとんど全ての leit ⁴¹⁾ を見てきたが、「敵」という意味で名詞的に用いられた leide (B276; 2180) 及び間投詞として使われた leider (995) 並びに一種の慣用的表現 (z. B. C1325; C3605; B4048) などは別問題として、ここで明確に言えることは、『哀歌』における leit はほとんどのところで「親愛なる者を失った精神的な悲しみ」を意味しており、一つだけ 3621 行の leiden を例外とすれば、決して「侮辱」 (Beleidigung, Entehrung) を意味していないということである。『ニーベルンゲンの歌』における leit がさまざまな意味に用いられているのに対して、『哀歌』における leit はもっぱら「愛する者を失った精神的な悲しみ」を意味しており、その leit (悲しみ) も『ニーベルンゲンの歌』のように rechen (復讐) を引き起こすことはない。『哀歌』の世界は、『ニーベルンゲンの歌』とは別の世界なのである。

40) ここでは間投詞としての leider (脚註23参照のこと) が用いられているが、この場合も両親を失った「悲しみ」と関係があると言えよう。ちなみに、『哀歌』ではそのほかに C130; B500; 514; 995; C1047; 1056; C1323; C1432; 1727; 1730; 1739; 1829; C1850; C1915; 2461; 2663; 2862; C3294; C3534; C3922; 4078 行で間投詞としての leider が用いられているが、995 行の leider はなるほど「親愛なる者を失った悲しみ」との結びつきが弱いとも言えるが、そのほかのところではいずれも多かれ少なかれ「親愛なる者を失うという悲しみ」に結びつけられているとすることができよう。

41) 見落としのない限り、後述の C585 の leit (ジーフリト殺害によるクリエムヒルトの悲しみ) のほかに、C1325 の leit (ハゲネに対する仇討ちができぬ場合の無念さ)、C1706 の vor leide (悲嘆のあまり)、C3605 の leit (ハゲネを否定する一種の慣用的表現) 及び 4048 の ze leide (一種の慣用的表現) を挙げれば、『哀歌』における leit は全て挙げたことになる筈である。とにかく「侮辱・恥辱」の意味は全くないと言ってよいであろう。

Ⅲ. クリエムヒルトの leit と rechen の問題

こうして『ニーベルンゲンの歌』におけるクリエムヒルトの leit の復讐は、ハゲネと、グンテル王をはじめとするブルゴント族全体に及んだばかりではなく、『哀歌』においてはブリュンヒルト並びに何の罪もないエッツェル王にまで及んだのである。実の兄までを殺害するというこの恐ろしいまでに残酷なクリエムヒルトの復讐、『ニーベルンゲンの歌』写本Bの詩人がそのことに関しては自分の立場を明らかにしていないクリエムヒルトの復讐は、当時一体どのように考えられ評価されていたのであろうか。

このクリエムヒルトの leit と rechen の問題に関して恰好の手がかりを提供してくれるのは、『ニーベルンゲンの歌』写本C⁴²⁾ のほかに『哀歌』である。とりわけ『哀歌』においてはクリエムヒルトの復讐を、ジーフリトに寄せる変わらぬ triuwe (誠実) のなせる業と見る傾向がより鋭くなっていることはテキストからも明白である。

swer ditze mære merken kan,
der sagt unschuldic gar ir lîp,
wan daz daz vil edel werde wîp
tæte nach ir triuwe
ir rache in grôzer riuwe.

この話を本当に知っている人は、
彼女のことを無罪だと言うであろう。
なぜなら、この高貴な女性は
彼女の誠実から
復讐を遂げたからである。

(154-8)

そしてその triuwe から行動したクリエムヒルトの死についてはこう語られている。

s î t si durch triuwe töt gelac,
in gotes hulden manegen tac
sol si ze himele noch geleben.
got hat uns allen daz gegeben,
swes lîp mit triuwen ende nimt,
daz der zem himelriche zimt.

彼女は誠実のために死んだのであるから、
神の恩恵の中で多くの日々を彼女は
天国でなおも生きることができるのである。
神が我々全員に約束していることによると、
その生が誠実で終わる者は
天国へ行くのに相応しいからである。

(B571-6)

この部分を『哀歌』写本Cのテキストは、クリエムヒルトの変わらない triuwe の考えを反復することによってさらに強めている。

s î t si durch triuwe töt beleip 彼女は誠実のために死んだのであるから、

42) 『ニーベルンゲンの歌』写本Cにおいては比較的クリエムヒルトの復讐を triuwe のなせる業と見る傾向が強いのであるが、このことについては第四章参照のこと。

und si <u>gröz triuwe</u> dar zuo treip	すなわち、 <u>真の誠実</u> を賭け
daz si <u>in triuwen</u> vlos ir leben,	<u>誠実において</u> 命を失ったのだから、
s o h a t u n s g o t d e n t r ö s t g e g e b e n ,	神は我々に慰みを与えて下さり、
swes l i p m i t t r i u w e n e n d e n i m t ,	<u>誠実</u> で生を終えたクリエムヒルトは
daz der zem himelrîche zîmt.	天国へ行くのに相応しいのである。

(C549-54)

愛しいジーフリトに対する「誠実」(triuwe)から彼女は復讐を遂げたのであって、決してそのほかの理由からではない。ジーフリトの死は、上で見てきたように、彼女にとっては一生涯続く、何によっても償われ(ergetzen)えない「心の悲しみ」(herzeleit) だったのである。その「悲しみ」(leit)を「復讐」(rechen)しなければならないということは、十三世紀当時の騎士社会（少なくとも文学界）においてはまだなお自明の理であつたに違いない。このことはヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチファル』におけるグルネマンツの教え⁴³⁾ を俟つまでもなく、『ニーベルンゲンの歌』においても上で見たように leit と rechen との絡み合い⁴⁴⁾ から明らかであるし、また『哀歌』のテキストからも明らかである。

sold er des engelten,	仕返しが必要なとき、
der rechter triuwen kunde phlegen,	真の誠実に
der hete schiere sich bewegen	心得のある者なら、
daz er rehten dîngen	ただちに真の誠実を
m ö h t e n i h t v o l b r i n g e n	示すことに努めるであろうが、
dehein getriulîchen muot. (140-5)	それももったもなことのだ。

まさにクリエムヒルトの場合がこれであり、その復讐は正当(vgl. 138)なのである。その仕返しが実際その関係ある者に向けられている限り、非難を受ける理由はないのである。『哀歌』ではそれゆえ、『ニーベルンゲンの歌』写本Cの補足詩節2143⁴⁵⁾と同じよ

43) 『パルチファル』第三卷(171, 27-30) 参照のこと。すなわち、グルネマンツはパルチファルに、戦いで敵が恭順の誓いを申し出たら、命を助けてあげるのがよいと教えるのであるが、ただし、敵が自分に心の痛手となるような苦しみ(leit, 171, 28)を加えた場合は別である。

44) 上で触れる機会のなかった箇所——例えば、ハゲネによって打ち殺された渡し守の死に対するゲルプフラートとエルゼの仇討ち——からも leit (1596, 3; 1607, 2; leide, 1603, 4) の復讐(anden, 1598, 3; rechen, 1614, 3; vgl. auch 1607, 4) の正当性は明らかである。

45) 第五章 152頁参照

うに、「ただ一人（ハゲネ）だけの命を奪い取りたい」（daz niwan der eine man/ den lîp hete verlorn, B262-3）というクリエムヒルトの意図に特別な重点が置かれているのである。『哀歌』写本Cのテキストはこの部分を他の箇所に挿入して、さらに leit という語を用いてこう語っている。

sine het is niht alsô gedaht:
si het iz gerne dar zuo braht
daz niwan der eine man,
der ir daz leit het getân,
den lîp dâ hete verlorn:
sô müese ir swære und ir zorn
allez dâ mit ein ende han.

(C585-591)

彼女はそのようなことを
考えもしなかった。
彼女はただ、彼女に悲しみを
与えた男一人（ハゲネ）だけの命を
奪い取りたかっただけなのである。
そうすれば彼女の苦しみも怒りも
全て消え失せてしまうのである。

この彼女に与えられた「悲しみ」(leit)が何であるかは、その少し前の箇所で明確に語られている。

Sit si mit grôzem jâmer ranc
und si grôz triuwe jâmers twanc,
die si truoc nâch ir lieben man,
als wir von ir vernomen han,
daz si pflac grôzer riuwe
durch liebe und durch ir triuwe,
daz si zwô sêle und ein lîp
wâren, dô si was sîn wîp,
dâ von si von schulden zam
der râche die si umbe in nam
als uns vil dicke ist geseit.

(C573-83)

彼女は大きな悲しみと戦い、
彼女の愛しい夫に抱いていた
真の誠実ゆえに悲しんだのであるから、
（語り伝えられるところによると、
彼女がジーフリトの妻であったとき、
二人の魂は一つであったのだから、
彼女は愛とその誠実のために
大変悲しんだと語られている）
それゆえに彼女が夫のために
為し遂げた復讐は彼女にとっては
正当なもの当然なのである。

夫の死による「心の悲しみ」(leit)からの復讐、夫への「誠実な愛」(triuwe)からの復讐ゆえに、復讐は『哀歌』においてはこのように正当化されているのである。しかし、『ニーベルンゲンの歌』においてはその復讐はハゲネのみならず、実の国王兄弟三人をはじめとするブルゴント族全体にまで及んだのである。なるほど『哀歌』においてはその悲劇の原因を全てハゲネの責任にしているけれども、しかし、殊に『ニーベルンゲンの歌』写本Bにおいては、その悲劇の原因を簡単に片づけることはできなかった。leit とその

罪との間の関係はそこではほとんど明らかにされていないのであって、雪崩^{なだれ}のように大きな leit が生じてくる個々の人物の行動の動機を、深い意味でその者の「罪」として見ることは不可能だったのである。そこでは運命の力が支配的だったのであり、leit も宿命的に人間の上に襲いかかってきたのである。運命の力によって、leit が leit を生み、それが宿命的に leit と rechen との幾重もの絡み合いへと発展し、ついにはクリエムヒルト一個人の leit が宿命的に両民族全体の leit となって、あらゆる「喜びも結局は悲しみ (leide, 2378, 4) に終わった」というところに「ニーベルンゲンの災い」 (der Nibelunge nôt, B2379, 4) の世界があるのである。

まとめ

以上のように見てくると、『ニーベルンゲンの歌』においてはこの leit という語が多様な意味で用いられていることがわかるであろう。『哀歌』における leit が、若干の例外を除けば、ほとんど一つの意味でしか用いられていないのに対して、『ニーベルンゲンの歌』における leit は実にさまざまな意味に用いられているのであって、まさにその多様性に特質があると言ってよいであろう。クリエムヒルトも、上で見てきたように、この多様な leit を体験するのであるが、しかし、ジーフリト暗殺後におけるクリエムヒルトの leit ——この叙事詩の理解のためにはきわめて重要なクリエムヒルトの leit ——に関しては、まず第一に「愛する者を失った悲しみ」として用いられていると言ってもよいのではあるまいか。要するに、クリエムヒルトの leit はハゲネの不実な策略によって引き起こされた愛しい夫ジーフリトの死による「心の悲しみ」 (herzeleit) であり、従って、彼女は愛しい夫への「誠実」 (triuwe) から復讐を遂げたのであり、この点において後編のクリエムヒルトの leit の復讐は、名誉 (êre) の侮辱から実行された前編のプリュンヒルトの leit の復讐とコントラストをなしてもいる。すなわち、クリエムヒルトは、プリュンヒルトの場合のように「名誉」 (êre) の回復から復讐を遂げたのではなく、またかつての素材においてのように黄金への欲望・権力への欲望などといった動機から復讐を遂げたのではない。愛しい夫への誠実から復讐を実行したという点がこの十三世紀初頭に成立した『ニーベルンゲンの歌』の新しいモチーフなのである。

従って、問題となる黄金返還の要求も、財宝はジーフリトの象徴だからである。ところが、この財宝はクリエムヒルトにとってはジーフリトの象徴ではあっても、ハゲネにとっては権力の象徴である。ここでハゲネの世界とクリエムヒルトの世界が対立しつつ、筋が展開しているのであり、ニーベルンゲン悲劇はまさにこの愛と権力との戦いであると言ってよいであろう。『ニーベルンゲンの歌』は新しいモチーフと古いモチーフが織り成す悲劇の世界なのである。このハゲネとの戦いの中でクリエムヒルトは、ともかくもこの leit から逃れようとするのではなく、leit をハゲネに与えることによって自らの leit を克服してゆこうと努めるのである。この leit がさらに他の leit をまき起こし、——クリ

エムヒルトはその leit を、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハの『パルチファル』におけるジグーネ⁴⁶⁾ のように差し止めることができなかったのである——宿命的な leit と rechen との絡み合いへと発展し、大惨劇をまき起こしたところにクリエムヒルトの leit の特質がある。このようにクリエムヒルトの leit が最後には悲劇的な「破滅」と結びつくところに、運命の力が支配する中で「歓びも結局は悲しみ(leide, 2378, 4)に終わる」という『ニーベルンゲンの歌』の悲劇的世界があると言ってよいであろう。

46) 『パルチファル』第三卷(138, 9-142, 10)参照のこと。要するに、ジグーネの婚約者シーアーナトゥランダーはオリルスとの一騎討ちで殺されてしまったが、ジグーネはただひたすら死骸のそばで悲しむことによって真実の愛を示すのみである。パルチファルが仇討ちをしてあげよう(141, 27-28)と申し出ても、ジグーネはパルチファルに悲しみが降りかかるのを恐れて、彼に違った道を教えてしまう(141, 30-142, 2)ほどである。

第十章 『ニーベルンゲンの歌』と ハルトマンのアルトゥース・ロマーン —— 名誉 (ēre) と英雄たち ——

『ニーベルンゲンの歌』におけるクリエムヒルトの復讐は、以上述べてきたように、愛しい夫ジーフリトの死による「悲しみ」(leit)からなされたものであり、この作品ではクリエムヒルトの誠実な愛が重要な役割を演じていることが容易に理解できよう。このようにクリエムヒルトは夫に対する「誠実」(triuwe)から仇敵ハゲネに復讐を遂げたのであるが、しかし、ニーベルンゲンの詩人は作品の中でクリエムヒルトの leit の復讐を賛美しようとしたのではないこともまた明らかである。ことに最終場面において、クリエムヒルトは、素材とは異なって、ディエトリーヒの家来に過ぎないヒルデブラントによって首を刎ねられるのである。確かに『ニーベルンゲンの歌』写本C及び『哀歌』においては、上で見てきたように、クリエムヒルトの triuwe が称えられている傾向が強いのであるが、しかし、原型に最も近いと言われている『ニーベルンゲンの歌』写本Bにおいては少なくとも詩人はクリエムヒルトの復讐行為に対して否定的であって、逆にその仇敵ハゲネの英雄的態度を称えている箇所も多いのである。ニーベルンゲンの詩人は、自らの作品の中でクリエムヒルトの復讐を賛美しようとしているというよりは、むしろ、クリエムヒルトの leit の復讐が実行されてゆく中で、それぞれの英雄がいかに自らの名誉 (ēre) を求めて自らの運命と戦っているかを描き出そうとしているのではあるまいか。ēre はこの作品では、leit と同様、とりわけ重要な役割を演じているものである。勇士たちはこの ēre を求めて行動するのであり、ēre の観念こそは『ニーベルンゲンの歌』の英雄たちの行動を支配する一大原動力である¹⁾とも言えよう。ジーフリトの場合もそうであり、ハゲネの場合もまた同様であり、さらにリュエデゲールにとっても同様であることは、上で考察してきたことから明らかであろう。『ニーベルンゲンの歌』における最も重要なこの三人の勇士の ēre は、入念に検討してみると、確かにそれぞれに異なっていることが明らかであるが、しかし、いずれも彼らの ēre が死(破滅)と結びついているところに共通点がある。この点でハルトマンの作品における英雄たちとは異なるが、この相違はさらに英雄叙事詩とアルトゥース・ロマーンの本質的相違にも触れるものである。そこで本章では、これまで詳細に述べてきた上記のニーベルンゲンの三大勇士たちの行動を ēre の観点からまとめながら、彼らの ēre をハルトマンの二つのアルトゥース・ロマーン『エーレク』及び『イーヴェイン』の主人公たちの ēre と比較考察することによって、英雄叙事詩とアルトゥース・ロマーンの相違を明確にし、『ニーベルンゲンの歌』は中世文学の中において特異性を有する作品であることを主張したい。

1) 相良守峯：ドイツ中世叙事詩研究 39頁参照

I. 『ニーベルンゲンの歌』における *êre* と英雄たち

1. 英雄ジーフリトの *êre*

ニーデルラントの英雄ジーフリトの *êre* (名誉) を考察するにあたって、まず *êre* という語は本来いかなる意味を有する単語なのであろうか。中高ドイツ語の *êre* を新高ドイツ語の *Ehre* という概念と同一視してはならないことは、Fr. マウラーも指摘している通りである。*êre* はつまり主として具体的な意味を持っており、いわゆる外面的・客観的な名誉 (*äußere, objektive Ehre*) を意味しているのであって、例えば *Ansehen* (声望)、*Anerkennung* (賞賛)、*Geltung* (価値)、*Würde* (威厳) あるいは *Sieg* (勝利)、*Erfolg* (成功)、*Glück* (幸運)、*Lohn* (報酬)、*Gewinn* (獲得) さらに *Pracht* (華麗) 等というような語でその都度適宜に理解されなければならない²⁾。ジーフリトの本来の *êre* もニーベルンゲンの財宝を獲得し、また竜をも倒した英雄的行為に基づく外面的・客観的な名誉であると言うことができよう。

ところが、この作品においてもっと重要な役割を演じているのが貴婦人へのミンネである。ミンネも宮廷的騎士の *êre* の一つであり、それは騎士たちに名誉の感情を抱かせ、彼らを駆り立てる。『ニーベルンゲンの歌』のジーフリトも同様であり、ブルゴントの国に世にも美しい乙女がいるという噂を聞いて (44, 2)、彼は自らその乙女の愛を求めて旅立つ。彼女の並々ならぬ美しさと気高い心ばえは広く世に知られ (45, 1-2)、「位高き乙女の愛」 (*hohe minne*, 47, 1) を求めているジーフリトにとって、この高貴な王女の愛を得れば大きな名誉である (vgl. 49, 2-3)。しかし、それだけにブルゴント国に到着したジーフリトは悩み、この姫への愛のためには幾多の「苦しい目」 (*arbeit*, 137, 4) にあわねばならない。その幾多の「苦難」を克服した末にようやくジーフリトはクリエムヒルトの愛を得、彼女を妻にすることができるのであり、ジーフリトのミンネを求めての数々の冒険は、こうして名誉あるものにまで高められているのである。

ところが、このジーフリトの *êre* は、あとで述べるハルトマンの作品における英雄たちとは異なって、最初から運命の力によって滅びることが暗示されている。作品の冒頭で語られる「クリエムヒルトの鷹の夢」がすでにジーフリトの死をほのめかしている。英雄ジーフリトは、クリエムヒルトのミンネを求める限り、最初から死ぬ運命にあったと言わなければならないのである。一体それはなぜであろうか。

ジーフリトはこの作品ではミンネを求める騎士であるが、しかし、伝承されてきた古代ゲルマンの英雄であることも前提とされている。それを前提としなければ、筋の展開は不可能であり、そのジーフリトの古代的な性格はハゲネによって語られている。それによると、英雄ジーフリトはニーベルンゲンの武士七百名をも征服してその財宝の所有者 (*des hordes herre*, 97, 4) となったばかりか、あるときには悪竜をも退治してその血を浴び、肌が不死身の甲羅と化 (*hurnîn*, 100, 3) したという英雄である。どんな武器も彼を傷つけ得

2) Vgl. Friedrich Maurer : *Tugend und Ehre*. 1951. S. 340. (In : *Dichtung und Sprache des Mittelalters*. Bern/München 1971.)

ないという不死身の英雄でありながら、しかし、ジーフリトは最後には死ななければならぬが、それは一言で言えば、財宝の霊の力による死である。ジーフリトはニーベルンゲン族を打ち倒し、侏儒アルプリーヒからは隠れ蓑をも奪い取って、ニーベルンゲン財宝のことごとくを所有してしまった(97,4)がゆえに、最後には死ななければならぬのである。その財宝の一つである隠れ蓑(Tarnkappe)は、「秘密な」(tarn)——中世ドイツ語で「隠れる」(tarnen)から出た形容詞——「オーバー」(kappe=mantel)という意味³⁾であり、そのオーバーを着れば、姿が見えなくなるという魔法の宝物である。ジーフリトは事実のちにこの隠れ蓑を身につけて二度にわたって秘策を実行したがために、ついにはハゲネに殺害されてしまう運命にあったのである。暗殺後宝庫の番人アルプリーヒはそのことを明らかに語っている。

<<Nu ist ez Sîfride leider übel komen,
daz uns die tarnkappen het der helt benomen
unt daz im muose dienen allez ditze lant.>> (1120,1-3)

「ところが、あの勇士が我々から隠れ蓑を奪いとり、
この国全土があの方の支配するところとなったということが、
結局あの方の不幸を招くこととなったのだ。」

隠れ蓑が素材において用いられた形跡はなく、『ニーベルンゲンの歌』の作者が初めて導入したものであるにしても、ジーフリトの死にはとにかくニーベルンゲン財宝の霊の力が働いていたことが明らかである。「ニーベルンゲン」(Nibelungen)とは暗黒を意味し、ニーベルンゲンの宝を持つ者は滅びなければならない⁴⁾。ジーフリトはニーベルンゲンの宝の所有者となり、ニーベルンゲン国の主人となったがために、滅びなければならない運命にあったのである。ここには古代ゲルマンのニーベルンゲン伝説に由来する不思議な力が作用しており、前編の主人公ともいべきジーフリトは最初から死すべき運命にある古代ゲルマンの英雄である。その古い素材に由来する財宝の呪いによる死が、この作品の中ではミンネを求める勇士の死と重なり、ジーフリトはミンネを求める限り破滅する運命にあるのである。従って、ここには古代ゲルマン的な要素と中世騎士的な要素とが見事に溶け合い、重なり合っていると言えよう。中世的なミンネもここでは古代ゲルマン的運命観の支配下にあるのであり、「高きミンネ」のe reも完成すると同時に、古代ゲルマン的な運命によって脆くも崩れ落ちてしまうのである。ここにe reとしてのミンネを求めるジーフリトの悲劇的世界があると言えよう。

3) 吉村貞司：ニーベルンゲン伝説 鎌倉書房1943年41頁参照

4) 同上書38-9頁参照

2. 獐猛なる(grimme)勇士ハゲネのēre

トロネゲの勇士ハゲネにとっても重要な役割を演じているのがēre(名誉)の観念である。絶えず名誉に目を向けながらハゲネはブルゴント国王の重臣として生きている。名誉(ēre)、すなわち、彼の国王の声望(Ansehen)は、常にハゲネの心の中にあり、彼はその名誉を全身で護るのである。しかし、彼のēreもまたデモーニッシュなものと結びついている。ハゲネの性格が最初に紹介されるジゲムントの警告にはこうある。

<<Ob ez ander niemen wære wan Hagene der degen,
der kan mit übermüete der höhverte pflegen,
daz ich des sēre fürhte, ez mūg' uns werden leit,
ob wir werden wellen die vil hērlīchen meit.>> (54)

「例えば、あのハゲネという豪傑のことだけ考えてみても、あれは思い上がって、無礼なこともしかねぬ男だ。もし我々が、あの申し分のない娘を所望でもしたら、我々の身に災いをかもす恐れがないとは言えぬ男だ。」

ハゲネは、すでに述べたように、筋の悲劇的展開には必ず関与してくるという悪魔のような存在であり、ジーフリトとはほとんどの点で正反対の人物として語られている。従って、ジーフリトの存在はハゲネにとって好ましくない存在であり、出会った最初の瞬間からすでに敵である。ジーフリトが戦闘や求婚の旅でことごとく成功を収めるたびにその存在はハゲネにはますます嫌な存在となり、それだけに一層彼は主君たちのēre(名誉)である勢力と地位のことを心配しなければならない。クリエムヒルトとプリュンヒルトの口論で殺害の口実を得たハゲネは、ジーフリトが亡き者となったらいかに勢力の強化になるかを力説する(870)。プリュンヒルトの恥辱の復讐(873,3;vgl.1790,3-4)がただ口実に過ぎなかったことは、ジーフリト暗殺後のハゲネの言葉(993詩節)⁵⁾からも明らかである。ハゲネの本来の望みは、ジーフリトを亡き者とすることによって、自らの国王のēre(権勢)を護ることだったのである。しかし、今度はクリエムヒルトの復讐を警戒したハゲネは、彼女の財宝を奪い取らねばならない。権力であり、本来のēreを意味する財宝を強奪することによって、ハゲネは彼女の勢力を弱めると同時にグンテル王の勢力増加を計ろうとする(vgl.1107)。そのためにはクリエムヒルトとブルゴント国間の和解が必要であり、ハゲネは和解を進言する。それが財宝のためであることは改作の写本C(1127)⁶⁾からも明白である。和解のあと、クリエムヒルトが財宝をニーベルンゲンの国からブルゴントの国

5)第七章 195頁参照

6)第四章 135頁参照

へ移すと、ハゲネは——国王兄弟の反対にもかかわらず——その財宝を奪い取ったばかりか、ゲールノートの提案(1134)を巧みに利用して、最後には財宝をライン河に沈めてしまった。

このようにハゲネはグンテル王の臣下であるが、国王らの反対にもかかわらず全てがハゲネの望み通りに進んでおり、ハゲネこそ実際の指導者であると言える。しかし、そのハゲネが初めて自分の提案を貫き通すことのできないときが来る。エッツェル王求婚のときとフン族の国への招待を受けたときの二つの場面がそれである。いずれの場合にもハゲネ一人のみが反対するが、初めてハゲネの進言が拒否されるのである。こうしてハゲネの忠告は二度にわたってその効力を失っていたが、しかし、ゲールノートとギーゼルヘルとの非難めいた言葉(1462-3; vgl. 1512)に名誉を傷つけられたハゲネは、怒りに燃えてそのフン族の国への招待の旅に同行することを決意する(1464, 2-4)。このときからハゲネの *ere* は、国王の声望を護るというよりは不屈の精神を貫き通す武士の名誉である。不吉な夢(1510; vgl. 1509)ももはや彼の邪魔をしない。名誉(vgl. 1510; 1512)のためなら、どんな恐怖にも左右されはしない(1513, 1)。この決意でもってハゲネは再び内的な自由を取り戻したのである。

こうして困難に立ち向かって進んでゆくハゲネの勇壮な姿は、一見、ジーフリトの姿、すなわち、クリエムヒルトの不吉な夢にもかかわらず策略の戦闘へと勇敢に出かけてゆく姿によく似ている。しかし、ハゲネの姿がジーフリトの場合と異なっている点は、ハゲネは自らの破滅を自覚しているということである。なるほどジーフリトは結局は死ぬことになるが、しかし、旅立ちの際その死を認識していたわけではない。それに対してハゲネは破滅をしかと認識していたことは疑いがない。彼が武装をして出かけるようにと忠告した(1471, 3-4)のも、まさにその死の認識のためである。その滅亡の認識が最も明白になるのは、旅路の途中でドーナウ河を渡るときである。王室の司祭以外は誰も生きて帰れないという占い(1542)を妖精の一人から聞いたハゲネは、ドーナウ河を渡る際、司祭を船から投げ落とす。しかし、司祭は泳ぎもできなかったのに神に救われて元の岸にたどり着くことができたのを見て、ハゲネはその水の乙女の占ったことが避けがたい運命であることを悟ったのである。

er dahte: << diese degene müezen verliesen den lîp. >> (1580, 4)

彼は思った。「これらの勇士は滅びなければならない。」

しかし、この瞬間ハゲネの内から英雄的なものが生じてきたのである。英雄的なものは「ある」(sein)のではなく、「成る」(werden)ものである。ハゲネが真に英雄であるのも、滅亡を自覚しそれに向かって突き進んでゆくまさにこのときからである。ドーナウ河を渡ってしまったあとでハゲネは船を打ち壊して河に流してしまうが、これも滅亡を恐れない勇敢なハゲネの英雄的精神のなせる行為である。帰るときにいかにして河を渡るのかとい

うダンクワルトの質問に対して、「二度とそのようなことはあるまい」(1582,4)と答えるハゲネはさらに続けてほかの者たちにも滅亡の自覚を促す(1583)。まさにこの不屈の英雄精神のためにフォルケールはハゲネを尊敬するようになり(1584)、両者の間には揺ぎない友情が芽生えてくる。それはもちろん、例えばあとで述べることになるイーヴェインとガーヴェインの間のように共に生を構築するといった友情ではなく、共に戦い死ぬといった友情である⁷⁾。このように滅亡の運命を悟っても、フォルケールと共に英雄的なものへと自らを高めるハゲネは、寄せて砕ける波の中の巖であり、揺ぐことの無い英雄となったのである。

フン族の国に到着してこのハゲネが中心人物となるのは必定である。彼は今や単なる防衛という消極性に甘んじる男ではなく、クリエムヒルトの挑戦に反抗するという態度を見せる。ジーフリトの剣を持ってクリエムヒルトの前に現われる挑発的な態度(1783-4)等がそれである。以後、いかなる苦難にあってもハゲネは決して揺ぐことの無い勇士であるが、その中でも最も彼の強さを明示しているのが最終場面である。疲労のために捕えられてクリエムヒルトの前に突き出されたハゲネは、財宝のありかを尋ねられても国王兄弟との誓約を持ち出すことによって、ついにはクリエムヒルトにグンテル王の首を刎ねさせ、財宝の秘密を自分だけのものにする。勝利の象徴である財宝のありかを明かさぬまま滅びていったハゲネは、巖のように揺がぬ英雄として不屈の精神を絶対化する中で強く生きたのである。例えば、ジーフリトやディエトリーヒはなるほどハゲネより外面的により強く理想化されて語られているが、しかし、内面的な強さと不屈の精神においてはハゲネが疑いもなく第一人者である。ハゲネは生まれつきの暗さを絶対的な暗さにまで押し進めたのであった。詩人によってハゲネの形容詞としてたびたび用いられている grimme も、「地下」と「悪魔」の意味を含んでいる⁸⁾。ハゲネの不屈の精神はまさに暗い悪魔の力であるということを詩人はその語でもって常に認識していたのではないか。ハゲネの *ere* はまさにデモニッシュなもの結びついており、ハゲネの *ere* あるところ常に悪魔が潜む暗黒の世界なのである。

7) Vgl. Gottfried Weber : Das Nibelungenlied. Problem und Idee. Stuttgart 1963. S. 48-9.

8) Vgl. ebd. S. 57. u. auch S. 239-41.

3. 宮廷的騎士リュエデゲールの *ēre*

リュエデゲールにおいても *ēre* の觀念が重要な役割を演じていることは、ハゲネの場合と同様である。しかし、獷猛なハゲネとは逆に、リュエデゲールはまずは「氣高く品位ある騎士」として登場する。彼の特性はエッケワルトの言葉の中で明確に表現されている。

<<Der sitzet bî der strāze und ist der beste wirt,
der ie kom ze hūse. sîn herze tugende birt,
alsam der sūeze meie daz gras mit bluomen tuot.
swenne er sol helden dienen, sô ist er vrœl îch gemuot.>> (1639)

「あの方はこの街道筋に居を構えており、世に住む人のうちでも最も立派な城主です。彼の胸が徳性を^{はぐく}育むことは、さながら快い五月が草木の花を育てるに似ており、武士たちの世話をすることが、あの方には喜びなのです。」

客人たちを優雅にもてなすことは彼にとっては大きな名誉だったのである。しかし、この名誉感情のために彼は悲惨な状況へと追い込まれてゆく。ブルゴント族とフン族との戦いとなったとき、名誉にかけて彼はブルゴント族を相手に戦うことはできない。ブルゴント族は彼がベッヒェラーレンで歓待したばかりか、フン族の国へと案内した客人でもあり、さらに娘を王弟ギーゼルヘルに嫁がせる約束をもした間柄だからである。しかし、一方フン族のエッツェル王には臣従の義務があり、またクリエムヒルトにはエッツェル王求婚の際に真心より誓った誓言があるので、彼はフン族の国王夫妻を見捨てることもできない。名誉はまさに彼の運命の分かれ目である。クリエムヒルトが彼にかつての誓いを思い出させて助力を願い出ると、彼は名誉 (*ēre*) と魂 (*sēle*) を区別してこう嘆く。

<<Daz ist ane lougen: ich swuor iu, edel wîp,
daz ich durch iuch wāgte *ēre* unde ouch den lîp.
daz ich die *sēle* vliese, des enhan ich niht gesworn.
zuo dirre hōhgezîte brāht' ich die fürsten wol geborn.>> (2150)

「あなた様に名誉 (*ēre*) や生命をも捧げるとお誓い申し上げたことは否みは致しませぬ、氣高いお妃様。しかし魂 (*sēle*) までも犠牲にするとは誓いませんでした。私はあの生まれ貴い王様方を自分でこの饗宴にお連れ申したのでございます。」

リュエデゲールの真の *ēre* (名誉) の根底にあるものは *sēle* (魂) であって、財産・

権勢ごときものではない。真心 (triuwe) を失ってこの場で死ぬくらいなら、領土も城も全ての財をも投げ捨てて、もって生まれた足で異国へさすらいの旅に出かけたい (B2157; C2215-6)ことはテキストからも明白である。しかし、この望みはリュエデゲールにとって可能ではない。国王と臣下の絆は断ち切れないほど強いものであり、さらに国王夫妻は彼にますます援助を願い出るからである。このようなリュエデゲールの「苦悩」(2159-61)に対してクリエムヒルトが無慈悲な要求を続けたとき、彼の決意も定まった。それはもちろん討死の決心である。

しかし、まさにこの瞬間ハゲネの場合と同様にリュエデゲールの内からも英雄的なものが生成してきたのであり、討死を望んで破滅の戦場へと向かう彼は、もはや宮廷の騎士ではない。勇敢にして誉れ高い武将たるに恥じない働きぶりを示すリュエデゲールの行為は、まさに古代ゲルマンの英雄さながらの行為である。滅亡すべき宿命を感じ知るに至っても回避せずに、反対にその運命に向かって突き進んでゆく異教的・ゲルマン的英雄という点でリュエデゲールの *ere* はハゲネの *ere* と同じである。その限りにおいては、詩人によって賛嘆されるリュエデゲールの「美德」(tugent)は古い意味に属する「英雄的行為」⁹⁾を意味していると言えよう。

しかし、彼の「美德」(tugent)は単なる「英雄的行為」のみならず、宮廷的な「気高き徳性」(hochherzige tugent)をも意味している——この点ハゲネとは異なる——ことはもちろんのことである。それが最も明らかになるのが楯贈与の場面である。自らの楯を気前よく贈与するという高貴な心は宮廷的基盤において成長した花である¹⁰⁾。このリュエデゲール最後の贈物に接して心を動かされたハゲネの動揺も、リュエデゲールのこの「宮廷的美徳」を強調するものである。このようにリュエデゲールの死の中には異教的・ゲルマン的なものと宮廷的なものとが素晴らしく融合しているのであり、その両方面からの tugent に支えられて彼は辛うじて彼の *ere* (名誉)、つまりはその根底にある *sele* (魂)を救っているのである。しかし、その魂の救いは例えばハルトマンにおけるようなキリスト教的なものではなく、結局はそれが英雄的な死と結びついているところにリュエデゲール悲劇の特質があり、その限りにおいてはジーフリトの *ere* 及びハゲネの *ere* と一致するところがある。いずれにせよ *ere* が結局は破滅へと通じているという点において、この『ニーベルンゲンの歌』の英雄たちの *ere* はハルトマンのアルトゥース・ロマーンにおける *ere* とは本質を異にするものである。『ニーベルンゲンの歌』における英雄たちの *ere* をもっとはっきりときわだたせるために、以下ではハルトマンのアルトゥース・ロマーンにおける主人公たちの *ere* の特質を考察してみることにしよう。

9) Vgl. Matthias Lexer : *Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch*. 33. Auflage. Stuttgart 1972. S. 233. (tugent = Männliche Tüchtigkeit, Kraft, Macht, Heldentat.)

10) Vgl. Hans Naumann : *Rüdigers Tod*. DtVjs. 10, 1932. S. 399.

Ⅱ. ハルトマン作『エーレク』における *e re* の構造

1. エーレクの *e re* —— 競技とミンネ ——

ハルトマンの初期の作品『エーレク』(Erec, 1180-85)¹¹⁾ は一般にフランスのクレチアン・ド・トロワ (Chr stien de Troyes, 1135-90) の作品『エレクとエニド』(Erec et Enide, 1170)を翻案したものであると言われているが、この作品においても、『ニーベルンゲンの歌』と同様、*e re* の概念は重要である。冒頭で語られる「白鹿」狩りも「はいたか」競技も *e re* を求めている競技である。カラディガン城 (Karadigan) のアルトゥース王 (Art s) は、すなわち、復活祭に「白鹿」(den w zen hirz, 1757) 狩り——これを射た者には宮廷一の美女に接吻できるという名誉 (*e re*) が与えられる——を催して騎士たちとともに出かけてゆく。王妃ギノヴェール (Ginover) もこの作品の主人公である若き騎士エーレク (Erec) と侍女たちを従えてそれについてゆく¹²⁾。その箇所ではハルトマンのテキストは始まっている。そこで王妃ら一行が出遭ったのは、婦人と矮人こびとを伴った一人の見知らぬ騎士である。王妃はその騎士の名前を知りたいと思い、侍女一人とエーレクを遣わせて尋ねさせるが、侍女もエーレクも矮人から鞭で打たれてしまう。これは王妃の栄誉 (*e re*) のみならず、エーレクの騎士としての名誉 (*e re*) の侮辱 (leit, 111) である。まさにこの屈辱 (un*e re*, 107; schande, 116) の報復のため、また王妃の栄光 (*e re*, 134) のために、エーレクはその騎士の跡を追って旅立つ。フリードリヒ・マウラーが言うように、加えられた leit、つまり外側からの侮辱 (Entehrung, Beleidigung) が『エーレク』の筋を動かし始めると言ってよいであろう¹³⁾。エーレクの行動は恥辱 (leit, 167) に見舞われた者のそれである、と詩人ハルトマンによっても明確に語られている。

こうしてエーレクは、身の恥辱 (s n leit, 220) を晴らすことのみを考えて騎士の跡を追ってトゥルメイン (Tulmein) と呼ばれる城へとやって来るが、その城主イーマーイン公 (der herzog  Im  n) は二年前から「はいたか」(sparw re, 189) をめぐる宴 (hochz t, 184; 201) を催している。それは、自分の連れした婦人が第一の美女であることを騎士が決闘に勝つことによって証明したならば、その婦人が銀の竿の先端にとまっているはいたかを得ることができるというものである。エーレクに恥辱を加えた例の騎士は、す

11) テキストは Albert Leitzmann (Hrsg.) : Hartmann von Aue, Erec. 5. Auflage besorgt von Ludwig Wolff. (Max Niemeyer Verlag) T bingen 1972. を使用し、邦訳は平尾浩三訳 (郁文堂刊「ハルトマン作品集」) を引用するが、字数等の都合から表現を若干変えるところもある。

12) この冒頭部分はハルトマンの作品では欠落しているが、クレチアンの作品から容易に推測される。(Vgl. Hugo Kuhn: >Erec<, 1948. In : Hartmann von Aue. Wege der Forschung 359. Darmstadt 1973. S. 18.)

13) Vgl. Friedrich Maurer : Leid. Studien zur Bedeutungs- und Problemgeschichte, besonders in den gro en Epen der staufischen Zeit. Bern/M nchen 1951. S. 42.

で二度も連れの婦人のためにはいたかを獲得し、三度目もわがものとばかり、揺がぬ名誉 (ēre, 209) を求めて、今またこの城にやって来たのであった。この騎士イーデールス (Idērs) とはいたか競技 (des sparwæres strîtt, 453) のことをエーレクがその日の宿泊所となった廃屋の翁から聞き知ると、エーレクは決闘の決意をして、勝利を取めた場合には翁の娘エーニーテ (Ēnīte) を妻にする約束をする。従って、恥辱 (leit, 481; grōz laster, 488) の復讐 (gerechen, 491) のための決闘が、はいたか、すなわち、エーニーテの美と愛を賭けた闘いとなったのである。翌朝行われた決闘は、接戦ののち、エーレクの勝利に終わり、エーレクは自らと王妃の名誉 (ēre) を回復すると同時に、エーニーテのためにはいたかをも手に入れる。はいたかを得たエーニーテは翌朝エーレクとともにアルトゥース王の宮廷へ向かうが、イーマーイーン公の近親の乙女から贈られた良馬 (1423-53) で出かけるエーニーテは、幸せそのものの象徴である。この二人の初めての旅において二人の間にはミンネ (minne) が芽生えてくる。

also si dō beide	広い野に出た
kāmen ūf die heide,	二人の旅、
Ērec begunde schouwen	エーレクは、
sīne juncvrouwen.	わが妻となる姫に見とれる。
ouch sach si vil dicke an	エーニーテ姫もはにかみながら、
bliuclīchen ir man.	たびたび夫を見つめている。
dō wehselten si vil dicke	繰り返し交わす
die vriuntlīchen blicke.	やさしいひとみ、
ir herze wart der minne vol:	二人の心はミンネ (愛) に満ち、
si gevielen beide ein ander wol	互いがますます、いよよますます
und ie baz unde baz.	気に入った。
dā envant nīt noch haz	よこしまな思いも憎しみも、そこには
ze blībenne dehein vaz:	とどまる家がなく、誠実と、不変の愛が、
triuwe und stæte si besaz.	その場をしかと、占めたのである。

(1484-97)

二人の愛は、このあとエーニーテの姿が美しく描かれることによってますます高められる。アルトゥース王の宮廷に到着したエーニーテは最高に美しい乙女であると語られ、今やエーニーテがこの宮廷で最高の美女、否、世界で最高の美女たることに誰も異論をはさまず、先に行われた白鹿狩りで権利を得ていたアルトゥース王がエーニーテに口づけしたのも当然のことである。はいたか競技のみならず白鹿狩りでもその美が認められて二重の榮譽に輝いたエーニーテは、さらにのちには天使 (engēl, 1843) にも喩えられ、その美しさ^{たと}と高貴な姿にエーレクの胸がかき乱されたのも無理からぬことであつた。そこで二人を支配して

いたのはミンネ (diu Minne, 1859)だったのである。

こうしてエーレクとエーニーテの二人は聖霊降臨祭の日に結婚式を執り行い、イングランド・カントワルイエ (Cantwarje ûz Engellant)の司教の手で結びつけられた。この饗宴の栄華は、多くの客人の列举に始まって、騎馬試合 (turnei)の描写によって宮廷的に飾られているが、この試合の長い描写 (2222-807)の中で特徴的なのは、エーレクが理想の騎士にまで高められていることである。彼は試合で最高の武者ぶりを発揮したばかりか、敬虔な気持をも持ち合わせた騎士として描かれており、ついには騎士の理想とされるガーヴェイン (Gawein; vgl. 2720-51)よりも高く評価され、有能の騎士 (der tugenthafte man, 2810)として世の賞賛 (loben, 2825)を得たのである。こうしてエーニーテはその美で、エーレクはその武者ぶりでそれぞれに最高の賞賛を得たのち、アルトゥース王のもとを去って故国カルナント (Karnant)に帰ると、父より国の支配を委ねられ、ついにはエーレクは王、エーニーテは王妃の座につくことができたのである。

しかし、二人が到達したかに見えたこの最高の榮譽 (êre)は長続きしなかった。カルナントに帰国してからは、エーレクは思いのことごとくをエーニーテ夫人へのミンネに注ぎ、いかにすれば万事を快適にできようかと、そのことにのみ心を傾けている。彼の生きかたは変わったのである。

Êrec wente sînen lîp	妻にかまけて、エーレクの身は、
grôzes gemaches durch sîn wîp.	いと安楽なものに慣れ傾いた。
die minnete er sô sêre	妻への愛はゆゆしくて、
daz er aller êre	ただ妻ゆえに騎士たるものの名声は、
durch si einen verphlac,	つゆかえりみられることもなく、
<u>unz daz er sich sô gar verlac</u>	<u>彼はついには騎士の本務を忘れてしまい、</u>
daz niemen dehein ahte	何びともはや彼には
ûf in gehaben mahte. (2966-73)	敬意を抱くことはできなくなった。

彼の怠惰は宮廷全体に影響を及ぼし、宮廷はあらゆる歓びを失い、恥を晒していた (2988-90) のである。この悪評がエーニーテの耳にも達したとき、彼女は憂いを胸に抱いて耐えていたが、夫が眠っていると思った寝室で、深い溜め息をついて思わず憂いを口の端にもらしてしまう。ところが、エーレクはそれをはっきりと聞き取り、彼女の憂い (sorgen, 3036) について詰問する。エーニーテの打ち明けによってエーレク自身の耳にも人々の悪評が入って、エーレクはいともたやすく êre を失ってしまった。しかし、この êre は、あの矮人^{こびと}による鞭打ちのときとは全く異なって外側から奪われたものではない¹⁴⁾。名誉の喪失は今や加えられた leit ではなく、名誉はエーレクの倫理的怠惰、「騎士としての本

14) Vgl. ebd. S. 44.

務を忘れた」(sich verliſſen, 2971) こと、つまりはエーレクの落ち度によって失われてゆくのである¹⁵⁾。これは『ニーベルンゲンの歌』における leit とは異質のものであり、ここに『エーレク』特有の苦難の旅が始まる。エーニーテは夫の前を進み、何を聞こうと何を見ようと、口をきくことを禁じられたままで、旅を続けなければならない。妻の打ち明けでしか自分の怠惰に気づくことのできなかったエーレクは、夫と妻とが互いに隔てられた苦難の旅において、ミンネと騎士道の調和を保つ理想の騎士へと成長しなければならない。これがその冒険の旅でエーレクに課せられた課題である。では、その苦難に満ちた数々の冒険をエーレクはいかにして克服することができ、いかにして理想の騎士への道を辿っていったのか、それを以下において検討し、『エーレク』における e re の特質を探ることにしよう。

2. エーレクの冒険 —— arbeit と triuwe ——

第一日目の冒険

旅に出てまず第一夜、エーレクとエーニーテは森の中で三人の盗賊に出遭う。盗賊にまず気づいたのは、夫の前を歩くエーニーテである。これが彼女を襲ってきた最初の心痛(herzeleit, 3125)である。旅の途上何を見ても口をきいてはならない、口をきけば命はない、と命令されているものの、警告しないと夫は盗賊たちの不意討ちに遭ってしまう。夫に向ける愛慕の情が誠実な(triuwe, 3143)ものであればこそその心痛(leit, 3144)である、と詩人ハルトマンも語っている。二者択一に迷ったのち、エーニーテは、立派な殿の命が失くなるよりは自分の命が失くなる方がよい(3168-79)という決断を下して、夫に警告して盗賊からの不意討ちを免れさせたが、この夫の命令に反する妻の警告は、例えばペーター・ヴァプネフスキーも述べているように、決してエーニーテの自制と従順さの欠陥を非難するものではなく、エーニーテ夫人が命令や法を越えて夫を愛していることを示すものである¹⁶⁾。エーニーテ自身も、誠をこめた愛ゆえに(durch triuwe, 3184; durch mīne triuwe, 3262) 敢えて警告したことを二度もはっきりと夫に示している。にもかかわらず、その罰としてエーニーテには馬丁の役が与えられ、彼女は三頭の馬の面倒を見なければならない。これはエーニーテにとって苦難(arbeit)であるが、彼女はこの苦役に耐える。二人が初めて馬を進めた先の幸せな旅とは対照的に、今回の旅は苦難(arbeit, ungemach)に満ちたものであるにもかかわらず、エーニーテは全てのことを耐え忍ぶ。エーニーテの誠実さが明らかに窺えよう。

エーニーテの誠実さは、二度同じことが繰り返されることによってさらに強められる。すなわち、二人が三マイルも行かぬうちに、今度は盗賊五人が待ち伏せているのである。そ

15) Vgl. ebd.

16) Vgl. Peter Wapnewski : Hartmann von Aue. 7. ergänzte Auflage. (Sammlung Metzler Band 17) Stuttgart 1979. S. 55.

れに気がついたのももちろん前に行くエーニーテである。再度苦悩に陥るが、先程と同じく誠実の心から (durch triuwe, 3415) 自分の身がどんな苦境におちようとも、勇を奮って警告しなければならないという決断を下す。そのためにエーレクは再度命拾いをするが、命令違反の罰としてエーニーテはさらに五頭加えて全部で八頭の馬の面倒を見なければならない。高貴な婦人には、いかに反した仕事とはいえ、彼女は心おだやかにそれに耐える。さらに増してゆく難儀にもエーニーテは屈することなく、夫エーレクへの誠実を示すところに喜びを見いだしてゆく。この苦難 (arbeit, ungemach) の旅の中にエーニーテの誠実 (triuwe) がありありと読み取られうるところにこの一連の冒険の特徴があると言えよう。

第二日目の冒険

二人の旅はこのように苦難 (arbeit, ungemach) の旅として特徴づけられる。彼らの求めるものは安楽 (gemach) ではなく難儀 (arbeit, ungemach) である。一晩中歩き続けた翌朝、森から抜け出たところで出遭った一人の小姓が二人の姿を見て心を動かしたのも、その苦勞 (arbeit, 3514; 3528; 3533; 3586) と難儀 (ungemach, 3511) の姿からである。そのため小姓は二人に肉とパンとぶどう酒を与えたが、その恵みものに対するお礼としてエーレクが小姓に馬を一頭だけしか与えなかったのも、実はエーニーテを馬丁の役で苦しめるためだった。彼らが安楽 (gemach) を求めているということとは、その小姓が仕える伯爵 (ガロエイン)¹⁷⁾ からその城に逗留するようにと出迎えられた際にも明らかである。その出迎えを辞退して、彼らは旅宿に宿泊する。しかもその旅宿では、エーレクはエーニーテと一緒に食べることも一緒に寝床に就くことも許さなかった。これも難儀 (ungemach) の一形態であり、彼らには安楽 (gemach) が許されていなかったことが明らかである。

一方、逗留を拒まれた伯爵はこの旅人たちとは正反対のものを求める誘惑的な人物として描かれている。エーニーテの美しさに心を奪われて、旅宿へ赴いてエーニーテを口説く言葉は、華やかな生活への誘惑ばかりである。しかし、誠実なエーニーテはその誘惑に負けはしない。それどころか女性に具わった見事な知恵 (list, 3842; 3907; 3940) で、伯爵に真夜中の攻撃を勧めると同時に偽りの約束をすることによって、エーニーテは自分の名誉と夫の命 (ir ere und ir mannes lip, 3942) を守ろうと努める。エーニーテ夫人は誠実な女性 (ein getriuwez wîp, 3943) であったと詩人ハルトマンによっても語られている。この誠実はエーニーテがエーレクに警告すべきか否かと迷う悩み (3972-92) の中に最も明白に読み取られるが、今回も自分の命より夫の命の方が大切だという決断を下して、エーニーテは、誠実 (triuwe, 3993) の命ずるままに、夫の寝床に近づいて夫の前に跪いて一部始終を語る。そのためエーレクは伯爵の真夜中の攻撃を退けたのであるが、伯爵をだまし欺いたエーニーテの行為を詩人は罪なきもの (âne sünde, 4027) と語っている。しか

17) クレチアンの作品ではこの伯にガロエインという名前がつけられているが、ハルトマンでは名前なしである。

し、エーニーテは逃げる途中再び夫から叱責を受ける。二度と繰り返さぬことを誓うや否や、またエーニーテはその誓いを破ることとなる。つまり、彼女は伯爵が大勢の助太刀を伴って追いかけてきたことにすぐさま気がついたのである¹⁸⁾。このときも、詩人が語っているように、誠実の結ぶ絆(der Triuwen bant, 4145)が求めるままに、彼女はすぐに誓いを破ったのであり、そのためにエーレクは不意討ちに遭わずに、伯爵を打ち倒すことができた。それにもかかわらず、エーレクはエーニーテの度重なる違背を咎めたが、叱責は今までよりも増して激しかった。エーニーテは繰り返さぬことを改めて誓ったものの、やはりそれをまた次の冒険で守らぬこととなる。

第三日目の冒険

これまでの苦難は、しかし、これから起こる危険と苦難(nōt und ungemach, 4273)に比べれば些細なものである。道を進んでゆくうち、次に攻撃を仕掛けようとしていた敵は、今までのような盗賊(roubære)でも、また伯爵(grave)でもなく、アイルランドの小男にして勇敢なる国王(künec)ギフレイス(Guivreis)であったからである。冒険は回を重ねるごとにますます危険なものとなってくるのである。この勇敢なる男の接近を夫に知らせるべきか否かのエーニーテの悩みの部分は、残念ながら欠落しているが、エーニーテの誠実(triwe, 3419)が改めて証明されたことは、詩人ハルトマンがそのあとに語っている。彼方から激しく接近してきたギフレイス王は、エーレクの難儀(arbeit, 4363; 4367)を知りながらも決闘を申し込む。もはや闘うほかすべなしと認めたエーレクは、勇猛の武者ギフレイスと力を競うが、相手の一撃がエーレクの脇腹を襲い、エーレクは傷を受ける。しかし、エーニーテの言葉(4426-8)に勇気づけられて——これもエーニーテの誠実さと受け取れよう——エーレクは、相手にも痛手を加えて自分の前に倒してしまう。しかし、今までの冒険と違ってここで重要なのは、ギフレイス王を殺してしまうのではなく、反対に一人の友人を得ることになったということである。つまり、闘いを終えたエーレクとギフレイス王との間には友情が生まれてきたのである。二人はこもごも相手の受けた傷を嘆いた。二人はそれぞれの軍衣を引き裂いて相手の傷口に包帯をした。誠に友情溢れる行為である(4491)とハルトマンも語っている。闘いに負けたギフレイス王は休息のため彼の城に滞在するようエーレクに請うが、エーレクは、この旅で求めているのは安楽(gemach, 4576)ではないと言って、その晩はここに滞在したものの、翌朝にはギフレイスの城をあとにした。

第四日目の冒険

こうして苦難の旅を続けているうち、二人は、アルトゥース王が遊獵のために野営の陣を張っていた森へとやって来る。二人がそこで出遭ったのはアルトゥース王の内膳頭ケイ

18) 気づくことにおいて夫人の方がいつも早いのは、夫人は無防備であるのに対して、夫は武装しているからである。このことをハルトマン自身が説明している(4150-65)。

イーン(Kei in)である。邪しな心を抱くケイイーンは、エーレクを捕えて自分の手柄にしようとする。しかし、このような臆病者がエーレクに勝つ筈がない。闘う前に逃げ出したケイイーンは、エーレクの情けで命だけは助かるものの、宮廷仲間のもとへ帰って彼の恥辱の有様 (sin schemelichez mere, 4840) を話さなければならない。すると、その騎士は誰であろうかと皆が話しているうちに、それはラク王(Lac) の子息エーレクに違いなということになり、アルトゥース王はガーヴェインとケイイーンにエーレクを野営に連れてくるように頼む。しかし、追って来たガーヴェインに会ったエーレクは、今はあらゆる安楽 (gemaches, 4978) を身から断たねばならないと述べて、それを辞退する。安楽 (gemach) を求めぬエーレクの堅い意志を見抜いたとき、ガーヴェインは、王が先回りするまで、話に花を咲かせて時を費やすことによって、エーレクをアルトゥース王に謁見させた。エーレクはこのガーヴェインの策(list, 4998; 5010; 5028) で、アルトゥース王のもとに一時とどまり、丁重なもてなしや王妃が持っていた膏薬 (phlaster, 5148) で、傷ついた身体を疲労から休めはしたものの、それ以上の饗応は受けず、王と王妃の頼みさえも辞退して、翌朝にはまた旅立つ。

一連の冒険とは趣を異にするこのアルトゥース王の野営における一時休息は、一体何を意味するのであろうか。この一時滞在の挿入で明らかなことは、騎士たる者の窮極的な目的地はアルトゥース王の宮廷であるということである。そこには騎士としての最高の榮譽が待ち受けている。エーレクもその榮譽を目指していることは言うまでもない。それにもかかわらず、ここでエーレクがアルトゥース王のもとに長くとどまらなかったということは、彼の身体に受けた傷のみならず騎士としての傷もまだ完治せぬことの象徴であると解することができるのではあるまいか。アルトゥース王並びに王妃ギノヴェールはなるほどエーレクのその「傷」を和らげ^{やわ}ることはできたが、しかし、完全に治すことはできなかった。エーレクはまだなお冒険の旅を続けなければならないのである。しかし、エーレクの旅には少しも進展がなかったというのでは決してない。エーレクは今や、宮廷に姿を見せる者には身を辱しめぬ振舞いの必要なこと(5056-8)を悟っているのであり、事実、この一時休息を契機に次の冒険で徐々にエーレクの内面的浄化の過程が明らかになってくるのである。

第五日目の冒険

エーレクが旅に出て第五日目に経験する冒険は、これまでの第一日目から第三日目までの冒険を一日のうちに繰り返すという意味を持っている。それゆえ冒険も以前のものより一層危険なものとなるが、しかし、それだけに浄化の過程も大きく進展すると言える。

その内面的浄化の過程がはっきりと認められるのは、その日のまず第一の冒険、二人の巨人との闘いである。なぜなら、この冒険はこれまでの決闘とは異なって、自分のためではなく、困窮した他人のために行う決闘だからである。つまり、エーレクとエーニーテが旅を続けているうち、窮地に陥った女性が助けを求める憐れな声を聞く。先日の小姓の親

切な行為から慈悲深さの貴さを教えられていたエーレクは、事情を聞くとその場にエーニーテを残しておいて二人の巨人を追って闘い、憐れな女性の夫カドク(Cadoc)を助け出すのである。暴力をふるう二人の巨人は以前の第一日目の冒険における粗暴な盗賊たちに相当するが、今回のエーレクの冒険は、困窮している者あるいは弱き者を支援し助け出すという模範的な騎士として決闘に臨むのであり、今までのような自己本位の行動ではなく、活動的にいわば「社会」へ参加し始めたと言える¹⁹⁾。エーレクの内面的成長は、その二人の巨人にいためつけられた騎士カドクを慰める言葉(5666-74)の中にも感じ取られるが、しかし、エーレクの内面的成長に決定的な進展を与えたのは、その後のエーレクの気絶である。すなわち、カドクを解放し、再びエーニーテのいる場所へ戻って来たとき、疲労困憊のため再び傷口が開いて妻の前で意識を失ってしまったが、このエーレクの気絶はまずエーニーテの誠実の堅固なる表現のいわば締めくくりとして役立っている。仮死状態——エーニーテは夫が死んだものと思っていた——のエーレクを前にして悲嘆に暮れるエーニーテの嘆きの中には、夫への誠実な愛が最もよく感じ取られる(vgl. 6225-7)。その誠実は自らも命を断とうとして夫の剣で自らの身を刺そうとするエーニーテの行為の中にも見いだされよう。しかし、剣の先を胸に当てた刹那、それを中断させたのは、そこに馬を駆って現われたリーモルス城(Lî mors)のオリングレス伯(Oringles)である。エーニーテの美しさに魅せられたオリングレス伯は彼女を妻にしようと企む。このオリングレス伯の誘惑は第二日目の伯爵(ガロエイン)の誘惑に相応するが、しかし、華やかな妃としての将来を約束する今回の伯爵の誘惑にも、エーニーテは決して惑わされず、夫への堅固な誠実を見せる。担架で運ばれるエーレクとともにひとまずリーモルス城へ連れて来られたエーニーテは、夫のそばを離れようとせず、力づくで夜の宴の席に連れ出されても栄華への誘惑にも負けずに、伯爵の妻になることを拒絶する。これに怒りを覚えたオリングレス伯の誘惑は以前の伯爵(ガロエイン)の誘惑よりも粗暴なものとなってゆくが、この伯爵の暴力に対しても、夫人は打たれて喜ぶ(6552-3)ことになる。夫が死んだと思っている今は、生きていることよりも死ぬことを彼女は千倍も強く望んでいたからである。

この伯爵の暴力に対するエーニーテの誠実な叫び声によって、エーレクは目覚める。この目覚めは、エーレクが妻エーニーテを守りたいからである²⁰⁾と考えることができよう。正気を取り戻したエーレクは、怒って人々の中へ飛び出し、最初の一撃でオリングレス伯とそのそばにいた二人の男を打ち倒した。他の者は逃げ去ったが、それも当然であろう。死神が怖わかったからである。ただそこにとどまる勇気のあったのは、エーニーテ夫人ただ一人で、彼女はそれどころか大喜びである。禍は一転して福となり、ここに歓喜が訪れた。エーレクは妻の誠実で生き返り、エーニーテは夫の助けで救出されたのであり、双方ともに死に直面してようやく二人の調和的な結びつきが現われたのである。エーニーテの

19) Vgl. P. Wapnewski : a. a. O., S. 56.

20) Vgl. ebd.

道案内——ここにすでに二人の協力が見られよう——で、先刻エーレクが気絶した場所に
戻って、そこで二人は和解する。エーニーテが夫に伯爵の誘惑の一部始終を涙ながらに打
ち明けたとき、夫が妻に課していたあの厳しい仕打ちが一瞬にして終わりを告げた。夫は
妻を連れてカルナント城を出て以来、彼女とは一切口をきかなかったが、それが今こそ終
わったのである。エーニーテの誠実が今や夫にしかと確かめられたからである。その場面
をハルトマンは次のように語っている。

durch daz diu spæhe wart genomen,	あのように態度を偽り、
des ist er an ein ende komen	探索しようとしたものを、
und westez rehte ane wân.	彼は今や明らかに、疑いの余地もなく確かめた。
ez was durch versuochen getân	彼女が彼の正しき妻であるかどうか、すべては
ob si im wære ein rehtez wîp.	それを知るためになされたことであつたのだ。
nû hæte er ir lîp	黄金を溶鉱炉で
ersichert genzlîchen wol,	純化するように、
als man daz golt sol	彼は彼女の人格を、
liutern in der esse,	完全に試しおえたのである。
daz er nû rehte wesse	今や彼にはしかとわかつた。
daz er an ir hæte	彼女が彼に
triuwe unde stæte	貞節と誠実を捧げており、
unde daz si wære	心揺がぬ
ein wîp unwandelbære.	妻なることが。

(6778-91)

今までの苦難の旅はエーニーテの誠実を確かめるための試し(versuochen, 6781)の旅であ
つたことがここで明らかである。しかし、この記述から一連の冒険を単にエーニーテの誠
実の試しとだけ解してはならない。夫と妻とが互いに隔てられた状態で続けられる苦難の
旅は、エーレクにとってこれまでの安楽、つまり、ミンネに溺れ騎士としての本務を怠つ
たこれまでの彼の安楽に対する償いの旅であり、そのミンネと騎士道の調和を求めての試
練の旅だったのである。そこでエーレクが数々の冒険を通して知り得たことは、妻の警告
なしにはエーレクの騎士としての生命は維持されえなかつたということである。このこと
をエーレクはエーニーテの誠実を確かめることで悟ることができたのであり、このことは
彼が騎士としても内面的に成長したことを意味している。黄金を溶鉱炉で純化するように
エーニーテを完全に試し終えることによって、エーレクもまた純化されることとなつたの
である。従つて、エーニーテの誠実な叫びによるエーレクの先程の目覚めは、ヴァプネフ
スキーも述べているように、エーレクが新たに生まれ、別の生になつた²¹⁾ことを意味し

21) Vgl. ebd.

ていると言うことができます。

この再生に結びつけられたエーレクの内面的な成長は、さらに次のギフレイス王との二度目の決闘でより一層明らかとなる。つまり、リーモルス城を逃げ出て来た一人の小姓から奇しきことを聞いたギフレイス王は、友のエーレクが危険に晒されていると思ってリーモルス城へと向かうが、その途中でエーレクとギフレイス王とは相手を知らずして闘う羽目となる。この冒険は無論第三日目のギフレイス王との闘いに相当するが、しかし、エーレクはこのたびの決闘では疲労のためにギフレイス王に敗れてしまう。一連の冒険においてことごとく勝利を収めてきたエーレクのこのたびの敗北は一体何を意味するのだろうか。殊にエーレクが生まれ変わった段階での敗北だけに重要であるが、以前の決闘と今回の決闘を比較してみて明らかになることは、この二つの決闘においてエーレクとギフレイス王の役割が取り替えられていることである²²⁾。すなわち、以前自惚れ強く戦闘意欲に満ちていたギフレイス王は、そのために敗北を喫したが、ここでは友を助けにゆく途上で道をあけるためという道徳的な動機から闘うのであり、そのために勝利を得る。一方エーレクは、以前の闘いでは平和的に和解を試みており、そのために勝利を得たが、ここでは疲労しているにもかかわらず単なる戦闘意欲から勝利のみを欲しているので、決闘には敗れてしまう。従って、今回のエーレクの敗北は、エーレクのこれまでの苦難 (ungemach) に満ちた冒険の旅においてもまだなお unmaze (慎みのない思い上がり) があったことを実際に示している²³⁾ と言えよう。エーレクはここで突然自分の愚かさ (tumpheit, 7013) と慎みのない思い上がり (groze unmaze, 7014) を悟ったのであり²⁴⁾、その tumpheit と unmaze の償い (buoze, 7020; 7023) として敗北も当然のことだと理解している。冒険を行う騎士の高慢な思い上がりは、ヴァプネフスキーが述べているように、騎士的理想の美しい秩序への違反であり、これは愛への自己本位な献身と同じことである²⁵⁾。愛の享受ゆえにただ愛するだけの人が恥辱を被るように、戦闘意欲のためにのみ闘う人は敗北を喫してしまう²⁶⁾ ことをエーレクは悟ったのである。

こうして夫としてもまた騎士としても内面的に成長したのちようやく、エーレクは妻のエーニーテと食事を共にし寝床も共にすることができると同時に、彼の身体の完全な回復も可能となる。つまり、その夜は木の下に臥所を作って妻とともに休息をとったあと、翌朝ギフレイス王のペネフレク城 (Penefrec) へ行くと、その王の二人の妹とエーニーテの看護でエーレクの身体の傷は見事に治ったのである。その際ギフレイス王の二人の妹が用い

22) Vgl. ebd. S. 57.

23) Vgl. ebd.

24) Vgl. Petrus W. Tax : Studien zum Symbolischen in Hartmanns Erec. Erecs ritterliche Erhöhung. Wirkendes Wort 13, 1963. S. 279.

25) Vgl. P. Wapnewski : a. a. O., S. 57.

26) Vgl. ebd.

た膏藥が、アルトゥース王の妃ギノヴェールから贈ってもらっていたあの膏藥(phlaster, 7225; vgl. 5148)であったことは決して意味のないことではない。ここに至ってエーレクはその膏藥で愚行の明白な象徴としての傷を完全に治すことができたのである。

このエーレクの「傷」の回復に大きく貢献したのは、今まで述べてきたように、もちろんエーニーテの堅固なる誠実である。このエーニーテの誠実は、ギフレイス王の二人の妹からすばらしい馬を贈られることによって象徴的に称えられている。この馬の贈与は以前のはいたか競技におけるイーマーイン公の近親の乙女からの馬の贈与に対応するが、ここではハルトマンによって馬の賞賛が約五百行(7264-766)にもわたって綿密に語られており、それだけに今や「理想」の創った、完璧の子(des Wunsches kint, 8935)と称えられるエーニーテの賞賛も頂点をなしているのである。

こうして物語も終わりに近づいたかのように感ぜられるが、しかし、エーレクの冒険の旅はこれで終わったわけではなかった。エーレクが内面的成長を遂げただけではまだ真の榮譽(ehre)は得られないのである。榮譽(ehre)を求めてエーレクは十四日後、また妻のエーニーテと友人のギフレイス王を伴って旅に出たのである。

3. 「榮譽」の寵臣エーレク — des hoves vreude —

エーレクが次に出遭う冒険は最後でかつ最大の冒険であり、これまでの試練のいわば総まとめであり、仕上げの冒険とも言えよう。これまでの冒険で内面的成長を遂げたエーレクは騎士としての力を社会のために実行しなければならないのである。ヴァプネフスキーがこの最後の冒険を「証明の冒険」(Bestätigungs-Abenteuer)と表現している²⁷⁾のも当を得た表現である。

こうしてエーレクら一行が旅に出てまず考えたのは、アルトゥース王に伺候することであったが、彼らは思いがけない城へとやって来る。ブランディガン城(Brabbigan)と呼ばれるこの城にやって来たことをギフレイス王は後悔して、引き返すことをエーレクに勧めるが、引き下がろうとしないエーレクを見てギフレイス王はついにその城の冒険、ジョイエ・デ・ラ・クルト(Joie de la Curt)、ドイツ語で言えば des hoves vreude (宮廷の喜び)のことを語る。それによると、城の下にある樹園には一人の騎士が住んでいるが、彼に打ち勝とうとしてこれまで彼との戦いに挑んだ者は全て討ち倒されてしまったというのである。この話を聞いたエーレクは大声をあげてうち笑いつつ(vil sêre lachende, 8029)馬を前進させるが、この笑いはここでは決して驕慢という意味ではなく、むしろ心揺がぬ(der muotveste, 8119)エーレクの象徴的表現である。こうしてエーレクは微笑み歌いながら(mit lachendem munde, 8156)ブランディガン城へと登って行く。城主イーフレインス(Ivveins)から歓迎を受けたあと、八十名の婦人のところへ案内されるが、これらの婦人はその城の下に樹園に住むマーボナグリーン(Ma bonagrîn)との決闘で倒された

27) Vgl. ebd. S. 52. u. S. 53.

騎士たちの未亡人であった。婦人たちの悲しい光景に心を動かされたエーレクは、自分の妻をもこの人々の群れに加えることとならぬよう、神に祈る。この婦人たちの不幸の原因である樹園の冒険のことをエーレクは城主イーフレインスから詳しく聞き知ると、怯むどころではない。彼の心は誠に不動のもので、金剛石より堅固であり(8425-7; vgl. 8435-6)、しかもこの冒険を「栄光に通ずる道」(der Sælden wec, 8521)だと理解し、それを「神の下された恵み」(genædecli chiu dinc, 8537)だと自ら口にする。このエーレクの決闘の決意に対して城主イーフレインスはもう一度よく一晩考えるようにと忠告するが、エーレクはこう言って言葉を締めくくる。

<<herre, also got wil>>

「殿よ、神の意のままに」と、

sprach der ritter êrec. (8589-90)

騎士エーレクは言った。

詩人ハルトマンはこのように簡潔な表現で、真の騎士らしさと敬虔さの一つであると考えられる騎士エーレクの神の信仰を強調しているのである²⁸⁾。エーレクの神への信頼はエーニーテへの慰めの言葉の中(8839-73)にも表現されており、神への信頼と妻へのミンネが調和的に結びついてエーレクの騎士としての自信となって現われていると言うことができよう。こうして彼はエーニーテとギフレイス王を残しておいて一騎で樹園の中へと入ってゆくのである。

このようにエーレクが今や宗教的・倫理的な完全な代表者として評価されているならば、その樹園に一人の愛人とともに住む敵マーボナグリーンはその正反対の人物として表現されている。クレチアンの作品ではマーボナグリーンの武装だけが赤いのであるが、ハルトマンの作品では武装のみならず、彼の心さえもが赤なのであると表現されている。この色は暴力の象徴である²⁹⁾。詩人ハルトマンが赤き騎士マーボナグリーンのことを二度も強調して慈悲深い心を知らぬ「悪魔」(vâlant, 9197; 9270)と表現しているのも当を得た表現である³⁰⁾。この悪魔のようなマーボナグリーンと今やエーレクは決闘を繰り広げるが、この戦いのさまをハルトマンは次のように語っている。

diu ros wurden aber sære
und vaste mit den sporn gemant
und wider zesamene gesant.
hie huop sich herzeminne
nach starkem gewinne.

ふたたび激しくすさまじく、
彼らは馬に拍車をかけ、
互いを目がけて疾駆した。
心からなる恋が始まり、
愛の成就を求め合い、

28) Vgl. P.W. Tax : a.a.O., S. 281.

29) Vgl. ebd. S. 282.

30) Vgl. ebd. S. 283.

si minneten sunder bette:
 diu minne stuont ze wette,
 sweder nider gelæge,
 dem wart der töt wæge.
 mit scheften si sich kusten
 durch schilte zuo den brusten
 mit selher minnekrefte
 daz die eschînen schefte
 kleine unz an die hant zekluben
 und daz die spiltern âfe stuben.

(9103-17)

^{しとね}
 褥もなしに愛し合った。
 競った恋の目的は、
 いずれであれ倒れた者が、
 殺されるということである。
 いとも激しい情熱をこめて、
 楯を貫き互いの胸に、
 槍で彼らは接吻し合い、
 かくてとねりこの槍の柄は、
 手のすぐそばまで粉々になり、
 その破片が飛び散った。

両者の闘いが愛の抱擁に喩えられているのも決して無造作な表現ではない。この闘いは真のミンネのかたちを求めての闘いなのである³¹⁾。馬から大地に下り立って延々とこの決闘を繰り広げる二人の勇士に力を与えたのもそれぞれの婦人のミンネである。

ob im dehein zwîvel geschach,
 swenne er si wider ane sach,
 ir schœne gap im niuwe kraft,
 s ô daz er unzagehaft
 s îne sterke wider gewan
 und vaht als ein geruoweter man.
 des enmohte er niht verzagen.
 s ô wil ich iu von êrecke sagen:
 êrec, ze swelhen zîten
 er gedachte an vrouwen ên îten,
 s ô starcten im ir minne
 s î n herze und ouch die sinne,
 daz er ouch mit niuwer maht
n âch manlîcher tiure vaht.

(9174-87)

彼(マーボナグリーン)の心がひるんでも、
 夫人をふたたび見さえすれば、
 美しい妻の姿から、夫はみずみずしい力を得、
 揺らぐ心は消え去って、
 ふたたび強さを取り戻し、
休息しきった男のように闘うのだ。
 このようにして、彼は決してひるまない。
 だが、エーレクに関しても、皆の衆、拙者は
 同様に申し上げる。エーニーテ夫人を
思うだけで、彼の心と五体には、
 ミンネが強さを与えるので、
 彼もみずみずしい力に満ちて、
優れた男子たるの限りを尽くし、
 闘うという次第である。

エーレク夫妻のミンネの方が優れている³²⁾ことは下線部の対比から自ずと明らかである。

31) Vgl. H. Kuhn : a. a. O., S. 36.

32) Vgl. P. W. Tax : a. a. O., S. 283.

美しい妻を思うだけで、エーレクには力が湧いてくる(9230-1)のである。こうして優れたエーレクがついに敵マーボナグリーンを地面に押さえつけて勝利を取めるが、彼は敗者にあわれみを見せて命を助ける。二人は互いに武装を解き合うと、敵意は消え去って、草地にすわってそれぞれの身を語り合う。このときエーレクはマーボナグリーンの境遇の中に過去の自分を見いだし、彼にこの樹園から出てゆくことを忠告するが、この忠告でもってエーレクがカルナントにおける自分の過ちをほのめかせていることは明らかである。すなわち、エーレクとエーニーテは、はいたか競技のあと模範的な夫婦であったにもかかわらず、カルナントに帰国してからは愛を享受することにのみ閉じ籠もってしまったがために、栄誉(ehre)を失ってしまった。このかつてのエーレクの状態が今のマーボナグリーンの姿である。マーボナグリーンはこれまでの決闘で全て勝利を取めてきた勇士であり、またその恋人も美しい女性であってこの二人の中には確かに「宮廷文化」の二つの最高の価値、つまり、ミンネと騎士道が具象化されている³³⁾が、しかし、そこには「宮廷の喜び」の本質が奪い取られている。二人が住むその樹園は、彼らの自己満足的な孤立生活の中で枯れ果てているのであり、「喜び」(schœner vreuden, 9595)は全て奪い取られている。ジョイエ・デ・ラ・クルト、つまり「宮廷の喜び」(des hoves vreude)は、孤立の中から生まれることはありえず、社会と関わり合って初めて繁栄することができるのである³⁴⁾。このことをエーレクは、「人々と交わることはよいことである」(bî·den liuten ist sô guot, 9438)という言葉で述べている。真に完全なミンネとは、それを所有し享受することに閉じ籠もることではなく、世間で認められ確証された愛のことである³⁵⁾。夫は閉じられた喜びの庭から出てゆき、社会においてその騎士としての本質を証さねばならない。ミンネと騎士道とが調和を保ち得るのは、それらが「社会」と交わるときであり、そこに初めて「宮廷の喜び」が生まれてくる。マーボナグリーンにとっても初めて喜びが得られるのは、その閉じられた樹園から出てゆくことができるときであり、それが今やエーレクの勝利によって可能となったのである。すなわち、恋人との約束——この樹園での愛の生活に終わりのあるとすれば、それは一人の男子が彼に勝ったときのみであるという恋人との約束で、これまでその樹園から出てゆくことの出来なかったマーボナグリーンは、今やエーレクに敗れて初めて真の騎士となることができたのである。従って、エーレクの勝利は幾重もの意味を持っている。自分自身を救ったのみならず、エーニーテを八十名の未亡人のような境遇から免れさせたのであり、それと同時にマーボナグリーンをその恋人の束縛から救い出し、その樹園に「宮廷の喜び」を取り戻させることとなったのである。

一方、マーボナグリーンの敗北を嘆いていた彼の恋人も、エーニーテ夫人によって慰められているうち、エーニーテ夫人と直接の姉妹同志であることが分かり、この新たな事実

33) Vgl. P. Wapnewski : a. a. O., S. 58.

34) Vgl. ebd.

35) Vgl. H. Kuhn : a. a. O., S. 37.

を人々は賞でたき神の配慮としてほめ称える。こうしてその樹園に戻ってきた「宮廷の喜び」は、さらにエーレクの二重のあわれみによって高められる。樹園で斬り落とされていた騎士たちの首を杭の先から下ろして埋葬させたのみならず、八十名の未亡人たちをアルトゥース王のところへ連れてゆくという行為によって「宮廷の喜び」を高めたのである。エーレクはあわれみを知る人である(9785)³⁶⁾。この慈悲深い行為によってエーレクはアルトゥース王の城で大歓迎を受け、アルトゥース王自身の口から次のような賞賛を得る。

<<Erec, lieber neve mîn,	「エーレク、わが愛する甥よ、
dû solt von schulden immer sîn	そちは今後いつまでも、
geprîset unde gēret,	賞賛と名誉に包まれて然るべし。
wan dû hast wol gemēret	そちはわが宮廷を、
unsers hoves wünne.	いっそう輝かしきものとしてくれた。
swer dir niht guotes gūne,	そちに良きことのあれと願わぬ者には、
der enwerde nimmer mēre vrō.>>	決して幸はないであろう。」

(9944-50)

居並ぶ人々も口を揃えて「その通り」(amen, 9951)とエーレクを称える。amen という語で最後が飾られているこのエーレクの賞賛は、宮廷びとの皆の前で述べられたアルトゥース王自身の口からの賛辞であり、これに勝る荣誉(ēre)はないであろう。今やエーレクはまさに「荣誉」の寵臣エーレク(Erec der ēren holde, 9963)なのである。

やがて父の訃報を受け、アルトゥース王から暇をもらい、友のギフレイス王とも別れを告げて、故国カルナントに帰国したエーレクは、人々から大歓迎を受け、さらに「奇跡を行うエーレク」(Erec der wunder re, 10045)とも表現されて称えられている。詩人ハルトマンも神がエーレクを故国へ送り返した(10054)と語っている。その宴の席で真の国王として王冠を戴いたエーレクは、今や神と人間の相互作用を知っているのであり、彼に割り当てられた名誉と恩寵を神のお陰だと神に感謝の念を示すのである³⁷⁾。ここに詩人ハルトマンの目指す理想の宮廷的騎士像の礎があると言えよう。神に敬虔な気持ちを捧げるエーレクは、今やエーニーテとともに、ミンネと騎士道とが完全に調和を保つ生活を送ることができるのであり、妻への愛ゆえに懶惰の床に溺れきった昔の彼ではない。「荣誉」の寵臣エーレクには神から世の栄冠(der werlde krōne, 10127)が授けられ、こうしてエーレクとエーニーテの二人は完全な栄光に到達することができたのである。

36) エーレクが「あわれみ」を知る人であることは、9787-96 行というわずかな行数の中でハルトマンによって erbarmen という単語が五回も変形されて用いられていることから明らかである。(Vgl. P. W. Tax : a. a. O., S. 285.)

37) Vgl. ebd. S. 287.

Ⅲ. ハルトマン作『イーヴェイン』における *e re* の構造

1. イーヴェインの *e re* —— 冒険とミンネ ——

ハルトマンの最後の作品『イーヴェイン』(Iwein, 1200)³⁸⁾ ——『エーレク』と同様にフランスのクレチアン³⁹⁾の作品『イヴァン』(Yvain, 1177)を翻案した——においても *e re* は重要な概念である。主人公イーヴェイン(Iwein)にとっても *e re* は自分を駆り立てるものであり、しかもこの作品では *e re* は罪の問題とも関わって『エーレク』においてよりもさらに深められる結果となっている。

物語はまず、ある年の聖霊降臨祭にアルトゥース王がカリドール(Karidol)の城で催した豪華な祝宴で、円卓の騎士の一人カーログレナント(Kallogrenant)が仲間たちに自分の失敗談を物語るところから始まるが、カーログレナントは、すなわち、およそ十年前に冒険を求めてブレスィリヤーン(Breiziljan)の森に出かけて、泉の国の城主と戦って恥をかいたことを居並ぶ騎士たちに語って聞かせたのである。この話を聞いてカーログレナントの従兄弟のイーヴェインがその恥辱の復讐をしてやる(806-7)ことを口にする、同席のケイイ(Kei i)がイーヴェインの大言壮語を罵り始めて、いろいろな嘲りの言葉が交わされる。そこへ今まで休んでいたアルトゥース王が姿を現わし、カーログレナントの失敗談の内容を王妃の口から伝え聞くと、アルトゥース王は十四日後の聖ヨハネ祭の夜に全軍勢をひき連れて泉の国へ赴くことをただちに誓い(swuor, 898)、その誓約を布告するように命じたのである。居並ぶ騎士たちはこの王の誓いを聞いたとき、騎士らしくて立派なことだと思った。彼らは全員そこへ行って、カーログレナントの恥辱の復讐をして騎士としての名誉を回復しようと思っていたからである。ところが、イーヴェインだけはそれを快く思わなかった。それはもちろん、騎士の名誉を取り戻すことに反対したというのではなく、全員で行けば自分が騎士として名をあげる機会はないだろう(911-8)と思ったからである。そこでイーヴェインは皆に先んじて一人ひそかに出かけてゆくのである。

十年前にカーログレナントが経験した泉の国への冒険は、実に五百行以上も費やされて長々と(259-802)語られているが、これを単なる「前話」として片づけるわけにはいかない。カーログレナントの冒険は、イーヴェインの泉の冒険の性格をまず大きく規定し、同時に、アルトゥース宮廷と泉の国の間で展開されるこの不思議な物語全編に、基本的様式を与える、礎石のような役割を果たすもの³⁹⁾だからである。カーログレナントの辿った

38) テクストは G. F. Benecke/K. Lachmann (Hrsg.): Hartmann von Aue, Iwein. Neu bearbeitet von Ludwig Wolff. 7. Ausgabe. Band 1 Text. (Walter de Gruyter & Co.) Berlin 1968. を使用し、邦訳は赤井慧爾・武市修訳(神戸女子薬科大学人文研究 2-4 号1974-76 年)とリンケ珠子訳(「ハルトマン作品集」郁文堂1982年)の二つを参照・活用する。

39) 平尾浩三: "The Lady of the Fountain"(Habinogi), "Yvain"(Chrétien), "Iwein"(Hartmann) ——冒頭のArtushofおよびKallogrenants aventureをめぐる Streifzüge—— 東京大学教養学部教養学科紀要 9 号1976年39頁参照

それと全く同じ径をイーヴェインは進み、同じ体験を重ねる⁴⁰⁾。両者の冒険の一致している限り、作者は重複を避けて、イーヴェインの冒険を詳説してはいない⁴¹⁾。泉の国に着いて不思議な石に水を注ぐまではほんの三十数行で済まされているのである。しかし、そのあと馬に乗って現われたアスカローン王(Ascalon)との決闘は、多くの行数を費やして詳述されている。この決闘はカーログレナントの場合とは異なるからである。激しい決闘ののちついにイーヴェインがこの国の城主アスカローン王の兜を通して致命的な一撃を与えると、城主はやむなく馬の向きを変えて逃げ出した。ケイイの皮肉に満ちた罵りを恐れたイーヴェインは、騎士の心得も忘れて (âne zuht, 1056) 城主を城にまで追い込んで、さらに新たな一撃を加えたが、しかし、城門に仕掛けられてあった二つの落とし格子の間に閉じ込められる結果となった。どうしたものかと考えていると、ほどなく彼のそばで小さな戸が開けられ、この国の王妃の侍女でルーネテ(Lûnete)という乙女が入って来たが、彼女の話によると、致命傷の城主はついに死んでしまい、その王妃ラウディーネ(Laudîne)と家来たちは激しい憤りでいっばいだという。この乙女にとってもイーヴェインの行為はつらいものであったが、かつてブリタニエ(Britanje)の国でイーヴェインから敬意を払ってもらったことがあったので、彼を憎むことのできないその乙女は、不思議な指輪を与えてイーヴェインの身を護るのである。これを持っている限りは誰にも姿が見えなくなるというこの指輪のおかげで、イーヴェインは敵の仕返しを受けずに済むが、しかし、のちにその城主の妻から別の方法で「復讐」されることとなる。すなわち、悲しむあまりにラウディーネの身体があらわになっているところを見たイーヴェインは、彼女の髪と肌の美しさに心を奪われ、我を忘れてしまったのである。従って、彼のミンネの動機はジーフリトの場合とは異なって官能的である。彼もジーフリトと同じようにミンネの苦しみを味わうが、しかし、ジーフリトのような「ミンネ妄想」ではない。イーヴェインの苦しみは、全てラウディーネの夫アスカローン王を殺したことに端を発している。アスカローン王を殺すことによって彼は冒険を成功のうちに収めたが、宮廷に帰ってそれを証明できなければ彼の名誉は失われる。しかし、立ち去ってその夫人の姿を見ることができないくらいなら名誉などどうでもよい。かと言って、ここに留まっても夫殺害のゆえに彼女の恩寵は得られまい。名誉とミンネの二つがこのように彼を悩ませたのである。この「苦しくも楽しい」というイーヴェインの言葉(1752-6)を賢明にも理解したラウディーネの侍女ルーネテは、イーヴェインがこの国の主君になってくれることを切望していたので、彼女はすぐさま王妃のところへ出かけて行って、二人の仲を取り持つ。すなわち、侍女ルーネテは王妃に向かって、泉の国の名誉を護るためには強い騎士が必要であるが、夫を殺した騎士こそその強い騎士であるに違いないと理路整然と説き明かし、その騎士との結婚を勧めるのである。王妃は最初は怒ったが、よく考えてみれば、侍女ルーネテの言う

40) 同上論文39頁参照

41) 同上論文39頁参照

通りだと考え直して、イーヴェインを罪なし (unschult, 2053) と判断したあと、この国を護ってくれる立派な男性はほかならぬ主人を打ち倒した騎士でなければならぬという決断を下す。夫を殺害された妻がただちに殺害者と結婚するということは、当時の宮廷道徳からすると、貞節(triuwe)というものへのひどい違反であったと考えられよう⁴²⁾。しかし、詩人ハルトマンは、王妃の即座の心変わりを弁護するために、強力な愛の女神 (diu gewaltige Minne)がそこに介在していたのである(2054-7)として、次のように二人を結びつける。

dō sprach diu künegin	そこで王妃が言った。
<<Owi, mīn her Iwein,	「ああ、イーヴェイン様、
wer hat under uns zwein	私たち二人の間にこんな愛を
gevuēget dise mīnne?	芽生えさせたのは誰なのでしょう。
es wundert mīne sinne,	私は不思議に思います。あなたは私に
wer iu geriete disen wān,	あれほどの苦しみを与えながら、私がいつか
sō leide als ir mir hat getan,	あなたの妻になるなどということをし、
daz ich immer wurde iuwer wīp.>>	誰があなたに考えつかせたのでしょうか。」
<<mir rietz niuwan mīn selbes lēp.>>	「それはほかでもない私自身です。」
<<wer rietz dem lībe durch got?>>	「誰が一体あなたにそうさせたのでしょうか。」
<<daz tete des herzen gebot.>>	「それは心が命じたのです。」
<<nū aber dem herzen wer?>>	「でも、その心には誰が命じたのでしょうか。」
<<dem rieten aber diu ougen her.>>	「そうしたのは目です。」
<<wer riet ez den ougen dō?>>	「では誰がそれを目に命じたのかしら。」
<<ein rāt, des muget ir wesen vrō,	「それは、あなたが喜んでよい一人の
iuwer schœne und anders niht.>>	忠告者、即ち、あなたの美しさ以外の
(2340-55)	何者でもありません。」

夫ジーフリトを殺害されてハゲネにその悲しみ(leit)の復讐(rechen)をせずにはいられなかった『ニーベルンゲンの歌』のクリエムヒルトからすれば、この『イーヴェイン』の世界は正反対である。悲しみ(leit)を償う(ergetzen)ことはできない『ニーベルンゲンの歌』とは逆に、『イーヴェイン』には神が介在しており、争いは好まないであり、作品中の言葉を使って表現すれば、誠実に(mit triuwen) 悲しみ(leide)を償い(ergetzen)、辛い目にあわせただけその者を一層幸せにすることのできる(2069-72)のが『イーヴェイン』の世界なのである。とにかくこうして二人はミンネで結ばれ、手を取り合って宮殿の中に入っていくと、立派な騎士イーヴェインは家来たちからも歓迎されてこの国の主人となっ

42) Vgl. P. Wapnewski : a.a.O., S. 78.

た。早速華やかな結婚の祝宴が執り行われ、その際催された槍試合も、アルトゥース王が誓い通り軍勢を連れてこの泉の国へ来るまで続いたのである。

さて、アルトゥース王の一行が到着して、今や泉の国の城主であるイーヴェインが武装して城から出て来ると、決闘の相手はケイイであった。イーヴェインは、あの邪悪なケイイが相手であるのを知って、この機会に日頃の罵りの仇を取る許しを与えてくれたことを神に感謝した。戦いはイーヴェインの誉れとケイイの恥辱に終わり、アルトゥース王の前に現われるとイーヴェインは自らの名を名乗ったあと、この国の城主になった経緯を物語った。居合わせた騎士たちは皆、イーヴェインが泉の国と名誉を得たのを見て喜んだ。アルトゥース王はイーヴェインの願いに応じて、彼の城へ行って、王妃から大歓迎を受けるが、王妃にしてみても夫のお陰でアルトゥース王に会うことも叶い、自分の選択が正しかったことを悟った。こうしてイーヴェインは冒険とミンネの二つを見事に克服して騎士としてこの上ない *êre* (名誉) を得たかに見えたが、しかし、親友のガーヴェインの忠告 (2770-912) によると、その *êre* (名誉) は束の間のものであることがほのめかされる。泉の国に一週間滞在し、やがて出発の時が来たとき、誠実なガーヴェインは、すなわち、妻の愛に溺れて騎士の名誉を失ったエーレクの例を引き合いに出して、得られた *êre* (名誉) を維持し長続きさせるためには新たな騎士としての修業を怠るべきではないとイーヴェインに忠告するのである。そこでイーヴェインはただちに妻の了解を求めたところ、同意を得たが、その際重要なことは二人が誓い (*swern*) を交わしたということである。まずラウディーネは、もし夫が一年以上長く留守にしたら永遠に夫を憎むと誓い (*swuor*, 2926)、続いてイーヴェインも、妻を愛するあまり一年は長すぎると思ったので、それ以上長くは留守にしないことを誓った (*swuor*, 2929) のである。この誓約 (*swern*) によってイーヴェインとラウディーネにはそれぞれ義務が課せられたと言える。この義務を果たさなければ、相手によってばかりではなく、社会の制裁も加えられる⁴³⁾ のである。こうしてイーヴェインは妻より約束の証として指輪を受け取って、アルトゥース王の一行に加わって旅に出かけたのである。

しかし、イーヴェインは、騎士の活動に熱中しているうちに約束の期限を忘れてしまい (*der jâr zal vergaz*, 3055)、妻との誓約をないがしろにしてしまう (*sîn gelübede versaz*, 3056)。約束の期限も大分過ぎて、自分の怠慢に気がついたときは、もはや遅すぎた。あとを追って来た侍女ルーネテがアルトゥース王とその騎士たちの前で、イーヴェインが誓いを破った裏切り者 (*verraetere*, 3118) であり、言葉と心持ちは別々 (3125-6) の不誠実な者であるとはっきりと言い渡す。さらにルーネテは、イーヴェインの手から愛の証であった指輪を取り上げたが、騎士世界を代表する決定機関としてのアルトゥース宮廷の証人の前でルーネテによって非難された上、指輪まで抜き取られたイーヴェインは、要

43) Vgl. H. Zutt : König Artus — Iwein — Der Löwe. Die Bedeutung des gesprochenen Wortes in Hartmanns >>Iwein<<. Tübingen 1979. S. 19.

するに、誓約を破ることによってラウディーネとの結婚のみならず、彼と社会全体の関係をも壊してしまったのであり⁴⁴⁾、騎士の最高の徳目の一つである忠誠心(triuwe)を失い、騎士社会から追放されたも同然である。罪(die schulde, 3222)の意識で狂気となったイーヴェインは、礼儀も作法も忘れて、自分の衣服を引き裂き、すっかり裸となったが、これは宮廷社会からの追放であり、騎士的地位を失ったしるしだと解することができよう⁴⁵⁾。妻の愛と社会的地位を失ったイーヴェインは今や裸というあわれな姿で荒野をさまようのである。しかし、善なる神は彼を完全に見捨てたわけではなかった(vgl. 3261-3)。惨めながらも行く先々で救いの手が差し出され、イーヴェインには真の意味でのēre(名誉)を求めて贖罪としての冒険の旅が今ようやく始まるのである。

2. イーヴェインの六つの冒険 —— triuwe と erbarmen ——

このようにイーヴェインがあわれな姿で荒野をさまようことになった直接の原因は、もちろんラウディーネとの誓約を破った罪にある。その後の彼の放浪生活も、獣と同じように、言語を使用できないという状況に陥ることによってその罪の償いにふさわしいのである⁴⁶⁾。彼がそれによって過ちを犯した言語は、今や彼から奪い取られており⁴⁷⁾、彼はもはや騎士ではなく、獣も同然の存在である。森の中で弓を持った一人の若者と出会ったときも、この狂人は言葉によってコミュニケーションをはかろうとする試みは全くしていない⁴⁸⁾。空腹に襲われると、野獣を射殺してそれをそのまま食べたり、射殺した野獣を隠者のところへ持って行ってその代わりとしてパンと水をもらって飢えをしのいでいたのである。こうして知力も衣服もなく惨めな暮らしを送っていたある日のこと、道の上に横たわって眠っていたイーヴェインは、そこを通りかかったナーリゾーン(Narison)の女領主の秘薬によって目覚めるが、このイーヴェインの目覚めは、単なる挿話ではなく、アルトゥース・ロマーンに本質的な「至福の道」(sælden wec)への決定的な過程であって⁴⁹⁾、作品にとっても重要な要素の一つである。イーヴェインは生まれ変わったのであり、その変身はこの作品ではまず言語を使用することによって表わされている。秘薬によって目覚めたイーヴェインは、起き上がって自らに向かってまずこう言う。

<<bistûz Iwein, ode wer? 「お前はイーヴェインなのか、それとも誰か。
han ich geslafen unze her?>> 私は今まで眠っていたのだろうか。」

(3509-10)

44) Vgl. ebd. S. 23.

45) Vgl. ebd. S. 60-1.

46) Vgl. ebd. S. 62.

47) Vgl. ebd.

48) Vgl. ebd. S. 61.

49) Vgl. Max Wehrli: Iweins Erwachen. (1969) In: Hartmann von Aue (Wege der Forschung Band 359) Darmstadt 1973. S. 493.

騎士社会を追放されて以来初めて口に出したこのイーヴェインの言葉は、たとえ人間とのコミュニケーションのためではなく、独白として用いられているにしても、転換のしるしである⁵⁰⁾。この二行に続いて長々と続くイーヴェインの独白(3509-83;3587-93)は、原作のクレチアンの作品には見られないハルトマン自身の創作部分であるが、詩人ハルトマンはイーヴェインに言語を使用させることによって主人公の騎士社会への復帰を表現している⁵¹⁾のである。さらにナーリゾーンの婦人の計らいで彼の横に置いてあった衣服を身につけると、イーヴェインは騎士と同じ姿になったが、この衣服は——狂気となった彼の最初の行動が騎士の衣服を引き裂くことであったように——自己疎外が克服されたということのしるしである⁵²⁾。長い独白の中で過去の自分の行為を反省し、今や騎士の衣服を身につけたイーヴェインは、新たな騎士の道を見いだしたと言える。その道とはこれからイーヴェインが体験する六つの冒険である。これらの冒険において彼は不誠実な過去の自分に打ち克たなければならない。とりわけルーネテがアルトゥース宮廷の人々の面前で非難した「言葉(sîniu wort, 3125)と心持ち(der muot, 3126)との不一致」を克服しなければならない。不誠実な過去の自分との戦いが始まるのである。

第一と第二の冒険

まずその第一の冒険がナーリゾーンの婦人たちをアーリエルス伯(Aliers)の傲慢な侵入から解放することである。すなわち、秘薬で目覚めたイーヴェインは、そこを通りかけた使者のふりをした賢明な乙女に案内されて、ナーリゾーンの女領主の城へ赴くが、大歓迎を受けてそこでしばらく暮らしているうち、ある日のこと、軍勢を率いて押し寄せてきた傲慢なアーリエルス伯を相手に戦うこととなるのである。イーヴェインの勇敢な振舞いでこの国の騎士たちもすっかり元気を取り戻したため、アーリエルス伯の軍はわずかな兵士となって後退せざるを得ない。近くの城に逃げ出すと、イーヴェインはアーリエルス伯を追いかけて捕虜として連れ戻る。こうして戦いはイーヴェインの誉れとなって終わったが、この第一の冒険はかつての泉の冒険とは性格が異なっていることが明らかである。イーヴェインは今や防衛者の役割を果たしているのであって、以前のような不法な攻撃者ではない⁵³⁾。しかもアーリエルス伯を以前のアスカローン王のときのように殺しはしない。捕えるだけである。さらに勝利を取めたイーヴェインは、かつてのラウディーネのように、その女主人より求婚されるが、それを拒否してしまう。それでもってラウディーネに対する真心を守ったと認められよう。イーヴェインは贖罪としての冒険の旅を続けるのである。

50) Vgl. H. Zutt : a. a. O., S. 62.

51) Vgl. ebd.

52) Vgl. ebd. S. 66.

53) Vgl. Thomas Cramer: Sælde und e re in Hartmanns Iwein. Euphorion 60, 1966. S. 39.

こうしてイーヴェインはナーリゾーンの婦人たちに別れを告げて馬に乗って進んで行くと、竜と獅子が激しく戦っているところに出くわす。竜は口から火を吐き出していたので、その熱と悪臭のために、獅子は非常に大きな声で吠えていた。イーヴェインはどちらを助けたものかと思いついたが、窮地に追いこまれていた獅子を救い出そうと決心して、馬から降りると、竜を目掛けて走り寄り、たちまち竜を打ち殺した。この戦いが第二の冒険である。しかし、彼は竜を打ち殺したあとも、獅子が彼に襲いかかってくるのではないかと心配したが、獅子は逆に彼の足下に身をすり寄せ、動物にできる限りの愛着を示した。獅子は窮地から救い出してもらった恩に対してできる限りの誠実(triuwe)を示したと言えよう。以前身隠しの指輪で救い出してもらっていながらそのルーネテの恩を裏切ることとなったイーヴェインのように不実(ungetriuwe)とはならなかったのである。従って、獅子は誠実の象徴であり⁵⁴⁾、その行動はイーヴェインにとってはかつての罪に対する警告でもある⁵⁵⁾。以後この獅子はイーヴェインを主人として従い、イーヴェインは名を語らずに「獅子を連れた騎士」(der ritter mittem lewen)と呼ばれるが、どこにおいても彼のために尽くすこの獅子の誠実(triuwe)によって彼は心を浄化されて内面的に成長することとなるのである。

第三と第四の冒険

こうしてイーヴェインが次に体験する第三と第四の冒険は、約束の期限を破ったかつてのイーヴェインの不実の罪に対する試練の決闘であると言える。まず彼は獅子と共に旅を続けるうち、運命の手に導かれて、愛するラウディーネの国へとやって来て、自らの罪に心を痛める。この罪の意識はこの場でこのあと獅子の誠実(triuwe)に触れることによってさらに深まる。すなわち、妻の国へやって来て大変悲しくなったイーヴェインは、悲嘆のあまり心の力を失って、馬から落ちて地面に倒れたとき、剣が鞘走って、彼の甲冑を貫いて突き刺さったのであるが、流れ出る血を見て主人が死んだものと思った獅子は、自分も腹を刺して死のうとしたのである。そのとき身を起こしてその行為を中止させたイーヴェインは、この獅子の真の誠実(rehtiu triuwe, 4005)に心打たれて、かつての自分がいかに不実(ungetriuwe)であったかを悟り、愛しい女性の愛を自らの誤ちのためにいともたやすく失ってしまったことを嘆くのである。この嘆きをまさにあのルーネテが聞いていて、ここで二人は再会するが、しかし、ルーネテは恐ろしい苦難にあっていた。イーヴェインの怠慢ゆえに、彼女が不実とされ、翌日の昼には死刑に処せられるというのである。イーヴェインの過失(missetat, 4006)はルーネテの身にも影響を及ぼしていたのである。獅子が示してくれた誠実(triuwe, 4005)を、今や獅子を連れた騎士(der ritter mittem lewen)イーヴェインはルーネテに対して示すことを決心する。イーヴェインは、すなわ

54) Vgl. P. Wapnewski : a.a.O., S. 77.

55) Vgl. H. Zutt : a.a.O., S. 69.

ち、彼女を訴えた内膳頭とその兄弟の三人と翌日決闘して彼女を救い出す⁵⁶⁾ という約束をするのである。この約束の戦いが第四の冒険であるが、この約束は、それを果たす前に体験する第三の冒険において彼の行動を時間的に制約することとなる。すなわち、ルーネテと約束したその日の夜に宿泊を求めた城で、城主——その妻がイーヴェインの親友ガーヴェインの姉である——より悲惨な事情を聞いて、大変あわれに思った(erbarmen, 4740) イーヴェインは、翌朝ハルピーン(Harpîn)という名の巨人と戦って城を窮地から救い出すことを約束する(geloben, 4776)のである。以前と違って、贖罪の旅を続ける今のイーヴェインには「憐れむ(erbarmen)心」があるのである。しかし、夜が明けてイーヴェインは巨人ハルピーンを待ち受けるが、なかなか現われないので、彼は名誉(êre, 4832)のことを心配し始める。もうルーネテのための決闘に出かけなければならない時刻なのである。そのために再び悲しくなった城主は、彼に財宝を差し出すことを口にして、なおも助力を願うが、イーヴェインは財産のために命を賭けるのではないことを強調する。彼のêreは、財産に基づくものでないことが明らかである。悲しみで真っ青になった城主らは彼の親友ガーヴェインの名にかけて哀願するだけに、イーヴェインはますます苦境に陥り迷うことになる。

<<sus enweiz ich mîn deheinen rat. 「私はどうしてよいか、分らない。
ich bin, als ez mir nû stat, 私は、このままの状態なら、
gunêret ob ich rîte 出かけても不名誉の身となるし、
und geschendet ob ich bîte. ここにいても恥辱を受ける。
nune mag ichs beidiu niht bestan 私は両方を為し遂げることにはできないし、
und getar doch ir dewederz lan. さりとて両方を見捨てることもしできない。
nû gebe mir got guoten rat.>> 神よ、私によい教えを与え給え。」

(4883-89)

イーヴェインはこの二つの約束のうち一つでも守ることができなければ、またもや誠実(triuwe)の欠如の証として非難される⁵⁷⁾ ことは明白である。従って、イーヴェインの名誉(êre)が危険に晒されているのは、騎士の戦いとの関係においてではなく、彼の約束行為のゆえである⁵⁸⁾。かつての罪が誓いを破ったことにあったのであるから、イーヴェインにとってこのたびの約束の義務は、何としても取り消すことはできない。約束を破る

56) すなわち、ハルトマンの説明(5429-35)によると、当時は、法廷に訴えられていた者が、決闘に勝って無実ということになれば、その者が受ける筈であった死を、反対に訴えた本人が受ける習わしだったのである。

57) Vgl. H. Zutt : a. a. O., S. 57.

58) Vgl. ebd.

ことはもはや二度と繰り返すことはできないのである。イーヴェインはこうして二つの義務の板挟みにはさまれて迷うのであり、一方を捨てて他方を行なっても彼の名誉は破滅し、さりとて両方とも見捨ててしまえば、一生涯恥辱を受け続けるであろうというイーヴェインの懊悩は、すでに考察した『ニーベルンゲンの歌』のリュエデゲールの場合と同じである。しかし、表面的に同じなのであって、本質的には異なる。イーヴェインの場合、巨人が時刻通り現われるならば、彼は二つの約束を果たすことができるのである。事実、イーヴェインの待っていた巨人はそのあとついに姿を見せ、彼の迷いや嘆きは取り除かれたのである。誠実(triuwe)とあわれみの心(erbarmen)をもって困窮した人々のために援助の約束をしたイーヴェインには今や神の恵みがあつたと言えよう。彼はすばやく戦いの用意を整え、巨人を目がけて突進して行った。二人の間には激しい戦いが繰り広げられるが、獅子の助けもあって、イーヴェインはついに剣で巨人の心臓のあたりを刺し貫くと、巨人は倒れて戦いは終わった。城の人々はみな喜び、城主は彼に休息して行くよう勧めたが、イーヴェインはすぐに暇乞いをした。ルーネテとの約束を守って誠実(triuwe)を示さなければならなかったからである。

イーヴェインは急いで約束の場所に着くと、時刻はもう昼だったので、ルーネテはすでに引き出されていて、処刑寸前であつた。ルーネテは跪いて祈り、もはや命はないものと諦めたとき、ちょうど救い手のイーヴェインが現われたのである。イーヴェインは時刻に関する最初の試練に見事に打ち勝つことができたのである。こうしてイーヴェインは内膳頭ら三人の屈強な騎士と激しい戦いをし、しかも愛しい王妃ラウディーネの面前で、三人の騎士を倒すことができた。ルーネテは非常に喜んだ。罪もなしに苦しい目に遭ってきた彼女は、王妃の寵愛を取り戻したからである。ルーネテのほかには誰にも名を明かさなかったイーヴェインは、ラウディーネに傷の治るまで彼女のもとに留まるよう懇願されるが、愛しい人の愛を取り戻すまでは安らぎも喜びもないことを告げてそこを立ち去る。今や王妃によって神の恵みに委ねられたイーヴェインは、最後の難関へと進み、ラウディーネの国においてだけではなく、アルトゥース宮廷でも真の騎士たることを実証しなければならないのである。

第五と第六の冒険

その最後の難関とは、アルトゥース王の面前で行われる親友ガーヴェインとの対決である。それはシュヴァルツ・ドルン伯 (grave von dem Swarzen dorne) の他界に伴って二人姉妹の間に生じた遺産相続をめぐる決闘であつた。悪賢い姉は妹より先にアルトゥース王の宮廷へ行ってガーヴェインを味方につけていたが、しかし、それを誰にも話さないという条件つきであつた。そこでイーヴェインは途方に暮れている妹の方の助力をする約束をし、ここについてイーヴェインとガーヴェインがお互いを知ることもなく、アルトゥース王の面前で相争うことになったのである。しかし、この最も困難な決闘の前に——ちょうど第三と第四の冒険のときと同じような構成になっており——イーヴェインはまた

もや巨人、しかも今度は二人の悪魔の巨人と戦わねばならない。これが第五の冒険である。すなわち、ガーヴェインとの決闘の約束をした日の晩に彼が宿泊した城で、彼は三百人の女たちが人質として惨めな生活を強いられているのを見てかわいそうに思った(erbarmen, 6407) が、彼女たちを解放するための戦いがそれである。翌朝二人の巨人と戦うが、このときにも獅子の助けがあって、二人の巨人を打ち倒し、三百人の女たちを解放することができた。その城主は自分の娘と国とを差し出すが、娘は大変美しい乙女ではあったものの、イーヴェインはそれを拒否し、ある婦人以外の夫にはならないことを口にする。ここでもラウディーネへの真心を守っていると考えることができよう。

イーヴェインはぐずぐずしてはいられなかった。第六の冒険としてガーヴェインとの決闘の時刻が近づきつつあったのである。イーヴェインは——このとき獅子を途中で残してきた——何とか遅れずにアルトゥース王の宮廷に現われた。時刻に関する二度目の試練をも克服したのである。ガーヴェインはすでに来ていたが、両者とも武具をつけていたため二人とも相手が誰か分らない。この決闘ほどイーヴェインにとって困難なものはない。獅子の助けがないからではなく、勝っても負けても彼は名誉(ehre)を失うことになるからである。しかし、これまでの冒険で困窮した人々を助けるというあわれみ(erbarmen)の道を歩んできたイーヴェインには、先の場合と同じように神の恵みがあつたと言ってもよい。朝に始まった決闘は、昼を過ぎても夕方となっても決着がつかないのである。翌日まで決着が延期されて休戦となったとき、両者は初めて言葉を交わすが、この二人の対話によって二人の名誉は維持されることになる。対話の口火を切ったのはイーヴェインである。彼は相手に名を明かしてくれと言う。名前を名乗ることは普通なら敗北の自白である⁵⁹⁾が、この二人の場合にはそれがあてはまらない。今や問題は決闘ではなく、相手が誰であるのかをお互いが知りたいからである。ガーヴェインが自らの名を名乗ると、すぐさまイーヴェインも名を名乗り、こうして二人は言葉を交わすことによってお互い相手が誰であったかを知ったのである。このあと二人が自分のehreを犠牲にしてお互い相手の榮譽(prîs)を称え合っている光景はアルトゥース王に大変喜ばれることとなり、そこで遺産相続問題は全てアルトゥース王の判断に委ねられた。アルトゥース王は早速二人姉妹を呼び寄せて、「父が二人に残した土地と財産とを傲慢さから妹に渡すことを拒否した乙女は、どこに居るのか」(7655-9)と尋ねる。すると姉の方が釣り込まれて「ここにいます」(7660)と答えたので、アルトゥース王は喜んだ。悪賢い姉が多く証人の前で自白したことになったからである。姉の言葉は、確かに誓いの言葉ではないが、しかし、一度口に出した言葉は誓いに等しいのである。姉嬢は容易に口をすべらせたことを持ち出してアルトゥース王に抵抗しようとするが、事態はさらに彼女に不利となるばかりなので、悪賢い姉もついにアルトゥース王の判断に従うのである。こうしてアルトゥース王の巧みな裁きで問題が解決したところへ、獅子が姿を現わし、それをもってイーヴェインが「獅子を連れ

59) Vgl. ebd. S. 50.

た有名な騎士」(der degen mære mittem lewen, 7741-2)であったことが明らかとなり、その姉の城を窮地より救い出してもらっていたガーヴェインとその救い主イーヴェインとの間の友情がますます深まったことはもちろんのことである。今までの冒険で名前は明らかにせずに「獅子を連れた騎士」(der rîter mittem lewen)とだけ名乗っていたイーヴェインは、この最後の冒険で初めてイーヴェインと名乗ることのできる真の騎士となったのである。

3. イーヴェインとラウディーネの和解 —— 誓い(eit)のモチーフ ——

以上のように見てくると、この作品の中では発話というものがいかに重要な役割を演じているかが明らかであろう。発話の中でも特に「誓い」のモチーフはこの作品を貫くものである。すなわち、作品の中央部で「誓い」の問題を取り扱っているアルトゥース王妃誘拐の挿話(4520-707)によって作品全体が統一されていると言ってもよいであろう。この挿話は、ただ単にガーヴェインがアルトゥース王の宮廷を留守にしていたというためのものであり、直接的に大きく物語の筋に影響を与えるものではない。それにもかかわらず、詩人ハルトマンは、クレチアンのほんの二十二行だけのこの挿話をおよそ二百行にも及ぶ話にまで拡大しているのである⁶⁰⁾。ガーヴェインの義兄である城主によってイーヴェインに語られるこの挿話は、作品の結末でも大変重要なものであるので、ここでその内容を検討しておこう。

まずその城主の話すところによると、気前よく立派なアルトゥース王の噂を聞いたある一人の騎士が、王から贈り物を一つもらおうと思ってアルトゥース宮廷にやって来たときのこと、騎士の願いを聞いたアルトゥース王は、ふさわしいことであればどんなことでも叶えてあげようと答えたのに対して、その騎士は条件をつけるならお願いなどしないという態度に出た。そこでアルトゥース王はその願いを一旦は拒否したものの、腹を立てて立ち去ったその騎士の悪態に名誉が失われてしまうことを恐れた円卓の騎士たちの進言によって、考えなおし、その騎士の願いを叶えてやることになるのである。この場面を詩人ハルトマンは城主にこう語らせている。

Der kûnec sich dō bedahte
und schuof daz man in brähte,
und gelobet im des stæte,
ze leistenne swes er bæte.
ouchn bedorfter mære sicherheit:
wan sîn wort daz was ein eit.
dō bat er als ein vrävel man

そこで王は考え直され、
その騎士を連れ戻させて、
彼が願うことは何でも叶えてとらせよう
と固く約束されました。
騎士もそれ以上の保証を要求しませんでした。
なぜなら、王の言葉は誓いだったからです。
ところが、この厚かましい男は、

60) Vgl. P. Wapnewski : a. a. O., S. 72.

daz er müese vüeren dan
 s in wip die küneginne.
 daz hæte die sinne
 dem künene vil nach benomen.
 er sprach<<wie bin ich überkomen!
 die disen rät taten,
 die hant mich veraten.>>

(4579-92)

王の奥方であられる王妃を
 連れ去りたいと願い出たのです。
 それを聞いて王は
 ほとんど正気を失われんばかりでした。
 王は言われました。「私は見事に騙された。
 こんな忠告をした者たちは、
 私を裏切ったのだ。」

こうして王妃はその騎士によって連れ去られ、アルトゥース騎士たちがそれを追って出かけるのであるが、この挿話から言えるのは、アルトゥース王の言葉は誓い(eit, 4584)であり、それはいかなる場合にも取り消すことはできないということである。この誓いのモチーフによってアルトゥース王とイーヴェインはお互い結びつけられているのである⁶¹⁾。否、それどころか、「誓い」のモチーフは、これから述べるように、さらにイーヴェインとラウディーネとの不和を解くいわば「鍵」でもある⁶²⁾のである。

作品の最後に位置しているイーヴェインとラウディーネの和解(suone)は、それによって物語が完結する重要なものであって、決して付加的結末ではない。ガーヴェインとの決闘後なおも妻ラウディーネへの愛に悩まされていたイーヴェインがこっそりと獅子を連れて再度泉の国へと出かけて行ったのも、最初の泉の国への冒険と対をなすものである。こうして泉の国への冒険が再度行われ、侵入者によって悪天候となって、再度この泉の国が危険に晒されたとき、ルーネテは以前と同じように王妃ラウディーネに進言するが、この場面が以前と異なるのは、今回は特に王妃の方からルーネテに最善の策を教えてくれるようにと頼んでいるということである。王妃から最善の策を求められたルーネテは、以前と同じようにこの泉の国を護るためには獅子を連れた勇敢な騎士の援助が必要だということを進言する。ところが、その騎士から援助を得るためには、彼を憎んでいる奥方の怒りを解かなければならない。そこで王妃は、その騎士のために奥方の怒りを解くよう努力することをルーネテに対して誓うのである。その際、ルーネテが以前のように裏切りの罪に陥らないためには、とりわけ明確な言葉(stæter rede, 7918)による誓いが重要であったので、ルーネテはこう言う。

s i sprach<<vrouwe, ich muoz bewarn
 mit selhen witzen den eit
 daz mich deheiner valscheit

彼女は言った。「王妃様、私は
 裏切りの罪に
 問われるようなことになりませんように、

61) Vgl. ebd. S. 24. u. S. 28.

62) Vgl. ebd. S. 29.

iemen zî he dar an.
 er ist ein harte stæter man
 n âch dem ich dâ rîten sol,
 und bedarf dâ stæter rede wol.
 welt ir nâch im senden,
 diu wort mit werken enden
 der ich zem eide niht enbir,
 s o sprechet, vrouwe, nâch mir. >>

(7912-22)

慎重に誓いの言葉を考えなくてはなりません。
 私がこれから探しに参ります騎士は、
 ことのほか几帳面な方でございますから、
 明確な言葉が必要なのです。
 あの騎士にお迎えを出され、あなたのお言葉
 を確実に実行なさるおつもりでしたら、
 私はあなたに誓っていただかねばなりません。
 さあ、王妃様、私の言う通りに言って
 下さい。」

こうしてルーネテの考え出した誓いの文句に従って、王妃ラウディーネは、その騎士が奥
 方の愛を再び取り戻すことができるよう努力する(7925-32) ことを、聖櫃の上に指を置いて
 誓ったのである。今やルーネテが連れて来ようとしている騎士に必要なことは全て述べ
 られたので、彼女はいそいそと出かけて行った。彼が今どこにいるのか分からなかったが、
 神の恵みによって、ルーネテはイーヴェインを泉のほとりで見つけることができた。ルー
 ネテの賢明な取り計らいを聞いてイーヴェインは喜んだ。二人はすぐさま城へ戻って王妃
 ラウディーネに直面するが、救い手の騎士がイーヴェインであることを知ると、王妃はルー
 ネテの巧みな言葉にひどく騙された^{だま}気になる。しかし、誓いを口に出した以上それを取り
 消すことはできない。一方、事態が幸いな結果となったことを見て取ったイーヴェイン
 は、自らの罪を反省しながら二度と過ちを繰り返さないことを誓ってこう言う。

<<vrouwe, ich hân misset an:
 zewäre daz riuwet mich.
 ouch ist daz gewonlich
 daz man dem sündigen man,
 swie swære schulde er ie gewan,
 n âch riuwen sünde vergebe,
 und daz er in der buoze lebe
 daz erz niemer mē getuo.
 nune hœret anders niht dâ zuo:
 wan kum ich nû ze hulden,
 sine wirt von mînen schulden
 niemer mē re verlorn. >>

(8102-13)

「妃よ、私は誤ちを犯しました。
 本当にそれを後悔しています。
 しかし、罪を犯した者は、
 たといどんな重い罪を犯しても、
 悔い改めれば罪を赦され、
 二度とその罪を犯さないよう
 償いをするのが
 世の慣わしです。
 よくお聞き下さい。
 私も今あなたの好意が得られれば、
 今後は決して私の落度によって
 それを失わないようにするつもりです。」

イーヴェインのこの言葉は、近親相姦の罪の問題を取り扱ったハルトマンの中期の作品

『グレゴリウス』(Gregorius, 1190)における作者及び主人公の言葉(43-50; 2698-706; 3983-8)を想起させるが、このイーヴェインの悔い改めの言葉に対して、ラウディーネはもう一度誓いの効力を強調してこう言う。

s i sprach<<ich han es gesworn: 彼女は言った。「私はそうしてあげることを
ez were mir lieb ode leit, 誓いました。それが私に好ましかろうと厭
daz ich mîner gewarheit わしかろうと、私は誓約を
iht wider komen kunde.>> 取り消すことはできません。」
(8114-7)

ここで王妃ラウディーネは、アルトゥース王妃誘拐の際のアルトゥース王とちょうど同じ態度を取り入れているのである⁶³⁾。この作品の中では誓約がいかに絶対的な効力を持つかがこの和解の場面でも窺うことができよう。しかもこの最終場面ではイーヴェインは心からの懺悔をしているのである。王妃の誓いとイーヴェインの懺悔によって、二人の心は打ち解け、お互いこれまでの仕打ちを許してくれるよう頼み合うと、仲違いはすっかりなくなったのである。侍女ルーネテも二人の和解を見て、心が和んだ。こうして二人はその後長く幸せな生涯を送ることができたのである。

このように作品の中で特にアルトゥース王の誓いの役割が重要な位置を占めていることから言えるのは、アルトゥース王は宮廷騎士社会の規範であり、イーヴェインの目指しているのはアルトゥース宮廷社会の理想の騎士像であるということである。詩人ハルトマンも作品の冒頭部分でこう語っている。

er ist lasterlîcher schame 王を規範として行動する者は、
iemer vil gar erwert, 惨めな恥を受けることは
der noch nâch sînem site vert. 決してないのである。
(18-20)

この作品の中では、すなわち、アルトゥース王が規範であり、王のように行動すべきであると語られているのであるが、しかし、カーログレナントの失敗談を聞いて出かけていったイーヴェインの泉の冒険は、理想的なアルトゥース騎士の「冒険」(aventure)の概念規定に属している本質的な要素を欠いている⁶⁴⁾と言わなければならない。この泉の冒険での彼の行動は、六つの冒険と比較してみても明らかなように、ことごとく理想的騎士にふさわしいものではないからである。もともとその冒険が不法な性格のものとなったのも、

63) Vgl. ebd. S. 28.

64) Vgl. Th. Cramer : a. a. O., S. 34.

結局はカーログレナントの失敗談をイーヴェインが正しく理解しなかったことに原因がある。従って、作品の最初に語られているカーログレナントの失敗談は、イーヴェインが騎士として未熟であり無知であったことを暴露することにも役立っている。イーヴェインは、すなわち、挑戦を通達することなく⁶⁵⁾、ただ傲慢に利己的な名誉 (ēre) を求めて出かけて行き、不思議な石に水を注ぐという行為によって不法にもその国の秩序を乱したのである。嵐がおさまって城から出て来たアスカローン王との決闘でも、イーヴェインは重傷を負って逃げるアスカローン王を「騎士の心得も忘れて」 (āne zuht, 1056) 追いかけて無慈悲に殺害したばかりか、さらにはその国を護るために夫の殺害者と再婚する決心をした王妃ラウディーネの期待 (2066-72) をも裏切る結果となったのである。従って、イーヴェインの罪は、より詳細に言えば、彼がラウディーネの国に出かけて行ってその夫アスカローン王を無慈悲に殺害し、その国の秩序を乱したばかりか、暴力的に一人の女性とその国を手中に収めた上、さらにその女性を裏切ったということの中にあつたのであり、一言で言えば、「誠実と憐憫の情」 (triuwe und erbermde) の欠如⁶⁶⁾ にあつたと言えよう。そのため贖罪の旅として続ける彼の六つの冒険では不誠実で無慈悲な過去の自分に打ち克たなければならない。その意味で六つの冒険は過去の自分との戦いであつたと言えよう。その六つの冒険で、アルトゥース宮廷騎士にふさわしい行為を自ら進んで示すことによって、今やイーヴェインはラウディーネの真の愛を得ることができたのである。

このようにラウディーネの愛への道は、六つの冒険で経験したように、誓いを守り (triuwe)、困窮した者たちのため (erbarmen) に戦うという理想的なアルトゥース宮廷騎士の道でもあつたのである。言い換えれば、ラウディーネの愛への道 (ミンネ) とアルトゥース宮廷への道 (騎士道) は、二重の道ではなく、一つの道だったのである⁶⁷⁾。こうして誠実 (triuwe) とあわれみの心 (erbarmen) の行動によって正しい秩序の道を辿りミンネと騎士道の二つを調和させた今のイーヴェインには、神の恵みによってついに長続きする「至福」 (sælde) と「名誉」 (ēre) とが得られたのである。主なる神は慈悲の心を持っている人に至福と名誉 (sælde und ēre, 4855) を与えるものなのであつて、この作品のプロローグの冒頭でも詩人ハルトマンはこう語っている。

Swer an rehte güete	真に正しいものに
wendet sîn gemüete,	意を向ける者には、
dem volget sælde und ēre.	幸福と名誉が与えられる。

(1-3)

65) 騎士と戦う場合には三日前に宣戦の通告をしなければならないのである。

(Vgl. ebd. S. 35. また、郁文堂刊「ハルトマン作品集」275 頁の註を参照のこと。)

66) Vgl. P. Wapnewski : a. a. O., S. 77.

67) Vgl. Kurt Ruh : Zur Interpretation von Hartmanns >Iwein<. (1965) In: Hartmann von Aue (Wege der Forschung Band 359) Darmstadt 1973. S. 424.

このプロローグにおいてばかりではなく、エピローグにおいても語られている「至福と名誉」(sælde und êre, 8166)を求めて生きる者は、「真の善」(rehte güete, 1)、すなわち、誠実(triuwe)であり慈悲の心(erbermde)を持ち合わせた行為を行わなければならないのである。ハルトマンの中期の作品『哀れなハインリヒ』(Der arme Heinrich, 1195)で宗教的に考察された「誠実と慈悲」(triuwe und erbermde)のテーマは、今や『イーヴェイン』において騎士的に形象化されるに至ったのである。このように『イーヴェイン』は、題材はミンネと騎士道の調和という世俗的なものでありながら、宗教的な感情も多量に含まれている作品へと深化させられており、アルトゥース王の誓いのモチーフを整然と作品の中に組み入れながら、理想のアルトゥース騎士像を作り上げているところにこの作品の特質があると言えよう。『エーレク』ですでに示されていたハルトマンの理想の騎士像は、こうして『グレゴorius』と『哀れなハインリヒ』という二つの宗教的作品を経て、今や『イーヴェイン』のアルトゥース世界において見事に為し遂げられるに至ったのである。

まとめ

以上のように見てくると、『ニーベルンゲンの歌』においてもハルトマンの二つのアルトゥース・ロマーンにおいてもe reという觀念がとりわけ重要な役割を演じていることが理解できよう。ところが、このe reは両者においては本質的に異なる性質のものであることも今や明白であり、またその相違は英雄叙事詩とアルトゥース・ロマーンとの間の相違をも明確に示している。

『ニーベルンゲンの歌』におけるe reは、すなわち、最後には悲劇的な運命と結びついている。甘いうちにも苦々しい体験を強いられたジーフリトの「高きミンネ」も完成と同時に、古代ゲルマン的な運命によって脆くも崩れ落ちてしまう。グンテル王の声望に絶えず気を配るハゲネのe reも最初からデモーニッシュなものに結びついていて、最後にそれが破滅することは必定である。リュエデゲールのe reは、なるほどハゲネと異なってキリスト教的基盤において成長してきた宮廷的なe reを持ち合わせているが、しかし、そのe reの板挟みという最も辛い精神的葛藤の末に結局はハゲネと同じe reの破滅に終わるのである。

これら『ニーベルンゲンの歌』における勇士たちのe reに対して、ハルトマンのアルトゥース・ロマーンの主人公たちのe reは全く性質を異にしている。しかし、その内面的生活が苦汁に満ちている点では彼らの場合と同じである。エーレクは、すなわち、はいたか競技によってe reを得たかに見えたが、その後、妻のミンネに溺れて「騎士としての本務を忘れてしまう」(sich verlîgen)ことによって、自分に辛いleit(苦しみ)、言い換えれば、騎士社会における彼のe re(名声と地位)を失ってしまう。そこでエーレクは惨めな生活を強いられるのである。またラウディーネの愛とその国を手に入れたことでe reを得たかに見えた主人公イーヴェインも、親友ガーヴェインの忠告に従って騎士の修業の旅を続けるうちラウディーネとの約束を忘れて罪に陥る。それが彼に辛いleit(苦しみ)、言い換えれば、騎士社会における彼のe re(名声と地位)の喪失をもたらす。そこでイーヴェインは惨めな生活を強いられるのである。しかし、『エーレク』及び『イーヴェイン』がここで『ニーベルンゲンの歌』と本質的に異なる点は、エーレクは積極的な試練によってそのe reを回復することができ、またイーヴェインも心からの懺悔と立派な善の行為を通じて内心から変身することによって、神の恩寵を得るまでに成長するという点である。つまり、名誉(Ehre)——罪(Sünde)——苦悩(Leid)——懺悔(Buße)——神の恩寵(Gnade)というイデー⁶⁸⁾が支配しているハルトマンの作品の世界では、贖罪としての善の行いによって神の恩寵が生じ、騎士は再びそのe re、しかもより純化され高められた永遠のe reを手に入れることができるのである。従って、『ニーベルンゲンの歌』と異なる点は、ハルトマンの作品におけるe reには世間の恩寵(der werlt hulde)、すなわち、社

68) Vgl. Friedrich Maurer: Die Welt des höfischen Epos. Der Deutschunterricht 6, S. 9-10.

会における *ēre* のほかに、神の恩寵 (*gotes hulde*)、つまり、神の恵みによる *ēre* が加わっているということである。しかもこの二つの *ēre* は常に密接な関係にあると言える。神の恩寵を失う者は社会での名誉を失うのであり、社会での名誉を失う者は同時に神の恩寵を失うからである。この両者を統一するという課題こそハルトマンの作品におけるテーマだったのである。否、ハルトマンに限らず、十二世紀末期から十三世紀初期にかけて見事な開化を見せた「宮廷騎士文学」におけるテーマであったとも言えよう。人間の罪と神の恩寵との関係をハルトマンよりもさらに深く追究したヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハはその『パルチファル』のエピローグでこう語っている⁶⁹⁾。

swes leben sich sō verendet,	誰にせよその生涯を終えたとき、
daz got niht wirt gependet	現世の罪によって
der sēle durch slîbes schulde,	魂を汚して神を失うことなく、
und der doch der werlde hulde	しかも現世の恵みをも
behalten kan mit werdekeit,	立派に守りえた場合、
daz ist ein nütziu arbeit.	その苦勞はかならず報われるのである。

(827, 19-24)

神の恩寵 (*gotes hulde*) を失わず、しかも世間の恩寵 (*der werlt hulde*) をも保って生きてゆくこと、すなわち、その二つの *ēre* を統一するということがヴォルフラムに限らずハルトマンにおいても最高の理想であり、ハルトマンの人間生活の最高の目的だったのである。『ニーベルンゲンの歌』との比較において言うならば、リュエデゲールのように最も辛い苦悩 (*leit*) の中で少なくとも魂 (*sēle*) を救い出すためにこの世のあらゆる名誉 (*ēre*) を投げ出すという態度ではなく、神の *ēre* と社会の *ēre* というこの二つの *ēre* が一つに統一されることをハルトマンは最高の理想・目的としたのである。まさにこの点に『ニーベルンゲンの歌』とハルトマンの『エーレク』及び『イーヴェイン』、つまりは「英雄叙事詩」と「アルトゥース・ロマーン」との間の本質的な相違があると結論づけることができるのである。

69) 引用は次のテキストに拠る。Albert Leitmann (Hrsg.): Wolfram von Eschenbach. Parzival Buch XII-XVI. (6. Auflage) (Max Niemeyer Verlag) Tübingen 1965.

なお、邦訳は加倉井肅之・伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一訳(郁文堂)を引用する。

終章 中世叙事詩としての

『ニーベルンゲンの歌』

—— 作品の構成と詩人のイデー ——

『ニーベルンゲンの歌』は、以上述べてきたように、はじめに伝説があり、やがてそれが歌謡として歌われ、のちに叙事詩の形式で十三世紀初頭の詩人によって創り上げられたものである。その生成史に関しては、十八世紀半ばに写本が発見されて以来数多くの研究がなされてきたが、なかでも1920年代初めのアンドレーアス・ホイスラーの研究は画期的なものであつて、彼によって生成史的研究は揺ぎない礎石を置かれたとすることができる。そのため本研究でも第Ⅰ部においてホイスラーの研究を検討し、『ニーベルンゲンの歌』の生成過程を明らかにするとともに、それに関して作者及び写本等の問題を取り扱った。しかし、この素材史的方法は、十三世紀初頭の文学作品『ニーベルンゲンの歌』の本質を認識すること、つまり、その作者の芸術的意図と精神的立場を解明することによって適切であるかという疑問が生じているのもまた事実である。例えば、ゴットフリート・ヴェーバーは、作品における素材は二次的なものであつて、それよりももっと大切なのはいくつかの伝説を一つに結び合わせた十三世紀初頭の詩人のイデーだと主張している¹⁾。本研究はこの見解を重視して、第Ⅰ部で取り扱った素材史的研究の成果を十分に踏まえた上で、第Ⅱ部においてはテキストそのものから出発して作品を分析し、さらには当時のハルトマン・フォン・アウエの二つのアルトゥース・ロマーンと比較して、『ニーベルンゲンの歌』における構造の特質を探り出した。それによって明瞭になったことは、『ニーベルンゲンの歌』は前編と後編とが均整な構成を有している作品であるということである。では、上の考察で得られたその構造の特質は、一体詩人のイデーとどういう関係にあったのであろうか。この終章では、以上述べてきたことをまとめながら、さらに進んで詩人の芸術的意図とその精神的立場を解明することによって、十三世紀初頭に生じた中世叙事詩としての『ニーベルンゲンの歌』の特異性を明らかにして、本研究の結論を導き出すことにしよう。

1. 生成と詩人

ニーベルンゲン伝説は、五、六世紀の民族移動時代にライン河畔のフランケンを発祥地として歌謡の形式で生じたものであり、その原型の内容は、北歐へ伝承されたエッダ歌謡等から推定される。ホイスラーの見解に従って我々はその二つの伝説の原型を第二章においてまとめておいたが、そのような二つの歌謡が生まれた背景には、一体どのような歴史

1) 序章19頁及び20頁参照

的事実が関与していたのであろうか。『ニーベルンゲンの歌』成立の主な柱となった後編のブルグント伝説については明白である。ホイスラーは五世紀の三つの歴史的事実を指摘している²⁾が、ここでそれを補足してまとめてみると次のようになる。

まず第一は、ブルグント国が437年にフン族によって滅ぼされたという事実である。すなわち、406年から413年までの間にライン河畔の主要部分を征服したブルグント国王グンダハリ (Gundahari) は、その後さらに支配領域をローマのガリア方面へ広げようとした際、435/36年に西ローマ軍のアエティウス (Aëtius) によって打ち滅ぼされ、437年にはフン族——恐らくアエティウスの援助軍隊として見られうる——によって決定的に打ち滅ぼされることとなり、グンダハリ国王は二万の手勢とともに倒れたのである。ところで、このグンダハリのブルグント族に打ち勝ったフン族の指導者アッティラ (Attila) は、453年にゲルマン人であるヒルディコ (Hildico) と結婚式を挙げた当夜、大量の吐血で急死した。これが第二の歴史的事実であるが、このことがまさに英雄文学の芽になりえた。すなわち、当時の詩人はアッティラの殺人者をヒルディコだと見て取って、第一と第二の歴史的事実を一つに結びつけ、ヒルディコの行為を兄弟たちの復讐としたのである。十六年という時間的差異は「一日」に圧縮され、グンダハリが倒れた次の日の夜、ヒルディコが兄弟たちの復讐をアッティラに対して行うという英雄文学が生まれたのである。さらに第三の歴史的事実として、アッティラの死後一年して、ゲルマン族とフン族との会戦においてアッティラの息子たち (Ellak と Ernak) が倒れたということが挙げられる。この事実から伝説の中に二人の未成年の虐殺が盛り込まれることとなったのである。とにかくこのような三つの主な歴史的事実を柱としてブルグント伝説が460年頃に生じたのである。

このようにブルグント伝説は容易に歴史的事実が確認されるが、もう一方のブリュンヒルト伝説はその発生の由来はまことに曖昧模糊としている。ホイスラーはプロコープの『ゴート戦争』(III, 1) の中に読み取られるゴート族の二人の貴婦人たちの水浴中における口論を指摘している³⁾が、確証はない。最近になってフーゴー・クーン (Hugo Kuhn) はこの伝説の素材としてメロヴィング王朝の出来事を挙げている⁴⁾が、それは、すなわち、アウストラージエン (Austrasien) のジギベルト (Sigibert) とその弟でノイストリエン (Neustrien) を治めていたヒルペリヒ (Chilperich) との争いである。つまり、アウストラージエンのジギベルト王は西ゴート国王アタナギルト (Athanagild) の娘ブルンヒルト (Brunhild) と結婚していた。一方、ノイストリエンのヒルペリヒ王は、ブルンヒルトの妹であるカイルスヴィンタ (Cailswintha) を離別し殺害したあと、フレデグント (Fredegund) というフランケン族の出身の女性を妻に迎えていた。両王妃は互いに憎み合い、そ

2) Vgl. Andres Heusler : Nibelungensage und Nibelungenlied. Darmstadt 1973. S. 25.

3) Vgl. ebd. S. 9.

4) Vgl. Gottfried Weber : Nibelungenlied (Heldendichtung II) Stuttgart 1961. S. 24.

れが結局兄と弟との戦いとなって両者が激突した。勝運は兄ジギベルトにほほえみ、弟ヒルペリヒは戦死を遂げた。575年のことである。この屈辱に対してヒルペリヒの寡婦フレデグントは刺客を使ってジギベルト王を暗殺したのである。もしこのことが事実とするならば、歴史的な人物ブルンヒルトから伝説においては——ブルグント王家の名称における頭韻から——グリームヒルト (Grimhild) が生じ、逆にブルンヒルトという名前は歴史的なフレデグントへと移されたのである。しかし、これも例えばジークフリートの神話的な素性とは全く関係のない資料に過ぎない。このように前編の素材となったブリュンヒルト伝説に関しては確証することのできる歴史的事実を指摘するのは困難であるが、いずれにせよ、この伝説もブルグント伝説と同じように、民族移動時代の厳しい生活条件の中から生まれてきたことだけは明らかである。ホイスラーも指摘しているように、夕方など従士たちが杯を交わしている間に、スコープと呼ばれる宮廷詩人たちが朗読して聴かせたものであったろう⁵⁾。ブリュンヒルト伝説はとにかく五、六世紀の頃に、ホイスラーによれば580年頃に生じた⁶⁾のである。

このようにして生じた二つの伝説がその後どのような変遷を遂げつつ発展していったかについては、ホイスラーが北欧への伝承との比較考察によって明らかにしたのであり、それに従って我々も第二章において『ニーベルンゲンの歌』の生成過程を辿った。それによると、ニーベルンゲンの詩人は、要するに、ブルグント伝説の第三段階である『古きニーベルンゲン災厄』を土台として、それにブリュンヒルト伝説の第二段階を結びつけて一つの均整のとれた叙事詩に完成させたのである。従って、ホイスラーの見解に従えば、『ニーベルンゲンの歌』成立までには六人の詩人が関与したのである。もちろん、実際にはもっと多くの詩人が関与していたことは確実であり、また『ニーベルンゲンの歌』成立後にもいくつかの写本が現われたのであって、例えば、写本Bに対して、写本Cは改作とも言われ、複数の詩人あるいは筆記者が関与していたことは容易に推測される。しかし、画期的な功績を挙げたのは十三世紀初頭に二つの伝説を一つに結び合わせたドーナウ地方の詩人であって、この原典が現在比較的忠実に伝えられていると考えられるのがザンクト・ガレンの写本Bなのである。

それでは、その二つの伝説を結び合わせた偉大な詩人とは、一体誰であったのか。人々は順々にニーベルンゲンの詩人として、ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン (Heinrich von Ofterdingen)、ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ (Walther von der Vogelweide)、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ (Wolfram von Eschenbach)、そしてルードルフ・フォン・エムス (Rudolf von Ems) などを推測したが、これらの仮説はもちろん科学的な根拠のない単なる憶測に過ぎず、従って、ほとんど明らかに

5)第二章73-4頁参照

6)第二章80頁参照

もされずに投げ捨てられ忘れられていったのも至極当然のことである⁷⁾。その後、一見よりよいように思える説を唱えたのがアドルフ・ホルツマン(Adolf Holtzmann)である。彼はニーベルンゲンの後日譚『哀歌』の結末に見られる記述に基づいて、パッサウの僧侶ピルゲリン(Pilgerin)の書記コンラート(Konrad)がすなわちニーベルンゲンの詩人であると主張するのであるが、これも人々を納得させることはできなかった。その後まもなく発表されたフランツ・プファイファの研究において初めて注目に値する見解を見ることができる。彼の説は、本研究第二章において取り上げて紹介したように、韻律発達についての研究に基づいて、初期ミンネザングの詩人と言われるキューレンベルクの詩人がニーベルンゲンの詩人だというものである。この説を受け継いだのがカール・バルチュ(Karl Bartsch)であるが、要するに、プファイファとバルチュの論説の根拠は、韻律や曲調の文学的所有権が抒情詩においても叙事詩においても十三世紀の半ばまで不文律として行使されていたことに存している。しかし、そうした文学的独占権が主張され承認されていたとすれば、古いドイツの歌謡において作者の名前が重きを置かれることになるが、事実はこちらとは反対に、古代へ溯るほど作者の名前に対する執着は弱くなっている⁸⁾。このように考えると、このキューレンベルク説も我々を十分納得させるものとは言えない。詩人に関する研究は今や限界に達していると言ってもよいであろう。ニーベルンゲンの詩人は誰であったのかを知るのは、不可能に近いのである。しかし、それらの研究は決して無駄ではなかった。それぞれの研究からニーベルンゲンの詩人の故郷、時代及び身分等についてはある程度正確に解明されてきたのである。

まず詩人の故郷については作品そのものの中からある程度正確に推定される。すなわち、後編の描写からわかるように、パッサウからウィーンに至るドーナウ地方の風景は詩人にはよく知られていたものであって、明らかにここが故郷だったのである。詩人がパッサウとドーナウ谷を通過して旅したのも恐らく一度や二度だけのことではあるまい⁹⁾。クリエムヒルトが花嫁としてフン族の国へ向かう旅の途上、パッサウにさしかかった場面で詩人は、「イン河の流れ(mit fluzze)がドーナウ河に注ぐあたりに僧院がたっている」(1295, 4)と述べているが、ここで >>mit fluzze<< と詩人が言っているのは、すなわち、「強力な流れを持っている」ということであり、実際それを見たことがなければこのような表現はできないであろう¹⁰⁾。そしてその合流点にたっている僧院は、作品の中では名前は伏せられてはいるものの、古いベネディクト派修道院ニーデルンブルク(Niedernburg)であるこ

7) Vgl. Franz Pfeiffer : Der Dichter des Nibelungenliedes. Wien 1862. S. 6.

8) 雪山俊夫 : ニーベルンゲンの歌基礎の研究 504頁参照

9) Vgl. Dietrich Kralik : Wer war der Dichter des Nibelungenliedes? Wien 1954. S. 10.

10) Vgl. ebd. S. 17.

とは疑いない¹¹⁾。さらにクリエムヒルトがリュエデゲールのベッヒェラーレンで休息したのち、次の町メデリッケではその主人アストルトがクリエムヒルトの一行をぶどう酒で丁重にもてなし、一行にドーナウ河を下ってオーストリアのムーターレンへ向かうべき道筋を教えることになっているが、これらの描写は、筋の展開にとっては二次的な性格のものであるがゆえに、詩人自らのまさに体験から生まれたものである¹²⁾ と言えよう。パッサウからウィーン間の描写は、このように個性的な表現となっているのである。これに対して、前編の舞台となっているライン地方の地理は、明らかに描写されておらず、ぼやけている。確かにニーベルンゲンの詩人はライン地方の地名をいくつか知っていたが、しかし、それらは伝え聞いただけのものであり、自分自身が見たイメージではない。たびたび名を挙げられているウォルムスの街も、色を与えるタッチで描かれてはいない。しかもウォルムスからパッサウまでの事情については疎いものであったばかりではなく、あるときはワスケンの森 (Wasgenwald) をオーデンの森 (Odenwald) と間違えたことさえあった¹³⁾ のである。以上のことを考え合わせると、ニーベルンゲンの詩人の故郷はパッサウからウィーンに至るドーナウ地方であったことだけは確かであろう。

次にニーベルンゲンの詩人の活動時期に関して言えば、ニーベルンゲンの詩人がハルトマン・フォン・アウエの二つのアルトゥース・ロマーン『エーレク』(1180-85) と『イーヴェイン』(1200) を知っていたのは疑いない。『ニーベルンゲンの歌』においてジーフリトは激しい両王妃の口論のあと、妻のクリエムヒルトを打擲して咎めるが、これは素材の英雄歌謡からのものではなく、ハルトマンの『エーレク』における類似の場面¹⁴⁾ に由来する。また『ニーベルンゲンの歌』において殺害者ハゲネがジーフリトの遺体に近づいたとき、死体から新たに血が流れ出した場面も『イーヴェイン』における類似場面¹⁵⁾ に由来するものだと言われている。このようにニーベルンゲンの詩人がハルトマンの作品を知っていたならば、同様にヴォルフラムの『パルチファル』にも精通していたことが推測される。事実、『ニーベルンゲンの歌』においてジーフリトがクリエムヒルトの高きミンネを求めて旅立つ場面では、武装や従者たちの随行及び涙を流す母との別れなど、『パルチファル』における主人公の父ガハムレトの旅立ちと類似しているのである¹⁶⁾。ニーベルンゲンの詩人が『パルチファル』の最初の部分を知っていてそれを利用する傾向があったということは、『パルチファル』第一巻に見いだされるアツァガウク (Azagouc) やツァ

11) Vgl. Friedrich Wilhelm : Über die Fassungen B und C des Nibelungenliedes und der Klage, ihre Verfasser und Abfassungszeit. München 1916. S.6-7.

12) Vgl. Dietrich Kralik : a.a.O., S.10.

13) 第四章 121頁参照

14) Vgl. Dietrich Kralik : a.a.O., S.8.

15) Vgl. ebd.

16) Vgl. ebd. S.8-9.

ツァマンク (Zazamanc) という外国の名称を使用していることから明白である¹⁷⁾。しかし、『パルチフェル』の後半になると、そこでは逆に『ニーベルンゲンの歌』がほのめかされており、特に大膳職ルーモルトの忠告などはヴォルフラムが『ニーベルンゲンの歌』から借用したものである¹⁸⁾。従って、『ニーベルンゲンの歌』と『パルチフェル』との間には注目すべき交換関係があると言える。いずれにせよニーベルンゲンの詩人はハルトマンやヴォルフラムと同時代の人間であり、何らかの関係で接触し合ったことは明らかである。ニーベルンゲンの詩人は恐らく騎士生まれで教養があり、法律、宮廷生活並びに騎士生活にはよく精通していた人物であり、1200年から1205年の間に『ニーベルンゲンの歌』を創り上げたのである。それでもって『ニーベルンゲンの歌』は、本研究の冒頭においても指摘しておいたように、ホーエンシュタウフェン朝時代の「騎士文学」の枠内に属するのであるが、しかし、当時の騎士文学の作品、アルトゥース・ロマーンとはかなり異なっていることもまた事実である。その相違はまず『ニーベルンゲンの歌』は二つの要素を有しているという点にあらう。この二つの要素について次にまとめてみよう。

2. 二つの要素

『ニーベルンゲンの歌』のテキストそのものからまず認められることは、この作品がかなりの部分にわたって宮廷的特徴を有していることである。ここに描かれた社会は宮廷社会であって、グンテル王のウォルムスもニーデルラントの英雄ジーフリートのザンテンも、そしてフン族エッツェル王の宮廷も栄耀栄華を極めた宮廷である。この点でアルトゥース・ロマーンと共通するものがあると言えよう。

その宮廷的雰囲気醸し出すものにはさまざまなものを挙げることができようが、なかでも第一のものとしてはまず「饗宴」(hochgezît)が挙げられる。宮廷では饗宴が催され、人々は限らない悦楽と、溢れるばかりの飲びを胸に抱いて楽しむ(270, 2-3)のであり、アルトゥース・ロマーンと同じようにこの叙事詩においても饗宴の飲びが宮廷生活の根本的な要素の一つになっている。しかも饗宴は入念に準備され、数日間にもわたって行われる。若きジーフリートの刀礼祭は七日間、ザクセン勢と戦って勝利を収めたのちの饗宴は十二日間、ジーフリートとクリエムヒルトとがウォルムスに招待されたときの饗宴は十一日間、まことに喜ばしげに続けられる。饗宴で意気を高められた騎士たちは、競技(buhurt)でその力を競い合って名誉(ehre)を得ようと努める。名誉のみばかりか、ことに貴婦人が窓のそばにすわってその競技を見ているとき(810)には、宮廷文学特有の意気軒昂とした心(hohen muot, 809, 3)を得ようとしたのであり、その競技が潑刺と(rechte ritterliche, 1354, 1)行われたことも宮廷生活に相応するものである。

宮廷的雰囲気醸し出す第二のものとしては「衣裳」(gewant)が挙げられるが、これに

17) Vgl. ebd. S. 9.

18) Vgl. ebd.

についても『ニーベルンゲンの歌』は、物質的な華麗さを必要とする点など、アルトゥース・ロマーンと共通するものがある。ジーフリトがウォルムスへ旅立とうとしたとき、宮廷の婦人は昼も夜も豪華な衣裳を作ることに従事し、旅立つ十二名が着飾るまでは誰一人として休むことはなかった。彼らの出発の準備ができたとき、詩人はその武装を次のように賞賛している。

man gesach an helden nie sô hêrlîch gewant. (72, 4)

かくも見事な勇士のいでたちは、かつて見られなかったものである。

この外面的な華麗さの動機はただ単に宮廷的虚栄であるだけではなく、その中には封建社会における高い名声を得るという目的が隠されている。なぜなら、富と外面的名誉の表明としての外面的な豪華さは封建的思想の典型的なしるしであって、この思想に応じて外面の華麗から内的高貴が推測されるからである。このことが作品の中にも読み取られる。すなわち、ジーフリトがウォルムスに到着したとき、彼は立派な衣裳を身につけているというだけで他人に尊敬の念を起こさせるのである。ハゲネがジーフリトとその家来を見たとき、彼はこう言う。

Er sprach, von swannen kœmen die recken an den Rîn,
ez mœhten selbe fürsten oder fürsten boten sîn.
ir ross diu wæren scœne, ir kleider harte guot.
von swannen daz si fûeren, si wæren hœhe gemuot. (85)

あれらの武士は、どこからこのラインへ来たにせよ、
自身が王者であるか、少なくとも王の使者であろう、とこたえ、
「乗っている馬は遅く^{たくま}衣^い裳^{ぞん}もなかなか凝ったものです。
いずこより参ったにしろ、ほこり高い者どもと見えました。」

ハゲネは、すなわち、彼らの外観から彼らがほこり高いものであると推測しているのである。

このように華やかな社会においてさらに第三のものとして観察されうるのが「宮廷的礼儀作法」(zuht)であろう。騎士も貴婦人も、それにいそしむのである。例えば、リュエデゲールがブルゴントの宮廷に使者として現われたとき、グンテル王は席から立ち上がったが、これは大いに敬意を払って (durch grôze zuht, 1185, 4) なされたのであり、次の行にも詩人によって、「国王はなんと慇懃^{いんぜん}に使者のほうへ歩いていったか」(1186, 1)と語られている。またもう一つの例を挙げると、ブルゴントの一行がエッツェルの宮殿に到着したとき、エッツェルは挨拶するために自分の座席から立ち上がり(1808, 3)、詩人がそのあ

とすぐに語っているように、国王同志がこんなに美しい挨拶を交わしたことは、その後絶えてなかったくらいである(1808, 4)。食事の時刻ともなると、さらにエッツェル王は客人と一緒に食卓につく(1816, 4)ことによって榮譽を示したのであり、この場面の品位については、「客をもてなす主人にしてこれ以上立派な態度をとったものはなかった」(1817, 1)という言葉で詩人によって要約されているのである。

このようにテキストから宮廷的特徴を挙げれば、枚挙にいとまがないが、宮廷的特徴を示す最も重要なものとして第四に「ミンネ」(minne) を挙げることができよう。ジーフリトのミンネ体験について、ネリー・デュレンマツはそれが全く宮廷風な精神とミンネザングの作用のもとでなされていることを明らかにしている¹⁹⁾。クリエムヒルトの美しさが噂となってザンテンに届いたとき、ジーフリトが求めたのは位高き乙女の愛であった(47, 1)が、ここで詩人が「高き^{ミンネ}愛」(hō he minne) と表現したのも意図のないことではない。当時の高きミンネのようにクリエムヒルトの愛はジーフリトにとって達しがたいものであり、ジーフリトは、満たされぬ愛ゆえに嘆くミンネゼンガーの悲しみ (trûren) に陥るのである。つまり、すでに述べたように、詩人はジーフリトとクリエムヒルトの物語をミンネ文学の形式で表現し、求愛するジーフリトを全くミンネゼンガーのように彼のミンネが幻想として現われる高きミンネの人間として表現しているのである。ザクセン勢との戦いで手柄をたて、ようやく初めてクリエムヒルトに会えることになるが、ジーフリトは自分から愛人をかけ離している距離に橋をかけることができないで、「はかないミンネ」(wan-Minne) のミンネゼンガーのように心の苦しみにやつれる。全体の愛の物語は、このように、ミンネザング風に刻み込まれた感情空間と思考空間の間で発展している。ブリュンヒルトのイースラントへの旅などのさまざまな冒険を経てのち、やっとジーフリトは目的を達してクリエムヒルトを妻としてニーデルラントの国へ連れて帰る。これをもってミンネの物語は幸福な結末に終わる。これはすなわち宮廷騎士文学、アルトゥース・ロマーンに特徴的な結末であって、以上が示しているのは、『ニーベルンゲンの歌』は宮廷文学であり、詩人は十三世紀初頭を出発点にしているということである。

しかしながら、『ニーベルンゲンの歌』は宮廷的特徴を有しているにもかかわらず、当時のアルトゥース・ロマーンとはかなり異なっていると言わなければならない。『ニーベルンゲンの歌』はアルトゥース・ロマーンのような楽観的・調和的・宮廷的イデオロギーの典型的な表現ではなく、その最終場面には悲劇(leit, nōt)があるからである。

Diu vil michel ere	was dā gelegen tōt.
die liute heten alle	jāmer unde nōt.
mit leide was verendet	des küniges hōhgezît,
als ie diu liebe leide	z'aller jungeste gît. (2378)

19) Vgl. Nelly Dürrenmatt : Das Nibelungenlied im Kreis der höfischen Dichtung, Bern 1945. S. 232.

誉れ高かったあまたの人々はここに最期を遂げた。
世の人はみな嘆きと悲しみに打沈んだ。
王者の饗宴はかくて悲嘆をもって幕をとじた。
いつの世にも歓びは悲しみに終わるものだからである。

しかし、この最後の場面だけがアルトゥース・ロマーンの特徴からこの作品を区別しているのではなく、それどころか詩人は第一歌章から「悲嘆」を語ろうとしているのである。

Uns ist in alten mæren wunders vil geseit
von helden lobebæren, von grøzer arebeit,
von fröuden, hōc hgezîten, von weinen und von klagen,
von küener recken strîten muget ir nu wunder hœren sagen. (1)

Ez wuohs in Burgonden ein vil edel magedîn,
daz in allen landen niht schœners mohte sîn,
Kriemhilt geheizen: si wart ein scœne wîp.
dar umbe muosen degene vil verliesen den lîp. (2)

古い世の物語には数々のいみじきことが伝えられている。
ほまれ高い英雄や、容易ならぬ戦いの苦勞や、
よろこび、饗宴、哀泣、悲嘆、また^{たけ}猛き勇士らのあらしなど、
あまたのいみじき物語を、これからおん身たちに伝えよう。

むかしブルゴントの国に、いともあてなる姫が生まれた。
その名をクリエムヒルトといい、世にまたとあるまじき美しい姫で、
やがてひとりまえの麗人として生い育ったが、
彼女のためにはあまたの勇士が命を失う^{さだめ}運命であった。

この第二詩節の四行目の手法は、以下の詩節にもたびたび用いられているのであるが、これはすなわち結末の悲劇を暗示しているのであって、詩人は初めから自分が華麗に描く宮廷社会が「悲哀」に終わることを疑わせていない。そのあとに続くクリエムヒルトの鷹の夢からもそれは明らかである²⁰⁾。歓びが悲しみをもたらすことは、すでに作品の冒頭で暗示されているのである。宮廷的特徴として上で挙げた「饗宴」(hochgezî t)はのちには「戦いの場」に転化し、饗宴の際華やかに繰り広げられた「競技」(buhurt)はのちには

20) 第六章 163-4頁参照

「惨忍な決闘」となる。華やかな「衣裳」(gewant)もいつの間にか「重々しい武装」となり、「宮廷的礼儀作法」(zuht)は古代ゲルマン勇士としての「反抗的精神」へと変化する。ミンネザングに特有の「はかなさ」(wan)の喜びも、結局は恐ろしい「災い」(leit)に終わってしまうのである。

従って、この作品には宮廷的特徴と同時に古代ゲルマン的要素も多分に取り入れられていると言えよう。ゲーテも1827年版のカール・ジムロック訳でこの叙事詩を読んだとき、「モチーフは徹頭徹尾異教的(durchaus grundheidnisch)」という感想を述べており、「神の支配する痕跡もない(keine Spur von einer waltenden Gottheit)」のであって²¹⁾、『ニーベルンゲンの歌』の本質には、取り扱われた古代ゲルマンの素材に特有な精神が忠実に残されているのである。では、一体この二つの要素の混合はどのように解されるべきであろうか。この作品を古代ゲルマン的精神の賛歌であると解するならば、この叙事詩における宮廷的要素は、いわば時代の風潮によって装われた外衣に過ぎないこととなろう。しかし、この作品はもはやゲルマン的古代のいわば「博物館」なのではなく、一つの新しい中世叙事詩としての文学作品なのである。この作品における宮廷的要素はただ単に当時の聴衆あるいは読者の趣味に合わせただけのものに過ぎないのではなく、作品全体の構造にも大きな役割を果たしているのではあるまいか。作品の構造におけるその二つの要素の役割について、次にまとめることにしよう。

21) Meyers Klassiker-Ausgaben, Goethes Werke, Bd.26, Das Nibelungenlied. S.417.

3. 『ニーベルンゲンの歌』の構造

結論から先に言えば、古代ゲルマン的要素と宮廷的要素の二つは、常に融合あるいは対立しながら、作品全体の構造と有機的に結びついているのである。

まず『ニーベルンゲンの歌』前編における主人公とも言うべきジーフリトの人物像そのものの中にも古代的なものと中世的なものの二つの要素が認められる。ジーフリトは、作品の冒頭の「クリエムヒルトの鷹の夢」のすぐあとで、そのクリエムヒルトの殿御にふさわしく、ニーデルラントの宮廷的王子として登場し、「警護をつれずに、王子が外出することは許されなかった」(25, 1) という人物であるが、しかし、他方では伝説に由来する古代ゲルマンの英雄であることもまた事実なのである。実際また、それを前提としなければこの叙事詩の筋の展開は考えられないのである。そうしたジーフリトの古代ゲルマン的な特徴は知識豊かなハゲネによって語られている。すなわち、それによると、ジーフリトは、勇名高いニーベルンゲン族の富貴な王子シルブンクとニベルンクの両名を打ち倒したあと、強い侏儒アルプリーヒからは隠れ蓑を奪い取って、ついにはニーベルンゲンの財宝の所有者となった(87-99) という人物である。さらにまたジーフリトは、伝説にも語られてきたように、ある時竜をも退治し、その血を全身に浴びて、そのため肌が不死身の甲羅と化した(100) という人物である。このことはのちに、ジーフリトが再びザクセン勢との戦い——今や偽りの戦いであるが、先のザクセン戦争と対をなしている——に出かけることになったとき、クリエムヒルトによっても語られることとなるのであるが、それによると、すなわち、竜の傷口から熱い血潮が流れ出し、ジーフリトがそれを身体に浴びた際、両方の肩の間に一枚の菩提樹の葉が落ちてきたので、その場所こそ竜の血がついていない彼の急所である(902) という人物である。さらにまたジーフリトはイースラントのプリュンヒルト、さらにはフン族のエツツェル王と面識のあった人物であることをこの作品は前提としている。従って、ジーフリトの本来の姿は戦闘的な「力」(Kraft) を持った勇士であり、古代ゲルマンの戦士を代表するものである。そのような古代ゲルマンの英雄がウォルムスのあてやかなクリエムヒルトの高きミンネを求めて旅立つのであり、この旅は古代から中世への旅立ちと考えることができる。ウォルムスに到着してもこの古代的要素と中世的要素は並列的に表現されているのであって、ザクセン戦争及びイースラント行きにおいて実証される古代ゲルマン的勇士としてのジーフリトの「力」は、今やクリエムヒルトの「美」を求める手段としても表されているのである。

このようなジーフリトと著しいコントラストをなしているのがブルゴント国王のグンテル王である。グンテル王は至るところで「国王」として行動しており、彼が国王であるのは、その性格によってではなく、彼の地位によってである。彼は、全く社会によって決定される宮廷的人間の代表者である。そのウォルムスも全く宮廷化された十三世紀初頭の社会として考えられている。このジーフリトとグンテル王との対立は、ジーフリトがウォルムスに到着した場面ですでに認められる。クリエムヒルトのミンネを求めて旅立ったジーフリトは、ウォルムスに着くと、彼に本来的な戦士の態度を取って次のように旅の目的を

明らかにする。

<<Ich bin ouch ein recke und solde kröne tragen.
ich wil daz gerne füegen, daz sie von mir sagen,
daz ich habe von rehte liute unde lant.
dar umbe sol mîn ere und ouch mîn houbet wesen pfant. (109)

Nu ir sît sô küene, als mir ist geseit,
sone ruoch ich, ist daz iemen lieb oder leit:
ich wil an iu ertwingen, swaz ir muget han:
lant unde bürge, daz sol mir werden undertan.>> (110)

「私とても武士であり、王冠をも戴くべき身分のものです。
国を領し、民を支配するのも当然(von rehte) と、
人に言われるような人間になりたい念願です。
さればそのためには名誉をも身命をも賭することをいといません。

あなたが噂にたがわぬ勇猛の士であられる以上、
この拳が何びとの喜びとなろうと悲しみとなろうと頓着はしません。
あなたの所有しておられる国でも城でも、
一切を力ずくで頂戴して、私の所領といたすつもりです。」

ジーフリトは、要するに、一切を力ずくで頂戴して(ertwingen, 110, 3)、国を領し、民を支配するのも当然(von rehte, 109, 3) と人に言われるような「武士」(recke, 109, 1) でありたいというのである。これに対してグンテルは正反対の意見を述べている。

<<Wie het ich daz verdienet>>, sprach Gunther der degen,
<<des mîn vater lange mit  ren h t gepflegen,
daz wir daz solden vliessen von iemannes kraft?
wir liezen  bele sch nen, daz wir ouch pflegen riterschaft.>>(112)

国王グンテルがいった、「父王が久しい間、世のおぼえもめでたく
治めてきたものを、なんの事由^{ことわり}あつて人の暴力のため
失わねばならぬのであろうか。そんなことがあつては、
騎士の道を守るものとはいえないことになりましょうぞ。」

グンテルは、要するに、力によって(von iemannes kraft, 112, 3)世襲の支配権を奪い取ることは騎士の道(riterschaft, 112, 4)にも悖ると主張している。その弟ゲールノートも同じ考えを述べている。

<<Wir han des niht gedingen>>, sprach dō Gernot,
<<daz wir iht lande ertwingen, daz iemen drumbe tōt
gelige vor heldes handen. wir haben rîchiu lant;
diu dienen uns von rehte, ze niemen sint si baz bewant.>>(115)

ゲールノートがいう、「われらは他国を征服して、
そのため誰かが武士の手にかかって命を落とすというようなことは、
およそ好ましいこととは思っておらぬ。この国は豊かな国。
それは当然(von rehte)我々のもので、それがまた国の仕合せなのだ。」

ゲールノートは、すなわち、他国を征服(ertwingen, 115, 2)して奪い取る武士(Held)の行為を否定しているのであり、世襲の支配は当然(von rehte)であるとしているのである。従って、このジーフリト到着の場面ですでにジーフリトの世界(ニーベルンゲン世界)とグンテルの世界(ウォルムス社会)とが対置されていることが明らかである。ジーフリトが古代ゲルマンの「英雄」(recke, held)であるとすれば、グンテルは中世の宮廷的「騎士」(riter)なのである。

そのような社会的な国王グンテルは、古代ゲルマン的な超人的な女性であるイーゼンシュタインの女王プリュンヒルトに求婚するのである。しかも彼女は自分に打ち勝つ男性でなければその妻にはならないという女豪傑である。ジーフリトのクリエムヒルトへの求婚が「ミンネ」であり、古代から中世への旅であったとすれば、グンテル王のプリュンヒルトへの求婚は明らかに「冒険」であり、中世から古代への旅である²²⁾。二組の求婚が全くのコントラストをなしていることは一目瞭然である。原始時代の英雄であるジーフリトは十三世紀初頭の宮廷的世界へ歩み入り、宮廷的国王であるグンテルは原始時代の世界に歩み入るのである²³⁾。そしてジーフリトは花嫁を戦い取るのではなく、ウォルムスでの作法に則ってミンネ奉仕によってクリエムヒルトを妻にするのに対して、グンテルは逆に騎士としての求婚ではなく、冒険によってプリュンヒルトを戦い取ろうとするのである。従って、二人は彼らがそうであるものによって彼らの目標を達成しようとするのではなく、それとは反対のもの、すなわち、仮の姿によって目標を達成しようとしている。そのためには嘘と欺きが必要であり、ジーフリトは今やグンテル王の臣下として援助するが、これ

22) Vgl. W. J. Schröder : a. a. O., S. 73-4.

23) Vgl. ebd., S. 75.

が結局は悲劇の芽ともなるのである。とにかく二組の結婚は古代的なものと中世的なものとが幾重にも張りめぐらされた中で実現してゆくのである。

このように最初から対置されていたジーフリトの「力」とグンテル王の「地位」の世界は、そのまま王妃たちの世界の対立となる。二人の王妃が対比的に描かれているということは、上の考察でもすでに述べた²⁴⁾が、ここでクリエムヒルトの存在が「美」という自然的存在であるとすれば、プリュンヒルトは王妃という「地位」に固執する社会的女性として考えられよう。であるから、ウォルムスで二組の結婚式が執り行われたとき、プリュンヒルトは義妹が臣下の身分の者と並んで坐っていることに耐えられないで、口惜しい (leit, 618, 2) 涙を流してしまうのである。さらにその後家来である筈のジーフリト夫妻が安閑として貢物を怠って、しかも宮廷に伺候しないことはプリュンヒルトにしてみれば「侮辱」 (leit) なのである。ところが、この leit を取り除こうとしたことが、さらに決定的な「屈辱」 (leit) を受けることとなる。すなわち、彼女はクリエムヒルトから「側女^{そばめ}」という罵りを受け、グンテル王と思っていた人物が実はジーフリトであり、グンテル王は第一の者ではないということとなったのである。これは「力」と「地位」の矛盾である。この矛盾は勇士たちの間では契約によって合意に達していたが、婦人たちの間では口論によってその矛盾が暴露され、治すことのできない不和へと達する。この矛盾をなくするためには、ジーフリトが亡き者とならねばならない。こうしてジーフリト暗殺が企まれることによって、両王妃の対立は、ジーフリトとハゲネとの宿命的な対立へと移ってゆくのである。

ブルゴント国の重臣であるハゲネは、経験豊かな忠告者として登場し、ウォルムスでの決定権を奪い取っている人物である。ハゲネはグンテル王に欠けている支配権の政治的側面の代表者であり、グンテル王とコントラストをなしていることは明らかである。グンテル王が何も知らない宮廷の人間であるとすれば、ハゲネは知識豊かな非宮廷の人間である。彼はより古い時代の中に根をおろしており、宮廷的騎士と対をなす人物であり、知識ある者として、常に危険を予知する。ジーフリトがウォルムスに到着した場面でも、ジーフリトの権力を知り尽くしているハゲネは、グンテル王に向かって客を丁重に出迎えるよう進言する。確かにこの場面ではハゲネは事をおだやかに済まそうと努めていて、彼本来の攻撃性を例えばオルトヴィーンなどに奪われてしまっているかに見えるが、しかし、第七章でも述べた²⁵⁾ように、ここでハゲネはジーフリトと戦って決着をつけようとしているのではなく、逆にジーフリトの権力を巧みに利用しようと企んでいるのである。ジーフリトとハゲネとの宿命的な対立はここですでに始まっているのである。クリエムヒルトのミネを求めるジーフリトが明るい光を放っているならば、ハゲネはその腹黒い企みによって暗い陰を投げかけている。伝説に由来する宿命的な対立がすでに始まっているのである。

24) 第六章 168-9頁及び第八章 223-7頁参照

25) 第七章 189頁参照

クリエムヒルトのミンネを求めるジーフリトは、すなわち、ここではハゲネによって利用されているに過ぎない。ジーフリトはミンネのためにザクセン戦争にも出かけ、さらにはイースラントへも援助者として出かけるが、これはハゲネ側からすれば、ジーフリトの権力を利用してウォルムスの安泰を計っているのである。ハゲネは第一の重臣として常にウォルムスの名声を心に留め、さらには繁栄を願い、ジーフリトの「力」を利用するだけでは飽き足らず、その権力、すなわち、ニーベルンゲンの財宝を奪い取る機会さえうかがっている。ハゲネが巧みな策略家であることは明白である。そしてそのジーフリトの命と黄金を奪い取ってしまう恰好のきっかけが両王妃の口論である。素材ではジーフリトの暗殺はブリュンヒルトの口から初めて出てくるのに、『ニーベルンゲンの歌』ではハゲネの口から出てくる(864; 867; 873)のである。さらにハゲネは始終グンテル王を唆し、もしジーフリトが亡き者となれば、多くの国々が王の領土となるであろうと説いた(870, 2-3)のであり、ハゲネの腹の中はますます黒くなってゆく。これとは逆にジーフリトはますます明るく描かれていて、企みに満ちた狩りに出かける際など、クリエムヒルトが狩りに出かけるのを止めるよう警告しても、一族を信頼しきっている人物である。暗殺の場面でも、グンテル王が水を飲むまでは飲まないで待っているほどの礼儀正しい騎士である。この誠実(triuwe)こそがジーフリトの命取りとなり、ジーフリトの悲劇の特質はその triuwe の中にあるということはずでに述べた通りである²⁶⁾。ジーフリトの死は宮廷的に彩られていて葬儀もこと細かに描かれており、これは明らかに後編のハゲネの死とコントラストをなすものである。このように前編の悲劇は究極的にはジーフリトとハゲネとの対立によって展開しており、この両者の対立は後編においてはクリエムヒルトとハゲネとの対立に移ってゆくのである。

このように前編では二つの結婚が絡み合って複雑な構造を示していたが、後編は逆に単一的な構造を示している。このことはまた両編の内容でもある。すなわち、前編は全体が秘策によって展開されてゆくのに対して、後編では隠しごとせず真正面からの対立によって悲劇が展開されてゆくのである。この点でも前編と後編とが著しいコントラストをなしているものであり、後編は前編とは逆をゆくものなのである。

まずクリエムヒルトのエッツェル王との結婚についても、前編でのジーフリトとの結婚とコントラストをなしている。前編ではハゲネがジーフリトとクリエムヒルトを結びつけようとしたのに対して、後編ではハゲネはエッツェル王とクリエムヒルトとの結婚に猛烈に反対する。それにもかかわらず、クリエムヒルトは後編では、前編とは対照的に、彼女の「意志」によって再婚を決意する。さらにこのクリエムヒルトの再婚は、前編でのブリュンヒルトの結婚と対をなしていて、ブリュンヒルトの強制的な結婚が「権力の減退」を意味しているとするれば、クリエムヒルトの自由意志に基づく再婚は「権力の増大」を意味

26) 第八章228-31頁参照

している²⁷⁾。エッツェル王の権勢を利用して後編ではこのクリエムヒルトがその leit の復讐をしてゆくのである。二組の結婚式のときすでに leit を受けていたプリュンヒルトが、その後その leit の復讐をしていったと同じように、今やクリエムヒルトが leit の復讐を実行してゆくのである。

その復讐の機会が前編と同じように招待の旅である。前編における何の予感もしないジーフリト夫妻の旅とは対照的に、後編における招待の旅は最初から危険の多い旅であることは明らかである。だからこそハゲネは反対する——前編ではむしろ唆した——のであるが、旅立ちは実行される。前編でのジーフリトとハゲネとの対決は、後編ではクリエムヒルトとハゲネとの対決である。前編で黄金が重要な役割を演じていたと同じように、後編でもニーベルンゲンの黄金をめぐる両者の対立が展開されている点に注目しなければならない。ところが、この黄金はクリエムヒルトにとっては愛しい夫ジーフリトの象徴であるのに対して、ハゲネにとっては「権力」の象徴であることは、第六章と第七章でもすでに述べた通りである²⁸⁾。二人の対立は、要するに、「愛」と「権力」との戦いであり、クリエムヒルトが中世的な「愛」のモチーフを取り入れているならば、ハゲネは古代ゲルマン的な「権力」のモチーフを保持する役割を果たしているのである。ここにも古代的なものと中世的なものとの対立が読み取られるのであって、この二つのモチーフが全体にわたって激しく対立しつつ、前編と後編で二つの悲劇が展開しているところにこの『ニーベルンゲンの歌』の構造の特質があるのである。このように『ニーベルンゲンの歌』の構造は、結婚と招待の旅を軸として前編と後編とが同じような悲劇を展開してゆく二重構造を示していて、しかも前編と後編とが著しいコントラストをなして全体が一つにまとまっているのである。このような前編と後編の二重構造は、喩えてみれば、二枚の板を重ね合わせたような単なる二重の構造ではなく、いわば大きな網のように幾度となくしっかりと織り成されたものであり、しかも古代と中世という明暗の色で美しく織り成されてもいるのである。古代と中世とは分かちがたく強く結びつき、お互いを堅固に強める結果となっており、これによってニーベルンゲン悲劇が自然と効果を高める結果となっているのである。前編のジーフリトの死が個人的な悲劇であれば、後編のブルグント族の滅亡は民族全体の悲劇であり、後編の悲劇は前編の悲劇の高まりなのである。

27) 巻末の図式V(344頁) 参照

28) 第六章 183-6頁及び第七章 207-8頁参照

4. 詩人のイデー

このように『ニーベルンゲンの歌』は、宮廷的な要素をも有しながら、本質的なところでは古代的な要素をしかと保持している点で、当時のアルトゥース・ロマーンとは異なるものである。この意味においてニーベルンゲンの詩人は当時の宮廷文学にあって独自の立場を形づくっていると言えるのであるが、では、そのような独自の立場はどのようにして形成されたのであろうか。

誰もが認めるように、ニーベルンゲンの詩人がフランスからの宮廷文学の影響下にあったことは明らかであり、宮廷騎士文学は詩人にとって非常に魅惑的に作用したのに違いない。しかし、キリスト教を出発点とするにもかかわらず、ニーベルンゲンの詩人は、ゲルマン的な思考方法に強く魅せられていたのに違いない。なぜなら、古いゲルマンの英雄歌謡がこの作品に保持されているとするならば、それでもってただ単に外面的なものばかりではなく、むしろ何か精神的なもの、すなわちゲルマン的（従って非キリスト教的）思考方法が詩人によって受け継がれたに違いないからである。ここにおいて新しい力と古い力との底深い葛藤がまさにこのニーベルンゲン詩人の内に起こったのである。確かに神を中心とした騎士文学の調和的世界は非常に魅惑的に映ったのであるが、しかし、ニーベルンゲンの詩人はどうしても「英雄的なもの」(das Heldische)を「騎士的なもの」(Das Ritterliche)に同化させることができなかった。すなわち、滅亡すべき運命を感じ知るに至っても、回避したりしないで、反対にその滅亡の宿命に向かって突き進んで行く英雄的な行動が詩人にとっては少なくとも名誉あることのように思われたのであり、反対に騎士的なものはただ単に美しい理想でしかありえず、現実にとっては長続きしない不安定なものに思われたのである。

なぜこの対立がニーベルンゲンの詩人において生じたのであろうか。この点に関して、ゴットフリート・ヴェーバーは、ニーベルンゲンの作者にとって、騎士的イデオロギーの神ほど厭うべきものはなかったのであり、ニーベルンゲンの詩人はそこに根拠もない虚ろな楽天主義しか見なかったからである²⁹⁾と言う。にもかかわらず、——ヴェーバーは続けて言っている³⁰⁾——キリスト教それ自体はそのような懷疑から疑いをさしはさまれてはならない。恐らくは騎士全体を支配していたキリスト教の新しい解釈が問題にされなければならないのであって、ニーベルンゲンの詩人は、自分の作品において、英雄的なものを印象づけてはいても反キリスト教的なものへの共感を示していない。ハゲネやクリエムヒルトを詩人は賛嘆しているにもかかわらず彼らを明らかに否定しており、異教徒であるエッツェル王のよい側面は特別キリスト教的な特性として描かれている。ニーベルンゲンの詩人はキリスト教を攻撃することなしに英雄詩を歌ったのである³¹⁾。

29) Gottfried Weber : Das Nibelungenlied. Problem und Idee. Stuttgart 1963.

S. 176.

30) Vgl. ebd., S. 177-8.

31) Vgl. ebd. S. 178.

従って、ニーベルンゲンの詩人が望んだものは、ゲルマン的なものの中の特別異教的なものでもなく、中高ドイツ語時代における異教でもない。そうではなく、確かに詩人はキリスト教的でありたいと望んだのであるが、——でなければ彼は決してリュエデゲール像を作らなかったであろう——しかし彼の立場は、彼には霧のようなキリスト教的神と英雄的なものとの間の緊迫状態によって特徴づけられ、詩人自らは悩むものなのである。リュエデゲールの苦悩、すなわち、ニーベルンゲンの詩人の重要な創作部分と考えられるあのリュエデゲールの迷いは、まさに詩人の苦悩なのではあるまいか。

<<Owê mir gotes armen, daz ich dize gelebet hân.
aller mîner êren der muoz ich abe stân,
triuwen unde zûhte, der got an mir gebot.
owê got von himele, daz mîchs niht wendet der töt! (2153)

Swelhez ich nu lāze unt daz ander begān,
s o hān ich bæsliche unde vil übele getān:
l āze aber ich si beide, mich schiltet elliu diet.
nu ruoche mich bewîsen, der mir ze lebene geriet.>>(2154)

「ああ、このような目にあうとは、なんと^{みじ}惨めな身であろう。
あらゆる名誉をなげうち、神に授けられた信義も礼節も
捨ててしまわねばならぬとは。天つ神も哀れとおぼせ。
死んでしまったらこうした目にも会うまいに。」

どちらかを捨てて、他の一つを行なっても、私は悪いやつ、
怪しからぬ男といわれましょう。さりとて両方とも捨ててしまえば、
世の人みんなが私を罵るでしょう。
私に生命を与え給うたものよ、どうぞ教えを垂れて下さいまし。」

この動揺こそ詩人の最も深い、止むことのない感情だったのである。ニーベルンゲンの詩人はこの苦悩を例えば第十章でも述べたハルトマンのイーヴェインの^{おのづ}懊悩の場合³²⁾のように神の恵みによって解決することは欲しなかった。ニーベルンゲンの詩人はむしろ、ここにおいて英雄的な人間がいかにして宮廷的騎士的キリスト教的なものから生まれるかを詩人は明らかにしようとしているのである。この英雄的なものに関して、ニーベルンゲン詩人の文学的意図を解明する際認識されるのは、英雄的なものは「ある」(sein)のではなく、「成る」(werden)ということであって、それは決して初めから与えられている

32) 第十章 305頁参照

ものではない。ブルゴント族への忠誠とフン族へのそれとの板挟みとなって嘆くリュエデゲールが真に英雄なのは、結局ブルゴント勢と戦わねばならない羽目となって、身内と戦うくらいならいっそのこと討死を望んで破滅の戦場へと向かうときからなのである。

Nu liez er an die wāge sēle unde lîp.
dō begonde weinen das Etzelen wîp.
er sprach:<< ich muoz iu leisten, als ich gelobet hân.
owē der mînen friunde, die ich ungerne bestân.>> (2166)

Man sah in von dem kûnege vil trûreclîchen gēn.
dō vant er sîne recken vil nâhen bî im stēn.
er sprach:<< ir sult iuch wāfen, alle mîne man.
die kûenen Burgonden die muoz ich leider bestân.>> (2167)

かくてリュエデゲールは、身も魂も賭けることとなった。
エッツェルの妃は涙を流した。彼は語った、
「私はお誓い申したことは果たさねばなりません。だが、
自分の縁者と戦わねばならぬことは辛いのです。悲しいのです。」

人々は彼が国王のところから悄然^{しやうぜん}として立ち去る姿を見た。
すると彼の郎党が彼のそば近くに集まってきたので、
彼はいった、「わが勇士の面々、みんな武装をととのえるのだ。
わしは不本意ながら、ブルゴントの勇士たちと戦わねばならぬ。」

ここにおいてリュエデゲールは「運命」との避けがたい対立に出会っているのである。
「運命」とは避けることもできず、逆らっても無駄な、人間の力を超えた大きな暗い魔的な力であって、人間はただそれに服従するしかない。リュエデゲールもここでこの「運命」に身も魂も賭けることとなったのである。しかし、その瞬間リュエデゲールの内から「英雄的なもの」が生じたのであって、その運命に自ら突き進んで行って、いかにして英雄としての名誉を汚すことなく減んでみせるかということが、この叙事詩におけるリュエデゲールに課せられた悲劇的課題である。自分がゲールノートに贈ったその剣の刃によって討死する運命にあったリュエデゲールの死は、まさに詩人が賛嘆しているように、「あらゆる美德の父の死」(2202, 4)であった。それは、リュエデゲールが自分の最期の時に臨んでも、ブルゴント勢に対して騎士としての作法を忘れず、しかもフン族のエッツェル王及びクリエムヒルトのために最後まで尽くした(2231)からでもある。

両者への忠誠の板挟みとなって減んだ誠実そのもののリュエデゲールとは反対にどちら

かと言えば不実なハゲネの場合も、彼はエッツェル王の宮殿で起こる悲劇を宿命として自覚していたのであり、彼の悲劇もどうすることもできない「運命」の力によって生ずるのである。すなわち、フン族エッツェル王の宮殿へ招待に応じて旅する途上、絶えずクリエムヒルトの復讐を警戒するハゲネは、野育ちの水の乙女たちから不吉な占い(1542)を聞いて、一人だけ助かると占われた司祭を広いドーナウ河で船から投げ落とす(1576, 1)。ところが司祭は泳ぎもできなかったのに、神の御手に救われてどうやら無事にまた元の岸へ帰り着く(1579, 3-4)ことができたので、それによってハゲネは、妖精たちの占ったことが避けがたい運命であることを悟ったのである。しかし、「これらの勇士は滅びなければならない」(1580, 4)と考えたハゲネは、その運命を取って避けようとはしないで、反対にドーナウ河を渡ってしまったのちに船を打ち砕いてそれを河に流してしまう(1581, 1-3)。フン族から二度とラインのウォルムスへ帰ることはない悟って(1582, 4)、自ら勇敢に破滅へ向かって突き進んでゆくのである。ハゲネにとっても、免れ得ない宿命をいかにして成就するかが彼の悲劇的課題だったのである。

このハゲネとは異なってニーデルラントの英雄ジーフリトの場合は、なるほど彼自身は悲劇的結末の運命を悟ってはいないのであるが、しかし、ジーフリトが狩猟にゆく前の晩にクリエムヒルトは悪夢を見て、「狩りはお止めなさいまし。昨晚、私は二ひきの猪が、野原であなたを追いかけているいやな夢を見ました。草花が朱に染まったのです」(921, 1-3)と言って夫を引き留めようとするなど、結局どんな勇士でも滅びなければならない運命の力が支配しているのだと考えることができる。それにもかかわらずジーフリトはその運命に向かって突き進まなければならないのである。さらに第一歌章には、クリエムヒルトの悪夢が母后ウオテによって占われ、二羽の鷲の爪に引き裂かれた鷹とはすなわちジーフリトを暗示していたことは明らかであり、このときすでに英雄ジーフリトは死ぬ運命にあったのである。ミンネを求める限り、ジーフリトは滅びる運命にあったのである。言い換えれば、ジーフリトの存在自体が悲劇だったのである。このような運命こそがこの叙事詩を貫いているイデーであり、フリードリヒ・パンツァーなども、「この叙事詩にあらわれている人物たちが支配されていると感ずる力、及びこの作品のあらゆる出来事を決定づけている力は、『神』ではなく実はこの『運命』なのである³³⁾」と述べている。

この暗い「宿命」を予告するのが、すなわち、詩節の最後の行の文句や不吉な夢及び予言などであるが、破滅の宿命を暗示させる同様の手法にもう一つ象徴が用いられている。例えば、ニーベルンゲンの財宝やジーフリトの愛剣バルムンクがそれである。前者はその所有者が必ず滅ぼされるという点で呪いの宝であり、後者も類似の運命を示している。ニーベルンゲンという語は「霧の子」、すなわち、冥界にゆくべき人間という語源からきているという説がある³⁴⁾が、それと対応するように、この叙事詩では、ニーベルンゲンと

33) Friedrich Panzer : Das Nibelungenlied. Entstehung und Gestalt. Stuttgart 1955. S. 207.

34) 相良守峯 : ドイツ中世叙事詩研究 140頁参照

は初めはこの財宝の所有者である侏儒の一族を、次にはこの宝を奪ったジーフリトの一族(778; 1003; 1011; 1058; 1071; 1095)を、最後にはこれをクリエムヒルトから取り上げたブルゴント族(1715; 1726; 1737; 1870)を指しており、いずれも滅ぶべき人間を呼ぶ名称となっている。一族はこの財宝の呪いに基づく運命の力によって滅びてゆくのであり、この作品の中には人間の力ではどうすることもできない運命の力が支配しているのである。

従って、ニーベルンゲン詩人の最も深い精神的状況は、騎士的なものに対する英雄的なものの対立そのものであるばかりではなく、人間は絶えず恐ろしい危険に晒されており、この世の輝きも永続することなく、悪魔が近くにいて神が遠くにあるという原体験そのものなのであって、詩人は悪魔との避けがたい対立において生きているのである。

まさにこの精神的状況から詩人には必然的に悲劇を語る態度が生まれていたものであって、すでに挙げたあの陰惨な将来の結末を予告する手法をひきおこしているのが、すなわち、見えざる悪魔の手に支配されている感情だったのである。上で述べた詩節の四行目に見られる手法やクリエムヒルトの悪夢及び妖精たちの予言、あるいは象徴などといった外的な形式を用いることによって、詩人は「飲び」(vröude)の結末を有する騎士文学とは全く異なった立場を築き上げようとしたのであるが、その際悲劇への意志と騎士の楽天主義への反発は全く一つであった。つまり、ブリュンヒルト伝説とブルゴント伝説を一つに結び合わせたニーベルンゲンの詩人の文学的意図は、明るい楽天的騎士の世界を構築することではなく、反対に悪魔が宮廷的歓喜の世界を支配する真只中で、騎士的なものが永続することなく必然的に滅びることを表現することだったのであり、詩人は騎士的なものと英雄的なものとの深い内的関係を作ろうとしているのである。そのためには前編のブリュンヒルト伝説のかなりの変更が必要だったのであり、詩人は前編を特別英雄文学たらしめようとしたのではなく、むしろ全体の計画のために騎士的アクセントを持たせようとしたのである。従って、騎士的要素は当時の人々の興味に合わせるための外的装飾品ではなく、騎士的な理想が長続きしない単に美しい理想に過ぎないことを暴露するためには、まず第一に騎士社会の発展した描写、すなわち、宮廷的騎士的及びキリスト教的雰囲気巧みな描写が展開されなければならなかったのである。騎士の「武勇」と「ミンネ」の精神から何が生じ、いかにして騎士的作法が悪魔と出会い、そしていかに崩れてゆくか、これら全てが表現されることになっていたのである。これら全ての騎士的価値が滅びたまま、宮廷的歓びは壊れ、この世の愛の生活も無惨に滅び、ミンネも宿命的に悪魔の手に引き渡されるということ、これら全てが騎士の暗い宿命なのであり、まさにこれがニーベルンゲンの悲劇である。詩人自らが作品の冒頭と結末で表現している言葉を用いて、「いつの世にも歓び(liebe)は悲しみ(leide)に終わるものである」(17,3;2378,4)ということが、結局騎士的な歓びと理想が不安定なものであることを示した『ニーベルンゲンの歌』の内的本質を表していると言えるであろう。

結び

ニーベルンゲン詩人の本来の業績は、従って、前編のブリュンヒルト伝説をただ単に後編のブルグント伝説に結びつけて叙事詩に拡大させたことではなく、一つのイデーによって前者を後者に結びつけ、一つの統一ある独自の文学作品に作り変えたことである。その意味で『ニーベルンゲンの歌』はもはや一種のゲルマン的古代のいわば「博物館」なのではなく、十三世紀初頭の一人の詩人によって創られた文学作品、すなわち、素材の伝説から独立的に生じた一つの中世叙事詩としての文学作品であって、詩人は古代ゲルマン歌謡の遺産を新しい中世文学としての叙事詩的世界へと発展的に統一することができたのである。

このような詩人のイデーを重視する研究の立場は、『ニーベルンゲンの歌』を民衆全体の所産であるとした十九世紀のロマン主義者及びカール・ラッハマンの歌謡集積説の反対に立つと同時に、ラッハマン的歌謡集積説を抜け出て、『ニーベルンゲンの歌』は一人の詩人の手になる叙事詩であると唱えたアンドレーアス・ホイスラーの発展段階説の限界をも超越している。問題の核心は作品の生成過程にあるのではなく、詩人のイデーにあり、素材は不可欠なものではあっても二次的なものだからである。従って、この叙事詩における内容上の矛盾を取り上げて素材を確認することは何らこの作品の核心に触れるものではないと言える。『ニーベルンゲンの歌』はもはや素材がただ単に編集されたものではないからである。それは出来事が次から次へと展開する『ヴォルスンガ・サガ』あるいは『ティードレクス・サガ』のようないわば「絵巻き物」のような構成になっているのではなく、原因と結果の連鎖に添って主題が展開してゆく統一的構成を有している。しかも前編と後編とが見事な均整を保ちながら二重の悲劇が展開してゆくのであり、この悲劇の二重構造の中に「飲びも結局は悲しみに終わる」という宿命的なニーベルンゲン悲劇のテーマが示されているのである。『ニーベルンゲンの歌』の芸術的魅力はこの前編と後編とのコントラスト的緊張関係、さらには古代的なものと中世的なものとの緊張関係の中にあるのであって、ニーベルンゲンの詩人はその二つの要素を、あるときは融合させ、またあるときは対立させることによって自らのニーベルンゲン悲劇の世界を築き上げていったのである。

『ニーベルンゲンの歌』の構造は、その点で、ハルトマン・フォン・アウエのアルトゥース・ロマーンとは本質的に異なっている。なるほど両者はいずれも前編と後編とが二部構成に分けられていて、後編のあらすじは前編の裏返しである³⁵⁾が、しかし、この裏返しは『ニーベルンゲンの歌』においては「より大きな破滅」であり、ハルトマンにおいては「より高いものへの調和的发展」である。『ニーベルンゲンの歌』における leit は、

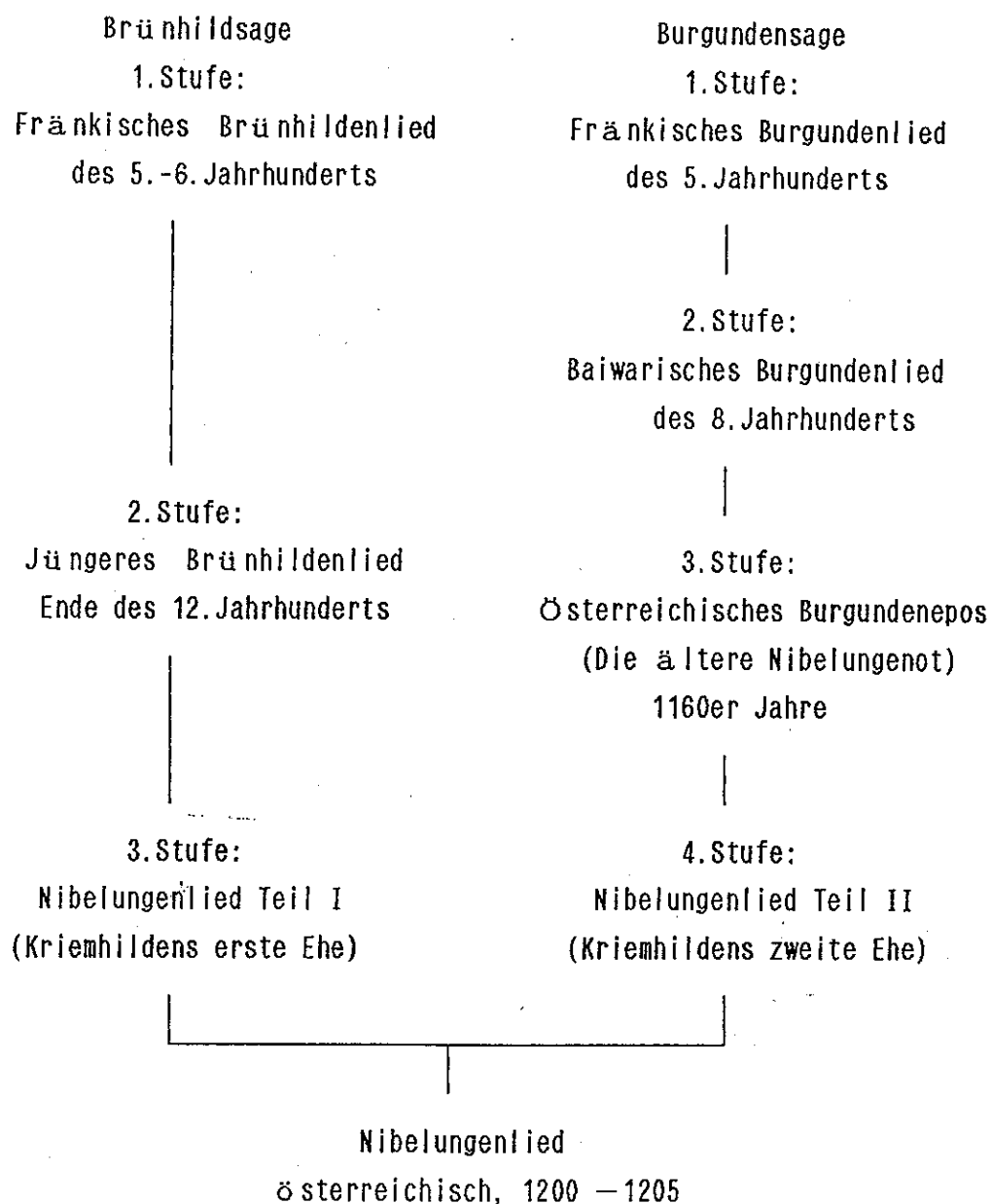
35) 『エーレク』においては主人公がミンネに溺れて名誉を失うまでを前編とすれば、その後の旅の物語は後編である。また『イーヴェイン』においても同様に主人公が騎士の活動に熱中してミンネを失うまでを前編、その後の冒険の旅を後編と考えることができよう。

すなわち、本質的には他人から加えられたもので、それがさらに別の leit を呼び起こすことによって、二重の悲劇を展開させているのに対して、ハルトマンの作品における leit は、他人から与えられたものではなく、主人公の怠慢から生じたもので、しかもそれは心からの懺悔と善なる行為を通じて真の *erre*へと高められるのである。『ニーベルンゲンの歌』は、アルトゥース・ロマーンの至福の世界とは異なって、古代ゲルマン的宿命観に基づく悲劇の世界なのであり、アルトゥース・ロマーンが宮廷生活を個人的な立場から宗教的・倫理的に眺めているとすれば、『ニーベルンゲンの歌』はそれを民族の立場から歴史的・悲劇的に観ているのである。従って、『ニーベルンゲンの歌』の詩人はどうしても作者不明でなければならない。作者不明も詩人のイデーに属しているものであり、英雄文学としてのこの作品の一つの形式なのである。アルトゥース・ロマーンにおいて習慣となっている作者の名乗りは個人的刻印を示すものであるのに対して、『ニーベルンゲンの歌』の作者不明は民族的精神の刻印を表すものである。この意識的な作者不明によって『ニーベルンゲンの歌』は民族的な所有となっているのである。『ニーベルンゲンの歌』は、このように一つの中世叙事詩へと発展していながら、なおも民族的な精神を潑刺と歌い上げているのである。そこにこそこの作品の真の価値があるのであり、まさにそのことによって『ニーベルンゲンの歌』は当時の中世文学の中にあって、宮廷叙事詩とは本質的に異なる独自の一つの中世叙事詩として燦然たる光を放ち続けていると言えるのである。

圖 式

図式 I

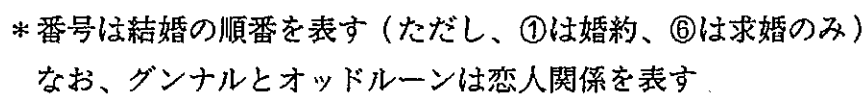
ホイスラーによる『ニーベルンゲンの歌』の系図
(Stammbaum des Nibelungenlieds)



ヴォルスング一族の系譜
(『ヴォルスング・サガ』による)

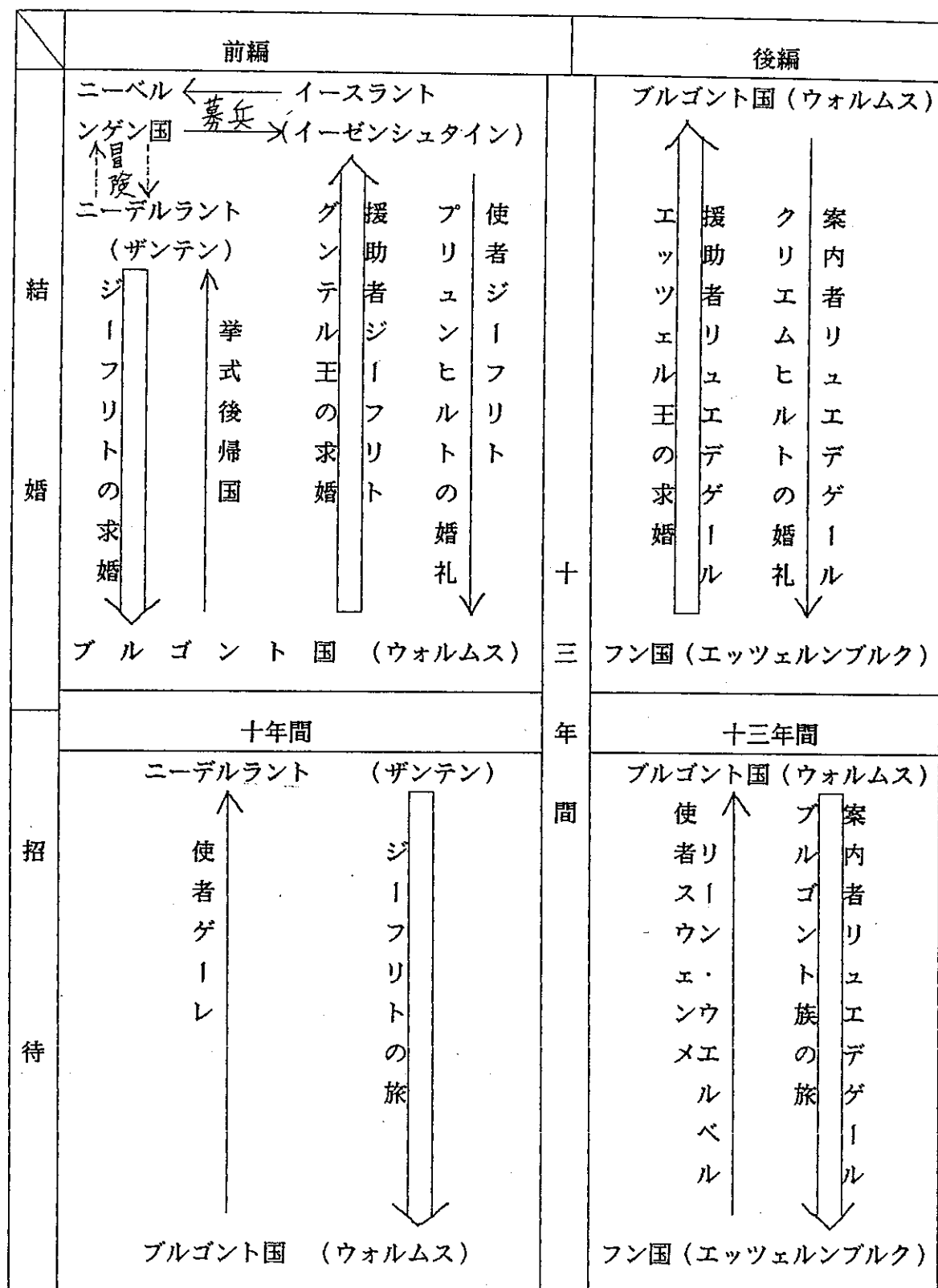


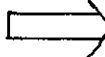
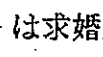
ギューキー族とグズルーンの系譜
(『ヴォルスンガ・サガ』による)



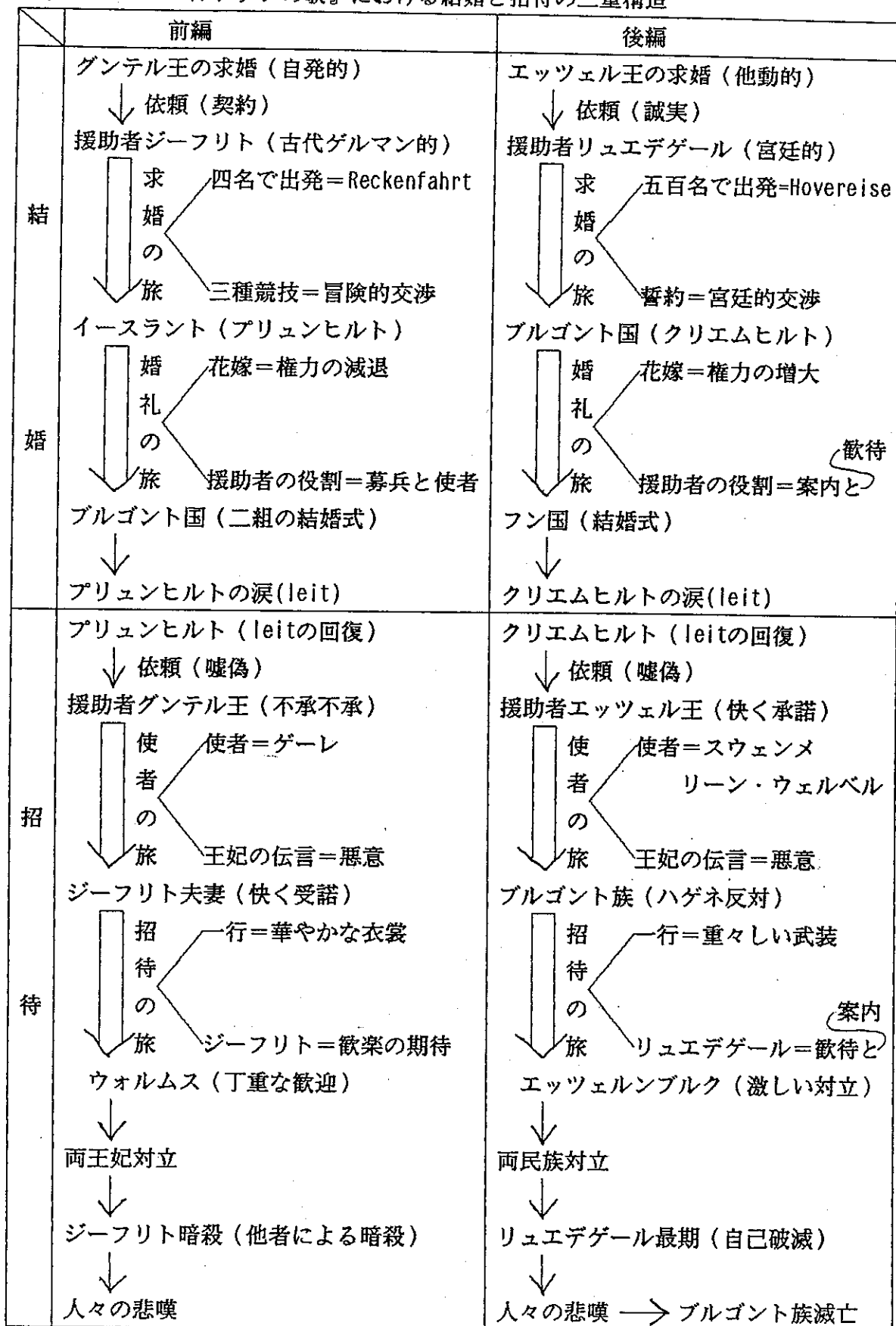
図式Ⅳ

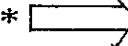
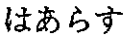
『ニーベルングの歌』における旅と空間



*  は求婚及び招待の旅、 はそれ以外の旅を表す
 なお、点線はハゲネの語りの中の旅を表す

図式V 『ニーベルンゲンの歌』における結婚と招待の二重構造



*  は旅を表し、 はあらすじの展開等を表す

資 料

資料Ⅰ キューレンベルクの詩人の歌謡

I

1. <<Vil lieben vriunt verkiesen, daz ist schedel i ch;
 swer s i n e n vriunt behaltet, daz ist lobel i ch.
 die site wil ich minnen.
 bite in, daz er mir holt s i , als er hie bevor was,
 und man in, waz wir redeten, d o ich in ze jungest sach.>>

「愛するお方に去られてしまうのは、心の痛いことです。
愛するお方を傍に持っていることは、うれしいことです。
そういう習慣を私は好みます。
あの方が以前のように私に好意を寄せるよう頼んで下さい。
この前お会いした際私たちは何を言い合ったか、思い出させて下さい。」

2. Wes manst d u mich leides, m i n vil liebe liep?
 unser zweier scheiden müeze ich geleben niet.
 verliuse ich d i n e minne,
 s o l a z e ich diu liute harte wol entstan,
 daz m i n vröide ist der minnist und alle ander verman.

わがいと^{ひと}しき女性よ、そなたは何という苦しみを思い出させるのか。
私たち二人が別れるなんて私はいやです。
もし私がそなたのミネを失うことになるなら、
人々に大変よく気づかせてやりましょう。
私の喜びはちっぽけなものであり、私は他人を軽蔑することはないであろうことを。

II

1. <<Leit machet sorge, vil liebe wünne.
 eines hübschen ritters gewan ich künde:
 daz mir den benomen hant die merker und ir n i t,
 des mohte mir m i n herze nie vrö werden s i t.>>

「心配は無上の喜びを苦しみにしてしまいます。
私はある一人の美しい騎士と知り合いになったのですが、
住民の嫉妬が彼を私から奪ってしまい、

そのために私の心はその後喜びとなったことは一度もないのです。」

- 2.<<Ich stuont mir nehtint späte an einer zinne,
dō hōrt ich einen rīter vil wol singen
in Kūrenbergers wīse al ūz der menigīn.
er muoz mir diu lant rûmen, alder ich geniete mich sīn.>>

「私は昨晚おそく胸壁に佇んでいた。

その時私は一人の騎士がすばらしく歌うのを聞いた。

キューレンベルクの調べで群衆の中から歌っていた。

彼は私の国を去るべきか、それとも私が彼の愛を受け入れるであろうか、と。」

3. Jō stuont ich nehtint späte vor dīnem bette,
dō getorste ich dich, vrouwe, niwet wecken.
<<des gehazze got den dīnen līp!
jō enwas ich niht ein eber wilde>>, sō sprach daz wīp.

確かに私は昨夜おそくあなたのベッドの前に立っていました。

その時ご婦人よ、私はあなたを起こしませんでした。

「それゆえ神があなたを呪いますように！

私は野生の猪ではないのです」と婦人が言った。

- 4.<<Swenne ich stan aleine in mīnem hemedē,
unde ich gedenke an dich, ritter edele,
sō erbluēt sich mīn varwe, als der rōse an dem dorne tuot,
und gewinnet daz herze vil manigen trûrigen muot.>>

「私が一人肌着のままで佇みながら、

貴い騎士よ、あなたのことを想えば、

私の顔の赤く燃えるさまは、まるで薔薇が棘のそばで赤くなるかの如く、

そして心は多くの愁いに襲われてしまうのです。」

- 5.<<Ez hat mir an dem herzen vil dicke wē getan,
daz mich des geluste, des ich niht mohte hān
noch niemer mac gewinnen. daz ist schedelīch.
jō ne mein ich golt noch silber: ez ist den liuten gelīch.>>

「私の心は非常に悲しくなります。

私は、まだ自分が手に入れたことのないものが

欲しくてたまらないのです。残念なことです。しかし、

金や銀のことを言っているではありません。それは人々に同じことなのです。」

6.<<Ich zöch mir einen valken mēre danne ein jar.
dō ich in gezamete, als ich in wolte han,
und ich im sîn gevidere mit golde wol bewant,
er huop sich ûf vil hōhe und vlouc in anderiu lant.

7. Sīt sach ich den valken schōne vliegen,
er vuorte an sînem vuoze sīdīne riemen,
und was im sîn gevidere alrōt guldīn.
got sende sī zesamene, die gelieb wellen gerne sīn!>>

「私が一羽の鷹を飼い育てて一年以上になった。

私が鷹を思い通り飼い馴らし、

そして私が鷹の翼を黄金で飾ってやった時、

鷹は空高く舞い上がり他国へ飛んで行った。

それからのちに私は鷹が美しく飛ぶのを見た。

鷹はその足に絹の帯をなびかせ、

鷹の翼は一面黄金色に輝いていた。

神よ愛し合う二人を一緒になし給え。」

8.<<Ez gat mir vonne herzen, daz ich geweine:
ich und mīn geselle müezen uns scheiden.
daz machent lügenaere. got der gebe in leit!
der uns zwei versuonde, vil wol des waere ich gemeit.>>

「私は今心の奥底から泣いています。

なぜなら、私と私の友（男）は別れなければならないのですもの。

うそつきたちがそうしたのです。神がうそつきたちに苦しみを与えますように！

私たち二人を和解させてくれますなら、私はうれしいのです。」

9. Wîp vil schoene, nû var dû sam mir.
 lieb unde leide daz teile ich sant dir.
 die wîle unz ich daz leben hân, sô bist du mir vil liep.
 wan minnestu einen boesen, des engan ich dir niet.

美しいご婦人よ、さあ私と一緒に来ておくれ。
 喜びと苦しみを私はそなたとともに分かち合いたい。
 私は生きている限り、そなたを愛しよう。
 ただそなたが悪しき者を愛するときだけ、私はそなたにそれを与えない。

10. Nu brinc mir her vil balde mîn ros, mîn îsengewant,
 wan ich muoz einer vrouwen rûmen diu lant,
 diu wil mich des betwingen, daz ich ir holt sî.
 si muoz der mîner minne iemer darbende sîn.

さあ大急ぎでここへ私の馬と鋼の甲冑を持ってきておくれ。
 私はある婦人のためにこの国を去らねばならぬのだ。
 彼女が私に好意を寄せるようにとせがむのだから。
 しかし、彼女はいつも私の愛なしで生きてゆかなければならないでしょう。

11. Der tunkel sterne der birget sich,
 als tuo dû, vrouwe schoene, sô du sehest mich,
 sô lâ du dîniu ougen gēn an einen andern man.
 sô n weiz doch lûtz el iemen, wiez under uns zwein ist getan.

あけぼのの星が隠れています。
 美しいご婦人よ、あなたが隠れているように。
 あなたが私に会っても、すぐあなたの目はほかの男へと移ってしまう。
 我々二人の間がどうなっているのか、決して誰も知るまい。

12. Aller wîbe wunne diu gêt noch megetîn.
 als ich an sî gesende den lieben boten mîn,
 jô wurbe ichz gerne selbe, waer ez ir schade niet.
 in weiz, wiez ir gevalle: mir wart nie wîp als liep.

あらゆる女性の喜びである彼女は乙女である。

私が彼女のもとに私の愛する使者を送ったとき、
それが彼女の害にならないのならば、私は好んで自ら求愛しよう。彼女が
どう思っているのか私は知らない。女性がそんなに美しかったことは決してない。

13. Wîp unde vederspil diu werdent lîhte zam.
swer sî ze rehte lucket, sô suochent sî den man.
als warb ein schoene ritter umbe eine vrouwen guot.
als ich dar an gedenke, sô stêt wol hêhe mîn muot.

女性と鷹は飼育するのが容易だ。
それらを巧みに誘う心得のある者の所へとそれらは飛んで行く。
このようにして美しき騎士は高貴な女性に求愛するのである。
そのことを考えると、私は意気揚々となるのだ。

資料Ⅱ Walther von der Vogelweide : Der Hof zu Thüringen

Der in den ören siech von ungeschichte sî,
daz ist mîn rât, der laze den hof ze Düringen frî:
wan kumet er dar, dē swar er wirt ertœret.
ich han gedrunge, unz ich niht mē dringen mac:
ein schar vert ûz, diu ander in, naht unde tac.
grōz wunder ist daz iemen dā gehœret.
der lantgrāu' ist sō hōchgemuot,
daz er mit stolzen helden sîne habe vertuot,
als iegeslîcher wol ein kempfe wære.
mir ist sîn hōhiu fuore kunt:
und gulte ein fuoder guotes wînes tûsent pfunt,
dā stüende ouch niemer ritters becher lære.

不運にも耳を煩っている者は、
私の忠告ですが、チューリンゲンの宮廷を去るのがよい。
そこへ行くと氣違いになるというのは本当のことゆえ。
私も押し寄せましたが、もはや押し寄せることができない程。
昼夜区別なく群衆が出て行ったかと思うとまた別の群衆が押し寄せて、
そこで聞くものと言えは本当に驚くべきものなのです。
方伯ときたら、とても意氣盛んな方ゆえ、
勇士たちとともに自分の財産を使い果たしてしまう始末。
そのさまはまるで各人が選り抜きの騎士であるかのようです。
私は彼の氣高い生活方法をよく知っています。
良質のワイン1フーデルとなると大変高価なものですが、
騎士の盃は空になったことがありますね。

資料Ⅲ Wolfram von Eschenbach : Parzival(Buch IV)

von Düringen vürste Herman,
etslîch dîn ingesinde ich maz,
daz ûzgesinde hieze baz:
dir wære ouch eins Keien nôt,
sît wariu milde dir gebôt
sô manecvalden anehanc,
etswâ smæhlîch gedranc
und etswâ werdez dringen.
dez muoz her Walther singen
<<guoten tac, bæse unde guot!>>
(297,16-25)

チューリングデンのヘルマン殿、
あなたの家来の中には
家来と言えない者がいますぞ。
あなたにはケイエのような方が必要でしょう。
なぜなら、あなたの本当の気前よさのために
ある時は卑しい群衆が
またある時は高貴な群衆が
さまざまに押し寄せてくるのですから。
だからヴァルター殿も歌ったのです。
「今日は、悪しき方々に善き方々よ」と。

文献一覧表

1. 『ニーベルンゲンの歌』と『哀歌』

テキスト・翻訳

- Karl Lachmann(Hrsg.): Der Nibelunge Noth und die Klage. 1826.
August Zeune (Übersetzt): Nibelungennoth und Klage nach ältester Gestalt in ungebundener Rede. 1836.
Friedrich Zarncke(Hrsg.): Das Nibelungenlied. 1856. Halle 1920.
Adolf Holtzmann(Hrsg.): Schulausgabe des Nibelungenlieds in der ältesten Gestalt. 1857. Stuttgart 1863.
Walter Freye (Hrsg.): Das Nibelungenlied. Übersetzung von Simrock mit gegenübergestelltem Urtext. Berlin/Leipzig 1868.
Karl Bartsch: Der Nibelunge Not I, II-1, II-2. 1870-80. (Nachdruck, Hildesheim 1966)
Karl Bartsch(Hrsg.): Die Klage mit den Lesarten sämtlicher Handschriften. ~~Brockhaus~~ Leipzig 1875.
服部正己訳: ニーベルンク族の厄難 養徳社1944年
桜井和市: Der Nibelunge Not (抜粋テキスト並びに注釈) 南江堂1953年、1957年
相良守峯訳: ニーベルンゲンの歌(全2冊)岩波文庫 岩波書店 1955年
Hermann Stodte (Übertragen): Das Nibelungenlied. Stuttgart 1956.
D.G. Mowatt(Translated): The Nibelungenlied (Everyman's Library 312) London 1962.
Horst Wolfram Geissler (Übertragen): Das Nibelungenlied. München 1966.
Helmut de Boor(Hrsg.): Das Nibelungenlied. 20. Auflage Wiesbaden 1972.
Ursula Hennig(Hrsg.): Das Nibelungenlied nach der Handschrift C. Tübingen 1977.
服部正己訳: ニーベルンゲンの歌 東洋出版株式会社1977年
浜崎長寿・松村国隆・大澤慶子編: ニーベルンゲンの歌(抜粋・訳注) 大学書林1981年

研究書・論文

- Karl Lachmann: Über die ursprüngliche Gestalt des Gedichts von der Nibelungen Noth. 1816. (In: Karl Lachmann, Kleinere Schriften I. Bd. Nachdruck. Berlin 1969.)
Karl Lachmann: Anmerkungen zu den Nibelungen und zur Klage. Berlin 1836.
Adolf Holtzmann: Untersuchungen über das Nibelungenlied. Stuttgart 1854.
Friedrich Zarncke: Zur Nibelungenfrage. Leipzig 1854.
Max Rieger: Zur Kritik der Nibelunge. 1855.
Karl Müllenhoff: Zur Geschichte der Nibelunge Not. 1855.

- Adolf Holtzmann: Der Kampf um der Nibelunge Hort. 1855.
- Rochus von Liliencron: Über die Nibelungenhandschrift C. 1856.
- Eduard Dressel : Über den Charakter Kriemhildens in dem Nibelungenliede und der Nibelungennoth. 1857.
- Franz Pfeiffer : Der Dichter des Nibelungenliedes. Wien 1862.
- Karl Bartsch : Untersuchungen über das Nibelungenlied. Wien 1865.
- Johannes Crueger : Der Entdecker der Nibelungen. Frankfurt am Main 1883.
- Wilhelm Braune : Die Handschriftenverhältnisse des Nibelungenliedes. Beiträge 25, 1900.
- Andreas Heusler : Lied und Epos in germanischer Sagendichtung. Dortmund 1905. (Darmstadt 1973)
- Friedrich Vogt : Zur Geschichte der Nibelungenklage. Marburg 1913.
- Friedrich Wilhelm: Über die Fassungen B und C des Nibelungenliedes und der Klage, ihre Verfasser und Abfassungszeit. München 1916.
- Andreas Heusler: Nibelungensage und Nibelungenlied. Dortmund 1921.
- Josef Körner : Das Nibelungenlied. Leipzig/Berlin 1921.
- Friedrich Neumann : Schichten der Ethik im Nibelungenlied. 1924. (In: Das Nibelungenlied in seiner Zeit. Göttingen 1967.)
- Hans Naumann : Stand der Nibelungenforschung. Zeitschrift für Deutschkunde 41, 1927
- Friedrich Neumann : Das Nibelungenlied in der gegenwärtigen Forschung. DtVjs.5, 1927.
- Hans Naumann : Rüdegers Tod. DtVjs.10, 1932.
- 雪山俊夫: ニーベルンゲンの歌基礎の研究 大岡山書店 1934年
- 奥宮精一: ニーベルンゲンの歌に現はれたる法律 東京帝国大学独逸文学研究会「独逸文学」第1年第2輯1937年
- 渡辺啓一: 「ニーベルンゲンの歌」の詩人に関する若干考察 ——雪山博士還暦祝賀論文—— 東京帝国大学独逸文学研究会「独逸文学」第5年第2輯1941年
- 吉村貞司: ニーベルンゲン伝説 鎌倉書房1943年
- Nelly Dürrenmatt : Das Nibelungenlied im Kreis der höfischen Dichtung. Bern 1945.
- 相良守峯: ニーベルンゲンの歌に於ける宮廷的倫理 小牧健夫博士還暦記念論文集「文藝論攷」1948年
- Hermann Schneider : Forschungsbericht. Die Quellen des Nibelungenliedes. Zu Friedrich Panzers Studien zum Nibelungenlied 1945. Euphorion 45, 1950.
- Friedrich Maurer : <<Tugend>> und <<Ehre>> Wirkendes Wort 2, 1951.

- Friedrich Maurer : Leid. Studien zur Bedeutungs- und Problemgeschichte, besonders in den großen Epen der staufischen Zeit. Bern/München 1951.
- 伊東泰治 : ニーベルンゲンの歌に於ける等族意識 三重県立大学研究年報第1巻第1号 1952年
- 小野寺和夫 : 王者としてのジークフリート 山形大学紀要「人文科学」第2巻第2号 1952年
- Friedrich Maurer : Die Einheit des Nibelungenlieds nach Idee und Form. Der Deutschunterricht 5, 1953.
- Dietrich Kralik: Wer war der Dichter des Nibelungenliedes? Wien 1954.
- Friedrich Maurer : Über die Formkunst des Dichters unseres Nibelungenlieds. Der Deutschunterricht 6, 1954. (In: Friedrich Maurer: Dichtung und Sprache des Mittelalters.)
- Walter Johannes Schröder : Das Nibelungenlied. Versuch einer Deutung. Beiträge 76, 1954.
- Friedrich Panzer : Das Nibelungenlied. Entstehung und Gestalt. Stuttgart 1955.
- Otto Höfler: Die Anonymität des Nibelungenliedes. DtVjs. 29, 1955.
- Werner Schröder : Das Leid in der Klage. ZfdA. 1957. Heft 1.
- 林文三郎 : Frühe Epik Westeuropas und die Vorgeschichte des Nibelungenliedes von Kurt Wais. 早稲田大学政経学部「教養諸学研究」7号 1958年
- Peter Wapnewski: Rüdigers Schild. Zur 37. Aventure des Nibelungenliedes. Euphorion 54, 1960.
- 藤井耕一 : ドイツ民族性の象徴としてのNibelungenlied 明治大学「人文科学研究」16号 1960年
- 松谷健二 : ニーベルンゲンの歌の水の精 「東北ドイツ文学研究」4号 1960年
- Werner Schröder: Die Tragödie Kriemhilds im Nibelungenlied. ZfdA. 90, 1960/61.
- 相良守峯 : ドイツ中世叙事詩研究 富士出版株式会社 1948年 郁文堂 1960年
- Gottfried Weber : Heldendichtung II (Nibelungenlied). (Samml. Metzler) Stuttgart 1961.
- Gottfried Weber : Das Nibelungenlied. Problem und Idee. Stuttgart 1963.
- 松谷健二 : ジーフリトとブリュンヒルト 「東北ドイツ文学研究」7号 1963年
- 相良守峯 : ゲルマン的悲劇の特質 手塚富雄教授還暦記念論文集「ドイツ文学における伝統と革新」筑摩書房 1965年
- 桜井和市 : プリュンヒルト＝ジーフリト伝説——歌謡と叙事詩—— 手塚富雄教授還暦記念論文集「ドイツ文学における伝統と革新」筑摩書房 1965年
- Hans Kuhn: Der Teufel im Nibelungenlied. Zu Gunthers und Kriemhilds Tod. ZfdA. 94, 1965.

Josef Svoboda : Das Nibelungenlied. Strukturelle Beobachtungen und Zeitgeschichte. Wirkendes Wort 15, 1965.

林文三郎 : ニibelungengensのドオナウ渡河 早稲田大学政経学部「教養諸学研究」24号
1966年

林文三郎 : ニibelungengens伝説のSenna 早稲田大学政経学部「教養諸学研究」26号
1967年

Werner Hoffmann: Die Fassung C des Nibelungenliedes und die Klage. 1967. (In: Festschrift Gottfried Weber zu seinem 70. Geburtstag.)

Friedrich Neumann: Das Nibelungenlied in seiner Zeit. Göttingen 1967.

岡道男 : 「ニibelungengensの歌」におけるジーフリトとプリュンヒルト——素材の精神について—— 同志社大学法学部一般教養研究会「研究」5号1967年

相良守峯 : 叙事詩の世界——民族の歴史と英雄たち——講談社(現代新書147) 1968年

林文三郎 : Ir sult hie beliben (当地にお留まり下さい) 早稲田大学政経学部「教養諸学研究」29号1968年

Karl Heinz Ihlenburg: Das Nibelungenlied. Problem und Gehalt. Berlin 1969.

戸沢明 : 写本Cのルーモルト 東京都立大学「人文学報」72号1969年

吉村貞司 : ゲルマン神話——ニibelungengensからリルケまで—— 読売新聞社1972年

会津伸 : Nibelungenliedにおける戦争と平和——一つのアクチュアルな解釈—— 阪神ドイツ文学会「ドイツ文学論攷」14号1972年

Walter Falk: Das Nibelungenlied in seiner Epoche. Heidelberg 1974.

Hans Fromm : Der oder die Dichter des Nibelungenliedes? (In : Hans Fromm : Arbeiten zur deutschen Literatur des Mittelalters. Tübingen 1989.)

戸沢明 : ラテン語原典の虚構について——『クラゲ』の詩人における詩と真実—— 東京都立大学「人文学報」101号1974年

林文三郎 : NLのビルゲリイン詩節 早稲田大学政経学部「教養諸学研究」48号1975年

岩井方男 : SiegfriedとRüdigerの死——『ニibelungengensの歌』の並列構造—— 早稲田大学文学部「ヨーロッパ文学研究」23号1975年

佐藤牧夫 : クリエムヒルト「東北ドイツ文学研究」20号1976年

石川栄作 : 「ニibelungengensの歌」——宮廷文学作品としての一考察—— 「かいろす」第14号1976年

佐藤牧夫 : 「ニibelungengensリート」——triuweをめぐる—— 東北大学教養部紀要26号1977年

Shoji Ono : Über die Tragik im Nibelungenlied——unter besonderer Berücksichtigung des Hortmotivs —— 阪神ドイツ文学会「ドイツ文学論攷」20号1978年

Marianne Wahl Armstrong : Rolle und Charakter. Studien zur Menschendarstellung im Nibelungenlied. (GAG 221) Göttingen 1979.

- 佐藤牧夫：ルーモルト像をめぐって——『ニーベルンゲンリート』理解の一断面——
日本独文学会「ドイツ文学」63号1979年
- 石川栄作：「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」 徳島大学教養部紀要（人文・社会科学）
第15巻1980年
- 石川栄作：「ニーベルンゲンの歌」写本Cにおけるクリエムヒルトの復讐——写本Bとの
比較において——日本独文学会中国四国支部「ドイツ文学論集」第13号1980年
- 石川栄作：「ニーベルンゲンの歌」と「哀歌」における leit の研究 徳島大学教養部紀
要（人文・社会科学）第16巻1981年
- 石川栄作：「ニーベルンゲンの歌」におけるリュエデゲール悲劇の特質 「かいろす」第
19号1981年
- Werner Hoffmann : Das Nibelungenlied. Fünfte Auflage. (Sammlung Metzler 7)
Stuttgart 1982.
- 清水孝純：復讐への生成『ニーベルンゲンの歌』（西欧文学への招待——中世の幻想と笑
い——所収）九州大学出版会 1982年
- 栢田義一：Nibelungenliedの詩形と韻律について——第5歌章の考察——
神戸大学「ドイツ文学論集」11号1982年
- 中野隆正：復讐と情念——『ニーベルンゲンの歌』をめぐって——（臼木・永口他著「ド
イツの文学」——作品に現われた人間像——所収）北樹出版1983年
- 岡崎忠弘：Rüedegêrの死 日本独文学会中国四国支部「ドイツ文学論集」第16号
1983年
- Hermann Reichert : Nibelungenlied und Nibelungensage. Wien/Köln 1985.
- 谷口幸男：ゲルマン文献学の生成——若きグリム兄弟の足跡——
「現代に生きるグリム」所収 岩波書店1985年
- 山室静：ニーベルンゲンの歌（世界の英雄伝説4）筑摩書房 1987年
- Werner Hoffmann : Das Nibelungenlied. Frankfurt am Main 1987.
- Tadahiro Okazaki (岡崎忠弘) : Welche Bedeutung hat der Nibelungenschatz?
日本独文学会中国四国支部「ドイツ文学論集」第20号1987年
- 石川栄作：「ニーベルンゲンの歌」と「平家物語」における悲劇の英雄像 徳島大学教養
部紀要（人文・社会科学）第22巻1987年
- 石川栄作：「ニーベルンゲンの歌」における悲劇の二重構造——ジーフリトとリュエデゲ
ールの役割—— 徳島大学教養部紀要（人文・社会科学）第23巻1988年
- 石川栄作：ニーベルンゲン悲劇の構図——ハゲネの役割—— 徳島大学教養部紀要（人文
・社会科学）第24巻1989年
- 石川栄作：ニーベルンゲン伝説と『ニーベルンゲンの歌』 徳島大学教養部紀要（外国語
・外国文学）第1巻1990年

2. 『エッダ』・『サガ』

テキスト・翻訳

- Julius Hoffory(Hrsg.): Lieder der alten Edda. Deutsch durch die Brüder Grimm. Berlin 1885.
- Wilhelm Ranisch: Eddalieder mit Grammatik, Übersetzung und Erläuterungen. Leipzig 1906.
- Henrik Bertelsen: Þidriks Saga af Bern. Kopenhagen 3.Heft 1908. 4.Heft 1909. 5.Heft 1910. 6.Heft 1911.
- Gustav Neckel(Hrsg.): Edda. Die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern. I.Text Heidelberg 1914. II. Kürzes Wörterbuch von Hans Kuhn Heidelberg 1968.
- Fine Erichsen(Übertragen): Die Geschichte Thidreks von Bern (Thule 22.Band) Jena 1924.
- Gustav Neckel/Felix Niedner(Übertragen): Die jüngere Edda (Thule 20.Band) ~~Eugen Diederichs~~ Jena 1925.
- Felix Genzmer(Übertragen): Heldenlieder der Edda (Auswahl) Stuttgart 1952.
- 谷口幸男訳: エッダ——古代北欧歌謡集 新潮社1973年
- 松谷健二訳: エッダ (筑摩世界文学大系10「中世文学集」所収) 筑摩書房1974年
- 山室静訳: 「赤毛のエリク記」——古代北欧サガ集——冬樹社1974年
- 山室静訳・注: 植民の書(抄) 北欧文化通信社「北欧」第9号1975年10月
- 山室静訳・注: 植民の書(二) 北欧文化通信社「北欧」第13号1976年10月
- Gustav Neckel/Hans Kuhn(Hrsg.): Edda. Die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern. 5.verbesserte Auflage. Heidelberg 1983.
- 菅原邦城訳: ゲルマン北欧の英雄伝説——ヴォルスンガ・サガ 東海大学出版会 1979年
- 谷口幸男訳: ヴォルスンガサガ(アイスランドサガ)所収) 新潮社 1979年
- George K. Anderson (Translated): The Saga of the Völsungs. London/Toronto 1982.
- Paul Heßmann(Übertragen): Nordische Nibelungen. Köln 1985.
- 松谷健二訳: エッダ(ちくま文庫「エッダ グティルのサガ」所収) 筑摩書房 1986年
- Felix Genzmer(Übertragen): Die Edda. Götterdichtung, Spruchweisheit und Heldengesänge der Germanen. (6.Auflage) Köln 1987.
- Arthur Häny (Übertragen): Die Edda. Götter- und Heldenlieder der Germanen. (2.Auflage) Zürich 1987.
- Karl Simrock (Übersetzt): Die Edda. Die ältere und jüngere Edda und die mythischen Erzählungen der Skalda. 2.Auflage. Essen 1987.

研究書・論文

- Helmut de Boor : Die Färöischen Lieder des Nibelungenzyklus. Heidelberg 1918.
- 林文三郎：竜退治のジゲムンド 早稲田大学政経学部「教養諸学研究」16号1962年
- 松下正雄：スカンジナビア伝承文学の研究 創文社 1965年
- 林文三郎：ジイクフリイトの財宝伝説 早稲田大学政経学部「教養諸学研究」21号1965年
- 荒正人：ヴァイキング (中公新書 150) 中央公論社1968年
- 山室静：北欧文学の世界 東海大学出版会 1969年
- 林文三郎：少年シグルド(Sigurðr sveinn) 早稲田大学政経学部「教養諸学研究」32号
1969年
- グレンベック(山室静訳)：北欧神話と伝説 新潮社 1971年
- 林文三郎：ブリュンヒルドの冥府行 早稲田大学政経学部「教養諸学研究」42号1973年
- 林文三郎：Aldrian-Niflungr (1) 早稲田大学政経学部「教養諸学研究」49号1975年
- 林文三郎：Aldrian-Niflungr (2) 早稲田大学政経学部「教養諸学研究」51号1976年
- A.ベクステッツ(岡崎晋訳)：北欧の神々と英雄たち(上) 鷹書房 1976年
- 谷口幸男：エッダとサガ——北欧古典への案内 新潮社 1976年
- フレデリック・デュラン(毛利三彌・尾崎和郎訳)：北欧文学史 (文庫クセジュ601)
白水社 1977年
- 山崎陽子：ゲルマンの相剋——ブリュンヒルド及びグズルーン序説—— 北欧文化通信社
「北欧」第14号1977年 1月
- 山室静：ギリシャ神話 付北欧神話 社会思想社1980年
- フレデリック・デュラン(久野浩・日置雅子訳)：ヴァイキング (文庫クセジュ637)
白水社 1980年
- 山室静：北欧文学ノート 東海大学出版会 1980年
- ルードルフ・フェルトナー(木村寿夫訳)：ヴァイキング・サガ 法政大学出版局
1981年2月
- ジャクリーヌ・シンプソン(早野勝巳訳)：ヴァイキングの世界 東京書籍 1982年
- 山室静：サガとエッダの世界 社会思想社 1982年
- 谷口幸男：ゲルマンの民俗 溪水社 1987年10月
- ヴィルヘルム・グリム(谷口幸男訳)：古代ドイツ文学の成立とその北欧文学との関係に
ついて(ドイツ・ロマン派全集第Ⅱ期第15巻「グリム兄弟」所収)
国書刊行会1989年4月
- ステブリン・カメンスキイ(菅原邦城訳)：サガのころ 平凡社1990年

3. ミンネザング・キューレンベルクの詩人

テキスト・翻訳

Franz Pfeiffer(Hrsg.): Walter von der Vogelweide. Leipzig 1864.

Hugo Moser/Helmut Tervooren(bearbeitet): Des Minnesangs Frühling. I.Texte
II.Editionsprinzipien, Melodien, Handschriften, Erläuterungen. Stuttgart
1977.

渡辺路子訳: キューレンベルガー (「ミンネの世界」同学社1971年所収)

高津春久編訳: ミンネザング(ドイツ中世叙事詩集) 郁文堂 1978年

研究書・論文

Wilhelm Scherer: Der Kurenberger. ZfdA.17,1874.

Carl Wesle: Das Falkenlied des Kurenbergers. ZfdPh.57,1932.

Peter Wapnewski: Des Kurenbergers Falkenlied. Euphorion 53,1959.

石川栄作: キューレンベルクの詩人と「ニーベルンゲンの歌」 徳島大学教養部紀要(人
文・社会科学)第14巻1979年

4. ハルトマン・フォン・アウエ

テキスト・翻訳

G.F.Benecke/K.Lachmann(Hrsg.): Hartmann von Aue,Iwein. Neu bearbeitet von Ludwig
Wolff. 7.Ausgabe. Band 1 Text. Band 2 Handschriftenübersicht, Anmerkungen
und Lesarten. Berlin 1968.

Albert Leitzmann(Hrsg.): Hartmann von Aue, Erec. 5.Auflage besorgt von Ludwig
Wolff. Tübingen 1972.

赤井慧爾・武市修訳: ハルトマン・フォン・アウエ作 イーヴェイン(一)～(三)
神戸女子薬科大学人文研究 2-4号 1974-76年

平尾浩三訳: エーレク (「ハルトマン作品集」郁文堂1982年所収)

中島悠爾訳: グレゴールウス (「ハルトマン作品集」郁文堂1982年所収)

相良守峯訳: 哀れなハインリヒ (「ハルトマン作品集」郁文堂1982年所収)

リンケ珠子訳: イーヴェイン (「ハルトマン作品集」郁文堂1982年所収)

戸澤明訳 佐藤牧夫・佐々木克夫・楠田格・副島博彦著: ハルトマン・フォン・アウエ
哀れなハインリヒ 大学書林1985年1月

赤井慧爾・斎藤美美子・武市修・尾野照治訳著: ハルトマン・フォン・アウエ イーヴェ
イン 大学書林1988年3月

研究書・論文

- 相良守峯：独逸小説の黎明・騎士叙事詩——民族性への關聯に於いて—— 東京帝国大学
独逸文学研究会「独逸文学」第5年第4輯1942年
- Hugo Kuhn: >Erec< 1948. (In: Hartmann von Aue. WdF359, Darmstadt 1973.)
- 外村直彦：Hartmann von Aueの叙事詩の成立年代 日本独文学会
「ドイツ文学」23号1959年
- 外村直彦：ハルトマン・フォン・アウエ（その一） 「形成」16号1961年
- 外村直彦：グレゴリウス考——ハルトマン・フォン・アウエ（その二）—— 「形成」
19号1962年
- Peter Wapnewski: Hartmann von Aue. (Sammlung Metzler 17) Stuttgart 1962.
- Petrus W. Tax: Studien zum Symbolischen in Hartmanns >Erec< Erecs ritterliche
Erhöhung. Wirkendes Wort 13, 1963.
- 外村直彦：ハルトマン・フォン・アウエ（その三） 「形成」21号1963年
- 高津春久：ハルトマン・フォン・アウエの叙事詩「イーヴェイン」——クレチアン・ド・
トロワの原拠との比較による形態解釈—— 京都大学教養部紀要「人文」10集1964年
- Kurt Ruh: Zur Interpretation von Hartmanns >Iwein<. 1965. (In: Hartmann von Aue.
WdF359, Darmstadt 1973.)
- Siegfried Grosse: Die Wirkung des Kontrastes in den Dichtungen Hartmanns von
Aue. Wirkendes Wort 15, 1965.
- Michael S. Batts: Das Ritterideal in Hartmanns Iwein. 日本独文学会「ドイツ文学」
37号 1966 年
- Rudolf Endres: Der Prolog von Hartmanns Iwein. DtVjs. 40, 1966.
- Thomas Cramer: Sælde und êre in Hartmanns Iwein. Euphorion 60, 1966.
- 佐藤牧夫：イーヴェイン——罪の解釈の試み——山形大学紀要「人文」6巻2号1967年
- 伊藤保：バルバロッサ十字軍とハルトマン・フォン・アウエ 上智大学外国語学部紀要
3号1968年
- Max Wehrli: Iweins Erwachen. 1969. (In: Hartmann von Aue, WdF. 359 Darmstadt
1973.)
- 伊藤保：ハルトマン・フォン・アウエの獅子を連れたイーヴェイン 上智大学外国語学部
紀要 4号1970年
- 笠原利博：Hartmann von Aueの „Iwein“ について——Aventiureを
中心にして—— 「東北ドイツ文学研究」15号1971年
- 伊東泰治：パルチヴァールとハルトマン 日本独文学会「ドイツ文学」49号1972年
- 佐藤牧夫：エーレク考 東北大学教養部紀要16号1972年
- Gertrud Jaron Lewis: Das Tier und seine dichterische Funktion in Erec, Iwein,
Parzival und Tristan. Bern/Frankfurt am Main 1974.

- 平尾浩三：“The Lady of the Fountain” (Mabinogi), “Yvain” (Chrétien), “Iwein” (Hartmann)——冒頭のArtushofおよびKalogrenants aventureをめぐる Streifzüge——東京大学教養学部教養学科紀要 9号1976年
- 笠原利博：“Erec”について 東北大学教養部紀要26号1977年
- Herta Zutt：König Artus —Iwein— Der Löwe. Die Bedeutung des gesprochenen Wortes in Hartmanns>>Iwein<<. Tübingen 1979.
- Kathryn Smits: Enite als christliche Ehefrau. 1981. (In: Interpretation und Edition deutscher Texte des Mittelalters. Festschrift für John Asher zum 60. Geburtstag. Berlin 1981)
- 赤井慧爾：ハルトマン研究——『イーヴァイン』の文体を中心に——朝日出版社1981年
- J.H. ファン・ウィンター（佐藤牧夫・渡部治雄訳）：騎士——その理想と現実——東京書籍 1982年
- 石川栄作：「ニーベルングの歌」とハルトマン作「イーヴァイン」——名誉（êre）と英雄たち——徳島大学教養部紀要（人文・社会科学）第17巻1982年
- 石川栄作：ハルトマン・フォン・アウエの「哀れなハインリヒ」 徳島大学教養部紀要（人文・社会科学）第18巻1983年
- 石川栄作：ハルトマン・フォン・アウエの「エーレク」 徳島大学教養部紀要（人文・社会科学）第19巻1984年
- 武市修：ハルトマン・フォン・アウエの騎士道批判——イーヴァインの罪をめぐって——阪神ドイツ文学会「ドイツ文学論攷」27号1985年
- 石川栄作：ハルトマン・フォン・アウエの「グレゴリウス」 徳島大学教養部紀要（人文・社会科学）第20巻1985年
- 石川栄作：ハルトマン・フォン・アウエの「グレゴリウス」——構成と内容——西田越郎先生退官記念「ドイツ文学・語学論集」1985年
- 石川栄作：ハルトマン・フォン・アウエの「イーヴァイン」 徳島大学教養部紀要（人文・社会科学）第21巻1986年
- 池上忠弘：ガウエインとアーサー王伝説 秀文インターナショナル 1988 年3月

5. その他

- Meyer Klassiker-Ausgaben, Goethes Werke, Bd. 26. Das Nibelungenlied S. 417.
Friedrich Maurer: Die Welt des höfischen Epos. Der Deutschunterricht 6, 1954.
Albert Leitzmann (Hrsg.): Wolfram von Eschenbach, Parzival Buch I-VI, VII-XI, XII-XVI. Tübingen 1961, 1963, 1965.
Krogmann/Pretzel: Bibliographie zum Nibelungenlied und zur Klage. 4. Auflage. Berlin 1966.
Friedrich Maurer: Die Ehre im Menschenbild der deutschen Dichtung um 1200. 1969. (In: Friedrich Maurer: Dichtung und Sprache des Mittelalters. Bern/München 1963.)
岡田朝雄・岡田珠子: 立体ドイツ文学 朝日出版社 1969年
フリードリヒ・ランケ (木村昭男訳): ドイツ中世宮廷文学 関西大学独逸文学会「独逸文学」14号 1969年
篠沢秀夫: 立体フランス文学 朝日出版社 1970年
E. R. クルツィウス (南大路振一・岸本通夫・中村善也訳): ヨーロッパ文学とラテン中世 みすず書房 1971年
Matthias Lexer: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 33. Auflage Stuttgart 1972.
吉島・井上ほか編・訳: ドイツ文学 歴史と鑑賞 朝日出版社 1973年
ルイ・アンビス (安斎和雄訳): アッチラとフン族 (文庫クセジュ) 白水社 1973年
高橋茂清: Kudrun——Ambraser Heldenbuch について——九州産業大学教養部紀要 第10巻第1号 1973年
ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ (加倉井肅之・伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一共訳): パルチヴァール 郁文堂 1974年
ノヴァーリス (生野幸吉訳): キリスト教世界またはヨーロッパ (筑摩世界文学大系26 「ドイツ・ロマン派集」筑摩書房1974所収)
山崎陽子: R. ヴァーグナーにおける古代北欧文学 北欧文化通信社「北欧」第6号 1974年
松谷健二: 北欧異教時代の文化 北欧文化通信社「北欧」第7号 1974年
古賀允洋: 英雄叙事詩「クートルーン」の「非ゲルマン化」について 熊本大学法文学会「法文論叢」40号 1978年
フリッツ・マルティニー (高木実・尾崎盛景・棗田光行・山田広明訳): ドイツ文学史——原初から現代まで——三修社 1979年
古賀允洋: 『クートルーン』研究——写本発見から今日まで——日本独文学会「ドイツ文学」第63号 1979年

- 中島悠爾：日本における中世文学研究文献（Ⅰ）（Ⅱ） 日本独文学会「ドイツ文学」
63号1979年、64号1980年
- エルンスト・ヨーゼフ・ゲルリヒ（清水健次・土屋明人訳）：オーストリア文学史
南江堂1983年8月
- 高橋明彦：ドイツ・ロマン主義における中世像 上智大学ドイツ文学会「ドイツ文学論集」
21号1984年
- 宇野道義：異端者としてのジークフリート——ワグナーにおけるロマン主義的英雄像の
残照——上智大学ドイツ文学会「ドイツ文学論集」21号1984年
- 高橋輝和：「ヒルデブラントの歌」——古東フランク語原文の復原と七五調頭韻訳の試
み—— 岡山大学独仏文学研究第5号1986年
- 櫻井春隆訳：不死身のジークフリート（ドイツ民衆本の世界II 大澤峯雄・櫻井春隆訳
「ラーレ人物語 不死身のジークフリート」所収） 国書刊行会 1987年12月
- ジャン・フラピエ（松村剛訳）：アーサー王物語とクレチャン・ド・トロワ
朝日出版社 1988年12月
- 坂井建雄：コーデックス・マネッセ 岩波書店「図書」1990年2月号